文學士横山達三著

日本近世教育史

東京
同文館藏版

序

文學士橫山達三君、近ごろ日本近世教育史を著はし、その稿本の一部分を送致して予の一言を求めらる。予常に思ふ、他人の著書に序跋を加ふるは、いたづらに錦繡の上に汚泥を點ずるに非ずば、則ち羊頭狗肉の累を著者に及ぼすものなり。而して其二者の孰れにも屬せざるものは、明白に蛇足を加ふるに過ぎずと。されども、苟も人に用あり、國に益ありと認めたるものは、之を紹介し、之が推奬の言をなすは、予の喜ぶところなり。

輓近國史に關する研究大に進み、政治に、法律に、戰爭に、

農商工業に、はたまた文學なり、美術なり、風俗なり、各方面に引續きて良著の出づるを見る。ひとり學界の需要の切なるに係らず、教育史經濟史の如きは、其研究進歩の頗る遲々たるを憾む。勿論教育史には文部省の日本教育史資料ありて、夙に公にせられたりといへども、素と浩瀚なる資料にして、容易に咀嚼し得べきに非ず。博士佐藤誠實君の日本教育史、また早く出でゝ世を益すること大なりしが、其後未だ研究成績の著しきものあるを認め得ず。從うて教育史の傑作と推すべきものは未だ現はれざるなり。是れ豈學界の一缺陷にあらずとせんや。近年國家の發展に伴ひ、教育の進歩日に月に盛んにして、不學の徒年々に

減じ、文盲の輩歳々に少なるは、之を壯丁檢查の際の報告に徵して明かなりとす。此際過去の教育の眞情を描寫し、その趨勢を說明して、教育家の參考に供するは甚だ必要なることに非ずや。玉磨かざれば光なし。人教育をうけざれば遂に紳士とならず、又活人とならず。紳士活人は社會の動力なり。此動力發源の沿革を調ぶるは、史學の上よりもまた重要なる事に非ずや。

東京帝國大學の大學院に入りて本邦教育史の專攻に從事せる者のうち、本書の著者は其最初の一人にして、本書は即ち其研究の一端なるべし。そも〳〵慶元以降の三百年間は、明治の昭代を除く外は本邦教育史中の最も精

彩あり光輝ある時期なりとす。而して明治昭代の教育も、また實にこゝに胚胎す。されば著者が其研究題目中にありて、特にこの三百年間を擇び、教育界の大勢の推移せる眞相を明かにし、これが論證に一機軸を出さんと苦心せしは、亦力めたりと謂ふべし。予は未だ本書の全豹を見ざるを以て、仔細に之を評隲するを得ず。然れども教育史は大題目なり。學士の勤勉を以てすと雖も、尚或は材料の蒐集の未だ十分ならざるところあらん。或は材料は十分なるも、解釋論辨の未だ透徹せざるところなきを保せず。然るに之を激賞して完璧といはゞ、諛辭の譏を免れざるべし。然りと雖も其教育史界に於ける陳吳たるを失はざる

と、その世間の要求に應じて現はれたるの故を以て、世を裨補するところの多かるべきとは、予をして本書を世に紹介し推奬するに憚からざらしむ。

本書一たび出でなば、或は世評の紛々たるものあるべし。而して著者がこの世評に由りて得るところの進境は期して待つべし。予や乏を教授の職にうくるを以て、著者の研究に就いては淺からざる關係を有し、本書の出版に對しても同情を表すること深し。故に玆に一言して、一面には教育史研究の進歩を促し、一面には著者自身がこの著の出版によりていよ〳〵研究につとめ、以て其大成に至らんことを望む。

明治三十七年六月

三上參次識す

日本近世教育史

凡例

一。本書は吾近世教育の沿革の情勢を明かにせんことを期す。抑も本邦教育史界の開拓は日尚ほ淺くして、傑作は未だ世に出でざる也。余大學院に在りて、恩師の指導の下に、數年斯學を專攻すれども、不肖にして未だ研究の効果を擧ぐること能はず。今ま淺薄自ら揣らずして、此に研究の一端を公にする趣意は一は教育界の需要に應じ、一は博く江湖篤學の士の指教を仰がんとするにあるのみ。

一。本書は、先年著者が文部省の囑托によりて起草せし近世教育史の稿本を公にすることを許可されしにより、同文館主森

山氏と共出版の事を協議したるに起因せり。當初は頁數も五百頁位の豫定なりしが、其後研究を進行するに隨ひ、到底其れにては意を盡すに足らざるを思ひ、茲に多少の圖畫をも加えて約千頁の書と爲すに至れり。勿論これとても複雜なる近世教育の史料より見れば、眞に其一部を擧げたるに過ぎざるなり。

一、社會教育及び學風變遷の動機を審かにせんことは、本書が特に注意せしところ也。その爲めに勢ひ時代の記述に立入ることも亦尠からず。これ又已むを得ざるに坐するなり。

一。教授法の發達に就きては記すべきこと尚ほ多しと雖も、此は教授法の歷史として、他日別に之を公にすることを得む。

一。本書は大體の研究を目的とするを以て、教育家の事業、及び

地方學校の教育に關しては、これを詳悉すること能はず。唯其要を擧ぐるのみ。

一。書中史論に就きては、出典を擧げて自家の主張の確實なることを證せり。此の如きは煩雜なるに似たれども、漠たる評論は讀者に貢献する所以にあらずと信ずればなり。

一。本書の完成に就きては、平素三上教授の指導を辱ふするの外、材料提供に就きて、渡邊世祐。梶尾清。林昇。大槻文學博士。伊藤理學博士。秀嶋與一郎。田中愼一。向井秉孝。掛下玉男。小野節。山田貞芳。木畑竹三郎。栗田勤。鳩野宗巴。杉民治。緒方惟準。森山章之亟諸氏の厚意を受ること多し。玆に謹んで感謝の意を表す。

三十七年四月十八日

於大阪桃山寓居

健堂生記

日本近世教育史目次

目次

日本近世教育史目次終

近世教育史

文學士　横山達三著

第一章　江戸時代初期の教育

文藝復活の動機

第一節　吾日本近世の教育史は西暦千六百年(慶長五年)を以て始まる。則ち宗教改革の首唱者マルチン、ルーテルの生誕を去ること百十七年なり。これより先き戰國時代に於ける教育は修練と云ふのみに過ぎざりしが、江戸時代の始めに當りて、文藝復活の時機到來し、その始めは教育は尙ほ學問と云ふの意味に外ならざりしも、關原戰後二百五十年間の昇平によりて、人文發達し、教育は階級的よりして、普通教育に進むに至れり。

鎌倉の中世より戰國時代に至る間は、吾教育史上の暗世なるが、この間にも教育

の命脈は僧侶の間に存して絶えざること一縷の如くなりき。さりながら五山の學窓より發輝したる漢學の智識の分量は割合に僅少なりき。文藝復活の大運動に最近の動機を與へしものは、大陸占領の雄圖の紀念たる征韓役の結果なりき。征韓役の結果の一としては、本邦に數多の書籍と活字とを將來せり。而してその活字と書籍とを先づ利用したる者は德川家康なりき。これより先き泰西にありてはコンスタンチノープルの陷落は文運復活の動機となりぬ。數多の學者は半月の旗影に讀書せんことを厭ひて去りて伊太利の半島に往けり。かくて羅馬大帝國の舊都に文藝復活の曙光は輝きぬ。本邦の戰國時代に當りては、コンスタンチノープルに比すべきものは周防の山口にして實に文藝の淵藪たりしなり。晴世に於ける大內氏の首府は沙漠に於ける綠島の如くなりき、大內氏の滅亡は、實にコン府の陷落とは反對の現象を呈せり。此處に集來せる學士此處に貯藏せる典籍は、劍影蹄聲に散りて、荒れ果てたる沙漠に投ぜられぬ（一五五一年）當時の吾邦には伊太利の舊都無し。京都は千年文物の舊都なれども、その荒廢は地方の荒廢よりも太甚しくして、更らに學士の身を寄すべき地にはあらざりき。此處にあ

り し學者公卿は去りて富裕の諸侯を求めたり。唯だ京都が文藝復活に與りて大功ありしは、そこに殘存せし典籍の餘澤なりき。

室町時代に大内氏は紙を朝鮮に送りて儒佛經典の板本を求めたり世に山口本と稱するもの是なり

其他足利學校、金澤文庫を始めとして、地方に殘存せし學校と典籍とは文藝復活に貢献したること尠からず。この時代の始めに當りては、外國との交通も猶ほ容易なりしかば、支那及び遠西の書籍輸入され、外航の禁令出でし後ちは、漢書は長崎より輸入されて、文藝復活の機運を補ひき。

文藝復活の勢力

第二節 戰國時代には吾國民敢爲の精神尤もよく發輝されき。北野茶の湯の大會に、秀吉が有志の者は唐天竺たりとも參會苦しからずと檄せしは、唯一時の大言にはあらずして、當時吾國民の態度、外に對して頗る揚りしことを示すものと謂ふべし。亞細亞大陸占領の雄圖は、吾國民の膨脹の强盛なりしを彰表する好恰の紀念なり。かくて吾國民膨脹の勢力まさに發達しつゝありしときに、秀吉薨し、家康繼ぎて國命を執り、外國と政治上の干係をば謝絕して、商業上の交際をのみ厚く

せんとの政策を執りしかば、吾國民南下の鋭鋒頓挫して大勢自然に退嬰の姿とはなれり。これより先き歐洲は早く已に暗世より醒して、文藝復活の恩光に浴し、冒險遠征の氣象發達し、續々東方に向つて新領土を發見せんとし、一四九八年には亞弗利加の極南を回航して、印度に達し、遂に日本人南下の勢力と比律賓群島のほとりに於て衝突するに到れり。されば吾日本が暗世より醒覺すること一世紀ばかり歐洲に後れしは終古の遺憾なるが、このとき吾政府が苟無事主義を執りて、國民の南下を保護せざりしは更らに遺憾を重ねしものなりき。

古賀謹一郎、海防臆測に秀吉征韓の鋒を南洋に向けざりしことを痛惜せり一隻識見と謂ふべし。若し征韓役無くして征南島役あらしめば、その吾近世教育史上に與へたる影響は、又必ずや別種の光采ありしならむ。

家康が對外政策の論理的結果は、鎖國の令とならざるを得ず。大船を毀ち、渡航を禁じ、氣魄昂揚まさに健鬪の態度を執りつゝありし吾國民を拘束して、無理無躰に太平洋上の島帝國に押込み了せり。於是乎吾國民は、内に磅礴して、外に横溢せし勢力をば、内に向つて回收して、これを集注し壓迫せざる可らざるに到れり。小

天地の間に集注し、壓迫されたる、この强大なる國民力は文藝復活に全力を捧げぬ。されば近世の文藝復活は檻窓の獅子、球を弄するに似たるなり。歐洲にありては文藝復活して、冒險遠征の事業これに繼ぎて發達し、吾邦にありては、冒險遠征の氣力を回收して、これを文藝復活に盡くせり。されば東西文藝復活の行逕まさに相反せり。

第三節　戰國時代即ち敎育上の暗世にも、猶ほ敎育は存在したり。即ち修練なり。武士たらんとするの修練なり。

武士たる修練は苦行力行にあり。德川家康老後の書束に、修練の一斑を言明せるものあり。「治世にも身を樂に持ち候は、保養にも惡しく何にても業の無きときは、女色其外色々の惡事出來候儘、朝起るより臥すまでの行義を定め、毎日其通りに致し候に食事も常に美味計り給べては、旨きものにあらず、平日の食物隨分輕き味のもの宜敷候月に兩三度は、美味を給へ候て能きよし承及候」また「近日日課を六萬遍唱へ候事、老人のいらぬ退役にて候……毎日朝起致し、夜も早くは休不申、怠らぬ樣に心懸け候事、夫れ故、食事の中りも無く健かにて、

念佛の影と存候」。

家康が諸侯廣座の中にて、秀吉に答へたる言に、某は知らせらるゝ如く、三河の片田舍に生ひ立ちぬれば、何もめづらかなる書畫調度を蓄へしとも候はず、乍去某が爲めには、水火の中に入りても命を惜しまざる者、五百騎計りも侍らん、これをこそ家康が身に於て第一の寶とは存ずるなれ」。君主の爲めには水火の中に入りても、命を惜しまざる者、則ち修練を經たる武士なりき

家康嘗つて謂ふ。「異國の亂るゝとき、日本油斷するは、今川氏眞が茶の湯と知れと」。精勁の氣人に過る。家康は近世教育の開發に盡くしたる大立物にして、而して彼は充分に修練を經たる人なりき。

武士の教育は寺院若くは浪人、祠官等に就きて、讀書習字を學ぶ外は、家庭に於て禮儀武道を練磨せり。學問としては、淺薄なれども、要するところは、武士道の修練にありき。

三河武士の儀型たる本多重次が内に送りし書狀に、「一筆啓上、火の用心お萬泣かすな、馬肥やせ」と言へるは、簡にして武士の家庭を明示せるものと謂ふべ

しゝ萬は彼の愛兒なり

第四節 戰國時代に專ら敎育を擔當せし者は寺院なりき。寺子屋の名目は、是より起る。日本風土記に敎書人をば、(織奴袍)しの坊と訓ず。

東牖子、三古へ兒童の手習する者は寺院へゆきて學びし故、今童蒙の書家を寺といひ寺屋といふ。南部にてはアゼチと云ひて、寺と謂はず。アゼチは庵室の轉ぜしなり。舊都にて、寺とのみ謂ふは、興福寺をさして云ふ。故に興福寺に對して、何某の寺も何某の坊も庵室と稱せし故なり。

この時代には諸侯も亦、寺院にゆきて手習せしなり。諸の巨利に某々大名手習の間と稱するもの、猶ほ現存せるを見る。

總見記一、抑吉法師殿(織田信長)をば名古屋の城に指置かれ…………吉法師殿内外に殊更に困窮にましますす、生長に隨て、天王坊と云ふ寺へ、毎日登山して、手習をし玉ひしが、早其蒙より氣象異相にして、世の常の人に變りけり。

武德編年集成三、天文二十年十月神君駿府傳馬町智源院に於て筆法を習はせ玉ふと……(當時家康の用ひし机硯等は、三河山中法藏寺に存すといふ。)

ならずして其の知力は殆んど全くその羈絆の下に立てり。人々唯だ僧侶の教ふる信條に依賴し、研究檢討の如き、すべて狹淺なる範圍に限られたりき。僧侶の外には讀書學問に心ありしは公卿のみなりしが、その智識は殆んど和歌、有職に限られたり。老人雜話(江村專齋)に曰く、老人少年のとき、洛中に四書の素讀教ふる人無之。公卿のうち山科殿知れりとて、三部を習ひ、孟子に至りて、本を人に借し置きたりとて終に教へず、實は知らざるなりと。その學問の淺薄なる想見するに餘あるに非ずや。

第五節

社會の人心漸く成熟の初期に入りて、自識の覺醒するに及びては、彼等は宗教及び道德の束縛に對して自由を要求したるのみならず、又た知力の羈絆に對して獨立を企つるに至れり。惺窩が寺を出て、道春が朱註を講じたる如きは、後者に屬する儀範たり。この外、土佐の高知に谷時中ありて、寺院より出でゝ、南學派を開けり。當時僧侶の腐敗甚しく、教學全く廢たれて人道地に委せり。惺窩時中等の人々が儒教を奉じて、綱常の頹廢を救濟せんと企てたるは、畢竟一の社會的問題に歸著す

るものなり。是等諸士の目に餘りしは、人倫の廢滅なりき。惺窩は曰ふ、近世、世降俗薄而不知事親之道。漸將成無父母國。既不知治己安、能治人、安能及物哉。縦終日能言鸚鵡也、猩々也、吁止矣。このときに當り、父母、君臣、夫婦の道を敎へ、人心に安慰を與ふること極めて急要すり。惺窩は日本の神道は則ち支那の儒敎と異名同歸なりとして、この道によりて社會を救濟せんとはせり。

千代もとくさ(惺窩)日本の神道も我心を正しくして萬事を憐み慈悲を施すを極意とし堯舜の道も、これを極意とするなり。唐にては儒道と云ひ、日本にては神道といふ。名は變はり、心は一也。神武天皇より三十代欽明天皇の御時に、天竺の佛法日本へ渡りて、神變不思議なる事を說き聞かすによりて人これに心を寄せて神道衰へたり。云々

惺窩は神道儒道一なりとし、佛敎傳來によりて、本邦固有の神道衰へたりとなす。神儒同歸、佛敎國害の論は早く既に彼れによりて提唱せらる。必しも大日本史を待たざるなり

而して惺窩は、寺院の專橫、僧侶の腐敗を憤慨し神儒の道を揭げて佛敎を排擊し

彝倫の道を社會に傳へんとはせり。その人物高雅にして自由精神に富み、隱然一代の木鐸とはなれり。文藝復活の運動實に端を此人に發す。惺窩が寺を出づと雖も、猶ほ全く僧樣の衣帽を脱する能はざりしは、寺院勢力の外裡に存留する名殘にあらずや。

僧侶は社會人心の歸依により、徒らに榮華を貪りしも、その信念は薄く、學術は淺く、莫大なる書庫を擁して、漫に詩文の講評を事とするのみ。その秀抜にして、處務の才幹ある者は、入りて諸侯の幕僚となり、その末派の者どもは、僅かに初等の讀書きを教ふるに過ぎず。かくの如く、僧徒の學術に於ける研究的態度は、太だ薄弱となりしが元來時世に於て僧徒が初等教育を掌握せしは、別に宗教上須要の手段として爲せしにもあらざりしかば社會の人心自識の醒覺して教育の權その手中を去らんとするに當りて、深く爭ふことも無く、教育上の勢力の名殘をば、空しく儒者の頭上にのみ留めて、元祿以後儒者の蔚興するに及びては、僧徒は寺子屋の一部分に退嬰して、地方農民の間には教育上一廉の勢力を維持せるのみなりき。

老人雜話　五山の大詩會を短冊切と稱す。南禪寺傳長老のとき短冊切の會

あり。龍山賞雪といふ題にて詩を作る。その後絕えてすること無し。會の式は五山の長老、及西堂に會し早朝粥を供す、さて題評と云ふ事あり出席の人各題一つを書きて一座を互に廻し、可然をその日の題に定むるを題詩といふ。題定つて後ち、その題を上席の壁に貼す。さて引合の紙を廣き短册に切て、三枚重ねて面々の前に置き、硯筆、筆架、水滴等盡して面々に供す。詩成て草稿を一座の衆、廻し見て後、淨書して座右の天台に載す。その後ち、五岳より一人づゝ出で吟す。五山の吟聲各異なり。詩事畢りて、大饗あり。亂舞酒宴夜に入るとぞ。

千代もとくさ(惺窩) 今の世の出家達ち、身のすぎわいの媒に、佛法を說くによりて皆人心迷ふなり。釋迦如來の直の弟子、阿難迦葉を始めて、欲に心を汚されまじき爲めに、一物をも身に貯へずして、毎日乞食に出で、その日〳〵の食ばかりを求め玉ふ。今時の出家たち、財寶をつみ貯へ、堂寺に金銀を鏤め、綾錦を身に纏ひて祈りきとうを爲して、後世を助けんと云ひて、人の心を迷はすることと佛の本意にもあらず、まして神道の心にも叶はず、世の妨となるものは出家

の道なり

第六節　茲に文藝復活の木鐸たる惺窩の人物を略說せん。惺窩敬を說きていふ。敬とは君に事ふるにも、親に事へても、一大事の客人をあしらふ如くに、心をしづめて、大事にかけて愼しむべきなり。……あまりに大事にかけて、くすみ過ぐれば、隔心出來て、心隔つるものなり。此心の誠をとり離さぬやうに、胸に置きて、かほかたちは如何にも麗らかにして、流石屹として仕へ奉るべき也。この一段の說明、略ぼ其人物を想見すべきにあらずや。彼は自由研究の精神盛んにして、機軸に富み、確乎不拔の態度あり。初學者、徒然守空言則臨事變兆。然不知所以處之故、不知見行事之實驗矣。また雖學常法不知發明之術則又徒法耳といへる如き、その研究的態度の深切なるを知るべし。

惺窩の伯父、相國寺の普光院の宣長老は、當時五山第一の學僧と稱せらる。宣かつて舜首座(惺窩)に逢ひては物がいはれぬと云へり。その儘こみつけらるゝ故なり。惺窩これより著聞するに至れり。(老人雜話)

道春は惺窩門下の秀才にして、文藝復興に與つて力あるものなるか、幕府の記室

として、希世の勉強力を用盡し營々逐々として、修養の閑を得ざりしかば、著述萬卷なれども、空しく大編纂家たるにとゞまりて、嘗つて機軸無し。惺窩は道春の才を惜しみ、徒らに風塵に奔走して、志操を卓勵せざるを大不可とし、痛くこれを戒めしことさへあり。その書牘の一にいはく。人生待足何時足。未老得閑方是閑。足下知此意乎。想古人垂老自悔之作歟。實作者未老、則不知此言之如何。言々痛切にして不盡の含蓄あり。まことに惺窩の風操を想望するに足れり。それ學者徒らに自ら高くして、國家に益すること無くんば、則ちまた大に不可なれども、專ら世事に拘束せられて修養の時を得ざるは、決して學者の面目を發揮する所以にあらざる也。

幕末に蕞爾たる松下村塾に據りて、天下を風動したる吉田松陰は、專ら修養の工夫を爲して門下を提撕したるが、安政の大獄に、鄉街囚窓の中より、その高足弟子たちを誡めて、十年許りも修養して、徐ろに名望を養へと云ひ。また高杉晉作に書を與へて、足下年猶ほ壯にして、高堂年老たり。宜しく親の意に隨ひ、妻を娶り、君側に事へ、精勤して、以て父母の心を安んずべし。かくの如くして

三四年も經つうちは、純忠の風操は、必らず同僚と衝突することあるべし　そのとき勇退して專ら書を讀み、修養の工夫を積まば、十年にして國家に大忠を建つるの日あるべしと。旨深しと言ふべし。文藝復活の木鐸、松下村塾の祖師、古今哲人の見、符合するを見るなり惺窩と松陰との識見教育家の一考に貴するに足るべし。

道春の勉强力の旺盛なるは、感嘆するに餘あれども、惜哉碩儒の態度無し。方廣寺鐘銘事件に、家康の旨を承けて、君臣豐樂を以て、豐臣を君とするを樂しむと曲解したる如き、曲學阿世の眞面目なりといふべし。傳ふるところの圖像風采俗氣多くその筆蹟また極めて拙俗なり。以てその人物を想見するに足るべし。

老人雜話に載するところに據れば、惺窩存生のとき、道春圖書編を求め得しを聞きて、數通の書を以て借られけれども、我手に入らざる由にて終に貸さず。惺窩人に語りていふ、道春は非道の者なり、圖書編彼が手に入ること分明なり僞つて無しと云ふは非道なり。あれども貸すことならずと云ふ、むごきより

も遙かに劣れりと語りしとぞ。この一事は道春の品性の鄙野なるを示すものと謂ふ可けれども、當時書籍極めて欠乏の世の中、愛書家が珍書を得て秘藏し愛藏し遂に卑吝の行動あるに至りしもの尠からずして右に類する逸話は往々にして存せり。

惺窩の苦學もまた驚嘆すべきものあり。惺窩の枕と稱するもの、猶林家に藏す。球形の木枕なり。これは稍や熟眠せんとすれば、枕則ち回轉して、頭落ち忽ち醒覺せしむべし。かくして讀書を續くること股錐の精神に擬せるなりとぞ。

惺窩は氣格高尙一代の行藏、その文筆に殘るもの、皆な雋邁の致を帶ぶ。その遺束七束猶ほ林家に現存す。俊邁高雅の氣紙上に溢れて、人をして恍惚たらしむるものあり。惺窩の肖像に就きては、先哲像傳載するところ、頗る平凡にして、怪訝に堪えざりしが、京都相國寺中、林光院所藏の遺影を見るに及びて疑團氷釋せり。この像は僧服を著け杖によりて、小松の逕を逍遙するところなるが、如何にも品格高く英邁の氣風見へて、その人物を想望するに足るべき也

物徂徠、本邦古來文教に大功ありし人を舉げて、博士仁王吉備眞備、菅原道眞、藤原惺窩の四君子は、これを聖廟に配祀すとも可なりと謂へり。博士王仁は、これを傳へ、眞備、道眞はこれを昌盛にして、而して惺窩は則ちその地に落ちたるをば、中興したる恩人なり。

第七節　戰國時代は自由精神の、著るしく發達せし時代なりき。社會の組織頽廢して、法律効力無きときに當りては、個人相互の制裁は唯だ良心の制裁あるのみ。このときに於て自我の感情發達して、個人の價値漸く認められ、個人の自由漸く認められ、信仰もまた自然に自由の有樣となり西教もまた盛んに輸入されしか、德川氏に至りて、偏局なる社會主義大に力を伸ばして、個人の自由は撲滅せられたり。個人は信仰に於ては、佛寺より離るゝ能はざりき。佛教を離るゝときは、身を投ずるに所無し。渡航の禁は嚴重なり。去て海外に出でんか、捕へられなば殺さるべし。一旦海外に出でなば歸るに由無く、漂流の一途あるのみなり。於是乎個人は佛寺の懷に眠るの已むる得ざるものなりしなり。而して僧徒は「宗門改」の特權の下に旦那寺の名實ともに有し、縱まゝに福利を貪りて、自家研究の氣焰は甚だ揚ら

ざりき。

熊澤蕃山の大學或問には神官僧徒の徒らに數多くして益無き故に、寺院も僧侶も、これを削減すべきことを論じ、その方策を述べて曰く。急にせば坊主の難義たるべし。昔の得度の法を再興して猥りに出家することを禁じ、玉はん：如此なれば出家する者稀なり。出家する者は戒律正し。寺は里を去ること十五町也。町は云ふに不及、少しの在家までも十五町を隔つる法也。町家在家と軒を並べたる堂寺は佛の法に非れば、あき次第に疊み置きて山寺の堂寺を修理せんに餘あるべし云々。

蕃山は猶毎月死日の忌日を設くるなどは、寺院、僧侶繁殖の結果なることよりしてすべて僧徒が生活の媒として種々の方便を廻らすことを指摘せり。なほ又た當時は神佛混合の世の中なれば、僧徒が福利を壟斷したること太だ多かりき。基督教の輸入せしときに當りてや、僧徒は諸侯の保護によりて僅かに之を防止したるにて教義の研究とては爲さゞりしなり。その後は江戸政府が西教嚴禁の政策の庇蔭に立ちて計らざる福利を得たるものにして、教育

上に於ける關係は次第に薄らぎゆけり。

武家政府は自由研究を以て、社稷に危害を加ふるもの丶如く思惟したり。支那を除く外、海外思潮の輸入を防ぎたるのみならず、國内にありても言論文章の自由は束縛せられたり。當初は未だ朱學を以て官學となすには至らざりしかども、林家は朱學を奉ぜしかば、朱學に反對せし者は、多少の拘束を受けざるは無かりき。中にも一六六六年(寛文六年)山鹿素行が聖教要錄を著はして、貶謫せられたるは、その尤も著るしきものなり。德川時代の初期に當りては、政治上自由研究の寛容せられざるのみにあらずして、學術も未だ進まず、學者の態度見るべきもの少かりしなり。

聖教要錄に道統の傳を論じて、 自夫至今、旣而二千餘歲三變來周孔之道陷意見誣世惑民口唱聖教其所志顏子之樂處曾點之氣象也。習來世久、嗚呼命哉と云ひ、 また小序中に予者師周公孔子。不師漢唐宋明之諸儒。 學志聖教而不志異端と云へるは、自由研究の態度を示したるものなれども、林家に對しては、一大打擊たらざるを得ず。 於是乎彼は貶謫の命に接するに至れり。

先哲叢談載するところに據れば、物徂徠一日卒然として林大學頭鳳岡(信篤)に某處にて邂逅す。鳳岡言ふ、聞く汝近ごろ書を著はして頻りに程朱を排擊すと。それ程朱を排擊するは則ち思孟を排擊するなり。思孟を排擊するに至りては、吾決して容るさずと。徂徠即ち頓首再拜せりと。林氏世々幕府の記室として、教學の柄を執り自由研究を壓迫せんと力めたるや此の如し。道春の子孫は、乃祖が、他の批難を排して朱註を講じたることをば忘却したるなりき。

武家の政治は嚴肅を主とす。自由研究盛んなるときは、言論に文章に思想界の運動は活潑となり動もすれば激爭を起して隨ひて社會的運動に發緣すること無しとせざるべし。これ武家政府の尤も嫌惡するところ也。自由研究に基づく新思想が異端邪說の名の下に排斥せられ、その人は公安破壞者として制裁せらるゝ所以なり。

德川時代の自由研究に就きては、文學士蟹江義丸君の倫理叢話に短篇を載す。井上哲次郎博士の日本之古學派哲學に山鹿素行の評傳あり。ともに併せ參

考すべきもの。

第八節　文藝復活の大なる賜ものは、教育家の輩出と、教育機關の發達と是也。

文藝復活の賜もの

蓋し吾國の學問は、その始めは、縉紳に限り、世襲の學官ありしが、暗世に及びては、教學の權、僧侶に歸せしに、文藝復活の結果として、教育者多くは武士中より出づることゝなり、農商よりも出で、教育界の面目全く一新せり

家康は亂世に生れしも、痛く學問を好み、惺窩、羅山を召して書を講ぜしめ廣く書籍を求め、活字を以て古書を印行し、また禁中の法度を作りて、天子御藝能學問第一と言ひ、武家法度には武士は、文武を兼學すべしといひ、專ら學事を奬勵せり。天下平定するに及び、學校を起すの志ありしも、遂に果さず。その後ち德川政府は、久しく教育機關を有せず。林家の私塾を保護したりしかども、これ德川氏の學校にはあらざりき。地方には固より學校の設は絕えて無かりしが、文藝復活の運動完了せしころには、二三の諸侯、その領土に學校を建つる者あり。德川氏も學問所を昌平阪に建て、始めて教育機關を具備するに至れり。

地方の教育

第九節　戰國時代は稱して教育上の暗世となす。然れども試みに五山若くは

その他古社舊寺に殘存せる文學上の遺物を見るに、その文筆と云ひ、その製作と云ひ、實に巧妙精緻を極めたるものありて、所謂暗世の面影は何處にありやと思はしむるものあり。これ東西同揆の事實にして、則ち極めて少數の有志家が、數多の日時を費して、心思を焦して成就したる傑作なり。大躰に於ては、敎育者無く敎育機關無く、暗影は全面を蔽ひたるなり。

元和偃武の前に當りて、小早川隆景は、其領國筑前に於て、早く已に學校を創設したりと傳ふれどもその施設は、これを知ることを得ず。惟ふに當時の普通發育ともいふべきは讀み書きのみなれば、學校といふも寺子屋位のものなりしなるべし。その他、黑田如水、直江山城守の如き學事に心を用ひたるもあれど、將軍家綱の頃に至るまでは地方の敎育は、猶ほ混沌たる狀態にてありしなり。

黑田如水は戰國の一奇傑なるが、深く學事に心を用ひき。黑田龜松に與へし書束にいふ、

爲年頭祝儀五十疋被指上親着申候。よみもの手習彌油斷あるまじく候云々、

老臣毌里太兵衛朝鮮に手役せしとき、その子孫五郎に與へし書東には、

態申候、手習讀書無油斷可仕候。砂絲壹尺遣候。近日多兵衛歸朝可申候間振舞可申候。恐々謹言。

その念頭學事を離れざるを見るべし、(日本教育史資料

土佐は南學の起りしところにて、學事も早く開けしが、寛永年中までは、武士の間唯だ禪學のみ流行して、學事は猶ほ開けざりき。朱學傳來記に、その情況を記していふ。古老の物語に、當國も他邦と同じことに、禪學流行して、何れもその學を好みしに、野中氏(兼山)二十二歳のとき(一六三六、寛永十三年)小倉氏居從役を勤め、江戸へ太守の供せられしときに、云遣はすは、爰許にて禪學をすれども、句草紙と云ふ書無く、禪の則を覺らず、故にその元にて句艸紙を求め下し玉はれと頼みやらるゝ。小倉氏(彌右衛門)返答に、如仰我等も只今まで禪學にて打過しが、爰許(江戸)にて風聞候は、儒學とて面白きものゝ有之の由、幸の便り有之、中庸といふ書を求め、此頃最中見候。中々禪學より面白く候間求め下候とて、中庸章句を一册差越されき。是萬々年末子の道の開くべき最初の端なり。是より野中氏心を用ひて、此書を見られ、禪の心

薄くなり、その後、大學論語の類の書ども段々に下り、叡山にて物讀せし谷三助が父時中と云ひし者、逵者に讀みて、是等の類の書を講じ候由。山崎先生(闇齋)は本と京都の生れ、湘南和尚の弟子にて吸江寺に居られ絕藏主と申し、幼より英才の譽ありて、野中氏、小倉氏などゝあひさつ睦しく、兩氏この絕藏主を勸め入れ、無理無體に儒書を讀ませける由。本より此人のことなれば、他人の見るとは違ひ、一見するより樣々の明說どもを見開き玉ふよし。其後野中氏、大學或問を讀まれ、小學の書を考へねばならぬと云ふことを見出され、兎角此書上方邊にあるべき間、力を竭して求めよと申され、色々と求めけれども不見。時中は何として見しやらん、其書は子供の見る書、大人の見る書にあらずと申せし由。兎角して求めけるうち、竹井彌左衛門と云ふ人、大津とやら草津とやらにて、小學集註の唐本を買出し、當國へ持參して打寄て點を付けて讀むべしとて、先づ主なれば彌左衛門より點を付けて廻す。先づ程愈の序はとまれかくまれ讀あふせて、其次の小學の讀法に點を付るとて、小學は做人底の樣子と云語を彌左衛門點を付けて云く、小學は人の底のとちの木の子をなすと付けて野中氏へ出され、何れも枕をわり、これはどうした道理てあらふと

海外思潮の輸入

傾けるをかしき古物語どもあり。其後山崎先生や拯の丁簡にて、兎角程意か傳はるし註をしなをすべしとて、敬身迄註を召されしときに、上方より句讀下り、句讀か能きに成て其點は焼てのけられし由。それより次第に様々の書物下り、受許にて板屋を置き、段々板行させ、又右近様を頼み、薩摩殿へ通じ、夫より宗對馬守殿へ通ぜられ、朝鮮大明をかけくみ、朱子の書のあるたけを買越され、今の世に近思錄、家禮などゝ云ふ書の板行にあるは皆此時の餘習なり」。右は土佐に朱學の興起せし事情なり。學事早く開けし土佐なほ此の如し、その餘の地方以て推知すべきにあらずや。

この外に諸侯中にて教育に熱心なるは、尾張侯義直ありて、自ら學事に力めたるのみならず、ことに道春の家塾を保護して、忍岡先聖殿を造營せしめたり。この人また吾近世教育史中に逸す可らざるなり。

第十節　吾日本の名は、十三世紀のむかし既に歐洲に知られしが十六世紀に至り、歐人勢力漸く東漸して、南洋地方に於て、吾國民の南下と觸接し、一五四二を以て葡萄牙人ピントーPintoが明人王直を嚮導として種子島に來著せしを始めとして

葡萄牙、西班牙及び英吉利、和蘭の人續々吾邦に來りて貿易を營むに至れり。於是乎十三世紀來種々に想望されしZipangiの面影は、歐人の眼に明かなるに至れり。このとき歐洲に於ては、新敎興起の結果、舊敎の改良を促がし、就中Jesuit一派の如きは、尤も勇猛進取の氣風を帶びたるが、その高僧フランシス、ザヴヰエーFrancis Xavierは吾邦に渡來して、熱心に布敎に從事せり。布敎と貿易と相待ちて漸次盛況を呈し吾國民も亦卑外自尊の風無かりしかば、外敎は暫時の間に京畿關西地方に蔓延するに至れり。この際吾邦に輸入したる學術は、天文醫學と兵器となり。ザヴヰエー等は到るところ吾國の僧侶と法論を試みたることあり。林道春は宣敎師と地球の渾圓に就きて討論したることありき。耶蘇敎の輸入は、人心に新光明を附與し、ことに女子敎育に就ては殆んど一新の機會を與へたり。彼等は本邦婦人に、社會に於ける女子の地位を自覺せしめ、女子敎育を昂進せしめむとせり。日本西敎史に、數多の敬虔なる婦人を傳ふ。これ以て參證するに足るべし。然るに宣敎師等の行動は、政治上の嫌疑を招き、德川氏に至りては、全く耶蘇敎を擯斥し、貿易を謝絕せしのみならず、挾書の禁を發して一切橫文を讀むことを嚴禁せしかば、海外

思想は全く吾國より杜絶されて、日本は世界の精神界に孤立することゝなれり。當初吾邦に輸入したる天文及び醫學は種々の形態に於て、その片影を留むるのみ。例へば蘭法と唱へて、外科手術の一端を傳ふる如き是なり。その外、藝術に於ては、長崎の一角を通じて輸入せし歐洲品によりて、多少歐洲思潮の影響を受けしのみ。

織豐時代本邦に輸入せし工藝品の國語となりしものは中々尠からず。

繻珍Setim(葡萄牙)紐釦Botao(葡萄牙)天鵞絨Velludo(西班牙)

ビイドロVidro(葡萄牙)合羽Capa(西班牙)の如きは、その著るしきもの也。

當時吾國民は如何程までに、外國語を解し、外國書を讀み得しやと言ふに、固よりその詳細は知悉す可らざれども、日本西敎史に載するところに據れば、邦人にして、聖書讚美歌等を和譯したる者あれども、今全く傳はらず。天草亂の戰利品に讃美歌の斷篇ありて、上野博物館に現存せり。

ザヴヰエーは語學の天才ありて、頗る早く吾國語に通じたるが、彼の演說は先づ通辯をして、これを邦語に譯して羅馬字にて綴らしめ自ら街頭に立ちて、そ

の草稿を讀み上るにありき。されば其の始めは聽衆の笑を博するのみなりしが、後ち頗る熟達して、神學の奥義または地球の形狀等の議論をも能く邦語にて談じ得るに至れりといふ。

本國にて歐洲學術に關する著述は、大永年中(大永元年、一五二一)の中國描談を權輿となす、この書は天文に關するものなり。飜釋は則ち伊曾保物語を以て嚆矢となす。最初は慶長年中(慶長五年、一六〇〇)に繪卷物となりて現はれしが、未だ世に行るゝに至らず。伊曾保物語の始めて出版されしは、寛永十三年(一六三六)にあり、その書、著書も書肆も共に署名せざれども、恐らくは是れ通詞などが外國人より原書の梗概を聞きたるを筆記したるものなるべしといふ。その後ち、萬治年中及び元祿年中にも、伊曾保物語は出版されたるが、元祿出版のものには、何れの原書にも發見せざる二三の話を載す。これ等の譯書は共に、耳學問にして、原書に據りたるにはあらざるべし。かくて伊曾保物語の趣味は早く讀書界に知られき。

海錄十五に　さて又伊曾保物語と云ふ草子三冊あり。元和、寛永の比、やんごとなき方の書かせ玉ふ書と桂川氏云へり、最上氏話なり。此書、蠻書と和譯せ

し始なりとぞ　桂川は幕府侍醫にして、洋學には志有りし者なるが寛永年中出版の伊曾保物語を、去るやんごと無き方の手になるとせるは、如何にや。未だ此説の出處を知らず　東京高等師範學校藏本の同書の奥書には通詞どもが蘭人などより聞き得しところを筆記したるものなるべしと云へり　此説妥當なるべし。

伊曾保物語の飜譯に就きては、早稻田大學出版の列傳體小説史、及び岸上操氏の江戸舊事考と渡邊温氏譯の伊曾保物語とを參考すべし

寛永年中出版の伊曾保物語には挿圖無く、その後の出版には和様の挿圖あり

唯だ一の伊曾保物語なれども、飜譯出版の行運を遡るときは、以て洋學發達の一斑を卜するに足るべし。

歐洲思想輸入の端は此の如くにして開けたり　その後ち横文挾書の禁は極めて嚴重なりしが、長崎通詞などのうちに往々にして篤志の士ありて、窃かに外國書を讀みしことありて、海外思想輸入の命脈を保持せしこと、滿目の死灰のうち一星の火を藏したるが如くなりし。

福地源一郎氏演說の長崎洋學之次第の中に、　私は十六の時、この通詞になつたが、其時昔からの記錄を見たことがある。　最も古いのは寛永十三年頃から起つて洋學の次第が書いてあつたが、その飜譯などは、文字を知らぬ人の飜譯とは思はれぬまで旨く出來て居た。　本文中所謂飜譯は、何如なるものなりしや。　余は未だこれを詳にせず。　蓋し禁書の令は一六三〇(寛永七年、益軒誕生の年)に發せられたれば、これより以前輸入の書籍を密藏して、ひそかに獨り講修せしもあるべし。

大船渡航の禁出でゝより內外の交通絕えて、世人五世界を知ること無し。　唯時々漂流者ありて、海外の異聞を傳へたるが、その中にも左の一話の如きは博聞に資すべきものあるを以て此に抄出す。

假名世說　寶永五子年(一七〇八)十二月、感應寺の隣なる庵室にて、尙齒會あり此時渡邊幸菴百廿七才にて上座……　此幸菴仕官のころは、さま〳〵の勳功あり、仕を辭して後ち便船して唐土に至り、天竺阿蘭陀をはじめ、其外の諸州を經めぐり、異境に在ること四十餘年、漸く九十九才のとき、歸朝し都部を徘徊す

天正十壬午年駿河國に生る、寛永八辛未年ること十年、後武江大塚に閑居す。壽百三十才にて終る。

玆に十三世紀以來、外國渡航禁令の發布に至るまでの內外の形勢を對照して本文の參證に供せん。

○歐洲	○日本
一二八一	元寇役
一二九一、マルコ、ポーロ歸國	
十字軍終る。	
(一三六八、明主朱元璋建國)	一三三三、鎌倉幕府滅亡、
一四五三、コンスタンチノープル陷落	

一四八三、ルーテル生、
　ラフエール生る
一四九二新世界發見
一四九八、ヴアスコ、ダ、ガマ歐亞新航路の發見
一五一七、宗教改革始まる。
一五二一、ウォルムス大會、
一五五五、アウグスブルグ會議

一四六七、應仁元年、
一四九九、蓮如上人歿
　大永元年(將軍義晴)、
　本願寺光兼御即位資を献ず。
一五四三、天文十二年葡人種子島に來る。
一五五一、天文廿年大內氏滅亡、
　弘治元年、嚴島戰

西比利亞酋長始めて露國に通ず。 一五五八チャールス五世歿 一五七二、比律賓群島西班牙領に歸す。 一五九二新大陸發見後百年 一六〇〇エリザベス歿 東印度商會（英國）設立。 一六〇九和蘭獨立	
一五六八、南蠻寺建、 元龜三年三方原戰。 文祿元年征韓役 慶長五年關原戰。 一六三〇、寛永七年横文書籍輸入を禁ず。 一六三六、寛永十三年外國渡航を禁ず。	

以上表示するところに據りて、東西形勢推移の大體を知るを得べし。

和蘭一國のみは單に貿易を要求するのみにして、布教の意思なかりしかば、長崎一港に限り、江戸政府の嚴重なる干渉の下に貿易を營むことを許されたり、かくて歐洲思潮の暗流を東洋の島帝國に導きたるは、かの勤勉なる蘭人の恩澤なり。

第十一節　家康は夙に學問を好みしかども、その教育を奬勵したるは社稷の基礎を固くするの政策より出でたるなり

家康は夙に學問を好み教育に志あり。されば天正八年正月五日(一五八〇)正親町天皇の制旨にも、允文允武、志道遊藝とは見えたり。風雲猶ほ倥偬たるときに、學者を引見し講經を聽く如き、志學問に厚きものにあらざれば能はず。近藤重藏の御代々文事年表に家康の文德を頌揚して曰く、　天海僧正撰する東照宮緣起に、後陽成院の宸筆にも、新田大相國家康公は、好勇恢武、天下の名士なり、加之研精於文學、發志於經綸と云へり。宸筆に所謂研精とは豈尋常好書を謂ふの謂ならんや。深く御好學の厚きを嘉奬し玉ふ所以なり云々。

實に家康が文藝復活に盡くしたる効績は偉大なり、御代々文事年表に、　神君の如き、豐臣氏無學の代に當て此に大觀せられ、學を好み道を弘め、經史は言ふに及ば

ず、凡そ皇國古今公武の制度文爲に於て深く神意を盡くされざるところ無く、首として日本の舊記を搜訪蒐集せられ旁ら神道佛理諸雜藝に至るまで、悉くその樞要を提擧せられ、後來文運大に開け、治教休明なること、その源蓋し此に基す、と云へるはやゝ溢美の感あれども、また能くその功業を盡くせるものと謂ふべし。さりながら家康が天下に教育を奬勵したる本意はその覇業を維持せんが爲めなりき。關原大戰の後ち、家康は子孫萬年の爲めに、大名政治の維持に苦心し、その社會組織を保安せんが爲めに、人文を進めんとして、教育を奬勵したるなり。元和偃武の後ち教育事業は益進みたり。江戸政府が京都の朝廷に向ひて天子御能學問第一と勸め奉りたるも、天子公卿學問に專らにして、政權に心を注ぐの暇無からしめん爲めにて武家に向ひては武家諸法度に、文武弓馬之道可相嗜事と奬勵したるも、主從高下の秩序を理解し、これを遵守せしめんが爲めなりき。蓋し幾世數百年無學不倫は社會の狀態にして、政權爭奪の行還は唯一の下克上なりき。而して家康もまたこの間に成長して、その弊害の恐るべきことを躰驗せり。將軍を克する者は細川。細川を克する者は三好にして、三好を克する者は、更にその家臣たる松永なり

き。大内は陶に、浦上は浮田に、土岐は齋藤に、織田は明智に斃されき。而して家康もまた豐臣氏の孤と寡とを欺きたるの嘲を免るゝ能はず。それ秩序と平和とは人生幸福の公道なり。かつそれ亂離數百年瘡痍に苦しめる民衆は、自然に休養を思ひ、漸く秩序と平和とを渴望するに至れり。このときに當りて幕府を建つる者能く社會の趨勢を察し、平和的手段によりて、民衆をして不學不倫より脫して、秩序と平和との眞味を會得せしむるこそ最善の政策たるべし。家康が敎育を奬勵したる眞意は此に外ならず。尙ほかつ彼は支那の經史を讀みて、國初の明主がつねに敎育によりて、立國の精神を民衆の心中に扶植したることを了知せり。これ彼が學者を引見し、古書を搜羅出板し學校をも起して、敎育によりて幕府の基礎を安泰ならしめんとしたる所以なり。書は死物なり、政畧は活けるものなり。彼が一たび敎育の彀を張りてより代々無數の學者、その中に陷りたるなりき。

儒敎は古來本邦敎學の中心となりしもの、平正着實にして、尤も能く家康の希望に合せり、此に於て彼、力を盡して儒敎を擴めたるなり。諸法度の中に、忠孝に關することと、尤も重大にして、些少の事も、君臣の秩序を亂るものは刑極めて重し。これ

武家政治の精神にして、徳川氏は儒教をかりて、その說明を附したるまでにして、儒教より起因したるにはあらざるなり。

武家政府は武力によりて立つ、されば家康は禁中に向ひては學問第一とこそ言へりしも、武家に向ひては文武弓馬之道とは言へり家康が所謂教育は則ち文武弓馬の道なりき、されば家康その最期に臨みても、文武之道を以て、切に子孫を戒め、その守り刀を試みしめて吾この劍を以て子孫を鎮護せんと言ひ、瞑目するにのぞみても、將軍武之一字を忘れ給ふと遺言せり。老雄創幕の精神炳焉たりと謂ふべし。

家康は文武弓馬之道をば身を以て表彰したり。後世子孫乃祖の遺志を繼承すること能はず多くは學問にのみ傾きて武毅の志を失ふ。なほかつ學問もまた卑淺要領を得ること無し。將軍綱吉の學事奬勵は狂氣の沙汰に近し。その後ち多くの將軍、家庭に於ける日課太だ安易にして、文武ともに娛樂的なりき。幕末內外多難のときに當りて、將軍俄に文武を勵みしも、既に機遲し。

家康が人文開發の方針は鎖國自安の政策とは根本的衝突をなせり。人文開發するに隨ひ、人倫明かに、國躰辨ぜられ、ことに極めて奬勵したる儒學よりして王覇

の辨は起れり。日本には皇室ありて萬古一系なり。王覇を擬すべき最好の摸型は皇室と幕府となり。此に於て乎儒學の薫化を受けたる人々は、遂に幕府は果して眞成の政府なりやと疑はざるを得ざるなり。次ぎには鎖國の天下にも海外智識の來るべき窓戸は長崎の一角に設けられたること是なり。これ猶ほ牖戸の一隙、堤防の蟻穴なり。烈々たる白日、澎湃たる洪流、必らずこれより浸入せずんばあらず。年を經て、これより射入浸潤せし暗流は、精神界の一部に鎖國の打破せざる可らざることを感ぜしめ、洋學者の中には亞細亞人てふ印を捺して、その志向を標識する者あるに至れり。かくの如くして人文發達するに及び、國民自ら覇政及び鎖國の下に甘んぜざるに至りしときに恰も時なる哉、世界の大勢は東方の島帝國を震搖せしめて、社會の改新を促がし、嘗つて教育を奬勵したる德川氏は教育されたる國民の爲めに斃され、茲に世界的日本を現出するに至れり。

第十二節 文藝復活の運動は先づ京都にて起れり。その然る所以は、文藝復活が京都に存せる文物の舊壘の上に打建てられたりと謂ふに外ならず。惺窩も、道春も那波道圓も松永尺五も皆こゝに居りき。家康はこの地とこれ等の學者とを

利用して教學興隆の素地を作くり、やがてこれを江戸に移植せしなり。一五九三(文祿二年)惺窩を引見して、貞觀政要を講ぜしめしより、一六〇一(慶長六年)には伏見に學校を設け、一六〇三には世上の講書を許し、一六〇五二條城中にて道春を召して經史を質問などせしを始めとし、或は儒者に、或は五山の僧徒に命じて古書捜羅出版を計らしめ銳意文藝復活をたすけたり。家康は幕府の首都たる江戸を以て經濟界及び精神界の中心たらしめんとの希望を有し着々これを實行せり。十七世紀の劈頭に西半球の新西班牙(墨斯古)と關東との間に直接貿易を開きて、一六一〇(慶長十年)日本船が太平洋を橫斷したる壯擧の如きもその眞意は九州の貿易權を奪ひて、これを東京灣に收めんとするにあり。彼は京都に於て、種々教學興隆の設計を爲したるも、そのやゝ成熟するを待ちて、これを江戸に移さんとの眞意なりき。されば家康より見れば京都は教學興隆の苗代たるに過ぎざりき。されど江戸は猶ほ草創に屬し、京都は流石に文物の舊都なりければ、教學の種子能く此に發育して、德川氏が江戸にて教育上頗る經營したるにも係らず、この時代の終りに至るまでは、教育界の中心は江戸に移らざりき。

慶長十年(一六〇五)道春が二條城中にて家康に謁したるときのことを、その著野槌に述べていはく、兌長老、信長老清原極﨟なども祗候せられしが、光武は高祖より幾代隔たりしと尋給はる。各覺え申されざりければ、汝は覺えたるかと仰ごとあり。光武は高祖九世の孫也と後漢本紀に見侍ると申す。又反魂香の事は、何れの書にあるぞと宣ひければ皆人覺束無く侍りしに反魂香の事は史漢の本文には見え候はず、白氏文集李夫人の樂府と東坡詩注とには、武帝の焚て夫人の魂を來すとしるし侍ると申すに又、屈原が蘭は何をか云ふぞと仰せられしに、朱文公の註には、澤蘭也と候と申す。大相國左右を顧み玉ひて年若き者のよく覺えたりなど感じ仰せられき、云々

これ以て講筵の有樣の一斑を推知すべし。

京都に於ては教學は儒者の手に落ち縉紳と僧徒と神官とは、祖先傳來の虚器を擁するのみ冷泉爲滿は、人麿の傳は神秘にして悉く存せずと云ひ、吉田神龍院梵舜は無點の日本紀をば讀むこと能はざりき。かくて文藝復活と共に儒者は教學の柄を握り、京都にては早く既に學校を開きて、私に釋奠を行ひし者さへありき

京都の講習堂

慶長十九年三月(一六一四)五山僧徒駿府に下向せしとき、文章を作らしむ。玉音抄に、その答案を載せて曰く、論語に爲政以德、譬如北辰居其所而衆星共之と云ふことを文に御書かせ被成候へば、何れも只今天下靜謐なること北辰の如し、萬々年などゝの言書候を、權現樣御覽被成、是は面白からぬ文法なり云々。

慶長十八年六月(一六一三)梵舜駿府にて家康に謁す。道春の野槌に記していはく。御前にて、日本紀舒明皇極の卷を讀めと仰せられしに、得讀まざりければ、道春を召して讀めと宣ふ、即ち讀みてけり。大相國彼家書を何とて讀得ざるやと道春に仰せられたりしに神代の所をば假字をつけて讀候が人皇紀には假字點無き故なるべしと申上侍りき 五山は寺院の秀にして、吉田は神官の巨擘なり。而して共に無學此の如し。

第十三節 惺窩の門下、道春、道圓、松永尺五、堀杏菴、石川丈山、菅得菴等秀才多きうちに、學校を開きて育英に從事せし者は松永尺五なり。學校は則ち講習堂にして、一時生徒聚ること雲の如しと稱す。幕初の一大私校たること知るべし。その出

身の名儒は木下順菴と宇都宮遯菴となり。尺五育英に長ず。順菴と、遯菴と、その遺法を承けて、ともに教育に盡し、順菴門下には新井白石、室鳩巣、雨森芳洲あり。遯菴は、帷を京都に下して、先師の遺業を繼ぎしのみならず。標註事業によりて教育普及に貢献したること多大なり。されば、この二名儒を出したる講習堂が幕初の文運に關すること、また大なりと謂ふべし。

講習堂は慶安元年(一六四八)に成る。禁苑の南にありて、天門に近し。尺五の號ある所以なり。學校にては、釋奠せしこともありて、遯菴の詩に、昨日二月上丁日、老師尺五講堂前。各羞蘋蘩評書卷。祭至聖配大賢。その盛況想像するに足るべし。尺五の子孫、世その業をつぎて幕末に至れり。

天保十三年(一八四二)に、林式部少輔、筒井肥前守より京都學問所の義に就き、幕府へ御內慮伺書を出したるうちに尺五子孫の事を載す。

一、當地堀川通二條下ル町、松永臨時郎と申者儀舊家にて、連綿儒業相續致し候者に有之、且は右學問所御取建可相成場所の地續にも有之候に付、旁學問所預被仰付、居宅より學問所へ通路相成候樣仕、授讀をも爲仕、平日學問所へ出入有

之向、并御門且御座敷向其外書籍御道具類等都て取扱相心得、御入用出方に拘り候儀は組の者へ申談候樣爲仕、學寮諸生共賄方世話の儀も爲相心得候樣仕度、右に付き門番小使等臨時郎差配に申付候積り、但右臨時郎儀は、天保十三寅年十月代々浪人にて儒業相立、當時迄連綿致し候段、奇特の儀に付き、向後居屋敷無役地に被成下、町並掛り物差免、年々銀十五枚宛被下候間、此上共永續致し教授可仕旨被仰渡候者に御座候。

二百年間子孫相つぎて育英に從事す。尺五何ぞ多幸なるや。而して、これまた吾近世教育史上の一美談と謂ふべし。講習堂につきて京都に起りしは堀河塾にして、是亦連綿幕末に至れり。

遯菴の標注事業も亦幕初の教育に與つて力ありと謂ふべし、遯菴自ら號して標注先生と謂ふ。寛永十三年(一六三三)を以て生る。益軒に後るゝこと三歲。海内教育普及せず、地方には教師極めて欠乏せるときに當り、多く四子諸書に標注を施して初學に便にす。遯菴の標注本は多く大本にして、細注、鼇頭の細字をなす。恰も蝨の衣に著くが如き故に、また自ら號して蝨先生といへり。物徂徠壯時上總に

ありしとき遯菴の標注本を得て、それを學習せり。後年書を遯菴に送り、その諸標注を評して、惠海内に及ぶものとなし、王仁、眞備、道眞、惺窩四君子と共に、世に學官に配祀すべきものなりとまでに、遯菴の功蹟を頌揚せり。

遯菴の著述には、四書標注、杜律標注、同增益標注、杜律詳說、小學詳解、近思錄標注、蒙求詳說、錦繡殿標注、忠徑標注、文選音註、千家注標注、千家集俚諺抄、三躰詩詳解、三五菴職原抄標注等あり。標注は遯菴の生命なり。遯菴精力精絕にして倦まず。その著述に對してもつねにこれを訂正することを忘れざりき。三十歲のとき古文前集を標注せしが、元祿九年その六十四歲のとき再びこれを訂正增補して公にせる如きその一なり。寶永三年遯菴七十三、漸く暮年なり。而して一夜孔子を夢みて詩を賦す。

七月十七日、夢中逢中華老人。余問其齒。老人乘筆書七十三。覺後開戸、月清明也。因賦之。

(前略) 高天彌仰仲尼月、我亦今年七十三。

老儒の意氣想ふべきなり。

京都にては、後光明天皇英明好學の御志篤く朝山意林菴の如き、處士にして殿上に經を講ずるの殊榮を賜はりぬ。意林菴の事業、別に記すべき無し。幕初の京都に於ては講習堂こそ特に表出すべきものなり。

第十四節　幕初江戸の學校は林氏の家塾あるのみ。關ヶ原大戰より元和偃武に至るまで、家康内外の經營多端にして、充分に力を教育に盡すこと能はず。慶長六年(一六〇一)學校を伏見に設け、圓光寺と名づけ、學を僧俗に勸めしは德川氏建學の創始なり。その後家康は學校を江戸に建つるの志ありしも遂に果さゞりき。

鵞峯文集、(重修武州先聖殿記)　建東照大神君之治世、我先考羅山子、膺侍讀之撰、時有命將開學校、有事未果。

昌平志、二、　初信勝(道春)在於京師(慶長五年庚子)首唱程朱學、　四方學徒負笈而集、翕然知嚮(註略)時已有志於興學、而勢未至也。(註略)後謁烈祖於二條城。因請興學庠。　乃命相欣。　時方軍國庶務日殷、以故未果焉。　實慶長十九年也。羅山子時年廿九)

羅山文集附錄一、年譜　慶長十九年甲寅(一六一四)

先是先生請建庠序於洛、教授生徒。有旨可之。將相攸擇勝、依兵革不果。此冬遂有大阪之役。

其後三十年、寛永七年（一六三〇）家光江戸忍岡の地五千三百五十三坪の地を道春に賜ひて興學の地となす。これ猶ほ林氏の私學なれども昌平阪學問所の基礎をなせるものなり。道春因て此に書院塾舍を築く。今の上野公園櫻峯のところ則ち是也。これより先き秀忠も亦、溫厚にして學を好み、儒書を讀み書道にも心を潛め、寛永の初年には、御居間の側に御學問所を建て、御張付は墨繪の耕作の圖なりしよし（續明良洪範所載）傳ふれども、これ唯だ將軍修學の所にして未だ幕府自ら學校を建つるに及ばず、先づ林氏をして、これに當らしめたり。

御代々文事年表卷二に、秀忠の好學の事を述べていふ。元和小說に、小幡勘兵衞物語にて承候、御十三の時より御學問被成云々世間にては終に儒學御雜談無御座候故に、それをば不存、儒學も不被成候樣に皆々存候と見えたり、中略サキニ聞ク常ニ經史ノ講談ヲ聞召シ、又詩ヲ御印籠ニ蒔繪ニナサル、東鑑ヘ訓點ヲ命ゼラルヽノ類皆ナ是神意（家康ノ意）ヲ尊奉セラレ、御孝德ヨリ出シ御事ナ

ルヘシ。今御文庫ニ、公ノ御前本義之聖教序墨本現存ス、豈又傍ラ入木ノ藝ヲモ好マセラレシニヤ云々。

聖廟及び學校を建つるの一事は惺窩以來の宿志なりき、惺窩行狀に據るに、惺窩播磨の赤松廣通に依りしとき、廣通學を好み流俗を拔き、能く惺窩に師尊せり。惺窩この人ともに道を期すべしと謂へり。一室を築きて大成殿に擬し、弟子數人と釋菜の禮を講ぜしが、後ち廣通故ありて自刄し、遂に聖廟を建つることを果さず道春も亦早くより建廟の志ありしが、寛永七年土地及び二百金を賜はるに及び、先づ書院塾舍を築き、學制も亦稍備はる。同九年（一六三二）尾張侯義直その地に即き廟宇を營造し、聖像及び祭器を安置し、自ら先聖殿三字を扁額に書して賜ふ。此に於て祟聖の典始めて擧り、諸侯も亦尾張侯に倣ひて、祭器、資料等を寄贈し、林氏の聖廟學舍漸く隆昌の運に向へり。

尾張侯義直は夙に學を好み、自ら聖像をその邸に安置し、併せて書庫を築けり、蓋し諸侯中尤も早く聖像を祭れる者なり。江戸時代の初期には、すべて聖像を安置するの式、神殿風なりき。それは義直邸の祭式のみならず、忍岡聖廟に於

ても、厨子を設け狛犬を置くごとき全く神社風なりしなり。

羅山文集に、義直邸聖像のことを記していはく、寛永六年十二月赴尾州奉謁亞相。座定而後拜孔子堂。蒔繪塗小厨子形如堂在奥有金像。堯舜禹周公孔子安其中云々

先哲叢談　寛永寺地舊名忍岡、自山王祠至淸水觀數千畝、係羅山賜莊。春齋櫻峰記曰、櫻峰者何也、忍岡別號也。滿岡之櫻、先考所栽也。据此則今所存老幹數十章蓋其遺植也。山王祠旁、又有稻荷小祠。古老尙呼曰林稻荷云。

一帶の丘陵、茂林欝然として池に臨む。地を拓きて學校を建て櫻を栽う。一望豁然眞に校舍の好地なる哉。寛文三年(一六六三)家綱のとき、林鵞峰に弘文院の號を賜ひしかば、それより書院を號して弘文館といへり。これより學科を經科、讀書科、文科、史科、倭學科の五科に分ちて、生徒を敎へ、幕府よりも生徒に月稟を給し、また材木を賜ひて增築し、東西南北の四塾となせり。その間、將軍自ら聖廟に謁ひ或は講經を聽き、諸侯も追々寄附するところありて、弘文館は愈盛運に向ひしが、貞享四年(一六八七)綱吉は林鳳岡に弘文院學士の號を賜ひ、元祿三年(一六九〇)には、弘文館を

昌平阪に移し、幕府の學校となして昌平阪學問所と改めぬ。

第十五節　弘文館の發達は、幕初江戸教育變遷を知るに足るを以て、左に其沿革畧を揭ぐ。（昌平志に據る）

一六三〇（寬永七）　道春に忍岡宅を賜ひて興學の地となす。

一六三二（寬永九）　尾張侯義直忍岡に聖廟を造營す。

一六三三（寬永十）　始めて孔廟に釋菜す。獻官以下諸執事皆な深衣幅巾を服す、同四月家光孔廟に謁し、道春に命して堯典を講せしむ。將軍孔廟に謁すること此に始まる。

一六三三（寬永十一）　材木を道春に賜ひて書院を築かしむ。

一六三四（寬永十二）　釋菜。道春論語首章を講ず。釋奠に經を說くこと此に始る。

一六五六（明曆三）　永井伊賀守石水盤一基を孔廟に獻ず。一時縉紳、尾張侯義直に倣ひ、儒風を慕ふと雖、列侯置製は此に始まる。

一六五七（明曆三）　正月十八日江戸大火、圖書祭器書庫皆燒く。所藏經史凡千餘部、尤も秘冊珍典多し。この日禍を免るゝ者、道春輿中携ふる

所、梁書一卷のみ。明年三月、政府、官閣書六十部及び五百金を林恕(鵞峯)に賜ひて殘闕を修理せしむ。未だ數年ならずして殆んど二萬卷に至る。賜本には、恩賜官本四字を捺す。

一六五九(萬治二) 二月八日釋菜。孔廟二仲釋奠此に始まる。

一六六三(寛文三) 林鵞峰その書院を弘文館と改む。

一六六四(寛文四) 釋菜始めて合樂を用ふ。史館を忍岡に置き、史生に支糧を給す。鵞峰編纂總裁たり。

一六六六(寛文六) 弘文館に規約職掌二制を置く。

一六七〇(寛文十) 本朝通鑑成る。孔廟に釋菜し、併せて同書の成るを告ぐ。

一六七二(寛文十二) 官林を給して弘文館を增築し東西南北四舍となす。

一六八七(貞享四) 林鳳岡に弘文院學士の號を賜ふ。

一六八八(元祿一) 賢儒繪像を孔廟兩廡に揭ぐ。唐の開元年中、廟壁に圖するの制に倣ふ也。

一六九〇(元祿三) 七月改めて、孔廟を昌平阪に造る。

道春の生涯

第十六節　道春徳川氏に事へて教育禮法の事に從ひ、吾朝の叔孫通を以て目せらる。幕府學政の基礎は、此人の盡力によること尤も多し。されば茲に彼の略傳を掲げて、教學に於ける彼の成功の生涯を示すこと、吾近世教育史に於て、必要のことなりとす。

（林讀耕齋撰羅山先生行狀に據る）

一五八三（天正十一）　八月京都四條新町に生る。幼より聰慧、早く通用字を識る。八歳の頃、甲州人德本、太平記をその宅に讀む。道春側より聞きて、悉くこれを諳記す。

一五九四（文祿三）　道春十三歳。既に國字を解し、演史俗說を誦し漢史書をも讀む。明年建仁寺に入り、書を讀む。長恨歌及び琵琶行を考證す。その精確人を驚かしむ。

一五九六（慶長元）　寺を下りて家に歸る。遍ねく四庫の書を讀む。處々搜借或は市に求む。一篇を終る則ち天下至樂となす。秘本ありと聞けば必ず求めて借覽、展閲尤も謹む。傭書者に命じて寫さ

しめ、數葉成る毎に自ら校正す。筆紙墨の精疎を問はず、唯だ速成を貴しとす。末年に至りても亦然り。讀書五行倶に下る。日々概ね寸餘を以て制とす。

一六〇〇（慶長五）

十八歳。宋儒の者に著眼し、專ら六經四書に精し。始めて朱子章句集註を讀む。

一六〇三（慶長八）

廿一歳。經筵を開きて論語集註を講ず。

一六〇四（慶長九）

秋、始めて惺窩に謁し、その門に入る。惺窩寄するところの深衣道服を著けて經筵にのぞむ。この年、已に見し書目を記あるに、四百四十餘部に達せり。明年惺窩道春に名けて忠字は子信といふ。同輩目して林提學となす。惺窩人に謂て曰く、林忠聰達、禀性最も敏。當世捷悟强記の者無きにあらざれども、勉强よく彼に勝る者無からん。常人韻書を見るに平仄を辨ずれども上去入を辨ぜず。然るに彼能くこれを辨ず。其記識の精、推して知るべしと。その年、始めて家康に二條城中

に謁す。

一六〇七(慶長十二) 駿府及び江戸にゆく。官命により、祝髪して名を道春と改む、御書庫を管し、官本を歷看す。十七年より妻荒川氏と共に駿府に仕し、家康の諮問に備ふ。この間殆んど十年間、江戸駿府と京都との間を往來し、また九州にもゆく。

一六一四(慶長十九) 學校を建てんことを請ひ、許さるれども大阪役起るによりて已む。道春戎衣して陣中に從ふ。

一六一六(元和二) 家康薨す。道春駿府にゆき、官書を義直、頼宣、頼房三卿家臣に頒付し、日本舊籍の珍本を江戸に獻す。東奔西走その間、講誦已まず。數回惺窩に面し、且つ徒弟を教誘す。その詩文は、則ち惺窩これを批評朱點して慫慂す。

一六一九(元和五) 九月惺窩歿す。道春京にありて、毎日春秋胡傳、書經蔡傳を講ず。友生門人席に滿つ。洛中學大に熾昌なり。

一六二四(寛永元) 四十二歲。家光に仕ふ。日々候侍す。或は論語、貞觀政要等

を講じ、或は執政裁斷等の席にも列す。

一六二九（寬永六）　法印に敍す。儒官にあらざる故に、詩及び序を作り、これを解說す。

一六三〇（寬永七）　上野の地を賜ひて、道春の別莊とす。まさに學校を建てんとす。

一六三二（寬永九）　正月秀忠薨す。道春命を奉じて入京し、謚號を奏請す。先聖殿を上野別業に建つ。

一六四七（正保四）　鵞峯新宅を作る。道春倭漢書千餘部副本數百種を授け、其餘は自ら藏す。妻荒川氏最も内助あり。故に平生家事を托して、讀書自得す、往々別業に流憩し、詩仙堂を造る。

一六五三（承應二）　足利學校にゆく。

一六五五（明曆元）　七十三歲。命を奉じて支那歷世名臣卅六人を擇び、これが賛を作る。此夏阿部忠秋幕命を奉じて、銅瓦庫一字を道春に賜

ひ、之を其家塾に建つ。嘗言ふ、水火能く犯すこと無しと。道春大に悦び、所藏の典籍文書を悉く之に納む。
明年春妻荒川氏歿す。儒禮を以て別業に葬り、順淑夫人と謚す。

一六五七(明暦三)　正月十八日江戸大火、鵞峯宅燒け、獨り書庫のみ存す。同十九日又大火、道春宅も亦焚く。銅瓦庫も烏有に歸す。道春別業に赴く輿中唯讀殘の梁書一册を携ふ。書庫の燒失を聞きて、百年之を集めて一朝これを廢すと言ひて嘆息已まず。臥床五日にして歿す。春秋七十五。文公家禮に從ひて之を葬り、私に文敏先生と謚す。

道春の一生は、幕初教育發達の狀態を徵するに足るを以て、此に其略歷を擧げたるのみ。道春性格、偓窩の高雅に及ばざるも、精力卓絕よく終始黽勉して、以て幕初の學政に貢獻したる事蹟は、又以て後世教育家の模範とするに足るべし。猶ほ左に道春の性行一斑を標出して、幕初の教育家の面目を窺ふの資料に供せん。

道春一生讀書孜々として倦まず、隨處展看して必らずしも文案に依らず。什々の卷を披く毎に、乃ちその顚末を終へざる無し。登營し及び他往する毎に、猶ほ鉛槧を携ふ。籃輿既に設けられぬ、奴僕既に待つも、これを告ぐること再三に及びて、殘編を整束して出づること多し。宅に還り、服を更むれば、はや則ち朱墨を執る。夜讀中宵に及びて罷めず。或は坐睡し或は臥寐するも、暫らくまどろみて則ち起つ。故に帶を解かずして寐に就く。その講席に臨むや、舌端圓熟して文義明昭なりき。

道春極めて博覽多識、南蠻耶蘇の記に至るまで渉獵す。凡そ世間有字の書見ざるもの無しとまで稱せられぬ。壯歲より支那行を企望して已まず。詩あり、脚下風波千萬里、粟田仲満是男兒と。室町時代より禪僧つねに支那行の選に當り、慶長元和の際も、道春その役に祗ることを得ざりしを遺憾とせり。つねに、支那に生れて有德有才の人と講習討論するを得ざりしを恨むと嘆息せり。

道春病床にありても手、卷を釋てず。人その靜養を勸むる者ありしに、道春笑

て答へて曰ふ。人の歌舞を喜ぶ者は一日も歌舞無かる可らず。余が讀書するは煩勞とするに非る也。呂伯恭は垂死病中だも、同業を廢せざりき。況んや余が痼疾は未だ死に至らざるをやと。

道春性氣充實、事を處するに怠らず。兩眸明朗久視して瞬せず。已に老て夜讀するに、細字にも眼鏡を用ひず。その記臆も亦減少するところ無し。偶忘るところあれば敢て意に介せず。又た下問を恥ぢず。兒輩門生省識する者あれば、則ち言ふ、汝善くこれを諳んず、前途これを勉めよと。

書生才能に誇る者あれば、即ちこれを誡めていふ。吾子四書六經を精啓せりや、弘く世史通鑒を覽たりや、諸子九流を究めたりや、博く百家文章に涉れりや、普ねく日域の事に通ぜりや。その千萬の一端を暗記せんとするも亦難事に屬す。萬卷の中、一事知らざるを以て恥となすに至ては難中の難に屬す。吾に宜しく奮勵すべし。

また書生放懶、業を廢する者あれば則ちこれを戒めていふ。中道にして廢するは夫子の責むる所也。自暴自棄は孟子の歎ずる所也。懶は戒めざる可ら

ず。心は放つ可らず。倦は之を勤に移すべし。業修めざる可らず。かつ又余の少壯なりしとき、世上書史尤も罕なりき。之を僦ひ、之を謄す、辛苦估畢に。方今は黃菴赤軸固より得難からず。而して每歲新書の長崎に到るもの汗牛充棟なり。而して漫散空閑にして烏兎を斷送す、また悲しからずや

第十七節 玆に弘文館學則の大要を擧げん。弘文館は五科十等の制を設く。これを表にして示せば左の如し。

○五科　十等

五科	十等	
經科 讀書科 倭學科	甲等 乙等 丙等	上等(特生)
	丁等 戊等 己等	中等(萠生)

文科

詩科

庚等
辛等
壬等
癸等
初等（末生）
等外

（辛等・壬等・癸等）下等

學校の狀況を記さんに、生徒の總數は一六七三（延寶元年）鵞峯の塾生序齒記によれば、三十八人にして、その年齢は特生の中、四十七歳四十四歳の者各一人あり、萠生の中、三十四歳に達する者あり、最も若き者は末生に十六歳小童に十四歳あり　この年齢總數八百六十七歳にして、生徒平均年齢廿二歳餘なり。　右は弘文館が一六三〇（寛永七年）創立以後四十三年の狀況なり。

生徒の成績は、之を壁上に貼して、その座次を定む、生徒は一科以上兼修するを以て各科に於ける成績固より同じからず、或は一に特生にして他に萠生なるが如き是なり。　弘文館創立以來の成績によるに、能く丙等以上に登れる者無し。　高安生

といへる者、年四十七。本朝通鑑の編纂に從事し、倭學に精しきを以て、丙等に上り、特生の名を蒙る。讀書科に於ても、なほ葡生たり。これを第一等の成蹟とす。概して學術優等なる者も多くは葡生たるに留まるを以て、特生に上る者は極めて稀也。開塾以來四十餘年間、讀書詩文に於ては上等に上る者あれども、倭學を以て進みし者極めて稀にして經科に至ては、中等に列せし者だも無し。その理由は、本朝通鑑成り、史館事畢るの後ちは、倭學科は其練熟を見るの好機無し。(一人本朝通鑑編纂に從事すること七年。塾主に親炙すること廿年にして葡生たり)。經學の如きは、諸生志無きにあらずと雖も、その中、或は粗ぼ文義を知り、或は頗る講說に長じ、或は工夫を運らし、或は微蘊を窺ふ者ありと雖も、未だ一經を請んぜず、未だ精力を盡さゞる者容易に等を進め難し。故に下等に置き、その分を料り、等差を附して以て他日の成熟を待つ。讀書詩文に至ては、佳不佳、了然として、前後年齡に關せざるなりと云ふにあり。

第十八節 幕初の諸侯、學を好みし者は、德川義直、池田光政、保科正之、德川光圀の如き、その首たるものにして、儒者を聘し、學を起し、敎化の闡揚に與つて、功少からず

とす。義直に關することは既に述べたれば、他の三諸侯に就きて、その功績を略說せざる可らず。

池田光政は則ち新太郎少將なり。熊澤蕃山を採用して、政化大に行はる。自らも學を講じて、毎歲旦忠孝の軸を掛け孝經を讀み、かつ多く領地に學校を設けて、人民を敎化し、その一たる閑谷學校は猶ほ現存せり。村婦の歌謠にも、孝經の語を用ひ、當時の人、その狀況を詠じて、漁家兒女亦知字、笑將孝經敎老翁といへりしよし先哲叢談に見えたり。敎育の領內に普及せしこと知るべし。

藤井懶齋撰近世孝子傳に取るところの孝子凡て十三人にして、備前の人六人なり。西鶴の本朝二十不孝に、備前に敎化行はれたるさまを述べていふ。其頃備前は心學（王陽明學）盛んにして、人の心も率直になり、主人に忠ある人、親に孝ある者は御惠深く、自然その道に入りて、國の治まる此時なれば、二人の才覺出して、足腰の立たざる野臥の非人を語らひ、甚七は片輪車を作りて、七十に餘る老人を乘せて、町筋に出づるより淚ぐみ、國を申せば安藝國、年を申さば廿三、いかなる因果の報ひにや、一人の親を養ひ兼ね、面をさらし勸進す、何も御慈悲

は御座らぬにと、聲悲しくまことがましく歎きしに、人施して錢米少時の内に山なして、後ちは車に積み剩りぬ。源七も年老ゐたる者を負ひて歩きしに、人皆な志を感じて情を懸けられければ、野末に篠末を圍ひ、朽木のあるに任せて拾集め、棟を並べて庵の形を造り……

光政人となり豪氣英邁なり。その學を起すの初め、幕府有司之を嫌忌し、公自ら學を爲すは可也、下をして學をなさしむること勿れと言ひしが、聽かず。異教を排して儒道を崇び、僧侶も還俗して儒に歸する者も多くなりしかば、幕府に告げて祠官をして宗門改を掌らしむることゝし、又た淫祠萬餘區を毀ちて正祠七十餘社となせる如き果斷大度の所業と云ふべし。平生刻苦學を修め、また武を習ふ。故に時人云ふ、光政をして戰國に生れしめば、必らずや堅を破り鋭を摧きて功名を竹帛に垂れしならんと。是ある哉。この勇決の氣象無くんば、新教育を興し、舊社會を刷新するの快事業は、行はる可らざるなり。

芳烈祠堂記、載するところの一話、光政の態度を見るに足るもののあるを以てこゝに抄録す。

又設學舍於閭里爲置師以使民子弟讀書習字　又廣敷風教旌孝子賞善人而記之國籍矣　或者告公曰　民爲孝弟者、心或不實。然而有利其賞而爲者　宜檢察以勿爲之所欺焉　公曰、孝弟是善道也。雖或詐爲而豈不優於爲惡者乎。我不暇察其眞僞也。聞者感服而稱其君子之大度矣　於是善澤潤民而孝弟慈祥之行、戸々興風愼終、追遠之禮、家々成俗。

光政寛永九年(一六三二)因伯より備前に轉封せし後ち十年、(一六四一)を以て、始めて學校を舊領主松平忠雄の別邸に建て花畠教場といふ。備前上道郡花畠にあり、後ち岡山城中に移す。教則學科今徵すべきもの無し。唯當時教場に掲げし花園會約一篇あり。或は傳ふ、この文、熊澤蕃山の草する所なりと。左に、その要領を摘ぎて、當時教育思想を窺はんとす。

花園會約　(摘要)

一、古人ノ善ヲ爲ス、日ヲ不足トスルモノハ何事ゾヤ。良知ノ人心ニアル、其職ニ居テ、其職ニ任セザルハ皆不快故也、此ニ我輩、弓馬ノ家ニ生レテ、武士ノ名ヲ得ル人ナレバ、武士ノ德ニ昧ク、武士ノ業ヲ勤メザルハ、自ラ良知ニ恥ル所ナ

リ。夫武士ハ民ヲ育ム守護ナレバ、守護ノ德ナクテハ、不可叶。其德ノ心ニアルヲ仁義ト云。天下ノ事業ニアラハル丶ヲ文武ト云フ。故ニ明ニシテ慈愛アルハ文德ナリ。明ニシテ勇强ナルハ武德也。良知明ナレハ此德素トヨリ我ニ備ハレリ。是故ニ今諸子ノ會約、致良知ヲ以テ宗トス。(中略)夫文武ニ德有藝有リ。德ハ猶ホ苗ノ生意ノ如ク、藝ハ猶ホ耕耘ノ如シ。文武ヲ以テ耕耘ノ事トシテ、心ノ生理ヲ生長養育シ、敎學相長シ、偕ニ聖菓ヲ結バン事、何ノ幸カ如之哉。

一、每日清旦ニ盥漱シ、衣服ヲ整テ聖經賢傳ヲ熟讀スベシ云々。

一、食後ニハ射ヲ學ブベシ。時過テ後、鎗太刀ヲ習フベシ……武藝ハ治平ノ具、戈ヲ止ムノ義ナレバ、相和シ、相輔ケテ、敢テ爭心殺氣ヲ挾ム事勿レ。

一、書數ハ文武ノ藝術ニ於テ、其便少カラズ。時ヲ以テ之ヲ習フベシ。

一、禮樂ハ六藝ノ尤モ重キモノ也。禮ハ心ノ敬ヲ顯ハシ、樂ハ心ノ和ヲノベタリ、禮樂ヲ學バント欲スル人ハ、先ヅ此心ヲ存養スベシ……

一、禮用軍用ヲ缺ク可ラズ……世俗其耻ニアラザルヲ耻デテ耻心亡。能ク

顧省シテ迷ヲ辨フベシ。

一、朋友ノ交リ、人我敬讓有テ相和睦シ……爭心浮氣ヲ以テ交ルハ、下流ノ凡俗也。……色慾ノ雜談ハ堅ク禁之。況ンヤ淫行ヲヤ。風ハ必ズ心ニ由テ見ハレ、言ハ心ノ聲ナレバ、其耻ヲ知ルベシ。

一、朋友ノ交、一躰ノ心ヲ存シ……物我ノ私意ニ蔽ハレ、便利ニヒカルヽコト勿レ。若物我ノ念發スルトキハ、一躰ノ良知ヲ昧マシ、同胞ノ親愛ヲ亡ス魔障也ト、深ク提撕警覺スベシ。

一、朋友ノ交、過ヲ規シ、善ヲ勸ムルヲ以テ眞實ノ親トス。……夫レ良知ノ愛敬ハ萬物ヲ以テ、一躰トス、我手足ヲ破ラルヽトキハ、是ヲ治ル心、必平癒ニ至ラザレバ不止。人ノ心病ヲ療スル忠告シテ善ク導クノ意案ヲ運ラスベシ。過テ聞ク人モ良藥口ニ苦キヲ厭ハズシテ、病ニ利アルコトヲ樂ムベシ。過ヲ規人ニ向テ、蓋藏シテ、外ニ愼ムハ、例ヘバ病者ノ醫師ニ逢フテ、其病症ヲカクスガ如シ、心事光明ニシテ內外無ク自ラ心ニ耻ヂテ念上ニ格去スベシ。

備前の學政は蕃山の指導による。蕃山は中江藤樹の門下にして、陽明學を奉ず

る者なり。蕃山去りて、備前は純乎たる朱學に歸す。

保科正之は家康の孫にして、會津に封ぜらる。家綱を輔けて令名あり。晩年山崎闇齋を聘して、朱子學を修む。力めて士民をして、剛直の風を維持せしめんとし、その領地の法を立てしとき、老臣の私鬪を禁ずるを以て首とせしを見て、武士は耻を知るを以て先とす、辱しめられて死する能はざるは武士にあらずとて、之を斥けしことさへあり。闇齋は幕初の一大家にして、實學を主とし、大に朱子學に功あり。ことに教育未開の代に當りて、師道を嚴持し、卓勵の風操あれどもその學風の弊や流れて偏狹となる。正之と闇齋と相得て、質直剛朴の風を皷吹す。徂徠が評して會津の人は、勇にして戇と謂へるもの、昔時會津の地の僻陬なりしにも、依るべしといへども、教育の功果も亦蓋し尠からざるべし。

會府世稿　正之儀者、幼年より文學を好み、書籍を讀み候を好み、記憶も强く有之、成長已後、平生諸書を歷覽仕候處、四十歲に罷成候時、朱子小學之書を讀候而學志統一に成り、儒教を致崇信、以前讀候處之老子佛書等を悉捨て、工夫を綿密に用、專ら政事之助を大事に仕候。晩年に玉講附錄、二程治教錄、三子傳心錄之

水戸光圀

國体論の興起

三部を編纂致し、自明を顯し候云々。

京都に起りし文藝復活が、江戸を超えて水戸に入り、こゝに水戸學風を開けり。水戸學風の開祖たるは光圀なり。光圀は弘文館編纂の本朝通鑑が、我皇統を以て呉の泰伯の後となせるを見て憤慨し、彰考館を開きて、大日本史を修め、吾國躰の萬國に比類無き所以を明らかにし、併せて禮儀類典、扶桑拾葉集を編纂して、吾が國風を闡揚せり。光圀は國學を本とし、漢學を以て、これをたすけ補ひて、以て吾皇國の道を發揮せんことを期せり。吾近世教育史上、國民精神の自覺を促がしたる者は、實に光圀なりき。これより先き、鎌倉時代にありて、僧侶のうちに、早く既に國體論を爲せる者あり。愚管抄には、日本國の習は、國王種姓の人ならぬすじを國王には、すまじと神の代より定めたる國なりと辨じたるが、その詳明快截なるは、釋師錬の元亨釋書にあり。師錬は僧一寧に就きて、儒佛を學び、兼ねて國史に通ず。その說、佛說によりて附會すと雖も、本邦に始めて見たる詳明なる國體論なり。元亨釋書曰。論曰、或言、子謂此土爲大乘之國、且從之而又言閻浮界至治域、恐亦有黨乎。余曰、韙乎子之問乎、是余之公言之秋也……夫物之於自然也、天下皆貴之、其造作也末

重之矣。吾讀國史邦家之基、根於自然也。支那之諸國、未嘗有矣。所以是稱吾國也、非其所證自然者三神器也……彼支那號大邦者、雖土地廣遠而受命之符、皆人工也、非天造也。我國雖小、開基之神也、傳器之靈也、不可同日而語矣……我國一種系系綿綿無窮者、天造自然之器之所致乎。因是而言、雖千萬世後、不有擾奪之虞矣。豈其天造神器者、佗氏異冑之所玩弄乎……夫有國以來、不嬰蠻夷之攘奪者、未有如吾國之純全矣。余聞大藏委耆域徑曰、摩竭陀國頻婆娑羅王、承制遠夷而遣耆域、故有八千里疾象之事。如來在世尚如斯、況滅後乎……夫貢子女方物臣妾之職也。中國異蠻夷者、有父子男女之別也。婉冶之容、毀節異類垢辱甚矣。漢之君臣、莫之耻也。……我見竺支之事、如我國之渾厚者、未有之矣。是區域之靈勝、祖宗之聖武、而吾亦佛乘之資輔也。我言至治之域者、其不然乎と。教育の暗世に、國體論の開けゆけるは、快心事と謂ふべし。北畠親房卿は神皇正統記を著はして、詳かに國體の尊嚴を辨ぜるは、世の知るところ、而して其先驅を爲せるは、師錬の元亨釋書なり、而して、この國民精神を具體的に教育の上に發現せしめたるは、則ち光圀なりき。かくの如く、光圀は、國史を修め、國學を興し、國民をして、自箇の位置を自覺せしめ、千載の氣運に關

するところ頗る大なり。

水戸の彰考館は、今仙波湖畔、常盤祠下に、その遺趾を存し、大日本史の殘務を處理しつゝあり。その書庫の中に存せる學校及び聖堂の摸型は、教育史上、尊重すべき遺寶にして、明の遺臣舜水朱氏の手製せしところ也。舜水は明室の疎族にして、國滅するに及び、海を蹈みて本邦に流寓す。光圀その高義を嘉尚し、これを重聘して、教學の事をば諮問せり。嗚呼忠臣楠氏碑陰に誌するものは舜水。その文を讀み、その行事を考ふるに、舜水も亦卓たる一學者なる哉。

松林飯山は舜を以て避亂之一民に過ぎずとなす。その論にいふ。有盜入室、殺其主、而奪其財矣。其僕走隣而乞救。隣人弗救也。遂留而不還。曰、吾待救出。孰有不笑之者。不若還而與盜鬪也。不敵而死、因其分矣。明之亡、其臣朱之瑜來投乎我。欲乞我兵以恢復其國。而我兵不出、身遂客死。世皆以爲申包胥之倫。吾則曰、特避亂之一民耳。

舜水日本に來りしとき、數多の書籍と釋菜の具とを齎らし來る。それ等のもの、彰考館に現存せり。舜水は手藝に巧みにして、その學校及び聖堂の模型をば、光圀

の命により製造せしとき、自ら手を下せしところ尠からずといふ。舜水の肖像も亦、館內に存せり。溫乎たる學者の風采なり。光圀は舜水の設計によりて、完備せる一大學校を造くるの企圖ありしも、遂に果さゞりき。大日本史編纂は、學界空前の大事業にして、頗る鉅費を要したる上に、水戸はさまで富裕ならざりしかば、この上に學校建設までの餘力は無かりしならん。かくて、これ等の模型は、久しく世に埋まれしが、後年寬政のとき、昌平阪學問所改修のことありしに、この模型を借りて參考とせり。現存の東京高等師範學校內の大成殿は則ち舜水手製の模型によれるものなり。

光圀の事蹟は、桃源遺事、年山紀聞を好しとす。舜水の聖堂模型圖は、安積澹泊撰の舜水朱氏談綺に載せたり。

出版の發達

第十九節　近世文藝復活の一要件は出版の發達なり。家康が出版に盡くしたることは既に、述べたるが。これより先き後陽成天皇、深く敎學に御志ありて、慶長二年(一五九七)を以て、勅して錦繡段を印刷し、その四年には日本紀神代卷を印刷せしめ玉へり。世に之を慶長勅版と云ふ。天皇の此擧實に德川氏に模範を示せる

ものなりき。これ等の書籍は、皆な木版活字なりしが、元和元年一六一五、家康は銅版活字を以て大藏一覽を印刷し、翌年又た群書治要を印刷せり。銅版活字こゝに始まる。後水尾天皇も元和七年一六二一に、銅版を以て、皇宋事實類苑を印刷せしめ玉へり。上下東西、出版に盡くせること此の如し。この頃には、書籍極めて欠乏して、讀書せんとする者は多く謄寫に依らざる可らざりき。那波魯堂の學問源流に、その狀態を述べていはく、「その此書殊に乏しく、且つ皆華本にて和版は無きといふ程の事なり。稀にあるは、只足利本の遺りたるのみなり。然して足利本といふは、足利氏日本より紙を遣はして中華の版を摺りたるものにて、その實、和の版に非ず。又皆な今の新注にあらず。十三經の本注のみにて疏無し。適〻疏あれども多く活字を彫りて板本とす。即ち今の植字なり。因て皆訓譯の附墨無し。學問せんとする人は大抵謄寫して蓄ふる多し。然らざれば華本なり。その餘は活版のみ。惺窩より羅山へ贈られし書牘の一條に、我年來文章軌範を得たく思へども、此願遂げざりしに、此頃角倉氏の所に、此書を買得たるを聞き即借て寫し置けり。是よりは自由なるまゝ、望に任せ寫さるべしとあり。然れども惺窩、羅山其他の人

も好む心の厚きにより、資斧を惜まず、書を多く蓄へ藏めたり。その比の書は、大率經史語錄文集多く、學者もまた、これを貴重し、秦漢魏晉の子書の類編門部類考索の書、隨筆雜著の諸抄は、今を以てこれを視れば實に乏しと謂ふべし。板は明板にして、稀には宋元の版も雜れり。今ま淸より來る如き、往々に袖珍の形なるは絕えて少し。和版は十に八九は活版なり。又一種朝鮮本あり。昔し三韓より書を傳へ來れることありと雖も、それは唯其書一篇にして、今華船の載せ來るが如く、一書を五部も十部も送ることとは前後に無し。今にも傳はれるは、多く天正年中に和人の携へ歸り、或はその後ち信使の持ち來れるなり。元和の比、羅山の蓄へられし書數千卷悉く災にかゝり云々　吾先族活所(道圓)も藏書を嗜みけるが、家語、玉注、楚辭朱注、苑祖禹の唐鑑、王應麟の困學紀聞、建仁寺の傳抄喜の東海一漚集、その餘、棠陰比事の類皆な自筆にして、羅浮子(道春)の本を借りて校合すとあり。一漚集の外は、皆な點を付けたるなり。……右は那波道圓の後裔、魯堂の記するところ、幕初書籍乏しき有樣を窺ふに足るべし。幕末に至りてすら、能き書籍は誠に少なく、通常學者は謄寫を力めたるにて、故栗田寬博士の如きも、反故の裏に寫本したるよし語られき。

溯りて幕初學者の困難想見すべきにあらずや。家康より後ち出版續きて、書籍漸く多く寛永正保の頃に至りては、故書を賣買すること起り、また長崎に舶來する支那本も多くなりぬ。その頃、出版に盡力したる儒者は鵜飼石齋にして、有用の書を飜刻するを急務としかつ許多の書に訓點を附して出版せり。金平點即ちこれ也。その後ち出版漸く進みて、延寶年中(延寶元、一六七三)に至りては、僧鐵眼は大藏經を飜刻せり。宇治黃檗山に藏する六萬枚の一切經板は則ち是なり。

久保田米僊曰く、黃檗は經箋に用ふるものにして、黃檗の液汁を箋に梳き入れ以て紙虫の害を防ぐ。古語に經卷を黃文と稱するは此謂なり　黃檗山萬福寺は、一面地名によりて附せられたれども、又た一面には經劵の意味を含むが如し。これを中れりとすれば、鐵眼和尚の大經營は、全く其の寺稱より憤起したるに非る無きか。(國民新聞)

黃檗山の一切經板は、勇猛なる意思の標章なり。鐵眼二度淨財を募りて、延寶の大饑饉に之を喜捨し遂に三度淨財を募りて、一切經板を成就せり。その後ち元祿四年(一六九一)法嗣松雲をして、獨腕にて釋迦牟尼佛を始め、五百羅漢を

刻ましめ、八年の星霜を閲して成就せり。鐵眼師弟の事績實に强志力行の模範といふべし。

本邦に於ける書籍の數は歴史上、詳に知ることを得ず、宇多天皇の寛平年中（寛平元年、一八八九）藤原佐世撰の日本現在書目錄には千五百七十九部、一萬六千七百九十卷を載す。降りて後花園天皇の永享十一年清原業忠撰の本朝書籍目錄に載するところ、凡そ五千八十七卷。その外、卷數を記さゞるもの七十八部あり。文藝復活の世となりて、舶來の書籍も多くなりて、頓に書籍の數を增加したるや知るべし。この時代に現はれたる最初の書籍解題は、道春の經典題說なるが、假名交り文にて、簡單に四書五經を解說したるに過ぎず。書籍學に就きては、別に記すべきほどの事無し。

この時代には上下ともに、出板に急にして法律上の束縛も少かりしかば、年々書籍增加して、後ちには節用集、庭訓往來の如き、日用必須の書も數多世に出でたるが、活版にては、振假名の便法も未だ發見せられざりしかば、何時の間にか、活版滅じて遂に跡を出版界に絕ち（木版のみの世となりたり。

文會雜記一、通雅は其前甚だ希にて、金三十兩許の價なり。某の所藏を春台(太宰)も借り讀みて處々抄出せり。寫本世に出で、大に價を減ぜり。孔子家語を刊る時分、八十兩入りたるとなり。柴芝園(春台文集)刊するに、金百兩入用なり。永羽卿三十兩ばかり庄内よりよこす筈なりしに、物故せられて半分許り來れりと。柴芝園は五百張ばかり廿卷ありとなん。

活版は東洋にて、發明すでに舊く、宋の慶暦中(慶暦元年一〇四一)布衣畢昇始めて膠泥を燒きて作る、毘陵人の活版は鉛製なりといふ。これ等は活版の權輿なり。永樂十一年(一四一三)朝鮮の恭定王(李芳遠)その臣、李藏に命じ、銅を以て活字を作くる。朝鮮人自ら謂ふ、銅活版は朝鮮に始まると。また或は傳ふ、朝鮮に於ける活字の發明は、西洋のに先だつこと百餘年なりと。また近ごろ傳ふるところに據れば、朝鮮に於ける活字の發明が西洋より早きことを證する好事例を發見せり。慶尚道陝川に古寺あり、海印寺といふ。新羅より典籍を日本に貢せしころより、十一棟の書庫を有せしが、此に保存せる書籍は木活版を以て、せるものにして、漆を以て、腐敗を防げり。同寺僧の說に據れば朝鮮より日本に朝貢せし古經は、これと同活字

にて印刷したるものなりといふ。東洋に於ける活字の發明及び使用は此の如き舊き歴史を有し、かつ本邦に輸入したるも室町時代の始めごろにあるべしとの說あり。本邦にては、活字版は古くは植字版又は一字版と稱す。後柏原天皇文龜年中(文龜元年一五〇一)の活版眞字節用集あり。これ本邦にては活版書の最古のものゝ一とすべし。その後、五山の僧徒、活版を藏物として、天文慶長の間に傳ふ。直江山城守の文選も活字にて、足利學校に藏せる古き六行活版の論語あり。ともに同時のものなるべきが、以上何れも木活字なるべし。銅活字の輸入は朝鮮役の結果にして、加藤清正將來せし銅活版にて群書治要を印刷したることあり。慶長二年勅版の錦繡版は、則ち朝鮮の法に摸造したる活版なりといふ。かくの如く、東方にては早く開けたる活版術が、ことに文藝復活に與りて大功ありながら文藝復活の成就すると共に、消滅に歸したるは、頗る奇怪の現象にして、近世文運の進歩を害せしこと莫大なりと謂はざる可らず。惜みても餘あることと也。

玆に參考として、支那本國に於ける書籍の數を尋ぬべし。淸朝に至りては、書籍頗る多く、四庫全書提要あればまた論述するを要せず。明朝以前に於ける

書籍の數は如何。通雅に、其大數を記せり。

西漢三萬三千九十卷。見劉歆七略總目。舊唐書九十作九百、非。據班志所省、十家又增入五六家。東漢萬三千二百六十九卷。見班藝文志原註。本七畧增入劉向楊雄等三家。然尙有杜林並蹴鞠二三家、省伊尹墨子兵類十家。光武遷都書籍二千餘兩。諸家以爲三倍于前、固非實錄。而時少纂輯、范史無志惜哉。晉二萬九千九百四十五卷、載荀最四部目。見隋志序。東晉三千十四卷。李充校定孝武增益三萬餘卷。徐廣校見崇文目序。劉宋四千五百八十二卷、謝靈運校。此據舊唐書。隋志以爲六萬。齊萬五千七十四卷。王儉校永明增益萬八千一卷。謝朏王亮修。梁二萬三千百六卷。任昉部集文裕云。梁武帝時、公私七萬餘。梁晉通增集三萬餘卷。見阮孝緒七目錄。隋志萬五千見牛弘表。大業中三萬七千。柳䛒校。總嘉則殿書三十七萬卷。正本止此。隋志作正本八萬九千。陸文裕以爲七萬七千餘。唐開元中八萬二千三百八十四卷。見新唐書序。開成中五萬六千四百餘。舊唐志敘載。宋慶曆中三萬六百六十九。見崇文總目。太平初、正副止八萬。淳熙中四萬四千八十六。陳騤四

古文學の復興

庫目藏。考諸史藝文志。往々與當時書目相左。或所記之異也。洪容齋謂。御覽引用一千六百九十種。與姚鉉所類多不至有。而中興乃多於崇文、蓋增新籍也。桓譚新論言漢梁子初楊子林手錄萬卷、梁任昉四萬、唐蘇弁二萬、李泌三萬、皆存總目。而阮孝緒之四萬類例足徵。宋世家藏各目、倶不見。惟尤延之遂初堂目今傳若晁郛節本則寥々矣。李淑二萬三千三百八十、田鎬三萬、晁陳二目最善見馬氏書。晁氏二萬四千五百、南陽井度傳錄蜀中書甚富。擧以與公武遂作讀書志。周密謂、陳直齋官中、得五姓之書、乃能至五萬一千八十卷。又言前氏杜乘萬卷、章述二萬卷、吳競西齋萬三千四百。周密家亦有四萬。濮安懿王之子、宗綽蓄書七萬卷。南都王仲四萬三千餘。曾南豐及李氏山房、亦一二萬。葉少蘊之十萬複也。近來藏書家、大約不過五萬上下。今時刊本多。但有其資亦易集也。因撮其數於此、令後人一覽而興懷焉。

第二十節　文藝復活の第一著歩は古文學の復興なり。これ東西同一現象なり。その理由は、學術地に落ちたれば、現在及び將來に企圖すべき標準を得ず。於此乎回顧して、すでに一たび發達したりし古文學に著眼せざるを得ざるにあり。或は

これを以て、前進せんとする者は、必らず先づ後顧すとの說明を附せる者あれども論悉さゞるに似たり。

草より出で草に入る、武藏野の月は、今や甍より出で甍に入る、大江戶の代とはなれりしに、文運復活の機運は、古史古語の研究を呼び起して、花のお江戶をして古るき大御代にかへらしめ、古語の研究益進むに隨ひ、石馬石鏃の大昔を回憶せしむるに至れり。古典の研鑽は、又た文法の觀念を涵養し、遂に近世國民文學の發達を促すに至れり。德川光圀契沖阿闍梨の徒、出でゝ古典研究の端を開きてより、新井白石に至りて、國語學の研究漸く起れり。物徂徠が漢學の方面に於て、古文辭研究を以て、讀經の基礎としたる如きも、亦實にこの機運を代表する者に外ならず。それ古代の研究進みて、數百年或は千年の昔に、學術の發達或は國民の宣揚ありしことを知るときは、自らその國史國語を尊重するの念起ると共に、國民自らその系統と能力とを自覺し、進んで將來に光明を認めむとするに至るなり。かくの如くして、古文學の復興と共に國民精神は興起せり。

儒者即ち教育家

第二十一節　文藝復活と共に儒者輩出し、近世社會組織の一要素となれり。儒

者は則ち教育家なりき。儒者には武士よりする者あり。農商より出身するものあり。僧侶より還俗する者もあり。武士よりせるを最も多しとす。儒者の中には、仕官するものと、浪人するものとの二ありしが、要するに、教學のことを擔當せり。こゝに於て戰國時代に至るまで、本邦の教學を擔當したる縉紳及び僧徒は教育の壇場を儒者にゆづりて退けり。

儒士（和漢三才圖會）儒學者之稱。禮記儒行篇注曰儒之言優也、和也、言能安人、能服人也。疏云儒者濡也、以先王之道能濡其身。或以遜讓爲儒或以剛猛爲儒。其與人交接、常能優柔、故名儒。

舌耕（和漢三才圖會）漢賈逵通經門徒來學。献粟盈倉。是非力耕乃舌耕也。故今以學問足食、曰舌耕。

近世儒者を以て自ら任ずる者は惺窩先生に始まる。惺窩は文王を待たずして、自ら崛起せる者なり。從前の學問は、皆な師授を肝要としたるに、惺窩は、これ無かりしかば、時人、無師無傳を以て惺窩を毀りしよし惺窩先生行狀に見えたるが、彼れ志操高邁、儒風を發揚するを以て、その任とせり。蓋し儒者の名目は、王朝のときよ

りすでに行はれたれども、王朝の儒者たるは、紀傳明經の師たるに過ぎず。惺窩に至りては、身聖人の道を行ひ、聖人の道を講ずるを以て、自ら任ずるものにして、これより繼ぎて起る者、此の如きを以て儒者の眞面目なりとせり。これ則ち中世以前の儒者と近世の儒者と、その解釋を異にするところにして、近世の儒者は、殆んど教育界の全部を占斷せるものなり。幼學問答に、學文ノ師ハ、書籍ヲ讀習ハセ、口釋ヲシ、聖人ノ道ヲ口ニ言フノミナラズ其身の身持行儀正シクシテ、弟子ニ見習ハセ、弟子ノ惡キ事ヲバ叱カリ、諫言ヲ加ヘテ、弟子ノ善キ人柄ニ成リ候樣ニ弟子ヲ取立候事師ノ役ニテ、眞ノ儒者ニテ候と云へるは、近世儒者に對する妥當なる見解なりと謂ふべし。

支那に所謂聖人の道といふは、人倫を正くし、國家を經營するにあり。儒學は倫理及び政治の學たるなり。故に儒者が天下國家を經濟するを以て、その任とするに至るは自然の結果たり。されば廣き意味にて言へば士は皆儒たるなり。この時代の學風にて、水戸學派は、この見地を持せり。寛文三年（一六六三）幕府にて、法度につき評議あり。乘輿御免の内、醫陰兩道を儒醫兩道と改め度しと林鵞峰の發議

したりけるに、水戸光圀は、我輩の如きも儒者なり、何んぞ醫と並べて兩道といふべき、若し儒醫兩道とあらば、末代の嘲たるべしとて、これを論破したる如き是なり。

學校六事　定官制三

水戸義公嘗曰、儒者學人道者也。而可以爲一家之業哉。故以平士爲講官、或以儒者任政事。肥後靈感公（細川重賢）又嘗改之。今諸士之長於學問者、增俸而爲儒官。儒官之子無學者、減俸而爲平士。儒官亦遷武職。武職亦任儒官。其他米澤秋月等之制皆如此。

この時代に於ける熊澤蕃山、野中兼山の如きは、則ち儒者の巨擘とすべき者也。概して、これを言へば、儒學に從事せし者は、おほむね教育家たりし也。

第二十二節　儒風の弊は、早く已に幕初よりして見はれたり。通儒といはるゝ者あり。光圀の如き、蕃山、兼山、素行の如き是なり。これ等は大躰に通曉し、常識の發達せる者也。その餘、儒者文に流れて、或は實用に適せず。經學家、文人、才子等の目あり。經學家は徒らに經典の讀むべきを知りて、これを日用に施すことを知らざる者、所謂論語讀みの論語知らず是也。文人、才子に至りては、專ら詞藻に從事し、

風流を貴び、空しく風塵に生を送りて、修養の機を求めず、或は浮薄となり、或は放蕩となり、或は迂濶となる。所謂學者の不行狀則ち是也。これ等の目は、江戸時代を通じて、數々世人の嘲笑を買へり。

儒者に通じての弊は文弱と支那崇拜との二點なり、文弱は江戸時代を通じて、儒者に尤も多かりし弊風なりき。孟子の所謂志士溝壑に在るを忘れざるの慨ある者則ち少なし。石川文山は平居斑竹節大如意を把り。嘗て腰間無寸鐵背裏揮三軍といひ、林鵞峯が、その九十を賀する序に、夫利刀傍枕、弓銃在側。則雖在山林未忘士林之素といへる如き、活儒の風采を想ふべし。幕末に鹽谷宕陰も不顧死入儒林傳、輕甲一聯藏在家といへる、皆な以て儒者の文弱を排するものなり。

支那崇拜は護國の特占にあらず、殆んどこれ儒者の通弊なりき。而して、その先を爲せし者は則ち林氏なり。道春すでに支那に生れざりしを悔ひ、その子、鵞峯は酒井忠勝よりして、日本の儒官は日本の事、第一可知也とて、たしなめられき。本朝通鑑に、吾皇室は呉泰伯の後ちなりとせるは、則ち林氏にあらずや。彼等は儒書を廣みながら、自尊の意を解せざりき。文會雜記に、日本ニテハ百王一姓、トカク日本

ノ外ノ國ヲハ夷狄ト立ツベキゴトナリ。コレ春秋ノ意モチ也、學者ノコレニ氣ノ附カヌハ大ニ無念ナルコト也と云へるは快文字なり。滔々たる儒者多くは、支那カラなりき。蘐園一派の如き、特にその流弊の窮極せるところを示せるに過ぎざるなり。

儒者の位置

第二十三節　十七世紀の終より十八世紀の始めに至りて儒者の位置は確立せり。それより以前は林氏すらも、その待遇は醫に準じたり。

幕初林氏の職掌は、將軍の經筵に侍し及び幕府の諮詢に供はるにあり。

羅山文集(附錄二、年譜)　寛永元年甲子四月十一日、執事酒井忠世、土井利勝奉旨。使先生奉仕大猷院殿幕下。十三日拜謁幕下。自此日々奉侍焉。或講論語、或讀貞觀政要、或談倭漢故事。或接執政之諮詢、或赴棠陰之廳。永喜奉仕台德院殿之事、亦與先生相同。

寛永六年(一六二九)道春其弟永喜と共に、多年侍讀の功によりて、法印に叙せらる、これ醫官の例に據れるなり。その後、鵞峯弘文院學士の號を賜はりしも、なほ未だ學官に叙せられざるを以て遺憾とせり。

鵞峯文集七十八哀悼
先考以學術起自布衣、日夜侍御前。台命無違、不得已以薙髮從國俗。勤仕二十餘年。與東舟備直叙法印位。法印者非儒家官位。然自二百餘年以前醫師無髮者、仕官得譽者。或法印、或法眼、法橋逐次叙之。台命之及先考東舟者、亦是例也。公議以爲恩榮而叙之。則不得辭焉云々。

元和の式目には、乘輿御免の條に醫陰兩道の目ありて、儒者を含みしが、寛文年中には、これを儒醫兩道と改めんとの議ありしも、行はれず。天和に至りて儒を加へ、正德に至りて、新井白石の案によりて、これを除き、享保に又た儒の字あり、天保に再び之を删りて醫師出家と改めたり。僅かに一字の增減なれども、儒者の待遇の變遷を見るべし。

明良供範四、元和ノ式目ヲ定メラレシ𪜈、御家門方へ、一通リ御見セ有テ、各存寄モ有バ仰上ラルベシトノ御沙汰ナリシ時、義直卿十六歲ナリシガ、式目ノ中、乘物御免ノ條ニ儒醫ノ兩道ト有ヲ難ジ給ヒテ、當世武家ニ召仕ハルヽ儒生ハ皆法躰ニテ儒者トハ申難シ、陰陽師ノ類ニ均シケレバ醫陰ト致候テハ如何ニ

ヤト宣ヘバ、御尤ノ事ニ思召サレ、其通リ書改メサセラレタリ。

寛文三年春齋ノ記ニ、乘輿御免ノ内、醫陰兩道ヲ儒醫兩道ト改度ト春齋(鵞峯)發談シケレバ……豐後ハ殿中出入ノ儒士ハ既ニ乘輿ス、諸家中町中讀書ノ者、大半醫ヲ兼子タレバ、儒者ト評サン者ハ稀ナルベシ……肥後書ヲ講ズル程ノ者ハ、乘輿御免苦シカルマジク申サル。春齋申候ハ五十以上ハ無能無才ニテモ乘輿御免アリ。當時陰陽師乘輿ノ者、京都ノ外他所ニハ不可有。武家法度ノ條數ニ、陰陽師ナクテモ妨無ク、儒ノ字加ヘラレナバ、志學ノ者ノ勵ニモナルベシト申ス……水戸參議云(前出)肥後守、春齋ヲ顧ミテ儒ヲ尊敬シテ醫ト並ベラレズ殘念タル可ラズト莞爾ス。

この時代に於ては浪人儒者は、儒のみにては、生計を立つるに足らざるを以て、大抵醫を兼ねたり。故に或は儒醫といふ。漢書を讀むは、則ち醫たらんが爲めにして、儒たらん爲めに非ずとは當時漢學生の狀態なりき。古學先生文集(伊藤仁齋)に曰く。今之俗皆知貴醫、而不知貴儒。其知爲學者亦皆爲醫之計而已。吾嘗十五六歲時好學。始有志于古先聖賢之道。然而親戚朋友以儒之不售、皆曰、爲醫利矣。然

吾耳若不聞而不應。諫之者不止。攻之者不已。至於視老家貧年長計遂而引養撫禮、益責其不顧養。理屈詞窮而佯應者亦數矣。時我從祖來自播州、往而見之、拒而不納。蓋怒吾之不改業也。親戚從旁解之、而後始得見焉。愛我愈深者、攻我愈力、其苦楚之狀、猶囚徒之就訊也。筐楚在前、吏卒在傍、迫促訊問、不能不應焉。而以吾好學之篤、守志之堅、而後得到于今矣。

仁齋の十五六歳は寛永の末年一六四三なり。民間に於ける儒者の境遇の困難以て想像すべきなり。浪人儒者の難境に立ちし所以は尚ほ一の原因あり。浪人に對する幕府の取締これ也。武家政府は、治安を維持せんが爲めに、浮浪を禁じ、特に浪人をば嚴重に取締りたり。大阪落城の後ち、京都は浪人多く徘徊せしかば、帶刀者の穿議きびしく、逆旅の一宿も帶刀者を好まざりき。されば儒士にして京都に住する者は、多く諸王公家の寄客となりて雙刀を帶するを得たり。仁齋は獨り浪人儒者を以て、確として標持す。閑散餘錄に、何レノ諸侯ノ臣ニテモナク、又堂上ノ家隷分ニテモ無クシテ雙刀ヲ帶ブルハ仁齋ノ家バカリナリ。故ニ今ノ仲藏仁齋孫往年父東涯ノ制度通ヲ江府ヘ献ゼシ時、敎命有テ白銀ヲ賜ヘリ。ソノ時ノ端書ニモ浪人仲藏ヘト署シ玉ヘリトナリと、

仁齋と時を同じくして京都に松下見林あり。延寶年中(延寶元年、一六七三)京尹戸田越前守(忠昌)その學術を推奨し朝廷に奏して法印の位を授けんとせしに、見林固辭して受けざりしこと先哲叢談に見ゆ。その說にいふ。近時醫流及儒生、多叙ニ僧位一以爲レ榮者。皆坐ニ其學識之不レ正、與ニ操持之不ヒ確矣。(中略) 醫流之經ニ此位一徵ニ諸典故格例一名實大乘焉。而況於下以ニ儒生一受中其位上者乎。所謂法印、法眼、法橋者、與ニ納言侍從諸太夫之類一通爲ニ當今之官員一。使ニ儒者受一レ之。還與ニ浮屠僧尼一爲レ伍、豈爲レ榮乎、爲レ辱乎。然專以レ此寵ニ待儒者一。而儒者甘受レ之。亂レ名敗レ實、皆以ニ其不一レ知レ道向一レ義也云々。その識見の高き、林氏と同日にして語る可らず。それ寬政教育の盛時に於てすら、草茅危言には民間ニテ儒者ト云フ名目ノ立ザルコソアヤシケレと云へる位なり。然るに幕初教育未開のときに當り、或は社會の趨勢に抗して浪人儒者の面目を立て、或は人爵を辭して名分を全くす。勇氣ある者に非ざれば能はず。仁齋と見林とは、教育家の爲めに氣を吐ける者と謂ふべし。

第二十四節　惺窩朱子學を唱へて、文藝復活の運動に先鞭を著けしより、學者踵き起り、その門に及ぶ。これより宋學盛んなりしが、中江藤樹(一六〇八生)近江に出

て、陽明學を修めて、知行合一の説を爲し學德特に高邁にして近江聖人の稱あり。その門下に熊澤蕃山あり。土佐には谷時中（一五九八生）出て、南學の一派を立てその門下に、小倉三省、野中兼山、山崎闇齋あり。山鹿素行（一六二二生）は江戸に崛起して古學を唱ふ。貝原益軒も亦寛永七年（一六三〇）を以て福岡に生る。かくの如くして風氣漸く開け學術研究の機運勃興せり。一面には、宇都宮遯菴、中村惕齋藤井懶齋の徒出でゝ、普通教育に關する著述を爲して、教育の普及に裨補せり。時運進みて、伊藤仁齋古學を京都に唱へ、物徂徠つぎて、江戸に起り古文辭學を唱へて、東西對壘するに及びて、學術研究漸く蔗境に入る。徂徠豪傑の資を抱きて、雄辯宏辭海內を壓倒す。教學界覇權此に至りて江戸に歸し學術研究の面目も亦一新せり。その狀況は次章に詳述すべく、本章に於ては、教育略年表の中に學者の生卒を附記して參證に資するに、止むべし。

第二十五節　この時代には、戰國殺伐の氣風未だ除却せずして、社會教育は未だ發達せざれども、前代の古老、尙ほ存して、武士は未だ剛健の美風を失はざりき。元和偃武の後ち、手習ばかりは早く流行し始たり。見聞集第四に童子あまねく手習

ふことの一章ありて、今は國治まり天下平なれば、高きも卑しきも皆物を書きたまへり。尤も筆道は、これ諸學のもとなれば、誰か此道を學ばざらんやといへり。

亂離に苦みたる社會は、平靜に歸すると共に、逸早く湧き出づるものは、生活に關する欲望なり。されば學術研究の機運は未だ熟せざるに、生活の嗜好は意外の邊にまで發達するものなり。而して生活上の嗜好は充分これを節制せざるときは、忽ち放縱の狀態に陷りて、踵ぎて起るべき教育の秩序的發達を妨害するものなり。

寛永二十年(一六四三)出板の東めぐり(著者未詳、或は德永種久とも云ふ)にいはく。

目出度き御代のためしには、賤山賤に至るまで、花鳥風月歌連歌或は詩歌管絃に心を掛けぬ人も無し。掛けて流行るは何なれば、名を得し古き掛物と、鯵を掛けたる大小を差さぬ人こそ無かりけれ。何より流行る豆板を、皆天秤にかけにけり。かけて手前は吉原や夜の道のやみければ、風呂屋の女流行るもの、かゝる榮華を四書五經なんど玩ぶ。己は萩の露ほども、身の行は爲さずして、古への孔子の道はかくなりと、おもはれぶりの講釋す。聽く人とても心には、慾に耽ると知りながら、人に器用を知らせんと頭を傾け聽くもあり。せめて道こそ立てずとも仁義禮智を背

かじと、誠に發起の人もあり。佛法後生に傾きて、題目念佛寺參り、慈悲を施す人もあり。されば諸寺も多けれど、法華の御門跡、上手の醫師、諸白と丹波煙草に肥後煙管、觀世が仕舞、金春が謠は今の流行もの。されば謠へる品々に、我等如き船頭は、沖にて謠ふ船頭の唄には細き片撥を謠はぬ人も無かりけり。唄、唱歌に琴の音は昔家々に音づれて、日出度き御代の有樣を誰も來て見る編笠と後留綿の羽織こそ夏冬かけて流行りけれ。色々流行るその中にたうたい人の好かれしは、鶉を集め掛け並べ、椿を數多植ゑ並べ、鳥の鳴聲、花の色、聲と色との爭に、心を寄せぬ人も無し

此書の出板は益軒八歳のころのことなり。大變革の後ち、社會の事物なほ草創に屬する際に、中以上の人々が、實學をば修めずして、速かに太平の躰裁學にのみ流るゝは古今の情態なり。武家生活の急進は理財の困窮を來たし、武家の困窮は、賦歛を重からしめて百姓の困窮となる。武家時代にありては、武士は不生産的階級にして、生活の資源一に賦歛にあるのみ。農民困窮すれば、工商隨つて困窮す。かくの如くにして、社會の下層には教育の發達を望むべくもあらざりき。その原因、一に武士生活の急進の爲めなりき。

かつそれ徳川氏の政策は、諸大名を疲弊せしむるにあり。參覲交代及び妻子を江戸に置かしむることは、一には彼等をして財政の困難を嘗めしむるにあり。然るに諸大名の困窮は、四民の困窮にして、隨つて教育の不振を來たせり、蕃山の大學或問は、時弊を論じて肯綮に中れるものなり。その中に曰く。諸大名困窮すれば、勢無くして、公儀の御爲め、却てよしと申す說あり……(答)諸大名不勝手にて、武士困窮すれば、民に取る事つよくて百姓も困窮す。(中略)加之浪人數多出來て飢寒に及びぬ。是れ天下の困窮也と。夫れ政治と教育とは、二にして一なり。教育は政治によりて興り、政治は教育によりて成就す。王陽明が、人の政を問へるに、學の事のみを以て答へ、教育振肅し政擧るに及び、問ふに學を以てすれば、則ち答ふるに政を以てし、その理由を說明して、明德、親民は一なり、明德を明かにすれば、體なり、親民は用なり、要は至善に止るにありとなせる所以は則ち是なり。學以て政を爲すべく政以て學を爲すべし。(王陽明文集卷十四、書朱子禮卷、)蕃山の著眼は此にあり。

蕃山は、時勢の急は、富有大業の策にありて、言路を開き、人才を拔き、官職世襲の弊風を打破し、武士を地方に土著せしめて、農桑に習はしめ、身心を天然界に練磨し、追て

は農兵の制を爲すべく、浪人滅じ、四民富有となりて、始めて社會の健全なる發達を期圖すべしとなせり

大學或問。富有大業ヲナスベキコト如何

仁政ヲ天下ニ行ハンコト、富有ナラザレバ叶ハズ。近世無告ノ者多シ……今ノ無告ノ至極ハ浪人也。……毎年人知ラズ饑死スル者多シ　此本ハ國主、郡主不勝手ニテ、家中ヲ扶持ハナシ、其上ニ家中ノ物成少ケレバ、又家中ノ家來ヲモ扶持離スナリ。其外眼前多ク出來ル浪人ハ人ノ知ル所也。諸大名諸家中、身上不相變ノ借金ニテ、スベキ樣無ケレバ、ツヨキト思ヒナカラモ民ニ取ル事年々ニ多シ。此數ニ民間ノ借物分ニ過テ多シ。スベテ今ノ世ノ中ハ貴賤共ニ借金ノヲヒ倒レト云フモノ也。武士、百姓ツマリタレバ、工商モ困窮ス。是天下ノ困窮也。公儀ノ御藏ノ金銀米穀殘ラス出シテ、救ヒ玉フトモ百分ガ一ニモ及ブ可ラス。如何トナレハ今借銀高ハ、天下ノ有銀ノ百倍ニモ過グベシ。然レドモ政ヲ以テ救ヒ玉ハバ易カルベシ云々。

政トハ何ゾヤ

富有ナリ……大道ノ富有ハ國君富有ナレバ、一國悅ビ、大君富有ナレバ天下悅ブ。大富有ナレバ也。天長地久ニシテ子孫福祿ヲ受ケ、令名後世ニ傳ヘテ身安ク心樂ミアリ。**武家ノ世トナリテ五百餘歲コノ方、其器ニアタリ玉ヘル**大樹出玉ヘドモ、其言ヲ聞キ玉ハザリシコトヲ恨ム也……**先王ノ法中ニ時所位ノ至善アリ。筆紙ニアラハシ難シ。下ニ生レテ事變人情ニ通シ、學力アリ、眞忠アル者コレヲ知ルヘシ。是ヲ知ル者ハ王者ノ師タルベシ。**

農兵ノ昔ニ返ルヘキ事

諸大名在江戶三年ニ一度、五十日ノ古法ニ返シ玉フトモ、唯ニ返シ玉ハバ、國々ニテ私ノ奢生ジ……何ノ益モアルマジ……

先ヅ民間ノ借物返シ玉ヘリ、質ノ田地取返シ賣タル田地モ上ヨリ元銀ニテ買戾シ玉ハルベシ。質ノ田地取返シ賣タル田地モ上ヨリ元銀ニテ買戾シ玉ハルベシ。(中略) 如此自然ニ高免ニ成テ、民ノ悴(ヤツレ)タルハ、士ト離レタル故也。**士ノ在々ニ在付ク樣ニスベシ。**……軍役ハ民ヲツレテ出ルコトナレバ、常ニ人ヲ多ク拘ヘ置カズ、二ツ成三ツ成ニテモ足ルベシ。使番モナク公用ノ勤モナ

シ。同村隣里ノ士ト往來スルニモ學所ヘ入テ語ル様ニスレハ、客ニ人遣ハルヽコトモ無ク少ヅヽノ手作リスレバ、薬園ノ草ヲ取ル様ナル事、畠ノ養生ニ下人ノ手傳ヒシ、山野ニ獵シ川澤ニ漁シ、風雨霜雪ヲ厭ハズ、文武ノ藝ヲ力メ、君ノ干城トナルベキ武夫ナラン。子々孫々ニ至リテハ、士共ニ作人トナリテ十一ノ貢ニ歸スベシ。……

關內侯ハ如何。

是ハ直チニ江戸ノ地ニテ農兵ノ如クナリテモアランカ……旗本衆モ大身ハ各ノ領地ニ引カルベシ……江戸ノ屋敷夥シキコトナラン。本來水掛リモヨケレバ、大分田トナルベキカ。地形平ナレバ非田ノ方モ行ハレンカ。農兵トナリテノ安樂長久ヲ見及ビテハ、小身ノ旗本モ、知行所々々々ニ行カンコトヲ願ハルベシ。學校ノ政アリテ上下道ヲ知ルトキハ、今ノ心トハ、格別ナル可ケレバ、相談ニテ如何様トモ宜シクナルベシ。役人計リ御城ノ四方ニ廣ク屋敷ヲ玉ハリ、是モ表垣裏ノ界ハ桑ヲ植エテ住スルトキハ、長久ナル風景ナラン。番頭與頭ハ組ヲツレ、五里十里ノ外ヨリ出テ五十日カ百日ノ

番ヲ勤メテ、御城ノ四方ヲ警固スベシ。弓鐵砲ノ頭モ同ジ。番中一人武藝ヲ習ハシ、學校ニ入テ道ヲ開ケバ、出番ヲ樂ミトセン。城下ニ妻子アル武士千人ヨリハ、遠方ニ妻子ヲ置テ男ノミ勤ムル武士三百人ハ増サルモノナリ。

蕃山の企圖するところは、武士をすべて土著せしめて農兵の制となさば文武の敎育施すべく、學校の政擧るべく、城下住の武士千人よりは、勤番の武士三百人は、勝さるべしといふにあり。政治と敎育と相待ちて健全なる武士の養成を期すべしといふにあり。蕃山又神社佛閣の取締を論じ、神官僧侶の刷新を必要とし、正しき家筋の社家禰宜などあらば、公儀より扶持給はり學問させ、學校の役人ともすべしと言へり。蕃山の意見は、要社會の刷新にありて、人文發達の進路よりすれば一隻の眼識あるものなれども、實際社會の狀勢に照らせば、中々の改革にしてその論旨を推廣すれば、勢或は大名政治の組織を崩潰するの嫌無きにあらず。これを以て彼の考案は諸大名の採用するところとはならざりき。而して、諸大名の困窮依然として續くときは、四民ごとに農民は依然として最も困窮なるべく、社會下層の敎育は依然として發達せざるべし。これを以て見れば、社會下層の敎育の發達せざ

るは、徳川氏が大名統御政策の論理的結果なりと謂ふを得べし

大學或問　人君ノ天職ノ事

(本方) 才智品々アリト雖モ、必ズ天下ノ政事ニ達スル才ヲ本才ト謂ヘリ。孔子ノ才難シトノ玉ヒシ人ナリ。……中古ヨリ宰相ノ職ヲ立テ、貴賤ヲ嫌ハズ、才次第ニ用ヒラレタリ。祿ヲ世々ニセズ。一代切ニ用ヒラレタリ。一度宰相ノ祿ヲ置テ、十世百世ノ外マデモ、天下ノ賢才ヲ遺サヾル法ナレバ、後世ノ時勢ニアタレリ。

(一代切) 自分ノ領地、家中ニアリテハ、其位置ニ精力モレテ公用ニ害アリ。殊ニ匹夫ヨリ擧ゲラレテ、俄ニ士民多イテハ、ソレノミ心ヲ用ヒザレバ、治ラズ。此故ニ宰相ノ祿、十萬石ナレバ、米麥金銀ニテ賜ハル也。……其身若シ病氣トナリ、又ハ老衰スル時ハ職ヲ辭シテ故郷ニ歸リ、故郷無キ者ハ在所ヲ賜ハリテ休ス。執政ノ人ニ領地ヲ賜ハリテ、子孫ニ傳フル時ハ十人カハレバ百萬石ノ領地出ルナリ。公儀ノ地モ左樣ハ續カザレバ、後ニハ廣ク撰ビ擧グルコト能ハズシテ、大身ノ中ヨリ撰バル。大身ノ數少ナケレバ、本才ノ人有リガタシ。其

上才德其位ニ叶ハズシテ、代々大祿ヲ受ルコトハ天ノ廢スル所ナリ。故ニ子孫ニ善キ人生レ難シ

第二十六節　この時代の教育思想

この時代の教育は、目的とするところ武士の階級にあり。教育は則ち學問にして、學問則ち讀書なりき。

この時代に於ける教育思想を論ずるに當り、山鹿素行を以て標題となすべし。素行の一身は教育史上に關係あること大なればなり。素行は元和八年(一六二二)を以て生れ、八歲の頃までに、四書五經七書詩文の素讀を了はり、九歲にして道春の門に入りしが、夙成にして、しかも器量學識一代に卓絕せり。兵家を以て一家を立て、諸大名旗下以下その門に及ぶ者二千餘人あり。嘗つて赤穗城主淺野氏に事へしが、後ち仕を辭して江戶に歸り、專ら文學と兵法とを敎授せり。德川氏の覇政は、自然の政策として、徒黨を嚴禁す。素行が將軍城下に、かくばかり大數の門人を有せるは、すでに忌諱に觸るゝところなり。況んや寬文六年(一六六三)素行の著はせる聖敎要錄は痛く宋儒を排斥して、古學を唱へ、道統之傳、至宋竟泯沒とまで言ひしかば、忽ち林氏一派の惡むところとなりて、赤穗に「御預け」の身とはなりぬ。その罪狀

は不都合なる書物を作りしといふにあり。近世學問の爭ひは、この時に端緒を啓けり。これ後ち漸次に醸成して寛政異學の禁とはなれるなり。道春は世祿の弊をば痛撃して、特に醫師をば、せめたりしが、その子孫も世祿を食みて全く彼が極力攻撃せし通りのものとはなりぬ。然れども林氏は世々幕府の學校を掌れるが故に、名利を占斷して、自らその學派を稱して正學といへり。正學とは果して何の謂ぞや。眞理は一人の壟斷すべきものにあらず。世祿の林氏學校を掌りて、官學を以て正學とせし餘弊は、正當なる學術的研究の精神を阻害せしこと實に大なりき。素行の聖教要錄は、小冊子なれども、凡そ漢唐宋明の學、一として排觝せずといふこと無し。その序文中に、予者師周公孔子、不師漢唐宋明諸儒。學志聖教而不志異端行專日用不事洒落。知之至也、欲無不通。行之篤也、欲無不力。然猶敏於口而訥於行、是吾憂也。聖人之道者、非一人之所私也といへるは、その要領を見るべきなり。この書は漢唐宋明の學者を排觝せるを以て天下の學者に逢ふにも係らず、これを世に公けにして廣く識者の批評を受けんことを望めり。かくの如き學風にして行はれんか、自由研究の發達更に大に見るべきものありしならむ

素行は武士道に造詣深く、その人、實に武士の典型として尊崇すべきもの、その門下に大石内藏介あるは、彼の遺影なり。幕末に至りて吉田松陰遙かに彼の道統をつぎて、武士道を發揮せり。素行の著に武教小學あり。これは武士道のみの書にはあらずして、廣く人のまさに行ふべきことを規定せり。彼の著書に據りて、その教育思想を窺はんに、人皆な學んで至るべしと爲せるもの、則ち教育の理想たる聖人とは何ぞや。曰く、聖人者知至而心正。天地之間無ㇾ不ㇾ通也。又曰く、一別無ㇾ可ㇾ謂二聖人之形一。無ㇾ可ㇾ見二聖人之道一。無ㇾ可ㇾ知二聖人之用一。唯日用之間、知至而禮備。無ㇾ過不ㇾ及之差一と。彼則ち結論して曰く、聖人者中庸而已。されば一行一善何か一角の目立ちて稱すべきものあるは、聖人にあらず。聖人は渾然たり、圓滿なり。中庸の權化なり。これ則ち彼の教育の理想たる聖人なり。聖人に達する方法は聖學にして、則ち教育なり。聖學は人たるの道を學ぶにて、聖教は人たるの道を教ふるなり。人學ばざれば道を知らず。知は學の要にして、知之至は氣質を變化するにあり。聖學の方法には、小學、大學ありて下學して上達す。聖教には師無かる可らず。學は必らず聖人を師とするにあり。從來聖教の師、少なくして唯だ文字記問の學の

み行はる。故に必らず良師を擇ぶべしと。素行は進んで、その識見を表白して曰はく、道在天道之間而人物有自然之儀則。其言行賢於己者可以師。何有常師乎。天地是師也。事物是師也と。素行の學風以て推知するに足るべし。而して又た師道は嚴ならざる可らず。然らざれば學固からずといへり。次ぎに讀書が學問上に於ける價値に就きては、彼また明晰なる意見を有せり。曰はく、書は古今事蹟を載する器なり。讀書は餘力の爲すところ也。然るを急務を措きて、書を讀み課を立て、讀書を以て學問なりとなすは、則ち學問は日用と相扞格すべきのみ。此の如きは學問にあらざるのみならず、書を讀みて損あり。書を讀むに學の志を以てせば大益あり。かの讀書を以て學となすは玩物喪志の徒なりといへるは讀書法の大要を述べたるもの也。讀書に對する見解は、朱子のとも、餘り差違無けれども、朱子に比すれば、素行のは更らに緊切にして、學問を以て、日用自然の間にありとなし、知を研くは、則ち其間に於てするを第一とし、書籍は餘力の及ぶところとして、太だ重要視せざるに至りては、此れ彼に勝さること遠しと謂ふべし。而して學問に知を貴ぶに至ては、彼此執を一にせり。素行に取るべきは、その見解の拘泥せざる

にあり。余は、この時代に於て、素行の教育說を以て、尤も卓拔なりとして、此に標出せり。然るに聖教要錄は、不都合の書とせられ、著書は貶謫せらる。所謂正學の漸次地盤を固むるに至りしは、惜みても餘あることならずや。

江戸時代を通じて行はれし普通教育書の尤も名あるものは異制庭訓往來なり。この書は、鎌倉時代に、教育上に使用する目的を以て僧侶の手に編纂されしものなり。今試みに、この書に就きて、その教育思想を論ぜんに。抑天生萬物、人最爲靈也。所以爲靈者、以修身而成聖、教民而趣仁也。成聖者實可依學問稽古之力也。痒序之道廢、人皆類聾瞽。仁義之行衰、民皆習夷狄といへるは其大意なり。而してその聖たるは如何なるものぞ。要するに教育されたる結果としては、惑を出でゝ悟に入り、生死の洪流を出でゝ涅槃の彼岸に至らざる可らずと說く。而してその縉紳に說くに當りては、爲國家之器用、浴朝廷之恩賞者也といふ。則ち教育は人たる所以を知り、その分を盡くし、その本然を知了するにあり。大要は個人の教育にして、修身治國に關する言あれども、その教育思想は、かの國躰尊嚴論とは、未だ融合せざるなり。その教育を必要とす

る所以は、崇文好學、則國開德基也といふに盡くせり。教育は即ち學問にして學問は即ち讀書なりき。讀書に就きては、佛書、儒書を必要とし、兩者の關係は花實にして、先づ儒書を學びて、後ちに佛書に入るべしとせり。學問讀書の功は、不登其室而逢聖人。不換此骨而成神仙と云へり。學問の方法に至りては、詳かに之を記せざれども、要するに靜坐讀書を專一とす。學問の妨害となるべきものを數へ擧げたるに、酒宴、茶、香、歌、連歌、雜談、見物鬪諍、相撲、鷄、鷹、睡眠房室等諸戲論事を以てせり。この中は忽ちこれを見れば、體育の思想など全くこれ無きやに思はるゝもあれど、決して然らず。そは、體育の思想は早く已に僧榮西の喫茶養生記に、その端緒を啓きたればなり。

天和二年(一五八二)林春常に命じて駿河孝子傳を作らしめ、かつこれを刊行す。これ江戸時代にて、孝子を旌表せし始なり。(德川十五代史)

一、駿河國、富士郡今泉村農民五郎右衛門、父母に孝を盡くし、其上村之助を爲すの由、國巡の輩演說之。因茲後來田畑九十石事、五郎衛門江永代下授之條可收納者也。

天和二年三月廿三日　御朱印

幕府は家康教育の遺訓なほ儼乎として存し、將軍の家庭教育につきても頗る注意されしやに見ゆるものあり。慶安四年(一六五一)三月廿八日世子家綱の近臣に賜ひし箇條書は即ちこれなり。(德川十五代史)

覺、

一、御幼少被成御坐候トテ御前ヲ輕ク、ムザト仕タル義ヲ被致言上、當座應御意宜共御心ノ儘ニ被爲成候テハ、後ニ御爲不可然、又其身モ惡事可成事。

一、被召上物其外御遊樂之節、風ヲモ不被爲引、御誤チ不被遊候樣ニ成程心ヲ付可被申候。雖然御表へ出御御表チキ御沙汰ノ義ハ假令御長坐又ハ御退屈タルベキ義ヲ見及候トモ、御イタワリ之ヲ被申上間敷、若以來御氣儘ニ被爲成候得者、第一御爲不可然云々。

一、御遊興之節下々風俗ヲ學ビカリソメニモ御形義格ニ被爲成儀被申上マジク候。勿論御遊興之時分御表向候樣御相手ニ罷成ベシ。但御幼少被成御坐トテ御前ヲカロシメ御遊事ニ付、手前形義、又猥リニ無之樣ニ心得肝要

之事。

一、上覽物並御遊興之義被仰出候義ハ格別此方ヨリ被申上候義差控可申候云々。

貴族教育の困難につきて、頗る苦心したるを見るべし。

〇教育略年表

一五六一(永祿四年)惺窩の誕生より一六九〇(元祿三年)昌平阪學問所の創建に至る迄の、教育上重大なる事件及び主なる教育家の生卒、著述等の略譜。

一五六一(永祿四)、惺窩生る。〇明世宗嘉靖四十年

一五八三(天正十一)、道春生る。〇明神宗萬曆十一年、〇コメニウス Comenius の誕生に先だつこと十年。〇去年肥前諸族大村、有馬等羅馬にゆく。

一五九三(文祿二)　惺窩江戸にゆき、家康に謁し、貞觀政要を講ず。御前講釋の始也。〇明神宗萬曆廿一年。

一五九八(慶長三)　家康禮記正義を清原秀賢に貸す。德川氏藏書の事、始めて史上

に見ゆ。谷時中生る。○明神宗萬暦廿六年。
一五九九(慶長四)家語開板これ徳川氏官板の始也。
一六〇〇(慶長五)道春朱學を開講す。朱舜水生る。○明神宗萬暦廿八年。
一六〇一(慶長六)伏見に學校を建つ、徳川氏學校の始也。
一六〇二(慶長七)江戸富士見の亭に文庫を建つ。
一六〇三(慶長八)道春始めて訓點を四書集註に加ふ。世上の講書を許す。
一六〇四(慶長九)道春、惺窩の門に入る。
一六〇八(慶長十三)中江藤樹生る。明年本邦船墨其哥に航す。
一六一一(慶長十六)家康始めて南蠻世界圖屏風を覽る。○明神宗萬暦卅九年。
一六一五(元和元)野中兼山生る。鵜飼石齋生る。○明年セキスピーア歿。
一六一八(元和四)林鵞峯、山崎闇齋生る。
一六一九(元和五)惺窩歿。蕃山生る。○明神宗萬暦四十七年。
一六二二(元和八)山鹿素行木下順菴貝原存齋生る。六年支倉常長歸朝せり。
一六二七(寛永四)仁齋生る。

一六二八(寛永五)　藤樹年廿一、大學啓蒙を著はす。

一六二九(寛永六)　中村惕齋生る。道春民部法印に叙す。踏繪令を發す。

一六三〇(寛永七)　益軒生る。林氏私塾建つ。同十四年長崎在住の蘭人を出島に移す。〇清思宗崇禎三年。一六三二ロック生る。

一六三六(寛永十三)外國渡航の禁令。

一六四〇(寛永十七)藤樹始めて陽明學を唱ふ。明年長崎に大通詞小通詞を置く。

一六四五(正保元)　林鳳岡生る。去年山崎闇齋還俗す。〇清世祖燕京に即位。

一六四七(正保四)　向井元升、長崎聖堂を建つ。

一六四八(慶安元)　京都講習堂建つ。藤樹歿。明年谷時中歿。

一六五七(明暦三)　道春歿。新井白石生。

一六五八(萬治元)　鵞峯に命じて、論語十有五而志于學一章を探幽が畫ける聖像の上に書せしむ、室鳩巢生る。蕃山致仕す。〇クロムウエル歿す。

一六五九(萬治二)　舜水長崎に來る。

一六六三(寛文三)　仁齋古學を唱ふ。鵞峯に弘文院學士の號を賜ふ。兼山歿。

法令廿餘條を領有す。第一條に曰。常に文道武藝を心掛、義理を専らにして、風俗を亂る可らざる事。〇清聖祖康熙二年。

一六六四(寛文四) 朝山意林菴歿、年七十六。江村専齋歿、年百歳。鵜飼石齋歿。

一六六六(寛文六) 素行、聖教要錄著述によりて赤穂に預けらる。

御日記、十月三日浪人山鹿甚五左衛門事、任我意而聖學意見書籍作之不屆付而……

徂徠生る。

一六六七(寛文七) 足利學校江修造料銀を賜ふ。益軒の小學備考、近思錄備考出板。明年雨森芳洲生る。

一六六九(寛文九) 禁中より御所望により、四書五經大全、十三經、廿一史、太平御覽、二程全書、朱子大全を進献す。酒井修理太夫銅製渾天儀を献ず。

三輪執齋生る。〇清聖祖康熙八年

一六七〇(寛文十) 伊藤東涯生る。本朝通鑑成る。(三百十卷)。明年陳元贇歿。

一六七二(寛文十二)蘭人萬國輿地圖を献ず。

日本洋學年表に曰、白石釆覽異言は、この圖に據りしならん。
石川丈山歿、年九十。鳳岡法印に叙す。

一六八〇（延寶八）綱吉、林春常人見友元を召して經義を討論す。後ち月兩三次例とす。春常大學を進講す。後ち兩三次例とす。林鵞峯歿。太宰春台生る。

一六八二（天和二）舜水歿。順菴徴されて儒官となる。闇齋歿。○淸聖祖康熙廿一年。ピーター大帝即位。

一六八三（天和三）長崎に舶載の奇器を買ふを禁ず、西洋暦算術の始祖小林義信歿。

一六八四（貞享元）書籍梓行書の禁令を頒つ、これ猥りに服忌令（此春制定）を梓行せしに依て也。森儼塾水戸に仕ふ。

一六八五（貞享二）楢林豊重を和蘭大通詞とす。豊重洋方外科醫術に巧み也。素行歿。綱吉聖像を自ら寫して鳳岡に賜ふ。

一六八七（貞享四）長崎の向井元成をして、舶載の禁書を撿せしむ。子孫書物改を世襲す。山縣周南生る。殺生の刑を設く。○淸聖祖康熙廿六

年。ニウートン重力規則を公けにす。

一六八八(元祿元) 弘文院家塾釋奠の胙を献せしむ。

一六九〇(元祿三) 昌平阪學問所創建。○清聖祖康熙廿九年。

第二章　元祿時代

第一節　この時期は五代將軍綱吉立ちてより、七代將軍家繼の薨去に至るまで、凡そ元祿の前後四五十年間を指していふ。

前期を回顧すれば、敎育に全然系統無き時代なりき、社會萬般の事物皆な其端緒を得るに汲々たり。武士の勢力は全く社會を支配し、敎育は、その手によりて擴張されしが、その開けゆけるは、僅少の人士、僅少の部分のことにて、京都江戶及び二三地方を除きては、到る處晴世の面影をとゞめ、官立の學校としては無く、諸藩も未だ學校を建つるに及ばず。社會には、武門の勢力に對して富の勢力未だ興起せずして、市民間に敎育の運動起らざりき。

前期に於ける政治上及び社會上尤も重大なる事件は、鎖國令(一六三六)にして、大

船を造り、及び横文の書を讀むことを禁ぜられたること是なり。これによりて、吾日本は萬國地圖の上に於ては、依然として異なることは無かりしかども、精神的には世界の舞臺より隱退したるものにして、白日戸を鎖して來客を謝絕し、自ら雙眼を蔽ひて世界の書を見ず、求めて井底に落ち咫尺の間に跼蹐して、小さき慾望に滿足せんとせり。人心は外に伸びざれば、必らず內に伸ぶ。外に屈したる吾日本の國民は、內に伸びざるを得ず。元祿時代は、吾國民が內に伸びたる時代なり。而してこれを飾るに、燦爛たる藝術の發達を以てす。換言すれば、元祿時代は則ち光采ある小日本の時代なりき。

この時代には、戰國の故老も最早凋零し盡きて、社會は新分子を以て組織せられ、太平に生立ちたる者どもが、太平の情慾を恣にしたるときなり、恰も昇平の順潮に乘じたる青年が謹嚴なる老爺の膝下を離れたるが如く、社會は元氣充實して、奔放壯快の有樣を呈し、その表面には幾多積極的事業の擧行されたると共に、その半面には青春の慾望羈束す可らざるものありしを認むべし。

教育の發達は、この時代の著名なる現象の一ならず、元和偃武を去ると既に久し

く、昇平の氣習漸く天下に瀰蔓し、武士の生活は贅澤に流れて、質實剛健の美風を失ひ、武家の財政は窮乏を訴ふるに至れり。武家に對して市民の勢力は勃興せり。富は社會の一大勢力たることは彼等の間に認められぬ。氣節は武士の獨占たりしが、今や市井の間にも分たれて所謂任俠風起れり。教育は武士の壇場たりしが、市民は、其一部を割取し、教育普及に對する活潑なる運動を始めたり。市民の教育は、市民自らこれに任ずるに至れり。つぎに、此時代には女性に對する研究進みて、女子教育說勃興せり。元祿時代の大觀は此の如し。

第二節　この時代に於ける教育上の施設は頗る趣を改めたり。この時代の將軍は綱吉、家繼、家宣の三代なれども、專ら綱吉の施設にかゝり、他は世を早くして言ふべきほどの事無し。靈元天皇の延寶八年（一六八〇）綱吉立ちしが、時に關原役を去ること八十年、彼は殺伐疎剛の風を除きて、文運を進めんとし、極力學問を奬勵せり。綱吉自ら學を好み、つねに書を講じて、大名、旗下、寺僧をして預り聽かしめ、易經を講ぜしときは、八年間一次も廢せず。侍臣にも命じて輪次に書を講ぜしかば、殿中講經の盛んなる爲めに、殿中本と稱し、四書の袖珍本を印行する者あるに至る。

而して綱吉の施設の中、主なるものは、幕府の學校の創建と儒者の待遇方改正との二事なり。

これより先き綱吉は、弘文院をば厚待せしが、更に旗下の士に學事を獎勵する爲めに學校の必要を感じ、元祿三年(一六九〇)に林氏の私塾たる弘文院を忍岡より移して湯島阪上六千坪の地に建て、その地を昌平阪と改稱し、大成殿を設けて孔子を祭り、總稱して聖堂といひ、改めて幕府の學校となし、林鵞峯の子、信篤(鳳岡)をして蓄髮して大學頭ならしめ、子孫聖堂の祭酒を世襲せしむ。此に於て幕府の學政始めて成立せり。

昌平阪學問所

昌平阪學問所の經營は、元祿三年七月に始まり、普請惣奉行は綱吉が氣に入の松平輝貞なり、同十二月聖堂下前後、以後昌平阪(元と正平阪)と稱すべき旨令す。四年春二月聖堂落成し、その七日を以て遷坐の式を擧ぐ。林大學頭信篤、忍岡より舊殿の聖像並に四配の像を新殿に移す。新に十哲の神主を設け、七十二賢並に先儒の像を畫きて安置す。三家並に諸大名より書籍その他を寄進して、儀をたすく。同十一日將軍聖堂に謁し、釋菜を行ふ、かくして昌平阪學問所は創立されぬ。さ

て當時の規模は如何にと言ふに、寛政の設計に比すれば言ふに足らざるもの。聖廟は神殿風にして、孔子を祭つること恰も神社に於けるが如く、狛犬なども安置し、太刀、馬等を奉納するなど、全然村學究の設計たるを免るゝ能はざるものあり。講堂に至りては、ことに狹隘にして多少の有志者、講經を聽くに過ぎず。その儀の典麗なることも、實は平安朝の盛時には及ばざるなり。四年二月綱吉自ら臨みて釋菜し、かつ經を講ず。この年鳳岡は、仰高門の東舍に於て經を講ぜしに、士庶聽く者三百人許り、舍に容るゝ能はざるを以て、地に席して聽くに至る。鳳岡以て未曾有の盛事となせり。世人の漸く學に嚮ふを見るべし。これより仰高門東舍の講經は屢行はれしが、旗下の士進んで學に向ふ者少なく、四年の盛事の如きは、久しく教育界の談柄として殘れる位なり。これより後ち將軍も母堂(桂昌院夫人)も屢釋奠に列し或は諸大名をして儀を觀せしめしことなどありて、幕府が學事奬勵に盡くしたることも尠からざりしが、幕府の學校は寛政の盛時に至るまでは、別に語るべきことも無く、諸藩の學制とても取出でゝ言ふべきものは少なし。

御代々文事年表 (文祿六年)八月六日昌平阪大成殿釋菜。國主城主萬石以上

ノ輩、來觀者四十餘人アリ。是ハ每歲ノ釋菜御成ニ依テ諸大名崇聖ノ志アレ氏、來觀ルコト能ハスト云ヿヲ聞召シテ、今年兩次執行セシメラル。

綱吉が林鳳岡をして蓄髮せしめたるは儒者圓頂の陋習を破れる也。家康と雖も猶ほ儒者の圓顱を命じたり。儒者剃髮の事尤も謂はれ無し、鳳岡蓄髮の前に、水戸光圀その藩の儒生をして蓄髮せしめしことありき。これより後ち僧徒が文事を掌れるは唯だ五山の僧が對馬に滯在して朝鮮往來の文書を掌れりし一事のみ幕末まで續きたり。されば儒生の蓄髮と共に、教學上に於ける僧徒の勢力の紀念は消滅したるものなるが、民間特に地方邊僻にありては、社會教育に於ける僧徒の勢力は中々衰へざりき。當時綱吉が儒者蓄髮を命じたるは、文運興隆の結果なれども、又一の英斷たりき。實錄にいはく、近古武家の世となりて、文學廢替し、室町家のとき五山の僧徒を請ひて經籍を講せしめしより弊俗相及んで、儒士みな剃髮の形となり、豪傑の士も改むることを得ざりしに、崇文の政こゝに及べり。是より相繼ぎて林門の徒には和田春堅傳藏と稱し、大河內春龍新助と改め、人見沂、又兵衛と稱し、林春益又右衛門と號し、……非家の儒者には木下順菴平之丞と號し、同

寅亮平三郎と稱し、其外經を諸侯の門に横たへ、冊を郷黨の間に挾む類まで、皆舊俗の陋習を變じて濟々の風をなす、誠に五百年來の盛擧なりと」。儒者蓄髮の一事如何に儒者の品位を高め、教育界の面目を改めたるかを知るべし。

第三節　綱吉が文學を好み、講經に淫したる結果は、諸大名旗下をして、據無く儒者に就きて學問せざるを得ざるに至らしめ、講說の術の發達を促がし、隨つて學事普及の行遲を開きたり。綱吉の講經は、その殺生禁斷と同じく寧ろこれを淫したりと云ふを妥當とす。彼は諸大名の邸に過訪するときにすら、親ら經書を講じ、さらに亭主及子弟をして講說せしめたり。されば諸侯は、講說に長じたる儒生を扶持して、饗筵に侍せしめ、これを以て將軍に對する御馳走と稱せり。彼は將軍に立ちしより屢々講筵を城中御座の間に開きしが元祿八年三月朔、國主城主萬石以上諸大名並に嫡子高家奏者番以下諸役人、諸番頭物頭等四百十四人の爲に易の講筵を開き、親ら表に出て講義を試みたり。易經講義は彼の尤も喜んで勵精せしところにして、元祿六年四月廿一日開莚し、同十三年十一月廿一日竟莚に至るまで二百四十座にして一回も休講せしこと無し。實記にいはく。御家門衆譜第外樣諸大

名旗下の諸士分者、諸家の貴僧碩德社人山伏下は柳澤出羽守保明松平右京太夫輝貞が家の儒生等に至るまで、志ある者拜聽を許して登城すること每月六度なりき……每日晝夜によらず燕暇のときは林大學頭信篤並伊庭五太夫、大河內新助、和田傳藏、安見久平、中村新兵衞、松浦藤五郎、木下平三郎、荻生小次郎等之儒臣を集め、經義を問答し玉ふに、英辨泉の如くに湧き、精義綺の如くに粲にて、奉問奉對すること敬服せずといふこと無し。或は御家門衆執政並に牧野成貞、松平輝貞及び保明が亭に成らせ玉ふにも、必らず先づ經書を講じ玉ひ、次ぎに亭主に命じて進講せしめ次ぎに其家の儒生をして或は進講或は問答せしめ、親ら尊貴を降して、御上段を下り、進講の士と一間を同じくなし玉ひ、討論講窮をなし玉ひしなりと。

遺老物語　林大學頭門弟の書物よみ覺えしもの彼是廿人近くも候ひし也。是は學文御好みとて、日々伺候の面々に書物讀み習ひて講談するを、其講讀を聞てよしあしの甲乙を定めて勝にしるしして、日々の上下を御覽ずるやうに廊下のなけしにかけしなどいふ也。

綱吉身を降して儒生に伍して攻究討議す、宛たる明主なりとも見ゆれども、彼そ

の大体に通せず唯だ學問道樂たるに過ぎざりき。これを聲色にのみ溺るゝ者に比すれば勝れりとすべきも、等しく浮氣學問にして、將軍の爲すべきことゝも見えず。柴栗山の上書に、綱吉の好學を論じて、唐人の眞似を被遊候の、詩文章を御作り被遊候の、御自身講釋を被遊候のと申樣の事は、隱居や樂人の慰みに仕候風雅樣の上氣學文と申すものにて、一天下をしろしめされし公方大將軍の被遊候御學問にて無御座候。何の御益にも相違不申。惡く仕損じ申候へば、却て御政道の御邪魔に相成申候ものに御座候。必竟これは世に申す上手の不器量にて……と云へるは、世々の將軍に聽かしむべきものなり。綱吉性質英邁よく諸大名を制御して、幕初來の政策實行を完くしたれども、その講經は實に上手の不器量たるに相違無かりき。然れども綱吉の學問道樂は、武士をして俄然として讀書に嚮はしめたるの功あることは疑ふ可らず。

家宣もまた少より學を好み、新井白石を侍讀として、襲職の後ちも渝らず、白石が講筵に侍せしこと十九年にして、千二百九十日なりといふ。又盛なりと謂べし。ことに家宣は沈著にして學問道樂の弊無し。これ綱吉に勝さること萬々なり。

教育上の鎖國

然れども事物草創の際に當りては、家宣の沈著よりも、寧ろ綱吉の執著の方、局面を動かすに於て力あるべし。家宣は藩邸にありしときより、正月五日歳初の講筵を開きそれより十五日を過ぎて後ち、歳末に至るまで日講を始め、大故ある外は、朔望は言ふに及ばず。四時の節日と雖も日講をとゞめしこと無しといふ。綱吉、家宣好學の篤きこと此の如し。これよりして、講說の術著るしく發達し、大名旗下の士も學に嚮ふに至れり。

折焼柴の記、毎年正月の始に講筵を開かるゝの儀あり。兼てより講章を奉らしめ玉ひ、その日講終りぬれば、時服二領を賜はること遂にかはらず。此儀者年の始めの御事なれば、大小雅の中にて、芽出度き詩を擇びて進講すること例とはなりき。

第四節　徳川氏は、鎖國令を(一六三六)發すると共に、嚴に外教の輸入を禁じ内にては林氏を保護して隱然朱子學を奬むるの傾向ありき。これ教育上の鎖國にして、幕初よりの趨勢なりき。外教輸入を禁ずるの方二あり。一は宗門改にして、一は禁書令なり。外教を嫌忌するの餘すべての横文の書籍を禁じて、以て羮に懲り

て膾を吹くの愚を學びたり。博學、審問、篤思、明辨は儒學の敎へしところにあらずや。最も數多の儒者は、白鹿洞學規を壁間に掲げて、學問思辨の要義に眼を曝らせしが、舊態依然として脫せず。その形よりして、これを見れば、彼等は眞理は形而下には島帝國、形而上にては儒學の中に盡くと思惟したらんやうなり。廣く智識を世界に求めてこそ學問發達すべけれ。彼等は實に眞理討究の公途に於ても、また鎖國を勵行したるものなりき。されば活眼達識の士は、吉利士丹類族改の徒爲たる事及び吉利士丹書籍さへも儒者に讀ましむべきことを唱道せし者もありしが、到底行はる可くもあらざりき。

政談(物徂徠著) 吉利士丹今は日本國中にあるまじきことなり。今に類族を吟味すること詮も無きことなり。御旗本に列する輩には、親類の詮議無し。大友宗麟竹中筑後守子孫など、これ君子の澤も、小人の澤も、五世にしては絕ゆることなれば、最初殺したる者より五代たちたらば平人に同じかるべし。吉利士丹書籍の事。吉利士丹宗門の書籍を見る人無き故、その敎如何なることとを知る人無し。儒道佛道神道までも惡しく說きたらば、吉利士丹に學ばす

なるべきも計りかたし。之に依りて吉利士丹の書籍、御藏にこれ有るは儒者どもに見せ置きて、邪宗の吟味をさせたきこととなり。

本邦の學者、漫に邪教を排せしが、その實、邪教の何ものたるやを審かにせし者はあらざりき、その書を政府の書庫に貯藏しながら、學者に讀ましめざるに至りては頑陋の至と謂ふべし。寛文二年(一六六二)作事奉行保田若狹守宗雪切支丹改を兼ねしとき、忠淸、忠秋、正則等老中伺候し否命あり。その大意に、吉利士丹邪徒制禁支配自前代爲要務重事也と。世に傳ふる切支丹穿鑿の書一冊あり、宗雪の錄するところ也。その中に邪教本意を錄する數條あり。主君ノ命タリトモ、切支丹ノ法ニ背カザル者ハ不可殺。又タデウスヲ貴バズ、掟ノ如ク勤メザル者ハ、デウスヘ敵討ツ故、主君親ニテモ殺サヾレバ、ハライソヘ至難シ。果シナキハライソニハ替難キ故ニ主君親ニテモ殺スガ道ナリト。終リニ日本ノ禍、此宗門ヨリ勝レタルハ無シト云ヘリ。本邦の學者唯だ幕初耶蘇の慘禍をのみ知りて、その後、横文の書を讀まざるを以て海外の形勢を知らず。一切耶蘇に關する書籍を禁ぜんが爲めに、萬般の智識を謝絶するに至れり。これ實に精神界の攘夷なり。邦人の耶蘇に就きて

尤も懸念せしところは、その教義に、天帝の爲めには、主君親にも背くべしとの一條、日本の社會を根本的に破壞するものなりといふにありき。

長崎にゆく者は邱上に列する數多の寺院を見るべく、次ぎには本邦有數の古聖廟の猶ほ存するを知るなるべし、この二者は、敎育史上鎖國の紀念物たるなり。蓋し德川氏が鎖國令を發して外人の來航を謝絕してより、紅毛碧眼兒の本邦に來りて海外の消息を傳へしは唯一の長崎のみなりき。長崎は江戶時代の社會に於ける暗篋なりき。外界の形勢かの小孔を通じて、玻瓈鏡上に映ぜり。德川氏は暗篋の蓋を撤して、光線の射入を許しながら、外界の形勢の明らかに鏡上に映ぜんこと、を恐れたるなり。蘭人のつねに出島に在留せるは、僅かに十數名なるに、幕府は猶ほ彼等が本邦の事情を探知し、及び外敎を輸入せんことを慮りて、彼等を遇することと罪囚の如く、その出入を拘束すること極めて苛酷なりき。されば獨人ケムプルの如きは、日本人が僅々二十にも充たざる蘭人を恐るゝことの甚しき、實に愚に似たることを冷笑せり。外敎を防ぐには宗門改あれども、長崎にては一層これを嚴重にし、かつ外敎の輸入を壓止せん爲めに、盛んに寺院を保護し佛敎を扶植せり。

これ現存せる邱上數多の寺院ある所以なり。

次きに幕府は儒教をも保護して、外教の輸入を防がんとせり。長崎明倫堂及び聖廟の設あるは、これが爲なり。長崎聖堂は正保四年(一六四七)向井元升の創建に係る。延寶八年(一六八〇)元升の子、元成嗣ぎて聖廟の祭酒となる。貞享四年(一六八七)淸舶賽有詮といふ書を齎らし來りしに、元成その書中、外教に關することあるを訴へしかば、幕府これを重賞し、爾後來舶の書を撿せしむることゝす。その外教に關する書を禁書といひ、元成子孫書物改役を世襲せり。寶永七年長崎奉行佐久間安藝守信就、久松備後守定持二人相議し、舊堂の狹隘なるを以て、鑄錢の地五百四十五坪を寄與し、俸を措て資を委して、遂に廟堂を改め建て、學舍を增設し、翌正德元年(一七一〇)竣工す。その八月廿七日聖像遷座の式を擧げ、當日釋奠を行ふ。現存せる聖廟及び向井氏の錢溪書院は、則ち是にして、その創設今を去ること殆んど二百年なり。長崎明倫堂の創設は、名教を扶植し、所謂南蠻の妖教を闢くを以て其目的とせるものなり。向井堂記に、正人心而息邪說者也、孟夫子不云乎、能言拒楊墨者聖人之徒也といへるは、その本領を發揮せるものなり。幕末に至るまで、政府が厚く

これを保護したる眞意此に外ならず。幕府は實に教育によりて、外教を防がんとしたり。これ精神界の攘夷なりき。

長崎聖堂また明倫堂とも云ふ。一瀨溪の右にありて、舞鶴座と背を合す。この地元鑄錢の所たりしによりて、俗に錢屋川といふ。錢溪書院の稱ある所以なり。聖廟崇聖祠及び校舍なほ現存す。廟荒れたるも、なほ當時の面目を窺ふに足るなり。

向井元升は肥前佐賀の人、慶長十四年(一六〇九)生る。幼より父に隨ひて長崎に來り長じて天文學を學び、後ち尤も醫術に精しく、儒醫を兼ねて職とす。當時長崎に學校の設無きを以て、正保四年(一六四七)官に請ひて、聖堂を東上町に立てゝ、立山書院と稱し、塾師たること十二年、移りて京都にて醫を業とす。その間、立山書院にては、南部草壽塾主たり。草壽の受教生に西川如見ありき。延寶八年(一六八〇)元升の三男元成歸來して聖堂の祭酒となり、これより子孫その職を世襲して今に至れり。(元成の弟、時義去來と號す。誹諧を善くして、芭蕉門下十哲の一たり。)聖堂に就きては、政府より厚く保護したる事蹟一に

して足らず、學生資料を供し、土地を寄附し、或は春秋兩度釋菜の料を給する等の事あり。天明八年(一七八八)より月次講釋始まり、農工商に至るまで家業の暇參聽すべきことを布告せらる。明治維新の後ち、此に廣運館開設し、國學、漢學、英學を敎授せしが四年これを廢し、今は行餘學舍とて醫學豫備校を開設せり。聖堂の尤も隆盛なりしは、天保十四年(一八四三)より安政、文久(文久元年、一八六一)の際なりしといふ。

學派は純然たる朱子學なり。その敎則の大要を附記せんに、授業の方法は生徒一同團欒して座せしめ、敎師其座頭を占めて講釋し、或は生徒をして講ぜしむ。素讀は孝經より四書五經を經て小學に至るを第一期とし、それより他の學科に涉ることを止むること凡そ五閱月、その間終日復讀し、一字の不審あるも必らずこれを質さしむ。點檢は素讀を終へたる者にして、獨力に書史類等を閱讀し、不審の箇條を質問するにあり。會讀は每月概ね六回、夜會を設け、四書小學の專ら修身道德に關する書目に就き、討論を爲さしむ。授業時間は、正午より日沒に至る。又別に夜學あり。

學科は漢學和學醫學の三科を專修せしめ、筆道習禮漢洋算法及び武術等一切これ無し。生徒學期の期限無し。

試驗法には、素讀試驗、學問試驗、講義試驗の三種あり。獨り聖堂の生徒のみにあらずして、長崎地方の塾生は、總べて此校にて試驗せり。

素讀試驗は毎年二三月之を施行す。その景況及び方法は、聖堂に於て長崎奉行附屬の幕吏(撿使一人、目付二人)三名正面の上席を占め、其右側に列坐する者は代官町年寄等にして、左側は書物調役始め教師列席し、都て採點の事を掌る。書記役、書籍を執り、一葉乃至二三葉を受驗生に讀ましむ。受驗生跪て讀むこと概ね三十分間、讀畢りて順次一人宛試驗す。採點は一字の讀方を失すれば一等を減じ、三等迄を及第とす。及第者には賞金を附與す。學問試驗は素讀御吟味に及第せし者の中、學力ある者に施す。三年毎に一回なり。長崎奉行附屬の吏員等出張監督す。試驗の方法は、論語、小學、孟子等或は歷史中より問題を與へ、和文若くは漢文にて筆答せしむ。學力と思想の優劣を判するは、幕府にて之を爲し、かつ賞品を附與す。これ唯だ幕府が學事奬勵の意より出た

るものなり。講義試驗は安政三年（一八五六）に始まり、長崎港内何人にても志願の者に就き、毎月一回臨時執行するものにて、四書五經等に就き適宜講義せしむ。試驗のときには、長崎奉行出座するを以て、これを御前講といへり。

明倫堂は長崎奉行始め幕吏出張して、長崎港内學生の試驗を施す等、唯だこの學校を官立に準ずるのみならずして、その特に敎育に干涉するの微意も亦知了するに難からず、またこの學校の性質の自然の結果として在留の支那人と親密の干係を生ずるに至り、釋菜にも支那人來りて此に三跪九叩頭の式を行ひし事、維新後までも續きたり。釋菜の式は明儒沈燮菴の傳ふるところと云ふ。幕府は儒敎によりて、歐洲思潮の輸入を防かんとしたるを以て、儒敎の本家たる支那人との干係は、これを容認したるのみならずして、寧ろこれを奬勵したり。明倫堂の助敎の待遇は唐通事同樣にして、また唐通事等は、この校に來りて、詩文學問等の會合を爲せり。明倫堂の舊蹟を訪はゞ、扁額碑文等支那人の筆蹟燦然たるを見るべし。就中萬世師表の四大字を刻せる扁額は、わけて見事なるが、これ淸聖祖康熙廿三年（一六八四）魯に幸して、親ら釋菜を行ひ、三跪九叩禮を爲しこの四大字を書して大成殿にかけ

しを明年板刻して天下の學宮に頒布せしものゝ傳はれるにて、この一箇の扁額は能く崇聖の敬意を表はせるものと謂ふべし。すでに孔子を祭りて崇聖の至誠を表し、その學科は博く六藝に渉らずして、專ら修身治教に關するものゝみなるを見れば、益以て明倫堂の教育が妖教を闢くの意、急なるを知るに足るべし。その傍ら醫學を授けたるは創立者元升が儒醫を兼ねたるによる。

今茲五月余は長崎に遊びて、明倫堂を訪ひ、遍ねくその遺蹟を見ることを得たり。聖廟は一瀨川に向ひ南面して立つ。大門あり欞星門といふ。中門を杏壇門といひ、地高五尺、東西七間一尺、南北十一間半、中央に大學の自天子至庶人一章の彫屏あり、左右に小門ありて出入の所とす。彫屏は釋奠の時にのみ開く。聖廟は方四間の堂にして正面に至聖先師孔子の位の木主を立つ。又た青銅の聖像ありて龕中に安置す。即ち清商等の鎭供する所也。前に繡帳を垂れ、天井に花鳥を畫く。高案二座ありて、燭臺香爐、花瓶を置く。四子木主帳内に配列し、七十二賢位東西卓上に配列す。各繡緯を垂れたり。廟貌森然として、流石に支那風なり。この時代の設計として、現存せる古聖廟は肥前多久

にあるが、全く日本風なり。兩者比較し來れば、全く其由來の相異せるを知るべし。講堂は聖廟の右にあり。聖廟に接して、その左に崇聖祠あり。天保十三年(一八四二)清商等の創建するところといふ。孔子の祖父母、父母等を祭り、先賢先儒を配祀す。その左に學寮及び書庫あり。明倫堂にて出板及び雕刻せし書籍もあれど、今之を詳かにせず。

今茲に序を以て、釋奠釋菜の由來を記し、併せて聖像に及ぶべし。釋奠の事に就ては、歐陽修の所論尤も明晰なり。釋奠は枕草紙にはシャクテンと訓じ、和訓栞及び簾中抄にはサクテンと訓す、セキテンと訓ずるは近世のことなり。

歐陽文忠公全集。襄州穀城縣夫子廟記。

釋奠釋菜、祭之略者也。古者士之見師、以菜爲贄。故始入學者、必釋奠以禮其先師。其學宮四時之祭乃皆釋奠。釋奠有樂無尸。而釋菜無樂則又其略也、故其禮亡焉。而今釋奠幸存、然亦無樂。又不徧舉於四時、獨春秋行事而已。記曰、釋奠必有合、有國故則否。謂凡有國、各自祭其先聖先師。若虞之夔伯夷、周之周公、

魯之孔子。其國之無焉者、則必合於隣國而祭之。然自孔子沒、後之學者、莫不宗焉。故天下皆奠、以爲先聖而後世無以易。學校廢久矣、學者莫知所師。又取孔子門人之高弟曰顏回者而配焉。以爲先師。隋唐之際、天下州縣皆立學置學官生員。而釋奠之禮、遂以著令。其後州縣學廢而釋奠之禮、吏以其著令故得不廢。學廢矣、無所從祭、則皆廟而祭之。

次ぎには聖像なり。王朝にては聖像及び十哲像皆な畫像なりき。十三朝紀聞に、後光明天皇嘗て釋奠を復興せんと欲し玉ひ、累世傳ふるところの唐作孔子及十哲像を祕庫より出して、朝山意林庵に示し玉ひしとありと傳へたるが、この像といへるは王朝のころより傳はりしものにや。足利學校に傳へたる孔子畫像は狩野祐清の筆になり、寛永中林道春も歷聖先儒の像を圖せんと欲し、堀杏庵と計りて、狩野永納をして、伏羲より孔子に至る十一聖顏曾思孟及周子二程張邵朱子德廿一幅を畫かしめて、忍岡文庫に藏し、釋奠のとき兩廡に列することと、唐代の例に倣へり。その後教育の開けゆくに隨ひ、諸大君も概ね聖像をつくりて釋奠したるが、多くは相貌、史記傳ふるところに似ず。要するに

邦人の考を以て、務めて、これを神聖にせんとしたるに似たり人情、崇聖に馳せて、畫像に甘んぜず、遂に青銅の聖像を造るに至る。　足利學校舊くより傳ふる聖像は、寧ろ老佛に類す、決して孔子像に非ず。　その後ち支那より舶來せる聖像の舊きもの、余が見たるうちには、林氏所藏と、肥前多久舊と祀れるところ、今肥前西彼杵郡山口村孔子祉の神躰と、及び長崎明倫堂所祀のものとなり。　猶熊本の武藤氏は朱舜水齋らせる聖像を藏すと聞けど、未だ一見の機を得ず。　これ等は皆元祿以前寛永以後の間に本邦に舶來せるものなり。　これ等は皆二尺に滿たざる青銅像にして、風神やゝ史記傳ふるところに似たるものあり。　其後本邦にて鑄造せるもの亦諸處に現存せるが、それ等は大概、文宣王の像にして、衣冠堂々たるのみならず、風采極めて崇嚴にして、舶來の聖像とは雲泥の差あり。　就中本邦鑄造の聖像の尤も舊きものゝ一は肥前多久聖廟祀るところのものにして、これは、京都の儒者、中村惕齋及び藤井懶齋の設計せるところといふ。　現今支那にて祀れる聖像は、醜男子にして眞面目に近かるべきやう思はる。　去年出版の世界史（リッドパッス著）採るところの

廣東にて祀れる聖像の如き特に然りとす。されど支那にても、周代には像設無しと云ひ、漢に至りて聖像あり。その行はれ始めたるは唐代位のことにて、或は聖像の流行せるを以て、佛敎の影響に歸する學者もある位なれば固より正確のことは知り難きものなるべし。されば本邦近世にて、崇聖の敬意よりして、風神崇嚴なる聖像を造り出してこれを禮拜したるも亦正否を議するに足らざる也。近世將軍より大名に至る迄皆聖廟あり、又隨つて聖像ありき。故に茲に其辨を爲したる也。

朱子は聖廟を造りて、聖像を造らざりき。これに就き日知錄の說をあげ、更らに益軒の明快なる論辯を附すべし。益軒は唐代すでに聖像行はれたりとなすものなり。

日知錄十四、像設

古之於喪也有重。於祀也有主以依神。於祭也有尸以象神。而無所謂像也。……尸禮廢而像事興、蓋在戰國之時矣。(漢文翁成都石室設孔子坐像。其坐歛蹠向後、屈膝當前、七十二弟子侍於兩旁。

朱子白鹿洞書院、只作禮殿、依開元禮。臨祭設席不立像云々

愼思錄三、（益軒著）

闕里志載朱子語錄曰、宣聖本不當設像。春秋祭時、只設木主可也。丘瓊山曰、塑像設、中國無之。自佛敎入中國始有也。三代以前祀神皆以主、無所謂像設也。彼異敎用之……不知祀吾聖人者、何時而始爲像云。觀李元瑾言顏子立像、則像在唐前已有矣。

長崎明倫堂は近世敎育史に於ける一大遺蹟なれば、有志の士この地に到らん者須らく一覩すべし。去月余が聖廟を訪ひしとき、友人理學士松原俊造君と同伴せり。氏は敎官となりて南京に赴く者也。依て、むかしは支那より吾國を開發せしに、今は吾國進んで彼を啓發せんとす。君とこの廟に謁す、豈多少の感興無からんやと言ひて、共に一笑せり

講說術の發達

第五節　元祿時代に於ては、綱吉が極力學事を奬勵せしが、一般に敎育上の施設に至りては、未だ詳論するに足るもの無かりき。綱吉が好學の影響によりて、著るしく發達したるものは講說の術也。これより以前にありては、道春は講說に巧み

なりしと傳ふれども、一般には講義の術は拙劣なりき。綱吉の講經道樂は儒者をして講義を巧みにするの必要を感ぜしめ、遂には講義を以て、その本職なるかの如く感ぜしむるに至りき。徂徠は痛たく當時流行せる講義を嫌ひ、講義流行の結果として、儒者の學力減却したりなどゝ冷罵せり。この時代に講義にて、尤も名ありしは、室鳩巣と佐藤直方なるべし。鳩巣のは、障子を隔てゝ聽くに、焉矣乎也の區別まで分明に言ひ分ちたりと傳へらる。（鶉菴遺稿）直方のは、これとは異なりて、譬喩縱横に、滑稽百出して巧みに人頤を解くの妙あり。徂徠は、此の如き講義を評して唯だ小間物屋の店頭に於ける如く、種々雜多の智識を臚列して、聽者の腦中に注入するのみにして、感發といふことを欠けるは講義にあらず。本來講義といへば、僧侶の說法の方が近しといへり。徂徠更らに、弟子が先生の講義にのみ依賴して獨力硏究の氣象を養成せざるの弊を說き進みていはく

師之所ㇾ倘、弟子傚之。從ㇾ旁援ㇾ筆、錄二其講言一。前後次第、一字不ㇾ差。甚者則曰、師於二此處一、一謦欬。至二此句一擊節。學二其聲音一擬二其容貌一。

頗る皮肉の評といふべし。乍併、現今專門の學校に於て、學生が敎授の講義を以

て虎の卷と爲し、卒業の後、敢てそれ以上に機軸を出すの氣力無き者滔々これならずんばあらず。地下の徂徠に對し愧色多しと謂ふべし。却說、當時にありては、山崎闇齋の門下などは、差當り、徂徠の評に該當すべきものなるべし。闇齋派は闇齋よりして頗る講義を重んじ、講義筆記を金科玉條として珍重したるは、その學風なりき。されば昔しの學者の講義筆記にして、尤も多く存するものは闇齋派のみなり。闇齋は極めて師道を重んじ、師道嚴重ならざる可らずとの主義を貫徹せし人なりしかば、その講筵に臨める態度は、甚だ峻嚴なりき。闇齋の遺鉢を受けて、さらに峻峭なりしは淺見安正（絅齋）なりき。安正は赤心報國の四字を刻める大錫の刀を帶したる人にて、威重にして古武士の風あり。靖獻遺言講義二卷は、彼の講義の體裁を見るべきか。靖献遺言に歸去來辭を採りし所以を解釋して、結末の樂夫天命復奚疑に至りて即ち、堅固なる操守と大なる抱負とありて、天命の到るに隨がつて、自家主張を執りて平然泰然たるに至りては、即ち至誠大勇ある者に非れば能はずとなせる如きは、痛快なりと謂ふべし。彼の意、深重なる修養は能く人をして、世運の逆流に抗して從容たらしむべしと謂ふなり。安正の講筵に臨むや、門人をし

て豫め筆硯を整頓せしめ置き、一たび彼が見臺によるに及びては、又た墨を磨すことさへも許さゞりきといふ。講說の意氣込み、何んぞ夫れ盛なるや。

この頃、林氏は時々將軍に進講し、仰高門の東舍に出講することゝ、その任務なりしが、代々講說の名家に乏しかりしと見え、鳳岡の如きは、上手の評ありしも、聲名甞つて鳩巢、直方に拮抗するに至らざりき。人見友元かつて林鵞峯に向ひ、忠告せしことあり。林家の學者は經學を說くに、何れも講釋下手なり、心を付けらるべしと言へば。鵞峯以ての外に立腹し、我が家は道春以來御用の節を第一とし、弟子どもにも廣く學問をさすことにて、嘉右衛門(闇齋)などのやうに、講釋を專らにせぬこと家風なり。其方異見のことをせば、家の學問はやがて廢たるべしといへり。右の如く、當時講釋を得意とせし闇齋派にて、尤も講義に長じたるは直方なれば、諸大名の爭ひて招聘したるも無理ならず。甘雨亭叢書には、長島侯、直方を追懷して、古往今來誰得レ比レ之といひ、また談論如レ湧、聞者忘レ倦といひ、三宅尙齋は、東方第一人とまで推賞せり。直方は學術深邃ならず、また精明透徹せる頭腦をも具せるにあらず。その特長は總合統說の技能にありて、常識の發達と辯論の修練とは、彼をして當時に

名を得しめたる所以なるべし。學談雜錄に曰ふ。金が多ければ志を損ねるといふも合點の無い人の事なり。少し合點した人は、志を損ねる氣遣は無い。志が損ねぬからは、無いより有るが善い。洪範に食貨を主とし、大學生財有大道など見るべし。刀を差して居るとて、滅多に人を切ることはせぬ。人は異な事に惑ひて居る。也……これ實に、直方が講義の調子なりき。

闇齋派の講義は、先年出板されたる道學遺書及び日本倫理彙編の朱子派の部を參考するを要す。地方にも闇齋派の系統存するところには幾多も講義の遺編あるべく、大都の古書肆にては、これを求むることも難からず。

肥前唐津は、もと闇齋派の名家稻葉迂齋の招聘されたる關係もありて、同地方の鄕士間には、その系統儼として存せり。同地方の相知驛の舊家、進藤抵藏氏の如きはその一人にして、闇齋派の講義筆記七十餘冊を所藏せり。又是れ地方得難きの資料と謂ふべし。

直方が講義の一例を擧げんに論語陽貨篇の性相近也、習相遠也の條に、

人生れ出たときに餘り違はぬ。成長した上では、大きに違ふなり。孝行者あ

り、不孝者あり、親を殺す惡人あり。誕生の時に此別は無い、習からぞ。習於善善、習於惡惡とある見よ。されば子を育つるは、頗る大切の事なり。後ちには直るといふは、扨々愚ぞ。吾直らぬので見よ。幼少の時には、如何樣でも矯めらるゝぞ。草木の若枝でも見よ。若い時には如何にも、ためらるゝ。幼少の子を育つるはまつう大事にかけふことぞ。あとの相違とあるを見よ。扨々こわいことぞ。善人惡人と違て來るぞ。相近の語を見てやれ。大事と氣が付くが善い。常人は子を慰みと見るは扨々ぞ。苦勞なことぞ、中々慰みにはならぬ。育てそこなうてはならぬ。菊花を育つるにても見よ。花を善くせんとして、夜の目もねぬやうにするぞ。あれ次第にしては置かぬ。……大切な子をあれ次第にして、育つるは、どうした愚ぢや。凡夫は可愛がる計りて、後には直ると覺る。某も最初の一手が後までの邪魔になる。母は甘やかす、そうしては、ならぬと育つるが能し。獅子が子を崖から蹴落す、中から取て返して、かけあがるを育つるを考ふべし。松を育つるに釘を打つ意あることぞ。子を阿房にせまいと思ふては、夜の目は寢られぬ。されば樂みにはならぬ筈。

天下國家を持つもそれぞ。苦しみな筈なり。天下を取りて樂みと思ふは不覺、さて役人になるは苦勞なことなり。被仰付て難有とは言はぬ筈。結句、上から禮を仰せらるゝ筈なり、苦勞な目をさすなれば。子を隨分能く育てゝも、成長してあしければ、それは仕様が無い。堯も如在は、有るまじけれど、九人ともに、たはけなり。常人は有たい儘に、育てゝあしくする。守り役を付くるは大事なことぞ。吟味あるべきこと、隨一の人をつくべきこと。子を樂みと思ふ様に、學問も樂しみに、するといふは可笑しきことぞ。俗學は面白し、道學は面白く無いことぞ。我がすきを直すことぞ。せねばならぬ灸のやうなもの。學問は唯だ苦勞なことゝ思へ。朱子の語に、十七八の時喫而讀書とあり。喫とは苦勞なことなり。

習相遠耳。そこで相違つたものでこそ。始めは、それ程違くは無い、習からぞ。總べて何事でも、大事なり。諺でも初め悪くならうと一生直ほらぬ。幼少の時、付いた智慧は、のがれぬものぞ。本手を知らぬ碁は、上る程きたなくなる。人の身上も初めは善く、後はあしくなる也。その悪しくなつた時に善き仕方

あるべし。その時の仕様が悪るさに、大借に爲つたといふことあるべし。例へば女房の持ち様が五年早やかつたと言ふ類あるべし。とかく初めが大事ぞ。若い内が大事也。老人になつては、破れ茶碗をついて見るやうなもの。右段々の意で見れば、いかう覺悟になる、大事のことぞ。親の借錢を濟す子あり。親の身上を潰す子あり。凡そ人の身上、悪るくするは、大方かうした譯にて、悪くなつた言譯のならぬことぞ。人と不和になるといふも、ちつとしたところからぞ。

子の爲めに、吾が如き氣隨をやめねばならぬ。扨々男子を持てば苦勞々々。食物の養ひ第一大事也。家來に斗り、善いことをせよと責むるでは合點せぬ筈。我は氣儘をして、子を育つるも同じ。我からして見せねばならぬ。子を持ては、大役儀を蒙るやうなものなり。位無きことを憂へず、憂所以立とあり。

此の如きは元祿時代に第一人をして持て嘶されたる直方の講義なり。辭令巧妙にして、能く人の肺腑に入るべし。此に一事の注意すべきは、直方の講義は、字義訓詁には力を用ひざること是也。甘雨亭叢書に、其講書也、拆妙理於言表。至於訓

話事實」則略」之。使」人知」聖學之要不」在」此也と言へるは、此事也。これ併しながら講義の躰裁として不完全なることを免る可らず。

甘雨亭叢書に曰く、或云、先生快活脫洒、洞」見道體」と。もと直方は穎悟にして才發、開けたる人物なり。闇齋の嚴重に懲りたる反動として頗る寛和洒脫に流れたり。自ら奉ずる頗る豐裕にして、つねに醇酒を飲み、美肴を食ひ、堅苦の躰を爲さず。公侯の前にても、長坐になれば、未だ端坐せず。謂はゞ吾儘なる風なり。されば師道も右の如き調子にて、闇齋とは、打て變はりて、簡易洒脫、全く朋輩の交際を爲し、自らも慕來者の爲めに、書を講するにて、謂はゞ友生也、師弟など言ふ譯のものにあらず、たゞ從遊日久しきが爲めに、爾汝を以て稱呼するに至り、自ら師弟の如くなれるのみと言ひ。世の學者、多くその師を尊信せざるに、師自らは太だ尊大なるを笑へり。闇齋門下にかく計り洒脫の人を出せるは、一理あること也。極めて嚴重なる家庭に、屢蕩子を出すことあると同じく、人情は元來束縛を厭ふものなれば、師道も餘りに嚴重なるときは、時として無檢束の弟子を出すことあり。教育家の注意すべきところなるべし。靑二

才と漬け物とは、重きは負はずべしとの俚諺も遣り方によるとぞかし、直方は宏濶頴悟、終生よく名家の聲價を維持し得たりしも、才人の本色として、開豁洒脱に流れたる結果は、その學風頗る崩れて、鄙陋殆んど見るべきもの無きに至れることあり。閨門隱微說一篇の如きは、この間の消息を傳ふるものなり。

乙の篇は、海保漁村の家に傳へしものにて、十數年前平野知秋氏これを發見して世に公にせり。文中鄙猥言ふに忍びざるものあり。秋山玉山の春霄秘戲圖の詩と擇ふところ無きものなり。直方晚年、京洛の間に歷遊して、東都に歸來せしに、先生故人に會して、舊情を慰むること無かりしやと、人の問ひしに、直方否とよ、余は天下の英才と談ずることを樂みとす、老物眉を攢めて、尤悔する者は大嫌なりと。この一事、以て彼の俊爽なると共に、又隨分輕雋なるを知るべし。されば彼の講義は老後も、中々若やぎて面白可笑しき世談も口を衝きて出でし也。

當時岡島冠山(享保十三年歿五十五)は支那語に通じ、特に稗官小說に精しき人なりしが、その講義は、專ら眼前の事物に參證し、通俗講談として成功したりき。これ

又この時代に著聞せる一の講說家なりき。

第六節　このとき京都には仁齋の晚年なりしが、その子東涯つぎて立ち弊價父に讓らず、その他藤井懶齋、中村惕齋、宇都宮遯菴等ありしも、東涯を推して山斗となせり。江戶には物徂徠起りて、東涯に對峙し、その他木下順菴門下の白石、鳩巢あり、九州には貝原益軒あり。當時地方の敎育は是等の諸大家の勢力の下にありき。

徂徠は古文辭學を唱へ、古文辭を以て讀經の階梯と爲し自らその學を復古學と稱せり。又言ふ孔子の道は先王の道なり、その敎育は則ち詩書禮樂なり。子思、孟子が諸子と爭ひてより、孔子の道降りて儒家者流となれりとて、銳意聖學を以て任じ思、孟を誹り、宋儒を罵倒す。その著に論語徵、辨道、辨名あり。徂徠は英氣高邁、學識宏博にして、雄文宏辭を以て一世を風靡し、當代の學風爲めに一變せり。その後、韓使の江戶に貢せる者の言に、西山陽より江戶に至る間接するところの學者皆な是れ蘐園の流を汲める者なりと。徂徠も亦自ら言ふ吾黨之士傾海內矣と。徂徠の學界に於ける勢力、盛んなりと謂ふべし。これより先き仁齋京都にありて、學界の牛耳を執りしも、その人溫厚にして他と爭はず。隱然、學術研究の氣運を推進せしの

教育の系統

みなるも、徂徠に至りては、豪傑の資を抱きて、數多の秀才を提撕し、盛に自家の學風を皷吹して頗る世上の學者を刺激して、論難研究の好題目を與へたり。このころより學界に研究の生氣を帶び、敎育も亦漸く興隆の運に向へるを見る。而して益軒は九州に居て、數多の敎育上の著述を爲して、普通敎育に貢献したり。益軒の敎育說、その事功に於ても、推して本邦第一流の敎育家となすところなり。

蓋し當時敎育の系統に二流あり、江戶及び京都に出づるもの是なり。京都の學者は、千年文物の舊壘に據り、境遇も亦自ら靜にして、專ら學を修めて、青雲の途遠く態度沈靜なり。江戶の學者は政治上、中央の舞臺に居り「江戶兒」の社會に交はりて自ら風雲の氣に富み、その言動活潑なり。江戶と京都との學者はその境遇によりてかくの如く學風を異にするを以て、その敎育說も自ら二流に分れて發達せり。ことに徂徠江戶に出づるに及びて、その學、東涯に勝たざるも、その才、優に彼を凌駕して、學界の霸權をは江戶に收むるに至れり。而して各地方には、學者の系統によりて東西何れかの影響を受け、諸藩思ひ〳〵にその敎育法を採用したれば、試みに兩系統色別けの地圖を作らば、趣味ある錯綜せるものを現出すべし。

江戸系統の主なるものは、萩明倫館にして、京都系統に於ては、備前閑谷黌と肥前多久の聖廟これなり水戸は京都縉紳の學を傳へて、光圀獨創の見地を加へて、他の京都系に屬するものとは、自ら別種の特色を有せり。

第七節　徂徠が當時地方教育奬勵を論ぜるに、必ず模範を備前、長門に取る。二者は大藩にして、他に率先して學校を創建せしなり。護園多士濟々たれども、學政に參與せし者は山縣周南あるのみ、周南は安藤東野と共に、徂徠の兩翼を以て目されたる者にて、護園の學風を西陲に皷吹したり。唯だ夫毛利氏は外様大名の名流にして、随つて幕府に對して諸事控目にせしかば、事業割合に當代に著聞せざれども教育に力を盡くせしは頗る早し。徂徠が之を推賞せしことと以ある也。

政談　松平民部大輔、萩に學校のやうなることを立て、釋菜をもさせ扶持方等の料に五百石付け直き、毎年書籍を求むる料に、又五百石、合せて千石程のことにて家來に學問をさする故、今は彼の家中に學者多く出來したり。されども西國大名の習、公儀を憚りて、深くこれを隱くすなり。

毛利氏姓は大江、王朝のとき、菅原氏と共に儒者の巨擘たり。廣元の後武家とな

ると雖も、世々文學に志ある者鮮からず元就に至りて、兵馬の中にありて學を好み三子隆元、元春、隆景皆な好學の名あり。隆景が學校を創立せしも、蓋し元就の遺訓に基けるならんといふ。毛利氏の領國は大内氏の故地なり。大内氏は戰國の世に、文學の淵藪にして、京都の公卿も多く來投じ、ことに義興、義隆のときは、尤も文學を好みて、清原環翠軒、南村梅軒等の學者も輩出し、梅軒は朱子學を皷吹して、南學派の先驅となる。義隆が朱子集註を朝鮮に求めしとき、彼國未だ朱註無かりしといふ。大内氏の學制、ほゞ概見するところ無しと雖も、釐鋤の功、存せざること無ければ、幕初に毛利氏の領土が敎育上瘠地にては非ざりしなるべく、加之代々藩主の篤志を以てして、終に敎學興隆にあたりて、先鞭を著け得たるなるべし。

朝鮮金安國、大内義隆に復する書に云ふ。(前畧)此諸經皆具傳註、苟能講究、足以聞道義、出治化、無復加矣。而足下猶慊然於心。復勤遠价、更求朱子新註五經。可見足下向道之切、慕學之篤。不覺敬嘆。倘有焉、豈敢愛惜乎。今下所尚而習學者、皆程傳易、胡傳春秋、蔡傳書、朱傳詩、鄭注禮記。本國敎學所尚、不外此。別無朱氏新註。故前者、曾以本國所存者奉送。今承再索、美意不可虛負。唯念五經

之中、詩書尤切於講習。 今各藩選一件、以爲好書之助。

萩明倫館の創建は享保四年(一七一九)にあれども、其由來は遠し、萬治年中萬治元年(一六五八)毛利氏制法を定め、治國の方針を確立す。 これを萬治制法といふ則ち毛利氏の憲法なり。 その中に、士は文武講習の忽かせにす可からざることを、戒飭したりと雖も、當時なほ師儒に乏しく、士動もすれば弓馬に偏し易かりしが 元祿七年(一六九四)藩主吉廣躬ら好學の資に據り、學事の興隆を圖り、山縣長伯を擧用し又た小倉尚齋を江戸に置きて、學界の趨勢を考へしめ、學校創建の志ありしが、果さずして歿し、吉元嗣ぎ立ち遺緒を繼承し、家老以下並く學術の士を用ひ、山縣周南を侍講として、遂にその設計を採用して明倫館を建設せり。 學館の制たるや乃ち延喜式及び支那歴代の制に根據し江戸の學式を參酌して、學館及び聖廟を造り、師儒を集め諸生に給し、大に典籍を聚めて文武諸科を置く。 春秋には藩主自ら釋菜及び養老の禮を行ふ。 これより一藩學事振興せり。 最初の祭酒は尚齋にして、周南これに繼ぐ。 吉元また古樂を好む。 周南乃ち學館諸生をして樂を肄はしめ春秋釋菜にこれを用ふ。 藩主も講學の暇ときに樂をなし、自ら笙を皷し、簧を吹く。 禮

樂盛んにして、學士輩出し、講學の際頗る觀るべし。（山縣周南行狀參取）

日本敎育史資料三、

享保三年（月日欠）達、御家來中近年御備約事ノミ打續キ、文學武藝等ノ沙汰モ疎カニ相成、諸士ノ風俗不宜樣有之節ハ、連歌茶ノ湯、盤上等ノ玩ニ移リ、却テ儉約ノ爲ニモ不宜。第一諸士可嗜業ニ怠リ不相濟事ニ候云々。

享保三年六月達、一、文學諸武藝、諸士常ニ相嗜候儀ハ勿論ノ事ニ候。此道興隆ノ事ハ、風俗ノ本ニシテ、大小ノ御家來中、彌以テ面々可嗜業ニ不怠、其道ニ深ク志候樣ニ有之度儀ト被思召候。且又諸士中文武ノ道其藝ニ達シ指南等致シ候者モ有之由、達上聞奇特ノ儀ニ被思召候。向後モ指南等致候者追々有之カシト被思候事

享保五年十月、學頭役へ達セラルヽ明倫館內規條々。

一、於館中文學之儀、一切學頭役之可爲了簡候間、諸生其外共修學之儀ニ於テハ學頭ヨリ兼テ常例ヲ可被定置事。

一、諸生中之儀、學頭子分タルノ間、何分學頭ヨリ敎令ノ趣、聊不可有違背候。尤

諸生年間合ニ和修學之儀、隨分申合無懈怠大躰之儀ハ別テ行儀作法能ク可相嗜ノ旨、可被申付候事。「付」於館中諸生中座次ノ儀ハ不論貴賤可為入學之次第候。然バ先覺ハ後覺ヲ誘ヒ、後覺ハ先覺ヲ可敬段勿論候。且又於館中モ樸素其外諸生中集會列座之時ハ諸生年間ヨリ其席々ノ次第ヲ以可致着座事。諸生中勤學ノ儀、朝六時過ヨリ夜中ハ不可過九時事。（後略）

蓋し毛利氏封六州を失ひて僅に二州を領するや、財政の困難、名狀す可らざるものありて、一面には其行動常に幕府法規の下にあり。毛利氏の位置たる又難しと云ふべし。されば毛利氏は非常の勇斷を以て、萬治制法を制定し、富國強兵の計畫を實行せんと決心したるが、富國強兵は即ち經濟問題にして經濟上健全なる狀態は社會一般の智識進歩し、かつ國民生々の氣力振作するに非ざれば決して到達し得可らざる也。經濟問題は社會改良問題にして則ち教育問題たるなり。萬治制法に教學を奬勵したるは、著眼この點にありて存す。他日、毛利氏が富強の計畫を遂行し得たるは實に他に率先して教育問題に想到したるにあり。萬治制法は幾多の困難を排して、終始堅守されしなり。

萬治制法は先年出版の長周叢書の中に收む。

周南は護國多士中、教育家として尤も適當なる資格を具したる者なりき。周南の父を良齋といふ。家法極めて嚴厲にして、子弟にも辭色を假さず、つねに周南をして、書を樓上に讀ましめ、事故あるに非れば、下ることを許さず。かくして周南は少壯にして學術進み、寶永二年(一七〇五)十九歳にして東遊して徂徠の門に入りて、護國の學を鼓吹して力あり。彼は學術文章一に徂徠を遵奉せしが、その人物穩當にして、その教育法は徠門磊落の風少かりき。その著述に講學日記、爲學初問、作文初問あり。門下秀才多きが、瀧鶴臺、和智東郊等尤もも著聞せり。周南平生父祖に事へてつねに怡々として憂戚の色を現はすこと無く、親族友交に對して、常に穆々たり。子弟を遇するに、一善を得れば則ち賞揚し一才を得れば即ち推奬す。循々誘掖して聲色を大にせざれども、時々警發人をして憤悱已まざらしめき博聞强記にして、ことに歷史典故に通じたるが、少壯より東部に來往せること織るが如く、世態人情に練達し人と語れは江河の滔々として盡きざるが如くなり。事に當り人に接する眞率なれど

も大事を議り大義を斷するに當りては獨見の明至剛の氣儼然として奪ふ可らざるものあり。これによりて深く上下の信用を得てよく其事業を完成せり。好箇の教育家と謂ふべし。徂徠集を視れば彼の周南を推賞するのただ深厚なるを知るべし。

徂徠は周南との干係よりして、長藩の學政に就きては、屢その意見を貢献したるが就中、右田太夫に答ふる一篇の如きは、徂徠集中、大文字の一と稱せらる。要するに、徂徠は教育意見豐富なりしが、これを實際に施すの望は長藩の一周南によるのみなりき。

第八節　京都の儒者は覇氣少なく純然たる學者風の人多かりき。東涯堀河塾の外、藤井懶齋は數多の教育書を著はし、惕齋は德行先生として關西に尊重されたり。この頃は京都儒學の盛時にして而して惕齋、懶齋の參預したる事にしてなほ現存せる教育史上の一紀念物は、肥前多久の聖廟これなり。多久は鍋島氏の太夫なれども、その家系は龍造寺に屬す。當時領主多久茂文壯年有爲にして、教育に熱心に臣下にも亦人物多かりしが、その儒臣、惕齋及び懶齋に師事せし者あるに依て

多久聖廟

二子の設計によりて多久に聖廟を建てき。實に元祿十四年（一七〇一）にして、もとは支那より舶來せる聖像を安置せしが、このとき愓齋の監造にて、京都にて、文宣王の銅像を鑄たり。この廟現存して長崎、閑谷二聖廟と共に本邦最古の者とす。なほ喜ぶべきは、當時の樂器、祭器も、また皆な保存されたること是也。廟は神殿風にして神龕の中に、聖像を安置す。規模宏壯にして、廟貌の崇嚴なること、優に他の二者に勝れり。蓋し近世比類少なきものなるべし。これより先き學校を建て鶴山書院と稱し敎學を奬勵せしかば僅かに萬石の邑なれとも、遂に九州の鄒魯とまで呼ばるゝに至れり。

鶴山書院遷座記、（茂文）自少好讀聖賢之書棄詞章之學而重綱常之道、及壯無怠。安聖堂於宅奥而修春秋之藻祭。奏樂獻章。側架書庫。雖推和漢之雜書、盡除老佛之書無雜。於其晡之餘暇卑禮招學生、講習經傳有年。豈徒與其學於吾家而已也乎。於多久之食邑、鶴山之佳境新營書院。欲使邑之臣庶、讀書志道而以成其身。是余稱賢者亦不宜乎。（中畧）藤公（茂文）好善無息。於鶴山書院之境上、亦營一堂宇安孔聖之尊像、欲建萬世之基業。…………

多久は九州鐵道唐津線の起點莇原驛を去ること僅かに半里、山中の一郷、風光閑雅なれども、魚鹽の利あるにもあらず。而して能く莫大の貲を投じて、壯大なる聖廟を造るを得し所以のものは、多久は龍造寺氏、而して、その宰臣の系たる鍋島氏に事ふ。心中自ら拮抗の意ありて、その鋒を教育に露はしたるものなるべし。玆に最初に安置せし聖像は、聖廟の領邑たりし、肥前杵島郡山口村に存す。村民これを祭りて孔子社といひ、その秋祭は、釋奠に擬す。教學を尚ぶの美風は、山間僻陬に求め難きところ也。余去年八月此地を訪ひ孔子社に謁す。重疊たる山邱の中、寥落たる僻村、茅屋散在す。この地則ち孔子社あり。古老余を導きて、且つ舊時を說く。誠に小社なれども、神殿と拜殿とあり。拜殿の板の間に座し、稻田の風に吹かれ、古老と舊時農民の教育を語りしは、他にて得難き心境なりき。古老言ふ、多久の領邑にては、農民の爲めにも學校の設ありしかば、別に寺子屋は無く、況して僧徒に學ぶなどのことは絶えて無かりきと。

多久茂文はこの時期に於て標出すべき一人なるべし。その孔子を祭る文に

聖廟建設の眞意を載せたり。當代の教育史上頗る參考の價値あるを以て此に摘錄すべし。古人曰、視廟社則思敬。此言極有深意。人能報敬廟社之心念々不忘、事々不失、須臾不離敬、則萬善聚焉。（中略）道二、敬與不敬而已。是故先儒發明之曰、敬一心之主宰、萬事之根本、而爲萬世聖學之基本也。此敬也、視廟社則不發。由是觀之先設聖廟而使人知所敬。而後由是導之、則用力少、就効甚衆矣。大概人之所以不好學者、信道不篤也。所以信道不篤者未視聖廟也。何也。自學校之政不修、以凡庸視聖人、名經典曰外書。（中略）雖老師宿儒、尙曰循于俗習、崇他神佛、而於我聖人之道、瞋然不知所以宗之。況於未學者。若夫聖廟嚴然于茲。視者訝相謂曰、曷神也。曰、是孔子之神也。曰、孔子者、曷守之神也。曰、守孝悌忠信之人神也。人之知孝悌忠信之神、而每視思敬。則不識不知孝悌忠信之心、油然生焉。多久の近傍は、その風に化せられ、民間の教育進步し鄕士にして家塾を建て、その家に釋菜する者あるに至る。武士は武を偏重せしところに、かく計り教育の進めあるは感嘆すべきものあり。而して多久の事、從來多く教育史に記されず。故に余特に之を標出す。

出版

第九節　元祿時代には、普通教育に關する書籍、ことに講義、注釋、字彙、節用風のもの、續々として世に出で出板界は頓に賑ひたり。學術研究に關する著述の少なきは、專門學者の少なきが爲めにして、講義、注釋風のもの行はれしは師儒の欠乏を補充して、學生の獨學に資せんが爲めなりき。徂徠が遯菴漂注の功德を稱揚して、標注は瑣々たる細事の如きも、これによりて古人の書、讀むべく、十金中人產を費さずして四書皆な讀むべし、是れ先生の惠、窮邑子弟に及ぶもの極めて大なるもの也と言へる所以なり。遯菴の標注都鄙に流傳す。徂徠が江戶に歸來して教授せしとき、諸生貧窶なる者も、その引據する經史子集、稗官小說粲然として聽くべきもの、皆な遯菴の標注を讀み來れるなりといふ。徂徠また遯菴を贊して、古時州縣、各有章子師。而今先生所爲諸標注者、獨布在海內、といへるは、則ち標注著述家が、教師欠乏の時代に、教育に貢獻したる功德を盡くしたるもの也。遯菴、見林、毛利貞齋、黑川道秋等は、著名なる標注著述家なりしが、一面には外題學者と呼ばれき。外題學問といへるは、德行に構はず、只博文を好み、書數に涉ることを專らとして名譽を求むるが爲めにして、それ等の學者を外題學者といへり。とは言へ、教學普及の時代にあ

りては、外題學者は必要にして、又た其功德も甚だ大なりし也。この外に、貝原益軒ありて、註釋類の著述も多かりしが、中村惕齋、藤井懶齋と共に、その價値は敎訓類の著述にありて存す。惕齋、懶齋は仁齋、安正と共に京儒の四天王と呼ばれ、學德世に隱れ無し。元祿太平記に、その德行を比らべては、伊藤は中村が上に立たんこと難く、惕齋は源助(仁齋)が下に居ん事難くなん覺えける。諸禮樂曆數に於ては、中村氏に及ぶ者無し。是亦大祿を以て彼方此方より召さるゝと雖も、金銀米錢をば、比叡山をば十づゝ十重ねても、箸一本とも思はず。只清貧を悅び、西九條に引籠り、天命を樂むところは、其氣周茂叔と荷負はゞ棒が折れんと思ふ。懶齋是亦隱儒にして道を樂み、老莊の學問に於ては、此人に次ぐ者無し。陸象山と首引しても負けぬ男と評判せり。この三君子は、學德ともに、かく計り世に持て囃されたる上にその敎訓書類も、有益なるもの多かりしかば隨つて世に流傳せり。

講義、註釋の類は、諺解。詳解。新疏。大全。講義。圖解。合解。首書。假名抄等の名を以て現はれき。これ等の書籍は、敎師講義の資に供すべきものと、學生の參考書によきもの、又全く獨學に資せんとするもありて、近思錄にさへ假名抄ある

に至れり。近思錄を讀まんほどの者、假名抄を賴むこと無し、唯だ是れ註解類、流行の餘響なりといふべし。講義、註解の類は、簡明にして、さら〳〵と聞へ易きを好しとすべし。當時流行せし註解類は、多くは鼇頭に典故を集め、講義に異說を並らべ、雜然として衆說の陳列場となし、解釋に本末の區別立たずして、學生の頭腦を攪亂せしむるに過ぎざるもの多く、中には本解を付して異說を參考にしたるも、剪裁なほ整頓せざるもの多かりき。されば當時すでに、註解類の弊害を唱へたるものあり。その要は、惣じて諸の書物に、諺解詳解など山の如くに候へども、是皆義理を見るには益無し。物により餘り文字の抄を仕過し、初心の者、註の抄を見るうちには、本文の抄を忘れ、前にある事、後に出し、末に見えしこと本にしるし、彼是多くは入りほがにして、どぎ〳〵のまぎらはしく惑ひ易きものなり。初心の人假名抄の目近きを悅び、一部の內、半程讀人あれども事永ければ、ひたもの前後に迷ひて、序を覺ゆること無く、後には退屈して學問の志空しくなる者多しと。（元祿太平記能く註解類の弊害を穿てるもの也。

註解類の雜然として世に出でたるは、當時學者の講義の反射鏡とも謂ふべし。

當時流行せし講義は感發を主とせずして、縱說橫說、幾多の雜貨を店頭に臚列する如く、無數の新智識を聽者に注入するを以て能事となせる如し。講義にして如此態度に流るるときは、其趨勢の歸するところ、學生をして、先生の講義の豐富にして、一時に多くの新智識を吸收し得るを喜び、その研究の氣力は講義の勞力に壓倒されて遂に向上の精神を失ふに至る。於此乎講義筆記の光采、大に揚るなり。彼の諺解類は則ち講義筆記と性質を同じくするものなり。先生は生きたる諺解、註解にして、諺解、註解は先生の縮寫なりき。諺解、註解は先生の講義の流動せるに若かず。而して地方獨學の書生は諺解、注解によりて、都門先生の風采を想望したりしなり。徂來、講義の弊害を說きといふ。侍坐日久、耳根旋開、得益漸多。遂謂先生眞聖人。試一閉戶讀書。累日所獲終不如一日所聞、坐收衆美。由是漸生卑劣心。貴耳賤目、廢讀務聽。與其切々自攻、寧終身講席。此心一生、前途遂畫。何等の痛切ぞ。講義の餘弊、古今一轍なりと謂ふべし。講義そのもの專ら豐富と善美とを務めて學生をして敎師の講義にのみ依賴せしめ、その敎師を離るゝ後ちは、唯その講義を繰返し讀誦し、專らこれを標準として、これを墨守し、敢て其れ以外に一頭地を放出する

能はざるに至らしめんか、其は決して講義の德澤にあらず。徂徠が所謂、吾未嘗見講帷下出名士といへるもの則ちこれ也。講義は感發を主とすべし。注入は俺くまで禁ぜざる可らず。かの注釋類は注入の太甚しきものなり、而して當代に流行せし講義の面影なり。

字彙の出板も漸く起りぬ。元祿太平記に曰く、小補韻字會は、字註くわしけれども、文字少し。字彙はつねに用ゆべきものなれども、又文字の不足多し。假令字註は、おらくとも字數を載せ、初心の求め易き字書は無きか。首書字彙を左に置き、右に續字彙補をおかば文字に事欠くまじ。去りながら貧學にして、南部の書を求め難ければ、頭書漢玉篇こそ初學の字を引く爲に宜しく候。毛利貞齋の輯められし書に、是程はやるは御座無く候。

文會雜記　春臺(太宰)は殊の外に字書を正されたり。字彙玉篇韻會を以てせられたり。其内字彙字をたづぬるによしといへりと君修話也。元禎云徠翁のもたれたる四部稿の中、一冊チラと見たるに、上に書込みあり。正字通を專らに引かれたり。

世の中に流行せし書籍の返遷を見るは趣味ある事なり。文章にて言へば、戰國時代までは、錦繡段。古文眞寶などは、尤も廣く讀まれしものにて、古文眞寶の如きは、學者の金科玉條とせしところなりしが、江戸時代となり追々好書の輸入さるゝに隨ひ、頗る面目を改めたり。古文眞寶に代はりて、行はれしは、文章軌範にて、次ぎに唐宋八大家文讀本など流行するに至れり。文章軌範は學業者の爲に、時文に稗益すべき古文を集めたるものなれど、本邦の學者これに注意せずして、これを以て文章の傑作とのみ爲して、支那の時文に著眼する者無かりき。

文章軌範は、後ちます〳〵流行して、幕末に賴山陽は謝選拾遺を編纂して、是亦廣く行はれたるが、故川田博士は、山陽先生も時文にたより無き古文を撰集めて謝選拾遺と名けられたるを見れば、なほ軌範と言へる名に拘りて、其主旨には心付かざりしなるべしと言はれたり。

著作權思想

當時著作權思想は發達せず。江戸と京阪とは別々に出板の組合ありて、各その取締を爲し僞板をば防ぎ、新板の紹介をば互に爲せしが、著作權思想の幼稚なりしを以て、僞作多く世に出でたり。益軒先生の著述廣く世に行はるゝや、狡猾なる操

陋者益軒流の躰様を以て、多く類似の教訓書を出だせり。世に之を貝原ものといふ。女大學は則ち貝原もの丶尤も時を得しものなり。女大學が益軒の著述にあらざることは、その躰裁の疎漏にして、益軒の他の著述に似ざること丶、その内容が全く和俗童子訓中の教女子法の切抜きなるとを以ても疑ふ可らざることなり。或はこれを益軒夫人東軒の作なりとの説もあれども、實は益軒の作にもあらざる也。

女大學に就きては、三十四年秋、余は女大學辨を太陽紙上に掲載せしに、博士井上(哲)先生は、直ちに同意を表せられたるが、尚ほ博士は、貝原氏に女大學は東軒夫人の作なりと言傳ふるよしを述べられたるが、余は東軒の作にもあらずと信ずる也。この書には益軒の序、跋、凡例等一切これ無きのみならず、著作の年時を署せず。此の如きは益軒の著述にあるまじきこと也。益軒は、又た此の如き杜撰の著作を爲して、後世に至りて責をその最愛の夫人に嫁する如きことを爲さゞるべし。益軒の著作は、躰裁に於ても、太だ丁寧にして、著作の年時知れざること無し。かつ益軒先生年譜を閲するに、女大學の事を載せざるは、

注意すべきことなり。世間識者無きにあらざれども、この書が大に持て囃されたるは、その時代思想に投合したると、一は益軒の名とに依りてなるべし。されば女大學は、その著作が貝原ものの也といふを以て、教育史上より等閑視す可らざるものなり。

本朝千字文の如きも、貝原ものゝ一例也。益軒貝原先生遺稿。傍註戸川後學と題す。戸川後學とは果して何人ぞ。その署名の形式、甚だ無責任なりと云はざる可らず。且つ此書は舊貝原先生の草稿匣に殘り存しとあれど、尤も信ず可らず。造句拙劣、とても益軒の著作にあらず。

益軒の著述に、小學句讀集疏あり。これは益軒の研究には欠く可らざるものなるが、此書の前身は小學備考とて、先生壯年の作なり。小學備考圖らず世に公けにされたるが、先生その書に不完全のところ多きを愧ぢ、晩年集疏を著はすの志を起せり。集疏の凡例に、余壯年之時、作小學備考……其後未及訂正、忽被或人謄寫去、終出于坊間、而刊布于世、不堪悔耻。今適書肆請飜刻。故頗删補而訂正之更名之以集疏とて、己れの著述が勝手に出板されたるを咎むること無く、却て其書の不完全

なるは悔恥に堪へずと濟まして謙遜せられたるは、當代に著作權思想の發達せざりし好例と謂ふべし。

東京書肆嵩山房(小林新兵衛)は、都下第一の舊書肆なり。嵩山房とは、徂徠の名づけしにて、これに就きては有名なる佳話あり。先年余同氏を訪ひて、古書を見、かつ出板の歷史に就きて、有益なる資料を得たり。嵩山房は蘐園得意の書肆にして、蘐園の學、天下を風靡せしときに當り、少からぬ利益を得たるが、有力なる著作家は服部南郭及び太宰春臺なりき。そのころの主人は、心學にも造詣ありて、頗る篤實なる人なりしが、南郭春臺兩先生の木主を作りて歲時その祭を爲すことゝせり。なほ又、吾家の繁榮は板木の爲なればとて、毎夏時、滿庫の板木を曝らすと共に、板木祭をなすことを家例とせり。有名なる正平版論語の板木は、この家より帝國博物館に納めたる也。

出板の術も又著るしく進みたり。活版は漸く廢たれて、櫻材の木板のみなりしが、このころより黄楊板起り、習字本には細井廣澤の創意によれる正面摺の墨帖行はるゝに至れり。四書五經を始め、大和書の戲草に至るまで、梓の數、年々に廣がり、

已に吉野の櫻も切盡すかとあやまたる程に、ずは見よ黄楊板の三重韻起りしは、櫻が絕えし故かと思へば、左にあらで黄楊は却て板貨、櫻に五割增じやといふと元祿太平記に言へり。これより以前には、文字の排列も整正ならず、罫線も眞直なるもの少かりしが、この時代よりは、書籍の躰裁頗る整ひ、大本割合に少なくなりて、袖珍本漸く行はるゝに至れり。

元祿太平記、此板本、梅村氏その昔、三重韻を以て、大に利を得し故、そのむくひの爲め、新に黄楊板を行ふ。筆工は當時の名人、牧村伊六に、筆耕をとらせ、壹丁を壹匁二分書に定め、僅かなる寸珍の筆料三百匁に及ぶ。板一枚の彫手間三十匁餘に至る。然れども此板成就せし年、入目殘らず取戻し、續きて年々利益を得。今に於て黄楊板を用ゐる事、西は對馬を限り、東は松島に及ぶ。夫故諸國に梅村を黄楊村と名づけ、その沙汰よろしく、一を以て萬を知れといふ事誠なる哉、此三重韻の譽ある故、梅村板とさへ言へば、世間に推し並べ能い板ぞと思ふには、是彌白の才の賢きによる所ぞかし、此頃或人節用集を寸珍にして、首書を加へ、書禮を書入れ土產節用と名付け、一年程にして寫本出來侍り、是を

元祿の世態

黄楊板にせば三重韻には倍して賣れんと思ひ、書林彼是望むといへども、黄楊の價にあぶみ、暫らく日和を見合はする事、梅村の容量に似たる人、稀なる故なり。誠に梅村無くなりて黄楊板の道絶えぬと、世に歎く人多かり。

京都の本屋七十二軒は、中古より定まりたる歴々の書林、孔門七十二賢にかたとり、其中に、林、村上、野田、山本、八尾、風月、秋田、上村、中野、武村、此十軒を十哲と名付けて、專ら世上に隱れなく、何れ勝れし人々也。然れども昔より書物屋の歴々に學問をする人無し。(中略)外の商賣人には、學問する人多けれ共、却て書林は文盲なり。加之儒書一通りの外題をさへ虚に覺えし人稀に、大概は書籍目錄を懷中する者多し。

第十節　俗つれ〴〵にいはく、汐汲踊も、うね足袋はきて淺しき時世に遇へりと。實に元祿は華美放縱の世なりき。富の勢力、發達せしと共に、社會は惟だその情慾の趨くところに馳せて風儀頽蕩とせり。猫の蚤取り。死一倍の借金の如きは如何に、元祿の世が放蕩奢澤なりしかを示して餘ありと謂ふべし。

本朝二十不孝(卷一)　抑死一倍金子千兩借りて、其親相果つると、三日か中にても

二千兩にて返すなり。手形は二千兩の預にして、小判一兩月一夕の算用に、一年の利金ばかり首に取るなり、千兩の二百兩減きて八百兩にて渡しけり。此内借次の長崎屋世並にて、百兩取て占め手代への禮とて二十兩取られ、相判に家屋敷のある人賴みしに此二人に判代とて利無しに、二百兩借られ、此ほど此事に入用銀とて取られ、此座に居賃といふに人もあり。大分事首尾して御祝儀を貰はれ、はらりと切解きて、千兩のものを手取は四百六十五兩殘りしを、あまたの大鼓持いさめて、是は目出度し、大臣御立と直に御供申し、四條の色宿にて硯紙取出し、拂方の覺書、久しく埋もれたる揚屋のとゞけ、野郎の花代、茶屋の捌き、大臣の御意にて二階の天井仕りました。萬事の拂十兩迄は入らずと、遣日記を御目に懸くる。二三年以前に旅芝居のとき損したこと申すやら、覺も無き奉加帳取出し、無緣法界六眷屬までに騷立てられ、悲しや此金物の見事に皆になし、一兩三歩殘りしを、さもしや、方々大臣に金子など持たしますわと、取つてからりと錢箱に抛入られ、浮々と酒になる時、あの夢の覺めぬ内にと、一人々々立退き殘る者とて內より附きし六尺一人、御宿の戸を閉め時と連れまし

て歸りけり。いよ〳〵親仁の無事を嘆き、江州多賀大明神に參り、親の命を短く祈れど何か利きし、此神は壽命神なれば、尚ほ長生を恨み諸神諸佛をたゝきまわし、七日が内にと調伏すれば、願に任かせ親仁眩暈心にて、各驅付けしに、筵六嬉しき片手に手頃、穏へ置きたる毒藥取出し是氣付ありと、素湯取寄せ、交碎き、覺えず毒の試みしに忽ち空しくなりぬ。（中略）其後親仁は諸息通ひ出て、子は先だちけるを知らで之を歎き玉へり。慾に日見えぬ金の貸手は今思ひ當るべし。

織留　五十計りの男、風呂敷を肩にかけて、猫の蚤を取りましよと聲立てゝまはりける。隱居方の手白三毛をかわいがらるゝ人、取れとて頼まれけるに、一疋三文づゝに極め名譽に取ける。先づ猫に湯をかけて洗ひ、ぬれ身をその儘狼の皮につゝみてしばし抱きけるうちに、蚤とも、ぬれたるところをうたてがり皆狼の皮に摺りけるを大道へふるひ捨てける。是程の事にも抑も何とかして、分別仕出し、身過の種とはなりぬ。

今時の縁付け仲人十分一取りによりて、大かたはかたり半分なり。娘の親の

かたには僞りいふにしてから、二十二三までも振袖着せおきて、十七の八のと年を隱す分にて、別の事無し。男の方に僞いふからは、賴み言入りひの絹卷物、包み銀も當座借にして婚禮調ひ、敷銀を受取るといなや乞つめらるゝ手形銀をすまし、はや五日歸りより物每に品あしく、仲居お物師も今日までの約束と祝儀の少なきに不足言ひて嫁御の乘物より先きに立ちて歸る。里への土產ものに、棡重取りは遣はしければ、前々の銀に大分なれば、又其上には掛商ひならぬいふ。肴屋からはある鯛を無いとておこさず。漸く紙屋を文作り何にも角にも杉原を進上物に嫁におくれば、貝添お乳はへり〳〵不首尾一つ〳〵おふくろに告げて、まだも足元あかるい內に御分別を遊ばし、荷物取返しにといふ。女の身の悲しさは爰也、はや自由ならぬことぞ。世の聞えも宜しからねば、何事も沙汰無しにして、歸しさまに、敷銀の事は是非も無し云々。

俗つれ〳〵　現銀三千七百貫目持て、大きな顏をしやるな。都の身代袖鑑を見るに、やう〳〵四十七番目に書けり。然れば京の分限は遠國の手前善とは格別ぞかし。家に傳へし諸道具計りも大分なり。

好色五人女(巻三姿の關守)　またゆたかに乘物つらせて、女未だ十三か四か、髮すき流し先をすこし折もどし、紅の絹たゝみてむすび、前髮若衆のすなるやうにわけさせ金番にて結はせ、五分櫛のまよらかなるさし掛け。まづは美しさ一つ／＼いふまでも無し。白繻子に墨形の肌着、上は玉むし色のしゆすに、孔雀の切付、見へすくやうに、その上に唐糸の網を掛け、さてもたくみし小袖に十二色のたゝみ帶素足に紙緒のはき物、うき世笠、跡よりもたせて、藤の八房つらなりをかざし、見ぬ人のためといはぬ計りの風儀。今朝から見盡せし美女とも、是にけをされて其名ゆかしく尋けるに、室町のさる息女、今小町と云捨てゝ行く。

本朝二十不孝、　娑婆塞に、今の世に多きものは、供一人連れし醫師と道心者、扨ても坊主勝ちに、そなりにける。殊更近年女の墨染も佛の身ならば、彼等が心底を聞きたし。後の世願ふは稀なるべし。

日本永代藏　それ世の中に借銀の利足程おそろしきものは無し。此御寺(泉州水間寺)にて、萬人かり錢することあり。當年一錢あづかりて、來年二錢にし

て返し百文請取二百文にて相濟ましぬ。是れ觀音の錢なればいづれも失墜無く返納し奉る。おの／＼五錢三錢十錢より內を借りけるに、云々。

好色一代男　世に住めば袴肩衣もむづかし、人の風情とて朝毎に髮ゆはするも心に懸れば、十德に態かへて昔は男山、今こそ樂阿彌と、八幡の柴の座といふ所に樂を極め、東に三十萬兩の小判の內藏を造らせ西に銀の間、云々。

俗つれづれ　今の難波の蓁下屋敷に、中二階の簾捲き上げ、京から取よせたる大名行の妾ものゝ、又は舞臺子の洒落れて、紫の手細取捨てゝ、男なりけるも面白し。髮切姿は加賀笠の小せんとや、隱れも無き者のあるよし。或は男憎みの法衣比丘尼、世は種々の遊興所、琴の遠音、尺八、名木薰りに、墓の煙も立消えするなり。

織留、人間の第一は筆道執行の後、學文の外無し。今の世の人心、分限相應より高うとまり、鞠塲の柳陰に日を暮らし、九損一德に早足がきけばとて、別の事無し。闇き夜は提灯持たせて、靜かに行けば、溝へははまらぬもの也。殊更楊弓は官女の業なり。いかにしても大男の慰み事にはぬるし

俗つれづれ　衣裳ゆたかに、下には藤色に碁盤の紅縞つけ、中には瑠璃紺に同じ紅縞の裏つけ、上に薄玉子色に同じ紅縞の裏つけ、肩より一尺ほど青々と御簾の模樣、唐織の緣、紅の房を下げ、裾は亂れ萩、帶は黑き天鵞絨に大紋の石疊後に廻して御所結の端に、銀にて鶴菱の四紋返し褄、裾先を少しあげて、帶の下に挾み、抱帶無しに細き忍帶を占め。素き合湯具の裾に鉛の鎮を掛け、總淺黃金剛を踏みきて擦足に歩みしめつけ島田髮、前も後も長同じとにして中ほどに平髻を懸け、插櫛白擅の木地に、珊瑚樹の切入、梅の古木に氣を盡くし、前髮に鯨の鰭の曲りたるものを入れ髮の狂はぬやうに仕掛け、わづか俯向き首筋あり〱と見せて突肱に左の手先きにて袖口をあげ、各の肩より袖ゆきしとやかに流す。

元祿の世態は、婦人の態度に表白せらる。その華奢と藝術の發達とは、伊達風の一語に盡くと謂ふべし。この二者は富の勢力の發達をあらはすもの也。その半面には放縱あり破倫ありき。藝術の發達より見れば、元祿は洵に絢爛たる光輝ある時代なれども、その裏面には腐敗あり破產ありて、風俗の頽唐は經濟の亂脈を來

たしやがて社會の衰靡を促がしつゝあるを見るなり。これすべて敎育の普及せず。學術の闡明されざるによりて然るなり。この時代は幕初質撲の時代を去ること猶甚だ遠からざるを以て、人情猶ほ悠長なるところもありき。京都を去ること僅かに十四五里にして、早や小判を知らざる茶屋あり。連歌の花の本より露の一字、また立花の家より鷲尾の前置を質に入れ、太甚しきは柿本人丸より以來の秀美なりと自慢の髭を質に入れし公卿あり呑氣の沙汰と謂ふべし。

織留、昔日立花の家より、鷲尾の前置を、金子百兩の質に入られける。又連歌の花の本より露といふ一字を黄金二十枚に置かれける。まことに都の人心、請人無しに、其一人の手形にて切も定めず借ける。兎角質にあるうちは、花さしに鷲尾をつかわせず、連歌師に露といふ事をいたさせねば、此約束を迷惑して請けられけると也。又貧乏公家ありて、質物に事を欠かれ柿本人丸より此かたは、我なりと自慢せられし髭を、銀一貫目に置かれけるに、是は半年づゝの契約切るが延びると剃刀持ちて請取に來ればこれも才覺して元利算用仕立て請られけると也。又撞木町の遊女、手づまりしとき、誓紙を質に置してこそお

かしけれ。是は銀借者が分別して、客の手前よりもらひ、銀のたまるうち、利を高くして取替へける云々。

優美にして悠長、是れ元祿の世態なり。すべて是れ婦人の態度に表白されたり敢爲進取の氣風無く、また高尚なる理性の發現を見ず。理想無く、主義無く、唯だ淺薄なる感情の滿足を求むるのみ。態度苟安局促にして、小日本の特色をばあらはせり。元祿の世は若隱居の代なり、また樂隱居の代なりき。隱居して形ばかりの法體の流行せるは競爭場裏の煩累を避けて專ら卑下なる生活上の快樂に耽らんとするの引込思案に出づるものにして、滔々たる社會富民紳士の欲望此の如きは則ち吾國民精神の衰耗せるを證するものにあらずや。外、敵國無ければ國振はず。吾國民精神のかばかり衰耗せるは、世界の智識を謝絕して、內には學術の研究振はざりしを以てなり。

本朝二十不孝　都には今四十の內外を問はず、法體して、樂隱居をすること專らに流行りぬ。頭丸めしとて金さへあれば、色里の太夫もそれには構はず自由になる。川原の野郎も猶ほ遊山に變はることと無し。世のむづかしきめに

逢はぬが、此德何にかは換ゆべし

元祿の世は、藝術の光輝ある發達を爲せるにも係らず一般社會の智識の淺薄なる驚くべきものあり。社會の多數のものは、未だ國體の尊嚴を辨せざりき。このごろ世の喝采を博せし淨瑠璃中にて、皇室に關する文句を見てこれを知るべし。ことに墮落せるものは武士なりき。武士は無學無氣力にして、その帶刀は漸く細くなりて、健剛なる氣節は市井の間に移りて任俠の風起れり。任俠は義に似て非なるもの。畢竟忠厚の氣魄降りて客氣の勇となれるに過ぎざるなり。

王陽明文集(十四、重修文山祠記)、忠義之降激而爲氣節。氣節之弊、流而爲客氣。其上焉者、無所爲而爲。固公所謂成仁取義者矣。其次有所爲矣。然猶其氣之近於正者也。造其弊也、遂有憑其憤戾粗鄙之氣、以行其冒嫉褊驁之私。士流於矯拂、民入於健訟。人欲熾而天理滅。而猶自視以爲氣節。若是者容有之乎。則於公之道、非所謂操戈入室者歟。

この時代に熱心なる教育家出でゝ教育の必要を絶叫したるは、則ち放縱なる元祿の社會の反影なりと謂ふべし。社會墮落せるが故に刷新の必要あるなり。こ

元祿社會の欠陷

とに、この時代に女子に敎育說の興起し、峻嚴なる「女大學」の歡迎されたるは、男女關係の紊亂して、女德の地に落ちたることを示すものなり。王朝の末より鎌倉時代の初めに當りて、女德の腐敗せしときに、貞永式目のうちに、女德に關して嚴重なる要求起りて、貞女の道こゝに確立せしと同じく、風儀壞亂せる元祿の世は救濟の道を求めて、遂に窮屈なる「女大學」の女子道德を產出するに至れり。この時代に出でし敬虔なる敎育は、則ち此墮落せる社會に對する救ひの聲なりしなり。

第十一節　元祿社會の二大欠陷は、法治の弊と社會の制度立たざることとの二點なり。國を鎖ざして、外に光明を認めず、人心專ら內に嚮へるに敎化の道未だ開けずして、唯だ法度を以て治を行はんとするを以て、勢ひ局促、拘泥の弊に流れざるを得ず。敎育の以て政治の根底を爲すものの無き間は、政治は形式に流れ、便宜に流れて、設令外觀には整頓の美ありと雖も、久しからずして、その精神は老ゐざるを得ざるなり。政治の老ゆるといふは、禮讓貫徹せずして、生々の氣脫却せるを言ふ。政治老ふれば社會の進運を阻滯せしめ、國民の不幸、これより大なるは無し。而してその根原は敎育の以て人心を振肅するものの無きによるなり。元祿社會の第一の

欠陥は則ち是なりき。

政談（當時世話敷風俗を改むべき事）、せわしなき風俗と云ふは、元來政をする人、治めの道を知らず。法度計りにて國を治むることに成りたる上に、上たる人の心の我儘より出來ることにて、下のおもひやり無き故也。御城の御規式の節も、烏帽子、直垂長袴など着たるは禮義正しきやうなれども、元來禮法を用ひられざる故、禮讓の見ごとなることは無くて、御目付四方八方を奔り歩き唯々間の拔けぬやうにと世話をやく。御禮すめば、大勢の人込合ひて早く我先きに退出し、老中を廻らんとする故、無禮混亂甚し。元來禮法と云ふ事無く、唯々見計りにて、當座の利口を以て立廻ること故なり。右の無禮混亂を靜めんとて御目付又た四方八方奔り廻りて、抑ゆるとも手にあまる。夫より大下馬前老中の門前御城下途中の騷動云ふばかり無し。是皆禮法立たず揖讓の見ごとなることを知らず、唯々當座の見計ひ、利口計りにて立派を働く風俗、唯々間に合はせんとする故也。間を合はすると云ふは、上の人の我儘なる機嫌に合することにて、下たるものの唯々騷ぎ立ちて奔り廻れるを、取廻しの善きとす

ることになる故、何もかも忽ちの内に下知の通りになるを善き奉公とすることゝ、上たる役人奉行の風俗也。

第二の欠陥は、社會制度立たざるにあり。　當時は大亂の後ちに、武威を以て天下を治め玉ひたるに、時代遙かに隔りて古の制度は用ひ難く、其上大亂後なれば、何事も制度皆な亡せ失せたりし代の風俗を改めず、其儘に差措くによりて、今の代には何事も制度無く、上下共に心儘の世界なりと徂徠の言へりしは、當時の情態なりき、上下唯その外聞をのみ善くせんとすれば、自然に上をのみ僭するに至るべく、而して人情は華美を好むが故に、風俗滔々として華美放縱に流るゝなり。　綱吉が易の講釋を大名旗下及び儒生に拜聞せしめしとき、徂徠亦列席せしに、御老中若年寄も、旗下百官無官に至るまで、衣服も餘り差別無かりしを見て、覺えず落涙せしといふ。當時禮儀に確と定りたること無く、小笠原流専ら用ひらるゝことゝなりしが、小笠原の諸禮には上下の別無く、唯々其行草と區別し、丁寧に念を入れたるが、眞の古實なりと覺ゆるに至れり。　華美放縱の慾を滿足せしむるものは黄金なり。　兎角金さへあれば、賤しき民も、大名の如くして何の咎も無し。　只悲しきは、金を持たず手

前悪しければ自ら人に劣り肩身すぼらしくなる世界とはなりし也。黄金を多く有せし者は商人なり。商人は大名武士と違ひ仕ふる君も無く、六ケしき武士の禮義作法も無く、金のあるに任かせて、生活上の慾望を逞くし、太甚しきは若隱居法躰して浮世の煩累を避くるに至る。武家は理財益困難となりて、商人の勢は日に盛んになり、極樂世界は商人の中に生ず。元祿の時代には、富の勢力、頓に發現したる也。兎角金無ければ成らぬ世界と極りて、拜金主義は社會に横行濶歩せり。此の如き元祿社會の第二の欠陷なり。國民は相率ゐて膝を黄金に屈す。黄金を得て、果して何を爲すやと云へば、單に生活上の嗜好を滿足せしむるに過ぎず。元祿時代は實に小日本なりき。

政談　近年は何もかも丁寧に念を入るゝを善きと思ふ人多し。これにより て、人々の心任かせて、物事に審かに念を入れんとすること、中ごろよりの世の風俗とはなり、物の數品多くなる。儉約の御ふれあれば、物の數、品多きは禮也、奢りにあらず粗相なるものを用ふるが儉約なりと心得る故、矢張り審かに數品多き上にて物ごと粗相に輕くせんとす。粗相なるもの數品多く合せて見

れば、結構なるもの一色よりも物入多くなれども、中畧。この五六十年以前も制度は無けれども、物事すらり〳〵となりたる風俗なり。其故ものを審かにする風は無きことにて、草履かた〳〵木履かた〳〵のやうなることにて事すみたり。其時分に奢るものあれども、叉甚だ質素なる人もありて、おたりを見合はする風俗無かりし故、人さまで困窮せず

徂徠の教育説

第十二節　今や元祿時代に於ける教育説を述ぶべきときに到達せり　この時代に於ける二大教育家は、益軒及び徂徠なり。

徂徠は江戸學者の山斗なり。從徠本邦學者講帷の下、人物を出すこと割合に稀なりき。自ら造詣するには長ずれども門下を提撕することには長ぜず。換言すれば教育の方法に於ては、寧ろ拙なりしと謂ふべし。これ恐らくは儒者の通弊たる聖人の德化を無限大のものと信じて、己が理想のために、その被教育者を一定の模型に入れんとせし結果にあらざる無きを得んや。徂徠の教育說は其根底に於て個性及び、その養成の必要を認識せり。それ教育は成熟者が未熟者の爲めに設くる一の慈善事業に屬するものなれば、其個性を貴重し、己が理想の爲めに強ゐて他

を一定の模型に入れんとする如きことある可らず。徂徠は謂へらく、人は皆箇性あり、而して教育は箇性の自然に發達するを助成すべきものなりと。學則第七に曰はく、天命之謂性。人殊其性、殊其德。達才成德、不可得而一焉。孔門諸子、各得其性所近者。豈仲尼之教育、有所不足乎。譬如時雨化之、莫不生焉已。大者大生、小者小生。豈不欲小者大生耶、實命不同。君子知命、故不強之。及乎器之成也、雖聖人有所不及焉。故聖人不敢強之。是故人可皆為聖人者非也。性可易者非也。君子之不器、水可舟而陸可車者非也。世俗所尙者人也非天也。（中畧）命也者不可如之何者也。故學而得其性所近、亦猶若是天。達其才成器、以共天職古之道也。彼が教育の見地は頗る明瞭なりと謂ふべし。徂徠更に歩を進めて、その社會觀を表白し己れ自ら教育の恩澤を享受するを得ざるときは、則ち他をして教育の恩澤に霑ふことを得せしめんと力むれば、則ち己れ之を享受するが如しと謂へるは、志操高尙にして教育家の態度ありと謂ふべし。

學則中に云へる性は則ち箇性なり。徂徠は其教育說の根本に於て、箇性及び其養成の必要を認識せり。而して彼は謂へらく、人は皆箇性あり、されば一定

の模型に入れ得べきものにあらずして、自然に生長するものあり。而して教育は、その自然の發達を助成すべきものなることを主張せり。故に徂徠は當時群儒の見解と相反し、その教育主義は完全なる理想の人を作らんとするには非ざりし也。人を一定の模型に投ぜんとする時流學者の見には痛く反對せり。彼が如何に灌漑すればとて、稲よりは粟を得可らずと言ひて、箇性を認識すると共に、隨つてこれに伴ふところの、人は皆な聖人たるべしといふは非也との結論を主張せり。

益軒、徂徠以後の教育家は細井平洲なるが平洲の教育主義は、箇性を貴重する點に於ては、徂徠と一致せり。その說に、扨て人を教へ候ても、百人が百人、一樣には不參もの。人心は各々別なる事を不及申上候。夫孔夫子三千の弟子、七十人の親戚弟子たちも人々心慮別段、所行も殊異にて、盡く一統には相見不申候。乍併聖人の德化にて、いづれも善良君子に被成、大は大、小は小、それ〴〵に世界の用に立つ人計りと相見申候。聖人の御德にも御一樣に教へ立てられ候事は不相成ものかと被存候。併し人が善良に相成候處は一同に御座候

即ち平洲は箇性及びその養成の必要を認め桃は桃、栗は栗、その性遂に化す可らざれども而かも一樣に世界の用に立つものと成れば、則ちその能事畢れりとなり、而して教育の目的は、その狀態に達せしむるにありといへり

徂徠は箇性の養成を主張すると共に、また箇性に欠點あることを認識せり。夫疾也、者與材俱生者也可去哉と言へるは、箇性の特長に伴ふ短所あることを言へるものにして、この考無くしては、教育に從事するを得じ。

徂徠の教育の方法は徹頭徹尾人巧を排斥し人心自然の發達を助成するにありとせり。即ち被教育者をしてその師長より多くのものを教へらるゝを取らずして被教育者をして自ら進取するを得る樣になすを以て教育の術なりとせり。要するに徂徠は開發主義の教育家なりと謂ふべし。茫々たる教育史上この開發主義をしかく明瞭に唱道せるは、徂徠を推して鼻祖となさゞるを得ず。學則第三に曰はく、天何言哉、四時行焉百物生焉。教之術也、不憤不啓、不悱不發、蓋夫生也と、これ尤も簡明に、その主義を表白せるもの。蓋夫生也の一句、徂徠教育の方法を概括せりと謂ふべし。又た譯文筌蹄の題言にいはく、天之生才、如草木區以別、使其

隨才自達、猶恐有風雨摧折之患、而況縛其枝幹、屈其根莖、緣何生長以成棟梁之具といへるは、其開發主義の綱領なり。彼が專ら人巧を排斥し、人心自然の開發を要とするの意は明白也。徂徠の教授法はすべて、この主義より割出されたり。

徂徠の教授法に就きては、譯文筌蹄にいはく、大抵人心喜開通、惡閉塞。雖蒙生日但誦至無分曉語、必生厭想、惰氣乘之。僅得可解者、輙生踴躍、由是精進。且其一二零細後來合湊、必爲自用力地。これ實に適切なる意見なり。前途に光明を認むること無くして前進せんことは到底人情に責む可らざるところ。人心開通を喜び否塞を惡むは此にあり。徂徠は這般の消息を解し寒郷修學の書生に對する教育法を說きて、先づ例に隨つて小學、四書、孝經、五經、文選の類を授け、和訓讀法を教へ時々その中、解し易きものを擇びて、分に隨つて、俚言を以て解說し、其をして自得せしめしかもかくすること一日間に一二項に過ぐること勿れと言ひ、而して、切に章旨及び道德性命の理を說くことなかれと戒めたるは頗る妥當なる意見と謂はざるを得ず。かの見臺を叩きて漫に道德を少年に講ずる道學先生を斬殺せしむべし、

江戸時代の儒者流の教育の方法に小兒に教ふるに經書を以てし、倫理五常の

論說を說き、其これを遵奉せざるを以て、その器にあらずとせる弊風ありき。此の如きは人心開發の順序を辨ぜざるもの。吉田松陰の所謂「世の中に見臺叩きて仁義忠孝を喚く儒者」たるもの。道學先生は滔々是なりき。

徂徠の講義は唯だ聽者の考究に指針を與へ、詩文の添削は、單に甚しき誤謬を指摘するに留りき。これ皆な被教育がその自力によりて發達せんことを企圖せし故なり安藤東野に答へし書にいふ。大抵同人就正不佞者。皆信不佞太過。一經點改、輒謂無以尚之。是爲不佞縛定。何緣上達。與其玉成一篇、增價當日、孰若啓牖慧思、成後來果。吾不欲同人爲一日假才子。而欲爲百年眞才子也。これ僅かに其一斑なれども、以て全豹を推すに足るべし。彼が當時流行せし講義を排斥したるも、亦その啓發的ならざりしを以てなり。

徂徠の教育は箇性の助長を主とせしを以て、門人の氣禀に隨つて教育せしかば一方より見れば隨分放任に流れたるやうに見たるに相違無し。雨森芳洲、徂徠に敬服して、その子を托したるが僅に三月にして、これを取返していふ、徂徠は豪傑の士なれども、子の教育を托すべき人にあらずと。徂徠の門下には種々樣々の人物

ありて決して一定の模型に入らず、徂徠が異種の人物を併せ容れて、各その材を成さしめたるは、彼の器の大なるを見るに足れども、蘐園學生の操行は決して謹直にはあらずして、徂徠が自由放任せる主義は脇目には不安心に思はれしところもあるべし　後年朱學者爭ひて蘐園を攻撃せしときに、その有力なる論點は蘐園の學風は操行修まらずといふにありき

蘐園讌集圖といふは、佐藤一齋の題文ありて當時目睹者の筆に成れるものなるべしとの說を載す　卓を圍みて徂徠以下、東野、周南、南郭、春台、金華等の高弟盃をあげて應酬す　徂徠集に所謂、吾黨之士會する每に詩酒鳴絃して以て樂むものにあらずや　濟々多士、蘐園意氣海內を壓倒せるの槪亦以て見るべし、而して中央に坐せる徂徠は居然首領、問はずして其人たるを知る也　先哲像傳には、此圖を切拔きて採れり。

梧窓漫筆(上)　左傳ニ大德百世祀之トアリ　孟子に始作俑者、其無後乎、又云、不孝有三、無後爲大　文言ニ積善之家、必有餘慶、積不善之家必有餘殃、　近時物茂卿ノ學、其淺薄疎謬ハ論ズルニ足ラズ、　茂卿ハ子無シ姪ノ道齋ヲ嗣トス

又無子、他姓ノ子ヲ養嗣トシテ血脈斷絕セリ、其高足弟子太宰純モ子無シ、他人ノ子ヲ養ヒテ嗣トス、定保是也。嗜酒テ至愚至陋ノ者也。吾友井上貫流ノ家ニ寄寓シテ此ニ終ル。終身世ニ所謂宿無シ也。服元喬(南郭)カ子ハ夭死シテ子ナク、此亦仲英ヲ養ヒ子トス。一時名高ノ三先生、皆子孫斷絕ノ人也。其學ノ天ニ背ケル驗、明白也。畏二天命一モノハ、彼三人ノ書ハ几案前ニ近ヅクルモ天ニ畏アリ。然ルニ子孫斷絕セル天ノ罪人ヲ崇拜シテ其學ヲ悅ブハ何等ノ愚昧ゾヤ。

梧窓漫筆後編上、徂徠ノ師弟醫者ノ香川吉益ナド云フ者ヨリシテ儒者モ醫者モ學精密ナラズ、人溫柔ナラズ、客氣浮氣粗豪ノ氣ノミ增長セリ、其風習俗人ニモ移リテ豪傑々々ト云フコト今ハ奴僕下賤ノ者マデモ口實トナリタリ。忠孝仁義ヲ講ゼズシテ豪傑ノ氣象ヲ學ブ其害少カラズト知ルベシ不宜コト、知ルベシ古今世ヲ亂リ賊ヲナス者何レカ豪傑ニ非ザラン

梧窓漫筆(上)百年前マデハ學者質實ニテ皆有用ノ學ヲ爲シタリ。近時物茂卿ノ徒ヨリ學問皆空詩浮文ニ流レテ經義道學ナド講ズル人少シ。此二十年

以來ハ學問益浮薄ニシテ、書畫文墨ニノミ奔リ、風流ヲ以テ學問トナス、恐ルベキノ甚シキナリ云々。

徂徠が漢字修業の方法は、世の儒者を驚かせり。彼は從來の方法は變則なりとし、和訓倒讀を以て變則にして、動もすれば義理を誤り易きものなりとせり。彼は「和訓」と「譯」とを說明して、和訓は蓋し譯なりと曰ひ、漢字修業の方法は先づ支那音を學び、支那音によりて、直讀して、其義理を解すべく、決して倒讀す可らずと云ひ、已むを得ずんば眼を以て讀下し、和訓を以て讀む可らずとせり。彼は日本的漢字を排斥して、支那學を修むべしと云ひ、然らざれば漢學に於て造詣す可らざるものなりと云へり。是れ語學研究上動かす可らざる議論なり。而して和訓倒讀の世の中にありて、徂徠は支那學講習を實行せり

支那學を善くせし者、當時岡島冠山を巨擘とす。雨森芳洲も亦一名家なりき芳洲は韓語をも善くせり。韓使曾て芳洲を揶揄して、君三國語を善くす、而して、尤も日本語に通ずといへりと。冠山は支那學の鼻祖ともいふべし。享保十年(一七二五)唐語使用序僧大潮に、崎陽學一華音足矣。學興冠山子。唐話纂

要出而學者好之、不啻玄酒梁肉也。後有唐譯便覽及唐音雅俗語類。學者謂天實生才哉。即取道崎陽以爲標識矣。於是冠山子諄々誨之猶姆師之教兒女輩

これより先き徂徠は冠山を延きて、師となし、その社を蘐園のうちに置きて譯社といへり。

譯社約(徂徠集十八)、譯家學果內有當於道乎。(中略)而士太夫所誦讀以淑已傳人者、一是皆中國之籍。籍亦無非中國人之言者。是同人所爲、務洗其缺、以來如彼楚人之子、處身於莊岳寺也。茲與井君伯明及舍弟叔達結社爲會。延崎人岡生爲譯師。會生補國子博士子弟員。就舍其宅中、不得數々出。出月僅六七廼得俾其請出爲會期焉。日必五、十。其在上旬爲初五、爲初十、中旬爲望、爲二十。二十爲予橫經藩邸曰則闕。下旬爲廿五、爲三十、小盡則闕。總而計之、爲日或五或四。尙餘二三以爲生旁訪其朋舊好人時、澣濯及諸營科私事之日。則庶乎其不借口有所迫以侵奪會期云(中略)於是正德紀元(一七一一)冬十月初五、實始會于我手門之舍。不佞茂卿以辱有一日之長也。

橘窓茶話(雨森芳洲)天下藝事太多、讀書爲最難。以我國言語讀漢人之書、其難

自倍於漢人焉。漢人且不善讀何況日本人乎。

蓋通事の起原は慶長年中にあり　そのころ小笠原一菴長崎奉行となりしとき、渡來の唐人馮六といへる者を擧げて通詞役とし、その後馬田昌入も馮六と同じく通事となり、通詞役は二人なりしが、後年漸く增加して大通事小通事各五人あり、大小通事の子弟、その外由緒ある者稽古通事となれり

先哲叢談に曰ふ、譯易也、傳譯也　五方之民、言語不通、嗜欲不同　達其意、通其欲、東方曰寄、南方曰象、西方曰狄鞮、北方曰譯　今皆總曰譯　往昔玄蕃寮及び鴻臚館の設ありしが譯員の數一定せず　海內多事、治教衰ふるに及び通詞の事幾んど廢せしが、元祿の世に至りて、又その盛を見る　當時支那學に名ありし者をあぐれば、岡島冠山、雨森芳洲、盧艸拙、劉宜義、木蘭皐、松浦霞沼、沙門文雄京都了蓮寺、安積澹泊、高瀬喜朴、伊藤快鳳、高玄岱、及び護園の周南、春台諸子これ也

盧艸拙は文學を以て著はるれども、家世通詞たるを以て當時儒流甚だこれを卑視せり　ひとり冠山これと友善し、推して通詞中第一となせり　霞沼は芳洲と同時に對馬侯に事へ、經學文章に名あり　劉宜義は隱元禪師の通詞をな

して當世に著聞す。澹泊は舜水に學ぶ。その澗亭涉筆に曰く、今、大馬之歯將頽、而學業不成。其所存者、稍辨華音一事。由其課程嚴峻晨讀夕誦、故至今不忘耳。課程嚴峻の一事、語學の教授法に於て甚だ味あり。芳洲は評して、澹泊は能く讀めども唐話を會せず。龜州の高瀨喜朴は唐話を能くすれども、能く書を讀まずといへり。木蘭皐は初め冠山に學び後ち蘐園に入りて、周南、春台二人に師事す。徂徠かつて、木生の詩、本邦人の口氣に類せずといへり。沙門文雄は春台に華音を學び、後ち韓語をも研究せり。伊藤快鳳は唐音を自ら官音官話なりと誇りしが、春台は官音は立派過ぐる故却てあしゝといへり。高玄岱かつて室鳩巣の文章を讀誦して評せるには、文章緊に傷ぶる、唯一閑字を欠ぐのみと。鳩巣則ち言下敬服せり。このこそ儒者の中、支那學に通ずる者一時輩出此の如し。而して蘐園諸子大抵これを善くせるは、文壇の一奇觀なりき。

支那學を學ぶ次第は雨森芳洲これを論して、肯綮に當れり。左に載す。

橘窓茶話(上) 通詞家咸曰、唐音難習、教之當以七八歲爲始。殊不知七八歲則晩

矣、非從襁褓中則莫之能也。我東有單音而無合音。單音何、曰アイウエヲ是也。碎音也。合音者何、曰アン、イン、ウン、エン、ヲン、アツ、イツ、ウ丶、エ丶、オ丶、アツ、イツ、ウツ、エツ、ヲツ是也、歪音也。我東孫兒之於單音也、聽慣聆熟於襁褓不言之中。二歲以上智慧漸開、結而成語、其勢然也。今以不便之合音、遽敎唐話於七八歲時、唯見其難耳。然則爲之如何。曰、二歲以上、戲要引鬪之際、漸次敎以合音。使之吻軟舌滑、有如天成。以爲五六歲上學話之也。則庶幾易々耳

支那音にて直讀して倒讀せざることは、如何にも六ヶ敷事のやうに見えければ、「たはれ草」にも、通不通は唯だ慣習によることを說き、世のさがことゝいへるもの、始めは言難く、聞き難けれど、後ちには常となる如く、また無分別、不了簡などいへる無の字、不の字を、さきにいふは、この國の語にはあらねどなるゝ故により、思慮にも及ばず、耳にも入り、口にもいへ、唐音學ぶも亦然かなり云々言ひ韓語は吾國と同じく反言なれば唐語に比すれば太だ易く、三年許彼の地にゆき大概不便なき迄に學得たりと記せり　譯家必備といふ書後ちに出來て、唐話學習必携の書とはなれり。

徂徠は漢學修業の法に於て先づ「譯」を第一とい和訓は古語にして、譯は現行の俚語則ち平常語言。漢學を講ずるは、これを平常語言に譯するに非ざれば、理解徹底すること能はずと言ひ、譯之一字、爲讀書眞訣。また能譯其語、如此方平常語言可謂能廣書者矣。語學修業の眞訣と謂ふべし。徂徠は、更らに「譯」を説明して曰く和訓と云ひ、譯といふも本と差別無し。但だ和訓は、古者縉紳の口より出で、雅言を擇び鄙俚を去り、風流、人耳に宜しきのみなり。語言の道未だ闢けざりしかば、これを支那の語に比するに、當時既に寥々として、乏しきを感じたりき。况んや人文發達せる今日に至りては、語言之道益變じ益繁く、益俚に益俗なり。故に今言を以て古言に求むるに、已に古樸にして人情に近からざるの感あり。和歌者流、伊勢物語源氏物語諸書の如き、閨閤紛脂猥褻の語あること、一に支那の金瓶梅の類に似たるあり。而るに今これを讀めば、高雅幽妙にして、大に注解を要す。譬へば支那にも典謨の類ありて、高雅幽妙なるが如し。今言を以て支那語に比するに、その古に比すれば愈繁に愈細なるもの稍相近くべきなり。且俚俗なるもの平易にして、人情に近しとなす。故に此俚語(平常語言)を以て支那語を譯さば能く人に奇特の想を

生ぜしむることと無く、古經諸子も佶屈を感ぜざるに至るべきなり。若し和訓を以て譯さは、これ和訓なるもの、時に又譯を要するなり、甚だ人情に近からざるなり。譯の一字大切なり」

徂徠は進んで、漢學修業の方法を說きて、

故予嘗爲蒙生定學問之法。先爲崎陽之學、敎以俗語、誦以華音、譯以此方俚語、絕不作和訓廻讀之法。始以零細者、二字三字爲句。後使讀成書者。崎陽之學既成、乃始得爲中華人。而後稍々讀經子史集四部書、勢如破竹。是最上乘也」

これ徂徠の思惟せる漢學修業法の正則なるものなり。蓋し當時、學問といへば、漢學なりし故に、正則の學問法とは謂へりし也。崎陽之學即ち支那語なり。然れども崎陽之學は、大都にありては、兎も角も、地方にては即ち修業の便なきが故に、徂徠は修業法第二等を說けり

先隨例授以四書小學孝經五經文選類。敎以此方讀法。時々間擇其中極易解者一二語、隨分俚言解說、使其自得。一日間不過一二次。切勿說章旨及道德性命之理。

彼は又た皆要早去和。讀書欲速離和訓。此則眞正讀書法なりといへり。また謂ふ。彼の正則讀書法は、其初め力を得ざる如くにして極めて迂回なる如きも、その實、捷法直徑此に過ぐるものあること無しと謂へり。而して世の讀書作文、專ら和訓に頼りて、淹通の識、宏博の學と稱する者も、その古人の語を解する所以を誘へば、皆な隔靴搔痒の感あり。その筆を援り思を攄ぶるところのもの、亦悉く侏離鳥言、何の事たるを識る可らず。これ畢竟するに、嚮きに力を得ること容易なる如くに見えし和訓にのみ依頼したりし結果たるに外ならずとせり。

和漢寄文(序) 中古以降、和之與漢航海稍少、譯士之號殆庶乎熄。自時厥後、以典籍爲業。博極古今之人、亦至於擒藻抽毫則不通音韻、遂失叶調。或講書談經、則但憑和訓、取義作解、不知其譯字之當否。靡然皆爾。凡如是者、歷年滋多。迨于近世、猶且學者於文學上竟有隔靴搔痒之弊、其無奈何焉。(中畧)夫譯士之爲職、能諳方言兼善土音、無一不會。講規制之條欵、法令之要約、幷官諭、供招牌票、貨單之項件、纖悉譯出、繕造卷册、報呈本衙。當是之時彼是情意、釋然氷消、無有望礙云々。享保丙午(十一、一七二六)盧艸拙。

教育行政と社會教育と

教育行政と社會教育とに就きて徂徠は一家の識見を具せり　第一に教育を普及せんが爲めに多くの稽古所を江戸市中に設立するを要す　そは必ずしも學校といふ程の事ならずとも、儒者どもの宅に政府より稽古所を建て、學生にも扶持を賜ふべし　政府の教育事業として昌平阪高倉屋敷にて、儒者ども講釋すれども、旗本の武士に聽く人、絶えて無し　只町人醫者、諸藩の士など少々聽講するのみ　かゝる有樣にては、教育の効果も見る能はず　尚又昌平阪にては位置稍一方に偏するを以て、市中所々に儒者を配付し、稽古所を設置し、先づ旗下武士の教育を奬勵すべし　稽古所維持の費用の一法として監本の制度を採用すべし　右の如くして稽古所の修理書生の寄宿舍も追々成立するに至らんことは專ら儒者の器量によるべしと。

政談　當時官板などをもひたもの仰付らるれども、板の納め所無き故、町人の物入りに仕立て町人の利倍になり、官板といふ名も實に叶はぬ也。異國にても監本といふことありて、學校に板を納め置き、それを摺りて賣らせ學校の物入の料にすることとあり。官板に仰付らるべき書籍は、上より金を御貸し成さ

れて板をほらせ、其板を右の稽古所に差置き、書籍を摺らせて賣れば、二三年の内に拜借の金も返納なるべし。

當時門閥の世の中にては、學問無くとも知行高と家筋とによりて、役人も勤まることなれば、武士が氣のつまる學問など爲さぬ道理也。されば徂徠は學問無ければ公邊の勤めも出來ぬやうに制度を立て置くべし。さすれば奬勵せずとも人自ら學に嚮ふべしとの意見なり。その概要を言はゞ政府の記錄を艸書俗樣をば已めて眞字に改むること。公事判斷の書付など法律の術語を用ふべきこと。每年城中の嘉例に詩歌の會を開きて諸大名諸旗下に出座を命ずべきこと等は、差當りての方法なりとせり。兎角公私の事學問なくては差支ふるやうに仕向け置くを以て社會敎育發達の第一義なりといふは徂徠の意見なり。

次ぎに諸役人服務に規律を立て、修養の閑を與ふべし、これ社會改良の要項なりとせり。その說にいはく、惣じて役人は隙になくては叶はざることなり。殊に上に立つ大役の人ほど隙なくては成るまじきこと也。御老中、若老中などは御政務の全躰へ亘る大役なれば、世界の全躰を忘れては、役儀に拔けたるところ生ず

べし。閑暇にして工夫をもし又折り〳〵は學問をもすべきことなり。當時は大役ほど毎日登城して閑暇無きを自慢にし、御用すみても退出をせず、相役多きは、毎日出仕せずとも替り〳〵出仕しても御用はたるべきを、何れも鼻を揃へて出仕し、御用なくても御用あり顔に仕爲すことを世の風俗なり。皆是れ面々の職分には、まらぬ故、御用を辨ずるやうにし、御奉公の眞實さへあらば、他見の詮議入らざるものなり。斯の如き風俗なる故、御老中などさへ、詮もなき有司のすることを自身世話焼きて御用多けにしなすこと、あるまじきこと也。箇様なることを古の書には大躰を知らずと云ひて大に誹りたること也。執政の面々さへ此の如くなる故、自餘の役人は皆此の風と今はなりたり。餘りのことに當時は御奉公の筋にても無く、傍輩中へ自分の見舞にありくを勤めと名を付けて云ふやうに成りたり。某し田舍より出たる砌り聞きなれぬときは腹の皮、痛くおかしくて堪らへかねたり。是皆な忙しげに出ありくを肝心のことに覺ゆる故、斯の如き言葉も風俗につれて出來たり。此風醫者に移りて、その容亦甚だし。（中略）今の御役人は御老中を始めとして唯々下より申出づることを捌くを我が役と心得て、始めといふ事を夢にも

知らぬやうなり。皆身を踏込みて、偖閑暇にして置きたらば、自然と工夫も付きて治めと云ふことも合點あるべき也。(中畧)眞の治めといふは我が支配下、組中は上より御預置かるゝことなれば、末々まで一人も見離されぬものなりと思ひはせりて、我が苦にし世話にすること也。是を聖人の道に民の父母といふ。これ仁の道なり。仁と云へばとて朱子學の儒者などの云ふやうに、下を憫み慈悲をすると云ふやうなることばかりに非ず。又た誠を以て下をあしらい、或は理の儘に取捌くと云ふやうなることにもあらず。父母の子をあいしらふは、叩きもする、折檻をもする、だましもする、唯々面倒を能く見て親切にし、兎角下の成立やうにすることなり。されば治めの筋は上へも外へも見えぬものなり。年月を經て後ち、その治の善きといふことと知らるゝことなり。されば身に踏込みて、人見人聞を搆はぬ心に非れば成らぬことなり。周防守(京都所司代板倉)は如何程にありけん。能く思ひはまりて勤めたれば、治めの筋に心付きたるやに承はりたることもあり。京都の人々唯々面々の我夛をさへすれば京都は治まると常に言ひて、公家は歌を能く詠み、學問をすれば少々の惡きことをも許し、醫者は療法を能くし職人は其家財をよ

くすれば、皆少々あしきことは許したりと承はる。或時京都の片田舎へ周防守行きたるに、古き社の宮居も零落したるに、神主古き裝束を着て拜殿に書物を見て居り、周防守何の書ぞと問へば神書なりと答ふ。其後ち一年ばかりも過ぎて周防守また行きて見たれば神主初めの如し。周防守大に感じて、この社の修覆は公儀へ申がたし、自分に修覆をして參らすべしとて、修覆せられたり。是も神主の其家業を大切にすることを賞翫してのことにて京都の治といふことにその身の奎躰はまり居る故なり。(中畧)惣じて世間にも周防守は公事を能く捌きたりと計り覺えて、申し傳ふるは目もなく耳も無き世なりかし。

徂徠は又た當時の役儀にも文武の差別あることを論じていふ。當時は役儀に文武あることを知らず。大阪御城代、御番頭、諸物頭、舟手などは武役なり。その外の御役人は老中より以下皆な文官なり。當時は何れも武家なりと云ひて文官も學問をせず。武士の武士臭きは惡しきとて武官も上郎の樣になり。責めては文武の差別を知らせたきこと也。

徂徠の所謂治は治敎なり。民を子養するは則ちこれを敎育するなり。國民を

して能く大躰を知らしめ、局促拘泥の風を去り、向上進取の氣を養はしめは、則ち大國民たるを得る也。大國民の氣風を養成するは、則ち敎育と修養とにあり。

徂徠が所謂聖人の道とは古聖帝王治國の道なり。詩書禮樂の四術なり。聖人の治と稱するは、治の根底に敎育あるを言ふ也。

聖人は學んで至るべきものにあらず。人各天分あり、大者大生して、小者小生す唯それ聖人の遺敎に遵ひて身を修め天下を治むるときは、則ち聖人の治に達するとを庶幾するを得ん。聖人の遺經は經典に載す。經典は時代悠遠にして、後世の用語を以て解釋す可らず。故に古文辭研究の必要あり。古文辭研究は古聖人の道を窺ひ知るべき唯一の行徑なり。此の如きは、徂徠が古文辭學を唱へたる理由也。

第十三節　益軒は本邦敎育史に於て最も重要なる位置を占むるものなるが、これを歐洲敎育史に參考するに、恰も英國のロック(一六三二—一七〇四)と時を同じくして、その位置も相似たり。されば記述の便宜により、益軒を說く前に、ロックを略說するを可とすべし。

ロックは寧ろ哲學者として知られしが、弱躰なりしかば、醫學を修め造詣するところあり。實驗生理學によりて、その心智を啓發して、哲學及び教育の原理を研究するに於て裨益せるところ多し。氏の教育說は學校教育よりも家庭教育の法を稱揚せり。氏が教育の目的は世務に通ずる紳士を養成するにありて學術は全く實用を主とし世務に關係無きものは、これを授くるの必要無しとす。氏は曰ふ善良なる教育は心らずや自ら善良なる修養によりて成功したる者を擇びて家庭教師とし良友と觀察とによりて、その目的を達することを得べしと。氏の教育說の要は完美なる紳士を造るにありて、近代英國學風の由て起るところなるが、氏の說を會得せんには、併せて當時社會の狀態を知らざる可らず。當時英國紳士は一種の階級を形成し、下級の人民とは交際せざるのみならず、彼等を呼ぶに惡徒の名を以てするに至れり。されば下級人民を教育するは個人啓發上、尤も重要なる事業たるにも係らず、教育界の大勢はひとり紳士の教育にのみ注意せり。氏が紳士教育を唱へたるも時勢然らしめたるなり。氏が教育說の缺點は德性及び體育の注意に厚くして智育に薄く偏重偏輕の傾向を免れざりしこと是也。

ロックの教育説を以て、これを益軒の教育説と比較するに酷似の點ありて存す、當時教育界の大勢は、武士教育にのみ注意し、下級人民の教育をば等閑に附せしは當時英國の狀況に髣髴たり。識見物徂徠の如きも、專ら武士教育にのみ注意せりこれ蓋し武士時代不得止の現象なり。幕末に至るまで、多數の教育家は、專ら武士教育にのみ着眼し、その指して「人」と云へるは、則ち武士なりし也。教育家が「人」則ち士君子の意味に用ひ來りしは、太田錦城が人と民との區別の說に徵して知るべし。

梧窓漫筆下、舜典の九官に、司徒司敎。典樂モ亦司敎、敎官ニアリ。此ニハ深義アリ。司徒ハ五敎ヲ天下ノ萬民ニ敷テ、人ト禽獸トノ異ナル處ヲ敎ユル者ナリ。去ガ故ニ孟子モ此章ヲ解シテ、人之有道、飽食煖衣、逸居垂敎、則近於禽獸聖人有憂之、使契爲司徒。敎以人倫トアリ典樂ハ胄子ニ詩樂ヲ敎テ成德ノ方ヲ敎フル者ナリ。是ハ君子ト小人トノ異ナル處ヲ敎ユル者ナリ。故ニ直溫寬栗皆ナ樂陶ノ九德ノ目ナリ。庶民ハ人倫ヲ知テ、禽獸ニ異ナラシメ、士君子ハ德ヲ成シテ庶民ニ異ナラシム。堯舜ノ時ヨリ如此區別アリテ、士君子ノ貴

キヲ知ルベシ。故ニ詩書ニハ農工商賈ヲ民ト云ヒ、士君子ヲ人ト云フ。人ト民トノ別ヲ知ルベシ。

人則ち士君子。士君子即ち武士なりき。英國にありては、初の勳爵士たり。後ちに紳士たり。等しく是れ士君子也。益軒は個人德性涵養の必要を說きしかども、その目的は實に完美なる士人の養成にありしは、また時勢の然らしむるところなり。益軒が家庭教育を重んじ、厚く體育に注意し、はた其教育は、天理人道に合し、世務に通曉する作法ある士人を養成するにありて、悟性の開導を主とし、智識を堆積せんよりは思想の獨立を求めたる如き、その教授法に於ては記憶力の獎勵を專ら力めたる弊風を避けて、快樂及び興味を利用して、兒童の把住性を強健ならしめ依て以て心性の開發を計れる如き頗るロック所說と符合するもの少なからず。唯だロック教育說は、ペッタロッチ出でゝ之を學校に應用し、ヘルバルト、スペンサー繼ぎてその系統を承け、歐洲の教育界に影響したること莫大なるが、益軒は繼承者無くして、獨り千古の美名を吾近世教育史上に擅にせしむるを悲しむに堪へたり。

ロックは牛津大學の出身也。卒業の後、身躰薄弱なりしかば、自己の健康を進めむが爲めに醫學を修め、頗るその術に達し、シャフツベリー伯の胸部の潰瘍を切斷して、その生命を全くしたることあり。氏は實驗生理學によりて、その心力を錬磨し、その智識を擴張して、哲學及び教育の原理を研究するに於て裨益したること實に多し。氏はシャフツベリー伯の子の教育を監督し、その長ずるに及びて、その委託を受けて、その夫人を擇び、後ちその所生の嫡子の教育をも擔當せり。かくの如くして、氏は兒童の生理及び教育を實地に研究して有益なる發見をなし家庭教師として、能く成功したりしが、後年に、その友人に贈りて「教育に關する意見」を Education Concerning Thoughts を發表したるもの、即ち氏の教育說にして、他日歐洲の教育界を動かしたること少からず。氏の教育說は學校教育の說に反對し、家庭教育の法を稱揚せり。氏が教育の目的は世務に通曉する紳士を養成するにありて、學術は全く實用を主とし、世務に干係無きものは、これを授くるの必要無しとせり。而して紳士を養成するには學校に於てするよりも家庭に於てせざる可らずとし、而して說を爲して曰は

く、學校に通學せしむれば衆童に交りて、その勢力を強大ならしめ相互の競爭によりて、勤勉活潑の氣質を養成せしむるの利益あれども、また之と同時に粗暴と惡癖とを混交するを以て、德性を涵養し、人品を高尙ならしむることは、學校教育に於ては到底望むべきことにあらず。善良なる教育は必らずや自ら善良なる修養によりて成功したる者を擇んで家庭教師となし、良交と觀察とに依りて、その目的を達することを得べし。然るに學校にありては、教師は多數の生徒を監督するを以て、假令教授の術に老練なる者と雖も、よく生徒各自の氣質を觀察し、その德性を涵養し、これに擧止の禮法を授けて、その德器を成就することは不可能の事たりとす。されば試みに小學校に於ける優等の生徒と、家庭に於て正當なる教育を受けたる兒童を比較せば、何れの善良に教育され居るかを發見するは易々たるべしといへり。

ロックはウエストミンスターに於て、學校兒童の惡少年は益あしく成り、善良なる者も亦之に化するの弊風あるを見てより、いたく學校教育の法に反對するの考を有せしが、自らは家庭教師として見事に成功したるを以て、家庭教育

の法を主張するに至れる也。氏は進んで、家庭教師の資格を論じて曰く、家庭教師たるべきものは、善良なる修養をなしたる者ならざるのみならず、時局の大勢に明らかにして、殊に自國に現在せる時弊を詳にすること尤も必要なり。世の青年が自立の域に達し社會に出でたる後ち、第一に困迷するところのものは、世事に通ぜずして、事々物々曾て學びしところと相違するを以て、茫然として自己の立脚地を認め得ざるに至ること是なり。これ唯世の父兄たる者、教師の學識の深淺をのみ批評して、而して世才の明敏なりや否やに注目せざるより起れり。學術は如何に深奥なりとするも、それのみにては、未だ以て良師とするに足らず。善良なる修養の目的は世務に通達せしむるにあり。世務上の確實なる智識は、完美なる紳士を造り出すべきも、徒らに學問智識を雜積するは、心性を混亂せしむるに止まんのみ。要するに家庭教師となりて、子女の教育に任ずる者の要務は、その德性を涵養すると共に、活潑勤勉の習性を養成するにありといへり。

右はロック教育說の大略にして、要は完美なる紳士を養成するにあるが、氏の

説を十分會得せんには、當時英國に於ける中等以上の社會の狀態を知らざる可らず。當時英國に於ける紳士は、實際に於て一種の階級を形成し、下級の人民と交際せず。遂に彼等を呼ぶに悪徒（Abhorred Rascality）の惡名を以てするに至れり。されば下級人民を敎育するは、個人啓發上最も重要なる事業たるにも係らず、敎育界の大勢は、ひとり紳士社會の敎育にのみ注意せり。されば ロックが紳士敎育を鼓吹せるは、當時の大勢より出でたることなり。ロックは言へり、尤も注意すべきものは紳士の業務なり、敎育によりて一たびその方針を確立するときは、隨つて爾餘の社會を感化、改良すること尤も容易なるべしと。また當時英國紳士社會の弊風とも言ふべきは、兒童十五六歲血氣未だ定まらず、外界の誘惑に動され易くして、專ら肉慾を恣にせんとする危險なる時期に當りて、これを海外に漫遊せしむ。ロックは極力この弊習を排撃し、七歲より十四歲若くは十六歲に至るの間は外國語を學習するに、尤も適したる時期なれば、外國語に堪能なる家庭敎師を招聘するを宜しとす。紳士の外遊に適當したる時期は、その未だ幼稚なる時か、または充分發達したるときかに

ありといへり。またこの頃、英國にては早婚の弊風行はれて、氏の自ら訓陶したるシャフツベリー伯の如きも、僅かに十七歳の少年にして、早く既に結婚するに至れり。これ等の時弊は、いたく氏をして憤慨せしめ、完美なる紳士教育を主張するに至らしめたる所以なりとす。氏の教育意見は、一たび公けにせらるゝや、頗る英國の教育界を傾動し、所謂英國的公立小學校の特性を確立したる効力を有せり。

益軒は教育ある美しき家庭に生立ち、その教育は專ら父兄より受けたり。而してその家は醫師なりしかは、少時より醫學に造詣して、これによりて心力を鍊磨し智識を擴張し、啓發するに道義の學を以てして、修養の結果、明確なる人生觀、君子の理想を抱持するに至れり。頤生輯要の序文に看書の際古人の言、養生に資すべきものある毎に抄出す。その道義に合はざるものは、これを取らずといへる道義の二字尤も玩味すべし。益軒は心身相關の理を能く知れり。その養生法は精神の修養を以て第一義とす。身を保ち生を養ふに畏の一字は要訣なりといひ、晩年に敬字を說きて、敬は畏の字これに近しといへり。畏の一字は益軒一生の養生法な

りき。恭默思道。事天不欺と先生の像賛に見えたるは、此邊のことを言へるなるべし。

益軒は學術すでに成り、三十に近くして京都に遊學す。松永尺五、山崎闇齋、木下順菴等の諸大家に就きて質疑討論し、或は講説を聽き留まること三年、このときの寫本、全部反古紙の裏に寫したるものあり、勉學の状況を察すべし。福岡に歸りて藩の儒員となり、頻りに優遇せられ、秩祿も屡進む。これより經義を講説し、碩學篤行の名、柳營にも聞え、遂に天聽にも達せり。寛文八年（一六六八）束髮して久兵衛と稱す。益軒は季子なれば家をなすこと尤も遲く、四十に至りて始めて夫人を娶る。夫人は江崎氏、名は初、字は得生、東軒と號す。秋月藩儒員江崎廣道の女、少より賢名あり、經史に通じ、筆蹟に妙なり、眞に君子の好逑と謂ふべし。その益軒に歸せしとき僅かに十六歳。益軒よくこれを指導して、鸞鳳倡唱、琴瑟和合して、こゝに麗はしき新家庭を造り出だせり。

益軒は深く女子教育を研究して、その教育説は長く行はれたるが、その理想は敬順なる女子にあり。女子教育の方法を說きて、

七歳より和字を習はしめ、また男文字をも習はしむべし。淫思なき古歌を多く讀ましめて、風雅の道を知らしむべし。これまた男子の如く、初めは數目ある句、短き事どて數多讀み覺えさせて後ち、孝經の首章、論語學而篇、曹大家の女誡など讀ましめ孝順貞潔の道を敎ふべし。

十歳より外に出さず。閨門の内にのみ居て、なりゐ、うみつむぐ業を習はしむべし。假りにも淫佚なる事を聞かせ知らしむ可らず。(中略)女子に見せしむる草紙も擇ぶべし。古の事しるするふみの類は害無し。聖賢の正しき道を敎へずして、小唄、淨瑠璃本など見せしむること勿れ。また伊勢物語、源氏物語などその詞は風雅なれども、かやうの淫佚の事を記せるふみを早く見せしむ可らず。また女子も物を正しく書き、算數習ふべし。物書き算を知らざれば、家の事を記し、財を計ること能はず。必らずこれを敎ふべし

益軒が女子敎育の精神は着實なり。益軒は家を治むるには、忍の一字、肝要なりと言ひ、なほ詳說して、主人は先づ父母によく事ふるを第一の勤とし、次ぎに妻を導き子弟を敎ふるを以て要とし、(中略)また妻孥、下部は心長く、いさめ導くべしといへ、

る如き益軒の説は、主人自ら修養してその妻孥を導き化すべしといふにあるを知るべし。これ皆な益軒實踐の語にして、その夫妻の關係を推知すべき也。

益軒、家道訓を作り、その中に日常行程を記す。圓滿に之を遂行する者は益軒の理想とする士人にして、詩經の君子、ロックの紳士則ちまた是なり。

毎日夙に起きて、手と面とを洗ひ、先づ父母の氣色を伺ひ、飲食の好みを問ひて調へすゝめ、その求めあるを聞きて、つとめ行ひて父母の心に叶ふべし。子弟に其日の務むべき課程を授け敎しへ、奴婢にその日の所作を言ひ付け、怠無からしめ、外事あらは使を命じ、人の附託あらば滯なく整ふべし。朝は早く起き、門戸を開かせ、家内の塵を拂ひ、門の內外庭中を掃除して皆な潔きよくすべし。

朝遲く起るは家の衰となる、戒しむべし。古人、家の盛衰は朝起くることの遲速を以て試むべしと云ひしと宜なる哉。

凡そ家内の平日の用心は、かねてより早くすべし。第一來年の秋までの糧米を備へ、次ぎに鹽醬を貯へ、脯醢をつくり、薪炭油を、かねてよりあつむべし。右の貯無ければ、家の計立たず。奴婢も憐み、その衣食居處を察して飢寒せしめ

ず、その所を得せしむべし。男女内外の別を正しくして、武士は鎗、長刀、弓矢、鉄砲、杖、棒等をつねに便よき所に置くべし。常に用ふる器を整へ備へ、器の損へるをば修補し、屋宅藏庫、牆壁の破損せるを早く修理し材木竹茅土石を求め貯へ、馬をよく飼ひ、その外、家にかふべき畜類を養ひ、菜蔬、草木、時に順つて植ゑ養ふべし。藏のあけたて出し入れを察し、盗賊と火災との用心つねに嚴しくして怠る可らず。火を防ぐ器なども平日備ふべし。凡そ家内の事、つねに心を用ひて怠る可らず。

右は至極尤の事共にして、また非常の困難の事柄にもあらざれど、能くこれを實踐すると否とは修養の良否にあり。家庭敎育の價値は此に存す。

益軒は敦厚なる家風を繼承して、ことに夫人賢なりしかば、諸兄存齋、樂軒及び子姪と益軒の家に寄食し、團欒して老を樂しめる如きは欣羨すべきことと也。この一事又以て夫人の賢を察するに足るべし。益軒は三君に歷事すること四十餘年。早くより遊歷を好み、東都に役する十二度、京都に遊ぶこと廿四度、長崎にゆくこと五度、封内及び諸州を歷遊することと舉げて數ふ可らず。夫人行遊つねに之に從事

し到るところの紀行、夫人の補助になること多し。加之、その費用の大なるに、曾つて人の補助を受けざりしは、生平節儉の致すところなれども、夫人が能く財用を整理したる功與つて多しとす。されば益軒その晩年に、篤信一生用財記を著はして、その嗣子に家道修齊の方を敎へき。

貝原氏に現存せる益軒夫妻の遺墨を點檢すれば、その家庭の修養を察するに於て、思半に過ぐるものあり。第一には日記なり。種々の方面に關し、皆な日記の存せざる無し。修造日記、用藥日記、年中家事、菜圃雜記の如きは、別けて趣味あるものなり。益軒は本草に精はしく、また心を農事に用ひて、農事全書附錄、菜譜、花譜等の著述も存せるが、その花木を庭中に植うるは、自ら手を下すを必要とし、半は養生の爲めなりとせり。家道訓に、宅に初めて移らば先早く果子を植うべし。次ぎに他木に及ぶべし。十年の計は木を植うるにあり。樹木を植うるには、果を先きにし、花を次ぎとし、藥樹を又たその次ぎとす。（中略）藥樹は杉、檜、樅、金横、羅漢松、冬青樹など善し。竹を北方に多く植うべし。緊きを忌む、陰氣深く、夏は蚊多くてうるさし。また菜は日用の助となり、宅中に植うるは新らしくして、市に買ふにまさり、その菜

榮えて麗はしきに、目を喜ばしむること花草に劣らずと云へるは、家居の嗜好をも窺ひ知るべし。鄙事記聞には、何にても益になりそうな事は見聞に隨つて筆記したるものなるが、益軒の主義は格物餘話に、凡本邦之學者、古來往々不ㇾ能ㇾ用ㇾ心精詳ㇾ可ㇾ以爲ㇾ歎。荒常傷ㇾ於ㇾ粗ㇾ也といへるにて知らる、益軒の著書は、すべて日常鄙事まで瑣々たるを盡くせども、その精神高尙なるを以て、能く人をして省察の念を起さしむるに適す。

孔子は中々多藝多能なりき。子曾つて言ふ、吾少くして貧しかりき、故に鄙事に多能なりと。江戶時代武士の教育は、動もすれば、武邊にのみ流れて、日常鄙事には留意せず、またこれを以て高潔なりと思惟せしが如し。此の如き大なる誤なり。益軒が生活上必要の瑣事を說けるは、要するに常識の健全なる發達を企圖するにあり。常識の發達、健全なるは、則ち完美なる紳士たるなり。益軒書を讀むに隨つて抄錄す。故に遺墨の中にて抄錄尤も大部を占む。その中にても、人をして感歎に堪へざらしむるは、知約なり。大冊七十卷、すべて益軒の抄錄にして、著述の材料は、多くこれより出づ。その表紙に抄出せし書名を列記し、

表紙の裏に、抄錄を檢閲せし年月を題す。とゝに一例を擧げんに知約第十二卷は、倭書抄なるが、奥書に、

此書一見而後抄纂之。抄之後。又閲覽二遍。

又延寳四年十月一遍

元祿十年十一月一周覽了

寳永元年十月四日又一閲

(朱書)延寳六年十一月又一遍。凡四遍。

元祿十二年閏九月又檢了

などのやうに、毎卷皆な奥書あり。卷中の各項は先生の自筆あり、夫人の書あり。或は門生に書かしめたるもありて、何れも先生自ら再三檢閲して、誤字等を校正したるが、自筆の條項には一の正誤無きは感服に堪へざる也。これにても先生の用意敬愼なるを見るべし。各項の上に、朱書にて已取備忘編。或は要語已取などゝ自家の著述に引用したることを記入したり。知約七十卷は、益軒の學殖と、その用意の精詳にして、勤勉力の健否なるを見るべく、實に先生一代の寳藏にして、知約の

名に背かず。眞に本邦第一流の教育家の紀念物として、尊重すべきものなり。幸ひに貝原氏にては、祖先の遺物を丁重にして、蠹魚の害を防げるは、喜ぶべき事也。家庭の調和は、唯だ行動端正なるのみにては充分ならず。必らずや和樂の要素無かる可らず。先生夫妻は和歌及び音樂の嗜好ありて、夫妻唱和合奏して樂み洋々たりき。當時儒者の風として、先生も詩を賦すれども、則文字なりとて好まれず。また平仄を墨守することも無かりき。和歌は家庭の薰陶を受けて、夙くよりこれを好み、國人の性情を述ぶるに適したるものとせり。先生は和歌を以て、堂上公卿に交際し、長崎にて得たる支那古硯を仙洞に進献せしこともありき。また謠曲の嗜好もありしと見えて、節付きの小謠一卷、貝原氏に現存せるが、纔かに二枚許り先生の自筆にて、餘は夫人の筆蹟なり。その外に音樂紀聞。琵琶譜及び夫人東軒の箏譜あり。益軒は琵琶を彈じ、夫人は琴を彈ず。現今に至りても、家庭の改良、猶ほよく行はれず。士人音樂歌曲の必要を知らざるもの無けれども、而かも音樂歌曲によりて、夫妻相和して樂しむ者に至りては甚だ稀なり。余は益軒日記を展讀して、左の一節を得たり。元祿三年七月十七日(一六八〇)の條に、

新平、久右衛門、助太夫(竹田定直)、萩野儀兵衛來。風雨。予彈琵琶。家婦彈箏。二更而客歸。

客は大抵門人なるべし。このとき先生年六十一、夫人三十九。風雨夜堂、夫妻師弟、短琴に對して湿然團欒の光景。これを默想すれば後人をして神往に堪へざらしむ。この一節記事は、先生の家庭を知るべき絶好史料にあらずや。

貝原氏の家祭は佛式なりしも、先生は痛く神道を信じ、神道は清潔不穢の理なりといへり。先生六十二歳のとき神儒並行不相悖論を著はして、夫人の郷土、秋月の氏神八幡宮に納む。書は夫人の代筆也。その論中に、

夫我神道清潔不穢之理、而誠明正直純一。淳朴之德、亦因清潔不穢而在焉。故以自清潔其身、兼清潔於人爲要。

先生が神道に歸依せる理由は、これにて明白なり。

因みに記す。この八幡宮は秋月の總鎭守にて、八幡文庫の書庫あり。藩士江戶に勤務すれば、歸國の際、一書を齎らし神庫に奉納す。大部のものは、數人にて納む。これによりて累年書籍集積し、これを藩學にて管理して大に子弟の

便宜ともなりしなり。
惺窩神儒一致の說を立てしより、後儒この見解を取る者亦多し。水戶光圀の如きは、その尤も顯著なる者也。闇齋は頗る偏僻なり。益軒のは淸潔不穢の理を以て神儒不相悖とす。所論頗る妥當なるに似たり。神儒一致の論の續々として起れるは、儒學の日本化しつゝ行くことを證するもの也。
先生は易語の損益によりて、損軒または益軒と號す。これに就きては種々の說あれども、余が貝原氏現存の遺墨に就きて見たるところにては、晚年は專ら益軒にして、七十餘歲までは專ら損軒なり。七十八歲にて損軒と書せるもあり。壽像も始めは損軒としたるが、後ちに張紙して、益軒となしたる痕跡あり。これに就きて故貝原寬一氏の話に、先生七十餘歲のとき、藩主より、既に世上に裨益したる事功も多き故に、最早や益軒とすべしとの命ありて、それより後ち壽像も張替へたるなりと。要するに兩者同時に用ひしこともあれども、晚年は專ら益軒なりしなるべし。
益軒は少時病弱なりしかば、ことに攝生に注意し、修養の結果よく八十五の高齡を保ちしが、老いて意氣衰へず。專ら讀書を樂みて、性情を養ひ研思益精深を加へ

ぬ。老後の著述中々多し。六十にして和漢名數增補を作り、六十七にして大和廻りを、七十四にして筑前續風土記及び點例を、七十五にして菜譜を、七十九にして大和本草を、八十一にして樂訓を作り、而して養生訓は歿するの前年に成り、八十四歳の作なり。自己編に吾人齡已衰殘、日薄虞淵。以道制欲、取樂於桑楡之工夫、一日不可廢。蓋人世樂在讀書樂道。如此樂餘年不亦善乎と。又嘗つて人に寄せし書に、僕年既踰八十、文字結習未能解去。每霄讀書至夜半。性雖陋劣近日稍得見解。吾子有意於詩論則寄書と。それ衰殘の齡を以て、樂を桑楡に取るの工夫に怠らず、書を讀みて每霄夜半に至り、八十の老翁近日やゝ見解を得たりとて、學術上の討論を壯者に挑むに至りては、その意氣の壯健なる、實に萬世學者の模範にあらずや。三經要纂は先生の抄錄なるが、その奧書に、八十歳以後專らこの書を樂しみて、多讀を廢し、專一に經義を研究し、識見益進みて、晩年に大疑錄を著はして、半生尊信せし朱子の說を疑ふに至れり。甘雨亭叢書には、大疑錄を以て、大醇にして小疵なりと言へりしが、偶以て先生の識見の進みしことを證するものなり。先生謂ふ益變者捨舊就新、漸進而不息之謂也。爲學者亦然。朱子所謂、終身主一說而不移。若非上

智則下愚と。識見進めば隨つてその說の變化するは當然の理なり。大疑錄は則ちこれなり。また先生は學貴有疑。大疑則可大進。小疑則可小進。無疑則不能進。故曰無疑者欲有疑。有疑者却欲無疑といひ、聖賢の說を尊信して阿諛せず、練擇去取して、一切曲從せずんば、以てよく明達すべしと謂へり。これ先生の學問工夫の正確なることを證するもの也。先生歿年の春、愼思錄を著はして曰く、魏志曰、胡昭恬々無不愛。雖僕隷必加禮焉。年八十而不倦於書籍、擬胡徵君見之矣。篤信謂、胡昭愛敬之德量不可及。可以爲法。如八十讀書不倦、吾雖毫釐亦日夕手不釋卷。是爲不企及と。先生が死に至るまで、氣力の壯烈なるは、敬服の外無し。而してこれ全く多年修養の結果なり。愼思錄は先生掉尾の傑作なるが、惜むべし、夫人東軒はこれを見るに及ばずして、六十二歲にして歿す。先生は終生の伴侶を失ひ、孤懷煢々として、その翌年を以て、相つぎて逝けり。先生父は寬齋。先生寬永七年(一六三〇)十一月四日を以て、福岡荒戶官舍に生れ、正德四年(一七一四)八月廿七日を以て歿す。先生夫妻福岡荒津金龍寺に合葬す。

第十二節　益軒は自ら敎育に從事したれども、身は黑田侯に仕へたるを以て、世

上に及ぼせる德澤は專らその著述に依る。先生も亦著述を以て事業となしたり。近來博文館にて出版せる益軒十訓は、その教育說を看るには、尤も善きものなり。教育に關する著述は非常に多けれども、兒童教育の方法を說きたるは、和俗童子訓にして、これには女子教育の方法も見えたり。その次きには、大和俗訓。初學訓等なり。學說につきては、大疑錄。自娛集等あり。先生は天然を愛し旅行を好み、一々これに關する著述ありて存養省察の方を述べたれば、その著述は教育的ならざるもの殆んど稀なりといふべし。而して先生の著書頗る世に行はれたれば、狡猾なる書肆は、先生の風に擬して教訓書籍を擬造して出版せり。所謂貝原ものは則ちこれなり。

教育の目的

教育の目的。教育につきては、先生獨見の發揮あれども、その根源せるところは、朱子の小學にあり。朱子の實說は朱子語類、及び學的等に悉しく見えたれども、その理想とせるは小學にあり。小學は周制の教育法を考へ合はせたるものあり。益軒は、古昔小學の教あることを論じていふ。何讀に小學の全書見る可らざるは、秦火に焚かれたればなりと云へるは當らず。古へ小學の全書は、その有無知る可

らず。蓋し古へは書を以て敎ふること尠くして言を以て敎ふること多ければなりと謂へり。眼識ある言と謂ふべし。

周代の敎育法は、書を以て敎ふること少なくして、言と形とを以て敎ふること多し。家語に載せたる左の一節の如きも亦以て周の敎育を見るに足るべし。

家語（三、觀象第十一）孔子觀乎明堂。觀四門墉有堯舜之容、桀紂之象、而各有善惡之狀、興廢之誡焉。又有周公相成王抱之、負斧扆南面以朝諸侯之圖焉。孔子徘徊而望之。謂從者曰、此周之所以盛也。夫明鏡所以察形。往古所以知今。人主不務襲迹於其所以安存、而忽怠所以老亡。是猶未有以異於卻走而欲求及前人也。豈不惑哉

益軒の敎育の目的は、道德にあることは、その著書中に雜出せるが、その一は初學訓に、

學問するに道を知らんことを以て心とし、善を行ひて人を愛し、たすくるを以て事とすべし。是れ學問の要とするところ、本をつとむるなり。

これ即ち先生の敎育の目的、道德にあることを明言せるものにて、なほ同書に、學

問の道善を行ひ惡を去るをむねとす。學んで書を讀めども善を好まず、行はれは要無しといへるは先生の說、致知力行を兼ぬるを知るべし。これ朱子所謂學之一字、實兼致知力行而言。又曰、博學、審問、愼思、明辨、篤行皆學之事といへると同じ。

先生の教育說は朱子に淵源せること左の如し。

學的卷上、朱子曰、程夫子之言曰、涵養須用敬。進學則在致知。此實學者立身進歩之要。

問、涵養在致知之先。曰、涵養合下在先。

學者工夫惟在居敬窮理二事。能窮理則居敬工夫日益進。能居敬則窮理工夫日益密。

涵養中自有窮理工夫。窮其所養之理窮理之中自有涵養工夫。養其所窮之理兩項都不相離。才見成兩處便不得。

教育の主義

教育の主義　教育の目的、道德にありとするときは、もとより被教育者の種類を限るべきにあらず。されば和俗童子訓にも、四民ともに幼時より云々これ根本をつとむるなりと言ひて、先生は四民平等に教育さるべきことを主張せり。則ちこ

れ普通教育にして、從來の教育が單に武士の階級に限りしものとは、その見地を異にせり。換言すれば、先生は始めて國民教育を唱導したるものにして、その主義たる從來の學者が概ね理想を以て主義としたるに異なりて實利を以て併せ行ひたることは、すでに英國のロックと比較せし條下に述べし如く、人生に必要なる學科を授くるといふ如きも、先生の實利主義を見るべきなり。

教育法　先生の教育法は頗る詳密なれども、要するに朱子の小學にもとづけり。小學は周代教育の古制を考へ蒐めたるもの。而して益軒は、これをその時代に適應せしむるやうに推考したるものなり。益軒は存養省察即ち躰驗を以て、教育法の第一義とし、書籍には左まで重きを置かざりき。當時は教育の制度なほ整頓せずして諸藩に學校あるにても無く、僅かに手習師匠あるのみのときなれば、先生は普通教育を主張されしにも係らず、その教育法の往々武士或は富豪の子弟等教育を施し易き階級に限られたる所以なり。而して先生の教育法は所謂德育を主として智育を輕んじ、而して其德育を論ずるにも心理的基礎の弱きは、その缺點とすべし。先生は古文學を尙んで、また實學を尙びたり。その醫學、博物、算數の學をす

ゝめたるは、則ちこれ也。古へは教育と學問とは同語を爲して、教育は則ち學者を造る所以なりしが、その人たるものを養成するに必要なるためといふ事を知りしは輓近のことなり。先生が四民の教育を唱導して、人たるものは教育無かる可らずと道破したるは、近世本邦の教育界に始めて光明を認めたるものなり。當時の有様にては普ねく學校の設置、出來そうにも見えず。また學校の利益も未だ分明ならざりしかば、益軒は專ら家庭教育を唱へたり。從來は武士の教育のみを論じたるが故に、諸藩學校の建設を論じたれども、先生は四民の教育を唱へたる故に、國民學校の思想は、未だ先生の想及ばざりしところなるべし。されど益軒は、古へ唐土にて小兒十歳なれば外に出して晝夜師に隨ひ學問所に居らしめ、つねに父母の家に置かず。此法古人深意あり。如何となれば、小兒つねに父母の側に居て恩愛にならへば、愛を頼み恩に狎れて日々にあまへ氣隨になり、艱苦の務無くして、徒に時日を過し、教へ行はれず。且つ孝弟の道を父兄の教ふるは、我が身に善く事へよとの勸めなれば、同じくは師より勸めて行はしむるが宜しと說きて、古昔支那に設けし庠序の制を嘆美したるが、その庠序の設置を希望せし理由とすべきは、子弟を

して父母の恩に狎れずして、よく父母の恩を知らしめんとの事に歸著し、國民學校が國家經濟上必要なることには、未だ想到せざりし也。

學校に關する朱子の說は、古への敎は小學と大學とありて、その道は則ち一のみと云ひ小學は其事を學び大學は小學の學べる事の所以を學ぶと云ひ、小學と大學との干係を以て、培根達支なりとせり。これに就きて、先生の意見は、小學集疏に見ゆ。篤信謂、古人曰、小學者小子之學也。然以大學例推之不可以小子之小學當小學小字。蓋小子所學、卽小節學也。故曰小學とありて、小學は則ち事理の卑近なるものを敎ふところとせり。則ち先生の意見は朱子の培根達支說とは異にして、大學は大成し、小學は則ち小成するものなり。蓋し朱子の期するところは、大學の成功にあり。小學を以て大學に進むの序とす。主とするところは、大學ある也。朱子盛んに、三代には閭巷に至るまで庠序の設ありしを說くと雖も、未だ普通敎育の思想あらざりし也。

學的、朱子曰、古人由小學而進於大學。其間持定堅定、涵養純熟固已久矣。是以大學之敎、特因小學已成之功。而以格物致知爲始。今人未嘗一日從事於小

學。而曰必先致其知、然後敬有所施。則未知其以何爲主而格物以致其知也。
問、大學首云明德、却不曾說主敬。莫是已具於小學否。
曰、然。自小學不傳、伊川却是帶補一敬字。
今人既無小學之功。却當以敬爲本。
朱子曰、古人於小學。自能言便有教。一歲有一歲工夫、而今都蹉過了。不能更轉去做得。只據而今地頭、便劄住、立定脚跟做去。栽做後來根株、塡補前日欠缺。
小學是教之以事。如事君事父事兄處友之類。大學是發明此理。
敬之一字、聖學之所以成始而成終者也。爲小學者不由乎此、固無以涵養本原而謹夫洒掃應對進退之節、與夫六藝之教。爲大學者、不由乎此。亦無以開發聰明進德修業而致夫明德新民之功。是以程子發明格物之道而必以是爲說焉。
朱子曰、敬者一心之主宰、萬事之本根也。
被教育の年數に就きては、益軒は、凡そ古人小學より大學を終はるまでの標準とし、則ち八歲より二十歲ごろまでとして、更らにその前に二ヶ年の豫備を設けたり。

恰も今日の幼稚園より高等學校を終るころの年數に該當せり。詳言すれば、八歳より十五歳ごろまでに、人生必須の事理を辨知せしめ、十五歳より二十歳ごろまでに德器を成就せしめむとするにあり。

被教育の年數に就きては、先生本邦の事情を考へ、朱說の恰當なるを以て、これに據りしものなるべし。文献通考に、八歳入小學、十五入大學。大戴禮保傅傳及白虎通之說也。程朱從之、十三年入小學、二十入大學、尚書大傳之說とありて、二十歳ごろまでを被教育の標準としたるは程朱の說あり。而して、その年齡には固より截然として期限を立てたるにあらずして、先づ二十歳ごろと定めたるものなること丘瓊山も、これを言へり。然るに益軒はさらに歩を進めて、六歳より二十歳に至る毎歳の進退を委しく制定したるものあり。和俗童子訓これ也

隨年、教程の詳密なることは本篇は紙數の許さゞるところなれば、文學博士三宅米吉氏の「益軒の教育法」の中にその進度を表に示したるものある故、就きて參看せられたし。

益軒の隨年教程は、その教育法の成案にして吾近世教育史上に重きをなすものなるが、その設計に就きて何等かの粉本無かりしやと疑問あり。 余は思ふにこれは固より益軒の成案なれども、元の程瑞禮の讀書分年日程より。(元、仁宗延祐二年出版。一三一五、日本花園天皇正和四年)思ひ付きたるものなるべし。この書は輔漢卿の朱子讀書法に基づきて、之を修めたるものにて、淸朝にては廣く行はれたるなり。

讀書分年日程序(程瑞禮)今父兄之愛其子弟、非不知敎、要其有成、十不能二三。此豈子弟與其師之過。 爲父兄者、自無一定可久之見。 曾未讀書明理。 遂使之學文爲師者、雖明知其未可、亦欲以文墨自見。 不免于阿意曲徇。 失序無本、欲速不達。不特文不足以言文、而書無一種精熟。 坐失歲月、悔則已老。 且始學既差、先入爲主、終身陷於務外爲人而不自知。 倣宜朕也。 孔子之敎序、志道據德依仁、居游執之先。 周禮大司徒列六藝、居六德六行之後。 本末之序、有不可紊者。

今ま和俗童子訓によりて隨年敎育の進度を示さん。

○古人は小兒の始めて能く食し、よく物言ふときより早く敎へしとなり。……凡

そ小兒を育つるには、始めて生れたるとき乳母を求むるに、必溫和にして愼み、まめやかに詞少なきものを擇ぶべし。……凡そ小兒の惡くなりぬるは、父母めのと、かしづきなるゝ人の敎の道知らずして、そのあしきことを許し、したがひほめて、その子の本性を害ふ故なり。　或は暫らく泣聲を止めんとて欺きすかして姑息の愛をなす。……漸く年長じ智惠出でくるときに至りて、俄に始めていましむれども、その惡しき習はし、年と共に長じ、久しく習らひそみて、本性も等しくなりにたれば、諫を用ひず。　幼きときに敎無く、年長じて俄に諫むれども隨はざれば、本性惡しく生れつきたるとのみ思ふこと、いと愚かに惑の深きことならずや。

凡そ子を敎ふるには、父母嚴にきびしければ、子たる者恐れ愼みて親の敎を背かず。　是を以て孝の道行はる。……幼きときより心ことばに忠信を主として僞無からしむべし。　また小兒には利慾を敎へ知らしむ可らず。……幼き時より必ず先づ其子の好む業を擇ぶべし。　好むところ尤大事也。……たとひ用ある藝能と雖も、一向に好み過して、その事にのみ心を用ふれば、必其一事に心傾きて、萬事に通ぜず。　其好むところに就きて僻事多く害多し。……博奕に似たる遊はなさしむ

可らず。小兒の遊を好むは常の情なり。道に害無き業ならば強に抑へおけて其氣を屈せしむ可らず。只後ちにすたらざる遊び好みは打任せ難し。……初より禮をつゝしみて守るべし。

○少兒の時より早く父母兄長に事へ賓客に對して禮を勤め、讀書手習藝能を勤め學びてあしき考に移るべき暇無く苦勞さすべし。……小兒に學問を教ふるに初より人品よき師を求むべし。……まづ謙讓を教へて後ちに才學を習はしむべし。……まづ其交るところの友を擇ぶを要とすべし。……古人の語に、年若き子弟、たとひ年を終るまで讀まずとも、一日小人に交はる可らずといへり。

○四民ともに、その子の幼きより父兄君長に事ふる禮儀作法を教へ、聖書を讀ましめ、仁義の道理を漸く覺らしむべし。是れ根本をつとむる也。次にもの書き算數を習はしむべし。武士の子には學問の際に、弓馬劍戟拳法など習はしむべし。……されば道理の學問を本とし重んずべし。藝術は誠に末なり。六藝の中もの書き算數を知ることは殊に貴賤四民ともに習はしむべし。……また日本にては算數は賤しき業なりとて、大家の子に教へず。これ國俗の誤り、世の人の心得違

へるなり。……大人の子は、殊に自ら算數を知らでは勤にうとく、事欠くること多し。これ日用の切要なることにして必習ひ知るべき業也。……凡そ高きも低きも、算數を知らずして、我財祿の限を考へず。猥りに財を用盡して困窮に至るも、また事に臨みて算を知らで利害を考ふることも成り難きは、いとはか無きことなり。また音樂をも頗る學び、その心を和はらげ樂しむべし。

○子弟を敎ふるにいかに愚不肖にして、若く賤しきとも、甚だ怒り罵りて顏色語ばをあらゝかにして、惡口して耻かしむ可らず。……只從容として嚴正に敎へ幾度も繰返して漸く告げ戒しむべし。これ子弟を敎へ、人材を養成す法也。……小兒の衣服は花やかなるも苦しからずといへども、大もやう六じま、紫などのされみたるは著す可らず。

○農工商の子には幼きときより只物書き算數をのみ敎へて、その家業を專らに知らしむべし。必らず樂譜、淫樂その外、徒らなる無用の雜藝を知らしむ可らず。

○小兒は十歲より內にて早く敎へ戒しむべし。性惡しくとも能く敎へ成さば必らず善く成るべし。

以上は六歳以前及び一般に小兒教育法につきての要項なり。隨年教程は六歳よりして始まる。

○六歳の正月始めて……數の名と方の名とを教しへ、その生れつきの利鈍を計りて、六七歳より和字を讀ませ書きならはしむべし。和字を教ふるにあいうえを五十韻を平假名に書き、たてよこに讀ませ書きならはしむ。又世間往來の假名の文の手本を習はしむべし。

○七歳より男女席を同じくして並び座せず、食を共にせず。

○八歳　古人小學に入りし年なり。初めて幼者に相應の禮義を教へ無禮を戒しむべし。……かしづきて從ふ人より、まづ孝悌の道を教ふべし。……凡そ孝悌の二は人間の道を行ふ本也。萬事の善は、皆なこれより始れることを教ふべし。……七歳より前は、猶ほ幼なければ、早くいね晏く起き、大やう其心に任かすべし。禮法を以て一々責め難し。八歳より門戸の出入し又は坐席につき飲食するに必らず年長せる人に、おくれて先たつ可らず。始めて、へり下り讓ることを教ふべし。今年の春より眞と草との文字を書き習はしむべし。……初めは眞草ともに大

字を書きならはしむべし。初より小字を書けば手すくみて働かず。又此年より早く文字を讀み習はしむべし。……孝經、小學、四書などの類の文句長き六かしきものは、初より讀み難く、退屈し學問を嫌ふ心、出できてあしゝ。まづ文句の短くしして讀み安く覺えやすきものを讀ませ、空らに覺えさすべし。

○十歳　この年より師に隨はしめ、先づ五常の理、五倫の道あら〳〵言ひ聞かせ、聖賢の書を讀み學問せしむべし。讀むところの書の中、まづ義理の聞え易く、さとし易き切要なるところを說き聞かすべし。是より後ち漸やく小學、四書、五經を讀むべし。その際に文武の藝術をも習はしむべし。世俗は十一歳の比、漸やく始めて手習など習ふ。遲しと謂ふべし。

○十五歳　古人大學に入りて學問せし年なり。是より專ら義理を學び身を修め、人を治むる道を知るべし。これ大學の道なり。こと更ら高家の子弟年長じては、諸人の上に立ちて多くの民を預り人を治むる職分重し。……およその人も其分限に應じて、人を治むる業あり。その道を學ばずんばある可らず。性質遲鈍なりとも、これより廿歳までの間に、小學四書等の大義に通ずべし。もし聰明ならば、

博く學び多く知るべし。

○廿歳　古へもろこしには廿歳にして冠著るを元服を加ふといふ。……元服を加へざるうちは猶ほ童なり。元服すれば成人の道これより備はる。これより幼少なるときの心を捨てゝ成人の德に隨ひ、博く學び篤く行ふべし。その年に應じて德行備はらんことを思ひ望むべし。もし元服しても成人の德無きは、猶童心ありとて、古もこれを謗れり。

隨年敎法は、小兒の德及び知につきて委しけれど體育につきては粗略なり。されど七歳より以前は、禮法を以て規し難し。大やうその心に任かすべしといひ、又は初の内は早晨に書を讀ませ食後には讀ましめずと云ふ如き、皆な兒童に自由を與ふるの精神を見るべし。童子訓に、凡そ小兒を育つるに、初生より愛を過ごす可らず。……古語に凡そ小兒を安からしむるには、三分の飢と寒とを帶ぶべしと云へり。三分とは十分の内、三分を云ふ。この意は、少しは飢やし、少しは冷やすが善しとなり。これ古人、小兒を保つの良法なり。……天氣好きときは、折り〳〵外に出だして風日に當らしむべし。此の如くすれば、肌堅く血氣強くなりて、風寒に感

ぜず。風日に當らざれば、肌もろくして風寒に感じ易く、わづらひ多し。小兒の養の法を、かしづき育つる者に、よく云ひ聞かせて敎へて心得しむべしと云へる如き、皆な育兒法の要項なり。

學校衞生につきては、當時小學の設無きを以て、その爲めに說けること無しと雖も、養生訓のうちには、學校衞生に適切なるものも亦尠からず。左にその數條を擧げん。

千金方曰、養生の道久しく行き、久しく坐し、久しく臥し、久しく視ることなかれ。古人は詠歌舞踏して血脉を養ふ。……皆な心を和げ身を動かし、氣をめぐらし、體を養ふ道なり。

坐するには正坐す可し、かたよる可らず。……牀几に腰かけ居れば、氣めぐりて好し。中夏の人は、つねに此の如くす。

居處寢室は、常に風寒暑濕の和氣を防ぐべし。……濕は人の身を破ること遲くして深し。故に風寒暑は人畏れ易し。濕は人にあたること深く。故に久しくして癒えず。濕あるところを早く遠ざかるべし。

凡ての食物淡薄なるものを好むべし。肥濃油膩のもの多く食ふ可らず。生冷堅硬なるものを禁ずへし

常に居る處は南に向ひ戸に近く明らかなるべし。陰鬱にして暗き處につねに居る可らず。氣を塞ぐ。又輝き過ぎたる陽明の處も、常に居ては精神を奪ふ。陰陽の中に叶ひ、明暗相半ばすべし。

運動をば益軒は、いたくこれを主張し、凡そ人の身慾を少くし、時々身を動かし足を働かして歩行して久しく一所に安坐せざれば、血氣めぐりて滯らず、養生の要務なりと謂へり。また按摩導引を尙び、その法をも詳記せり。江戸時代に行はれたる遊戯の種類の主なるものは、腕押し。指角力。驚角力。枕引。枕爭。鶴飼拾ひ。蹴上げ紙。壁立。額立。箕被。手拭引。頭項引。闇組工。闇の溝等ありて、專ら民間に行はれ、今もなほ多く行はるゝものなるが、武士は壯年までは、武藝に身を固むるを以て別に運動を奬勵する必要無れども。中年以後は公職に從事し、大概は運動すること少なき故に益軒は花園或は畑を作る等、其他散歩なども奬勵せり。すべて從來本邦の遊戯は相對的のものにして、團體的の遊戯なかりしは大なる缺

點なりき。

學的(紀綱)　朱子曰、賈誼作保傅。其言、有曰、天下之命係於太子。太子之善、在於蚤諭教、與選左右。教得而左右正、則太子正。太子正則天下定矣。此天下之至言、萬世不可易之定論也。

小學之教廢而人之行藝不修。大學之教廢而世之道德不明。學校之政、不患法制之不立。而患理義之不足以悅其心。

學的(下學)　朱子曰、古人設教、自洒掃應對進退之節、禮樂射御書數之文。必皆使之抑心下氣以從事、其間而不敢忽。然後可以銷磨其飛揚倔强之氣而爲入德之階。今既無此矣。惟有讀書一事。尚可以爲攝伏身心之助。

學的(須看)　君子、成德之名。先生、父兄也。又云學士、長者之稱。學之爲言、效也。後覺者、必效先覺之所爲。

學的(進德)　(朱子)又嘗訓其子曰、起居坐立、務要端莊不可傾倚。恐至昏怠。出入趨步、務要凝重不標輕。以害德性。

學的（道在）　問、父母之於子、有無窮憐愛。欲其聰明成立。此之謂誠心邪。朱子曰、父母愛其子正也。愛之無窮而必欲其如何則非矣。此天理人欲之間、正當審決。

叔度以正率其家。而無一人敢爲非義者。

古人易子而教、所以全父子之恩而亦不失其爲教。

父兄有愛其子弟之心者、當爲求明師良友使之究義理之指歸而習爲孝弟馴謹之行以誠其身而已。禄爵之不至、名譽之不聞、非所憂也。

問、人倫不及師。朱子曰、師與朋友同類、而勢分等於君父。惟其所在而致死焉。

又云、人倫不及師者朋友多而師少。以其多者言之。

學的（上達）　性善。故人皆可爲堯舜。必稱堯舜所以驗性善之實。

學的（古者）　朱子曰、古者小學教人、以洒掃應對進退之節、愛親敬長隆師親友之道。皆所以爲修身齊家治國平天下之本。而必使其講而習之幼稚之時。欲其習與智長、化與心成、而無扞格不勝之患也。

教小兒只說箇大槩。只眼前事。或以洒掃應對之類作段子亦可。每疑曲禮衣

母撥、足母蹶、將上堂、聲必揚、將入戶、視必下、此等叶韻處、皆是古人教小兒語。 列女傳孟母又添兩句曰、將入門、問所存。

朱子曰、教人者、當隨其高下而告語之、則其言易入而無躐等之弊。

教道後進須是嚴毅。 然亦須有以興起開發之方得。 只任嚴、徒拘束之、亦不濟事。

朱子曰、古人數人、非獨教之。 固將有以養之。

朱子曰、學常要親細務。 莫令心麁。

古者玉不去身。 無故不徹琴瑟。 自成童入學、四十而出仕。 所以養之者備矣。 理義以養其心、舞蹈以養其血氣。 故其才高者爲聖賢、下者亦爲吉士。 由養之至也。

非是科擧累人、自是人累科擧。 讀聖賢之書、據吾所見而爲文以應之。 則利害得失置之度外。 雖終日應擧亦不累人。

朱子曰、古人讀書與今人異。 如孔門學者於聖人纔問仁問智終身事業已在此。 今人讀書、仁義禮智、總識而却無落泊處。 此不熟之故也。

學須是做自家的看。便是切己。今人讀書、只要科舉用。已及第則爲雜文用、其高者、則爲古文用、皆做外面看。

爲學須要剛毅果決。悠々不濟事。

朱子曰、爲學須是專一。吾儒惟專一於道理則自有得。

朱子嘗問學者曰、公今在此坐是主靜、是窮理。久之未對。曰、便是公不曾做工夫。若不是主靜、便是窮理。只有此二者。既不主靜、又不窮理、便是心無所用、閑坐而已。如此做工夫豈有長進之理。

問、氣質弱者、如何涵養到剛勇。曰、只是一箇勉強。然化氣質最難。

朱子曰、古人說學有緝熙于光明。此句最好。蓋心地本自光明、只被利欲昏了、今所以爲學者、要令其光明處轉光明、下緝熙字。

學的（此學）　朱子曰、此學不明、天下事決無可爲之理。

學的（爲治）　朱子曰、爲學與爲治、只是一統事。他日之所用、不外乎今日之所存。

朱子曰、夫民衣食不足、則不暇治禮義。而飽暖無教、則又近於禽獸。故既富而嚴以孝弟、則人知愛親敬長而代其勞。

問鄕學如何。曰、皆是農隙而學。曰、熟與敎之。曰、鄕太夫有德行而致其事者敎之。

朱子曰、上不知禮、則無以敎民。下不知學、則易與爲亂。

學的(斯文)　朱子曰、斯文既在孔子。孔子便著做天在。

李先生敎人、大抵令於靜中體認大本發未時氣象分明。即處事應物自然中節。此乃龜山門下相傳指訣。然當時親炙之時、貪聽議論、又方竊好章句訓詁之習、不得盡心於此。至今若存若亡、無一的實見處。辜負敎育意。每一念此、未嘗不愧汗沾衣也。

以上、學的に就きて、朱子の敎育意見を採取して、參照に供す。讀者これを益軒と比較して、啓發するところあるべし。

益軒の敎授法は、修身、讀書、習字の三は明らかに知らる。隨年敎法のうちにも、修身に關しては、既に明らかなれば、更に之を絮說せざるへし。大要修身に於ては、兒童を早くより敎へて良習慣を作るにあり。習慣は益軒の尤も重要視したるところ、少時に師友を擇ぶことの嚴なるべきを主張せるは、良き習慣を作らんが爲め

にて、これに關する先生の意見は、すでに列擧せり。

讀書習字は少時には讀み書きとして教へ、專ら假名を習はしむ。八九歲より後ち、始めて二に分る。讀書法の一篇ありて詳かに先生の教授法を知るを得べし。その一斑を示さんに。

○凡そ書を讀むには、必ず先づ手を洗ひ、心に愼しみ、容を正しくし、几案の邊りを拂ひ書册を正しく几上に置きて跪きて讀むべし。師に書を讀み習ふときは、高き几案の上に置く可らず。袂の上、或は文匣矮案の上に載せて讀むべし。必らず人の踏む上に置くべからず。

○凡そ書を讀むには忙はしく讀む可らず。詳緩に之を讀みて字々句々分明なるべし。一字をも誤る可からず。必らず心到り眼到り口到るべし。この三到のうち心到を先とす。……一書熟して後ち、又た一書を讀むべし。聖經賢傳の益ある書の外、雜書を見る可らず。行義を愼しみ、妄りに言はず笑はず。妄りに外に出入せず。妄りに動作せず、志を學に專一にすべし。

○初めて書を讀むには、先づ文句短くして讀み易く覺え易きことを敎ふべし。

初より文句長きことを敎ふれば退屈し易し。易きを先きにし、難きを後とすべし。……和漢名數の書に書き集め置けるをそらに覺えさすべし。この外には覺えてよきこと多し。そらに覺えざる事は用に立たず。また周南、召南の詩、蒙求の本文五百九十八句。性理字訓の本篇、三字經、千字文、類合千家詩などの句、短く覺え易きものを敎ふべし。右の名目小篇などを讀み覺えて後ち經書を敎ふべし。……經書を敎ふるには、先づ孝經の首章、次ぎに論語學而の篇を讀ましめ、皆熟讀して後ち、かの要義をあら〳〵と說き聞かすべし。次きに小學を讀ませ、後ちに四書五經を讀ましむべし。

○才性あれば、八歲より十四歲まで七年の間に、小學、四書、五經、等皆な讀み終る。四書、五經熟讀すれば、才力いでき、學問の本立つ。その力を以て漸く年長じて、群書を見るべし。

○小兒に始めて書を授くるには、……必らず退屈せざるやうに少しづゝ授くべし。その敎へやうは、初めは只一字二字三字づゝ字を知らしむべし。その後、一句づゝ敎ふべし。既に字を知り句を覺えば、小兒をして自ら讀ましむべし。一句

を敎ふるには、まづ一句を讀み覺えさせ、熟讀すれば、次ぎの句も又前の如くに讀ましめ、既に熟讀して前句と後句とを通讀せしめて止むべし。

○小兒讀書のうちに、早く文義を所々敎ふべし。孝經にて言はば、仲尼とは孔子の字なり。字とは成人して名づくるかへ名なり。かやうに讀書の序に文義を敎ふれば自然に書を曉し得るものなり。

○少年のときは記性强くして、中年以後、數日に覺ゆることを只一日半日にも覺えて身を終るまで忘れず。一生の寶となる。年老いて後悔無からんことを思ひ、小兒のとき時日を惜みて、いさみ勤むべし。

○四書を毎日一二百字づゝ百遍熟誦して、そらに讀み、そらに書くべし。字の置き所、助字の有り所、ありしに違はず覺え讀むべし。是程の事、老らくの年と雖も、勤めこなし易し。況んや、少年の人をや。四書をそらんせば、その力にて義理に通じ、諸の書を讀むこと易からん。

○經書を學ぶいとまに、和漢の史を讀み、古今に通ずべし。古今に通ぜざるは、暗くして用に達せず。

○小兒の書を讀むに文字を多く覺えざれば、書を讀むに、力無くして學問進まず。また文字を知らざれば、すべて世間の事に通ぜず。

上述せる如く、讀書の目的は經書を讀むを第一とす。而して益軒は小兒をして讀書を嫌忌せしめざらんが爲めに、簡易より漸次複雜に進むべきことを繰返し說明し、併せて讀書に記憶の必要なることを述へたり。

手習は當時民間敎育の主なる部分を占むるものにて、益軒は爲めに手習の法一篇を著はせり。片假名より平假名を先きにし、眞字を先きにし、草字を後ちにして、先づ大字よりして漸く小字筆札に移つる順序にて、五十音は、尤も大切なるものとして、あいうゑを五十音は和音に通ずるに益あり、縱橫に讀み覺ゆべし、假名遣ひ、てにをは、なども之を以て知るべしと云へり。すべて益軒の手習法に就きては頗る詳密なる說明あれども、茲に絮說するの必要無し。

益軒の敎授法としては、讀書及び手習の法のみを記述したれども、推し廣めて一般の敎授法を知るべし。家庭に於ける兒童敎育に於て、管理及び訓練に關する主義は、儒敎を本としたる嚴格主義なりしかども、また兒童本知の性を啓發せしむる

にありしことは、小兒教育法の一斑の部に設けるところなり。先生の嚴格といふは敬の一字より出づ。その教育法を一貫して流動せるは、唯たこの一字なり。先生一代の行動すべて敬の發動なりき。敬の說は朱子學に出づ。

敬とは何ぞや。朱子は、これを主一無適と解す。而して曰はく敬者一心之主宰、萬事之本源也。かつ謂ふ、聖學の始をなして、また終をなす所以のものは敬なり。小學の教も大學の教も敬なくは何かせんと。又た古より敬が聖門第一義たることを說きて、曰く。堯舜以來すでに敬字を說く。孔子は曰ふ、修己以敬、此是最緊要處と。その後、秦火ありて以來、久しく敬字を識らず。程子に至りて、これを解說す。大學の首章、明德といひて、却つて少しも敬を說かざるは、小學に已に含めるが故なるべし。小學の教、傳はらざるを以て、伊川先生即ち一の敬字を以て、これを補へりと、即ち朱子學の敬の解說を見るべし。益軒、敬字を見ること尤も大切にして、進德工夫唯だ敬にありとす。敬を訓じてツヽシムとす。而して畏の一字を取り來りて、尤も敬に近しとし、屢々畏敬二字を併用せり。此の如きは全く朱子學に根源せるを知るべし。

敬につきては、學的に持敬篇ありて、敬字に對する程朱の解說は詳明なり。今その一二を擧げて、前說を補はん。

自秦以來、無人識敬字。至程子方說得親切。曰、主一之謂敬。無適之謂一。故此合而言之。

人常恭、則心常光明。

問、敬者德之聚、曰、敬則德聚。不敬則都散了

伊洛拈出敬字。眞是聖眞的要妙工夫。學者只於此處著實用功。則不患不至聖賢之域矣。

明道は敬字を說くに、やゝ偏僻の處あり。明道先生曰、某寫字時甚敬。非是要好。只此是學。字を寫すに當りて好きを要むるに非ず唯敬するなりといふは人情にあらず。

先生の教育法は自家省察によりて、獨得の發輝あれども、教育に關する理說に至りては、朱子に根源せるを以て益軒を研究せん者は、則ち併せて朱子を研究せんこと要す。

朱子の教育意見一斑は前にすでに擧げたり。朱子學は江戸時代にては官學となりしほどの勢力ありしが、朱子學者は性理に拘束せられて、多くは道學先生なりき。人才の輩出したるは陽明學派及び古學派なりしが、これ朱子學派の祖師の罪にあらず朱子は元氣旺盛にしてその言論文章人の心目を爽快ならしむるものあり。學者須有蓋世之氣といひ、精神一到何事不成といふ如き、皆その英奇卓拔の風采を想望せしむるに足る。後ちの學者因循停滯して漫に道學先生となり了りしは、性理學の餘弊なり。益軒は穩健にして柔和の中に不可當の勇氣を藏す。所謂深水靜かなるもの先生のこと也。蓋し朱子以後有數の人なりと謂ふべし。

益軒の教育法は開發主義なるが、朱子すでに之を道破せり。左の二項記事の如き明らかに朱子の開發主義なるを見るべし。

學的(教者)　師友之功但能示之於始而正之於終耳。若中間二十分之工夫自用喫力去做。

發的(斯文)　康節(邵康節)學於李挺之、請曰願先生微開其端。毋竟其說。此說

極好。學者當然。須是自理會出來便好。

山崎闇齋派朱子の敎育法を傳へたるものなり。佐藤直方の說併せて此に記すべきものあり。

學談雜錄。今日師弟となりて講習するに師が我を君子にして呉れることが成るに極まれば、孔門三千人皆な顏曾の樣にならるゝ筈也。兎角弟子の方からならねば成就せず。ならると思ふ人の勤の上に師が差引の差圖をする也。師頼みをする學者は無い。兎にも角にも己が自立で無ければならず。故に學は自己の立志が第一也。大學の傳皆明也の意。中庸末章慶獨可考。吾嘗謂、師に聞くは二三也。七八は皆な弟子の力量にあること也。小學に夫指引師之功也。決意而往、別須用己力。難仰他人矣と、學者思之。

益軒以前にありて、朱子の敎育法を唱へたるは、山崎闇齋にして朱子訓子帖を出板せり。然れども闇齋は敬義に僻して、學風固陋となりしのみならず、暮年神道に入りしを以て、朱子の敎育法を鼓吹したる功は多からず。唯だ師道を嚴持したる功蹟は頗る大なり。

朱子は師道嚴重を尚ぶ。闇齋のは餘りに嚴なりき。佐藤直方が師道に誓書を要せざることを論ぜるは、妥當の見なり。然れども弓馬刀槍より種々の藝術に至るまで、入門に誓書獻せしことは幕末まで廢せざりき。

學談雜錄。諸侯の上でも、馬弓槍兵法などの師をば師と云ひて尊ぶことあれども學問の方で、そう無いは異な事他。……惣じて手形證文で交はるは曲藝の上の事也。道學の上に誓紙證文は無い。佛子の拂子も證文なり。我さへ道を合點すれば、人の知不知には構はぬ。惣じて請狀手形は皆な下部たる也。孔門以來聖賢の學に、しるしをやることは無いにて知るべし。日本の神道にも誓紙手形あるは、後世の失ならん。……扨て釋氏の佛子も後世の謬なるべし。釋迦拈花微笑の筈なり。是から考へて見よ、誓紙をさせて人にものを敎ふるは、上品の人のせぬ筈の事也。

讀者諸君若し兵學醫學武術の古名家を訪問して、舊記を捜羅せば、則ち紙帳を發見することあらん。入門者の氏名の下に、血判早や黑くなりて、舊師道の面影、慘悽として殘れるを見るとき、感果して如何

益軒は女子敎育につきては特創の識見あり。その理想は敬順なる女子にありて、その敎育法の要は敬一字にあり。先生に取るべきは女子を敎育するに、單に嚴格主義を以てせずして、實利主義を調和せること是れ也。高尙の思想あり、貞淑の德操あると共に、算數に明きらかに、鹽梅に委しき世帶持ちよき主婦を作らんこと先生の希望なりき。先生は儒敎主義の弊として婦人を視ること卑しく、婦人は邪見のものなり、小智にして嫉妬深きものなり、すなほならざるものなりとの見解を抱きたることもあり。故に夫たるものゝ務めは妻を敎導するを必要としたり。若しそれ婦人にしてかゝる小智劣性のものたらしめばこれに向つて六ケしき德操を要求するは、頗る辻褄の合はざる話なれども、益軒が非常なる嚴格主義を主張すると共に、實利主義を交へたるは女子敎育に於ける一大進步と謂はざる可らず。

本邦上古に於ては、諸冊二尊の時より既に夫唱婦隨の敎へは見えたれど、婦人も身心共に强健にして、男尊女卑の弊風は無かりき。男尊女卑の風を釀成したるには、佛敎の勢力は與つて少からぬ影響を及ぼせり。外面如菩薩、內心如夜叉と說き、また一の好例は女子は邪慳の性たるによりて靈地にも登ること

を得ずとせる如く、女子をして退守自屈の氣を養成せしめたること多し。佛教が女子教育に與へたる大恩は慈悲をすゝめし事なり。奈良朝のときには我雖女身、淨戒靈感、豈凡婦之比哉と云ひて、推して金峰の靈地に登りし都藍尼あり。佛慈平等、廣度群生。法界一相、寧別男女と云ひて安居會に列せし舍利尼あり。婦人の氣力は猶ほ熾んなりしが平安朝となりては、花顏細腰、法華經と白氏文集を金科玉條として、物の哀れを知るを第一とし、女子教育よりして實利主義は取去られ、身心の害痛には忽ちに絶え入るといふ果敢なき婦人の世となりぬ。吾國民精神の衰頽平安朝の如く甚しきはあらず。源氏物語、枕草紙は、當代の女子教育を見るの資料なれども、簡短にして好きは落窪物語なり。これは繼母の手に苦しみたる貴嬪、落窪君の一代記なり。平安朝の末より鎌倉時代の初期に至りて、武士道は成立したると共に、貞女道も亦成立したり。平安朝の盛時には、婦人の德操、地に落ちしが、風儀頽唐の極、茲に嚴格なる貞女道の發生を催ふすに至れり。平安朝には貞女の事、見えず。貞女といふ事、尤も早く見えたる一例は、今昔物語に載せたる貞女の噺これ也。貞女道は

武士道を婦人に移植したるものにして、一種烈々の氣を帶びたり。玆に所謂貞女は支那のと異なりて、必しも再嫁せざるの謂にあらざる也。

元祿時代は女子敎育の勃興したる時代也。女子敎育に關する著述の出でしことも夥たゞし。これ人文の進步によると雖も、元祿の伊達風は則ち女子敎育の必要を喚起せしめたるものなるべし。藤井懶齋の如きは、女子敎育に關する幾多の著書あれども、大抵は儒書を飜譯したるもの也。

益軒と時を同じくして、野中婉女史（萬治三年、一六六〇―享保十年、一七二五）あり。土佐の名家、野中兼山の女にして、安履亭と號す。兼山非命に死して女史終生嫁せず。一代の志行さすがに乃父の名を辱しめざるものあり。その人に與へたる「朧夜の月」一篇は女訓として後世に傳唱すべきもの也。唯その行狀、頗る奇矯に涉る如きは、その境遇の轗軻たるによるべしと雖も、亦實に南學派の氣風を帶ぶるものと謂ふべし。堅貞の志操と學術とを兼ね有して、女訓を作りしは、江戶時代にて安履亭を始めとす。

女史四歲のとき、兼山を失ひ、翌年籍沒せられて、幡多郡宿毛村安東氏に禁錮せ

らる。萬石の丈夫罪なくして、配處の身となり、群議亡父の功罪を喋々して、遺族天地に踞蹐するの已むを得ざるに至れり。女史この際に生長す。氣根薄き者は、かゝる境遇にありては屈托せずんば則ち怨望す。然るに女史、禁錮にあること四十年、強志力行道を求めて倦まず。闇齋の門人、谷重遠に就きて國書、儒書及び歴史を學ぶ。師弟の間、儼として君臣の如くなりき。女史氣宇高く經術醇正にして、柴菴にありて、ひとへに女子の德操を明らかにせんことを期す。その識見の高明なるは、朧夜の月の第一條にいふ。

世の中、いろ／＼と移りゆく事を聞傳へ侍る。我つれ／＼の折柄、柴の菴の内にて、よしあしの物語を聞きて理をつめ工夫して見侍る。(中略)女子の敎も聖女。賢女。烈女その外、いろ／＼愚の事には盡しがたき文ども、あまた有といへども、それを我人心にかけ、道理を合點し、論をつめ、我身のしんから工夫せし人は無く、今時の風は髪の結樣、びんのつけ樣、または衣類の模樣これより外には善き事は無しと思ひ玉ふは淺ましき哉。いたましき哉。その古へ唐の敎、委しといへども、是は賢女風は恐ろしなどと嫌ろふ人あるべ

し。和國のならはしいとやさしく(中略)然ども今時は何とやらん、歌書を戀の媒と心得もし、見る人のあれば、風儀あしゝ。それは用ひ樣のあしき也。人參ほど命つなぐものは無けども、用ひましき折から用ゆれば惡し。人參のとがにあらず用ゆる人にあり萬づ世の中の事、よしあしともに傳へ聞きては工夫すべし。天地の內、何か義理を免かるゝものあらんや。よく考へ工夫すれば、流石天性備はりし故、誰にても外より來ることにあらず。なるほど中庸の理にあるべし云々。

女史赦に遇ひて歸るの後ち、土佐郡朝倉村に居り、醫を業とし藥を賣り、以て老母を養ふ。仕官せる者來りて診察を乞ふときは、對面するを肯んせず。絲を患者の寸口に結び障を隔てゝ絲端を執りて脈を診し以て治療を施す。されば俚諺にも伎の精妙なるものを目して婉女の絲診(イトミャク)といふに至れり。女史つねに家居して外出せず。前執政兼山の女を以て自ら許し、言行敢て人に屈下せず。外出するときは、一刀を帶び面を覆ふ。女史早く父に別れて、その風貌を記するに及ぼすと雖も、その一代の賢太夫たりしことを思ひ、その末路の悲

惨なりしを痛み、賢良を陥れし諸臣の庇護を受るを肯んせず。一生堅貞を以て亡父の霊を慰せんことを以て志とす。居常、眉を剃らず。歯を染めず。つねに振袖を著けて、一生處女の装を變へず。身を潔くして以て終れり。その行事、尋常軌範を脱するものあれども、烈々の氣質に人を動かす。その志を識る者、豈一掬の涙無からんや。朧夜の月にいはく

父母は過にし身とおもふ可らず。鬼神となりて天津御空に、明きらかに御存知なり。子の好きは嬉しく思召、あしきはつらく、鬼神も安んじ給はず。こゝを合點あらば、いよ／＼萬心を無慾に持ち給ふべし。貪る心より悪しき事起るなり。とりわけ慾の中にも、色欲、淫欲ほど身を亡ぼすものは無し。愛より嫉妬いで來るなり。

絶好女訓と謂ふべし。谷重遠、兼山を論じていへるには、兼山の學、力行とのみいふて窮理なく、又故ありて身代相果、於今その學を傳ふる弟子無しと。安履亭は兼山を傳へしものなり。

七去三從は古より支那に於ける婦人の道なり。中にも嫉妬をば悪徳とす。本

邦にても儒學の興隆に從ひ、七去三從を以て婦人を規するに至る。その根本の思想は婦人は無能力にして劣性のものなりとして、その行爲を牽制するにあり。

早雲寺殿廿一箇條　女房は高きも賤しきも、左樣の心持無く、家財衣裳を取散らし、油斷多きことなり。人を召仕候共萬事を人に計り申付べきとおもはず。我と手づからして樣體を知り、後ちには人にさするもよきと心得べきなり。

信玄家法　一、嫉妬之咎、堅可申付事。云綏堅引賊媒面、塗粉引婬媒。

長曾我部元親百箇條

一、男留守の時、其家へ坐頭商人舞々猿樂、猿遣諸勸進。此類或雖爲親類、男一切立入停止也。若相煩時者、其親類令同心。白晝一ッ見廻、雖爲奉行人門外にて可遂理事。　但親子、兄弟可爲各別事。

一、同留守之時。佛神物詣見物一切停止之事云々。

一、同留守之時。第一出家出入曾以禁制也云々。

これ等は戰國時代に於ける婦人に對する思想を見るべし。蓋し亂離の世、男女の關係も痛く亂れしかば、その反動として右の如き嚴酷なる法制も設けられし也。

徳川時代に至り儒教主義を以て婦人を律すること益嚴にして、遂に女大學を以てこれを代表するに至る。元祿時代は女子教育も未だ盛ならず、ことに世につれて伊達風行はれしかば益軒はことに女子の敬順を說きたり。

(和俗童子訓)婦人は人に事ふるものなり。家に居ては父母に事へ、人に嫁して舅姑夫に仕ふるに、愼みて背かざるを道とす。もろこしの曹大家が言にも、敬順の道は婦人の禮の大なるものといへり。然れば女は敬順の二を常に守るべし。敬とはつゝしむ也。順は從ふ也。つゝしむとは、恐れて恣ならざるを言ふ。愼みに非れば和順の道も行ひ難し。およそ女の道は順を貴ぶ。順の行はるゝは、偏へに愼しむより起れり。詩經に戰々としつゝみ、兢々とおそれて、深淵に臨むが如く、薄き氷を履むが如しと云へるは、恐れ愼しむの心をかたどりていへり。愼みて恐るゝ心持、斯くなるべし。

これは、總說なるが、妻たる道を說きては、

女は人に事ふるものなれば、父の富貴なりとても、夫の家にゆきては、その親の家に在りしときより、身を低くして舅姑にへりくだり、愼しみ仕へて、朝夕のつ

とめ怠る可らず。舅姑の爲めに衣を縫ひ、食を調へ、我家にては、夫に仕へて高ぶらず。自ら衣をたゝみ、席を掃き、食を調へ、うみ、つむぎ、子を育てし汚れを洗ひ、婢多くとも、萬づの事に自ら辛勞をこらへて勤むる。これ婦人の職分なれば、我が位と身に應ぜぬほど引きさがり勤むべし。斯の如くすれば、舅夫の心に叶ひ、家人の心を得て、能く家を保つ。また我が身に高ぶりて、人を使ひ、勤むべきことに怠りて、身を安樂に置くは舅に憎まれ、下人に謗られて、人の心を失ひ、その家を能く治むること無し。かゝる人は婦人の職分を失ひ、後の幸無し。愼しむべし。

女子教育の方法を說きては、

七歲より和字を習はしめ、また男文字をも習はしむべし。淫思なき古歌を多く讀ましめて、風雅の道を知らしむべし。これまた男子の如く、初は數目有る句、短き事ども數多讀み覺えさせて後ち、孝經の首章、論語學而篇。曹大家の女誡など讀ましめ、孝順貞潔の道を敎ふべし。

十歲より外に出ださず。閨門の內にのみ居て、おりぬ、うみつむぐ業を習はし

むべし。假りにも淫佚なる事を聞かせ知らしむ可らず（中略）女子に見せしむる草紙も擇ぶべし。古の事しるせる文の類は害無し。聖賢の正しき道を敎へずして、小唄淨瑠璃本など見せしむることなかれ。また伊勢物語、源氏物語など、その詞は風雅なれども、かやうの淫佚の事をしるせるふみを早く見せしむ可らず。また女子も物を正しく書き算數を習ふべし。物書き算を知らざれば、家の事を記し、財を計ること能はず。必らずこれを敎ふべし。

右の三章は益軒が女子敎育說の要領として見るべし。余は玆に益軒の敎育說を評論せざるべし。人文の進步につれて、女子敎育の方針も、また變遷せざるを得ざるが、益軒の女子敎育の精神の著實なることは、何人も首肯するところなるべし、夫が其妻に對しての心得を論じて、家を治むるには忍一字肝要也と言ひ、夫婦和して別あるべしと言へるは第一義なり。なほ委しく說きて、主人は先づ父母によく事ふるを第一の勤とし、次に妻を導き、子弟を敎ふるを以て要とし、その次ぎに下部をつかふに、心を用ひて禮法を正しくすべし、苦しめ侮りて、しひたぐ可らずといひ、また妻拏下部は心長くいさめ導くべしといへる如き、以て先生の說は、主人自ら修

養して、その妻を導き化すべしと言ふにあるを知るべし。これみな先生實踐の語にして、先生夫妻の關係を見るに足るなり。

朱子は女子敎育に就きては、頗る嚴格主義を抱持せり。女子は小智劣性のもの也、油斷す可らず。閨門隱微の間、風敎の關するところなるを以て、女子の敎育は嚴重に、その德操は高尙ならざる可らずとの意見也。男尊女卑。女子と小人。これ支那古今を通じての迷想也。支那人は內助の美を讃嘆するに熱せり。而して女子敎育に就きては德操の理想をのみ唱道して、敎育の方法をは深く硏究せざりき。女子をして外界を見せしめず、その思想を啓發するの方便を供給せずして、完美なる女子を得んとす、又誤らずや。されば彼等が內助の美ある女子を得るは、恰も抽籤に於けるが如きものありと謂ふべし。今ま學的の中にて、女子敎育に關する朱子の意見を徵せんとす。

敎女子、如曹大家女誡、溫公家範、亦好。

朱子曰、三代之盛、聖賢之君、能修其政者、莫不本於齊家。蓋男正位乎外、女正位乎內。而夫婦之別、嚴者、家之齊也。妻齊體於上、妾接承於下、而嫡庶之分定者、家之齊

也。柔有德、戒聲色、近嚴敬、遠技能者、家之齊也。內言不出、外言不入、苞苴不達、請謁不行者、家之齊也。

男子正位乎外、爲國家之主。故有知則能立國。婦人以無非無儀爲善、無所事哲。哲則適足以覆國而已。

婦人與奄人、常相倚而爲奸。不可不幷以爲戒也。歐陽公常言、宦者之禍、甚於女寵。其言尤爲深切。有國家者、可不戒哉。

朱子曰、夫婦人倫之至親至密者也。人之所爲、蓋有不可告其父兄、而悉以告其妻者。人事至近而道行乎其中。

夫婦情意密而易於陷溺。不於此致謹、則私欲行於狎玩之地、自欺於人不知之境。倘知造端之重、隱微之際戒謹恐懼、則是工夫從裏面做出。以之事父兄、處朋友皆易爲力而有功矣。

陰陽和而後雨澤降。如夫婦和而後家道成。故爲夫婦者、當黽勉以同心而不宜至於有怒。

孔明擇婦正得醜女。奉身調度、人所不堪。彼其正大之氣、經綸之蘊、固已得於天資。

然竊意、其志慮之所以日益精明、威望之所以日益隆重者。則寡欲養心之助爲多

朱子曰、有非、非婦人也。有善非婦人也。蓋女子以順爲正。無非足矣。有善則亦非其吉祥可願之事也。惟酒食是議而無遺父母之憂、則可矣。易曰、無攸遂、在中饋貞吉。而孟子之母亦曰、婦人之禮、精五飯、冪酒漿養舅姑、縫衣裳而已矣。故有閨門之修而無境外之志。

婦人無外事。惟以貞信爲節。一失其正、則餘無足觀。

問、妻有七出、却是正當道理、非權也。朱子曰然。

朱子曰、陽而健者成男。則父之道也。陰而順者成女、則母之道也。是人物之姓以氣化而生者也。氣聚成形、則形交氣感、遂以形化。而人物生々、變化無窮矣。

(朱子)奉親極其孝、撫下極其慈。閨庭之間、內外斬々、恩義之篤怡々如也。

男女聚僧盧爲傳經會、及女不嫁私爲菴舍以居者、悉爲之禁、俗大變。

女子は唯だ敬順にして、家事にのみ從ひ、一切出過ぎぬこそ善けれ、ことさらその利發なるを望むだ、及ばずとは朱子の意見也。然れども茲に注意すへきことは、妻妾家を同くして和睦するを以て家之齊也とせること是也。男尊女卑

一夫多妻。妻は唯々として玩弄に供せられ強て嫉妬の情を抑制せざる可らず。夫をして氣隨のことを爲さしめて、妻謹みて之に甘んずるを以て、婦人の美德とするにあり。且夫れ愛情あるところには嫉妬あり　されば支那の婦人道德は到底自然的のものにあらずして、隨て女子敎育は人工的たる也。益軒先生の卓識を以てして、遂にその殼中を脫すること能はず。敎女子法一篇は依然として、朱子以上に出でず。

陽明文集の嚴潔堅貞の婦人をあげて曰ふ。陽明子曰……吾聞太孺人之生七十有九。其在婦居者、餘四十年。端靖嚴潔如一日。旣老、雖其至親卑幼之請謁、見之未嘗踰閾也。不亦貞乎。端靖嚴潔は貴婦人の美德にして、その家庭に於てすら兒孫を同室に入れざるに至りては、又人情に悖らずや。夫婦の間、君臣の如く、夫を所天として、これに事ふる嚴潔なるを貴び、和暢の風を欠ぐは、儒敎主義の欠點なり。而して女大學は女子と小人とは養ひ難しとの思想を根底に有して、嚴潔の操行を奬勵したるもの也。

婦人は人に事ふるもの也。これ益軒が女子敎育の提案なり。されば七去三從

もと是より來るべき自然の論結なり。妻としては、我が住と身に應せぬほど引さがり勤むべしと云ひ七去を說きては、惡疾と子無しとは天命にて婦人の科にあらざれども、その餘の五は皆我心より出づるとがなれば、愼みてその惡をやめ善に移りて、夫に去られざるやうに用心すべしと言ひ、特に嫉妬をば嚴しく制したり。妬めば夫を恨み、妾を怒り、家の內、亂れて治まらず。又高家には婢妾多くして、世つぎを弘むる道もあれば、妬めば子孫繁昌の妨となりて家の大なる害なれば、これを去るも宜なりと說く。武家時代の家庭は一夫多妻にして、加ふるに同棲を許したれば、妻妾の關係を規定するの必要ありて、さてこそ嫉妬をば婦人の惡德と爲したるなり。女大學一篇は、社會組織の反影なり。益軒の卓識にして、社會組織を達觀して婦人教育の改善に想到する能はざりしは惜むべし。

女子家庭の教育は母專らこれに任ずれども、父を喪へる家庭は風儀堅貞ならずとの考は一般に行はれたり。朱子の小學にも女有五不取。逆家子不取。亂家子不取。世有形家子不取。世有惡疾不取。喪父長子不取と云へり。父喪へりとも母賢ならば教あるべきなり。朱子の意は則ち母の教育を信任せざるにある也。

近世の女子教育が古代と鴻溝を劃する一事あり。古代のは、良妻たらんことを求め近世のは則ち良妻賢母たらんことを求む。育兒法一事は、その端をあらはすものと謂ふべし。大學に、康誥曰、如保赤子、心誠求之、雖不中不遠矣。未有學養子而後嫁者也の一語は、古代女子教育を代表せるもの也。益軒の女子教育も、亦この點に粗なるは惜むべし。

幕初に女子教育につきての意見の見えたるは、林羅山の巵言抄なり。その中には、論語、小學等より拔抄講義したるものあれども、今此に引證するの必要無し。

女大學に就きては、故福澤諭吉氏の新女大學及び女大學評論一時教育界の問題となりしことあり。女大學を研究せん者には、一の參考書たるべし

近ごろ東洋社發兌の女訓叢書あり。これ亦好參考書也。女訓は女子道德に對する要求のみにして、教育の方法は無し。故に、女子教育の狀況を知らんには、種々坊間の雜書を涉獵するを好しとす。

近松の世話淨瑠璃は、この時代の女性研究を見るべき好材料也。西鶴全集も

も好資料なれども、絶版故致方無し。これ等につきては博文館出版の氣質全集、續氣質全集も亦好き書なり。日本女史一卷は熱心なる研究の結果と見ゆれども、材料豐富ならず。かつ割合に衣服制度の方に力を注がれたる如し。育成會の女子敎育法一卷は專ら心學道話に據りたるもの丶如し。要するに女子敎育の歷史は、研究尚ほ進まずして、隨つて好書無し。

須藤求馬氏の日本女史は、日本女子の歷史としての嚆矢なれば、玆に一言を加へん。此書は風俗制度の點に於ては研鑽を積まれたるも、敎育學術に於ては太だ粗なりと謂ふを憚らざるべし。日本女子の歷史の大に研究すべきは、決して王朝にあらずして、江戶時代にあるにこの書は中古に精しくして近世に粗也。次ぎに又著者は、佛敎を信じて、外敎に對しては嫌惡の感情を有せるが如し。戰國の際耶蘇敎徒の女子に、敬虔傳ふべきもの尠からざるに、この篇全く採錄するところ無きが如き、遺憾と謂ふべし。

貞永式目は武士道の憲法とも謂ふべし。その中、女子に關する規定も多きが奸淫の事の條に、

一、密懐他人妻同科事、

右不論強奸和奸懐抱他人妻之輩。被召所領半分可罷出仕。無所帯者可處遠流也。女所領同可被召之。無所領者可被配流之也。

右に對して日本女史の批評は、強奸せられたる女子を、同罪とは如何なる定なりや、いぶかしき事なり。蓋し闕文ある歟と云へり。決して闕文あるにあらず。此の如きは則ち武家法の精神也。その意義は、此の如き凌辱の場合に際して女子と雖も自ら決するところ無かる可らず。然るをめ〳〵と生き恥を見るは、則ち女子と雖も罪ありとすべしとなり。蓋しこの時代男女の關係、頗る紊亂して言ふ可らざること多し。他人妻を密懐すること頗る流行して、或は時に妻たる者も亦、これを不可抗の暴力に口を藉くことあり。貞永式目はかゝる弊風を矯正せんとして、女子に責むるに、決死貞烈の氣節を以てするに至れり。貞心を云爲せるものは、貞永式目に始まる。貞永式目は貞女道を皷吹したるもの也。

德川氏の御仕置に於ては、密通御仕置事の條に、

一、夫有之女、得心無之に押而不義致候もの　死刑

但大勢にて不義致候は頭取獄門。同類重き追放。

一、女得心無之に押而不義致候者　重追放

この二條に見るに、男子にのみ制裁ありて女子には即ち無し。然れども是は人民の事なり。固より武士の妻たるものにありては、多くは自裁して恥辱を雪ぎしが、武家法度にも法文の規程は無かりき。

徳川時代に流行せしものは情死也。法文には相對死と稱す。ことに元祿時代に多し。これ近松が世話淨瑠璃の由て出來るところ也。御仕置の中、男女申合相果候者之事の條に、

一、不義にて相對死致候もの　死骸取捨爲申間敷事

但一方存命に候はゞ、下手人

一、雙方存命に候はゞ　三日晒。非人手下

一、主人は下女と相對死致、主人存命に候はゞ　非人手下

刑の精神たる、情死を侮辱するなり。

不義

日本女史は列傳に大に增補すべき餘地ありと思ふ。江戸時代に野中婉女史を脱する如きは、一の欠點なりその外、文學技藝に名著はれざるも內助の功、後世の模範とすべき閨秀に乏しからず。世に有名なる女博士は良妻賢母としては、存外に價値無き者珍らしからず。宜しく、その妻たり、又母としての賢婦人を多く傳ふべきなり。

男女の不義といふは道ならぬ戀愛の謂也。道ならぬとは親の許を得ざるもの又は夫ある女の他人に見ゆるもの也。儒教主義は長上の制裁を重んずるの餘りに殆んど愛情を度外に置けり。此に於て世進むに隨ひ儒教主義の檢束を脱し稍や自然の愛情の發動を重んずるの風起らざるを得ず。西鶴の諸國はなし卷四に載せたる、去る大名の息女が藩士某を慕ひて共に出奔せしを、後ちに捕へられて男は刑せられ、息女も亦不義の咎によりて自決を迫られしとき。我命惜むにあらねども、身の上に不義は無し。人間と生を請けて女の男、單一人持つこと作法なり。彼の者、下々を思ふは、これ緣の道なり。各々世の不義といふ事を知らずや。夫ある女の、外に男を慕ひ、または死別れて後、夫を求むることそ不義とは申すべし。男無

不倫の叔父

さ女の一生に一人の男を不義とは申されまじ。又下々を取上げ縁を組みし事は昔より例あり。我少しも不義にはあらず。其男は殺すまじきものと泪を流したまひ、此男の跡とふ爲なりと自ら髮をおろしたまふとなりとあるは不義の思想の移りゆく暗流を示すものにあらずや。

西鶴の本朝櫻陰比事に、不倫の叔父の話あり。京都の法廷にて、原被兩造が互に叔父と呼ぶことと所司代の耳にとまり、おのれ等畜生同前也。先祖の叔父、今世にあらば、屹度申付くべき曲者なり。此出入重ねて聞くことにあらず。內證にて和談すべし。世間の法を背けばおのれ等がつり書して、其町のものどもに、これを見すべしと仰付けられしとあり。

○祖父——嫡子△

△娘ながら母也

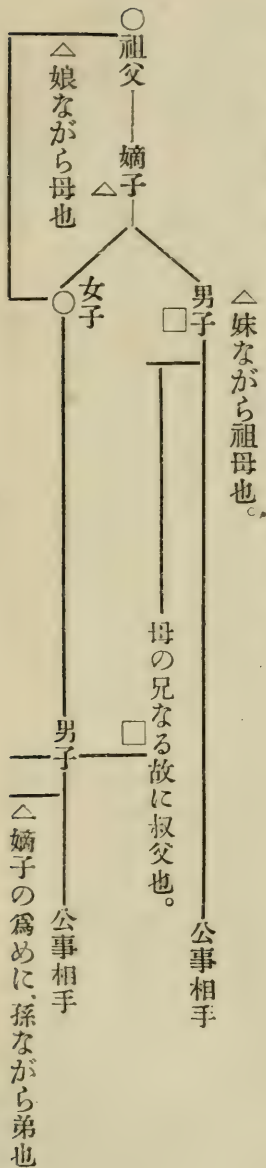
□男子——公事相手

△妹ながら祖母也。

○女子

□母の兄なる故に叔父也。

男子——公事相手

△嫡子の爲めに、孫ながら弟也

此祖父、孫婚姻して、男子儲く。　○一祖父の爲に曾孫ながら子也

元祿の世は男女の關係、紊亂し風俗頽敗したる結果、かゝる畸形兒を生ずるに至れり。儒教主義は人爲の作業多けれども、亦風紀を振肅し、禮儀を知らしめたる功は、又決して尠からざる也。

茲に夫婦の關係に就きて、一の奇快なる思想久しく行はれたるを見る。そは夫婦は元來血緣あるに非ず。隨つて婦が夫に不法大惡の行爲ありしときは、同時に夫婦消滅すと爲すもの則ち是なり。これに就きて、實父を殺害したる繼母を殺したる者に對して、母殺しを以て論ぜざること是也。

これには孔叢子には全然同一般の事例あり。支那にては、この種の思想久しく行はれたるを見るなり。孔叢子二十三に曰く、

梁人取後妻。後妻殺夫。其子又殺之。季彥返魯過梁。梁相曰、此子當以大逆論。禮、繼母如母、是殺母也。季彥曰、言如母則與親母不等。欲以義督之也。昔文姜與弑魯桓。春秋去其姜氏。傳曰、不稱姜氏、絕不爲親禮也。絕不爲親即凡人爾。且夫手殺重於知情。知情不得爲親。則是下手之時、母名絕矣。方之古

義、是子宜以非司冠而擅殺當之。不得爲殺母而論以逆也。梁相從之。右の事項は、漢孝章元和年中(元和元、八四)に係る。

此議論は一應尤の樣なれども、夫婦の恩情の持續的關係を無視するものと謂ふべし。本邦にても、これと同一思想久しく行はれ、ことに家長權の發達、極度に達し、妻子を打果すことも、場合によりては許されしかば、玆に其打果したる妻妾に對して忌服の義務ありや否やとの問題ありき。この問題は、文政九年(一八二六)幕府にて法律上解決を與へたり。その案に曰はく、

一妻致密夫譯に無之夫へ對し不法之義に有之、右妻を打果候節忌服如何可有之候哉御尋に付、取調候處、右樣の始末にて問合の義相見不申に付き、得と相考候處。妻致密夫節義を失ひ候も、夫へ對し不法慮外致候も、論議を失候心底は同樣之義と奉存候。然る上は前書の始末に而不得已事、打果候節は、夫婦の恩義絕候義は現然の理と奉存候。悴不屆有之、打果候節、忌服受候は血脈の譯にて論も無之候得共、夫婦は義を以て配偶仕候事にて、血脈の親屬共とは譯も違候儀と奉存候。私見込の趣は前書申上候通、夫婦の恩義絕候上

は、服忌不レ及沙汰候而可然哉と奉存候。

これより先き享和元(一八〇一)に、密夫せし妻又は不法の養子、惣領を打捨たるとき服忌に及ばざる旨の指令ありしが、玆に至りて、妻は、密夫にあらずとも、不法によりて打捨てたるときは勿論恩情斷絕また服忌に及ぼさずとの事と決定せり。

右の如き不健全なる道德の久しく行はる可らざるは明か也。家長權が無限に發達し、男尊女卑が極度に達して、女權の擴張は一縷の望だも無かりき。斬捨の權ありとすれば離緣の容易なるは勿論なり。今に至りて本邦が離緣國の感あること統計年鑑を見ば思ひの外ならん。

王朝より鎌倉時代に亘りては、大寶令の規定するところに據り、女子財產權は確實なりしが、戰國となりて全く敗棄し、江戸時代となりては、女權保護の道殆んど無かりき、唯だ鎌倉東慶寺、上州滿德寺は不和合の夫婦の緣を切ることを掌り俗に緣切寺と云ひしが、これのみ女權保護の一例として見るべし。東慶寺は北條時宗夫人、覺山禪尼の創立に係る。その發意は、我等出家の身なれど

も、女子の事とて、世を益すべき智徳も無し。凡て女子の身は三從の道を立て、一度は夫に身を寄すれども若しその夫邪見無道の振舞多く愛情も絶え果て狹き心に差迫り、身を過つも折々見聞および不便の事に候間何卒右體の者これあるときは、入寺爲致三ヶ年間佛寺修業の趣意を以て、かの邪惡の夫の縁を切るべきを寺法と定め薄命の女子を救ひ度しといふにあり。この保護を受けんとする女子は奔りて、この寺に投じ、下駄片足にても門内に投込めば、早や夫の牽制を脱するの特權ありき。この法は幕末まで行はれき。

女子嚴潔の教を具體的に現はすものは、躾方の教育なり。女性の身嗜みといふは、尤も大切なることとなりき。ことに武家の女性にありては一種凜乎として侵す可らざる氣風あり。本朝櫻陰比事に町人の後家の態度を記して、少し高枕して帶紐解かずに手近へ刀を取廻し用心深く夢も油斷はせざる風情といへるは、武家風の躾方が町人の間にも早や移りゆくことを證するものなりき。近松の世話淨瑠璃を見ん者は女性の躾方如何に注意するを要す。女大學一篇すべてこれ躾方の經典なり。

好色五人女、明暮世をわたる女の業を大事に手づからべんがら糸に氣をつくしすへ〳〵の女に手紬を織らせて、わが男の見よけに始末を本とし竈も大くべさせず。小遣帳を筆まめにあらため町人の家にありたきは、かやうの女ぞかし。

男色大鑑　やうやう西口になつて悴は口せず轉し、水風呂の湯も捨て、久三もとりまはし賢く仕舞へば、女は噪しく木綿足袋をぬぎて袂に入れ、銀の笄を楊枝にさしかへ、脩も鼻紙袋にをさめ、紅の脚布を內懷にまくりあげ、上衣のえりをかなしみ、首筋をとりのけ、木枝に掛置し木地笠をとりどりに、急ぐや暮の面影、今朝とは見苦しく、町の女房の宜じからぬことばかり口にかゝりぬ。

好色五人女　されば一切の女うつり氣なるものにして、うまき色咄しに現をぬかし、道頓堀の作り狂言を眞に見做し、いつともなく心を亂し、天王寺の櫻の散る前、藤の棚のさかりに、うるはしき男にうかれ、かへりては一代養ふ男を嫌ひぬ。是ほど無理なる事無し。それより萬の始末、心を捨て大燒する竈を見ず。鹽が水になるやう、いらぬ所に油火をともすも構はず。身代うすくなり

て暇のあくを待ちける。かやうのかたらひ、さりとは〱おそろしき。死別れては七日も立ぬに後夫を求め、さられては五度七度の緣づき、さりとは口惜しき下々の心底、上々にはかりにもなきことぞかし。

第十三節

兒童研究は、この時代に端緒を啓けり。このころのは專ら兒童心性發育の狀態を記載したるものあれど、未だ科學的研究の途に進まず。西鶴の文集近松の戲曲等に、兒童研究の史料とすべきもの散見せり。今此に一例を擧ぐるは兒童の貯金に關する趣味ある噺なり。

西鶴胸算用卷之五。或人の息子、九歲より十二の年の暮まで、手習に遣はしけるに、其間の筆の軸を集め、其外、人の捨てたるをも取集めて、程なく十三の春、我手細工にして軸簾を拵へ、一つを一匁五分づゝの三つまで賣拂ひ、始めて銀四匁五分儲けしこと、我ながら只者にあらずと、親の身にしては嬉しさの餘りに、手習の師匠に語りければ、師の坊此事を好しとは譽め給はず、我此年まで數百人小供を預りて指南して見及びしに、其方の一子の如く、氣の働き過ぎたる子供の、末に分限に世を暮らしたる例無し。又乞食する程の身代にもならぬも

の中分より下の渡世をするものなり。かゝる事には様々の仔細ある事なり。其方の子ばかりを賢き様に思召すな。それよりは手廻しの賢き子供あり。我當番の日は言ふに及ばす、人の番の日も帯取々坐敷掃きて、數多の子供が毎日使ひ捨てたる反古のまろめたるを、一枚々々皺伸ばして、日毎に屛風屋に賣りて歸るもあり。是は筆の軸を簾の思附よりは當分の用に立つ事ながら、是もよろしからず。又或子は紙の餘計、持參りて紙使過して不自由なる子供に、一日一倍增の利にて是を貸し、年中に積りての德何程といふ限無し。是等は皆それ〴〵の親の智賢き氣を見習ひ自然と出る己れ〴〵か智惠にあらず。其中にも一人の子は、父母の朝夕仰られしは、外の事無く手習を精に入れよ。成人しての其身の爲になる事との言葉、反古にはなし難しと、旦暮れ讀書に油斷なく、後には兄弟子ども勝れて能書になりぬ。此心からは行末分限になる所、見えたり。其仔細、一筋に家業稼ぐ故なり。惣じて親より仕繼ぎたる家職の外に、商賣かへて仕繼きたるは稀なり。手習子供も己が役目の手書く事は外に無し。若年の時よりするどく無用の欲心なり。それ故第一の手は書か

ざること淺まし。其子なれども左樣の心入、好き事とは言ひ難し。兎角少年の時は、花をむしり、紙鳶を上し、智惠つく時に身を固めたること道の常なれ。七十になるものゝ申せし事、行末を見給へと云ひ置かれし。師の坊の言葉に違はず、此者們、我世を渡る時節になつて樣々に稼ぐ程成下つて、軸簾せし者は、冬日和の道の爲めに、草履の裏に木をつけて、履くこと仕出しけれども、是も纔ぎて世に流行らず。又紙屑集めし者は、ちやん塊の土器仕出して世に賣れども、大晦日にも燈火一つの身代なり。又手習ばかりに精を入れたるものは、物每疎く見えけるが、自然と大氣に生れつき、江戸廻しの油、寒中に氷らぬことを分別仕出し、樽に胡椒一粒づゝ入れることにて、大分利を得て年を取りけるに同じ思ひ附きにて油土器と油樽と人の智惠ほど違ふたるものは無し。

兒童貯金は年々に奬勵されて統計表の上に著るしき進歩を示せるが、そが兒童心性の上に及ぼす利害に至ては未だ精確なる說明あらざるなり。右の一話の如き頗る參考に供すべきものたるべし。これに就きて思起すは、昨秋佐賀縣教育會雜誌によれば、肥前杵島郡某小學校の兒童が每朝登校の途次、薪を町に賣りて遂に

積りて二百餘金の貯金を爲せるよし記されたる事これ也。これまさに軸簾及び紙屑賣と同一般のものたり。知らず如此兒童の行末如何。貯金奬勵は刻下の急務たるに相違無きも、此事すでに二百年前一個教育上の問題たりしを見れば、教育家たる者切に猛省するところあらんことを望む。

本朝町人鑑巻之六、いきとし生けるものに、子に迷はざるは一人も無し　何ほど愚に生れ付きたる子息にても惡敷といふ事必らずなかれ、惡事かさなりて異見の杖を振あぐるうちにも、脇から取あつかふ人のをそきを恨むること也。殊更七歳より内の沙汰はたとへば左の手して箸を持ち、鐵槌にて茶釜たゝき割とも氣のつよき所、男はそれじやぞ、箸も後には我と右に持つものと云流し、かりにも餘所の子のかしこきことお出しにも致さぬことぞ。人の子の五歳にて大學讀むは耳に入らず。我子の十一になりて、竹箒にて鎗持のまねするを、手の振やうが善きとて客の有たびいたさせける。是等は人の事にて笑へど、其身に成ては、うつけたる子事々に利發に見へける。末々の者の子の自ら我儘に鈍なる事、母の親のふところにて、そこ〳〵に育てけるうちに、はや

三歳の比より悪知慧付て是八十までなほらず、民百姓の子にても、付置きて育てさせたきものは乳母なり。諸事物入に是非無く、中分の下の身代までは置かねけるも理りなり。給銀八十目、四季着て上下の帶ところ紙手足の入用まで算用するに隨分かなしき家の乳母にても、一人一年に銀三百四十五匁程は定まりて入るもの也。是によりて女房の乳を呑せける。中位なる人の内儀、十七八より緣に付き、其一とせ二とせのほどは櫻に藤に物見姿をつくりて、我男にもあれなれば堪忍比と見られ、跡のしれる盛形の菜は喰もせざりしに、ひとり子をもうけて我手に掛けてしめやしようの物を干して、勾ひ自に移り、此子は身の行する爲の樂とは思はず、何の因果に今やなどゝ無理なる事の口惜しく、それからは身を捨て芝居行き天王寺參詣もやめける。扨て身躰を子のためとて、かせぐにはあらず。ひとり下子に子を抱かせてありく事をうらみける。今の世の心、奢につれていなものにぞありける。

本朝二十不孝卷之一、實にや娘の親の習にて、化物盡の噺の本の中ほどに赤子を頭から嚙喰ふ氣色なる娘も、花見紅葉見の先きに立てゝ、搗臼の行く様な

る後から黑骨の扇にてあふぎゆくは可愛きばかりにはあらず。母の目からは昔の伊勢小町、紫の抱帶、前から見ても橫から見ても風采好しと思ふ可笑。

女子敎育に對する世論の紛然たるは、古猶ほ今の如きなり　三十五年五月五日大阪朝日新聞の女子敎育論の病根と題する論說は、吾人の意を得たるを以て此に拔載すべし。

女子に對する世論は動もすれば之を玩弄視し易く、最も眞摯なるべき敎育問題をすら、其の玩弄の精神を準的として、解決せらるゝ恐あり。而して一般女子の性質も、亦最も自己の地位を玩弄視し易く、眞摯なる敎育よりも寧ろ華美なる風尙に從ふことを喜ぶものたり。且つ其の學校敎育の時代は、亦女子の一生に於て最も華美ならざるを得ざる時期たるを以て、女子敎育論の根底には、每に此の玩弄的傾嚮を脫し難く、その往々にして、全く眞摯の分子を亡失し、遂に物議を招くに至るは、皆な此の拔き難き病弊あるに依れり。是れ女子敎育の當事者としては、最も注意せざる可らざるところにして、たとへ其の世論

に合せる問題なりとも、猶ほ深く其の世論を惹起す所以に於て審察せざる可らず。例へば服裝問題の如きその表面に著はれたる利害得失の理論にのみ着眼すること無く、更にその理論の風行迅速なる所以のものに於て、不健全の分子の有無を査覈せざるべからず。否らざれば女子教育論冷熱屢ば變じ、而して好奇輕薄なる問題に累及せらるゝこと、更に底止するとき無けん。

東洋の方面に於て、女子教育史に參證すべき二三の好例をあぐ。

列子（一、天瑞）、孔子遊於太山、見榮啓期行乎郕之野。鹿裘帶索、鼓琴而歌。孔子問曰、先生所以樂何也。對曰、吾樂甚多。天生萬物唯人爲貴。而吾得爲人、是一樂也。男女之別、男尊女卑、故以男爲貴。吾既得爲男矣是二樂也。

孔叢子中、答問第二十一。臣昔在梁。梁人有陽由者。其力扛鼎、伎巧過人、骨騰肉飛、手搏鵰獸、國人懼之。然無治室之訓、禮教不立、妻不畏憚、浸相泄瀆。方乃積怒、妻坐於牀、答焉。左手建杖、右手制其頭。妻亦奮恚、因授以背使杖擊之而自撮其陰。由乃仆地、氣絕而不能興。鄰人聞其凶凶也、窺而見之、趨而救之。妻愈懿

念蒐背舍旃。或發其嚢然後乃放矣。以無敵之伎力而劣於女子之手者何也。輕之無備故也。

孟子　景春……丈夫之冠也、父命之。女子之嫁也、母命之。往送之門戒之曰、往之女家必敬必戒、無違夫子。以順爲正者、妾婦之道也。

淳于髠曰、男女授受不親禮與。孟子曰禮也。曰嫂溺則援之以手乎。曰嫂溺不援是豺狼也。男女授受不親禮也。嫂溺援之以手者權也。

蒙求　趙母嫁女。女臨去勅之曰勿爲好。又曰不爲好、可爲惡邪。母曰、好尚不可爲、其況惡乎。

歌所と茶の湯

第十三節

元祿の世は華美の世なり、名利の世なりき。これを代表するものは、歌所と茶の湯とこれ也。これに就きては吾人多く云ふを須ゐず當時の儒者太宰春臺をして、自ら語らしむるを可とすべし。春臺の獨語にいふ。今の歌を讀むほどにては、必らず公家の中の名家なる人を師として學ぶ。……公家の名家にて歌所と定められたる人を必ず上手とぞ思ひて、その添削批判を受けなば淺まし

きことなり。然れども名利は悲しきものにて、ほまれを得て世にほこらんと計る也。

茶の湯に就きては。近き世に人の玩ぶ茶の道こそ、いと心得ぬことなれ。器は古きを求むるに非ず、唯新器をすと尙書にいへるに、今の茶人は數年經たりとも知れぬ舊き茶碗の汚穢不淨にして、しかも缺け損じたるを漆などにて繕ひて用ひ、汚らはしさ言ふ計りなし。朝鮮の國人常に用ふる唾壺の古きを求めて、抹茶を貯へて是を茶入といふ。……大方何事も主人のすることを見て譽めずといふこと無し。諂の至といふべし。圍のつくろひ、傳へ聞く維摩居士の方丈の室よりも、今少しせば〳〵して、小さき窓をあけたるのみなれば、白晝もくらく夏は甚だ暑し。客人の出入只狗竇の如へにて、くゝりはらばいして入れば息こもりて冬も堪へ難し。(中略) 譽むることも無き器を珍らしげに譽むるも、そら恥かし。又た物ずきとて家作より諸の調度に至るまで常にかはりて珍しくやさしきことをばすれども、茶人の家居は必らず柱なども細く障子の骨迄も風にたへぬ計り細くす。或は圓くゆがみたる柱を皮ながら用ひなどして、ものずきおかしと興す。……すべて茶

人の物ずきといふは萬づ何事も貧しくやつ〳〵しきさまを學びたるものなり、(中略)近き世の茶人は利休居士を祖師とす。利休は獨身の禪門にて貧賤なるか草の菴のせまき内にて茶を樂めるを……凡そ茶人のなす業、悉く貧賤なる者の學びなり。されども富貴の人は、貧賤なる者を學びて樂とする謂れあり。元より貧賤なる者、何ぞ更らに貧賤の業を學びて樂むことあらん。今の世に富貴なる人己が好む心より貧賤なる者を茶に請ずるは心得ぬことなりと、

茶の湯必ずしも惡しきにはあらず。然れども男子の娯樂としては他に幾多の方法あるべし。日本の娯樂の方法は多くは室内にて行はるゝさへあるに茶の湯は又たその極端に達せるものなり。すべて宗匠の一語は、研究無く、發明なく唯だ名利あるのみの根性を顯はす好箇の代名詞なり。元祿の沈滯せる世運を顯はすには茶の湯こそ好きものなれ。元祿の世は、富の勢力著るしく發達して武門の勢力を壓し、而して武士は、新進の富力と、その榮華を競爭せんが爲めに伊達風は愈進みてその生活は常に收入以上にあるを以て、武士質樸謹嚴の風は地に落ちて華奢風流市井俠兒の氣風、武士に浸染するに至れり、而して此時代の嗜好を代表すべき

ものは茶の湯也。茶の湯の器具は、一見敗瓦に類するものも千金に値するものあり。各その由來を誇張して、その眞價は措きて問はず。小堂の中に跼蹐して、禮式の末節に拘泥し、當時の氣風の島國的たることを尤も能く示せるものなり。彼等は皆富者の樂を以て樂とすれども、武士の窮困は、その實、甚だしき苦境に達し、子女を賣りて妓となす者あるに至る。元祿十二年九月旗下諸士の生計に窮困せる者を賑恤せんが爲めに、その最も甚だしき者を調査せしめたるに、七千六百九十人の多數に達せりといふ。內實かく計り窮困せる武士は、外面に伊達風を裝ひて、武士の財力はます〳〵窮困し遂に武士の門前、商人の債鬼の咆哮するを禁ずること能はざるに至れり。武士の窮困は幕府の窮困にして、財政困難の爲めに學政も振はず。これに反して富力のあるところ、市民の間には敎育普及の運動漸く興起せり。武士の窮困、財政の紊亂、これ救ふは勤儉の力行と敎育の奬勵とにありとして、次ぎの將軍家宣の新政は來れり。

第十四節　腰の朱鞘は伊達には指さぬとは、當時武士道の稍市井游俠の風に流れたるを見るべし。されば赤穗義士の壯擧あるや、彼等は天來の福音なりとして

驚嘆賞讃の辭を用盡せり。赤穂義士のかくまで武士の理想として高遠なるもの也とせば、彼等の立脚地の既に甚だ低きを知るに足るなり。

江戸時代倫理の典型は儒書にあれども、その根底に立つものは則ち武士道なり。武士道は一種の社會的産物にして、成典無く宗師無し唯だ貞永式目のみ其成典に近きものと謂ふべし。武士道は本邦に固有の發達を爲せるもの、王朝末ごろより後ちの物語類を見ば、何れにても、この精神の發揚を認むべし。

武士道成生の有樣を言はんに、王朝衰へて國家の組織瓦解して、法律その効力を失ふに當りてや、天下の武士は、その武力によりて自ら救濟を求むるに至れり。相互の關係は德義の關係にして、制裁は唯一の德義の制裁あるのみ。武士道は、この間に養成されたり、吾妻鏡には勇士之法また勇士之道といひ、諸士法度には侍之道といふ。武士道は最も主從の大義を重んじ、禮義を修め質素儉約を主として、武勇を養ひ神明を畏敬し、心の光明ならざるを恥づ。武士道は源平二氏の養成せるところ、特に源頼朝は汲々として力を此に致せり。されば後世右大將家の時といひて武士道の確立したるときとす。

佐々木定重が衆徒と鬪爭せし件に就き其父定綱に與へたる賴朝の書に曰、大方の世の固めにて帝王を護參らする事にてあれば、錐を立つる程のところを知らんも、一二百町を持ても志は何れも等しくして、其酬に命を君に參らする身ぞかし。私のものにはあらずと思ふべし。さるに就きては、身を重くし心を長くし、アダ疎には振舞はず。……身を徒らになさんには多くの御恩の報もありなんや。無下に臆病きことなり。……增して君の御大事に參らすべき命を細事故に失はんには、人だねありなんや。さる不忠のおのこには所知を給ひても何かはせんとあるは旨趣明晰にして、よく武士道第一義を道破せるものなり。

武士道の綱要は、報本反始と禮義廉恥となり。古より武士は、自ら標榜して恥ある武士又は名譽ある武士と稱し、言語擧動尤も敬意を主とせり。武士の禮儀は質實にして一種勁健の氣を帶び、倥忽、尾籠、虛言、未練を以て恥とす。無禮恥辱にあへば、死を以て之を爭へり。源平盛衰記に、弓箭取る者の習、假りにも名こそ惜しく候へといひ、早雲寺廿一箇條の中に、上下萬民に對し一言半句に

ても虚言を申す可らず（中畧）人に糺され申しては一期の耻と心得べきなり。又ハフケたる躰にて人に見ゆること慮外也、拙き心なりといへるは皆な此意を闡明せるものなり。貞永式目は右大將家のときの習慣法によりて制定せられ、爾後武家の法律皆なこれに準據す。武士道を知らんには必らず貞永式目を考究せざる可らず。

德川時代に至りて武士道は空前の發達を爲せり。武士は宋儒性理の說と明朝忠義慷慨の事蹟とを見聞して、これをその父老より親しく聞知せる戰國以來忠勇壯烈なる言行と抱合調和せしめて、こゝに倫理上の經典を組成し、武士道の標準明確なるに至りぬ。而して武士道の權化たる山鹿素行出るに及びて、武士道に關する敎說始めて世に出でぬ。幕初にては大久保彥左衞門の著はせる三河物語ありて、三河武士の道德經ともいふべきものなるが、學說上解釋を附せるは則ち素行の武敎小學を以て嚆矢とす。武敎小學には敎戒十篇あり。

第一、夙起夜寐。第二、燕居。第三言語應對。第四、行住坐臥。第五、衣食。第六、財寶器物。第七、飮食色慾。第八、放鷹狩獵。第九、與授。第十、子孫敎誨。これ

なり。また山鹿語類二十一卷には、詳に武士道を說けるが、

第一、立本。一、知己職分。二、志道。三、在勤行所其志。

第二、明心術。一、養氣在心。論養氣。二、度量。三、志氣。四、溫藉。五、風度。

六、辨義利。七、安命。八、淸廉。九、正直。十、硬操。

第三、練德全才。一、勵忠孝。二、依仁義。三、詳事物。四、廣學文。

第四、自省。一、自警。

第五、審威儀。一、勿不敬。二、謹視聽。三、謹言語。四、謹容貌之動。

五、飮食之用。六、明衣服之制。七、嚴居宅之制。八、審器物之用。

九、總論禮用之威儀。

第六、愼日用。一、總論日用之事。二、正一日之用。三、辨財寶授與之節。

四、愼遊會之節。

かくの如く綿密なる武士道の敎說は、素行が赤穗謫居中に成る。而して謫居中彼が薰陶したる武士は、復讐の壯擧をなせり。素行が敎說のみならずして、實行にも力めたることを知るべし。されば素行の武士道敎說を演じて、天下後世に實例

を示したるは赤穂義士にして、遙かに素行の衣鉢をつぎて武士道の木鐸となりしは、幕末の吉田松陰なりき。

元祿の武士は伊達游俠の風に流れたるも、武士道の信條は、猶ほ人心の根底に扶植されたることは茲に一例をあげて之を證すべし。

丹波與作(巣林子戯曲、與作小萬、情死を計るの條)與作も名ある弓取の家に生れし氣質とて、きつと死に身に胴すわり……我とて言ひたいこと千萬無量を打捨てたり。されども一の粗相には、そなたに預けし箱枕に、先祖の由緒所々の勳功知行付の一卷あり。死後に諸人になみせられ、家名を汚さん此の無念云々。

弓馬の家の死といふは、城攻の一番乘、野軍の一番鎗。能き敵の首取て、討死をするを侍の死、惡い死とは、云ぞ、覺えて置け。(中略)僅の耻を思はんより主君の恩を報ぜぬは侍たる身の大耻と知らざるか。扨て淺ましや後指を差れふか犬畜生と言はれふか、我身の耻を振棄てゝ厚恩の主君に忠節を勵むこそ耻を知つたる侍、丈夫の武士のきつすいと言ふ物ぞ。此道理合點無く死んで勝

手がよいならば、左内は止めぬ心任かせ。去りながら侍ならぬ馬方を以て死なすは勿躰無い。舌をくふか、身を投るか、似合つた様に、在郷馬の口取綱で首くゝれ。情に見物してやらふ。エヽ侍でも無いものに、心を盡くして氣がついたと大欠伸して居たりける。

此の如く武士の心底に扶植されたる武士道の信條は、機會を得れば則ち勢力を現ぜんとせり。かくして元祿時代に、富力が武力を壓倒したるにも係らず、身に麻衣を纒ひて腰には黄金百枚の名刀を帶すてふ武士の美風は社會の一角に存在したりし也。

○元祿時代教育畧年表。

一六九〇(元祿三) 聖堂を湯島に建つ。

一六九一(元祿四) 弘文院春常に束髮せしめ、大學頭と改名せしめらる。(正月十三日)、(二月七日)聖堂遷坐。○(八月十七日)熊澤蕃山歿。蘭人ケンプル日本聞見紀事を著はす。

一六九二（元祿六）（二月廿二日）將軍綱吉、國主城主萬石以上の輩百五十一人の爲めに、中庸首章を講ず。

（四月廿一日）御座間にて周易本義を開講す。　爾後每月六回開筵近習は固より、諸大名旗下以下、天下の寺社社人に至るまで願の者は拜聽を許さる。

（八月六日）昌平阪大成殿釋菜。　國主城主萬石以上來觀者四十餘名。

伊藤仁齋童子問刻成る〇鵜飼金平歿（四月十一日）〇松下見林歿（十二月七日）〇新井白石甲府侍講となる。

（一月九日）諸大名諸士を戒めて遊女町に遊ぶことを愼ましむ。

補。　去月九月廿二日、綱吉柳澤保明に觀用教戒を賜ふ。　其文に曰、釋迦孔子之道、專慈悲要仁愛。　勸善懲惡、眞若車兩輪、尤可篤恭敬者也。　然學佛道者、泥經錄之說、離君遺親、出家遁世而欲得其道。如此則世將至悉亂五倫、是可恐之甚也。　學儒道者、泥經傳之言、祭

或常食用禽獸。是以不厭害萬物之生。如此則世將至悉不仁而如夷狄風俗。是可恐之甚也。學儒佛者不可失其本矣。

一六九三(元祿七) 鄙猥の冊子を作りし市人を罰す(正月)

(九月廿二日)昌平阪大成殿に將軍及母夫人參拜

鳳岡全集。尊母桂昌院殿恭詣聖堂。大君導之。尊母獻和歌及奇南一枝於聖前拜禮。悉觀祭器。大君有御講云々。

(七月十八日)御番衆學問常々心掛可申樣令す。

(十二月三日)將軍、保明邸に臨む。家臣等をして經を講ぜしめ、瞽者某をして、大學序を暗誦し、緘書を講せしむ。

中根東里生る○伊藤蘭嵎生る。

一六九四(元祿八) 谷一齋歿(三月廿五日)○劉東閣歿(九月九日)○貝原存齋歿。

一六九五(元祿九) 八月十七日令

覺

一、酒に醉、心ならず不屆仕もの粗有之、兼ねてより大酒仕義停止

に候へ共、彌以酒給候儀、人々相愼可申事。
一、客等有之候ても酒給候義無用の事。
附酒狂のもの有之候はヽ酒給させ候ものも可爲越度事。
一、酒商賣仕ものの連々減じ候樣可仕事。
（後略）
大高芝山適從錄を著はして仁齋を駁す○宮崎安貞の農業全書成る。
一六九七（元祿十、）大日本史、紀成る○大高芝山の南學傳刻成る○物徂徠始めて柳澤侯に事ふ。
六十餘州輿地圖を校正せしむ。
一六九八（元祿十一、）（四月五日）昌平阪大成殿側に神農祠を建つ。昌平志曰、廟學置神農祠於此。
（九月六日）忍岡孔廟火災あり。昌平志曰、時南風强烈、延燒忍岡聖廟及林氏莊宅皆燒。是月令繳林氏莊地、更於城北牛籠里換賜墳

莊地。 蓋忍岡自寬永庚午林氏始住焉而距今凡六十八年矣。 至今遂除、永屬寬永寺云。

靑木昆陽生る(五月十二日)

一六九九(元祿十二) 木下順菴歿(十二月廿三日)遺言して孝經一卷を以て其葬に從はしむ。

一七〇〇(元祿十三)(十一月廿一日)將軍の易の講筵離卦傳終る。 去六年四月廿一日開筵より二百四十座にて竟筵也。

德川光圀薨(十二月)

朱子歿後恰も五百年也。

一七〇一(元祿十四) 藩翰譜成る。

一七〇二(元祿十五) 伊藤仁齋の文章乙夜の覽に達す。 〇中村惕齋歿(七月廿二日)、

〇十二月赤穗義士復仇。

(二月廿一日)孔廟釋奠のとき、大學頭林信篤經を講堂に說く。 昌平志曰、按添造廳堂權置講堂。 列侯坐於上局、大夫士逐班向坐。

而惟於下局士庶坐焉。講罷延饗讌宴極華。權置講堂列侯大夫士與聽防於此。按元祿辛未(四)信篤講於仰高門東舍。雖此爲始而不涉祭典。祭後說經蓋始於此。然臨時置講堂必當時祀典一例、恐不當始於此矣。但以見於是年姑係始書。

一七〇三(元祿十六)赤穗義士に死を賜ふ〇秋山玉山生る。〇和智東郊生る。

一七〇四(寶永元)重ねて孔廟を建つ。

佩文韻府成る。

ボストン府に新聞起る。

一七〇五(寶永二)(閏四月廿三日)林鳳岡西丸にて講筵を開く。

(三月十二日)仁齋歿〇(十二月十八日)山脇東洋生る。

一七〇六(寶永三)榊原篁洲歿(正月三日)

〇新井白石五十壽。

一七〇八(寶永五)西川如見の華夷通商考成る。

一七〇九(寶永六)綱吉薨〇白石西洋紀聞を著はす

朱竹蛇歿す。
宇都宮遯菴歿す。
國葬の爲めに釋奠を停止す。

第三章　正徳より天明に至る。

第一節　この時期は、六代將軍家宣が、元祿の弊政を承けてより家繼、吉宗、家重、家治を經て家齊に至る間(一七一〇—一七八六)にして、中にも家宣、吉宗の如きは賢明の主にして、特に敎育をば奬勵せしか、捗々しき進歩を認めず。元祿より寛政に至るまでの漸進の時期にして、その特徴は民間敎育の發達と學派の紛爭と洋學の輸入との三大事件なり。

家宣は少より學を好み、新井白石を侍讀として、襄職の後も勤學の志渝らず。立ちて將軍となるや前代の弊政を一新し、天下刮目して、良將軍を得たるを喜びしが早く薨じて事業の見るべきもの無し。吉宗は中興の明主にして、治を爲すに汲々として、儒敎を以て化を輔けんとせり。當時文運進み元祿の世には各種の方面に

新機軸の興起せしこと前古比無しと稱すれども一般の教育は猶ほ未開に屬し旗下の士も未だ學に嚮はず。昌平阪學問所の講義にも聽講する者は、多くは田舍士と町人となりき。徂徠は論じて曰く、右の如く講釋所の役目に講釋をすることなれば師の方に權無し。是亦道理に背く故、教の益なきなり。昌平阪高倉屋敷は塲所惡しき也。唯々儒者を江戸中所々に配り置き、人々勝手次第に參るやうにありたきことなり。然れば教ゆる人も學ぶ人も勝手よきなり。學問は公儀の勤とは違ひて畢竟內證のことなれば、勝手よくならねばならぬことなりと。白石と徂徠とは共に儒服せる英雄なるが、兩雄は並び立たざりき。家宣は白石を重用して、彼か宿昔青雲の志を遂げしめたるが、吉宗は太く白石を嫌ひたり。蓋し吉宗は聰明にして神經質の人たる故、同じやうなる氣質の白石を嫌ひて、寬裕なる徂徠を喜びしなるべし。徂徠は極力白石の政策を論駁し間部詮房に腹切らしめて政治は改良せらるべしと言ひ、政談を著はして、その政見を發表したるが、吉宗は徂徠の說には耳を傾けぬ。

梧窓漫筆三、　源君美の著述汗牛充棟多く有用の編錄なれども讀史餘論、古史

通の如きは垢を洗ひ瘢を見はし鬼神も愁恨せしにや。登庸得意のときには其著述の書一たび火に災し、其後廢黜失意の日には、深川の〇〇に僑寓せしに連日の雨潦にて著述の草稿をも漂沒せしを悲嘆せられしこと其手簡中にも粗ぼ見へ、且つ人の口碑に傳ふる舊るし。史家の三長、才學識にて識を立てんとすれば、訐直せざることを得ざれども、中に就きて回護の道もあるべきか。然れども史筆に志ありながら禍殃を懼れば、柳子厚に訴笑せらるべきなり。

かくて吉宗は、儒者室鳩巣に命じて六諭衍義大意、五常和解、五倫和解を作らしめ、これを江戸の手習師匠に賜ひて童蒙の手本となさしめしが、このころは元祿豪奢の餘習なほ盛んにして、專ら民間に行はれしものは、戯曲、軍談好色本の類なりしかば、右の如き堅くるしきものを強ゐたればとて餘り行はれしものとは思はれず。元祿太平記に、當世は只堅いものを取り置きて、商賣の勝手は好色本の重寶記の類が増しじやとあるを見ても社會の嗜好が隨分卑くなりしことを知るに足る。

元祿太平記(巻五)…最前貴様都の錦をおとしめそねみ、西鶴を褒め過し、西澤(一風)を取上給へど、難波の作者に小學が大學を讀せて見たい。字面一通もろく

に濟まい。さらば假名草子に作るほどに、源氏の狹衣を取出し、沙汰無しに聞てみやれ。義理はさてなき、讀癖さへ醫者坊なるべし。凡そ萬の事、本立て道生ずといへば、其本亂れて末納まるものはあらじ。（大阪誠に仰やれば、各一理づゝ聞え侍べり。此上は四も五もいらぬ。何れの作者にても、どんと一部の草子に仕立、老たるも若きも、智あるも、愚なるも、かはる心無く面白がり、永ふはやりて賣强く、本替のたよりによいこそ作者の譽まれ、本屋の金藏なるべしと手を打て笑ふ時云々。

西鶴の好色本歡迎され、續きて八文字屋自笑、江島屋其磧、西澤一風等その筆意に傚ひさらに潤色して、これまた世に持て囃されぬ。此の如く世の中の淫蕩に趨けることは、將軍よりして然りしと言は、實は富の勢力の發動に起因せり。彼れ市民は政治上の慾望を滿足せしむるを得ざる社會に出で、富の勢力を自覺して、その本能の情慾を滿足せり。故に法律に觸れざる限りに於て、彼等は生活の贅澤を盡くせり。紀文といひ、奈良茂といふは、其代表者といふべし。かゝる社會なれば、療儒者一片の講釋に傾聽すべき筈無し。抑凡夫の僻として偶學問に志す人をば、おと

しめそねみ、論語讀みの論語讀まず抔といひける。萬能一心じや、何もいらぬと欺き候事、淺ましきことなりと、元祿太平記に言へるは、この邊の消息を漏らせるものなり。利殖の外に人生を解せざる徒は、學問を以て不急の閑事となすは、古往今來皆然るなり。

出板條例

元祿より享保に至る社會の狀態は、竹越與三郎氏の二千五百年史、笹川臨風氏の元祿時勢粧の二書尤も痛快に、これを論ぜり。好參考書とすべし。

天下滔々淫奔鄙猥の書の流行するに堪へざりけん、德川政府はこの時代に至りて嚴重なる出版令を發布せり。西鶴の文極めて妙なりと雖も、家庭に讀む可らざるもの。その他戲曲中、淫猥に涉るものは固より、其碩、一風等小說雜著に至りて比々皆是なりき。享保七年（一七二二）の觸書中、主要なるもの左の五件なり。

一、自今新板書物之儀、儒書佛書神書醫書歌書すべて書物類其筋一通りの事は格別、猥りなる儀、異說等を取交へ、作り出し候義堅く可ㇾ爲㆓無用㆒事

右は世治に害あるものは、出版禁止を命ずるもの。

二、只今迄有り來り候板行物のうち好色本の類は、風俗の爲めにも宜しからざる義に候間、段々相改め絶板可仕事。

右は淫猥にして風教を害するものを懲罰するもの。

三、人々家筋先祖の事抔を彼是相違の儀とも新作の書物に書きあけては世上致流布致候儀有之候。右の段自今御停止に候。若し右之有之其子孫より訴出候においては急度御吟味可有之筈に候事。

右は全然讒謗律なり。

四、何書物によらず、此以後新板のもの作者、開板元之實名、奥書に爲致可申事。

是れ現行法に於て、出版の圖書には、必ず著作者幷に出版人の住所氏名を明記せしむるに同じ。

五、權現樣の御義は勿論、總て御當家之御事板行書本、自今無用に可仕候。無據子細有之は奉行所へ訴出で差圖を請け可申事。

德川氏に關することは、一切これを嚴禁するは武斷政治の特色なり。されど已むを得ざるものに對しては、猶ほこれを稟准するを得るの活路を開けり。

右出版法の末文に、右之趣を以て、自今新作の書物出で候共遂吟味可致商賣候若し右定めに背き候者有之は、奉行所へ可訴出候。數年を經、相知れ候共、其板元問屋共、急度可申付候。仲間致吟味、違犯無之樣可相心得候とあるを見て知るべし。武家政府は、その威嚴を重んずるを以て正史は措きて、戯作戯曲には戰國以後のことを記載するを許されざりしかば、淨瑠璃には當代のことを概ね鎌倉時代に擬したり。忠臣藏の如きは好例也。

當時出版物の亂雜にして風敎を害するの太甚しきは、則ち幕府をして、かゝる窮屈なる出版法を設くるの已むを得ざらしめたり。皆な操觚者自ら取るの罪なり。しかも、かゝる酷法の發布は腐敗せる社會の反映なることを忘る可らず。

却說富の勢力は駸々として上下を浸たし、幕府旗下の士も町人寬濶の風を學ぶに至れり。然るに彼等は收入限りありて、寬濶をてらふこと未だ幾もあらざるに、早く已に粮盡きて町人の勢力に低頭するに至れり。旗下の窮乏を訴ふるは幕初よりして然り、元祿に至りては、その極に達し、それより後ちも困難の聲のみ聞へて

遂に幕府の衰廢を咒咀するの聲とはなりぬ。彼等は旗下直參の士なりとて、自ら矜持すること頗る高く、私に天下の諸侯に拮抗するの自負はありしかど、その僅少の俸祿は、天下の大都たる江戸の繁華の中央に翺翔するには餘りに少なかりしかば、旗下といふも、やがて名のみの世の中となりぬ。

寶暦四年(一七五四)出版の世間旗本氣質に旗下の窮乏を說きていはく。さしあたりて銀子六十目に米二石もする直段、田舍の出來秋は、さらにして、商家すぎわゐをあんじける。町方百姓は悦べども武家方たれも日々せまる月を進て如何ともすることなし……何時となく奢り分限に過ぎぬ。夫も大名國持の家は大厦の事なれば、倒るゝに及ばざれども、或は五百石千石況して是より以下の小身の衆は聞えこそ御旗本衆御目見以上と高ぶれども內證の苦るしさは言ふ計り無かるべし……親の身代先祖の讓り武具馬具はもとより女房子供の衣類道具まで賣しろなし、此節米下直なるに至て愈衰へては俄にとりもうけの工夫に胸を痛めぬ。幼少よりそれになれたる町人すらも、飛商には身代を失ふを、況して十露盤も八算までの和郞達ち町人と利を爭ひてい

かで勝利あらんや。何に掛けても、さのみふかしきことあらねば、それがこうじて善からぬ相談、上を欺き下をこしらへ、誠ならぬ子を實子と號して金銀に知行を賣る合點云々。

さて旗下の士ども家計困難のあまりに、善からぬ内職を案出して、或は鳥の商賣を爲し、或は大名を欺き金錢を貪るなど、旗下たる品位を失墜する者少からざりき。旗下の士、かゝる有樣に沈淪すること自然の成行とは言へ、幕府にて中堅の武士として世上武士の標準ともなるべきものが、かくなりゆきて富の勢力に屈し、地方無骨の實力ある田舍武士に制せらるゝに至れり。彼れ旗下の中にても、猶ほ多少の財ありて遊蕩に身を持ち崩しけるうちには、黑丹後に雪脚の總縫、黑縮緬の羽織、紅の繻絆、十二三のちいさき奴草履取、土手をふらせて丹前姿などいふもありて、宛然たる民間の遊冶郎なり。かゝりければ吉宗は質樸勤儉を以て、この頽勢を挽回するの外無しと思ひ、痛く旗下の學問と勤儉とを奬勵せしのみならず、民間にも教學を奬めて奢侈の弊風を除かんとはせり。明君享保錄に、紀州より御供の面々は、專ら武を嗜み水練なども心掛け、常々麁服にて肩のゆき短く袖は薙袖にして羽織短

く、佩刀は業を專らにして拵へを麁相に、利方を旨とし、變の風は紀州邸とて太き元結二筋にて大銀杏に曲げ、そのさま誠に甲斐々しく見えたりと。紀州方當初の元氣想ふべし。而して吉宗の施設は如何に、一月に六日の講日を定め、農工商僧侶貴賤を擇ばずして、これを聞かしむ。講ずるところは四書、小學、近思錄、孝經等なり。吉宗の盡瘁によりて、稍當時の武士風を引立てたることはあれど、それも一時のことにして、紀州より來れる無骨の武士も、やがて江戶の風に吹かれて、社會は愈驕奢に進み、旗下はます〳〵柔惰となりぬ。蓋し吉宗は稱して中興の明主となせどもその主義は極めて保守、消極的にして、その施設一に制限的ならざるは無し。それ社會の趨勢は層々たる人工によりて抑制す可らざるものなり。吉宗の政治が僅かに小康を保つに過ぎざりしもの又た自然の數のみ。

世進みて武士の教育は進まず、ことに旗下の無教育は太甚し。家重のときは、舉世文盲殆んど前代とは霄壤の思を爲したりといふ。これに就き松浦靜山侯の甲子夜話に面白ろき話あり。抄出して考據に資す。

或人云ふ世の中の移り替るは思の外の事あるものなり。此五六十年前舉世

の文盲なりしは、前にも後にも類無きことなりとぞ。中村深藏(諱明遠、號蘭林)寶暦頃の奥儒者たりしとき誰一人敬禮する者無く、當直に出づれば若き御小納戸衆など孔子の奥方御容儀は美なりしや醜なりしやなど問て嘲弄しけるとぞ。餘りに甚しきことならずや。明安のころ節儉の政令、嚴刻なりしとき、その旨を希ひし作事奉行より昌平の聖堂は第一無用の長物なれば取崩し然るべしと建言せしを、國用掌れる老職水野羽州聞屆けて、既に高聽に達せんとて御用御取次衆に申しけるに、取次衆聖堂といふもの何なるかを知らず。奥右筆組頭大前孫兵衛に聖堂に安置あるは神か佛かと尋ねしかば、大前たしか本尊は孔子とか云々に候と答へければ、取次衆、その孔子と云ふは何なりやと尋ねければ、大前、論語とか申す書物に出候人と承り候と答へけるに、取次衆打うなづき嗚呼それにて分りたり、道理で聖堂崩しの沙汰を聞きて、林大學頭が唐へ聞えても御外聞が惡るいと申したりと聞及びしが、さらば先づ暫らく見合せ置く方然るべしとて高聽に達せず。その事已みしとなり。これ一般武士の文盲此の如きは蓋し德川時代には前後に無きことなるべし。

に反して民間の教育は著るしく進歩せり。講談の發達。心學の興起。寺子屋の進歩は、その三大要項なり。

第二節　民間教育の發達

民間教育の發達は、この時代に於ける特徴の一なり。將軍吉宗の教育顧問たる室鳩巢の説にいふ、天下國家には風俗といふものばかり大切なるは無し、君上の威は天の如く、その恐るべきこと雷の如し。たれか背くべきなれども世話に大勢に手無しといふやうに、一世の風俗には勝がたし。さる程に號令法度も、それにて、一過は改るやうなれども。つひに風俗にけをされて、あまねく下に達しがたく、ながく末まで遂げざる程に、たゞ局面ばかり取傳へてはては風俗のなりになりてやむぞかし。たとへば風俗は田地なり。政は穀種の如し。たとひ嘉穀の種にても、地ごしらへあしくては、育ちがたし。その如く美政良法と雖も、風俗整はずしては行はれがたし。穀種の育たんことを欲せば、地ごしらへするに若くは無く、政令の行はれんことを欲せば風俗をとゝのふるに若くはなしと。則ち以て吉宗教育の方針をトするに足るべし。元祿時代より風儀の頽廢と富の勢力の發達とは、民間教育の發達を催さしめぬ。民間教育説は時運の聲なりき。

當時地方篤志の學者のうちには、民間教育の普及を計りし慈善の行爲中々に尠しとせず。肥前大村藩醫田中周山の通俗勸善寳訓出版の奉加の如き、ことに稱揚すべきものゝ一なるべし。

田中周山は田中吉政の後裔也。醫を業として京都に居り、後ち大村藩に聘せらる。當時大村藩江戸詰の家老より國詰の家老に宛てたる周山の推擧狀は中々趣味あるもの也。その中にいふ、江戸にて寄席にゆき一席の講談を聽きしに、田中周山は醫名世上に隱無かりしかば、痔患者ゆきて治療を求めしにとても叶はずといふ。これ程の事に、天下の名醫の出來ねといふは何故ぞやと反問せしに、これは死出の山ぢ故に迚も叶はずと答へけりとなん。如此講談にまでも持噺さるゝ名醫なれば召抱へありて可然との大意なり。惟に周山才氣勝ぐれて儒醫なりしなるべし。周山、大村にありしとき、大村と長崎とに奉加して、その自譯せる勸善寳訓を上木して廣く世上に頒ち、遍ねく治教せんと企てけり。誠に善根の行爲といふべし。周山の裔孫、田中愼一氏現に大村にありて醫を業とす。左に登載するものは、同氏の所藏なり。

通俗勸善寶訓奉加帳

人、天地の間に生れて最も勤め行ふべきものは、人に善事を勸むるより大なるは無し。世衰へ道微にして、世俗の習すぐに生れ付きの心根となり、是も非もくつがへりたをれ、善も惡も錯り亂れ、遂に以て其身を水火の阬に焚け燒き、沈み溺れて滔々たる者皆その心の闇きによれり。孔子の東西南北に馳せゆき、道を說きて席暖なるに閒無く、釋尊四十九年の說法、老子の五千餘言、蓋深く天下後世の人の如此ならんことを憫れむ。かるがゆゑに、口に宣べ筆に著はし砭々として死塲に至らざれば休まじ。歷代血性ある漢、皆な善を勸め心を明らかにするを以て己が任とせざるは無し。余十有八歲のときより醫術を學び、愚にして其力をはからず。唯人の疾痛するを救はんと欲す。その餘の事は計るに遑あらず。今將さに老たり。又自ら以爲へり、人の身を醫せんよりは人の心を醫するの功の大なるに若かじと。或人の曰はく、古より聖賢世上を憂ひ給ふ事の心深く、亦人をして惡を悛め善を行はしむるに過ぎざるのみ。時の人未だ必ずしも悉く從ふことあたはず。聖賢の才德を以てすら猶且つ

かくの如く又何んぞ況んやその他の人をや。多くは勞して功無きを見るならん。對へて曰く然り。余不才にして、久しく人の身を醫するの術を學べども、未だ委しく通ずること不能。今又妄りに聖賢の成難きところの人の心を醫する時は、人豈に大に笑はざる者あらんや。然りと雖も、余所謂人の心を醫すると云は、我力よく世の人をして、惡を悛ため善を行はしむるといふにはあらず。夫又恃むところあるのみ。夫れ四書、五經、一大藏經、老子の書、その妙文奥儀、師傳にあらざれば以て洞らかに曉りがたし。故に清朝の君子達ことに太上感應編を得て詳かに圖說義釋して廣く因果報應を引く。その語知り易し。諸善を勸むるの捷徑苦しき海を渡すの慈ある船と謂ふべきのみ。余竊かに嘗て俗語に翻譯し、梓に壽して以て廣く世の人に施さんと欲す。志の切なるに任かせ、才智の陋しきを顧みず。唯一度閱るの際、語の解け難きこと無く、婦人女子といへども、善き報の喜ぶべきを見、惡き報の懼るべきを見、これによりて過を改め、これに仍りて善事善根を興さん事を要むる而已。是もまた道心の微なるを補ひて人慾の明らかなるを瀉するものにあらざらんや。然

れば則ち吾太上感應編圖說を得て人の心を醫せんと欲すといふとも、孰れか不可となさんや。唯だ梓に刻むの工、手間繁く、微なる力にて就がたき、これを船を造るに譬ふ。板釘、檣檝、帆索、具さに滿足して然して後ち舟成就して人を渡すなり。伏して惟みるに、志あるの人々、一つの臂を垂れて同じく勝れたる緣を結ばんことを實に望むところなり。

寶永五年子正月吉日（二七〇八）

今度判板成就の後ち、一萬部すり興し、世の人に施し與ふべきの志なり。まづ二千部出來させ、長崎へ千部、大村へ千部施し與ふべき也。全部三十卷。大人は勿論士民に到るまで望の者あらば、一部宛可與本願也。

義捐者の名簿を案ずるに、大村長崎兩地にて、少きは金百疋より銀二兩或は十枚に至る。しかもこの大事業は中途にして周山歿したるらしく、板木も無く、また自譯の草稿さへも存せず。

民間教育の普及の爲めに献身的善行を爲せし者このころより追々に輩出したり。心學者の如きは、これを以て一派を成せるものなり。

第三節　寺子屋は、この時期の間に著るしく發達せり。主として、神官僧侶を始め浪人或は醫師等の仕事たりしが、中には婦人にして開校せる者あり。

寳暦二年(一七五二)の世間母親氣質に曰く、(高雄の紅葉より顏の照るお敎女郎)夫松原五右衛門殿は五年以前に死去めされ、それより手習子を取りて、世は渡れど伊勢參りより再び歸らぬ其方か懷かしく、其方に別るゝ前より國元にても歌を好みしといふ事は、兒女に覺あらんと、花紅葉に事よせ、世上の交際多かるべき人と見れば、歌を詠みかけ、此短册一枚にても廻り〳〵て其方の手に渡るやうにも云々。

地方にては、僧侶尤も多く兒童の敎育に從事し、この時期の末に出でたる雜書の中にも手習の事といへる題にて、兒童僧侶に就きて學習せるところを書けり。僧侶の許にやらずとも寺子屋に入學するをば寺入りと唱へたり。菅原天神記寺子屋の段は當時寺子屋の實景なり。

寺子屋の敎場は、敷地は町外れの師家を除く外は、概ね建坪の外に餘地無く、固より運動場の設などはあらず。敎場は疊敷にして、生徒は机によりて坐し、敎場の大

なるものは、二百人若くは三百人を容るゝに至るも、一人の師匠にて、能く一目しこれを管理せん爲め、多くは長方形の大廣間に建築せり。往々二階造りのものありて、これには恰當の位置に中二階を設けて師匠の席を置く。師匠の坐席は槪ね儼然高く搆へ、後面棚を架して書籍筆墨を列ねて、終日坐して不便無からしめ、前及び左右の三面若くは二面には長机を居ゑ、生徒を敎授するに際し、一時に數名交る〻〻これによらしむるに便す。机の排列方は數行相排列し、一行は生徒二人相對して二机つゝ聯接したるものにして、數列相並べる側面方向に師席を設くるを常とし、男女は席を異にし、かつその順序は或は組を設くるあり、或は出席順によるもありて、一定せず。敎場は槪して採光通風ともに宜しく、また薄縁席を敷きつめて、疊の汚損を防ぎ、紙屑等の汚物は直ちに捨て去らしむを以て割合に淸潔を保つを得たり。

寺子屋の學科及び程度は習字を主として敎へたれば手習師匠とさへ汎稱したり。讀書、算術、裁縫その他生花及び茶の湯等の學科は生徒の望みに應じて、これを授けしなり。當時生徒は勿論、父兄も一に習字を巧みにするを以て目的を達した

るもの丶如く、更にその他を顧みざるの風ありし。書法に和様、唐様の別あるを問はず、字躰は多くは草書、行書を敎へて、楷書の如きは生徒の之を希望する者皆無の姿なりき。就中女子には假名字を主として、敎へたるにて、假名は一般に和様を學びたるなり。

手本の讀み方を敎ふるは今の讀書に於ける如くにて、則ち讀み書きとは手習と及び其手本の讀み方となりと謂はんも不可無し。手本の文には種々あれども修身、地理、作文等の諸科を含有せるは皆な同一にして、時に或は之を講述したり。就中地理科の如き不完全ながらも、幾分の裨補を爲せり。手習の敎授法は毎日生徒三四名若くは五六名づゝ師匠の面前に呼出し交々筆法を授け、かねて手本の讀み方を敎ふ。かく數名を同時に敎ふるも師匠は老練なれば、生徒も手を空しくするには至らず。また師匠も向ふ側より敎ふることなれば、文字を倒書するに熟達せるものあり。かくて三四時間にして、三十人乃至五六十人に筆法を授け了ることを得べし。

寺子屋の敎科書たる習字手本は、順序字躰整然として中々に能く出來たるもの

多し。作文の如きは手本と同時に敎へて通學數年にして、消息類を習ふころには、自用の手紙をば辨ずるに至れり。毎日の課程は、午前は白紙ならば十五枚。雙紙ならば六七冊、午後は各その半ばに達する位なり。

寺子屋の管理法は生徒の中の長者より當番を定めて師匠の補助となさしめ、生徒は終日六七時間の課業中つねに机によりて席を離れしめず。されど毎時休憩遊戲をば許せり。授業の功課は時間によらずして成功によるを以て、早く出席して早く習ひ終る者は隨つて早く退出す。習字一枚の字數は二字四字六字より細字文章等に至る。師匠は時々雙紙を點檢し、或は溫習を命ず。新たに寺入せる幼年生に對しては、兄姉または近隣の兒童の近傍に席を定めてこれを保護せしむ。出席簿は當番生徒これを扱ひ、出席順によりて、記入し當番は數場入口に座を占めて生徒昇降の禮儀をも注意す。敎場の揭示は、多くは扁額を以て、これに代へ、別に掟書ありて生徒心得を規定したり。

試驗は毎月一回の讀み浚へと、毎年二回の席書とあり。なほ一回の手本大浚あり。大浚は少きも數本、多きは數十本の手本を誦讀及び諳書せしことなれば、當時

生徒の困難想ひやるべし。大凌の次第は、師匠の面前に數人宛呼出し、當番は一人にて生徒の手本を取上げ置き、然る後ち之を諳書せしむ。席書は習字奬勵の爲め、席上揮毫をなさしむるもの。

寺子屋の授業時間は毎日六七時間にして、毎朝出席の順に隨ひ、直ちに授業を開始するを以て、何時より等の定めは無けれども、大概朝は七時半ごろより午後二時半ごろに至るを通常とす。大暑の際は、半日の授業にして、その餘、休暇としては、毎月一、十五、廿五の三日と十二月半ばごろより正月の半ばごろに至る長休みと他の祭日節句等なり。

寺子屋に就學する兒童は、七八歳より十四五歳までの間にして、學科の程度は商賣往來三字經、萬寶節用、千字文、實語敎、童子敎、庭訓往來位にとゞまり、算術は珠算にして開平、求積まで達するを極度とす。寺子屋にては、全く一人にて種々程度の異なりたる生徒を敎授することなれば、單級敎授の法にして、習字手本は習字、讀書、作文、地理等をも兼ね敎へたれば、一人の敎師といひ、敎授の聯絡は、ことに善かりしなり。これ寺子屋敎育の美點の一也。兒童入學の際には、束修を行ひ、なほ盆節季に

報酬を贈り、時節に應じて多少の金錢物品等を贈くることあれども、その報酬といふは實に些少のものにて、かつ一定の授業料とてはあらざりき。

珠算は舊幕時代專ら吾邦に行はれたるものなり。教育辭典に記していふ、又た珠算は算家の傳ふるところに據れば、文祿のころ毛利勘兵衛と云ふ者あり。豐臣秀吉の命を受けて明國に遊び、算法統宗といふ書を載せて歸國し、その門に吉田光由ありて、その書を考究し塵劫記を著はせり。或は曰ふ算盤もまたこの人の發明なりと。これ決して然らざるなり。蓋し珠算の吾邦に行はるゝは頗る舊るし。中世數理の學全く衰へしを以て、毛利吉田二子の創意なりと思へるのみ。

大寶令の成りしとき、算數の科を定め、陰陽博士、天文博士、曆博士、算博士、漏刻博士及び其等の學生ありき。當時算數の器、何ものに據りしやといふに、惟ふに筭算にあらずして珠算なりしなるべし。珠算の名は、すでに漢の時よりして、これあり。漢人徐岳の數術記遺に、珠算を叙して、珠算控帶四時、經緯三才とあり。北周の甄鸞その義を解して、刻板爲三分。其上下二分、以停游珠。中間一

分以定算位。位各五珠。上一珠與下四珠色別。其上珠別色之珠。當其下四珠。珠各當一。至下四珠所領。故云控帶四時。其珠游於三方之中。故云經緯三才也。この註によりて見れば、珠算の法は、極めて古くして、その方法算盤と一様なるものに似たり。當時支那より傳來して、本邦にこれを採用せしものゝ實にこの珠算の法なりしなるべきなり。されば本邦に於ける珠算の法は、中ごろ衰へたるものにて、毛利、吉田二氏の創意にあらざることを知るべし。蓋し毛利吉田二氏は、これを中興し、これを改善して、本邦の算數學を發達せしめたる者のみ。

寺子屋の敎科、その入退學及び一年行事等に至りては、資料極めて多し。茲にその二三を抄出して考據に資す。

駿臺雜話(巻二)　翁幼少(鳩巣)にして手習せしとき、世にもてはやす今川のふみを讀み習ひて、仁義禮智ひとつも闕けては諸道成就しがたしといへるを今に覺え侍る。了俊さしたる學者とも聞えねども、此一言は不思議に言ひあてられし名言ともいふべし。

世間母親氣質(卷二、武勇なる母を持あぐみたる若者) みさほも今は名を替へて、お勇といひけるが、種こそ町人なれ、代々殿の御扶持を蒙り、弓矢取ては先祖より不度も不覺をとらぬ我筋目、せめて此子には強さうな名を付けて下されとの願ひ。德左衛門も餘念無き餘りに強藏とつけて寵愛更に限り無かりき。六ツ七ツになる頃より外へ出で、近所の子供とざれ合ひて遊び、草履隱くし、迎鬼をするにも、父は必ず他所の子供と喧嘩するな、叩かれて戻ても大事無いぞ、町内の犬を通る衆に嗾し掛くるな、乞食やなども怪我させては養いりやうと強請られては、何程物の入るべきも知れず。小さきときから損のゆくことをせぬが、町人の身の嗜みぞと云ひ教ゆれば、母親氣色をかへ、扨々理も無き仰られ樣、それではあの子が臆病者に成て成人の後サアといふ時の役に立たず。近所の子供を叩いたとて、高で子供同士と挨拶して濟ますまでの事。道邊に犬を嗾かけ、嚙まれたかとて強請り込まば、少々錢金をやつても、あの子が一分は立つにあらずや。嚙まれて錢を取るは強請者といふもの、いかふ嵩高に申さば、妾が出て父に習置きし竹內流の手際を見すべし強藏必らず負を取るな

と言含むるにつき、子心にも氣味よきことに覺え。十一二よりいろはを學びしに、手習屋の師匠殿も鬼若待遇にして隨分切諫を加へらるれども、強く言はゞ硯をも投げつくべき眼ざし、善加減に避けて通されける。正月には松囃子とて、師匠の許へ手習の童集りけるに、強藏殿も御出被下べしとの廻狀。正月小袖に麻上下。若し鞘奔りては、誤ちも心元無く、小脇差の鐔に、紙捻をかけて、止めをしてはと言ふを、母親扨も氣の毒や、子供同士とはいひながら如何なる退かれぬことあるまじきものにても無し。それ戸棚の下の引出しに、我身の守脇差あるべし。歳の首の祝儀に一昨日ねた刄を合はせ置きたり。それを帶せて遣はされよと莞爾ともせず言はるゝ顏付き、入らぬものと言ふたらば、又た例の如く、夫ながらも流石は素町人といはれ腹の立つ始めともならんと思へば、つきて行く丁稚に怪我さすなと能々言含めてやりける。

五大力戀緘(並木五瓶作)(菊野)しやんとして、娘御前の教へ草は、幼少いときに寺子屋で聞きて、よう覺えて居ります。

隅田春藝者氣質(並木五瓶作)(喜助)侮つたことを言てじや。米屋の手代が女

子の文位、讀まいてかいの：(長五)讀まいじや。おりゝ在所に居る折ら占へ、去年迄往たものじや。

風流志道軒傳卷一、(風來山人作) (去る屋敷の用人)或は髮置袴着なんど光陰は鐵砲の如し。淺之進(志道軒)七八歲のころより寺入の初め　淸書人の親の心は、闇にあらねども、子を思ふ闇に、眞黑な牛の角文字ゆがみなりも器用な手筋と譽めそやし、早やそろ〳〵と大學は孔子の遺書にして、初學、德に入るにも、出るにも、人を付け置きなをざりならぬ養育に、又生性勝れたれば、人心付く頃より酒掃應對進退の筋も年よりは、おとなしく、弓馬の道は言ふも更らなり、立花茶の湯、鞠、揚弓、詩歌、連誹を始めとし、その餘の藝能ぬけ目無く十五歲になりぬれば云々。

この時代に、寺子屋程度の兒童に敎ふる算數遊戯の世に出でたるは、頗る注意すべき價値あるものなり、寺子屋にて授け、また町家にて授けし數學の程度は卑近のものなれども、算數遊戯は、數の觀念を陶冶するには、能きものなりき

寛保三年（一七四三）京都の中根保之丞著の勘者御伽草紙は、則ちこの目的を以て作られしものなり。今この書の躰裁を紹介せんに、

上巻第一に小町算あり。その歌に、（前略）

卒都婆小町の、其中に、一夜二夜や　三夜四夜　五六はあらで　七夜八夜九夜十夜と　歌ひつゝ　さてその奥に　書きおける　九十九夜には、如何して　なることやらん　そのたねを　さかまほしゝと　ありければ、傍への人の　すゝみ出で　さいつころより　このみちに　心をひそめ、今ぞ知る　無算の人の　中々に　及ぶところに　あらずとて　いとこちたくもいふやうは　始めに見えし　その數の　一二三四と　又後の　七八九十前後なる　次第々々を　見あはする　そのでだてこそ　かくばかり　一と七とや　二と八と　三と九とをや　四と十と　各別に　かけあはせ　四口併せて　九十あり　さてまたかさね　ことはとて　をどりし文字の　四々の四つ　七々夜の七つ　九々夜の　九々のつみくち合すれば　二十となるに　九十をば　くはへいれつゝ　百十と　なりし其中　五と六と　ぬけし

言葉を引ときは残り則ち九十九となると答へて退けばせきの人々感にたえこれは奇躰と手を打つ（後略）

又解していはく

前　後
一　七々　一七の七〇二八の十六〇三九の廿七〇一四十〇四口併せて
二　八　九十あり。扨又重ね言に四々七々九々并せて二十あり。
三　九々　右二口并せて百十と成る。此内五と六とのぬけことばを合
四々　十　せて十一を去れば、餘則ち九十九となるなり。
又いはく、圖の如くするも同じ
一
二　一、一の十〇二、九の十八〇三、八の廿四〇四、七の廿八〇五、
三　六の三十
四　各合せて百十あり。此内五と六となき數をつかひたる
五故、合せて十一を去れば、餘則ち九十九となるなり。

六七八九十

杠秤の定目より多くかゝる事。

或は二貫目かゝる杠秤あり。その重りたとへば百五十目取緒と鉤緒との間一寸二分。初星は取緒の右の方八分にあり。(但し杠秤の本緒には、初星無し、考へて知るべし。又初星、取緒の左へ出るあり。此術後に見えたり。)是にて四五貫目程も懸け度き時、先づ假りに五貫目と置き、二貫目を以て割れば、二五と成る。是におもり百五十目をかくれば、三百七十五匁となるを、新錘の重さとす。次ぎに取緒と初星との間、八分に百五十目をかけて、新錘三百七十五匁にて割れば、三分二厘と成る。是新錘の初星より取緒までの寸なり。是を以て八分の内を減じて殘四分八厘に新錘三百七十五匁をかけて、取緒と鉤緒と

の間、一寸二分にてわれば百五十目と成る。是を加減の差と名づく。扨て右假りにをきたる五貫目の內、加減の差百五十目を減じて、四貫八百五十目までかゝると知るなり。扨て何にても新錘を以てかくるにたとへば、一貫八百目の星にかゝれば、一貫八百目に二五をかけて、四貫五百目となる。內ち加減の差百五十目を減じて、殘四貫三百五十目と知るなり。若し初星取緒の左にあるものは、反て加減の差を加ふる也。初星を勘ふるとは、錘を何處へなりともかけて、衡の平になるところをいふなり。又杠秤によりて鉤緒の各にかけても左のさがるあり。是は本緒の夙懸たとへば一貫目ならば、その一貫目の星より又一貫目加へて二貫目の星までの間を取りてこれを夙懸の星より逆に右へあつるに其寸必らず衡より外に當る。そのところを初星と定めて衡するなり。

取緒

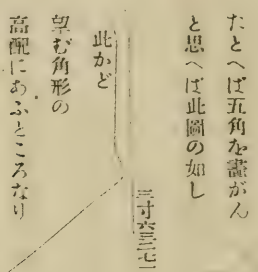
一寸二分

八分

此術、統宗にいづるといへども加減の差を論ぜず。故に初星、取緒の正中にあらざるものは不合を以て術を改め載す、

三角より十五角までの内、望みの角を書くこと。

幾角にても圖の如く、横に一尺の界と又た其眞中よりたてに正しき景とをひきて其堅の界に望のたての寸法をしるして、其所より横界の左右の端へ界を引くときは、即ち望みの角形を得るなり。

たとへば五角を畫がんと思へば此圖の如し

此かど望む角形の高配にあふところなり

三寸六三二七一

一尺

各堅の寸法、

三角八寸六六○二五、
四角五寸
五角三寸六三二七一、
六角二寸八八六七五、
七角二寸四○七八七、
八角二寸○七一○六、
九角一寸八一九八五
十角一寸六二四五九
十一角一寸四六八一三
十二角一寸三三九七四
十三角一寸二三二三八
十四角一寸一四一二一
十五角一寸○六二七八

又何角にても望の角を書く事。

たとへば何角にても望次第に角形を得度きときは、圖の如く丸をまはしてそ

の内へ望みの角形をぶんまはしにて割合せ入るゝがよし。

又五角を書く捷徑の事。

法曰たとへば五角の高配をゑがかんとなもふときは、直ぐなる長き紙を圖るの如く結びて兩端を切捨つるときは五角に成る也。

算盤に向ひつぶあぐる事

ある人算盤に向ひ、その右の端に一をひたと加へて遂に二十桁目にいたりて、或は八或は九を得ること血氣盛なるところ僅に四五日にて上げたりといへり。余これを考ふるに甚僞なり。人力の及ぶところに非ず。凡そ人、二百年ゐたりとも、五代或は十代などにて、中々上ぐることにあらず。故に其大器をかんがへて左にしるす。若し委しく、試むと欲する者は呼吸を吟味して考ふべし。先づ呼吟は晝夜に凡そ三萬三千五百息、天徑或間には二萬五千二百息歳周凡そ三百六十五日として、一息に上ること凡そ四十なれば晝夜にて五十四萬也。左すれば一年に一億九千七百十萬上る。是によりて六百億年にいたりて漸く二十桁目に一餘を得る。故に三十一世の

數なり)を以て六百億年を除て二十億代かゝることを知る。況んや九に滿るをや。

爨法の事

たとへば釜にて古米一升五合を食に燒かんと欲するとき其水何程と問。答云水一升九合三勺七才五、

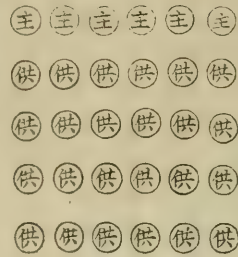
術曰、米の升目を置きて是を九倍して定法二升を加へ、得數を入にわれば水の升目知るゝなり。然れども、升目又は火の燒やう粗末にてはあひがたし。故に諺に食たくは初めちよろ〳〵中くわつくわ親は死ぬるとふたとるなと云ひ傳へたり。但し鹽の入食と鍋にてたくとは少し水を控べし。

組分と云ふ算の事。又島立といふ。

石數いか程にても同じ數づゝ幾組もならべさせて、其組數たとへば五組といふことを四五間もわきにて聞く。扨て其内一組を主人組殘る四組を一所にして下人組と名付させ、扨て主人組の內より一人下人組へ入れさせ、殘る主人に下人組を供に付けさするなり。或は狹箱持或は草履取り又は若黨などゝ

云て主人一人に四人づヽ付るなり。此四人といふは、初め五組といへば供四人づヽ、六組と云へば必らず供五人づヽなり。畢竟組數に一つ少く付るなりさて付け仕舞ひ候とき、其の殘りの下人の數、必ず初の組數のとほり、五組といへば五人、六組と云へば六人あるものなり。今はじめ五組なるゆへ、一人は長崎へ使にやり、一人は大阪へ買物にやり、一人は愛宕へ代參りさせ、殘る二人は留守居などヽいふやうにして、組數の都合に合ふやうにいふべし。例へば七づヽ五組は主人組七つあり。

此主人の内より一人下人にして殘る六人を主人と定め此六を先にならべて供四人づヽ付くれば、あとに下人組五人餘なり。左圖の如し。

㊟　㊎　㊎　㊎　㊎
㊟　㊎　㊎　㊎　㊎
㊟　㊎　㊎　㊎　㊎
㊟　㊎　㊎　㊎　㊎
㊟　㊎　㊎　㊎　㊎
㊟　㊎　㊎　㊎　㊎

餘り五人　○長崎へ　○大阪へ　○あたごへ　○○留守居

又同じく四組は下人、一組は主人の時、主人の内二人を下人にして、供を四人づゝ付くれば殘り十人有り、三人を下人にすれば、殘り十人ある類にて知るべし。

希妙奇躰の事

右數四つを圖の如く並べ置きて、扨て外の人に此四つの内いづれにても一○○○○つ指にてなぶり給へ。それ指して見せんといふて脇へのきて居るとき、その外の人、各四つの内、何れにても一つ指にてなぶり、知らぬ顏にて居るなり。その時脇へのき居る人、もとの所へ出て彼是れとかぎて是なからんとさす事なり。

法曰、石數四つにひそかに合圖をこしらへ兼ねてより○きめう○きたい○めうよ○よしぎかくの如く石に名を付けてをくなり。扨て外の人、前の四つの石のうちにて

例へば二番目の石をなぶるならば彼合圖の人のいふやふは、もしこれが合へは奇躰なことじやといふを彼わきに居る人聞きて二番目なることを知り居て、扨てもとの所て彼是と嗅ぎて、二番目を指す也　猶かしらの奇妙の方にそと印をして上下まぎれぬやうにすべし。

右は勘者御伽草紙の一斑を示せるものなり。現今は算數奇觀その外、二三の著書あれども、當時にありては、教育上有益にして、珍らしき著述なりしなり。

寺子屋の教科書としては實語教童子教庭訓往來、雲州消息等は尤も廣く行はれたれば、畧ぼ、其の解題をなすべし。實語教は王朝の末鎌倉の時代には、すでに世に行はれ、後花園天皇文安元年の下學集序にも見えたり、釋惠空の説によれば、この書は、或は弘法大師の作なりとも傳ふといふ。以て、その傳來の舊るきを知るべし。童子教は、これも惠空の説に釋安然の作なりとも傳ふといへり。安然は傳教大師の系族にして、早く叡山に登り、慈覺に就きて學べり。惠空は紀州淨福寺の住職にして、實語教童子教諺解を作れり。寛文九年、一六

六九、招月亭有峯の漢字の序にいふ。實語、童子の二教舊來尙行はれて以て童蒙に教訓するところの書なり。その書たるや五言を以てこれを句局す。蓋し梵書伽陀の一體なりと。蓋しこの二書ともに佛者の手に成りしことは疑ふ可らざれども、作者は明らかに知れがたきものなるべし。往來類は明衡往來に起り、尤も廣く行はれたる躰なり。すべて何事にても消息躰に作りなしたるもの皆な之を往來の字を冠す。後ちには商賣往來、百姓往來、江戶往來等は廣く用ひられしが、甚だしきに至りては新田義貞往來、木曾義仲往來などの如きあり。この一書にて、作文習字、國語地理歷史等の學科を敎へたる譯なり。先年博士井上圓了氏、往來類を多く集藏せられしに、一朝舞馬災にかゝりて烏有となれるは可惜事也。

備前の手習所

第四節　當時吉宗は江戶市中の初等教育を奬勵し、寺子屋のことには特に留意したれば諸方追々鄉校を設くるところも多くなりき。就中尤も名ありしは、備前の手習所にて、岡山藩中百二十箇所の多數に達し、中にも閑谷學校は尤も有名なるものなり。

備前の手習所は新太郎少將光政の設計に係る。光政の學政のことは前章既にこれを論述せり。手習所設置の趣意は、侯の重臣津田重二郎が延寶元年（一六七三）各郡手習所巡視の際、郡奉所代官中へ申談じ、所々手習所に於て十村庄屋手習師匠又は來懸りの庄屋共及び百姓中に對する演說によりて明瞭なり。その大意は、在々に手習所被仰付御趣意は去々年も申聞通り、前々は百姓共の子供、寺へ通ひ手習算用等習候由。尤年長け候者も旦那坊主の敎を受候樣に有之候處に近年は師匠坊主少く罷成かつ神職請けに罷成候。（前章參看）百姓共は子供を寺へ遣はし候事難仕由。年長け候者も過半寺へ出入仕、敎をも不請候由上に被聞召候。然るときは自今以後御領分にて育ち候民どもは無筆無算または人倫の示しを可請樣も無之段不便に被思召、手習所にて手習算用仕習又は年長け候者も間々には心掛次第に講釋の一句をも承り人倫の敎をも請候樣にと思召ての事に候。（中略）右の如く被仰付は御國主の御役と被思召ての事に候。又若し百姓共の子供の內に手習算用致し習、四書小學の內の文義をも辨へ、人に生れては親へは孝を盡くし、御國法を不背一類和睦し、上を重んじ、奉行代官庄屋等の申付を用ひ家職の耕作を精を出候

等と心より合點仕候者後々一村に一人二人宛も有之候はば在々の風俗の益にも可成と被思召ての事に候と言へるは、光政の意中を說明したるものなり。

岡山藩手習所の設計は、寛文三年ごろ(一六六三)學校奉行津田重二郎より和氣郡奉行渡邊助左衛門へ宛てたる照會書に詳かなるを以て、此に登載す、

一、在々手習所の敎、先づ手習算用この二色に仕度存候事。

一、文字讀は望申者計りに敎候樣に仕度存候事。

一、右の手習算用の師匠は前庄屋を仕り年寄罷め唯今隙にて居申者か、又は庄屋年寄の弟か子か無左とも子供を引廻し可申と思召候者のつね差して手自家業を不勤者を御見立て半年替り一替年り手習所へ詰めさせ候樣に仕度存候事。

一、文字讀の師匠は、學校へ罷出で申、在々の子供の内を望申所へは替る〴〵銘々の郡にて手習所へ遣はし可申候。尤も其手習所の近所に四書小學の文字讀覺候者有之候へば幸の事に候。

一、手習所へ出候子供は肝煎庄屋の子供並に村々庄屋年寄又平百姓にても手

前宜下人も召仕世悴一人手習所に爲通候分は跡差て事欠き不申者の子供を月十五日手習所へ爲請申度右の者共は年長候得は皆公用を勤る者共にて御座候。左候得は物書算用不仕候て不叶儀に候間、此旨被仰聞、望不申候とも手習所へ御出し可然存候　尤年寄百姓の内は小身にて子供手習所に出し勝手迷惑仕る者は無用に仕度候。小百姓の内にても手習所へ出し度と望候者は望次第に仕度候事。

一、講釋の儀は、民の隙を考へ、肝煎庄屋並に村々庄屋年寄又は身をも持ち候百姓手習所へ寄せ、一年に一度か二度講釋望候者は望次第に仕度存候事。

一、講釋仕者は此方より在々へ廻し可申事。

一、年々從公儀御米被下候にては末續き申間敷候。民の風印を御急無く年久敷手習所の教續き不申候ては益御座有間敷と存候。左候得は民の心に手習所の教好み候樣に何卒自然に被成掛、五七年過候はゞ御郡奉行衆の御心得にて、何卒民差して迷惑不仕手習所一ヶ所の入用は子供を出し候親々造作は公儀の御構無之樣に只今より御目論被成候樣に仕度存候。此度被遣候御米は

民共進み心出來申す內計り被下候樣仕度存候事。
一、私存寄候趣は右之通りに御座候得共、遠方の儀其上民情不案內にも御座候又は所に寄模樣替り可申候得ば强てヶ樣に被仰付可然とも不被存候間右之趣御同心の御奉行は右之通被仰付候、思召も有之御衆中は入用米御請取被成今明年は先づ御心儘に被成、御覽可被成候　其上にて樣子承又相談可申候。然共後々は從公儀御米不被下、民共進み自分として何卒手習所續き候樣にとの儀は御主意に御持ち被成縱令去年迄御雇ひ被成候物讀當分又御雇ひ被成共、後に從公儀御構無之時節片付候儀只今より御了簡專一に存候。

右にて岡山藩手習所の規模を窺知るべし。當時學事なほ草昧に屬するを以て手習所は、先づ農民中の主なる位地ある者共よりて始めて教育せんとしたるにて今日の小學校とは、その性質を異にせり。さて又備前は光政の新事業幕府の嫉視を受けて、早く退隱したるのち、不急の事業多く起され財政も衰へしかば、教育の事光政の盛時に比肩すべきこと無かりし。

第五節　寺屋は則ち小學校なるが、七八歲則ち就學以前の兒童に對して、幼稚園

の創意未だこれ無く、家庭の教育あるのみなりき。教育家中には乳母及び子守りの撰定を注意せざる可からざることを唱道せる者無きにあらざれども、社會は子守りに對しては殆んど無神經にして、教育上に於ける子守の弊害を認むること無くして維新後に至れり。余は子守を以て希臘の教僕(Pedagogue)に比すべきものなりと惟ふ也。

安永二年(一七七三出板の世間小兒養育氣質に子供大會の事を傳へたり。當時富豪の好事者ありて、幼兒を鍾愛し、これを集めて遊ばしむるを以て無上の樂とし遂に子供大會を催ふすに至りしものにて、教育史上看過す可からざるものなり

(難波より遙々と花の都の隱居所は兒櫻の馬場の邊り) 中京姉小路と申す所のの町住人布袋屋徳右衛門と申す仁。中々愚僧などが及び寄らぬ神妙なる子供好中年迄は面白も勤められしが當秋より實躰なる息子に名前をゆづり、剃髪して幻心と改名し町内に隱居し、毎日諸方より緣を求めて、二歳三歳より七つ八つ方の小兒を集め、今年ぞ思ふまゝの子供遊び。愚僧も參りて折々無我にたのしむ小兒の愛をいたし申す。則ち明日は幻心方にて小兒の大寄せ、愚僧も參り居るほどに、彼

隱居へ向けて御出あれと云はれしかば、賓順大きに悦んで、いよ〳〵參るべしとの約束。（京都智恩院門前の邊りの樂隱居、永井賓順）……明日の出會を待ち兼ね退屈の躰を手代が見付けて心を配り、下男にいひ付、近所の子供を呼にやれば、隱居へ出入る豆腐屋八百屋魚屋の子供のぐわんぜ無し共が來て是をまぎらし、明る日になれば四つ時分をまちに待ちて支度をし、下男一人供につれつゝ彼酒屋の隱居へさして急ぎ、程無く隱居の新宅の門口へ案內乞ふて、西山の和尙に小兒大會の趣向を聞し出いひ入れければ、主人幻心とんと覺無い西山の和尙なれど、幻心といふ名を知り、其上今日新宅振舞にて幼子供の大寄を催ふする事を聞たる不思議。あやしみながら、先其人を是へ通しませと家來にいひ付け、我も次まで出迎ひしが、中々人柄なる隱居の躰、座敷へ通して樣子を聞く程一つも覺の無い事計り。客も亭主も呆れしが、小兒を好く人、殊に名所のしれた隱居なる故、先づふしぎは格別、箇樣に御出合申すも他生の緣、今日は是にて御遊被成といふ中、はや段々に寄來る近所町內隣町まで知るべの子供、三つ四つになる子供には親が付しもあれば、又た乳母の付きしもあり。六つ七つ八つは丁稚を連れたもつれんもざわ〳〵と一時に

五十人計り十六疊敷きの座敷へ出で、次ぎの十疊八疊の小座敷まで遊びめぐる躰是を見ては實順も座敷を立ち兼ね、亭主幻心が詞につゐて座をしめてぞ咄しける。扨て小供の悦ぶ樣に氣を付けし座敷しつらひ。七福神の繪を染込みし幕を張て座敷は殘らず毛氈を敷きつめ走り勝手の能き樣にと何れの毛氈にも鋲を打ち床の懸ものは布袋大龍の切だめに秋の草花を種々大ふさに入れて花を望む子供には取らす積り。中座敷の内疊二づふ程白砂にしてすやきの人形。さいしきの雀鳩馬、牛、猫、犬、鼠の土細工を並べて是も氣儘にとらせる馳走。庭は泉水つき山ぐるりを芝にして、まばらに花毛氈を敷き、怪我をせぬ樣に、それ〲役人を付く。先づ子供の四つ五つより上は、落着きに饅頭一つ宛とらせて、二つ三つの子供には志るあめをねぶらせ、子供の親或は乳母小女郎丁稚に至るまで、中飯夜食色々の馳走。食あたりにてもあらんときの用意に、小兒科の醫者と鍼さすりの上手を頼み置き殘る所なふ氣を配ばりて、幻心年來の望みの慰み一世一代の趣向なるが、成程福の神と一門に成た心持がして、どふも云はれぬ面白さ。よねん無く大勢の子供が遊ぶ躰。中には一休みして、乳を吸ふ子供もあり。若きときより大阪にても樣々の

樂に金銀を入れし寶順も、この趣向には手を取り感にたへしも、ことはり也。扨て其日も暮れに及びし故、退出も間近く、初めての出會なれば長居するは無禮と思ひ、今一度座敷廻りを見物せんと一間々々を見物しけるが布袋の一軸あまりに見事に見へける故、念入て見られしに名印あれども老眼にてさだかに見へわかず。亭主に尋ねられければ、狩野の古法眼元信の名印正筆にて古筆了安の極めとある故、大阪にて銀かしの有德なる隱居なれども、此作り酒屋の隱居へ來て手を置く。流石は都の奥ゆかしさ、只我を折り肝をつぶして悦び、段々一禮いふて、四つ時に小兒の歸る中にまじりて退出し、智恩院町へ戾りて手代どもに今日の噂。第一不審なるは昨日の禪僧さて幻心が振舞の趣向。京師の德を感心して、あまりの事にくたびれ、夜半どきより只一ね入にふしけるに、曉の正夢に、彼前日に見へし禪僧、寶順が傍へ來りて曰く、我は則ち幻心が所持せし古法眼元信が書きし布袋なるぞ云々。

教育史上の一佳話にあらずや。

第六節 大聲は俚耳に入らず。無教育の社會には、堅くるしき仁義忠孝の講釋よりも面白き講談の間に、義理人情を曉らしむるこそ善けれ。講談は、早く已に戰

國の終りに開け太平記讀みとて、太平記にかぎらず、すべて戰場の形勢を演述したり。歌林雜話集に、道春始めて論語の新註を讀み、宗務、太平記をよみ、丸(貞德自ら言ふ)にも歌書を讀めと、下京の友達どもすゝめしに云々と見へて、その始めは眞の講談にして物貰ひ或は興業等のことにはあらざりしが、浪人神官等多少の讀書生が零落してこれを以て舌耕するに及びて、その品位は下り、その躰は益面白くなりぬ。これを席上に講ずるにあらずして、緣蔭、軒頭に席を張りて說くものは、これを辻談義といへり。談義も講談も同じこと也。

嬉遊笑覽に講釋師は太平記無禮講の條に、そのころ才覺無双の聞ありける玄惠法印といふ文者を請じて昌黎文集の談義をぞ行はせらるとあり。玆に所謂、談義は、講義にはあらずして、事を文談に寄せたるばかりなるべし。談義僧の躰度を見れば、文集の談義の如何なるものたるを知るべし。浪人等稍讀書力あるものは、笠を被り扇子を口に蔽ひて人家の軒頭に立ちて太平記讀みて糊口せしこと近松の戲曲などにも散見せり。

その後、追々これを以て職業となす者出で來れり。元祿三年出版の人倫訓蒙圖

業に、太平記讀み近世より始まれり。太平記讀みての物貰ひ。あはれ昔しは疊の上にもくらしたればこそ、つゝりよみにもすれ。なまなかかくてあれよかし。祇園の涼みの紀の森の下などにては、蓆を敷きて座をしめ、講釋こそおこならめ、それをまた小首傾けて聞ゐる者もありと云へるは、太平記讀みの素性と、その狀態も窺ひ知るべきにあらずや。この頃の太平記讀みの圖には、神社の境內などにて、葭簾はりたる小屋に、見臺控へ手に扇持ちたるもの居りて、その前に床に並べたるに聞く人、尻かけたるところあり。小屋の軒に看板かけて太平記、信長記四十七人評判などと書き、或は太平記讀み申候などゝ題せるもあり。江戶にては、その起原、京都よりは遲く、漸く元祿のころより京都より輸入したるが、珍らしきことなれば、日々聽衆群集したりとぞ。然るにこのころよりして、太平記讀み漸く廢されて軍書讀み流行することゝなり、元龜天正猛將勇士の事蹟や難波戰記の類をば、尾鰭を付けて面白く講談することゝなり、文耕、志道軒の輩出づるに及びて講談は玆に一新紀元を畫せり。

このころの講談師にて名ありし者は、神田白龍、馬場文耕及び僧靈全等にして、白

舗は專ら大名等に招かれて軍書講談を爲し、文耕は黍女が原に葭簀張りの小屋掛をなして大日本治亂記の看版を掲げて講席を開きしが、官より差止められて、心學表裏咄と改題し、當時の心學者の淺薄を軍談の間に罵りしが、後ちに政談をなすに及びて死刑に處せられぬ。靈全は淺草奥山銀杏の大樹の下に葭簀張の小屋をしつらひ、一人に十六銅づゝを受けて、戯言を交へて辻談義を爲し、後ちに軍書をも講せり。志道軒はこの靈全に倣ひたるなれども、その講談の巧妙なる遙かに、その上に出で、八百八街に喧傳し兒童走卒も志道軒を知らざる者無し。志道軒は明和二年(一七六五)を以て歿す。平賀源内、志道軒を尊崇して先師といひ、風流志道軒傳を作りて、併せて當代の學者を罵倒せり。蓋し志道軒は事を滑稽に寄せて、社會の腐敗を論じ、その改良の必要を絶叫せる者、恐らくは憤世の士なるべし。風流志道軒傳に、その口氣を擬して曰く、近世の先生達ち畑で水練を習ふ樣な經濟の書を作て、俗人を驚かすことは片腹痛きこと也。其位にあらざれば、其政を計らずと云ふ聖人の教を忘れて聖人の道を說き出すは相撲取の褌を忘れて土俵入をするが如し。其外浮世の口過學者、管の孔より天をのぞき、火吹竹で釣鐘を鑄るやうな偏見を說

き出し、我身も薯蕷が鰻となるやうに尻の方より二三寸程を出來合の聖人に成かゝりたれば、麒麟鳳凰に星入のひけ物でも出そうなものと自負する學者も世に多し。又曰く。井戸で育つた蛙學者がめつたに唐贔負に成て、我生れた日本を東夷と稱し、天照太神は呉の太伯に違い無いと附會の說を言ひ散らし、文武の道を表にかざり、陳ぷんかんの屁をひつても、知行の米を周の升で計りきつて渡されなば、其時却て聖人を恨むべし。誰やらが制札の多きを見て、國の治まらざるを知りたりと云ふが如く、亂れて後ちに敎は出來、病有りて後ちに醫藥あり。唐の風俗は日本と違ふて、天子が渡り者も同前にて氣に入らねば、取替て、天下は一人の天下に非ず天下の天下也とへらず口を云ひ散らし、主の天下をひつたくり不埒千萬なる國故、聖人出で敎へ給ふ。日本は自然に仁義を守る國故、聖人出でずしても太平を爲すと。源内の文章は痛絕冷絕なり。その極めて皮肉にして滑脫の妙あるは、志道軒に私淑したるものか。源内また志道軒の風采を敘していふ。爰に江戶淺草の地內に志道軒といへるえせ者あり。軍談を以て人を集め、木にて作りたる松茸の形したる可笑しきものを以て、節を擊ちて諸人の臍を宿がへさせる猥雜滑稽、耳を抓

んで尻のごみ程取ても付かぬ歯なしの口をくひしばりそこらだけが皺だらけなる顔打ぶり或は白眼にして他の世上の人を味噌八百のめつぼふ天八九十に近き痩親父にて女形の身ぶり聲色までその趣を寫すこと誠に妙を得たりといふべし。その說くところは神儒佛のざく〳〵汁。老莊の芥子ぬた。氷の吸もの。稍光りの油あげ。跡も形もないて居る子も笑出し草履摑む奴等まで何やら坊といへば、志道軒と知るほどの古今無雙の坊主なり。されば江戸に二人の名物あり。市川海老藏と此志道軒親父なり。然るに柏莚は世を去て今殘るところの志道軒、江戸に一人の名物と云ふべし。故に一枚繪、今戸燒を始めとして、祭の行燈、髪床結の障子にも此親父が形を畫きずばしりの頭、松茸を見ても、志道軒を思出して、おかしくなるは、誠に目出度き親父なりと。彼が江戸兒の群集せる淺草奥山銀杏樹下に、その快辨を弄したるを想見すべし。然るに彼が古今上下を思ふ儘に罵倒するを以て、官に對しては氣違ひ坊主といふことになりて罪戻を免れ居たりし也。

このころよりして講談の風一變して漸く軍書よりもまた義理人情も說くやうに成りゆきて平民教育に裨益するに至れり。江戸兒の氣風は寄席の講談にて陶

せらるゝものといふも殆んど不可無きが如し。

明治十五年中、伊東燕尾が軍談師濫觴由來と題して其筋に提出したるものに據れば、鳥羽天皇御宇、保安年間洛陽一條堀川の邊に立ちて和漢戰記を講じ往來の人の足を留め、謝儀を受けし、吉岡鬼一法眼は、本朝軍書講談中興の開祖たり。後醍醐天皇のとき玄恵法印あり。慶長には後藤又兵衛基次、大阪天滿天神の境内に、自ら戰場に用ひし甲冑兵器を飾り、自ら臨みし、合戰の談を爲す。聞者群集して謝儀を報ふ。元祿年間、淺草見附傍に立ちて軍談を說きし淸左衛門は聽者山を爲して通行の妨となるより、町奉行能勢出雲守召見して、これを許可し、且つ名君賢將の事蹟を過路に說くは憚りあり、自今日除け、雨覆等を設け、且つ往來通行の妨と成らぬところにて可講旨達せらる。それより淺草見附內に日除地を拜借し、寄席を設置し、太平記講談場と號す。この席江戶最古の講談場として明治五六年迄存じたり。

(後略)

第七節　心學興起の原因は何んぞや。武士の敎育は漸次進み來れるが、平民敎

化の機關は依然として不完全なりしかば、この缺陷を補充すべき必要は、日に迫り來れるに神儒佛三教徒ともに無能にして、善くその任に當る能はざりしかば、茲に心學の一派起れり。心學道話は則ち平民道德經たる也。何時も現代をば、不滿足に感ずるものなれども、この時代の神儒佛徒の無能力は實に太甚しかりし也

平賀鳩溪、放屁論を著はして當代學者の意氣地無きことを罵倒す、(一七七四)その中にいふ。志道軒が腐儒を指して、屁ひり儒者と云ひ初めしも尤千萬の詞也。(中略)近年の下手糞ども學者は唐の反古に縛られ、詩文章を好む人は韓柳盛唐の鉋屑を拾ひ集めて柱と心得、歌人は居ながら飯粒が足の裏にひばりつき、醫者は古法家、後世家と陰辨慶の論はすれども、治する病も療し得ず、流行風の皆殺し、俳諧の宗匠顏は芭蕉其角が涎を舐ぶり、茶人の人柄、風流めくも利休宗旦が糞をねぶる。その餘諸藝皆衰へ、己が工夫才覺なければ古人のしふるしたことさへも古人の足もとさへも届がざるは、心を用ひざるが故也。根南志草に曰く、諸藝おしなべて昔の人に衰れるは、近世の人心懦弱にして、小利口にして大馬鹿なる故なり。昔の役者は、師に隨つて隨分其業を傳へ、晝夜心を

用ひたる故、名を揚げしもの多し。　近年の役者は、師匠と云ふも名字を貰ふ計りにて、山上参りの權大僧都の官に登る棒に心得て、氣と給金計りが高く成て修行すべき藝は覺えずと。

鳩溪は、又た進んで學者の迂腐極まることを冷罵していふ。　その外、俗の藝といふは皆小兒の戯也。　只人の學ぶべきは學問と詩歌と書畫の外に出でず。　是さへ教あしきときは迂儒學究とて上下を著て井戸をさらへ、火打箱で甘諸を燒き、唐の反古に縛ばられて、我が身で我自由にならぬ具足の蟲に見る如く、四角八面に喰しばつても無い智直は出ざれば、却て世間並の者にも當れり。　是を名付けて腐儒と云ひ、又た屁びり儒者ともいふ、されば味噌のみそくさきと、學者の學者臭きは、さん〳〵のものなりとて、又たこれを見破りたる先生達ち、宋儒の頭巾氣と唱へ出せし卓見も角を直さんとて牛を殺し、その末流の木の葉儒者には猪牙に乘りてひちりきを吹き、三絃に唐音を乘せ、太だしきに至りては、天下を運らす掌の內にお花とやらをめぐらする言語同斷の學者も有るよし。　是皆な中庸を知らざると、鼻毛を抜かざるより起りたるたわけ也、唐は

唐、日本は日本、昔は昔、今は今也。三代といへとも禮樂は同じからず。立て拱するが禮なりとて、今ま貴人の前で立たれもせず。聖人の政なりとて、井田の法を行はゞ、百姓どもには安本丹の親玉にされんと　又天狗髑髏鑑定緣起にいふ。儒者は本田頭の通り者をとらへて堯舜の民たらしめんとし、貞女兩夫に見えずと、女郎屋の二階で講釋をするは蠮螉が螟蛉をとらへて我に似よといふが如し、云々。學者の迂腐にして意氣地無きは罵倒し得て尤も妙なり。鳩溪の文は餘り痛罵を逞しくすれども、世人が儒者の迂僻に堪へざりしや實に久しかりき。ことに宋儒は、その祖師よりして然る也。

太田錦城嘗つて、論じていふ、東坡ノ通脫ニテ當時故ラニ伊川ト爭ハレシハ沈明達ノ說アリ。曰ク程氏ノ學、自ラ佳處アリ。然レ𪜈椎魯不學ノ人ノ跡ヲ茲ニ竄シ、僞テ有德者ト稱スル、其實土木偶ニシテ一時ノ名ヲ盜ムナリ。東坡斬侮シテ假借無キ、人或ハ之ヲ過ム。不ㇾ知、東坡ノ意ハ其揚墨タルヲ懼ルヽナリ。天下ノ人ヲ率ヰテ矯虔庸隨ノ習ヲナス。コレヲ闢イテ力メザル恐ル、豈過也哉。哲宗ノ揚ヲ折シヲ伊川諫メテ云々。帝色不平ニシテ擲棄し玉

フ。温公コレヲ聞キテ樂シマズ。門人ニ謂フ、人主ヲシテ儒生ヲ親近スルヲ好マザラシムルハ正ニ此等ノ人ノ爲メナリ。此事劉元城ノ語ル、然レバ當時東坡ノ與セザルノミニアラズ溫公ト雖モ亦與ミセズ。(以上愚簡)又タ一則ヲアグ。司馬公ノ薨ゼラルヽ時ニ程頤臆說ヲ以テ歛ス。封角ノ狀ノ如シ。東坡其怪妄ヲ嫉ミ、因テ怒リ詆テ云フ、此豈信物一角、附上閻羅大王者邪ト。人又タ此言ヲ東坡ノ戲謔トスレモ、妖亂志ニ載スル吳堯卿ノ事ニ已ニ此語アリ。東坡コレヲ以テ、伊川ノ陋ニ比セシナリ。東坡ノ每ニ程氏ニ假借セザルハ、誠ニ其迂僻ニ堪ヘザル也。(同上)東坡此時ノ言ニ鏖糟皮裏ノ叔孫通トテ伊川ヲ誚テヨリ洛蜀ノ爭トナリ、朱子ノ東坡ヲ惡マルヽコト仇讐ノ如シ云々。兩程氏は有德の君子なるも、其迂僻は極まる。天子の折柳を切諫する如き態度にては人物敎育の任に當る可らざるや、更に言を要せざる也。この種の人物、宋學者に多し。跡を恭默にかくして、有德の君子の如く然り。而して事に當りて迂僻、人をして堪ふる能はざらしむ。所謂村學究これなり。然れども自ら村學究たらんことを愧ぢて半可通を學ぶ輩に至りては下劣さらに見る可らざ

る也。當時學風沈滯、學者の無能此の如きに至りては、日に必要を感じつゝある平民教化の大任に當るべきものは果して何人ぞや。心學者茲に憤起せり。

心學は平民教化の必要の爲めに起れるを以て、その主張は直截簡明なり。自家心性を悟得して人道を行ふといふに過ぎず。されば心學は文字に由らず、力めて平易の俚語を用ひて神儒佛の三教を合一して、平民道德經を立てたるものなり。

心學の開祖石田梅巖は儒者を以て自ら許せしかども、世の所謂儒者と伍することを欲せず。或は之を目して朱學者とするものあれども、又決して然らず。彼は見性悟道を第一とし、神儒佛を含みて三者何れにも偏せず、專ら人道を行ふを以て目的とする者なり。

梅巖曾て儒の眞意を說きていはく、世間の儒者は書を誦するのみにて、眞の儒者とは謂ふ可らず。性を知りて身を謹はすを儒者といふ。假令牛に汗し棟に充つるほどの書を讀むとも、性理に暗き者は、朱子の所謂、記誦詞章の俗儒にして眞儒にあらず。汝も何方にて儒を聞かるゝとも、その目利をせらるべし。目利せざれば學問に依て家業粗末になり、不孝の元を習ふて身の害をな

すべし。心を求め得て教ゆるは眞儒なり云々。

梅巖又曰く、問ふ書物を讀む外に學問といふことありや。答、如何にも書物を讀むことにて候。然れども書物を讀みて書の心を知らざれば、學問とは言はず。聖人の書は自ら心を含め玉ふ。その心を知るを學問といふ。然るに又文字計りを知るは、一藝なる故に文字藝者といふ。問ふ、書を讀むは同しくして汝今分けて二とするは、其證ありや。答孔子、子貢に謂つて曰く、汝は器なりと子貢の學は記聽多くして記すると多けれども、未だ德に至らず。志あれども仁に至らざる中は器也と宣ふ。器とは一品の役を爲し、萬事に通ぜざることなり。子貢は志ある故に、終には性と天道とを聞きて君子の德に至り玉へり。汝の云へる學者は親には不孝を爲し、他人には僞を言ふ、これ皆な不仁のこと也。文學ばかりにて、一藝なる故に、文字藝者といふ也。德とは心に得て身に行ふを言ふ。我心を得れば、父母には孝行を爲し、他人には僞を言はず。詐りを言はざれば出入等に不埒はなさず。返す覺無きものは借らず、飢へて死すとも不義のものを受けず。己が欲せざるところを人に施さず。我が

才能を以て人に誇らず。他人の善事を身にうつし、人の悪事を見ては我にも此悪事あらんかと恐れ、己を顧み、仁義の志ありて、止まざるを聖人の學問といふ。（中畧）顔回の心は鏡の物を照らすが如し。右の怒を左にうつさず、前に過つことを後へに復さずと。是の如く心に得て身に行ふを德に至るといふ。故に文學に長じたる子夏、子游を學を好むとは宣はず。詩書六藝七十子、習ふて通ぜざるにあらず。通ずれども文學は用也德とはいはず。汝の云へる學者は、年久しく文字を教へても、書の心を得ざる故に、不孝にして世の交り悪しく不義の教多し。然れども文字さへ廣めば德ありと思ひて世間に取違へるところあり、誤まる可らず云々と。見よ梅巖は眞儒を以て自ら任じ、聖人の道を發揮せんことを以て自ら期せしことを。

心學は陽明學を基礎としこれに禪家悟道の理を加味し、神道の報本反始の教に參して、一箇特有の平民道德經を立てたるものなり。されば其の教義たる文字に由らず言行の指導によりて感得して見性悟道せしめむことを求むるにあり。平民教化の必要に應じて起りしを以て、直截簡明尤も實際に適切なるを貴ぶ。抑も

心學の言たるや周孔の道も心を求むるにあるを以てまたこれ心學に外ならざれども、王陽明に至りて始めて心學の目起り其教育の方見性を第一とし、致知格物を重んぜず。陽明の學傳へて吾邦に入りて、獨特の發達を爲せしは、則ち中江藤樹に依る。藤樹先生は則ち近江聖人也。先生の著に翁問答あり。心學の要を說きて廣く何人にも了解され易からむことを主とせり。王陽明が心學の說明は陽明文集の謹齋說の中に詳か也。君子之學、心學也、心、性也。性、天也。聖人之心、純乎天理、故無俟於學。下是則心有不存、而汨其性、喪其天矣。故必學以存是心。學以存其心者、何求哉。求諸其心而已矣。求諸其心、何爲哉。謹守其心而已矣。博學也、審問也、愼思也、明辯也、篤行也、皆謹守其心之功也。謹守其心者、無聲之中、而常若聞焉。無形之中、而常若睹焉。故傾耳而聽之。惟恐其或繆也。注目而視之。惟恐其或逸也。是故至微而顯、至隱而見。善惡之萠而纖毫莫遁。由其能謹也。謹則存。存則明。明則其察之也精。其存之也一。昧焉而弗知、過焉而弗覺、弗之謹也已。故謹守其心、於其善之萠焉、若食之充飽也、若抱赤子而履春氷、惟恐其或陷也、若捧萬金之璧、而臨千仭之崖、惟恐其或墜也。其不善之萠焉、若鴆毒之投於羹也、若虎蛇橫集、而思所以避之

也、若盜賊之侵陵而思所以勝之也。古之君子所以凝至道而成盛德、未有不由於斯者雖堯舜文王之聖、然且兢々業々、而況於學者乎。後之言學者、舍心而外求。是以支離決裂、愈難而愈遠、吾甚悲焉と。所謂心學の要領は則ちこれなり

陽明文集。詠良知四首、示諸生。

箇々人心有仲尼、自將聞見苦遮迷。而今指與眞頭面、只是良知更莫疑。
問君何事日憧々、煩惱塲中錯用功。莫道聖門無口訣、良知兩字是參同。
人々自有定盤針、萬化根源總在心。却笑從前顚倒見、枝々葉々外頭尋。
無聲無臭獨知時、此是乾坤萬有基。拋却自家無盡藏、沿門持鉢效貧兒。

○示諸生三首錄一。

人々有路透長安、坦々平々一直看。盡道聖賢須有祕、飜嫌易簡却求難。
只從孝弟爲堯舜、莫把辭章學柳韓。不信自心原具足、請君隨事反身觀。

本邦近世の教育史を研究せん者は、必らず王陽明全書を參考することを忘る可らず。王學者及び心學者一派の思想の根源を知るべきのみにあらず、この書實に教育家必讀の書たるなり。

世事百談（翁問答）

吾邦にて始めて王陽明氏の學を唱へ、心法を專に敎へさとしけるは中江藤樹なり。（中略）その書（翁問答）に心學は凡夫より聖人に至る道なりとあり。假名書にはあれど、實に類無き心法傳受の書なりとも謂ふべし。今ま心學と云ふもの行はるれども、心法の學は早く藤樹に起れりと云ふべし。心學の書くさ〲多かる中に、この翁問答に及ぶもの無し。

自娛集五　心學辨

心爲身之主。昭厥德則爲萬事之本根。是以古來聖人之立敎也、無非心學。堯舜之所授受、人心道心之別、精一執中之則、乃敎心學之權輿也。然後歷代聖賢之所相傳、皆無不由此。孔門以仁立敎。仁也者、心之德也。求仁即是心學而已矣。到孟子亦曰、學問之道無他、求其放心而已矣。大凡聖賢千言萬語、無非求此心。而其所爲心者仁義而已矣。然自明人王守仁之學與、後人往々別立心學之說。把禪佛之意說孔孟之書。認心之精神知覺爲天理爲德性。是以心爲至善純粹而無惡。故師其心以爲致良知。無格物致知而欲致精微之學。縱其心以

爲循性、而無戒愼恐懼之功。錯認心之知覺爲天理、而不知有道心人心之別、天理人欲之分也。此以人心爲道心也、混雜之甚矣。雖自以爲聖學、然不知陷于異學雖名之爲心學、豈可與堯舜孔孟所傳之學同日而語乎。故程子曰、佛氏本乎心、儒者本乎天。蓋本乎心者、以弄心之精神爲主也。本乎天者、以循天命之性爲道也。嗚呼程子斯一言、剖折於儒佛之主本而無餘。可謂要言不煩也。

心學を論難する者は、その缺陷は人心道心の混同にありとなす　これ却て誤れる也　心學者は心性を見得するを目的とす。その心性の本然は則ち至善なりと説く。「人心」則ち心性なりといふにあらず。

陽明學派は藤樹の後ち熊澤蕃山、三重松菴、三宅石菴、三輪執齋皆京都に出づ　これは藤樹曾らく京都にて教授せしことあり、また江西學院に學びしものにして、京都に帷を下せしもありて、王學は京都を中心とするやうになれり。而して他日石田梅巖も亦京都に出でたる也。集義外書に、藤樹の學は……朱學にたより無きが爲めにふせぐ人多し。然りと云へども、天下の公地におゐて、藤樹の學を稱して數百人を集むる者あり。又た諸大名の國に行きて、藤樹の學流と號し、爭逆の事、出

來たるも二三所あり。然れども公義の寛洪、何の咎めも無し。唯だ貴老の學のみ、教學ともに窮すといへり。蕃山英雄の姿を以て、明君を輔けて新政を行ひ、王學者の巨擘にして窮厄にかゝれるは、この學派の爲め、に可惜ことなりき。心學は易簡を要とす。これ陽明の數々説明せるところ也。集義外書にいふ。易簡の善を行ふて、水土に叶ふ學者ありがたかるべし。朱學王學などゝて、世に爭ひ侍れども、皆な易簡の善には遠し。予たま〳〵大道をいはんとし行はんとすれば、莊老之道也、異端也などいひあらぬそしりまでもつけまし侍り。予は一人にして助け無しど。蕃山は晩年その志の行はれざるを遺憾とし、則ちこの書の著あり。彼は朱學、王學、心學者格法者なでゝて、自ら心學の名に拘はりて一派を設くるの偏見なるを説破して、心學と云ふは却て眞ならじといへり。その説、穩健にして心學者の立脚地を見るべきものあり。その要に曰く、儒の名は初めて周官に出でたりと雖も、後世の儒者と云者のごとき事にはあらず。周官にあるところの儒と云へども、上君子の重職にはあらず。郷里に於て道藝を教ふる者とあれば、小學に於て六藝を教ふるの師儒也。士君子といふは、今日本にて言はゞ武士の武道に達せる人の、生付仁愛無欲

なるあらん。此人に禮樂文章あらば、古之士君子たるべし。秦の代より天下亂世なること久し。士君子皆な武事のみに掛りて違無し。子孫は愈無學になりゆきて道を知らざれば師儒の民間にをちとまりて、其子孫にも教へ、まれに從ひ問者に教へしなり。されば古の事をかつ〴〵傳へたる者は、この小官の儒のみ也。鳥無き里の蝙蝠とやらんにて、此儒に聖賢の事を尋ね學んでより此かた聖人の道を儒道といへるなり　日本の武國も、世治て靜かなれば、武士も武道に疎くなりて、藝者に武道を指南せらるゝが如し。戰國のとき古鄕を離れ跡を失ひて、日本のわたり奉公人の樣なる者多くなりぬ。兵亂やむで後ち此わたり奉公人、日本の軍人のごとく成て、文學して遊說する者あり。官職祿位なければ、五等の人倫の外に居て、儒者と名乘て、道學を以て產業となせり。これ異端遊民の始めなり。これを見て道家の徒、爾來、佛氏の流渡り、相爭て道學を說て、世をわたる遊民多くなりぬ。異端は仙佛の徒のみにあらず　儒者其本也。博文の儒者は、一向に一役にへり下り、國用を達する者なれば、遊民にあらず、異端にあらず、小人の儒なれども、古の師儒の如し。心學者格法者、朱學、王學、陸學など名乘るものは、遊民也異端也。いかむとなれば、或

は文學につたなくて、吏儒の用をも達せず。文學あれども高慢にて、人に高ぶるを事とする者もあり。或は云ふ、儒者は道學を任として、何の役儀も無きものなりと。これ佛者の五倫を離れ、五等を出で、何の所作もなけれども、佛道をだに修行すれば、法力にて其日を送るといへるが如し。堯舜を學ばずして湯武孔孟の天地の大變にあひ給ひたる。其跡を常と心得そこなひたるか。湯武の後ち湯武の行をならふ者は皆な謀叛人なり。孔孟の行をあやまらん者は、皆な異端に入るべし。顏子閔子のつかへざりしは、貧なれども、日本の地主の如くにて家業あり。孔孟は大德にして、湼にすれども緇まざるの神人なり。小官をも辭せずして、人の家臣となり、文武を治めて國用にあづかり玉ひき。道學を說くを以て產業とし玉へること無し。然れども四方より來て、禮樂を學び門人といふ者多かりし。此風、堯舜の御代には無きことなり。司徒敎官ありしかども、門人ありしことを聞かず。此れ上より命じ玉へばなり。我と道を說きて世をわたるの理無し。此實、孔子には無きことなれども、外の似たるが故に後世のあやまりの端となりぬ。夫れ孔子は天吏なり。春秋を作爲して、天子の事をただに記し玉へり。古無き風なれども、時の變によ

つて行ひ玉へば、兎角といふべきやうなし。其本をしらで事を見て後生の者のあやまる事をなげく也。正心を離れて道學あるべきや。心學といふは却て眞ならじ。格法といふは脇より付たる名なるが。時、所、位の至善をしらでたゞに聖賢の德によるは、聖賢の能狂言をするが如し。また後儒を師とするは全きことにあらず。いづれをも助けとはすべき也。問。禮記に儒行あり。されば聖人の道を儒道といはむも害あるまじきや。答云。禮記には後人の附會あり。全く取る可らず。儒行の初に聖人の言と見たるは唯最初の三十六字也。それより下つかたの儒行は多くは後人のつけましたる也。魯の哀公孔子に向て、夫子のしめたる服は儒服かと問給へば、孔子對へて仰せられけるは、丘が若きとき魯になれり。逢掖の衣を着たり。長じて宋にをれり。章甫の冠を被りけり。丘これをきけり。君子の學は博し。その服は鄕に從ふ。丘は儒服を知らずと給へり。是を以て見れば孔子の儒者にあらざること明らか也。儒行の語もあしきにはあらず。たゞ聖人の語勢にあらざる也。今禮儀の風廢りたるものは武士なり。武士に學問する人多からば、善き人あまた出來べし。武士たる者、文武二道を治めて自ら取り行はでは、

道は床道具になる事なり。文武を身に有したる人を士君子とは言ふ也。大抵諸侯大夫士みな君子になるべき道理なり。文武の二つに分るゝといふことは世に道の無き故なりと。蕃山のこの議論は、心學者の識見を表白したるものにして、その人道を明かにするを以て自ら期し、所謂儒者と別つ所以を説明せるものなり。専ら道を講ずるを以て産業とすることある可らずと言へるは大に好し。

蕃山又た神儒佛の無能を説きていふ。學友云ふ僧たる者、千人が九百九十九人までは、身すぎこそ出家し侍れ。眞實道心の坊主は稀也。俗も次第にかしこく成て心からまどはさるゝものはすくなく成行く。近年は吉利支丹にかゝりて出家の身過ぎ澤山なれども、佛法にて吉利支丹の防ぎもならず。せんさくのたよりにもならざることおのづから知られ侍ればのちのちせん無きことに思ひて請人にも取侍らじ。さあらば本より人の信は無し。諸人貧には苦しめり。寺をたのむ者稀になり行き、たゆるに近かるべし。其内亂世にもなりなば、三十年の間には、十分一も殘り侍らじ。かさねて治世の時節には文學ひろく成て、人々の眼あき侍らば誰か佛者の言を信ぜん。ともし火消えなんとして火を増すごとく近年の繁昌

は亡んとての奢と存候。百年の後は儒道興起して天下太平なるべし。さもなくば吉利支丹の國となるべきか。いかさまにも佛徒は、たえなんと思ひ侍り（答云）道理は至極し侍りぬ。…………近頃日本の水土により、山澤草木人物の情と勢とを見侍れば易簡の善ならではあまねからず長久ならざる道理あり。佛法には不仁なるところありと雖も、易簡なるところありて、日本の水土に相應せり。この故に千餘年に至てかく行はるゝ也。近年は佛者の奢に、佛法のいのちなる易簡を失ひ侍れば、久しかるまじ。天より奢をそがれ、ずいびの如くならば、又々久しかるべし。云々。今の儒法は天下國家の政道となる可らざれば終に一流と成て吉利支丹の爲めに失はるべし。これによつて云へり。神代の遺德をあらはし、王代の法令をかんがへその人情時變をつまびらかにして化育を助るの大道有り云々と。蕃山は當時神儒佛徒の無能力を絕叫せり。而してその心學を以て化育を助け世難を救はんとはせるなり。

三輪執齋が說にいふ。（答酒井彈正書）此心獨り聖賢のみ然るにあらず。愚夫愚婦といへども皆な有之。唯その存すると失ふとに有のみ。故に孟子も君子は

これを存し庶民はこれを去ると宣へり。彼堯舜禹湯の聖もこれを失はんことを恐れて執中のいましめ有り、孔子の操則存、舍則亡との玉ひしも、その間斷あらんことをいましめ玉へる也。是のみならず世々の聖賢の學、皆是に出ること無し。然るに彼愚夫愚婦のこれを失へるといへども、同じく天より受得たる本心なれば、その心の光、終に消えずして事に觸れ、ものに從ひて、より〳〵顯れざること無し。(中略)人の此心あること書を讀みて得るところにもあらず。師に傳はりて然るにもあらず。人と生れぬるもの丶同じく傳はれるところ也。これを名付けて良知といふ。孟子曰、人の學びざるところにして、知るものは良知也。他なし、これを天下に達するのみと孔子の吾欲せざるところは、人に施すこと勿れと敎へ玉へる恕は、即ちこの良知を達するの法にして、仁を求むるの要道也。これを名づけて學問といふ。此趣を知らざる人は生質よきこと諸葛孔明、司馬溫公の類の如しといへ共、天下の書を讀みしこと、東坡、永叔の類の如しといへども皆なこれを無學の人といふ也と。此の如きは心學者が學問の說明にして梅巖の說くところも、この趣意に外ならざる也。

此の如く梅巖の心學といふは陽明學に由來すれども、彼れ神儒佛を包含しこれを折衷して卑近なる平民實踐敎となせるは則ち心學の特徴といふべきもの也。

梅巖は貞享二年九月十五日（一六八五）を以て丹波國桑田郡東縣村に生る。益軒の生に後るゝこと五十五年なり。父淨心極めて嚴正の人物にして梅巖を鍾愛して最もその敎育を愼みたり。彼十歳のとき、自家の所有なる山林に遊び、栗五六拾ひ歸りて父に見せけるに、父その栗の在りしところを問ふ。答へて他の山と我山との境に落ちてありしと云へは、我が山の栗樹は境に近きところにあらざれば、そは我山の栗實にてはなかるべし。假し我が山のものとするもかゝる疑はしきものは拾ふ可らず。早く奔りて元のところに置き來るべしと。梅巖則ち父の命の如くせり。彼が少時の家庭敎育は、これにて推知せらるべし。かくて梅巖は年廿三のとき京都に出で或老舗に奉公せしが、つねに心を道德の研究に用ひて、多年苦心の結果四十五歳のとき、京都車屋町通り御池に卜居し、始めて講席を開きて、門扉に左の札を掲げたり。

何月何日開講、錢入り不申候。無緣にても御望みの方々は御通り御聽き可被

成候。

ときに享保十四年(一七二九)にして、王陽明歿後恰も二百年なり。

梅巖これより獨得の心學を以て社會教化の任を負ひしが、始めの中は聽衆寥々たりき。梅巖これには屈せず二三少數の人を相手として道を講じ、小學より始めて論語に及び、後には徒然草より謠曲にも及びたり。時には聽者僅かに一人のこともありしが、彼は平然として講義を續けたり。遂には、その門下に、近江屋仝門、手島堵庵。ことに女流にして斯道を關東に廣めし慈音尼蒹葭を出すに至れり。

心學は神儒佛の極致を以てこれを合一せんと期するもの也。梅巖の説に曰く經論に因て見れば佛は覺なり。覺は一切衆生の迷解くる也とあり。迷解くれば本に歸る故に三界唯一心といひ、迷の解けたる躰を名付けて佛性といふ。佛性といふは天地人の躰也。至極の所は性を知る外に佛法あらんや。佛より二十八世達磨大師見性成佛と説けり。又た儒には道の大原は天に出づ。依て天の命これ性といふ。性に率ふは人の道也と説き玉ふ。性といふも天地人の躰なり。神儒佛ともに悟る心は一なり。何れの法にて得るとも皆我心を得る也云々。これ心

學者の期するところは、實踐敎たるが故に知心見性の極致に達し得れば、則ち、またその行迹を問はざるなり。されば文字を學びて學問といふ譯はあらず。しかも學問を不必要としたるにはあらず。行餘力あらば以て學問すべしといへるにてありき。されば梅巖の著眼は、意實踐の點にありて存す。嘗つて學問の要領を說きていはく。學問の道は第一に身を敬しみ、義を以て君を貴び仁愛を以て父母に仕へ信を以て友に交はり廣く人を愛し貧窮の人を憐れみ功あれども伐らず衣類諸道具等に至るまで約を守りて美麗をなさず、家業に疎からず、財寶は入るを計りて出すことを知り、法を守りて家を治む。學問の道大畧かくの如しと。陽明の說くところ亦此の如き也。

心學者は一定の職業を有し恒產ありて平民敎化の爲に道話をなすものなり。故に心學者の敎育は全く慈善的勞力にして道話によりて衣食するものにあらざりき。これ他の儒者流專ら道學を以て產とするものと分つ所以也。

梅巖の著述には都鄙問答、齊家論ありて、ことに問答一書は斯道の經典とす。心學に冠するに石門二字を以てするには梅巖の姓によれるなり。梅巖は延享元年

九月廿四日（一七四四）病歿す。享年六十歲。

第八節　心學は京阪地方に廣がり次ぎに江戶を中心として關東に普及せしが、主もに勢力ありしは關西地方なりき。

梅巖歿して高弟亝門（六角街の人、近江屋仁兵衞隱居也）續きて講說すと雖その徒なほ多からず、同門手島堵菴は有福の隱居なりしがば堅く束修を受けず自ら資を出して社中の講に應じ諸方に講說すること年ありて、その學遂に海內に廣布するに至り、平民敎化の効驗も亦著るしかりしき。

近世畸人傳四　手島堵菴

近年米價登揚の間、貧人に施を行ふもの、多く此門下に出ることは世の知るところ也。尙又一二を言はば或婢女鄕里に祖母一人有り、貧にして親族の養を受くる。知る者勸めてその身得るところの金を分ちて養を助けよといふに、婢不肖吾身親族の手を借らず。自衣食するは猶ほ祖母の幸也。その上に何の奉養をかいはんと、然るに何時の此よりかその仕ふる所の家婦に從ひて堵菴の講を聞しより先きの言を悔て屢ば祖母に物を贈り、孝の心を運びしとな

り。(中略)一とせ此翁、大和へ講に赴く。旅途の間、竹籃を舁出て強いて乘らしめ道を開傳ふる恩義の爲めにすといふ人あるに至る。去年歿せる時も、遠近四方葬におもむくもの千を以て算ふ、その居より黒谷に及て二十有餘丁斗道路の間行來これが爲めに狹く先だちて至り、後れて急ぎ終日人立こみしも近世僧俗の間、聞ことと稀なるところ也。

堵菴の著述に前訓、我杖、安樂問辨、朝倉新話等あり、その門下に松ばや松翁伊右衛門)尾張屋道順、中澤道二(糸や隱居、法華宗の僧といふ)あり。俗に松翁を顏回に比し道順を子貢に比し道二を子貢に比すといふ。

堵菴の講說するや、神儒佛極致の道理を平話にて、人の聞取やうに物語し又は假名にて平話に其敎を書きあらはしたる書もあり、只俗人を敎ふることを先としておのれを立てず。たとへばその旨を書きたる書を披露するとても何とぞこれを讀んで御考へ被下れよなどゝ無心いふやうに賴みて人にすゝめ講談するとても座料などいふこと一錢とらず、その座敷男女の席を分けて知不知人を招き、その弟子世話する者は袴を着て入來る人草履はき物まで丁寧に預り取扱ひて、さりとて

は御氣の毒なることなりよう御こしありしなどゝ此方より說をうるやうに設けかまへたれば人々喜び歸依して至るところ市を爲し感服せずといふこと無し。此道に無文の男なれどもよく心理の義を會して人に敎ふる故度々講談の席にのぞむも或は不孝を悛め或は放埒を悔ひなどして正道に歸する者多かりき。

その敎にて本心といふことを得たるもの數百人に及べりと傳ふ。此本心の旨を得る時に至て頭書といふものを、その人に與へ、今日よりは則ち石田先生の旨を得られしことなれば嘉左衞門が弟子にあらず石田先生の弟子ぞとて其人に敎へて鳥邊野に赴かしめ墓を拜せしむることゝせり。嘉左衞門歿して、その子、又嘉左衞門と稱して心學道話に從事せり。

元文三年(一七三八)梅巖その著、都鄙問答を出版するに當り、堵菴廿一歲にして校正者の列に入る。梅巖斯門の孟子を以て堵菴に期したりしが。果して能く斯道恢弘の任に當れり。堵菴嘗つて男子七歲より十五歲まで、女子は七歲より十一歲までの兒童を集めてこれに修身講話をなしたることあり。その口演を輯めたるもの則ち前訓なり。前訓の槪目をあげて、心學者の兒童敎育法を示すべし。

口教一、

一朝をひなり候はゞ手水を御つかひなされ候てまづ神様を御拜みなさるべし。

一、次に御佛壇に御むかひ御拜みなさるべし

一、三度の御飯をあがるとき、寐しなと御祖父様御祖母様とゝ様かゝ様へ、手を御つきなされ候て、おめし御あがり遊ばされ候へ御寢なり候へと御挨拶なさるべし。

一、いづかたへも御出のときは手を御つきなされ候て、とゝ様かゝ様へ御たづねなさるべく候

一、御ふたりの親御様の仰せられ候事は、何事にてもあいと速かに御返事なされ候てきげんよく仰せ付られ候通りになさるべく候。さやうになされ候へば御成人なされ候て後々御仕合よろしく候。親ご様の御心に御そむきなされ候方は後々御不仕合にて難儀をなされ候。

右の事どもよく〱御覺えなさるべく候。

口教二、

一何にかぎらず僞を言ふたり、したりはなされぬものにて候。

一、總躰遊び事にもあしき事はなされぬものにて候。そのあしき遊びごとのあらかたその品を言はゞ(下畧)

一、殺生をする事は甚だあしきことにて候。

一、惣じて人のつゝしみて申さぬ不禮なる大口をかたく申さぬものにて候。

一、男女のかわりは大事のもので候間、幼少のときより男の子たちと女の子たちとは一所に御遊びなされぬものと申事、よく〳〵御きゝわけなさるべく候。

右之通り能く御熟讀なされ御のみ込御覺え御勉めなさるべく候。

・口教三、

一、惣躰あしき所へ立よらず。惡しき人に御交りなされまじく候。

一、人のかたわなるを見て笑はぬものにて候。並に外より人の來りたるとき、又歸るときなど片かげにて笑はぬものにて候。

一、女衆にても小童衆にてもすべて御つかひなされ候人をむごくし、別して打叩きなどは、堅くなされぬものにて候。

一、衣服食物に好事を申さぬものにて候。

一、外にて物をもらはゞ先づ持ち歸りて父樣母樣に御あけなさるべく候。又人に何にても物をかすにも借るにも、やるにも、もらふにも皆其度々に御兩親へ御たづねなされ御ゆるしを受けて取遣りなさるべく候。

右之通り能々御熟讀なされ御のみ込、御覺え御勉め可被成候。

口敎四、

一每月一度灸をすゆることと、これ御孝行のためと御心得なさるべく候。

一食物飮物にて腹をそこなはぬやうにし、又惣躰身を怪我せぬやうに御用心なさるべく候。

一善惡とも報の來るはのかれぬ事を御辨へなさるべく候。

一此座も大勢の御子達なれば、定めて御兩親ともなき御子達もあるべし。それは必らず御兩親の御代りになる御人あるものなり。御かはりに御立てなされ候御方を御兩親と思召候て大切に御つかへなさるべく候。

一何にかぎらず心に是はあしきとおもふ氣のつきたる事は、かたくいはず、なされぬものにて候

堵菴の前訓といふは、右の項目につき、敷衍して丁寧に平易に講演したるもの也。

前訓を讀みて感化されし兒童のうちに、河內國國分村芝十平といへる者の子龜助といへるは、八歲のとき所懷を書して曰く、

人と生れ來るはむやこう〱の爲め也。孝行にすれば天から福を下さる也。不孝にすれば神佛のばちあたる也。孝行にせねば犬猫も同じことなり。

堵菴の感化亦大なりと謂ふべし。

子者いましめ五首、

一、御主樣の仰せあることよくきゝてへんじようして口ごたへすな。

一、使にはじやうだんをせず早う行きてはよう歸りて用をわすれな。

一、よその子をせぶらかすなよ我はまたせぶらかされてしかへしをすな。

一、何事もうそをばつかず無理をせず人と中ようせねばならぬぞ。

一、大口をいわず女子にざれあわず男女の行義覺えよ。

右

安永庚子季夏何某の子者にあたふ。　堵菴書、

五用心（堵菴）

水　海川で乗り急ぎすな。ながい雨に山と沖との鳴るは大事よ、

火　よく聞けよ釜ほどなるたばこの火、心ゆるせばはやがれの聲、

心　意必固我もとなき者をこしらへて凡夫頭巾を冠るかなしさ、

身　手あやまちしやすき物は色と銀、身用心せよこれぞこわもの、

業　もろ〳〵の病のおこるそのもとは家業不精でおごり不和合、

中澤道二

道二は石門中興の人にして、道話の巧妙なる前後比なし。京都上京新町一條通りの人、享保十年八月十五日（一七二五）生る。名は義道、通稱は龜屋久兵衛。父もと織職なりしかば、道二も家業に從事せしが、少時より宗教道德等の事に心を寄すること深く、ことにその家は日蓮宗なりしかば彼いつしか題目を唱へ出し、その玄義を知らんと欲して苦心せり。四十一歳のとき、一天四海皆歸妙法なりと悟り、これ

より心學を講ずるに至れり。安永八年(一七七九)道二五十五歳にして堵菴の門に入り師の命を受け東下して斯道を廣めんとす。これより先き東都にては慈音尼蒹葭來りて傳道せしかども、尙ほ微々たる有様なりしが、道二の東下するに及び、その精錬圓熟せる道話は滿都の歡迎をうけて寛政三年(一七九一)外神田相生町に參前舍を建て、心學の道場とし、毎月會日を設けて道話をなせり。ときに年六十七。ときに京都にては堵菴沒せしかば、道二歸りて時々道話を爲し、延きて攝津南紀より西丹播但に至り、或は東海北陸にも布敎し、京阪地方に數ヶ所の學舍を設け、結社、組織を以て、諸方布敎の門人を輩出するに至れり。心學道場の本山は、上方にては、京都の五樂舍にして、堵菴これを開く。關東にては江戸參前舍にして、道二これを開けり。ともに現存して、斯道の聖壇とす。

現今心學所參前舍毎月の定講は第一の金曜日より三日間なり。その外に梅巖堵菴道二三氏の祭典あり。その行事を紹介すべし。

この心學は、人々へ備はりて居る道の御話で、どなたへも分るから、遠慮なく聞きにおいでなされ。その日取は毎月第一の金曜日より三日間、午後一時より

始まる。そして三先生のお祭は午前十時より始まる。此日は赤飯を出します。平日はお菓子を出します。それから席料も下足賃も入らず。只だ大勢へ聞かしたいのであります。

道話並にお祭の日取り。

一月、八日、讀初　福引

八月、九月、暑中休

元祖石田梅巖先生の祭典　九月廿四日.

二代目手島堵菴先生の祭典　二月九日

三代目東京の中澤道二先生の祭典　六月十一日

東京市下谷區二長町五十二番地第二號

心學所　參前舍

道二は七十九歳にして江戸參前舍に歿するに至るまで恰も二十年間、心學者の山斗として仰がれ、平民教化の任に當りて効果また著るしきものありき。その子道輔亦道話に巧みなりき。名家傳略に道二を評して、奇才卓越の人とし、また石門

に於て雄俊成功の人となせるは宜なり。實に彼は三教の淵源をやはらげ說き、狂言綺語をもて縱横自在に演說流るゝ如しと傳へられ、その筆册に存するものを見るに、圓轉滑脱巧みに人頤を解くものあり。蓋し三百年間稀に見るところの智辯にして又是れ演壇の英雄といふべし。

道二世俗の頽廢を論じていはく、人多き人の中にも人ぞ無き、人になれ人、人となせ人」。君子の大道は行く人が少い。兎角がけ道や堀の方へは行く人が多い。その筈じや、賑やか連れが多い。その又がけ道には種々樣々のものが並べ立てゝある。先づ一番に鍋燒、貝やき、すつぽん汁、うまいもの計りじや。其上美しい、とふろう髮の藝子やら舞子やら太皷持やら役者やらびん〳〵ぐわん〳〵どん〳〵と賑かにして呑めや謠へや一寸先きは暗の夜、わい〳〵のわいとさ。一向やくたい一寸先きどころじやない、丸で闇じや。ソコデ不忠不孝身投げ心中首くゝりと段々直打の高いがけ道へころり〳〵と落ちて行く。知れた事じやけれど、皆このがけ道を好もしがる　皆ホン〳〵から起る。其ホン〳〵の本は見ると聞くとの二つから。故に君子は其見ざるところを戒しめ愼しみ聞かざるところをおぢ恐る

後略）。

石門の人文學を言はず。門生眼一丁字無くして常に俗講して大に行るゝにあり。馬場文耕の如き心學表裏咄の題をかゝげて、これを嘲けるに至る。されば文學の人は甚だ心學者を卑しみたれども、彼等もとより學者を教ふといふにあらず。市井の人、道を知らず自性を識ちざるを導くとなれば風教に益あること少小ならざる也。尚況んやその講演の直截明瞭なる儒家者流の容易に企及す可らざるものあるに於てをや。人は形式に拘泥せざるを貴ぶ。たとへ儒者の講義高尚なりとも徒らに高尚なるのみにて有効ならずば何かせんや。寧ろ心學者の易簡にして趣味に富み、人をして中心より悦服せしむるに若かざる也。近ごろ監獄囚徒の教誨に就き加藤弘之博士は說をなして、心學こそ好きものなれと論ぜしことありき。余は此意見に同感を表するのみならず、學校に於ける講義も、つねに邦語上乘の講演たる心學道話などを參考して、その趣味のあるところを參取することを必要と信ずるなり。

試みに道二が知心を說明せるを聞け。三世とは如何。手を一ッ打つ。其內に

あり。見得するや看よ〳〵。三世とは此骸に對しての名なり。心に三世はない。故に不可得也。不可得とは思案分別で合點することはならぬといふことじや。けれどもこれを小割して見れば、眼前にも今といふものがある故に、三世といふ名が出來たものじや。手を打たぬ先きは未來、手を打たところは現世、打たあとは音がすぎ去つた故過去といふ。三世ともにどこにあるぞ。過去も未來も唯だ今ばかり。此今を會得するを本心を知るといふ。此今の外に何が有るぞ。あすの事昨日の事に渡らずとたゞ今橋を渡れ世の人」。彼れ又た心の本體を說明していはく寢る間のみ人にかわらぬ思出を浮世にかへす曉の鐘」。寢たとき何が有るぞ。釋迦も孔子もない、玉殿金樓もない、金銀財寶も宮も藁屋も穢多も乞食もくう〳〵は同じ事じや。寢た姿を外から見ればある。或は親子とも寢て居る。母親もあり乳呑子もあり。外からは見ても、寢て居るものは何も知らぬ。物の見事に消えて居る。少しも己れが〳〵は無い。天地同根同性まるで我無し。虛空同體此時始而知衆生本來成佛なることを。能う考へて御覽じませ。これ尊きお姿じやぞへ。扨て目が明くと浮世にかへす曉の鐘」かねがごんと鳴ると直ぐに今日の上が道

じや。雀は雀の道、烏は烏の道。ちう／＼かあ／＼柿の木に柿が出來栗の木に栗が出來る。此外に道は無いぞ。神道といふも佛道といふも儒道といふもこの事じや云々。

道二が女子敎育を說くに當りて、さらに平易適切にして、圓轉滑脫の妙を極む。曰、女中方何ぼう器量がよふても衣裳が能くても兎角大事は心のことじや。これを譬へて御噺し申ませう。結構な蒔繪の重箱に綾綸子のふくさをかけて、その帛紗に種々樣々の珍らしい模樣、縫やら箔やら色どりて見るほどの人が目を驚かし、これ見やしやれこのやうな見事なふくさ、このやうな結構な重箱、內は何であるぞ。虎屋の巾頓が小倉であるとあけて見れば馬の糞ヱゝきたな、惣々が胸が惡くなつた。何ぼ帛紗や重箱が能うても馬の糞じやいかぬぞへ。また木綿の洗濯風呂敷に重箱の緣もかけてある　扨てもきたない、中は何であるぞハテよしに、なされ、むさくろしい、併し何やら甘そうな一ッおあがりなされませコリヤきやうとい、変へも御くれと惣々が味ふて見てコリヤたまらぬと重箱のきたない事も木綿の風呂敷も打ち忘れても一ッおくれじや、何と能うしたものじや　兎かく中の代ろもの

しだいじや。上の町のおげんさま器量はよし風俗はよし、つまは、つれの尋常なこと、どこに一ッ言ぶんなし。衣裳もたんとあるげな。それはきやうといものじやあのような子を嫁に貰ふは大きな仕合せじやと評判まち〳〵じやが、うす〳〵きけば、どうでも親御樣方に、ちと不返事なそふな。それにお氣の短いやら折々ぶりぶりが出るを母御樣の機嫌を取つて御座るといふことじや。どうでも仕事はあまり御すきじやなさそうな。その代りに芝居は御すきかして、笄に役者の紋を附けて御座るげな。イヤモウそのような馬の糞はマア止めにいたしませうと、とんと相談が出來ぬ。又横町のお品さま少々ふとり肉、脊はひくいけれど色が黑い、形もこうとにして御座るけれど、親御樣方への事へがよいといふことじや。内外の衆や出入衆の噺しに能うお氣が付くといふ噂じや。それはきやうといものじやいつそその御子に極めませふとチャンと相談がきまる。これで能う御得心なさりませ云々。彼は女德を說明して、女に三從の道、親大事、舅姑大事。夫死しては子に從ひ、家相續の道、一家親類中能うして子孫繁昌するのを千秋萬歲の千箱の玉を奉るといふ。この外に女の道は無い。この玉を奉りもせずにおゐて、びろどの帶

や、どうろう髪に孝行して居る　それ故はゝさまがいきり、だすのじや(中略)まづ女中方は人立の多い所へは立ちよらぬやう御遠慮をなさりませ。　これが、親大事夫大事家大事を忘れて知りもせぬ他人へ義理をはるゆへ知りもせぬところから笑ひものにするのじや。(中略)また女は何時までも嫁入して來たときの心で居れば善い。　聟さまのお氣に入て耳引いたり聰いらふたりして下さるは扨々難有いことじやと、喜んで相生の始めの心で居ればよいけれども馴染が重さなるに隨ふて、サアしてやつたと碇をおろすじや。　それからッペコベ〳〵と夫をつきのけるその上子供でも出來ると猶ッペコベ〳〵さし出る、終には伊弉伊諾のあたまの上へあがる。　これが祖母が山へ柴苅にゆきて、祖父が川へ洗濯にゆく大間違が出來て御家混亂、家内くらやみ、日月顚倒してこの世は常暗となり、らつち國體。　これじやによつて相生の始めの心かはらずば、親しみ安いものじやによつて、夫婦に別の禮が教へてある云々。　こんどはそろ〳〵婆樣の方から嫁御の機嫌取つて御座る。　これ此方も此寒いのにちやと仕廻ふて早ふ炬燵へ當らしやれいの。　嫁はハイ〳〵私は何にも寒いことは御座りませぬ。　おまへさまが寒い時分に御ひへ

なされたら御持病が發りませう。婆さまがイヤ〳〵わしは此間から大分心もちが能ふ御座る案じて下さるなと嫁姑のむつまじさ、さやうといものじや。それからしわん坊の婆樣が自身の入れものにたぐり込んで置いたものを取出しては嫁にやつたり喰はしたり正直なものじや。嫁は何を言ふてもハイ〳〵私は若い體のこと、おまへさま御不自由のないやうになされて下さりませ。イヤイヤそうじや御座らぬ。年嵩のものたくわへて何にしやうぞいのと婆樣段々心持ちが面白ふ成て來ると乘りがきて、簞笥の引出しからも色々のものを取出し、これこなたの下着がきつう損じてある。これをマアきやしやれとおしげも無く、ずつか〳〵。婆さま急に大氣にならしやた、能うしたものじや。心持さへ嬉しうなると何にも慾はない、皆な心のことじやぞへ。心さへ足納(タンノウ)すれば直ぐに極樂云々。儒家者流かくの如き平易痛快なる講演をなし得し者、細井平洲、岡島冠山の外、また比敵すべきものなかるべし。

第九節　堵菴京都の五樂舍にありて斯道の木鐸となり、門人をして諸方に布教せしむ。布教心得ともいふべきものあり。またこれ心學者の態度を見るによき

ものなり。

諸方へ道話に御出ての朋友中御心得の大體（摘要）

一、仁言不如仁聲之入人深。　孟子盡心上ノ九丁。

右の御詞を以て思ひ見るべし。何程善言をよく口上に述るとも、人の行跡實に能かなひしに感ずるには大きに劣ると宣ひしなり。然ればお互に眞實に心德に耻かしからぬやうに身を勤むべき事、誠の志なるべし。

一、爲國以禮、其言不讓、是故哂之。同先進十九丁。

右の御語を以て考へ見るべし。禮は讓るを實躰とす。その實躰不仁にてはあらはれず。不仁とは私ある也。私意なきとき天地分明也。天は天、地は地、人は人、松は松、柳は柳、水は水、おの〳〵他をねがはざるは他にゆづりて己が分限に安んずる、これ辭讓の實躰なり。されば朋友の間たりとも隨分々々人樣の御世話もし、世話にもならねばならぬゆへ、別してこの心得甚だ入用也。總じてお互にかりものは何に限らず少しも間違なく返濟の算用嚴密に致すべきこと肝要なり。

一、會敷きはめの通り、いづかたにても

四書。小學。近思錄。都鄙問答。齊家論。

右の四書を先表としておよみ可被成候。この外、著述類の書は手前にて內吟味致し候ものゝ外は御相談なく御讀み御無用にて候。諸人に御話も、右の書物の趣にたよりて御物語然るべく候。先は御不吟味成る御話は御無用、たとひ志は宜敷候ても心得あしく候へば思はず妄談に成ものにて候。

右之外著述類の書物は、此方にて吟味いたし置候。その餘の書物は、明倫舍へ御持參被成、御友と御相談の上、くるしかるまじく御申被成候はゞ、御よみ被成候。若御舊友にて相すみ不申候書物は、この方に御尋ね可被下候。この方にて得と吟味の上にて御返答申すべく候。

一、田舍ゑ道話に御出の御方は堵菴方へ御斷御屆け被仰聞。帳面に御付被成候て御出で可被成候。勿論初めて御出の方へは手寄より御添狀付可申事。勿論琢磨札御失念なく御持參なさるべく候。この札御互の證據に成候。

一、田舍には御覺有る方よりの添狀、持參なく候人は、この方の朋友にては無く

候段申遣はし置候、たとひ添狀有之人にても添簡札持參候やう尋候て其印形御吟味被成候上にて、御引請被成候やうに申遣はし置候事。

右此度御願申上候道話心得の大體、田舍御會敷中へも申通じ候得ども、別て右の一ヶ條の趣、書通にて相達置候得共、猶また行屆かざる方々可有之候間、御手寄の田舍には右の段兼ねて御申入れ置可被下候。

一、別而分て申遣はしおくべきことは此方社中は何にてもかり物禮物等受申す事、申合せかたく不致候事。

一、心學初入の道話は、是は常の話には致さぬことにて候。心學に志厚き望の人計り別に御寄せ候て格別に御物語可被成候。是れ秘し候と申すにては無く候。心學に志無き人承はり候ては、反つて爲めあしく候。その段御心得可被成候。

右之一通りは何れも樣諸方へ御出、心學御傳へ被下御志は、厚き思召人故、とてもの事に御志よく達候ようにと卒爾ながら野拙存念あらまし相認御頼申候。猶思召も有之候はゞ御遠慮なく被仰聞可被下候いよいよ此通り然るべく候

思召候はゞ御朋友中へ御手寄より御申達奉願上候。

天明元辛丑年四月(一七八一) 手島堵菴

心學者の布敎は恰も宗敎家の傳道するが如し。講演に衣食せず資を抛ち自ら進むで布敎す、まさに是れ中心一箇の活火あるなり。されば、その平民敎化に擧て有効なりしこと、儒者の講義の比にはあらざりし也。

石門にては梅巖、堵菴、道二を尊んで三先生とす。堵菴の後ち、布施松翁京都にての繼承者となり、懇切なる道話を以て遙かに奇才縱横の中澤道二と東西相對峙せり。この外、虚白齋、脇坂義堂あり。道二の參前舍に出でたるは、柴田鳩翁。五樂舍に學びて、後ちに參前舍に來れるは奧田賴杖にして、共に石門の大家なり。賴杖の門下に平野橘翁あり。橘翁のときは既に幕府の末造に際し、ひとり汲々として布敎に從事せしが翁の後ち斯門また名家無し。

心學道話に關する著述は頗る多し。諸大家皆な道話あれども、その外に有益なるものは圖會または繪草紙錦繪等なり。これ等は平民社會の耳目に慣るゝところに普及し、愚夫愚婦も、よくその意を會得して、勸善懲惡の効果ありしや知るべし。

なほ心學者は普通讀本をつくりて布教の栞となさんとの企畫ありて、諸名家種々の著述あるが中に、堵菴の新實語教は流石に著眼卓越せり。

新實語教。　百行廣畧實之於身。　萬善大本語之於口。

父之所貴者慈也。　子之所貴者孝也。　君之所貴者仁也。　臣之所貴者忠也。　事師長貴乎禮也。　交朋友貴乎信也。　見老者敬之。　見幼者愛之。　有德者年雖下於我我必尊之。　不肖者、年雖高於我、我必遠之。　愼勿談人之短。　切勿矜己之長。　讎將以義解之。　怨者以直報之。　人有小過含容而忍之。　兄之所貴者愛也。　弟之所貴者敬也。　夫之所貴者和也。　婦之所貴者柔也。　人有大過以理責之。　勿以善小而不爲。　勿以惡小而爲之。　人有惡則掩之。　人有善則揚之。　處公無私讐。　治家無私法。　勿損人而利己。　勿妬賢而嫉能。　勿逞怒以報橫逆。　勿非理以、害物命。　見不義之財勿取。　遇合義之事則從。　詩書不可不學。　禮義不可不知。　子孫不可不敎。　奴僕不可不恤。　守我之分者理也。　聽我之命者天也。　人能如是天必相之。　此乃日用常行之道。　若衣服之於身體。　若飮食之於口腹。　不可一日無也。　可不謹哉。

この外に堵菴の「親の恩」脇阪義堂の忍德教等あれども、その形式と命名と共に寺子屋に流行せる實語教に擬したる新實語教こそ尤も巧妙なりと云可けれ。右諸名家の外に手島蓋岳(堵菴父)及び幕末に於ける出雲屋和助小野幅翔齋、壽福軒眞鏡等ありて斯道弘布に盡力せり。そのほか無名の名士猶ほ多かるべし。

第十節 太平國恩俚譚は明和七年(一七七〇)江戸牛込の八十一才の加藤在止の出版にかゝる。自序中に、町に出で古反古を買求めたるうちより發見したる原稿にして、恐らくは憤世の士の述作なるべしといへり。書中當世を議すること多きを以て、此に假託するものなるべし。

この書、その躰裁よりするに、又その内容より見るに全く心學書なりと謂ふべく、心學書とすれば有數の傑作に推すべきものたり。この書殘念氣之助なる一壯年を取り來りて、處世立身の實踐教を人に授くるものなり。

殘念氣之助とは何故に名付くるぞといへば、江戸牛込の片邊りにて。夫婦かけ向ひにて店かり住居しが、何家業とも見えず。また思付きたる稼業十日と續かず。扨てその身、馬鹿かと思へば相應の働きあり。胴樂者かと思へば左

にもあらず。只平生述懐づくしにて、三年以来笑ひたる顔見たるもの無し。殘念々々といふが口癖なり。故に誰名付くるともこの異名を得たるなりといふ

殘念氣之助の父は、元祿の盛世に一攫萬金の巨利を博せし者なり。彼以爲へらく父の才吾に過ぎず。吾の才を以てして事業成る無きは、時運の不可なるなりと、これより何事を企つるにつけても現世に對する不滿の念を帶びて、一事の圓滿に遂行せられしもの無し。開卷に、氣之助なすこともなくて日を送りしかば遂に落魄して伊勢參宮を思立つことありて、品川に一宿せしとき、早や伊勢の太夫どもは、古より今の方、神樂座の數も著るしく增したるに、不如意の談をなせるを聞けることあり。

實にこの書の著者は憤世の士なるべし。伊勢大廟の尊嚴を說きて、國體の神聖なることを唱道せり。「忝なくも伊勢兩宮の御事は……神代質素の形勢を後代に殘し玉ひ、神國の古風を失玉はざる神業にして、凡人の能知るところにあらず。日光久能の社頭實に善盡し美盡すといへども、伊勢兩宮の如く、白

木造りに、茅のやね千木鰹木をあげ、鳥居の笠木に反りも無く柱眞直に額つり無く、貫のはしを出さず。その外神明造りの模やうは中々及ばせ玉ふまじ云々。今思ひ當りましたは私が子供の時、手習師匠が貞永の御成敗式目を手本に書きてたもりまして、神者依人之敬増威。人者依神之徳添運といふことをならひましたが、子供の時なれば、何の事とも氣も付きましなんだが、存じよらす今晩のお咄しで氣が付きました。

今代の太平は則ち堯舜の世なり。古今至治則ち一なることを説き明していふ。今は箱訴の人も無いと云ふでは御座らぬか。何と是れ、聖人の御政に替らぬといふに違ひはござるまい。扨て又むかし聖人政を行ひ玉へば、道不拾遺と書傳へたり。江戸市中に聊の品落ちて有とても、隱す者なく早速御奉行へさし出せば、直ちに芝口のぬり板に、その品をしるされて落し主へ返さるゝでは御座らぬか。又た孟子の王道を論ずるに、靈臺の詩を引きて、文王の故事をのべ、古之人與民偕樂。故能樂也といひ、齊王に告るに與百姓同樂則王矣といふ、皆な聖人のこと也。愚僧いつぞや江戸逗留の内、町人衆何れも麻上下にて、正月のやうにいそ／＼といさみ行

く。何事かと尋ぬれば今日は御城に御祝儀の御能が有りて拜見に上る也といふ。晩方になれば何れも能ききげんになりて饅頭御酒など銘々載き歸り家内へも戴かせもし雨天なれば銘々傘までもらひますとの咄しでござつた　何と民と樂を同じくするといふ聖王の代に違ひがござるか。又魯の哀公政を問はれしに孔子五經の目を列して告げ玉ふことと中庸また孔子家語にあり。朝聘以時、厚往而薄來所以懷諸侯也と。今の御代諸大名の參勤交代時を違へたまわず。獻上は輕くして拜領は重しと承はる。是れ聖人の時君に告げ玉ふに少しも違はず。その外小石川の養生所は古への施藥院悲田院の遺風也。……虞書の舜典に汝后稷播時百穀とあり。聖王仁政の根本なり。又た下々のいやしき文字も知らぬ者邊土の教へのとゞかざる所の者まで人の人たる道を知らせたく思召し六諭衍義大意をかなにやわらげ板行して諸國に流布すべきむね仰付られたは使契爲司徒敎以人倫といへる聖意に異ならず。そのころ武州淵江領島根村順安といふ醫者子供の手習などしたりしが御法度書を手本に書きて子供に習はせしに御鷹野のせつ順安が軒下に手習草紙のありしを御供の衆見付られ上覽に入れしかば甚だ上意に叶

ひ、御ほめ被遊、何方にても手習師匠などあるものなれば、その村里の役人共より寺にてもあれ醫者にてもあれ、手習の師などするものに申聞。手習子供に五人組帳をはじめ、おもだちたる法度條目の趣きをならわせしかるべしとの上意の趣きを御代官衆へ仰付けられ御觸流しもありし。これ皆な下への教の届かずして御仕置にあいながらもおのれが罪をも知らざる者あることを愁ひ玉ひて御心を盡されし御事なり。何と聖人の代の政に少しも違ひの無いといふこと合點がゆきましたか云々。この一條の談話は過去を羨望する崇古者流に頂門の一鍼を與へたるもの。有爲の青年にとりては、有益なる教訓といふべきのみならず、その噺は、當代政治の光輝ある半面を見るべきものたり。著者さらに進んで、儒者が徒らに堯舜の聖代をのみ稱賛するを批難していはく。その元のお咄しの樣なこと云はるゝ儒者衆が江戸にも田舍にもあるによりて、若い衆が所々聞ては是程結構なる聖人の代に少しも違ひの無い御時代を不足に思ふやうになりてさん〴〵のことでござると。痛快の文字といふべし。吾等は儒者等が徒らに附和雷同して堯舜をのみ随喜したるを、尤も怪訝に感ずるものなり。舜はその初め父及び弟より殺さ

れんとし、難を免かれて、娥皇女英を娶れり　此の如きの人此の如きの時代豈羨望するに足るものならんや。 堯舜は政壇の英雄なり。 その治、即ち大に稱すべきものありと雖も、後世の至治に若かざるや論なきなり。 この書、三百年間、儒冠の人の著作、漫りに堯舜を列擧して人をして迂僻の念を起さしめし輩の夢想だも及ばざるものといふべし。

元祿以後は教訓書の流行せるとき也。 太平國恩俚諺も、亦一の教訓書とも見るべきものなるが、この書中に當時教訓書流行の有樣をのべたり。

六諭衍義の大意を板行して諸國に流布すべき旨仰付けられたれば、少しも志有る者は我も〳〵と假名書の教訓書を著述し、書林もこれを刊行して賣弘むることに成りたり。 その品數多あるうちに何人の作にか下手談義と外題せる本は、能く人情を書きて、當時の姿を諷諫せり。 人木石にあらず、諷諫にはおて下賤の輩の法外の行跡はいつとなく直りしといふ人も有り。 これ皆な上の善を好み玉ふ餘澤難有きとならずや。…… 而れども今人の巾著を切り小盜をする如き、いやしき者に、聖賢の道を教へんとて、林家の御儒者衆晝夜手分

けをして四書五經の講釋し玉ふとも、急には道に入りがたかるべし。所を上に賢慮をめぐらされ、六諭衍義の假名ものを仰付られたるなるべし。かくまで御仁政の御ことなれども至て愚なるは、六諭衍義の假名を讀み辨へぬも有るぞかし。下手談義の最初に芝居の事あり。これ兼ねて愚僧がつねにいふこと也。今ま江戸中、貴賤男女の師となるものは芝居なり。つく〲見るに武家方にても若い侍衆は、澤村宗十郎や阪東彥三郎が風儀をいきうつしに似せらるゝもあり。女中は屋敷方町人共に瀨川菊之丞が身ぶりを學び談義僧は市川海老藏や松本幸四郎が聲色をつかひ、また髮結床洗湯の出合に忠臣の孝子の貞女のといふ聞取咄しも芝居より外に出處無し。かくの如くなれば下手談義に書きたる如く、芝居にて婬亂不禮の狂言をやめて孝悌忠信の模樣を面白く作りたらば、林家の御儒者衆の晝夜手分けをしてさとし玉ふよりぞの入ること速なるべしと。

同感を叫ばざるを得ず。

俗人の俗の道に叶はざるは、出家の僧行に違ひたるには大に劣れり、何となれば

僧は還俗してもすむべきも俗人は大は國天下を失ひ小は一身一家を亡ぼすといへるは大に好し。かくて殘念氣之助は到るところに、現世則ち淨土にして古今治の一なること、成功は一轍にして、眼をあぐれば黃金は足下に轉在せることを說き開かされ漸く徹底せるとき、一夢忽ち破れて身は依然として裏店にあり。頓悟せる彼は嬉々として機嫌よく妻に話しかけ、夫婦數年來の高笑ひに合壁を驚かしさて久しく淺草の年市にもゆかねばとて、嚢底を空しくして朝早く氣之助は出掛けたるが浮圖思ひ付きて速かに橙を買占めて思はぬ利益を得これより機嫌も直り元氣も附きて萬事調子よく進みトン／＼拍子に物事圖に當りて、父にもまさりたる成功を占め得て錦衣鄕に歸るといふ咄しにて、かの難澁なる理論をならべて、人をして欠伸を催さしむる底の讀みものに比すれば、絕好教訓書といふべし。

古を崇拜せず未來を夢想せず現世を樂みて活動する氣風を養成するはことに吾邦にありては必要のことに屬す。この目的に向つてこの書は傑作たるを失はざるなり。

第十一節　玆に心學者の教育說の要領を示すべし。

梅巖は人間の價値は敎育の可能にありとせり。その說に曰く、鳥獸にも劣れるが如き愚者も學べば至るなり。草木畜類はこの理あるべきや。また人といふは一列なれども人は仁なりと經傳にも見えたれば愚者を以て靈といふべきにはあらず。元來人は仁なるもの也それを不仁者と思へるは誤りなりと知るべきことにあらずや。また麟鳳龜龍といへども、聖賢に及ぶべきや。また愚者たりと雖も母を妻とし子を食として喰ふべきや。重きは重きに比べ輕きに比らべ見るべきことなり。

梅巖は修養の頂上たる聖人は何ぞに答へて、聖人は直ちに天なり天眞爛熳なりといへり。都鄙問答にいふ。汝聖人の場所は知るべきにあらずといふ。これ世智がしこすぎる故なり。世智を用ひずたゞありべかりにすらりと素直に見るべし。已に孟子も堯舜も人のみと宣ふ。人なるゆゑ今と同じく喜怒哀樂と悅び樂むの情なり。何も人にかはることとあるべき。孔子も伯の死を哀しむこと。顏淵の死を顏輅の哀まるゝことゝるかはことなしと宣ふ。聖人は情が正しきゆゑ親子親類の親みは互の身の血肉を分けて厚き筈なる故に、いよ〳〵厚し。依て哀し

むべきときは哀しむ。哀しむと抑ゆると二つ心は無し。衆人は抑ゆる心と哀しむ心と二ッが戰ふ故に哀しみの上にまた一つ苦しみを增す。…………聖人は直ちに天なれば百日旱してやけても百日の長雨にて水流して何の哀しみのあるべき。哀しみも樂しみも向ふものにあり。向ふものも天なり。天に寒暖冷暑ありて四時行はれ、萬物を生じ、また枯らすが如し。天地を合せたまふなり。己に依てあづかり玉ふことなし。

梅巖の人生觀は厭世主義にしてうき世則ち憂き世なりと解釋し隨つてその倫理說は克己主義なり。その說にいふ。都べて物に勝らんことを思ふ故、安樂もならず、すべて劣るなり。强きものには劣け時節來たらば死するなり。苦を厭ひ樂を樂を求むるは惡の至りなり。苦を厭ひなば生れずして然るべし。無分別に生れて分別を以て苦樂を自由にせんとは愚かなるべし。

凡そ人間の境界は一收一捨壞架をきて叢棘中を行くが如しと大惠禪師もいはれてこの世の中の人を見るに明くるより暮るゝまで種々無量のことに執りつきあけしひまなく一生を徒らに過ぐるもの許りにて、生涯苦しみ通しのも

の多しその中にはたま〳〵そこらに心付くものありと雖も我に遁れぬと出來て、心を苦しめ身をつからして離るゝとならざると實に壞架をきたとて敗れ綿の出て布子を着て枳棘のはへ茂げりたる中を通るやうなものにて、あちらへ引かゝり……偖てこの世の中のことをうき世といふは、憂き世の中といふ事なり。いかならん岩尾の中に住まばとてうきこと聞かぬ里はあらじな。然らばこの世に生れたる人間は、このうき苦勞は息のあるうちは、とても逃れられぬといふことを眞實に覺悟すべし。それ遁れられぬところを强て逃れんとする故にいよ〳〵苦しみに苦しみを重ね、もだへもがくこと道二先生の鳥もち桶にはまつて出でんとしてもがく故いよ〳〵出ることとなりぬといへる譬のやうなもの也。

問。三界無安、猶如火宅とありて、この世は火宅の住居と承はり候。如何してこの火宅を逃れ候や。

社中答。

よしありと思ふ心をふりすてゝ只何となく住めば住みよし

道二答。……その何となく住むといふことがどうも出來にくい。難いことじや古歌に

　浪の音、聞かじか爲めの山の奥。苦しみはかはる松風の音。

(中略)とても、このうたのある中はこの火宅をのがるゝことはならぬによりてなる程この世は火宅じやといふことを眞實に覺悟さへすれば少しは火宅をのがれやうかと、わしは思ふ。

こゝに於て梅巖說をなしていはく、人の世は憂き世なるが故に性を知りて樂しむの外無し

　梅巖曰く、樂しみとは安樂のことなり。安樂を求むるによりて苦しむなり。安樂を求めざれば、大安樂なり。

「樂といふものを求むる心だそ身を苦しむる敵とは知れ」

　人は何故に苦を生じ樂といふものを求むるやといふに心學者は答へていふ。我といふ身を建立する故也と。然らばこの身、自由自在にして、何一ッ不足なきありがたき身たるを知る上は、これを安樂と申すべきやといふに堵菴は、これを說明

していはく、それは未だ學者の地位なり。何一ッ不足無きありがたき身を知るは、何一ッ不足無きを、ありがたき身と知るから起りたる「知る」なれば何ぞ事ありて、これまでと違ひて心の如くならざることおこるときは、何一つ足りたることもなき不自由なる身と知るときもあるなれば、その安心極りたることゝは云ひがたし。誠の安樂といふは思案なしになりきりさへすれば、そのときは何一ッ不足とも思はばその地位に安心するを以てこれ安心とも安樂ともいふべし云々。

安樂とは如何に。梅巖はこれを說明して無我無心、天眞のまゝになれば即ちその境に達せるなりといふ。一言以てこれを蔽へば天則に合するにあり。人工を排除するにあるなり。その說にいはく。天地は無分別なり。その許も無分別にさへならるればそれが安心といふものなり。その許は無理に安心したがる故にさま〴〵の妄分別思案だらけにて苦しきなり。世界に住めば苦もあり憂きもありうちなり。古人云「心隨萬境轉、轉處實能幽。隨流認得性、無喜亦無憂」とこの偈、實に悟りし人の言なり。人の心は物々に向ふまゝに自由自在なるが靈明の德なり。それなりにて暮さば喜ぶべきことは喜び憂ふべきことは憂ひて居るまでなり。

憂喜にあづからぬゆゑなり。何として憂喜にうつされぬといふならば我なきゆゑなり。その許考へ見らるべし。毎日早朝起き出づるより、夜寢るまで間斷なく苦しく候や。大方うか〳〵して居らるゝときが多かるべし。そのときも天地を恨み詰めにする心ありや。そのうか〳〵のときの心で暮さば天地に不足いふ心は無かるべし。この說明により則ち梅巖の意は、知心見性は安樂の境界でこれによりて聖域に達すべしといふにあることを知るべし。

知心見性は自家工夫によりて到達すべし、これ心學者が文字無くして本心を知得せりと稱するものある所以也。梅巖の說にいふ。今日にては、未だ安樂に無しといひ苦しみ多しといふ人ならば急々に眼を開かるべし。また今日にては未だ賢人にならぬゆゑに、苦しむことあるならばそれは了簡違なり。修行して善に至るに苦勞するは、苦勞のやうなれども思ひはかりて見れば苦しきことで無し。安樂の道に入るに隙の入るといふものなり。いはゞ飢の來れるに、飯を焚くを待つが如し。やはり安樂になる根元なりき。

學問は知心見性の方に於て如何なる干係に立つやといふに、學問して心を知る

ものは、その花を望み見て足早に近よることを樂しむが如しと。以て教育の價値に對する心學者の說を知るべきなり。

第十二節 心學者が女子教育に盡したる功勞は莫大なり。何となれば、心學者は下層社會の教化をむねとしたるが故に、先づ婦人を收攬し、これを教化するの必要切なればなり。而れども、その教育說の內容は、敢へて益軒以外に一頭地を放出したるにあらず。依然として三從四德の道を講ずるに過ぎざれども、ことに茲に標出すべき所以は、その形式及方法、適切通俗にして教育上頗る有功なりしによりてなり。

心學者中にて先づ女子教育を唱導したるは梅巖の高弟にして道得問答の著者たる慈音尼蒹葭なり。彼女は家系繼承の必要よりして兒童教育に及ぼし女子教育のことに急務なる所以を講說せり。

次ぎには手島堵菴なり。堵菴の前訓の一半は則ち女子教育に關するもの也。その項目にいはく

一第一女は別といふことをよく御辨へなさるべく候。

一女は順にして父母舅姑夫などに從ひて、何事もわれときまゝに取計らひはせぬものにて候此事きつと御つゝしみなさるべく候。

一神佛の御供へものは疎かにせまじきこと也。その外何ごとも母さまの御助けをなし御苦勞の少なきやうに油斷なく御氣くばりが大事にて候。

一女は嫁して後は他念なく舅姑夫に事ふることこれまで父母に事へし如くすべし。二度我内へ戻るまじと御つゝしみなさるゝが何より大切の事に候。

堵菴は以上の項目に就きて說明し、女子の禮儀作法よりして女德までを教へたり而してこれを聽講せしものは、十二歲までの少女なりしは、當代女子稍長じては外出するを許さゞりしが、故に、かゝる奇觀を呈するに至れる也。

堵菴また司馬温公の婦人六德を和解して、婦人の讀みものとせり。その要に、

一柔順　柔順とは物やわらかにして、慈悲ふかく、父母に順ひ事ふまつりて、能くその力を盡すをいふなり。

二清潔　清潔とは、けがらはしきことを心に受け入れず。邪なることを思はず、貞節を堅く執り守るをいふ也。

三不妬　不妬とは夫に順ひて、そむきもとることなく、我身を正しくして、人を憐れみ、たとひ夫の愛するところの妾ありとも、夫をそねみねたまず恨み怒る心なきをいふなり。

四儉約　儉約とは我心をかたくひきしめ、少しも奢る心無く、衣服飲食よろづにきまゝなることをせぬといふ也。

五恭謹　恭謹とは容正しく心を用ゐること油斷無く、身を大切に執りまもるをいふなり。

六勤勞　勤勞とは人の婦となりては我身を夫にまかせて、少しも私の心なく。いかやうの苦勞なることも苦勞と思はず力を盡し勤むるをいふなり。

堵菴は、また其著、前の枝のうちに、夫婦の道を示していふ、夫婦は則ち二身にして一躰なり。男は面より下前通りの如し。女はもとゞりより下、脊通りの如し。されば男一人にても女一人にても獨身なるは一身全からぬが如し。然れば夫婦少しも不和合なるは中風症と同じものにて、終に身を持つことならぬものなり。この和合とゝのはざるは如何なれば脊となる女が表なる目口の指圖にそむき不順

なる故なりと知るべし。さればこの理を能く辨へ、女は柔和にして貞しく、夫を神とも佛とも一筋に頼みて身を打任かすべし。かくの如くにして他念なければ、則ち父母への孝行もそのうちにこもると常に言ひ聞かすべし云々。好譬喩益軒の道破せざりしところなり。

すべて心學道話は日常眼前の事物につきて譬喩をもうけて巧みに人をして納得せしむるをその特色とす。中澤道二に至りて、その至妙の域に達せり。その後、諸家論説、内容に於て標出すべきことなし。唯だ講説の術益卑俗に流れて遂に寄席講談に類するに至れるあるのみ。

商業道德論の發達

第十三節　商業道德論の發達は、この時代に於ける一大事件なり。蓋し本邦、奈良朝のとき、商業の形式やゝ進みて賣買に關する律もあれば、商業道德の思想も發生せしに相違無きも平安朝となりては王綱地に委し、鎌倉の平世となりて、商業再び進み續きて海外貿易發達せしが戰國の世となりて、國内にては武士のみ勢力を振ひ商人は人にして人にあらずとせられ元和偃武の後ちも武士道發達するに隨ひかつは儒教の興起と共にます〳〵士道を重んじて貨殖の道をしりぞけ商人は

精神界にては無視せられたり。「女殺油地獄」におのれは町人、如何やうの恥辱を取ても疵にならぬといへるは這般の消息を傳ふるものなり。然るに元祿時代に富の勢力、發現すると共に、商業道德論こゝに興起せり。

商業道德論を皷吹したるは、心學者の功德なり。商業道德論は寧ろ心學者の專賣ともいふ可かりし。心學者以前に、商業道德を唱導したるは、西川如見の町人嚢と井原西鶴の日本永代藏との二なり。

(一)町人嚢　蘭學者、長崎の西川如見(一六四八―一七二四)の著にして、百姓嚢と共に平民道德を論じたるものなるが就中この書は商業道德に關する議論多し。蓋し商業道德とて別種の道德あるべき理なし。武家時代にありては武士の道義を知るは武士のみにして道德は武士の專有なりと思惟せり。商人は道德の範圍外に置かれたり、されば武士の道と商人の道とは、その標準は全く懸隔せり。巢林子の戲曲、壽の門松のうちに、侍の子は侍の親が育てゝ武士の道を敎ふる故に、武士となり町人の子は町人の親が育てゝ商賣の道を敎ふるが故に商人となる。侍は利を捨てゝ名を求め町人は名をすてゝ利德をとり、金銀をためる。これが道と申す

もの名をすてゝ利に殉ずるといふことは聖賢の教とは離れたること也。所謂町人の道に對する一般の思想は此の如くなりし。されども富の勢力發現するに隨ひ町人たるものいつまでか自卑自屈に甘んずべきや。如見町人囊の開卷に町人と生れてその道を樂まんと思はゞまづ町人の品位を辨へ町人の町人たる理を知りてのちその心を正しその身をおさむべしといへることを辨じて社會に於ける商人の地位を明かにせり。

聖人の書考ふるに人間に五つの品位あり。これを五等の人倫といへり。第一に天子第二に諸侯、第三に卿太夫、第四に士、第五に庶人也。これを日本にて言ふときは……公方家の侍の外は諸家中ともに皆な陪臣といふて又内の侍いづれも庶人のうちなりと知るべし。そのうち一國の家老たる人は諸侯の太夫なれば公家の侍に準すべし、その外國々の諸侍扶持切米の面々いづれもみな庶人なり。扨て庶人に四つの品あり。これを四民と號せり。士農工商これ也。……この四民の外の人倫をば遊民といひて國土のために用無き人間と知るべし。この四民のうち工と商とを以て町人と號せり。いにし

へは百姓は町人より下座なりと雖もいつの頃よりか天下金銀づかひとなりて天下の金銀財寶みな町人の方に司れるとにて貴人の御前にも召出さるゝこともあればいつとなくその品百姓の上にあるに似たり。況んや百年以來は天下靜謐の御代なる故儒者醫者歌道者茶の湯風流の諸藝者多くは町人のうちより出來ることになりぬ。水は萬物の下にありて萬物をうるほし養へり。町人は四民の下に位して上五等の人倫に用あり。かゝる世に生れかゝる品に生れあひぬるは誠に身の幸にあらずや。下に居て上を凌がず他の威勢あるを羨まず。簡略質素を守り分際に安んじ牛は牛づれを樂しみとせば、一生の樂み盡ることなかるべし云々。

これ町人の社會に於ける位置を辯明せる大文字なり。町人にこの自覺と自重とありて商業道德始めて組成さるべき也。町人は四民の下に位して上五等の人倫に用ありといひ商人に生れしを以て人生の幸福となす。近世商業道德論開拓者の言として痛快を極む。眞に天來の福音にあらずや。而してこれまた社會が經濟的勢力に歸嚮するに至れることを默示する時運の聲なりき。

如見が商業道德論の綱領を示さんに、

(一)商人の本分。商の字の心は商量といひて物の多少好惡をつもりはかりて用をなし利得を得るはみなこれ商の類也。いにしへは金銀をつかふことなくて唯ものをもつて物に易へたり。これを交易ともいへり。都べて物の多少高下を量り損益をかんがへて高利をとることなく有るところの物をいて無きところの物にかへ我國のものを持ちゆきて人の國のものにかへて天下の財物を通じ國家の用を達するを眞の商人とはいふ也。末代の町人手黑をもつて人の目をくらましめ買しめ賣の類これ皆な天下の毒蛇たり。若し幸ありて富を得たりといふとも浮める雲の如くにして久しかるべからず。況んや町人にあらざる人をや。謀計は眼前の利潤たりといへども必らず神明の罰にあたるとなん、

(二)商人の道德。町人のつねに守るべきは謙の一字也。謙といふは人に慇懃をつくすをのみいふにあらず。天理をおそれつゝしむはみな謙のみち也。聖人の易にときおかせ給ひしにも天道は盈るを虧いて謙に益す。地道は盈るを變じて謙に流く鬼神は盈るを害して謙に移すとのたまひしは難有く恐ろしきこと也。

驕るもの久しからすといふこと中にも町人に多きこと也。驕るといふは、強ちに財寶を費し失ふをのみいふにあらず、かりそめにも町人の分際に過たるよそほひをなせるを驕とはいふべし。況んや過美風流の遊びに於てをや。倣は萬惡の基とかや。よろづの禍これより起れり。

長者二代なしといふは必らず一代にて亡ぶるにはあらず。一生辛苦を積みて漸く富むと雖も、子孫に至りぬれは、いつとなく花車風流に成ゆき驕る心出來て財寶を費し失ふこと古今珍らしからぬこと也。中にも町人はつねの祿なければ、久しく富貴を保ち難し。さりとて驕りほしゐまゝにして費し失ふは、父の志をやふりそこなふ道理なれは、不孝の罪尤ふかし。

或人戯れて云隱くれ簑かくれ笠といふものは鬼ヶ島に有とかや……その座に富める翁のありしが、我こそ、その寶物をもて今漸く富み侍り……それ鬼といふは鬼神に横道なしとて內心は正直なるもの也。形おそろしく見ぐるしきゆゑ常にかくれて公界に出ることとなし。この故にかくれ笠かくれ簑をきる也。我も昔より横道なからんことをねかひて公界に出て交らず。か

くれ笠には紙子頭巾、かくれ簑には木綿きるもの此故に漸く富める身と成て侍ると語られし。

商人の徳を代表するに大黒神を以てしていはく。大黒は色黒くたけ低く形見にくし。色黒きは美麗のかざり無きいましめたけ短きは身を謙だる形なり。足に米穀の俵をふみ手に財寶の袋をにぎり同じく小槌をもてり。人の身を養ふこに米穀財寶を第一とす。これを用ふることおろそかにせずみづからつとめ守るべし。打出の小槌は四民ともに面々それ〴〵の家業職分の道具をしはらくも手に放つこと勿れとの教へなり。かくの如く勤め行ふときは、富貴に至りて千萬人をも養ふべし。これ福の神の儀なり。世俗に橋の板を以て造るところの大黒は靈驗ありといふは、橋は通ひがたき所を通じて廣く萬民を渡し、日夜踏むことたえず。その板を以て造れるは、これ萬人に謙だり、諸人の胯下にありても、終に身を立て用を達せんと思ふ心なり。このことわりを辨へなば橋板にあらずともありなん云々。

如見の意、謙は商業道徳の大本にして、天命をおそれつゝしみよく勤め働きて驕

らず高ぶらず、あらゆる徳功はこれより出づべしとなり。これより、さらに商人としての諸德を解說せん。

(三)勇氣。町人といふとも勇氣なくんば有る可らず。武篇と勇とは、わきまへあり。町人は第一質朴に居て萬の不自由を堪忍し、外の名聞にかゝわらず、おのく職分をつとめて家業に退屈せざるは町人の勇也。武篇は勝負の利なれば、町人は努々好む可らず。武士は主人に身を賣置たれば……此故に苦笑しても死を安くすべし。町人は主人なし。たゞ父母あり。武篇の働きは不孝の第一なり。都べて人間に生得の剛臆なし。義ある人は剛に、義なき人は臆せり。つねにものおそれする女子もおもひやるせなければ、安々と死ぬるたぐひ是れまた義理の勇者にもあらず。兎角町人と生れたるこそ幸なれ。武道の心掛をやめて、他の一錢も卑怯なる心無きこそ町人の武勇なれ。佗々たる勇夫射御不違とも我倘くは不欲と聖經にも見えたり。夫れ命は生としいけるもの惜きことは天理自然なり。然るを命、露ちりともおもひ侍らずといへるは義にいさみ、血氣におかされたる廣言なり。

武士氣質の暗黑面を指摘すること一に何ぞ痛切なるや　苦笑しても死を安くすべし一語、その人見るが如し。この種の言論、近世福澤諭吉氏を推して擅場とす。二百年前、則ち此の如き論客すでにありし也。

(四)禮儀　禮儀は町人とてもなくて叶はぬもの也。昔の町人は實儀のみにして外の飾り少なし。今の町人は心至りて過美になり實儀うすく禮儀武家の風をまねて巍々とせり。町人は唯だ質素を本として外をかざらず。易簡を本として、樂みくらすべきことなるに、すこし富める町人は身を高ぶり人めかしと、公家武家の禮法を似せて奢をなすもの多し。それを羨みつゝ、をしなべて知るも知らぬも、ひた似せに似するほどに終に一國の風俗となり行き、いろ〳〵過美なること多し。禮義の果ては驕となり、驕の果ては非儀を爲す。

都に隱れ無き町人何がしとかや一生脇指をさすことなし。或人日本の風俗にて刀脇差を禮義とす。武勇の爲めのみにはあらずといへば、答へていへるは、禮義には羽織又は袴を著る。これにましたる禮儀なし。武士は武道をつねに忘れざるが役也。此故に人と交はりて丸腰なるは武士の武を忘れたるになる故に無禮

なりとすべし。町人はこれに異なり何んぞ一代に一度も用に立つること無き道具をつねに帶して、一生の間、窮屈をみんや。唐人は千里萬里の旅行にも丸腰なりといへども終に鬼に喰はれたることを聞かず。治りたる御代の忝けなき一德には扇子一本にていつかたにも心易ものをやとて、猶ほ〳〵丸腰なりし。これ程に道理の埒はあけがたきものなれば、せめて町人は短き脇指にて、大脇差をばやめたきものなり。武士の似せものせんよりは、たゞそのまゝの町人こそ心安けれと、延喜時代の分別を言ふ人も又多し。

町人の詞あまりに樣子めかしたるもおかしきもの也。いひもならはぬ都の詞よりは、生れつきたる國鄉談こそ聞よきものなれ。都のことばにもかたこと多し。いなかの詞なりとて笑ふ可らず。神代の遺風は結句外鄙に殘りてあること多しとかや。(同書)

(五)學問。或人學者に問ていふ。町人などの學問するは、何の用に立ん爲ぞや。學者答ていふ。身をおさめ家をとゝのへん爲也といふ。又問ふ、身を修め家をとゝのふることは盡く學者のみに有て、無學なる町人はいづれも身を亡ぼし家を失

ふにやといへば、この學者かさねて答ふることなくて已みぬ。この人又た或學者に前の如く問ひしに、此學者喜んで云ひけるは、町人の學問は盜みする心をおこさゞらしめんが爲め也と。又問ふ學問せぬ人とて盜する事やあるべき。學者の云ふ、前のごとく無學なる人なりとて盜みする人は最稀也。去ながら盜する意を失ふてとは學者と雖もかたし。只今公儀ありて誅罰を受くる故にこそ恐れて盜みする人もなけれ。若したゞ不義をなし盜賊をなしても誅罰を受くることなき作法ならば、大躰などの學者は不義を行ふ人多かるべし。さやうの世に有りても、天理を恐れて盜みの意、不義の念をおこすことなき人は有がたかるべし。年寒くして、松柏の凋におくるゝことを知るば、學問する人の第一愼むべきことところ也といはれし。

（六）勤儉　神道は質素をむねとす。質素は則ち正直のかたち也。文奢なるときは必らず邪曲あり。爰を以て日本の宗廟、伊勢太神宮は專らいにしへの質素を改め玉はず末代の誡となし玉へり。……今代京夷中共に町人の家居作事治まれるは世のしるしといひながら太神宮の御掟には背けるものかな。……名もなき町人などは太神宮草葺思ひ出づべきこと也。

酒は量なし、亂に及ばずといふを惡く心得たる人多し。亂といふは醉狂のこと也と思へり。大なる誤なり。亂に及ばずといふは心ゆるまり形おこたりゆくを亂に及ぶとはいへり。かくの如くのことに至らざるを亂に及ばずとはいふ也。(中畧)醉狂はまた此うへ也。武士は上に主人ある故におそれて亂酒することすくなし。町人は上に主人なき故、酒の亂多しといへり。

心閑靜淸淨の人ならば、あながちに粉がし引茶を用ひて、茶人といはれずとも、本來自然の隱遁者なれば何をか好み何をか厭はんや。町人百姓など、これ等の人のまねびをせんも、また似あわしからず。茶を好む人ならば、只茶を呑み、酒を嗜む人は、只だ酒を飲み、菓子を好む人は菓子を喰ふべし。ともに皆な飮食なり。然るに酒を呑み、菓子を喰ふ人いまだ手前のよしあし道具器物の風流をすることを聞かず。茶而已こと〳〵しき風流を好むこと心得がたし云々。

町人は蟻の如くに食物を貯へ、身を養ふことをつとむべし。蜘蛛のごとく網をはり居ながら物の命をとりて食とすること有可らず。(中略)蟻は正しく義ある蟲

なり、この故に蟲の偏に義の字を添へたり、終日往來して……冬の用意す、己れが求め得たる食なりとて、おのれひとりの食とせず、穴に住める衆と共にす。町人の四方に働きつとめて財を求め家內を養ふこと蟻の如く怠らず油斷なくして家をたもつべし。蜘蛛は謀ありて物の命を誅罸す。……町人は、これを惡むべし。謀計をもつて公儀を瞞して諸人の渡世を、おのれ一人にて中請け、貪慾非義の網をはりつゝ居ながら萬人をくるしめて己が身を富貴ならしめんとす。不仁の甚しきもの也。

或學者の云、聖人の御詞は貴賤上下にわたりて、いづれの書、いづれの語にても、人の教誡とならざるとなし。四民みな通用の道理あり。乍併そのさしあたりたるところは皆多くは學者君子のうへ又は庶人より上にある人の教にして、町人百姓にさしたありたる教少し。……民はよらしむべし、知らしむ可らずとて分けて庶人への教くわしからぬもの也。但し孝經に天の時を用ひ地の利に因て身を謹み、用を節して父母を養ふは庶人の孝也と聖人の仰せ置かれたるこそさしあたりて町人百姓への御教育ありがたき詞也。天の時を用ひ地の利に因るとは取分け百

姓農業の上にあり、商人職人といへども、天の時地の利を考へすんばある可らず。用を節して身を謹しむことは四民ともに第一なる誡め也。取分け町人は用を節することさしあたり肝要なること也。町人の身を亡ぼし、人を惱ますことの惡事、皆なこの用を節することなきより始まれり。兎角質素儉約を本とすべき理にて節の字の心、甚深き理あり。町人百姓の學問は、この一句にて濟むこと也。さしあたりては庶人への誡なれども、これを推し廣むるときは、天下國家を治め玉ふ人といへども、これに過ぎたる敎なかるべし。

(七)名利。或人の云ふ、町人利發あり、侍利發あり。町人は利をすて名を專らとするときは身代をつぶすもの也。侍は名を捨て利を專らとするときは身を亡ぼすことあり。名利は正しく求むるを道を知れる人といふ。名利は四民の日用也。狂人にして後ちはじめて名利を離れ得べし。

(八)正直。去る商人つねの口くせに商人と屛風とは曲まねば立たずといひて、手わろきわざもありしにあるとき家の年久しき古屛風の精妖けて商人の夢に見えていはく、年頃われを、曲めるものとのみ思ひ玉ふこそ口惜しく侍れ。ゆがめてた

てるは吾心にあらず。のぶと縮むとこそ吾が德用なれ。しかれ共強ゐて開きのぶるときは片時も立ちがたし。又たゞみちゞむること過ぐるときは、猶ひとり立ちがたし。のぶとちゞむとの中道をうるときは久しく立ちて危からず。その立つ所の地平かに正しくして、たてざれば則ちくつがへりをれり。これ第一の用心也。主もまづその一心の地を平かに正しくして、その上に商賣ののべちゞみを考へてあまりに開かず、あまりにちゞめずして能きほどに身を立つるときは、いつまで立ちても危きことなかるべし。あるじこのことわりを知らずして我ゆがめるものとのみ心得玉ふは口惜しく侍りと恨みけるとかや。おかしきことながらも捨てがたきことはに侍るにや。

商人と屏風とは直ぐにては立たぬと云ふは本邦古來殆んど格言として疑ふ者無かりき、この時代に至り、商業道德論興起すると共に、論者爭ひて、この古諺を論破せんとせり。西川如見、石田梅巖二氏の說を尤も有力なりとす。太平國恩俚譚には理論を付せず、純ら正直なる商業によりて繁榮の來ることを證明して、右の諺を非定せり。三者の中、學說としては如見のを尤も穩當なりと

す。梅巖のは稍や牽强の嫌あり。

論太甚だしく精密のものにはあらざれども、頗る要領を得たるもの。また近世商業道德論の陳勝吳廣としては、見事なるものと謂はざる可らず。

この外、如見が自慢を記せる中々に面白ろき節あり。かたち謙りて、內心に甚しく慢ある人もあり。何にても一藝ある人は必らず慢あり。また無藝無能にても慢ある者あり。氏系圖を自慢し、分別を自慢し、達者を自慢し、財寶に自慢す。親類自慢、男自慢あり。それらの事もなく、一文不通なる者は又何の自慢するこゝとあらんと思へばこれも自慢あり。不求不貪、不諂一心々々といふて自慢す。これ等は一心自慢とやいはむ。形は隨分へり下りて內心人に傲る氣象ある者もあり。これを卑下慢といへり。このしな〳〵町人にはとりわき多し。また故鄕自慢あり。天竺は佛國にて唯我獨尊の大國この外の國々は粟散國也と自慢す。唐土は聖人の國にて、天地の中國也。萬國第一仁義の國、日月星辰も此國を第一と照らし給ふといふて自慢す。又日本は神國也、

如見の教育論

世界の東にありて、日輪始めて照らし玉ふ國にて地靈に人神也。萬國第一の國にて金銀も多し。豐秋津國とも中津國とも浦安國ともいふ也と自慢す。この三國おの〳〵自慢あり。自慢によつてその國の作法政道立たり。また大なる自慢あり。天地の間に生きとし生けるもの多し。そのうちに人を貴しとす。この故に人は天地の靈と號すといへり。誰かこれをゆるして名付けたるや。人間われとこれを名付けたり。この自慢は人として一日もなくんば有可らず云々。

町人嚢は當時の教育界を論じて卓見多し。併せて玆に論すべし。

この頃山崎闇齋の學風や〻流行して、ことにこの派は程朱葬祭の說を鼓吹し三年喪を守れる人も少からざりしが、如見は吾町人百姓は儒學ありとも三年喪を勤むるは無用のことなりといへり。……毎月の忌日は儒道神道には無きことゝ見えたり日の數は合へども時節違へる故なり。町人百姓といふともこの忌日は父母の終り玉ひし日なれば、終日愁の心を發して、喪のうちの如くに潔齋すべし。家業職分につきて一日の隙をかくこと叶はざるときは、その

役儀を勸めながら何となく人の目に立たぬやうにして、心のうちの愼あるべきこと也。

神儒兩道の相異を辨じて曰。唐土の儒道と日本の神道と似て異なるところあり、これを辨ぜざる學者は神民にあらず。此差別いかにといふに、仁智に厚きと義勇に厚きとなり。厚きといふは、己れ專らにするにあらず、おのづからこの國の氣風なりとて、宋の宰相韓魏公が盜夜押入りて願くは公の首を得て兩人に獻ぜんといひしに魏公は首をのべて少しも變ずる色なかりしかば、盜人感伏して公は天下第一德量の君子なりといひし例をあげて日本の武士としてはあるまじき卑屈の擧動なりといひ「かゝるときさこそ命の惜しからめかねてなき身と思ひ知らずば」と詠じて首をのべて討たれし太田道灌も、その代の韓魏公なりといへども、中々盜人に首をのべて與ふべからず、これ唐土日本君子の仁勇に不同ある子細なり。これ等のみならず、すべて唐土より傳へたるわざも此國にては自から此國の氣風に變化するが故に傳への儘にてはこの水土の理にそむける理なれば、たとひ唐土より傳へし聖語なりとも、この

國にては、その學びの心すべきこと也。況んや禮度器財文筆の風俗をや。この國にては、國のすがたを貴ぶべし。この氣風の姿こそ他の國より習ふことなき質素正直の神風なりと思はざらめやといひて、吾國粹を主張し、支那崇拜の妄を唱破せり。

支那の根本の弊害は形式的なるにあり。その結果は繁文褥禮となり、國民の活力由て以て衰亡す、末代に至りて尤も甚し。如見その弊を指摘し、例證としては明朝天子の諡號徒に僭美に馳するを述べ曰く。太祖の諡は欽明啓運俊德成功統天大孝高天大皇帝といひ、大宗の諡は體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝と諡せり。この以前の數代も皆なこの諡の類也。この諡を見るに、堯舜禹湯文武の諡にしても此上は付くべき文字なかるべし。秦始皇帝六國を併せて一統有し、功德三皇五帝を兼ねたりとて始めて皇帝の稱を立てたり。これ始皇帝の惡行の一なるよし、末代まで惡みそしれること也。後代の天子、始皇の道をば惡みながら皇帝の號は、よきことにして不改。却て皇帝の上に文字を添へて尊稱す。いまだ皇帝の號を不足とすればなりと。支

那は文字の國也。文字愈美にして實力愈滅ず。本邦にても吉備眞備歸朝の時代には漢土形式的の風尚頗る熾んにして、天皇の尊號の如きも、美々堂々たるものを奉り、漸く彼の風に浸漸して、やがて平安朝の風潮を馴致するに至れり。鎌倉時代に名をすてゝ實を取るてふ武士氣風は吾國粹を發揮したるもの也。支那近世の學風光燄なく機軸なきは考證の餘弊也。宋儒性理の說起りてより古經註解にのみ學者の腦力は集注され、後ちには一字一句の出典をも考據する形式的の極端なるものとなりぬ。淸朝に至りては、また政略上考證學を奬勵したりしかば、考證の學風愈熾にして、糟粕に糟粕を重ね、故書陳套のうちに逆戾りすることゝなりて、學者の生氣全く銷沈して國家隨つて衰耗せり。如見支那近世の學風を冷評していはく。書を見ること多きものは無明いよく多しとかや。儒書十三。註解數百卷。諸子百家の諸註解數千卷。歷史の類數千卷。各その末書細書を合はせば數萬卷。その他の雜書は不レ知二際限一。これ皆な身を修め家を齊へ、國を治め、天下を平かならしむるの用也（中略）明

の太祖甚だ儒道を尊信ありて、宋儒のかけたるを補ひ、十六世二百七十餘年の治平ありて、その間に編作の儒書不可勝計。唐土學術このときに全備す。しかるに國天下は又た北狄の有となれると甚だ訝かしきこと也。然らば書籍文筆國土に充滿して世界第一の上國たる學術德用はいづくぞやと。機鋒鋭快、支那學風の弊を罵倒して餘蘊なし。吾人は支那崇拜の極盛なりし江戸時代の中世にかゝる大氣燄を吐く洋學者ありしことを特記せざる可らず。

二。日本永代藏

井原西鶴（一六四二―一六九三、元祿六年歿）の晩年の著にして、貞享五年（一六八八）の開板なり。この書は有りの儘に當代の町人氣質を寫し出でたるものなるが、批評は自らそのうちにこもれり。ことに例の妙文にて町人嚢とはかはりて、口先き改まりたる筆路なり。茲に書中商業道德に關する諸點をあくべし。

一勤儉貯蓄　一生一大事身を過ぐるの業、士農工商の外、出家神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜むべし。これ二親の外に命の親なり。……

浮世は夢幻といふ。時の間、死すれば何ぞ、金銀瓦石には劣れり。黄泉の用には立ちがたし。然りと雖も殘して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに世に有るほどの願、何によらず、銀徳にて叶はざること天が下に五つあり。それより外はなかりき。これにましたる寶船の有るべきや。見ぬ島の鬼の持ちし隱れ笠かくれ簑も暴雨の役に立たねば、手遠きねがひを捨てゝ近道にそれ〳〵の家職をはげむべし。福德は、その身の堅固に有り朝夕油斷すること勿れ。ことさら世の仁義を本として神佛をまつるべし。これ和國の風俗なり。

二正確　近代泉州に唐かねやとて金銀に有德なる人出來ぬ。世わたる大船をつくりて、その名を神通丸とて三千七百石つみても足かろく、北國の海を自在に乘りて難波の入湊に入米の商賣をして次第に家榮えけるは諸事につきて、その身調義のよきゆゑぞかし、惣じて北濱の米市は日本第一の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目のたてり商もあること也。その米は藏々にやまをかさね、夕の嵐、朝の雨、日和を見合せ雲の立所をかんがへ、夜のうちの思ひ入にて賣る人あり買ふ人あり。一分二分を爭ひ人の山をなし、互に面を見知りたる人には、千石萬石の米をも賣買

せしに、兩人手打ちて後ちは少しもこれに相違なかりき。世上に金銀の取やりには預り手形に請け判慥かに何時なりとも御用次第と相定めしことさへ、その約束をのばし出入になることとなりしに、空さだめなき雲を印しの契約をたがへず。その口切りに損德をかまはず賣買せしは、扶桑第一の大商人の心も大腹中にしてそれ程の世をわたるなる云々。

三精敏　この藤市利發にして一代のうちに手前かく富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる元なり。この男、家業の外に、反故の帳をくゝりおきて、見世を離れず。一日筆を握り兩替の手代通れば錢小判の相塲を付けおき、米問屋の賣買を聞合せ木藥や呉服やの若ひ者に長崎の樣子を尋ね繰綿鹽酒は江戸棚の狀白を見合はせ毎日萬事を記しおけば、紛れしことは爰に尋ね洛中の重寶になりける。身持ち肌に單襦袢、大布子綿三百目入りてひとつより外にきることと無し。袖覆輪といふこと、この人取はじめて當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪駄をはきて終に大道をはしりありきしこととなし。一生のうちに絹物とては紬の花色ひとつは海松茶染にせしこと若い時の無分別と二十年も、これを悔しく思ひぬ。

紋所を定めず、丸の内に三つ引または一寸八分の巴を付けて、上用干にも疊の上に直きにはおかず。麻袴に鬼繻の肩衣幾年か折目正しく取置かれける。町並に出る葬禮には、是非なく鳥部山におくりて、人より跡に歸りさまに、六波羅の野道にて奴僕もろとも苦慘を引きて、これを陰乾にしてはら薬なるぞと只は通らず。蹴づくところで燧石を拾て袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帶持ちは、よろづかやうに氣を付けずしてはある可らず。この男生れ付きて慳きにあらず、萬事の取まわし人の鑑にもなるべきねがひ、かほどの身代までとしとる宿に餅つかず。閙しきときの人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、これも利勘にて大佛の前にあつらへ一貫目につき何程と極めける云々。

(四)利德　和國の商ひ口とて利德をとらぬと空誓文をたつれば、これに氣をゆるし、何によらず買求むる世のならはし也。神田の明神の前に俗姓歷々の浪人、身をかくして年も家に杖つく比なれば、さのみ主とりの望みもなく、小者一人つかふて一代のたくわへ有て世をなりはひにくらし、徒居を外よりのとがめをうたてく瀨戸物見せかけばかり出し置き、ねだんとふものあれば百のものを百とありのまゝ

に云ひければ、これをねぎれどまけず。そも〳〵より摺鉢九つさかな鉢十三、皿四十五枚、天目二十、德利七つ油さし二つ三年あまりにひとつも賣れず。これを思ふに商ひ上手はあるべきこと也。

（五）東西商人氣質　年中の誓文を十月廿日のゑびす講にさらりとしまふことあり。その日は諸商人萬事をやめて我分限におうじ、いろ〳〵魚鳥を調へ、一家あつまりて酒くみかわし、亭主作りきげんに、下々いさみて、小歌淨るり江戸中の寺社芝居その外、遊山所のはんじやうなり。上がたとちがひしことは白銀は見えず一歩の花をふらせける。秤入らずにこれほどよきものはなし、人みな大腹中にして諸事買物大名風にやつて見事なるところあり。けふのゑびす講は萬人肴を買はやらかし、自然と海も荒れてつねより、生物をきらし、ことに鯛のこと一枚の代金一兩二歩づゝ、しかも尾かしらにて一尺二三寸の中鯛なり。これを町人のぶんとして内證りやうりにつかふこと、今お江戸にすむ商人なればこそ喰はすれ。京の室町にて鯛一枚を二匁四五分にて買取り。五に分けて天秤にかけて取るなどこれに見合都のことおほし。

(六)正直と信用　時津風静に日和見乗覺えて。西國の一尺八寸といへる雲行も三日前より心して今程舟路の慥かなることぞ。世に舟あればこそ、一日に百里をたし十日に千里の冲をはしり、萬物の自由を叶へり。されば大商人の心を渡海の舟にたとへ、我宿の細き溝川を一足飛びに寶の島へわたりて見ずば、打出の小槌に天秤の音きくことある可らず。一生、秤の皿の中をまわり廣き世界を知らぬ人こそ口惜けれ。和國はさておき、唐へなげかねの大氣、先きは見へぬことながら、唐土人は律義に云ひ約束のたがわず。絹物に奥口せず。藥種にまぎれものせず。木は木銀は銀に幾年かわることなし。只ひすらわきは日本次第に針をみぢかくせり織布の幅をちゞめ、傘にも油をひかず。錢安きを本として賣渡すと跡をかまわず。身にかゝらぬ大雨に親でもはだしになし只は通さず。むかし對馬行の莨宕とてちいさき箱入にしてかぎりもなく時花。大阪にてその職人に刻ませけるに當分知れぬことゝて下つみ手ぬきして然のも水にひたし遣はしけるに舟わたりのうちにかたまり煙の種とはならざりき。唐人これをふかく恨み、その次の年を又た又過つる年の十倍もあつらへければ、欲に目のあかぬ人、我おそしと取急ぎ下

りけるに大分港につませおきて、去年たばこは水にしめされ思はしからず。當年はゆり鹽につけて見玉へと皆々つき返され自に打ちて磯の土とはなりぬ。これを思ふに人をぬくことは跡つゞかず。正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば佛陀も心を照らす。

(七)分業　兎角はあはぬ算用。江戸棚殘て何百貫目の損、足元のあかいうちに本紅の色かへてと銘々分別するとき、又商の道はあるもの。三井九郎兵衛といふ男、手金の光むかし小判の駿河町といふところに面九間に四十間に棟高く長屋作りして新棚を出し。よろづ現銀賣にかけねなしと相定め、四十餘人利發手代を追まわし、一人一色の役目、たとへば金襴類一人、日野郡内絹類一人、羽二重一人、沙綾類一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織類一人。かくの如く手わけをして、天鵞絨一寸四方段子毛貫袋になるほど、緋繻子鑓印長、龍門の袖ふくりんかたにても物の自由に賣渡しぬ。殊更ら俄か目見への熨斗目いそぎの羽織などはその使をまたせ數十人の手前細工人立ならび即座に仕立て、これを渡しぬ。さによつて家榮え毎日金子百五十兩づゝならしに商賣しけるとなり。世の重寶これぞかし。この亭主を見

るに目鼻手足あつて外の人にかはつたところもなく、家職にかはつてかしこし。大商人の手本なるべし。

暴利は古來本邦商人の理想なり。不正の商品を販ぎて一躍山の如き富を思ふはその常態なり。要するに鎖國の天地に數百年陶冶されて眼界甚狹く規摸小さく到底島國根性を脱却する能はず。社會組織の中心は武士にして、商人は下級に居り、道德の標準も頗る卑く武士も德義を以て商人を責めず商人も亦多くはこれを以て自ら甘んじたり。一般に商業道德の思想薄弱なりしは、「紺屋の明後日の俚諺に徵して知るべきなり。懸價の一語は、吾が商業道德の全般を蔽ふに足るものなりき。正直の頭に神宿るといひ、心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らんと云ひ、本邦古來正直の德を頌するの俚諺も乏しきにあらざれども、一方には商人と屏風は直ぐには立たずと云へる語の眞理として一般に認められしは道德界に商人の存在を認めざりしものといふべし。

如見の商業道德論斯界に一道の光明を與へたりと雖も、商業管理に必要なる諸

德に至りては未だ詳論することなくまたその思想も發達せざりしなるべし。而して商人の公德に至りては謙の一德より推しひろめてこれに說き及ぼせるものなきにあらず。例へば天理の法度を恐れ愼むものは則ち公儀を恐るゝ眞成の商人なりと言ひ或は世に萬年の陶朱公なし陰德をつみて餘慶を子孫に期すべしといふ如き議論あれども大躰は修身齊家にとゞまりて積極的に公共心を說破せるものはあらざるなり。如見は商人も王侯將相も天分相違なし唯だ敎育則ち眼前の別種の感をなさしむるものなりと論ぜり。その說當代にありては町人の爲めに頗る氣を吐きたるものにして平民敎育の興隆の運に向へるを見るに足る也。

愛宕殿鳶とならるれば鳶の心ありとかや。名もなき町人百姓の子にも幼少より習ふところによつて篤實廣才なる者も昔より多く出たること有り總べて高貴の人は胎內より氣にふれ物にうつるところ皆いやしからず見ること聞くこと食事衣服のそなへゆたかに弓矢墨筆のたぐひよりいやしきものをば手にさへとらず心にくるしむこともなくて成長ある故に能書文學才藝も成就しやすし。町人百姓の子は胎內より市井の風俗にそみ幼少より薪と

り水汲み土堀の業又は荷もち細工等を所作とする故に手足筋骨もあらく〳〵しくねぢけたり。能書文學の暇もなく偶ひまありとても、筋骨こはくて筆をとるに不堪能書の嗜ありし人はふすま障子をさへあけたてをせずといへり。たとへ下賤土民の子なりとも出生よりそのまゝ富貴の家にて成長せしめなば能書文學の譽ある人も多く出來べし。ましてや剛臆などは、貴賤によるとにあらず思ひなしからによくもあしくも見ゆること多からん。貴人の血脉はみなおのつから君子となる理ならば胎敎のみち幼儀のならひなとも無用なること也その儘おきても德行博才の人となる理なりといへども生立あしければ不德無能の人となると見へたりいかに凡卑の血脉といふとも胎敎の道を守りて胎内より正しきみちにふれしめ出生しては君子の傍におきて幼儀を習ひ才藝をもてあそばしむることあらば、天性命分の品によりて美惡鈍智のかはりはあれどもその人品高位高官の人にかはりなかるべし。畢竟人間は根本のところに尊卑あるべき理なし。唯だ生立によると知るべし。

日本永代藏にもまた這般の記事をのす。富の勢力の發現に伴ひ、敎育上に於け

心學者の商業道德論

る平民敢爲の氣力勃興せるを見るべし。

心學の開祖石田梅巖は平民道德を說くこと詳かにして、その商業道德論は委曲ならざれども頗る明確なり。心學の經典ともいふべき都鄙問答のうちに、商人の道を問ふの段、及び或學者商人の學問を譏るの段の二章ありて、商業道德を論じたるか。

商人ハ勘定委シクシテ、今日ノ渡世ヲ致スモノナレバ、一錢輕シト云フベキニアラズ、コレヲ重ネテ富ヲナスハ商人ノ道ナリ。富ノ主ハ天下ノ人々ナリ。主ノ心モ我心ト同ジキ故ニ我一錢ヲ惜ム心ヲ推シテ賣物ニ念ヲ入レ少シモ粗相ニセズシテ賣渡サバ買フ人ノ心モ、初メハ金銀惜シト思ヘドモ代物ノ能キヲ以テ、ソノ惜ム心自ラ止ムベシ、惜ム心ヲ止メ、善ニ化スルノ外アランヤ。且ツ天下ノ財寶ヲ通用シテ萬民ノ心ヲヤスムルナレバ天地四時流行シ萬物育ハルヽト同ジク相合ハン。如此シテ富山ノ如クニ至ルトモ欲心トハ云フ可ラズ。(中略)此ノ如クナラバ、天下公ケノ儉約ニモ協ハン。天命ニ合フテ福

ヲ得ベシ。福ヲ得テ萬民ノ心ヲ安ンズルナレバ天下ノ百姓ト云フ者ニテ常ニ天下太平ヲ祈ルニ同ジ。且ツ御法ヲ守リ、我身ヲ敬シムベシ。商人ト云フトモ聖人ノ道ヲ不知バ、同ジ金銀儲ケナガラ不義ノ金銀ヲ設ケ子孫ノ絶ユル理ニ至ルベシ。實ニ子孫ヲ愛セバ道ヲ學ンデ榮ユルコトヲ致スベシ。

正大の論、簡にして透徹せりと謂ふべし。德川時代に於ける心學者の專賣ともいふべき商業道德論は右の簡明なる梅巖の講説より出で來れるなり。而して時に堵菴、道二の如き名家ありて機軸を出せしこともありき

懸價即ち二價の一語は、本邦商業道德の甚だ劣等幼稚なることを證するものなるが梅巖はこれに就き面白ろき斷をあげて懸直の不道德、沒道理なることを喝破せり。その中に負けて賣るべし、これまですれば拙者方にも利益なしなど云ふは、大なる不了簡にして、また顧客に對して不敬といふべしとなり。そは正當なる武士は緣もゆかりも無き商人より合力受くべき理由なき故に、負けて貰ふに及ばずとて買ふ可らず。また商人に損をさせて恩を着ることあるべき所由無し。されば何れにしても懸直といふことは不都合なりと。梅巖商人に學問の必要あると

を極論してさて商人は正直に思はれ打ち解けたるは互に善きものと知るべし。此味は學問の力無くては知れざるところなりといひ、然らば商人の利を得るは道に合せりやとの問に對へて商人の利を得るは士の祿あるに同じ商とはすべて鬻貨曰商然れば貨を賣るうちに自ら祿あることを知るべし

商人ハ直グニ利ヲ取ルニ由リテ立ツ。直グニ利ヲ取ルハ商人ノ正直也。利ヲ取ラザルハ商人ノ道ニアラズ。コヽヲ以テ正シキ士ハコノ賣リモノハ損銀立テ候ヘ圧負ケテ賣ラント云フ圧ハ買ハズ。我買ツテヤルハ汝ニ利ヲ得サセン爲ナリ。汝ガ合力ハ受ケズト云ヘリ。利ヲ取ラザルハ商人ノ道ニアラズ。

負けて賣らんの一語は、本邦商人の口癖たること久しかりき。

心學者の道德論消極主義に偏せりと雖も當代平民のうちにてことに工商は五倫の敎を聞くこと少なく敎育も普及せざりし故に、道話が敎化上與つて功力の大なりしは疑を容れざる也。

手島堵菴の「町人身體直し」にいはく、熟々世の中を見るに士たる人は、その業

も正しく、加之幼少より之の道を學ばざるはなし。農家もそれに次ぎて耕作を所作とし、私の事とせず。故に風俗も自ら眞なり。唯だ工商は市中に住んで治世せわしく、多くは利慾に心をひかれ易し。ことに商人は單んに利を見て物を賣り買ふを以て產とするものあれば猶更利慾のために身を誤る人多し。その上工商は五倫の道をきゝ學ぶ人甚だ少なし。故に若し不仕合せにて、金銀拂底し渡世さしつまりぬればつねの心を失ひ、大に取り亂すものなり云々。

第十五節 元祿頽唐の後を受けて吉宗將軍勤儉尙武を以て一時士風を挽回するを得しが屢々たる苟安策は以て大勢を震撼するには足らず。吉宗の後ち士風再び衰廢し大名旗下以下、遊廓に出入するとをば誡飭せられしこと數ばなりき。ことに旗下の士風の衰へたるは又太甚しといふへし。平賀鳩溪の力婦傳に、その狀態を寫出せり。夏は晝寐して居る坐敷まで屋根船がつかぬとの小言を言出し冬は炬燵の前へ芝居があるいて來れば善いとの我儘。只いきなことをのみ貸み、欣々通々として鮫鞘のお太刀は煙管より輕く、專の紙入は七道具を兼ねて重し。

弓馬合戰たしなむことは武士の間珍らしからずと今川状の眞中を一寸と斗切拔きて己が行ひとし只新たらしい事を好み象牙の撥の胝は手綱の胝より高く弓手の爪の糸道は韘の弦道より深し。役者の身振を學ばずんば如何ぞ脊の腹をへらさんと怠懈放侈の心より親仁の尻は祖父樣より重く息子また爺さまより弱し。只通を以て義とし口を以て勇とす。」これ鳩溪の武士を痛罵せるうちにて尤も刻に又尤も妙なるもの也。

鳩溪の放屁論後篇にいふ。目出度き御代の侍は段々直か下り工農商の三民に養はれる素餐のやうに思はれまさかの時は侍でなければ世は治まらす日本は小國でも唐高麗から指もさゝせぬは、皆武德なりと云ふことを思出すもの無きは、是れぞ誠に太平の世の御恩澤。

風流者道軒傳にいふ世の諺にも落ちそうで落ちぬものは二十坊主牛の睾玉落そうもなくつて落つるものは五十坊主に鹿の角。これはまた足利時代のたとへにて、今は只老たるも若きも貴きも賤きも野夫の枝の熟柿にて一つも落ちぬは無かりけり。

根南志草(鳩溪著)惣じて昔は人間も質朴にありし故、毒といふもの喰はぬことゝ心得河豚を恐るゝこと蛇蝎の如くなりしが、次第に人の心放蕩になりゆき毒と知てこれを食す。人に君たる方、これを憂ひ玉ひて河豚を喰ふて死たる者はその家斷絶とまで律を立てゝ、上仁を好めども下義を好まず。ふくや／＼と大道を賣りあるき煮賣店にも公けに出しおくこと。上を輕んずるの甚しきといひ、………あまつさへ河豚無きときは外の魚を河豚もどきと名付けて喰ふこと嘆かはしきこと也。

(三味、歌舞) 高貴の人、自らそのわざを學び烏帽子の緒をかくる顏を紅白粉にて塗よごし、政をも談ずべき口にてせりふなど吐出して自ら樂と思へるは片腹痛きことなり。或愚人我死してさきの世は松魚になりたしといへるを、傍の人聞きて何故松魚になりたきやといへば、松魚はうまきものなればなりといへるに同じ。松魚も喰うてこそ妙あるべけれ。我れ松魚になりて人に喰はれては、我は甘くあるまじ。

新道裏店………とある格子作りの内に金きつた聲で鼻汁たれ娘が三絃をば

弾き居たる。この龍宮界にては、琴三絃などは能き楽計りの翫びかと思ひしに、かゝる小さき暮らしにて、娘に三絃ひかすとは扨て〳〵人間といふものはおごりしものかなと……………

飛花落葉　孝悌忠信を口に稱し、身に行ふ君子ありとも、當世これを稱して野夫といひ武を知り、國家を守る者を人嘲りて新吾左といふ。またこの譏を免かれんと思ふたわけは、ぬしと呼び、わつちと稱へ、顔は白きを厭はず、脇差は細きを厭はず。今の浮世に交はらんもの、この境を知らずんばある可らず…………

弓勢智勇湊　侍の堅いといふは、どつと昔の事。

當代學者の待遇は如何なりしやといふに、學問の開けゆくに随ひ、好況に向へる如し。昇平も久しければ、一躍青雲の好事もなく、諸藝二百石、無藝高無しとの俚諺もありて、通常學者の相場もその邊なりしやう也。白石鳩巣等はまた自ら別ものなり。

太田錦城いはく、我邦ニテ儒者ニテ上達シ、天下ノ政ニ預リシハ皇朝ニテハ吉備太臣菅亟相。武家天下ニハ大江廣元、新井白石唯四人ノミ也。儒學ヲ爲ス者ハ心細キコトナリ。サレ氏儒者モ侮ル可ラズ。菅亟相御子孫は加賀能登越中ノ三州ヲ領シテ今ハ諸大名ノ冠冕ナリ。廣元ノ子孫ハ一時ハ中國ノ十法ヲ領シ周防長門ノ二州ヲ領セリ。積善餘福、天道ノ與ミスルトコロヲ見ルベシ。是ニテ儒者ノ爲メニ氣ヲ吐クニ足レリ。

儒者たるものの口に堯舜を稱へ、井田社會の法を主張すれども、儒者たるが故に無據主張すといふもの多く、敬虔なる自信を有せしものは極めて稀なりき。往々にして無二の自信ありと見ゑしものは、多くは、頑迷固陋の徒なりき。かくして、堯舜の徒出でず、井田行はれず現世は理想の上古と日に遠ざかりゆく。此に於て彼等の多くは實際問題の解決にあたり迂僻にあらずんば、半可通となり、學者の價値愈下れり。ことに學者が學者ぶりたる風流好事の如き尤も風教に害あるものなりき。

古書書古器物を玩弄する骨董癖あり。梧窓漫筆上にその狀躰をのべたり。倘

書ニ玩物喪志ト聖人ノ大戒也。又器非用古、惟新トアルニテ書畫器物ノ名理ニ害アルヲ悟ルベシ。然ルヲ近年ハ奢侈ノ餘習ニテ學者學問シテ義理ヲ講ズルコトハ得知ラズ。唯ダ書畫器古器ヲ好ミ筆硯文房ノ具ヲ集メテ學者ノ態ヲ裝飾シ、無學不文ニテ藝苑ニ濫入シ、學者文人ノ名ヲ冒サント欲ス。學者モ其徒ニ化セラレテ、書ノ一葉ヲ讀ムニモ不及。讀ミタリ𪜈文學ヲ校スルニハ過ギズ。何等ノ義理何等ノ妙處アルコトモ知ラズシテコレハ宋版ナリコレハ古寫本ナリナド云フ事ニナリテ、典籍モ書畫器物ト一樣ノ玩物トナリ、學問モ風流好事英人古董ノ部類トナレリ。去ルガ故ニヤコノ二三十年ハ學者學問ヲ業トハセズシテ、書肆古董ヲ業トスル者多シ、惡ムベキノ甚シキ也。殷宋ノ漢書ヲ王元美錢謙益ナド高價ニ購リシコト見ユレド、コレハ學者ノ習氣ニテ好事ノ害ナリ。宋ノ孫之翰ノ名石硯ヲ買ハザルコト墨客揮犀ニ見ヘタリ。李格非文叔ガ李廷珪ノ名墨ヲ買ハザルコト墨莊漫錄ニ見ヘタリ是皆ナ古器賢士ノ卓然トシテ惑ハザル者也。サテ器物ヲ玩弄テ時日ヲ費シ金銀ヲ費スモノ其本源ヲ尋ヌレバ幼少ノ時物ヲ玩弄セル餘習ノ老テモ猶存スルニテ實ニ幼キ心ノ玩ビヲ不忘ナリ。老成ノ君子ヨリ此ヲ見レバ可

笑ノ甚シキコトナリ。去レドモ唯モテアソビニテ日ヲ消スル而已ナランニハ辨斥ニモ及バザレドモ相率テ天下華靡奢侈ノ大害ヲナストキハ辨明セズンバアル可ラズ。擧天下コノ惡習ニ染ムトキハ吾此言、門流ニモ及ボシ難シ。唯吾子孫タル者ハ古書書古器物ヲ以テ人ノ啗フ可ラズマタ人ヲ欺ク可ラズ。有用ノ學ヲナシテ、コノ無用ノ徒ニ交ル可ラザル也。

珍籍を骨董とし、書畫古器を愛玩するは、學者高尚なる嗜好の如くなれども、由來骨董癖は餘弊多きものなれは、その流行は斷じて阻絶せざる可らざるものたり。儒者中詩を弄する者のうち、ことに又この弊多かりき。現時の日本紳士骨董癖あるもまた積年の惰習也

本邦學者つねに粗豪の弊あることは益軒すでにこれを言へり。梧窓漫筆に、この時代の末に於ける學者豪傑病あることを指摘して肯綮に中れり。近世ノ學者ハ初ニ史記ヲ讀ミテ戰國ノ山師共ヲ見覺ル故ニ、先ヅ是ニテ豪傑氣象ヲ生ジ本分ノ民心ヲ失ヒ次キニ世説ヲ讀ミテ魏晉ノ放蕩者ドモヲ見覺ル故、コレニテ曠達ノ氣象ヲ生ジテ天分ノ良心、地ヲ掃テ滅盡ス。サテコレヨリ學問該博ニシテ字面ヲ

識リ、故事ヲ記シ、吾ハ博識ナリト、高慢ノ氣、日々ニ長ジ、世人ヲ見テ俗物トナシ、義理ニモ通ゼザル詩文ヲ書キ散ラシテ予ハ才子也、予ハ博物ナリナド、倨傲不遜ノ惡心惡行ノミ增長ス。顏之推ノ家訓ニ戒メタルコト、今ノ世、眼前ニ多ク湧キ出ヅ予故ニ今ノ學問ニテハ、百卷讀メバ百卷ダケ道ニ遠ク、千卷讀メバ千卷ダケ道ニ遠クナルト云フハ是ナリ。無學ノ人ノ貴キニハ非レドモ、學者ノ如ク天分ノ良心ヲ斷滅セザル故ニ却テ事ニフレテ良心發見ノ妙アリ。學者ハ良心掃地セル故天地ノ理ニモ暗ク、人道ノ理ニモ暗ク、昧然タル昏愚ノ人ナリ、聖人ノ經言モ、其蒙ヲ發スルコト能ハズ。ソノ迷愎ヲ復スルコト不能力故ニ近來大博識ト云ヘル人ノ行狀非人ト同類ナルニテ予言ノ僞ラサルヲ知ルベシ。況ンヤ其下ナル者ヲヤ。コノ後ノ學者ハ途轍ヲ改メテ聖道ヲ志スベシ。サテ此レ迄惡學ニ染ミタル者モ其本心ニ復スベシ。

學者世人ヲ視下シテ俗物ナリト云フハ一ノ惡癖ナリ。コノ癖コトニ形而上の學を修むる者に多し。儒者のうち多くは淸曠放達なるか恭謙に過ぎて村夫子となるか、兎に角俗社會と隔離するをつねとす。これ三百年間、儒者學風

の一弊なりき。

現實の社會と隔離するは決して採るべき學風にあらず。社會を指導し、改良するは學者の任也。つかず離れずの間に現社會に接觸するにあらずんば、學者は世に用なき者ともなるべく、また明確なる判斷力を養成するの舞臺を得ざるべし。學者須らく時務を識るべし。俊傑は則ち書生のうちより出づべき也。

牧民心鑑解序（齋藤拙堂）　司馬德操云、儒生俗士豈識時務。識時務者、在乎俊傑。雖然德操取儒生俗士一筆勾之。而別求俊傑之士。余以爲過矣。蓋俊傑之士、不可他求、乃在於書生中。但不可多獲已。

學風下りて、實用に適せず。教育は讀書と同義となり了れり。讀書生といへば、則ち學生なりき。かくして、彼等苦學中に得たるところは活社會とは風馬牛と隔たりたるとのみなれば、卒業の曉、官に入るも、私業に從事するも、世の波に對して茫然として望洋の嘆を發せざるは無かりき。學校を終りて學生が實地指針に迷ふは、教育の實利的ならざるが故也。この弊は今日に至りて猶ほ行はる。益軒や又ロックの主張せしところはかゝる弊害なからしめんとなり。活社會と縁なき教

育の弊をば、齋藤拙堂よくこれを指摘せり。益人意智莫如讀書……然而今世讀書之人、或任一職非迂腐不中用、則乖戾生事。世遂以爲讀書有害而無益。是非讀書之罪。蓋不善讀書之故也。夫書死物也。事活物也。固有不相合者焉。故學非獨稽古、亦不當不知今也。四代之禮不必修。三王之制不必傚。唯學其道不學其迹。察人情審事體。擇其宜於今者斟酌行之。是之謂善學耳。……聖王之造士既教以古訓、又示以時制。使學者曉時事。故學士中莫不可用者。今也學仕異途。靑衿之士、不得窺朝廷。其於時事懵乎不知。學之不若古、正在於此耳。……政事之在上者雖不可得而窺、其布在於下者可得而觀。學者宜博聞多見參考當世事、以蓄之胸中。庶幾所讀之書皆可以適用也。苟有志於此、則莫若周流天下身歷目擊。自民之好惡人之情僞謠俗尙習之微、以至田野產物之宜渠防灌漑之利、市聚通塞之方莫不通曉。交偉人豪士以長識見。嘗險阻艱難以忍其心性。知其所不識、益其所不足。是爲善讀書者也。……この論よく當代の時弊に中れり。書は死物なり。事は活物なり。人の識見は活事物にあたりて養成せざる可らず。何事ぞ儒生頭を故書堆裏に沒却して古人の糟粕を飽食して、自ら以て讀書生となすや。

當代の書生ことに禮法に粗なり。書生は、それにて宜しき也との考へ也。これぞ一種の豪傑病なり。梧窓漫筆に適切なる議論あり。學者ハ慷慨激烈ノ氣象モナクテハ事變ニ臨ミテ無用ナリ。故ニ是モ有タキ事ナレ𪜈、初メヨリ此ニ志アレバ血氣粗豪ノ氣ノミ增長シ、聖人溫良恭讓柔順ノ妙ヲ得ルコト能ハズ。或ハ狂簡ノ似セ者トナリ、或ハ狷介ノ似セ者トナリ、或ハ曠蕩ノ流トナリ、或ハ疎暴ノ人トナリ、要聖賢ノ道ニ入ルコト能ハズ。先ヅ氣象ラシキコトハ惡行ナリト心得テ君子長者ノ風ニ倣フベシ。書生は疎放にして禮法を修めざるを以て濶達にして、好望なりと社會一般にも解釋するに至りしこそうたてけれ。

士風衰頽此の如し。如何してこれを救はんや。王陽明曰く、嗟乎今世士夫計逐功名甚於市井刀錐之競。稍有患害可相連及者、輙設機阱立黨援以巧脫幸免。一不遂其私瞋目攘臂以相抵悍鈎摘公然爲之、曾不以爲耻而人亦莫有非之者。蓋士風之衰薄至於此而亦極矣…………今夫天下之不治、係於士風之衰薄而士風之衰薄、係於學術之不明。學術之不明係於無豪傑之士者爲之倡焉耳。（送別省吾林都憲敍）士風衰薄の世にも、豪傑の士起りて學術研究の機運を皷吹し人心に一道の光明を附與

するときは、社會生民の進運則ちよく期するを得べし。この時代に起りし豪傑は何人ぞや。意外にも志士仁人は、醫者坊主のうちに輩出し、洋學を輸入して、島國的思想界に五洲あることを知らしめ、日本の思想史に一新時期を劃するに至れり。これ極めて痛快なることに屬す。

橘窓茶話（天明六年一七八六）上。年少攻學者、能如甯越之用力。則十年工夫可以爲域內之雄矣。蓋每日作詩一首。每月作文三篇。讀書除四書五經外、一日讀半卷。積至十年、當得詩三千六百首、文三百六十篇、書一千八百卷。如是而學不成絡者、未之有也。今年少者名爲攻學、而十年之內能勾此數者千中難得一人。然則虛過歲月、實無一年工夫。與孟子所謂專心致心者殊矣。夫工夫之於業也、頃刻有所休歇、則不能以養活家口。是故寅而作、酉而輟不少釋乎。疾病則强之、事故則避之。如看花請酒、皆辭不赴。彼攻學者若能如此、則可謂眞用工夫矣。（說苑卷三、建本篇曰。甯越中牟鄙人也。苦耕之勞、謂其友曰何爲而可以免此苦也。友曰、莫如學。學二十年、則可以達矣。甯越曰、請十五歲。人將休吾將不休。人將臥、吾不敢臥。十三歲學而周威公師之。夫走者之速也、不過二里止。步者

之遲也、而百里不止。今富越之材而久不止。其爲諸侯師、不宜哉。
橘窓茶話は木下順菴門下の名流雨森芳洲の著作なり。芳洲堅苦よく學業を成就せしを以て、當代の學界を論ずるや、言聽くべきもの多く、ことに敎育上稗益すべき説も少なからず。その一二を抄出して參考に資す。

○鄕人或有誹之者、曰。臾將近八十、讀書不倦。是不自知其學之竟不能成也、可謂愚矣。曰、活一日、讀一日、務欲上前、乃吾黨之志也。學之莫能成也、吾知之久矣。

○一日誡諸生曰、老身叨據函丈之尊、動輙恣爲責讓、曰賢等不敏、此非自敏老身而獨不敏賢等也。老身之於賞契、一同不敏中輩行。但讀書曰久坐位較差耳。所謂聰敏者、必至程朱韓蘇乃極。然程朱韓蘇、未嘗不以不敏自嘆也。等而上之聖人亦未嘗無不敏之嘆也。故曰、士希賢、賢希聖、聖希天。蓋義理無窮故也。賢等於不敏言莫自恕莫自沮。而亦莫自滿也。徂徠敎人以盛氣、此一術也。然不知者、激厲未至、遽自許與。故不能如徂徠之精細。此亦不可不思也。一義之上、又有一義。同是理也。理於此而不理於彼。因事隨時、不可偏執。猶如碁法之變化不測、此之謂義理無究。

○余平素揭示書生曰、學者所以學爲人也。自以爲一生所得只有此一句。頃閱丘瓊山學的、有云、此乃尹侍講之語、朱子以爲至要。乃知原出於古人。私心忻喜、如獲至寶。吾十四五歲時、讀學的一過。蓋久而忘之。誤認以爲出於自己也。可見奧妙之言、古人未嘗不說耳。

○韓子有尊王賤霸之說。我人不知文義。遂謂霸是可諱之號。最爲可笑。夫莫尊於天子。其次曰公侯伯子男。皆有土地人民而傳世者也。王室無人國步艱難。當斯之時、有人焉修道行義、而有富强之國者天下推之、尊爲盟主、名之曰霸。上以維持王室、下以定集衆庶、下天子一等其尊豈有外乎。此乃出于時勢之自然、而不得已者也。三王以仁義、五霸以詐力。故韓子有尊王賤霸之說。故桓文人稱之以霸而不却。項羽以霸自稱而爲貴。向使五霸以仁義自居、則與文王之爲西伯同揆而不二。惟見德之盛、何可賤之有乎。由是觀之、以霸爲可諱之號者、謂謬矣。

○中庸所謂博學審問愼思明辨。乃程朱所謂究理之事、學道之要、除此別無他法。而篤行爲本。其中博字、人或錯認。至於篤字則泛然看過。蓋博者非博雜之謂

也。學者以專門爲務。不特漢代。故後世設科、能通九經者、謂之博學。
然乃此記誦之學、若眞學經書、則九經並皆熟讀詳味、深得其趣爲重。不必章々句々、瑣然背誦、如擧子家亦有何妨哉。其他如稗官小說之書、無暇及此。有何不可。……篤字爾雅固也。疏云厚也。物厚者固守也。禮記儒篤行而不倦。註猶純也。純壹之行。然則篤字有厚固純粹之意。論語曰、君子不重則不威、學則不固。非直爲篤行之說。然篤行之意彷彿可知矣。

○天下有二、曰才曰德。尙德者似乎迂腐。尙才者似乎聰敏。

○曰、天下之事、皆有直捷之道。彼未經練達者、徒事迂濶。曠日持久、及至老邁方能開悟、已不及矣。可恨。

○天下字何可盡識。惟十三經所有、未之識者、儒家之耻也。

○神道者三。一曰神璽、仁也。二曰、寶劍、武也。三曰鏡、明也。我東尙質、未有以文之者。雖然深信篤行而有得焉。則何必言語文章之爲哉。或不得已而欲求其說。則求之孔門六藝之學可也。所謂三器者本經也。魯之所述者我注脚也。

○或人曰、今人貪博學之名……………不過記得書名。甚者大學一篇、亦不能諳誦、可笑之甚也。余爲之赧然。

芳洲補傳

橘窓茶話上のうちに、曰、余素愛讀書、有如性命。少時孤身孑立、乏於衣食、日夜奔忙、竟無佔畢之暇。常念祿於王侯之家、奉公餘暇、恣意讀書、何快如之。雖在窮遠邊僻之邦、亦所不辭。既而筮仕本州。衣食稍足、左圖右史、手不釋卷。宿願於此乎愜矣。又得往遊異邦、親覽風俗、一切書義禮節、間有忽然省悟者。此非別處人所能。然則埋沒遼落、終老海國、非不幸也。況於主恩隆重、闔家安堵者乎とありて、芳洲が少時困家の餘、身を對馬に寄せし時よりの行掛りを思ひて天命に安んずるのあたり有道者の言と云ふべし。然るに是につき面白ろき資料あり。芳洲その才の學を以てして、空しく一海島に朽ち果てんこと如何にも殘念なりしと見へて、同門の秀才新井白石に書を寄せて、その盡力によりて、中原に出づるやうになりたきことを懇囑せしことあり。書數回、風濤のために達せず。そのうち一たび達するや白石の返書如何してか又た到達せず。芳洲これを

以て天命に歸し、また如何ともす可らずと嘆息せり。されは君侯の義理といひ、その後ち白石の零落もあり、芳洲も漸く老ゆるに及びて宿命に安んじて海島に朽つるも亦不幸にはあらずと自ら慰め自ら吊ふの言を爲せしものなるべし。右の書狀は本邦名家手束に載す。その眞蹟を得る能はざるを以て、眞僞を斷定すること能はざれども、事情さもあるべしと思はるゝ也。歷史事實研究の際、宜しく半面の考察を怠らざらんことを要す。

三宅尚齋の、默識錄(正德五年、一七一五)のうち、またよく時弊を穿てるものあり。その一二をあげて山崎派の意見を叩かんとす。

默識錄卷四(問諸生)　狃治世久矣。故物失度、財無節。比年米價賤、上下困極無可如何。方此時非大丈夫唯能抑其奢侈、奮然成大計。諸家宰臣減士員、止贈遺之類唯之務。不識計入爲出之術。徒俟米價沸騰之時、其謀亦拙。米價何時貴、諸物何時賤。空手待困極也爾。以是難諸家宰臣。皆謂學者徒讀書未嘗事。以是自禦不信人言。以學者所言、爲我亦已知之。而終不行其所知。可嘆哉。

或云大學生財之道、達古今之常經、而外乎此則所爲皆害天理之事。言之往々皆謂此分明無可疑。無可疑、何不爲耶。余謂諸家困極處之有術。須自學上理會、不然則是聚斂之術。

今之爲政者、猶拙工之修破居。柱礎碎而不問。棟梁撓而不知。但塗其榱題結其茆茨耳。自非剛斷英烈之人、則孰能改築其柱礎建立其棟梁。此語甚長。

方識大學平天下之道其本之在窮凡天下之理矣。

近年士風日衰、不知廉恥。有司者欺上欺下、以自利爲心。使是等人在職。隨所在爲害不測。若憂之人君當自去利心、使天下知義理之貴矣。今也所帥以利、而欠教學之一件。如此而欲有司之直而無欺上、可得哉。

天下之達尊三。爵齒德是也。我邦以爵爲尊而不知其二。遂以公家地下分尊卑。道之不明也、宜哉。

享保六年辛丑、將軍家置器以納天下之言、希有美事。士君子往々以書投其器中。以余觀於是、元是爲丘野市廛人設之。今士君子投言於其中。非學者進言、君上求言之躰。如是欲用、豈能信之哉、

王學之徒稱揚孝悌忠信庶人甚矣。以爲學問之術、無加于此者也。孝悌忠信固是人道之本。然聖人曰、忠信如丘者、而不如丘之好學者、何也。本實立、而無不惑知命之見、皆是小學底事、非大人之學。聖人說許多性命。如繫辭衆傳文言者何爲耶。亦是不可不知。

崇安縣學田記、文集七十九載之言。以浮屠之田歸之於學。蓋今世無學田。則無諸生之食。無食則無可學之資。以佛徒之田歸之於學、則不待求之於經常之外而足矣。今日建學養子之術、最上之策無他、如是而已。

壬寅秋八月朔日、重固發京師適于江戸、(由壹大守佐竹君之招) 道歷信濃木曾。大山巖々、松杉欝々、路屈曲、添川而行。所謂梯者、横千仭谿。驛館外、民居甚希。風俗淡而和、直而無詐。然自繁華之地觀之。實與禽獸相去不遠。無敎導之法也。詎如是聖王憂之宜哉。

余常言。今學者授之以一萬石地。恐治之在俗吏之下。蓋雖讀書講學亦無經世有用之學。如胡氏之意、則固其所也。指體用之學而言。朱子作魏塲恪字序、及送張仲薩序、詳言之。而其經世之學、亦不立其本、則無源之水其涸也可立而俟。

故豐淸敏遺事後序、丁寧之戒可見。

善相公（三善淸行）淸行意見封事。有請加給大學生徒食料文。上謂華人之道、以食爲本。又謂天下人曰大學是究困凍餒之鄕。皆是美言

劒術拳術之類學者所不事。只是匹夫悍卒之事也爾。若兵法弓禮則不可不知。

卷有翁云。古選俊秀入學。今擇天下棄才入學。宜今之學者、無足用者。伊川爲經筵時。諸臣以不近人情譏之。近人情三字甚謬人。以俗情爲人情。以人情爲話頭者、王學者流也。

我人常謂多事忽々無讀書之暇。是甚非矣。事不可畧。有暇無暇在于我耳。諸葛武侯身握重權當恢復之任。事之多爲如何。方孝孺爲之贊、曰、成敗紛然處之甚暇。可謂善贊其性行矣。……

孝孺云　師弟子之義、與君臣父子等。古人蓋甚重之。漢之時猶未變夏侯勝爲孝照皇后授經。勝卒。后素服五日、以報師傅之恩。夫以帝后而爲師傅服。群臣不以爲過。則當時之俗猶可見也。今我邦子弟子之義知者甚希。而在上之人尤不知其義。士氣不奮。聖道何以明。可哀哉。

この時代に一の奇傑の士ありて出づ。山縣大貳その人にして、名は昌貞、柳莊と號す。享保十年(一七二五)甲斐國巨摩郡に生る、武田氏の勇將山縣昌業の後裔也。大貳大義名分に明らかにして、志を皇室に存し。寶曆六年(一七五六)を以て江戸に來りしより、帷を下して諸生に講授し、陰に尊王の大義を唱ふ。竹內式部藤井右門等と相往來して、つねに文武を論せり。明和四年(一七六七)その兵學講義中に大不敬の語ありとして、死刑に處せらる。蓋し幕府の忌諱にふれしなり。その學術は經世有用を主とす。純乎たる朱子派にあらず。その著柳子新論は當代の時弊を痛論し、士氣の衰薄に及ぶ。この書、地中に得たる無名の古書に假托するを以て筆鋒犀利忌憚するところ無く、資料としてことに好しとす。その時弊を摘發し士風の衰薄を論難せるもの數條をあぐ。

正名第一。輓近以來、卿大夫一稱其官。不問其名。乃至士庶人無職者。亦皆濫冒內外官號。兵衛、衛門、助丞之類。自農工商賈爰與奴隸之卑、及戲子雜戶乞兒非人之賤、每々必於是。夫律之有法也私官犯官者、皆罪無赦。今若以法科之、天下幾乎無遺民矣。……凡如此之類、成俗成風、固非一朝一夕之故也。殿樣、御、侯、致仕

等之言語、別成一家、文字別成一義。乃縉紳諸士之間、日用通意、亦未知其何義。事々皆爾。豈非可笑可嘆之甚耶。雖然今之人生長其間、慣以爲常。則相唱々和々、似無不行者。若夫施之實事、則窒礙罣塞、不相通。於是更立一家之法、亦且顚倒侏離之習、黨薺無別、精粗無分。簡髮而櫛、數米而炊、推魯無文者、動靜云爲唯々見命、勸說雷同、復何條理之有。

得一第二。今夫衰亂之國、君臣二其志、祿位二其本。故好名者從彼、好利者從皆、名利不相屬而情慾分矣。即我徒將安依。願富者不貴、貴者不富。富貴不相得而威權別矣。即我徒亦將安依。於是則爲君於彼則爲臣。故出請者依違、不能定其是非。臨事者首鼠、不能決其進退。茫乎如在中野。洋乎如在中流。仁何由乎施、忠何由乎致。公侯皆然、士庶皆然。即我徒將安依。苟且之議定、姑息之令出。一以爲是、一以爲非。民之言曰令行三日、禁止三日、朝暮相變、旦夕相戾……且也今之人、聞婦有二心、則必曰婬矣。臣而有二心其如之何。夫誠如此耶。婦而貞者則多矣。士而忠者吾知其必無有也……

爲國計者。亦惟不如復官制以正其名。興禮樂以樂其實。君臣無貳、權勢歸一。

令行禁止。而後君子在位、小人有所歸也。是之謂得一之道。

人文第三。貧富固不屬皮毛。即人之辨之、唯衣是察。服美敬之服惡則侮之。禦侮之意競求其意。驕奢於是乎長矣。豈徒爲然哉。貴賤失其等而禮俗壞矣。士民患其貧、而德義廢矣。驕奢縱其欲而禍亂興矣。凡如此之類、其害不可勝計。是皆衣冠無制、而文物不足故爾。

大體第四。且士之志於青雲也、亡論才不才、善賄者得之。不善賄者失之。得失之際、憂懼交至。是以日走權貴之門、屑々乎唯幸之求。甚者至於破其產、傾其家俸祿不給、而鬻妻孥、罪惡自買其禍者。何其不智耶。如是之輩、固不知經藝之一端、奚足以擧治安之策哉。縱使其得居一官、所志不過財利。以財利之人執財利之權、財利何時已。是皆其害之大且可見者、曾無一人知其非者。豈非愚之甚耶。董仲舒曰、爲政之用、譬之琴瑟、不調甚者、必解絃而更張之、乃可鼓也。今也天下之琴瑟不調亦甚矣。是宜更張之秋也。機不可失也。擢士爲相、拔卒爲將、固無不可也。不若以義興禮以禮制人也。擧賢良之士誅諂諛之士、塞賄賂之途、開廉恥之端而後始可言治也。是之謂天下之大政。

文武第五。柳子曰、政之移于關東也、鄙人奮其威、陪臣專其權、爾來五百有餘年矣。人唯知尚武、不知尚文。不尚文之弊、禮樂並壞、士不勝其鄙倍。尚武之弊、刑罰經行、民不勝其苛刻。俗吏乃謂、用文之迂、不如用武之愈。爲禮之難、不如爲刑之易。古何足以稽。道何足以學也。是特蠻夷之言耳。殊不知有文事者、必有武備。禮樂之教、彊禦無當。率古之簡而由道之易也。……………

今也天下之爲士者、列位已廣、冗員倍多。亦唯便宜執事。非文非武、彼將何以爲任乎。邊豆之事、則不知也。軍旅之事、能出其謀者、蓋鮮矣。甚者修身不執一兵、而手如柔荑、顏如蕣花、俟駕而後行、俟茵而後坐。假使其騎駿執良、任折衝之事、則股已不勝鞍、而指亦不勝弦矣。若其兵士、則或取短長之兵、數經險難之地者間亦有之。然其爲長爲正者、素不聞韜鈐之教、而管轄無制、調練無法。則鼓焉而不進、金焉而不退、旌幟之不辨、號令之不聽。以此當敵乎、吾知其適取敗之道也。奚見夫所謂節制者乎哉。…………

由是觀之、今之所謂尚武者、亦特虛語妄說耳。文武之不可以相無、不其然乎、不其然乎。仲尼之言曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。如今之天下、豈特民爲然乎。乃

至鄉士大夫亦惟免之求、而曲從阿諛、一爲海內之俗、廉恥之心蕩然。又安責之君子之朝。嗟要之皆尙武不尙文之弊耳。

天民第六。當今之時士氣大衰。內無廉恥之心外無匡救之功。上廢天職下誤人事。蚩々與商賈爭利。妨農傷工殘害以稱威。飽食煖衣、安逸以稱德。曰食其粟曰用其器、不知所以報之。驕奢成俗身貧家乏、秩祿不贍、而仰給於商賈。假而不還、爭論並起。賈豎之黠於利少成如故、習慣如自然。先爲不可勝、而待敵之可勝。彈脣鼓舌、智巧百出。烏獲爲之怯、莫邪爲之鈍。況彼固是、而此固非。雖欲克之、其可得乎。且大商之於富也、居貨萬計、奴婢十數。家室器用、錦繡珠玉、皆我所不足、而彼則有餘。是以封君俛首、敬如父兄。先王之所命、爵位安在哉。德義之教、輟矣。是無它。官無其制也。…………

且其爲吏者、不學無術。唯知錢貨可貴、見利廢義。則商賈之權、上侮王公、下凌朝士。使工如奴隸視農如臧獲厚生之道亡矣。……若夫工者能制器物、以利天下之用者也。亦皆與商賈爭利、錐刀是競。則村皆麁惡器皆苦窳、不曰而成、不時而毀。唯欲易售、不欲其堅緻。要非不能爲也。爲此則富、爲彼則貧故也。況在官局者、多養奴

隷、稱爲弟子。彫琢刻鏤一出他人之手、而已不能正一規矩、服美食旨、兀顏自稱大匠、實是一賈豎媒財者已。是亦有實者無名、有名者無實、而利遂名而入。昔實而出矣。夫誠如此乎、剌猴瓊葉亦何益於養其身哉。故今之百工、即商賈之傭奴耳。何足以論巧拙也。……故今之民、身日勞而財日空。是以斷然乃謂。耕無益於食、織無益於衣也。士亦曰、學無益於身、業無益於家也。乃廢其事、而惟奇邪之從、譸張之務。於乎世之逐末者何其多、而務本者何其寡耶。

編民第七。近世承衰亂之後、編伍失法、戶籍不明。十室之邑、尚有不相識者、況通邑大都、無賴之民、亡命破家者、歲以千數。然去此居彼則不可知也。……雖然如僻邑寒鄉之俗、猶或存古質之風、怖官畏法則尚未爲甚矣。至于都下群聚之民、則輕蔑王公、威侮士人、視之如嬰兒、以竊其貨財、以掠其妻孥。詿誤以稱智、刼賂以稱勇。爲徒爲黨、以至于自樹名號焉。官所不能制、法所不能罰也。還假之力以追捕他盜賊。又用之謀以制他暴徒、則彼自誇其爲官、愈益傲侮天下之民。……

勸士第八。凡名一才一藝者、華一蒙擢拔、則無問能與不能、子孫奕葉、嗣爲一家之業、欲已而不能。是以强治其事、則不以此爲桎梏者蓋鮮矣。……後世官家寥々

乎無出奇才、而素餐居多者、職此之由。且也技藝之有嗜好不徒如酒色。則布衣背帶之士、破產學屠龍之術、殺身習彫蟲之事者、比肩接武于宇宙之間。則其在今日華門圭竇、寧無俶儻豪邁之才哉。而唯是冀北之群未曾遇伯樂一顧。則慷慨悲歌徒憤死于岩穴草莽之中者亦幾許人也。

安民第九。今之爲政者、概皆聚斂附益之徒。蒙其禍者獨農爲甚。若能用循廉之吏無奪農桑之利則天下食足矣。天下食足而後民安其業也。又用循廉之吏無縱商賣之利、則天下財足矣。天下財足、而後士安其職也。士安則國强。民安則國富。國富且强、天下之福也。夫然後禮樂可興也。賞罰可明也。是之謂安民之道也。是之謂長久之策也。

守業第十。士之祿不如農之利。農之利不如工商之富。工商不如巫醫。巫醫不如浮屠。而俳優倡伎別得一封疆。幾何外道、更開一乾坤。即民之汲々乎、孰能修其業而守其事者哉。逐利而定、隨慾而變。

通貨第十一。今天下之士太夫、託請得官。納賂取貴。則饗餐之族盤桓于廟堂之上。貪賺之俗、羅織于輦轂之下。故士庶人之贄、或破一家之產。鄉太夫之贈、率傾

一歲之俸。贈之者多而謝之者寡。而貨皆聚于威權之門矣。乃士大夫之欲立其身者、十室之邑、擔石之俸、奚足以養其妻孥哉。是以其志仕進者、唯欲其富羨其利。貪慕之情一萌、而廉恥之心罷矣。其害乎教化者一也。又其居權貴者、不必無慾。而贈之者不必無辭。則不得已而受之。及數贈數受、則不能必無回護。而薦之舉之。不必問其賢愚。是名稱選人、實爲貴官者矣。其害乎政事者二也。且士太夫之在官者。已以賄得之。則其於人、亦不能必無不然也。故善賄者好之。不善賂者惡之。宦官宮妾、乘之以貪其利。以逵其欲。忠信之士退而貪墨之俗進矣。是害乎風俗者三也。求事者唯乘彼欲、啖之以濟己事。則權勢之家、輸迹不絕。而罷官之門、雀羅可設矣。是其害乎人情者四也。權勢之家、其臣妾之有寵者、固亡論。已至於僮僕奴婢之屬。亦皆受其私而富其財。食肉衣帛、逸居終歲、奢侈過其分矣。是其害乎制令者五也。五者皆害乎天下之事而財爲之不通、貨爲之不足、豈可不禁乎。

利害第十二。衰世之爲政者、無文無武。禮刑並廢。不止無心於興其利。又無心於除其害也。夫無心於興其利者、必以自利。無心於除其害者、必以害人。害人自

利、害孰大焉。是以亂國之君、力利其國、以害人國。太夫力利其家、以害人家。士力利其家、以害其僚友。甚則君亦自利其身、以害其民。太夫自利其身、以害其家、是之謂自屠。其極也必至滅身而後已。故我東方之政、壽治之後、吾無取也。聖人憂其如此、制禮作樂、立中道、和務與其利、務除其害。衆庶可保、此屋可封。以求致天下之福也。

富强第十三。古稱國無九年之蓄曰貧。無六年之蓄曰窮。無三年之蓄曰國非其國也。夫其蓄積、豈特爲自養哉。亦將以救其民、備其難也。後世有國者、或無一年之食。是者逆折數歲之入、苟且不足、而取之太夫。太夫不足、而取之士。士不足而取之妻孥。豈啻國非其國耶。一旦奪之爵、使其盡償其債乎。雖易子拆骨、吾知不能給一飯也。夫如此。則何以能藩屛乎王室、而固其封疆耶。是以其士曰窮其民曰叛。忿怨激發、自不能無凌犯之心。然國固貧、兵固弱、不能屈彊自奮。屛息避之。則天下實似無容慮者矣。

各項所論、江戸中世社會の組織の弊源を論じて頗る肯綮に中れるを覺ゆ。教育は社會の情況に適合するにあり。大貳が社會改良を論ずるは、則ち教育の進歩を

促がすの聲なりき。士風の廢頽を慨き、富の勢力の發揚を憤り、社會の改進は、一に士氣の刷新にありて、士氣の刷新は專ら敎育によるべきことを絶叫せるもの、榊子新論の要領なり。前載するところ各項、須らく讀者の精讀せんことを望む。

第十六節　學派の紛爭は、當代の一要件なり　そのよつて起るところは、學術研究の進步によると雖も、一は士氣衰廢して、學者門戶の爭を開けるにもよるもの也眞理は一家の私するを許さず。門を立て流を爭ふは學術研究の氣運の衰へて、士氣の振はざることを證するもの也。前例すでに王朝學閥の爭ひにあり。今や又學者の爭は惡例を示して頗る明瞭なり。江戶時代にては、林家一門幕府の殊恩を蒙りて學政を掌り、大學頭世襲の餘弊として學界に藩閥を造るに至れり。人心すでに外を知らず。專ら井底に向つて、各眞理の專有を企てたるこそ島帝國の情勢なりきといふの外無し。

されば學者、眼界頗る狹隘にして研究の態度太だ低し。儒者中、眞面目に人道を研究すと稱して博識を忌むこと蛇蝎の如く、詩文を作らず雜書を繙かざるものあり。その弊や固陋移す可らざるものあり。また專ら詩文を事とし風流茶事に耽

けり清淡世俗に高ぶりて儒者の態度なりと思へるものあり。その弊や遊冶郎にあらざれば幇間に類す。これ等の諸弊を看破して、專ら學術研鑚に從事する人々も多かりしかど、大抵書中の人となりて卓上に經濟を論ずるのみ。有用の材極めて寥々たりしは、士氣振はず、敎育の方法、專ら讀書に拘束したりしによる也。梧窓漫筆にいふ。魏徴房杜を天子とせば堯舜文武には及ばすとも後世の大賢君ならん。韓琦范仲淹にても同じ理也。程朱は大賢なれども、天子とせば天下の人の明德を一々明かにせしめんなど云ふて、迫切にすぎて天下騷然として安かるまじ。寇準は大英雄なれども、天子とせば至て能く出來たるところにて漢武帝唐玄宗たるべし。多くは天下を亂敗する君たらん。儒者は天下を治むる道を學ぶ者にして、此理に疎く此事をなし得ざれば物置小屋をも建て得ざる下手大工と云ふ可しと。程朱の評能く當れり。程朱を學んで明德性理に熱中したりし者、大抵その末流のみ。儒學は政治倫理を主とするもの也。而してその期するところは學理の闡明のみにあらずして、壗梅の手腕にあり。堯舜文武周公孔子よりして、知行合一を終極とせざることなし。後世に王陽明の如きは支那學術の大統をつぎて遙か

に聖人に翺翔せんとする者也。然るに我が數多の儒者はこれを以て異端としその良知說は聖人の敎學に合せざるものとなせり。儒學は靈魂を說かず、永遠の生命を論ぜず。儒學に欠くところは換言すれば敎學として敎化の功を收め得ざる弱點は、一點活火の存せざるにあり。過去未來を措きて專ら現世實踐の道義を敎ふるこそ實は儒敎の特點なれどもその弱點もまた玆に存せり。世運進み人心彼岸の靈光を仰望するときに至りて儒敎は遂に滿足なる慰安を與ふること能はざるものなり。この點に於ては王陽明の良知說は進步せるものと謂はざるべからず、良知の指導は則ち神來(Inspiration)なりと謂ふを得べし。道德實踐の動機の根本は神來にあり。陽明の良知說は、學說の形式を以て、宗敎の實質を具するものなり。これ倫理敎として進步したるものなりと謂ふ所以也。然るに當代本邦の儒者、この點に想到し得ず。唯だ性理の闡明を以て倫理敎の目的を達せんとせるは迂僻の嫌を免かるゝ能はざりしなり。心學者が必しも高遠の學術を要とせず。知心見性と云ひて良知の指導を以て實踐道德の根本動機としたるは、則ち神來に着眼し得たるものにして梅巖が一夢大悟のとき全く神來なり。

古來英雄は皆な奇蹟あり。陽明の虎難を脫し、マルチン、ルーテルの雷火を免かれし如き近世にては尤も顯著せるものなり。奇蹟は則ち神來なり。儒者は奇蹟を說かず。その實、實踐道德は宗敎的勢力を待たざる可らざることを知るも尙ほ古來の形式に拘泥せる者多し。カーライル英雄崇拜論能く此點を論破せり。ことにルーテルを論せる一篇尤も能し。土井晩翠氏の譯書あり。讀者須らくこの種の書に就きて、心眼を開かんことを要す。

無聲無臭唯だ獨り知るのときに、天外聲ありて吾が靈魂を覺醒するものあり。これ則ち神來なり。基督敎に所謂神の聲。儒敎に云へる良心の命これ也。この命に從ひて違はざるは則ち眞神を拜するもの也。宗敎に於てはこれより悟入す。而して儒敎に於ては天を說きて神來にくはしからず。則ち性理の說愈進みて、愈實行に遠ざかるに至る所以也。徒に實行に遠ざかるのみにあらずして、精神の靈活を欠ぎ覺醒の力を消耗せしむ。太田錦城の云へる聖經は雲表にあるが如く而して身は糞土の中に住せりといふものゝ則ちこの境涯なり。こゝに於て儒者は唯だ古經註釋詩文風流のうちに埋沒し、或は空しく天下國家を論じて、道學を以て產

とせる一種遊食の民を生じ、進みて世務を啓くことなく退きて一身を潔くする能はざる徒輩を出し、學者といふ語のうちには尊敬よりも一種輕侮の意味を含みて用ひらるゝに至れり。

儒者多くは僞善にあらざれば風流家なり。僞善は惡には勝れり。そは人をして道義の尊敬すべきを知らしむ可ければ也。風流家は何等の用無し。國民進取の氣力勞働の美風を損害すべきもの風流好事に過ぐること無し。余は儒者風流の弊の社會に殘せる害毒の極めて大にして、今に至りて猶ほ餘毒の拔く可らざるもののあるを惡むものなり。

新約全書に、學者の態度に對する基督の訓言あり。茲に抄出するのことに適切なるを思ふ也。

馬太傳第廿三章。厥時イエス人々と弟子とに告げて言ひけるは學者とパリサイの人はモーセの位に坐す。故に凡て彼等が爾曹に言ふところを守りて行ふべし。されど彼等が行ふところを爲すこと勿れ。そは彼等は言ふのみにして行はざればなり。また彼等は重くかつ負がたき荷を括りて人の肩に

負はせ、己等の一の指をもて之を動すことをすら好まず。彼等の行はすべて人に見られん爲にする也。その佩經を幅廣くし、その衣の裾を大にし、また筵席の上座會堂の高座、市上の問安、人々よりラビ、ラビと稱へられんことを好む。爾曹はラビの稱を受ること勿れ。そは爾等の師は一人則ちキリスト也。爾等は皆な兄弟也。また地にあるものを父と稱ふること勿れ。爾曹の父は一人則ち天に在すものなり。また導師の稱を受くること勿れ。そはなんぢ等の導師は一人則ちキリスト也。爾曹のうち大なる者は爾曹の僕となるべし。凡そ自己を高ふするものは卑せられ、自己を卑するものは高くせられん。
噫、爾曹禍なるかな。僞善なる學者とパリサイの人よ。そは爾曹天國を人の前に閉ぢて自ら入らず。かつ入らんとする者の入るをも許さゞれば也。
噫なんぢ等禍なる哉。僞善なる學者とパリサイの人よ。そは爾曹やもめの家を呑み、いつはりて長き祈りをなす。これによりて爾曹尤も重き裁判を受く可ければ也。あゝ禍なる哉。僞善なる學者とパリサイの人よ。そは爾曹あまねく水陸を歷巡し一人をも己が宗旨に引入れんとす。すでに引入るれ

ば、それを爾曹よりも倍したる地獄の子となせり。嗟なんぢら禍なる哉。瞽者なるてびきよ。爾曹はいふ。人もし殿を指して誓はゞ事無し。殿の金を指して誓はゞ背く可らずと。愚にして瞽なるものよ。金と金を聖からしむる殿とは、いづれが尊き又いふ人もし祭の壇を指して誓はゞ事なし。その上の備物を指して誓はゞ背く可らずと愚にして瞽なる者よ、禮物と禮物を聖からしむる祭の壇とは孰れか尊き。それ祭の壇をさして誓ふ者は、祭の壇及び其上のすべての物をさして誓ふ也。また殿をさして誓ふ者は殿及びその中に在すものを指して誓ふなり。また天をさして誓ふ者は神の寶座および其上に座する者を指して誓ふ也。嗟なんぢら禍なる哉。偽善なる學者とパリサイの人よ。そは、爾曹、薄荷、茴香、馬芹の十分の一を取り納めて律法の最も重き義と仁と信とを爾曹はすつ、これ行ふべきもの也かれも亦すつ可らざるものなり。瞽者なる相者よ。なんぢらはぼうふりを漉出して駱駝を呑むもの也。あゝ禍なるかな。偽善なる學者とパリサイの人よ。爾曹杯と盤との外を潔くして内には貪慾と淫慾とを充たせり。瞽者なるパリサイの人よ。

なんぢら先づ杯と盤との內を潔くせよ。然らばその外も亦きよまるべし。嗚なんぢら禍なる哉。僞善なる學者とパリサイの人よ。爾曹は白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども內は骸骨と諸の汚穢にて充つ。此の如く爾曹もまた外は美しく人に見ゆれども內は僞善と不法とに充つ。嗚なんぢら禍なる哉。僞善なる學者とパリサイの人よ。爾曹預言者の墓を立て義人の碑を飾れり。又た言ふ。我等もし先祖のときにあらば預言者の血を流すことに與みせざりしをと。されば、なんぢらは預言者を殺せし者の裔なることを自ら證す。なんぢら先祖の量を充たせ。蛇蝮の類よ。爾曹いかで地獄の刑罰を免れんや。この故に我爾曹に預言者と智者と學者とを遣はさん。或はこれを殺し、また十字架に釘け、または其會堂にてこれを鞭ち、或は邑より邑へ逐苦しめん。そは義なるアベリの血より殿と祭の壇の間にて爾曹が殺してバラキアの子、ザカリアの血に至るまで地に流したる義人の血は凡て爾曹に報來らんが爲なり。われ誠に爾曹に告げん。この事みな此代に報來るべし。嗚ヱルサレムよヱルサレムよ。預言者を殺し爾に遣さるゝ者を

石にて撃つ者よ。母鷄の雛を翼の下に集むる如く、我なんぢの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや。されど爾曹は好まざりき。視よ爾曹の家は荒地となりて遺されん。われ爾曹に告ん。主の名に託りて來る者は福なりと　爾曹の言はんとき至るまでは今より我を見ざるべし。

徂徠旗を文壇に建て雄才卓識、一代に横行濶歩せしより諸儒皆俛首して、よくこれに拮抗する者無し。一時韓使の江戸に至るや浩道出で應接する者皆蘐園の徒なりしといふ。以てその門下の盛んなりしを知るべし。然るに彼簀を易ふるや、五丈原頭に大星墜ちしが如く、諸儒爭ひ起りて彼を攻撃し以て名を爲す者多かり。徂徠は生時、文壇に研究の題目を寄與したるのみならずして、その身後には更に多くの問題を留與せり。徂徠は朱學派を排撃せり。朱子學者は一齊に彼を攻撃せり。而して朱學派のうちにも、闇齋派の如きは、自ら一箇の特色ありて、また他の朱學者と相抗爭せり。程朱學復古學の外に折衷學派ありて出づ。榊原篁洲はその鼻祖なりき。篁洲は木下順菴門下の逸足なり。このごろより各派相抗爭して、學界の運動漸く激甚なり。こゝに一の排斥すべきことは各派の抗爭が單に眞理の

討究にはあらずして、情實の爭なることこれ也。かくして互に門戸を張りて、屹然師儒と稱して、一概に他を排斥せるは、王朝學閥の爭と擇ぶところなかりき。駿臺雜話にいはく。今東西兩都の儒者を見るに多き中には正學の志ある人もあるべけれども、大かたは自ら尊大にして、師儒と稱しつゝ、我こそ聖賢の道を好むといへど、たゞ論說をつとめ著述を衒ひ、これをもて世に傲り名を釣るには過ぎず。もとより道に實得の功なければ、もし眞の聖賢に逢はゞ目をかへして相見んとぞ覺え侍る。しからば日ごろ聖賢の道を好むといふは、葉公が龍を好むに同じかるべし。晏嬰が仲尼をそしり、蘇軾が程頤をにくむと。考へ見給へ。ひとりは齊の賢人、一人は宋の名臣にて候へども、それさへかくの如し。况んや二子に及ばざるをやと。當代學者の紛爭は年一年と盛んになりゆけり。同書にまた學術邪正の論をなしていはく。今世儒者朱子を議するに三等あり。第一等は陽明良知の說を祖として朱子を議するあり。當時朱學の弊多くは文字言語にもとめて、內省の工夫やゝ少なきを見て、朱子格物の說を義外とするほどに、良知を標的として、一向に內省につとめしむ。これその意よからざるにはあらず。されども朱子格物の說、良

知を外にするにはあらず。事物に即きて良知を致すなり。……今朱學の弊を改めんとて格物窮理を廢するは朱子の意を知らざるのみならず、橋柱過直といふべし。それも亦まがれる也　第二等には理氣體用などの説孔孟の言及ばざるといふに據りて朱子を議するあり。むかし孔子性相近しとの給ひしに孟子に至りて性善を論じたまひ、その外、養氣夜氣の論など唐虞三代の書に沙汰もなく、もとより孔子も似たる事をもの玉はざりしかども、宋の諸先生、その旨の聖人にもとらずして毫髮の疑ふべきことなきを見つけられしほどに、先聖の未だ發せざるところを發すとて、ことに稱嘆せられけり。況んや程朱のとき、孔孟の世を去ること遠し言を撰び論をおこし道を明かにするに急なり　道理に於て違ふことなくば何んぞ必しも規々として古人の言を踏襲すべき　今朱子の説孔孟の言はざるに出でなば其意を深く考へ究むべしもし。未だ合はざるところあらば、暫らく疑を欠くとも可なり。然るを已が心にあはぬとて、孔孟の宣はざるに事よせてにはかに大賢の説を輕々しくそしるこそ、その學識の淺陋なるも知られ侍れ。中略第三等には、放蕩を貴び名權をいとひ、專らに文辭典籍を學とし一たび程朱居敬窮理の説を

きゝては腐儒の常語とて相ともに嘲笑ふほどに學者修己の道に於て講ずべきものとも思はず。その議論を聞くに不急の察無用の辯說々として人耳を喧しうせざるは無し。何をか取り擧げていひ出すべき言の葉にせん。たゞ太息に付してやみなまし。……俗學の弊もこゝに至りては桓公の疾の日に深きが如し。儒に扁鵲ありとても療治の手なかるべし云々。朱學派に對する批難に就きては鳩巢の辨明また至れりといふべし。その意中、古學派を以て第二等、に護國派を以て第三等に擬したりと見ゆるなり。

學界の運動漸く激甚となれるは、則ち學術研究の機運漸く進み來れることを證するものなれども、一には學者唯だ島帝國の内をのみて世界を知らす、眼界のひとへに狹隘なるよりして、蝸牛角上の紛爭を起したることをも知らざる可らず。故にその爭ひや眞理の研究にあらずして、屢々情實の爭となる學閥の爭則ちこれ也。學閥の紛爭が敎育界に及ぼす害毒の多大なるは寧ろ言を要せざるなり。されば學派の紛爭は、學術研究の進歩を促がしたりと言はんよりも、その敎育上に及ぼしたる害毒の大なることを知らざる可らず。

洋學の輸入

吾邦に於ては、かくの如く學者徒らに學海の中に汲々たる間に、遠西の文運は日に駸々として進み、歐洲學海の餘波は延きて長崎の埠頭を打ちつゝありき。このときに當り本邦文運の進歩のために、皇天一の偉人を生じて吾が思想界の木鐸とし教育史上に新生面を開かしめたり。そは何人ぞや。洋學の開祖たる前野蘭化先生實にその人なりき。

第十七節　洋學の輸入はこの時代に於ける重大なる要件の一なり。泰西文運の進歩は、歐洲列強の競爭をして日に激甚ならしめ、西半球に於ける舞臺の漸く狹隘ならんとするを感知せる彼等は、東方に向つて新境域を開拓せんとするの趨勢を現はし、その運動の餘波、日本に波及するに至れるは蓋し世界の大勢なり。このときに當り、我國民は堅く自ら鎖して海外の智識の輸入を防ぎしかども、すでに長崎一港を許して貿易の港としたれば、彼地は實に日本の眼なりき。馬太傳にいふ。身の光は目なり。若なんぢの目瞭らかならば、全身も亦明らかなるべしと。されば、當時の日本は、堅く甲へる人の目ばかり光れるが如く、或は黑衣著けたる人の目のみ淸しきにも似たり。眼明らかにして視得る人の自ら閉ぢて生きながらへん

ことは太甚しき苦痛なり。而して眼より入り來れる現象によりて精神を動かさずして已まんことは、一層大なる苦痛たるのみならず、また不可能の事に屬す。當時の日本はすでに長崎てふ眼を有して戶外を望み見たるが故にこれによりて心を動かさゞること能はず。眼すでに明らかなれば帝國全般もまた隨つて明らかなるに至るべきは自然の勢なり。而してかの視神經となりて精神の動作を催進したるものは則ち洋學者にして、洋學者の開祖は蘭化先生なりき。

玆に洋學開發の畧史を語るべし。抑も本邦洋學の起源は遠く、十六世紀のむかし足利將軍の末世に、洋人の來航せしときにあり。このとき來航せしは西班牙葡萄牙の二國にして當時これを南蠻と稱せり　そのころ南蠻より吾邦に輸入せし學藝は天文醫藥、建築、武器等なりしが、洋敎の禁ありて後ちは天文醫藥のみ殘りき。西、葡二國につきては英吉利及び和蘭人來航せしが、彼等は貿易を專らとして敎法を傳へず。その後、英人自ら辭し去るによりて、吾邦は和蘭一國とのみ交際せしかば、このころより幕末までの洋學といふは蘭學の一種にかぎれり。

十七世紀の半ごろ長崎の人に、林吉左衛門、小林義信ありて天文曆算の學に通ず。

官暦に西暦千六百六十三年十一月朔に日蝕あるべきことを載せたりしを見て、その當らざることを豫言せしが果して然りき。その後ち西川如見一六四八―一七二四は天文學に精通せるを以て、將軍吉宗に謁見せり。これ泰西天文數學の起源ともいふべし。

醫學は、その術のみ諸國に存して、蘭法と稱し來れり。專ら外科なり。十七世紀の末に長崎に大通詞西玄甫、楢林豐重ありて泰西醫術に心を潜めき　玄甫は江戶に來りて官醫となり、豐重は長崎に留りて楢林流をはじめたり。歐洲醫學は外科よりして開け始めたるなり。

玄甫は蘭人より卒業證書を得たり。これ本邦人の學術に於ける卒業證書の嚆矢ともいふべし。そは本邦にては從來武術には免許狀ありしも、學術には全くこれ無かりしを以てなり。

かくてこれより蘭法醫の大家は續きて江戶に來りて將軍家の侍醫となりしより隱然洋學輸入の端をひらけり。これ等諸大家は皆なその術に通ぜしみにて、原書を讀破することは固より能はざりしなりき。

十八世紀のはじめに榮えたる新井白石は、將軍の命を受けて來航の羅馬人及び和蘭貢使につきて海外の地理風俗を問ひ、西洋紀聞その他の著書あり。白石は自ら蘭語を讀みかつ話すことも能はざりしかども始めて海外の事情一斑を國人に紹介して近世洋學發達の動機となりし偉功あり。世に往々白石を以て洋學の開祖となす者あるはこれを以てなり。

これまで蘭法醫學が外科のみを傳へたるは禁書の令行はれたるが故なり。長崎に世襲せる通詞ありて、蘭人に應接して事を辨ずれども横文を讀みかつ書くことを得ず。口頭にて傳習せるものを諳記するかまたはこれを假名にて手帳に書きとめたるものを復習する位のことには眞に口耳の學問なりき。外科醫學の開けしわけは、和蘭より來朝せし人々のうちに醫家少なからざりしかば、通詞その術を見習ひて、その法を傳へたるなり。これより矯黠の徒その術の奇にして糊口に資すべきを喜び千里笈を負ひて長崎に至り、その家に入りて、その術を受く。後來これに倣ふ者數十人。各門戸を張り妄りて和蘭外科者流と唱へその流派も甚だ盛なりしかどももとこれ見習學問たるに過ぎず。天文地理測量暦算等もみな同

様にて、これ等に關する學問の此ごろ傳はりしは皆な支那人の譯書によれりし也。西川如見の著、増補華夷通商考、四十二國人物圖說等を見ばその智識の程度も大概推測さるべきなり。　四十二國人物圖說の圖書は紅毛人持來れる圖により、その圖解は長崎古老の談話によれりといふ。　すべて和蘭の醫術工藝はその奇巧なること人目を喜ばしゝかば、國人その製作に倣ひて擬製するもの少なからず。　市井名を釣り利を射るの徒、偶奇巧美觀のものあれば、則ち名を彼に托し路傍に塲を搆へ招牌をかけて客を呼ぶに至れり。　奇品、奇草瑣細のものに至るまで、人の見ること稀なるものは皆和蘭の名を冠らしめざるは無し。　或は世に「和蘭好き」と稱する徒ありて、多くは富貴驕奢の人にして、器械書圖の觀るに足るべきものあれば、さらに價の貴きを厭はず力めて華美を逞しくせんと欲し、文房に並べつらね徒らに美觀に供するのみ。　かくの如きこと百有餘年。　その間和蘭學術の美を慕ふ者なきにあらざりしかども、その長をとりて我が短を補はんと企てたるものなかりしは惜むべきことなりき。　天その道を啓かんとして、人そのときに逢ひけるにや、時機は八代將軍吉宗に逢着せり。

吉宗のときに青木昆陽あり。新井白石より少きこと四十歳也。幕府の吏員にして官藏の書籍を司どる。吉宗將軍は天文學を好みしが和蘭書籍を見てその挿圖の精密なるに感じその內容をも知得したき志を起し、昆陽に命じて蘭語を學ばしむ。昆陽これより每春一度づゝ江戶に拜禮に來る蘭人に付添ひ來れる通詞どもより少日の滯在中に蘭語を傳習せしが、繁雜寸暇も無き間の事なれば、しみ〴〵學ぶべきやうも無く。數年を重ねて多少の單語とアルファベットを書き覺えたるのみなりき。されど、これぞ江戶にて蘭語講習の濫觴なりき

吉宗が天文を好みしは禁書令を解くの動機となれり。これより以前には洋書の舶載を禁じみな禁書と云ひしも吉宗は泰西學術の採るべきを知り、耶蘇教書の外洋書の舶載を許せり　その後らまた蘭人に命じて、歐洲各國の風說を報ぜしむ。これを和蘭人風說書といふ。西洋新聞紙の本邦に傳來せる起源なり。されど未だ一般に洋書講習の事はなかりしが通詞西善三郎、吉雄幸左衞門等申合はせけるは何卒吾々計りも彼國文字書籍を讀み習ふことを得ば彼我事情一層明瞭なるを得んとて、長崎奉行に願書を出してその許可を得たり。これを長崎通詞の蘭書を

讀み習ふ始めとす。これ等の通詞は、居常蘭人に接するを以て、自然その語に熟達し、蘭語を學ぶ者は、一たび長崎にゆきて通詞の指南を受くることゝなれり。延享元年(一七四四)青木昆陽將軍吉宗の命をうけて長崎にゆき、蘭人及び通詞等と謀り蘭書を講習せり。これより先き長崎通詞が蘭書講習を始めたるは、唯だ長崎奉行の許可を得たるのみにして、未だ將軍の公許を得ざりしかば、西、吉雄等は昆陽の來遊を好機とし、これに依賴して蘭書講習のことを將軍に申請して公然たる許可を得たり。これ洋書講習公許の始めにして、一七四五なりき。昆陽は長崎に滯在の間に、單語四百餘言を習得て、文字の體制、言語の呼法、語路の意味等を略ぼ了解して和蘭語譯、和蘭文字畧考等の著述あり。されど二三の緒言、未だその要領を得ざりしかば、更に講習の方を開かんとして歸東せしに、恰も吉宗薨去の不幸に遭遇せり。

昆陽は蘭語を知りしのみにて、蘭書をば讀む能はざりき。左の西洋紀元の記事は、その勞力を知るべき好材料なり。倘ほ思ふに自ら蘭人に問ひしか或は通辯によりしか。なほ推して紀元の說明を聞く能はざりしか。

和蘭無年號(昆陽漫錄)　和蘭は年號なし。今年(寬保二年)なれば千七百四十二

年といふ。さて開國よりの年數には少なく見ゆる故和蘭人へ尋ねしに開闢よりは五千七百四十六年といふ。千七百四十二年は中興の開國よりなるべし。

蘭書講習は公許されしも、そは長崎通詞のみにして、一船の人は、醫師の外はなほ遠慮すべきことなりき。されば或本草家は假名書きの紅毛談といへるを著はしてその中に和蘭の記事を掲げて、廿五文字を彫刻せし故を以てその書は絶版を命ぜられたり。江戸の醫師某は長崎に遊學し彼地にて廿五文字を習ひ、かつその文字にて、いろは四十七字を綴り合はせて認めて貰ひ歸り、人に誇りて蘭書も讀み得るやう云ひふらせしを人みな珍らしきことに思ひたり。中川淳菴などは、この男より和蘭文字を始めて習ひしなり。當時江戸に於ける洋學未開の有樣はこれを以て、その一斑を推知するに足るべし。

二百年前洋行の蘭法醫

第十八節　蘭化先生等の勵精によりて解體新書世に出で、歐洲の醫學こゝに始めて本邦に紹介され近世醫界に學術的研究の曙光を放ちし前に一蘭法醫ありて出づ。蘭書の禁極めて嚴なりしときに當り、國法を犯して和蘭に密航せしなりし

かば、その事歴を韜晦して終りしかども、醫學及び洋學發達の歴史に於ては埋沒す可らざるものなりといふべし。熊本の博品館にゆきし者は、二百年前和蘭より將來せし外科器械の陳列されたるを知るべし。その將來者鳩野宗巴則ち其人也。

鳩野宗巴は、本姓中島氏。その先代より毛利氏に事へて足輕頭食祿五百石なりしが少時故ありて長藩を浪人して、長崎に來住し成長するに隨ひて、いつとなく出島の和蘭屋敷に出入することゝなり、一とせ蘭人の歸國するに誘はれて、彼地に密航するに至れり。宗巴の生時は寛永十八年一六四にしてその歐行は寛文ゝ貞享の間にありといふ。鳩野氏の家系にも、この事は詳記せず唯だその家に口傳せしのみなりき。宗巴すでに和蘭に至り醫術を學ぶこと三年にして、歸國せしが、その事歴を韜晦せんが爲めに、當時長崎の出島に在留せし蘭醫安流滿周の門に入りこゝにて蘭法醫學を傳習したりと稱し、その名も宗巴と改めて(初名長三郎)大阪に移りて開業しそこにて元祿十年閏二月十八日(一六九七)五十七歳にして病歿せり。宗巴在世中は、その醫術廣く世人に稱賛されて嘗つて肥後の細川家の依賴により、その鍾愛の鴿の病を治療せしことさへありて、そのこと圖らず評判となり、人々宗

巴を呼ぶに、鳩之醫者を以てするに至りしかば武士の家に生れて刀圭を事とする以上は、宜しくその姓をも改むべしとて、自ら鳩野と改姓し、鳩野宗巴と稱して、子孫その名を世襲せり。

宗巴は和蘭より歸朝せしときに必らずや多少の書籍を將來せしなるべきが國法を恐れてその家に傳へざりしなるべし。外科諸器械の外には、宗巴の將來せしといふものは傳はらず。宗巴の醫術を知るに足るべき著述記錄等は數多存せり。宗巴の子孫細川侯に事へて藩醫となり連綿今に至りて、なほ宗巴と稱す。そのうち初代三代、七代の三人醫道特に盛んにして、七代則ち先代宗巴は尤も盛名ありき。それは鳩野氏に傳ふる醫書中には、五代七代等の研鑽になれるものも尠なからざれども、そのうち產科及び膏藥の如きは初代を祖述せるものなりといふ。金瘡精義一冊は宗巴の研鑽の結果なり。

金瘡精義序。　松水軒巴翁先生所撰之金瘡治方一帙者、能得外科家流之要領者矣。　先生曾遊學于肥之前州長崎津、每謁于南蠻阿蘭陀之妙工。　則問經驗之治法。　亦請安流滿周、賀周婉流兩醫而求私藏之藥方。　轉閲古人方書多記倭俗。

之論說日吞月諸沈潜不已矣。

貞享甲子孟夏(一六八四)庚申長崎之散人　出島蘭舟　謹誌

この書中載するところ阿蘭陀金瘡主方　賀周婆流傳金瘡主方疵燒酒洗主方。安流滿周傳金瘡主方　南蠻外醫傳金瘡秘方なり。　賀周婆流傳金瘡書の中に疵燒酒洗主方を載す。　そのころの消毒方は酒精消毒にして則ち燒酒を用ひたりしなり。

先づ燒酒を溫め木綿にて浸し、疵をたて洗ふ也。洗ふとき疵のうちにある古血の固まりを指にて取除け、其後切針にて疵の眞中先づ一針を縫ふなり(下略)　賀周婆流傳金瘡書。

今日の醫術の進歩には比す可らざるも外科手術は案外早く開けしものにて隨分高尚なる治術も名醫の熟練と工夫とに由りて遂行されしこと尠からず。　鳩野氏初代及び七代宗巴の如きは其人々にして七代宗巴の缺脣治術の如きは巧妙にして創見ある手術と云ふべし。

產科に關する書も亦少からず。　產科輯要一冊は蘭醫學に本づき鳩野氏數世研究

の結果を輯めたるものなり。その中に辨骨度の一節ありて、古來婦人の横骨は開合ありて臨盆に及んで開き、未だ開かざる等の說及び甚しきは横骨を開くの藥劑ある等の妄を辨明し、硬骨軟骨を說明せり。これ等は確かに西歐醫學を輸入せるものなり。膏藥は古來本邦に專ら行はれて、現今も種々秘傳の看版の下に民間に流行するものなるが當時歐洲にても流行して、初代宗巴は實に數多の膏藥製法及び藥研を將來したり。活人堂膏藥方函は其製法を輯めたるもの也。活人堂は鳴野氏の號なり。初代より傳ふるところの膏藥にして今尙ほ行はるゝもの三あり。バジリコン。アルセイ。カンフラトン。等これ也。さて又た膏藥を塗抹する紙をば丸く切ることに就きての說明に曰く、アルマスカスパルの說にいふ元と世は丸くして陽輕くして天となり陰重く沈みて地となり云々と宗巴は世界の圓きことを知れりし也。すでに此一事以て蘭法醫が鎖國の舊世界にひとり科學的智識に富めりしことを知るに足るべし。

初代宗巴は其事歷を韜晦して世を終りぬ。當時は黴菌の發見以前なればこの一事は取除き及び內臟外科は手を下すこと能はざりしが彼は腸滿等の手術は之を

能くし刀の消毒をも知りしなり彼かくの如くして我科學界に一道の光明を附與しながら遂に顯著ならず。子孫世々肥後藩に事へて今なほ熊本にありて家道盛なり。去三十四年夏余往訪して史料を得て玆に洋學輸入の先驅者を傳することを得たり

前野蘭化

第十九節　天。實に蘭化先生を下して洋學開發の木鐸となせり。

蘭化先生は豐前中津藩醫前野良澤にして享保八年江戸に生る(一七二三)姓は源名は熹。通稱は良澤といふ。老後自ら號して蘭化といひ、その堂を蘭化亭といふ。蘭化とは和蘭化身の義にして、元と藩主の付與せし諱名なり　蘭化幼にして孤となり伯父淀藩醫宮田全澤に養はれて人となれり　全澤博學の人なりしが、性奇人にして良澤を教育せしところも亦非常なりしといふ。其教に人は世に廢れんと思ふ藝能は學び置きて末々までも絶ゑざるやうにすべしと教へられしよしその教に違はず蘭化は天資豪邁にして、堅忍不抜の風あり。常に好んで異書を探り奇思に耽る。その性世の未だ發せざるものを發せんとするの癖ありき。一日同藩の知人蘭書の斷篇を見せたるに蘭化忽然として謂へらく彼も我も耳目鼻口

の人也同體の人の錄するもの何んぞ讀み得可らざることあらんやとて、洋品は骨董視され、紅毛談は燒かるゝ世の中に洋書を讀破せとんの大勇猛心を起しぬ。幸に昆陽先生その學に通ずと聞き、紹介を求めて其塾に就き、日夜ねんごろに其書を學べり。昆陽其篤志に感じて、其蘊を盡くして傳へしといふ。蘭化時に年四十七。洋書講習は千古未發の大業なれば、容易に會得し難く、夢寐に勞しぬれども、更に其事成らざりしが、恰も好し、一とせの春、大通詞吉雄幸左衛門和蘭貢使に隨ひ、參府せしとき、中津侯の母君不慮の事にて御脛を挫折せられしことあり、邸中大騷ぎにて彼是醫師を招かれしに、幸左衛門も亦招かれて、治療を施し幸に順快せられたり。此時より蘭化は吉雄と格別懇懃の間柄となりぬ。この事、蘭化の大業を成就せしには與りて大に力あることなり。其後蘭化は藩主の許を得て長崎に遊學し、專ら吉雄、楢林等の大通詞に從ひ、精一に蘭語を學び、昆陽の傳へしところを增益して漸く七、百餘言を暗記せり。これ當時にありては比類稀なる苦學にして、吉雄等も痛く其篤志に感激せりといふ。

解躰新書序。中津官醫前君良澤者、問余乎崎陽。余視之豪傑士也。其學之也亶

勉孜々終晷不倦。余感其篤好盡所蘊而傳焉。爾後出藍之器不啻焉。及其歸乎東都、與一二同好士益鑽厲不止云。

これより後、吉雄等の毎春參府する毎に蘭化必ず其客館に就きて存問質議し時々同好の士を引きて紹介せり。都人士の習として、多く洋華を喜び名利に馳せ、一時奇を好み蘭語を習ふ者あるも久しくして精力續かず中道にして廢する者多きを以て、吉雄等心中甚だ都人士を輕んぜしが、獨り蘭化のみを推尊して、其卓拔精勵を激賞せり。

蘭化が長崎にありて如何なることを學び得しかは、其著述の和蘭譯文略、蘭譯筌、蘭語隨筆等によりて明らかなり。洋學を習はんには先づ其語音より始めざる可らず。蘭化、蘭學に入りし始は蘭語は本邦古語の如く純一にして學び易かるべしと思へり。然るに漸く習熟するに及びて彼語にも又た本國の外に種々の語混淆して尙ほ一の言語に數義の分解あり、一の事物に數言の異稱あることを知れり。彼は拉丁語は歐洲の雅言なることを知りしも、其國土の歷史地理などは知らざりき。

蘭化は譯家の談を聞きて、蘭人の中にも、音韻分明ならざるものあり、其本國の鄕

土によりて、各又多少の相違あることを知り、尚又た蘭人にして、久しく爪哇に居住して本邦に渡來せし者は言語通じ易く、本國より直ちに來朝せし者は則ち聽き取り難きことをも知れり。加之通詞の中にも又音韻の異同ありて、紛々として一定し難きこと尠からざりしかば、蘭化は苦學の結果、自ら正道を發見して、只專ら「セイラブ」を明らかにして、其正音を傳ふるときは、轉變するものゝ所以を知りて、自ら惑無かるべきのみと言へるは、まさに語學研究の法を得たるものなり。

その頃までの通詞は前述せる如く、外國文字をば知らずして、片假名を以て彼の語音を記したるのみの學問多く、加之その假名は常語訛謬の音を以て書きたるが故に頗る後進者を誤ること多かりき。譯家が和蘭辭書によりて、言語を知り得て蘭人と話すに通ぜざること珍らしからず。傳習の誤謬相重なりて、發音頗岐路に渉れること甚しかりしを知るべし。蘭語隨筆に常語と讀書語との二者を區別せり。常語は全くの通辯語にして、讀書語は正しき蘭語を意味するものゝ如し。通詞に就きて學ぶに、尚ほ一の困難は其傳ふるところの譯語の書、長崎の方言にて記したるが故に、蘭語よりも却て譯語の知り難き場合ありて一語を知る爲めに三四

の譯語を重ぬることあり。大通詞吉雄幸左衛門をして、好事の士西洋の異術奇[illegible]を喜び、漫に洋書を取りて吾輩に、就くも淺學堂に上らずして、孟浪荒唐遂に自ら誇する者多しと謂はしめたるは故ある哉と思はるゝ也。今ま蘭語隨筆中の一節を擧げて當時を追想するの一端に供せん。

凡そ譯家に傳ふる譯語の書、多くは長崎の方言を以て之を記す。故に再びこれを尋ぬるに他の方言を審かにせざる者に至りては却て長崎の譯語に難澁することあり。故に三四の譯を經ざれば通解し難きことあり。畢竟是れ俗間の語のみを以て其譯を傳へ來る故なり。書中の雅言文辭に至りては、予の不才を以てするが故に絕て理會し難きもの多し。若しそれ倉卒の際に於ては尤も失誤多きものあり。予「スヽ」といふを煤と記したるに今詳かにするに是れ酢なり。「ヤウヤク」と云ふを「漸」と記して今ま書によりて之を詳かにするに職掌の義にして用役といへること也。果して此の如くなれば譯者に問ふもの亦所謂重譯なるものあり。

蘭化深く心を音韻に留め洋學の正道を得んことを期し、その研究の結果として、

字學小成一巻を著はす。其中に和蘭アベセ廿六字讀法ありて、詳かに發音の法を述べたり。就中HとLの二音は邦人にとりては六ヶ敷音にして從來の通詞も亦これを誤れることを言へり。

Hha アハ 此字名を譯家是を呼び且つ記するには「ハ」字を以てす「ハ」者唇音の輕に屬す。此字は喉音顎を兼ぬる唇內に觸るゝものにして、即ち「ア」字を含みて「ハ」音を呼ぶ也。凡そ此字の言語中にあるもの、吾邦の人正しくこれを辨じがたし。

L el「エル」「エ」字を帶びて「ル」音を輕く呼ぶなり。先づ舌を下顎に着けて、乃ち唇を合せながら「ル」音を發するなり。則ち其音「ル」と「ヅ」との二字に近く似たるものなり。

兎も角も當時にありては其研鑽の深きを感ずべきなり。長崎には支那人多く居留して支那通詞も亦多く支那語を學習するの便宜もありしかば、蘭化の著書中屢ば支那語を引用せるを見る。支那語の學習は、旁ら蘭學の發達を助けたること尠少ならざるべきは疑を容れざる也。さて此の如くして、蘭化は數多の蘭語を學び

得しかども、固より意に滿つるほどの事は無く且つ章句を解して其意義を講習するに至りては、未だ全て及ばざりき。

その頃より世人何となく蘭人持渡りのものを奇珍とし總べて其舶來の珍器の類を好み少しく好事と聞えし人は多少取聚めて愛玩せざるは無し。晴雨計寒暖計寫眞鏡、驗水器等その他、硝子製の器械類數多舶來せしかば人々其奇巧に心を動かし、其窮理の微妙なるに感じ自ら參府蘭人の客館に聚るもの多くなりゆけり。有志の士は怠無く出入して外科醫の治術などを實見せり。かくて和蘭は外科並びに諸般の技藝にも精しきことの世にも漸く知れ渡り、人氣何となく和蘭を好むに至れり。この頃より官醫にして志ある者は年々「對話」といふことを願出で、蘭人客館にゆき醫療の事を聞き、また天文家もゆけり。その人々の門人なれば同道することも自由なりしかば、醫師或は曆家の門人と號して客館に出入するもあり長崎にては常法ありて容易に出島の蘭人屋敷に出入するを得ざれども、江戸滯留は暫らくの間の事なれば自然に構無き姿なりき。

大勢はかくの如く推移したるが、尚ほ未だ外國の事情に通じたりといふ人も無

く、蘭書を所藏するとも公許されたりといふにはあらざれども往々所藏する者もあるやうになりゆきて、小濱藩醫杉田玄白及び中川淳菴等は數ば客館に出入せしが明和四五年のころなるべし、大通詞吉雄幸左衛門蘭人に隨從し參府せり。 或時蘭醫一醫生の舌疽を診ひて療治し、かつ刺絡の術を施せしに血の迸出すほどを豫め考へ、これを受るの器を餘程に引はなし置たるに、飛奔の血恰もその内に投じたるを以て玄白いたく感に打たれけり。 これ江戸にて刺絡せし始なりといふ。幸左衛門一珍書を出して玄白に示し、この書は去年始めて舶來せし外科書にして、我深く懇望して鏡櫓二十挺を以て交易したるもの也と語れり。 玄白眼に蟹行一字をも解する能はざれども其挿圖の精妙にして和漢諸書とは大に其趣を異にせるを以て、頗る神徃の情に堪えず、請ひて暫く其書を借受け晝夜を措かずして、其圖を摸寫し或は夜をこめて鷄鳴に逹せしこともありて、貢使滯在中にその業を卒へしことなどあり。 其後明和八年春蘭人參府せしをり、其隨行者の中に「ターヘル、アナトミア」と「カスパリュス、アナトミア」といふ身躰內景圖說二冊を鬻らんとする者あり。玄白其書を見るに更に前年のものに勝りしかば垂涎禁ずる能はず遂に藩廳に情

願して購入さるゝことゝなりぬ。凡そ一國の大事は實に機微の點に因縁すること尠からず。この解剖書購入の擧の如き他日本邦の文明に影響せしことの偉大なるは目當とては無けども、是非ともに用立つものにして御目にかくべしと厚く自ら信じて疑はざりし玄白と雖も又夢想せざりしところなるべし。而してかくまでに大なる効果を奏せしめたるは蘭化先生その人に待つてありしなり。

明和八年(一七七一)は吾日本近世文明史に於て吾人の記臆すべき年なり。それは此年の春を以て洋書飜譯てふ空前の快事業が少數洋學者によりて着手され泰西學術の曙光を吾思想界に放ちしときなれば也。　却説玄白は解剖學の書も手入りしかば、これを實地に照し見んとの希望は熾なりしに京都大醫山脇東洋の藏志をも見しかば愈解剖の念已み難き折から三月三日の夜、ときの町奉行曲淵甲斐守の家士某より明日手醫師何某といへる者千住骨ヶ原にて腑分け致すよしなれば御望ならば罷越され度しと申越せり。　玄白大に喜びしが、かゝる好事獨占すべきにあらずとて中川淳菴始め二三の知己に知らせしが中に良澤へも申越せり、　良澤は玄白より長ずること十餘歲。平生は互に往來することも稀なりしが、醫事に志

篤きは互に知合ひしことなれば、かくは招きし也。

明くれば明和八年三月四日(一七七一)朝早く墨陀江上淺草三谷町出口の茶店に入來りしは蘭化先生にして、次て玄白等數人も來會せり。すべて是等の人々は、今日こそは觀臟を實地に行ひて漢蘭何れの醫學が果して正確なりやを判斷すべしとて來れる也。蘭化解剖學の原書を出して、先年長崎にて求め得て歸れりとて示すに、近ごろ玄白が手に入れしものと同書同版なりしかば共に拍手して快を稱せり。かくて蘭化は一々書に就きて內臟を說明せしに、總べて從來の漢說には似るべくもあらざれば、一行の人々も實見せざるうちは如何にやと猶ほ心中には疑ひしなり。さていざとて打連れて骨ヶ原の觀臟の場に至れり。觀臟とは腹中諸機關を觀察することゝ也。「腑分」とは今の所謂解剖なり。從來漢醫の試みし腑分けと云ふは刑死の屍に施し、專ら刀を穢多に委任し、彼が指して肺なり、腎なり胃なりと切分け說示するを聽きて納得せしまでなり。この日の腑分けは穢多の虎松といへる者老練なりとて執刀に定められしが俄に病めることありて、其者の祖父なりとて九十餘歲の健なる老屠代りて勤めぬ。刑屍は五十歲餘りの老婦にて京都生れの綽

名を青茶婆と呼ばれ、大罪を犯せし者とぞ。かの老屠、若きより屢腑分けしたりとて、彼れ此れと指示し、心、肝、膽、胃の外に其名無きものを指して、名は知らねども此の如きものありといふ。一行の人々圖によりて、考へて其は動血脈の二幹及び小腎なりしことと分明せり。彼等は彼の天荒の研究を爲すことなれば、蘭書と内景と代る〳〵照見しつゝひたすら感にうたれて、猶ほ彼れ此れと打見やるに、老屠また言へるは從來腑分の度々醫師がたに品々を指示したるも、誰一人それは何。これは何と疑を起せし人も無しといふ。さて當時にありて、漢醫學の根抵に向つて大疑を起し、この眞摯なる研究に着手せる數士は學界の英雄漢にあらずして何ぞやこれより先き官醫のうちにも有志の人ありて、其頃までに七八度も腑分けして、熱心に研究せし者もありしが、皆古來說と違ひし故に毎度不審を增すのみにて遂に華夷人物相違ありしやとまで論ぜし者もありしに、此一行の學者は蘭化の指導によりて、一旦豁然として半生の大疑を解き、科學的研究の光明を認めしは、豈斯民の幸慶にあらずや。此日解剖全く終りて、とてもの事に骨骼の形をも見るべしと刑場に野曝らしになりし白骨どもを拾ひとりて、かず〳〵研究せしに舊說とは痛く相違して、

たゞ和蘭の圖說と符合するのみなりしかば、一行悉く感嘆して蘭醫學を確信するに至れり。

一行欣然として袂を分ちしが、玄白と淳菴とは、猶ほ蘭化を擁して驚くべき新研究結果を打語らひつゝゆきしが、喜極りて感慨を生じ、毅然として後半生を新學術の研究に捧げんとの大勇猛心を起しぬ。やがて玄白說き出せるやう、扨々醫を業としながら其術の基本とすべき吾人形躰の眞形をも知らずして、今日まで其業を勤め來りしは、面目無きこと也。何とぞ此實驗に基づき、大凡そにても身躰の眞理を辨へて醫をなさば此業を以て天地間に立つの申譯もあるべしと言ひしかば良澤も同感を唱へぬ。玄白つゞきて和蘭解剖學一卷飜譯して世に出さば天下後世を稗益すること大ならん言ひしに、蘭化答へて、予年來この學に志あれども、良友無きを憾とす。諸君子ともに力を戮せ給はらば共々に斯業を大成すべしと確乎として言ひしかば、兩人は、然らば吾等も憤然志を立てゝ一精出して見申さんと言ふ。蘭化喜び斜ならず善は急げといへる諺もあり、直ちに明朝拙宅に會合せらるべしと深く契約して、手を分ちぬ。千古未明の東方醫界の常闇は一朝にして開かれし

も、光明ありしは數人者の天地のみ。數人者は健氣にも、これを推廣めて滿天下に光明あらしめんとせり。それ一念發起すれば舊我を蟬脫す。かの數者の謂なり。其翌日玄白等得々として蘭化の宅に集まり前日の事を語合ひ先づ彼の蘭書に打向ひしに誠に艫舵無き舟の大海に乘出せし如く茫洋として寄べき無く只あきれに呆れて居たる許りなり。一座の多數は橫文一字も讀め只書のみなれば是等の人々集りて飜譯などゝは百年の後否等實に其大膽不敵の振舞に驚かざるを得ず。されど玄白等は少しも落膽すると無く二十五字より始めて蘭化に敎へられて且つ習ひ且つ飜譯せんとは企てたるなり。この中にて蘭化とても未だ此書を達者に讀み得しこともあらざれどかねてより蘭學に苦心せし老輩なれば飜譯會員等は、これを推して盟主ともし、また先生とも仰ぐことゝなりぬ。さてこの書を見るに、何れより筆を立つべしと談合せしに、この書の最初に全象の圖あり、これは比べて見ば說明も分るべしとて、これより初むることゝせり、即ち解躰新書形躰名目篇これ也。そのころは助辭等は一向辨へぬときなれば、少しづゝは記臆せし語ありても、前後不通のこと計り也。譬へば眉は目の上に生ひたる毛なりとあるやうな

る一句彷彿として長き日の春の一日には明きらめられず。日暮にまで考へ詰め互に睨みあひて僅一二寸の文章一行も解し得るとならぬことにてありしなり。千辛萬苦して譯語を考定し蘭化のすでに覺ゑ居し譯語書き留をも增補しけるなり。そのうちにてもジンチン（精神）などいへること出しに至ては一向に思慮の及び難きことも多かりしが、これ等は又往々は可解ときも出來ぬべし。先づ符號を付け置くべしとて、丸の內に十文字を引きて記し置きたり。そのころ不知ことをは轡十字と名けたり。毎會いろ〳〵に申合はせ考案しても解す可らざることあればその苦るしさの餘り、それもまた轡十文字〳〵と申したりき。されども爲すべきことは固より人にあり成るべきは天にありの喩の如くなるべしと、如此思ひを勞し、精を硏り、辛苦せしことと一ヶ月に六七會なり。その定日は怠りなく、わけもなくして各相集り會議して讀合ひしに、實に不昧者は心とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く增し、讀出に隨ひ、自然と彼國の事態も了解するやうにて、後ちには其章句の疎きところは、一日に十行も其餘も格別の苦勞なく解し得るやうになりたり。尤も毎春參向の通詞どもへも問糺せしこともあり。又その間には

解屍の事もあり。また獸畜を解きて見合せしことも度々のことなりき。

この會業怠らずして勤めたりしうち、次第に同臭の人も相加はり、寄りつどふこととなりしが各志すところありて、一様ならざれども、本邦學界に貢献するの志は則ち一なり。一日會して解するところは、玄白その夜飜譯して草稿を立て、それに付きては、その譯述の仕かたを種々樣々に考へ直せしこと四年の間、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり遂に飜譯の業成就せり　解體新書これなり。抑江戸にて、この學を創業して、腑分けといひふりしことを新たに解體と譯名し、かつ社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、我東方闔州自然と通稱となるにも至れり。これまで二百年來彼の外科法は傳はりしなれども、直ちに彼醫書を譯すなどいふことは絶えてなかりしが、このときの創業不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體內景の書、その新譯の起始となりしは不用意を以て得るところにして、實に天意といふべし。

終始飜譯の事業に從ひし會員は、蘭化、玄白、淳菴及桂川甫周、石川玄常。烏山松圃。嶺春泰。桐山正哲の八人にして、桂川はその祖父甫筑長崎にゆき、蘭法外科を傳習

して幕府の官醫となりしより、世蘭醫の宗家たり。甫周の父、道三は昆陽よりアルファベットを習ひしこともありしが、特に甫周は穎敏の才にして、その家業を發揚せんが爲めに、この會に加はりしが、そのこと計らずも會員に少からぬ便宜を與へたり。玄白老年に至り、當時の困苦を回想していふ。未だ新書の卒業に至るの前に、斯の如く勉勵すること兩三年も過ぎしに、漸々その事體も辨ずるやうになるに隨ひ次第に蔗を噉ふが如くにて、その甘味に喰ひつき、これにて千古の誤も解けその筋たしかに辨へ得しことに至るの樂しく會集の期日は前日より夜のあくるを待ち兼ね、兒女子の祭見にゆくの心地せり。さて都下は浮華の風俗なれば、他の人もこれを聞傳へ、雷同して社中へ入來りしものもありたり。そのときの人々を思ふに、遂るも遂げざるも、今は皆な鬼籙上の人のみ多しと。先人未發の事業を成就し、名遂げて長壽を保ち、壯時の成功を追想す。玄白の快感果して如何ぞや。

當時この事業の正確なるを知れるものは別として、絕えて知らざる人々は深く怪み疑ひたり。また來り集りたる者の中にも、その業の捗々しからずして、それと突き留めたることもなき面倒なること故に、遂に精力盡き果て、または今日の生計

に困る人はその効見へざるに倦み、かつは已むを得ず中道にして廢する者もありしが、この間蘭化は更に大に蘭學を講究せんが爲めに再び長崎にゆきしが、通詞どもは通辯を主として講學は、なほその力を用ふるところにあらざりしかば、蘭化は醫書、算書及び通詞の秘藏せし辭書數部の蘭書を携へて歸東せり。これよりその辭書を栞として、さらに譯語を考定し、安永四年(一七七四)に至りて飜譯の事業大成せり。これを蘭書飜譯の嚆矢とす。解體新書一部、實に偉業なる哉。これ蘭學先進大家が畢生の心力を盡したる偉大の產物にして、その學術研究に於ける獻身的勇氣は後進學生の模範とすべきもの也。

さて右の如く一通り譯本完成せしも、その頃は蘭說は少しも世上に知られてあらず、未だその精粗のほどをも知れる人なき故に先づ解體約圖を出版せり。これは俗間にいふ報帖同樣のものなりし也。江戸にて蘭學創始のこと、長崎に聞へて、通詞の感情を害せしが、また彼等を激勵する一端ともなれり。約圖すでに成り、解體新書續きて出版されしが、先きに紅毛談絶版の例もあることなれば、會員一同躊躇せしが、橫文字をその儘にて出すにもあらず、かつは醫道發明の爲なれば苦しかる可

らずと自ら決心して、譯書を公けにするに至れり。そのとき桂川甫周によりて同書一部を將軍家及び執政の諸侯に献じ、また傳手を求めて、京都の朝廷にも献ぜしが、このたびは紅毛談の如きことなく無難に通過して、和蘭譯書の創始は成されぬ。眞に痛快の事業なる哉。

この空前の快事業を成就せし飜譯會員の第一の盟主とせし蘭化は奇異の才にしてこの學を以て修身の業となし盡く彼言語に通達し、その力を以て西洋の事躰を知り、彼書籍は何にても讀み得たきの大望ゆゑ、その目的とするところは、康熙字典などの如きウヲールテルブックを解了せんといふことに深く意を用ひたり。それ故に世間浮華の人に多く交ることを嫌ひたり。蘭學開くべき一つの天助には蘭化といふ人天性多病と唱へ、この頃よりはつねに閉戸して外へも出でず。又漫りに人にも交らず、唯だこの業を樂みとして日を送れり。彼は長崎にて學び得たる僅少の釋語を據とし、蘭人「マーリン」の收錄せる釋辭の書を取り、彼此校考し既知によりて未知を推し明らめ、稍々その一二を窺ひ得たり。歳月すでに六七年を經て豁然として自得するところありて、始めて飜譯の方法を開けり。蘭學講習の始め

よりして功を積むこと十五六歳。蘭化亭譯文式は即ち彼の飜譯の方法を示せるものにして、後來の洋學者みなその垂示によりて進めり。その方法は先づ原文を一々直譯し、次ぎにこれを意譯するにあり。彼はすでに成說を飜譯するの術を得たる位にて、その學識もまた豐富にして、その著述中、羅甸語支那語等に關する記事も見へたり。玄白以下の諸人は醫學の爲めに蘭學を修めしものなれども、蘭化は則ち語學を修むるもの也。蘭學の系統は蘭化より大槻磐水に傳ふ。磐水は斯道の孟軻氏ともいふべし。蘭化の著述には、和蘭譯文略。蘭譯筌。助語參考。蘭語隨筆。古言考。點例考等ありて、みなこの學の筌蹄となりしものなり。蘭化とは晩年自ら號するところなれども、和蘭化身の義にして、嘗つてその藩主が良澤に綽名せしより起れり。蓋し藩主賢明にして、蘭化をして千古未發の事業を成さしめたる効は頗る大なるものありといふべし。蘭化が學者としての態度は萬世の模範とすべき也。彼れ高蹈してその名をあらはさず。つねに天滿宮を信じ、成功を以て自ら誓ふ。解躰新書なりしとき同人蘭化の名を署して上木せんとするも聞かず。則ち序文をつくらしめんとせしにまた聞かず。かくていふ。吾れ西下せ

しとき太宰府に詣り天滿宮に賽す。斯心學術の爲めに盡すにありて名聞のために累せらるゝこと無からんと誓へりとて、固く辭せしかば、新書は起稿者たる杉田玄白の名を以て現はれ、蘭化の名は書中に見ず。飜譯會員の盟主なることは、玄白の蘭學事始によりて著聞す。蘭學の名家中蘭化のみ肖像無し。これ彼が固く謝して描かしめざりしによる也。大槻文彦博士の家に藏するところ、蘭化肖像一枚あり。自畵自贊あり。蓬頭箕居して前に解剖機械を置て數筆極て簡にして、上に

經營漫費人間力、大業全依造化功。

の二句を題す。人事を盡くして天命を俟つの精神躍如たり。蘭化の如きは萬世學者の模範といふべし。享和三年(一八〇三)十月十七日蘭化病歿す、年八十一。今を距ること恰も百年なり。大槻磐溪地震豫防說序をつくりて、蘭學の功を說きていふ。傳曰、天子失官、學在四夷。余於是乎不能無深慨焉と。幕府の敎育萎靡して振はざるときにあたりて、蘭學の開發せるは國家の一大慶事なりき。凡そ吾邦文運の發達に就きて、王仁、眞備、道眞、惺窩と蘭化の五君子は吾學宮に廟祀すとも可なりと謂ふべし。

蘭學の開發につきては、杉田玄白の蘭學事始尤も正確にして興味あり。後ち大槻磐溪も古文吹賞をつくりて、蘭學創始の事蹟を考ふ。社會事彙日本人名辭書、古事類苑、文學部等に蘭化及び蘭學の創始につきての事蹟を載せたり、皆併せ參考すべきものたり。蘭化の著述は一も上木せず皆な寫本にて傳はるを以て求め易からず。そのうち蘭譯筌。蘭語隨筆の如きは尤も趣味あるもの。蘭學當初飜譯の方法を見るべきものたり。余は極力捜羅して蘭化先生傳をつくり一昨夏の太陽紙上に掲載せり。故にその詳細なることは彼にゆづりて此に畧せり。

洋學の發達につきては、大槻如電氏の日本洋學年表あり。好書とすべし。大槻氏は蘭學者の正宗なれば蘭學の發達に關する材料は極めて豐富なれども、その他の外國語に對しては、年表もまた詳確ならざるの嫌あり。この書によりて增訂せば便ち可なるべし。

○正德より天明に至る敎育畧年表

一七一一(正徳元)　韓人來聘新井白石接伴す○水戸禮儀類典を上る。
此歲紅葉山文庫を增築す。西御文庫と稱す。

一七一二(正徳二)　白石、釆覽異言を著す。家宣薨ず。
六月櫻田御文庫の書籍も今年より御書物奉行暸凉すべき旨を命ぜらる。(櫻田御文庫は享保二年廢す)
又これより先林大學頭封緘の御書物箱も以來御書物奉行封印すべきむね達せらる
御文庫書物は寶永中までは老中、若年寄、林大學頭、御小納戸御書物奉行と御書物封の次第五等ありし也。

一七一三(正徳三)　家宣薨。家繼將軍となる。
紅葉山新造の御文庫成る。新御文庫と稱す。櫻田潜邸文庫の書物を新庫へ移さる。(五月)
當時曝書の日に御小姓一人來て監察せし也。近藤重藏曰。
紅葉山御庫に櫻田御文庫本と稱するもの數百種あり。別

に目錄あり　按に折焼柴の記に云　元祿八年の秋の末に常に御側に差置かれて御覽しつべき和漢の書目しるし、を參らすべきよし仰下されたる書目をまひらせしかば、それらの書ども購求めて參らすべしとあり。こゝかしこ求め出して和漢の書百數十部を奉れりと云へり。卽ちその本なりと。

一七一四(正德四)　貝原益軒歿

一七一六(享保元)　家繼薨。吉宗將軍となる
　光琳歿
　淸聖祖康熙五十五年。康熙字典成る。

一七一八(享保三)　吉宗自ら測午儀を造る。吹上苑中に置く。
　七月廿五日始めて月次講釋あり。爾後七月十日を以て式日と定む。

一七一九(享保四)　西川如見將軍に謁す、

九月日本國總地圖を作らしむ。

近藤重藏云。此圖御文庫へは御預無之。予所藏スル日本繪圖仕立候一件トアル留帳ニ載ス。其全圖ハ古文故事ニ備載セリ。其帳ノ首頁ニ識語アリ云。享保己亥ノ歲ノ季秋、有聖命日本惣圖ノ形勢ヲ糺シ、方位ヲ定ムベシト。僕忝ク預聽命ト云ヘトモ茫トシテ猶ホ其可正ノ途方ヲ不察於是重テ有命。各國左右中三ケノ各所ヨリシ近國名山大岳ノ絕頂ヲ望視シテ其線ヲ摸シ亦舊ノ圖、每國以六分爲一里者、全ク正形ナラズト云フト雖モ、悉ク其準矩ヲ承テ窄迫シテ六分ヲ一里トスルノ小圖ヲ造リ、就テ其望視スルトコロノ名處ヲ識シ而南北ヲ料テ横線ニ據テ衆圖ヲ集併セバ國典國所境必盈虧アルコトアラン。然ラバ則チソノ盈ヲ欠キ、欠ヲ補テ形勢自ラ正シキコトヲ得ベシト。僕聽聖教愕然トシテ始テ感通ス。……既ニ調理シテソノ事ヲ成スニ

及ビテ果シテ舊圖ノ偏勢立ロニ顯ハレ、唱象乍ニ著レ、件々一點モ聖慮ノ旨ニタカウコトアルコトナシ。……

十一月二日高倉屋敷講釋始マル。

享保盛典に云。これは後來學校を御建てなされんとの御試なりしを大島近江守上意を伺ひし也。

一七二〇（享保五） 高瀨喜朴に命じて明律釋義を撰上せしむ。

水戶大日本史二百五十卷を獻ず。命によりて也。

この歲より長崎舶來禁書のうち、宗敎に關せざるものは御構無之よし也。これは天文暦算の原書を譯さむ爲也。

華氏寒暖計創造。

一七二一（享保六） 處士山下廣內諫書を目安箱に入れて上る。賞銀を賜ふ。

六諭衍義を訓點梓行せしむ。

皇淸經解輸入。

一七二二（享保七） 和蘭人風說書の起原。

六月江戸市中手跡指南の者へ六諭衍義を賜はり、童蒙の手本に可書與と令す。

十月戸田邊御成り。島根村醫者吉田順庵御代々法度書を以て童蒙の手本として習はせけるを聞き賞銀十枚と六諭衍義大意一帙を賜ふ。

一七二三(享保八)

新板書籍の法度を令す。

江戸浪人菅野彦兵衛に地を貸して學問所を建てしむ。

十月十日五倫和解を鳩巣に命ず。

麗澤秘策に載する鳩巣の十月九日の手束に、先月四日有馬兵庫仁義禮智信の五字を頭に置候て和字にて、其義を二行に解し申候掛物を持たせられ候て、存寄被相尋追付御前へ罷出如例貞觀政要を講申候。講終り申候て上意有之。各五常假名書之事被仰出。古來五常の義を和歌などに讀置候もの無之哉と御尋有之云々。晦日各かな書差上候處、御

前へ被召出、逆もの事に五倫をも此通に調可申旨御意有之云々。　蘭人に命じて洋馬を貢ぜしむ。

前野良澤生る。

一七二四(享保九)　節儉令を布く。

英一蝶歿。　西川如見歿。

去七年、長崎の唐船へ注文せし元享療馬集渡來す。

官醫桂川、甫筑和蘭貢使と對話す、洋藥製方を問ふ。

一七二五(享保十)　和蘭牡馬五匹を獻ず　後ち常例とす。

新井白石歿(五月十九日)

清醫朱來章等來る。

彼得大帝歿。

紙型の發明。

一七二六(享保十一)　中井竹山懷德書院を建つ。

醫後藤良山歿。

一七二七(享保十二) 和蘭の馬術者ケイッルを江戸に召す。
建部賢弘、命を奉じて暦算全書を校し、かつ譯話を撰す。
古和書中御收貯あるべきものゝ書目を上らしむ。
ニウトン歿。

一七二八(享保十三) 王陽明二百年忌。徂來歿。
日光御社參途中より御小納戶を足利學校に遣はし藏書を撿閱せしむ。
假名交水滸傳出版。岡島冠山歿。
いろは消防組をおく。
足利學校修繕。

一七三〇(享保十五) 正月官制普救類方、書肆より諸國へ沽命すべきに依りて望みの者は購求すべきことを御代官に令す。

一七三一(享保十六) 水戶、參考源平盛衰記を獻ず。
デフォー歿す。

一七三三（享保十八）　暦算全書校正成る。
　杉田玄白生る。平賀源内生る。
一七三四（享保十九）　室鳩巣歿。
　伊勢貞丈家流の書を献ず。
　禁裏御望によりて、禮儀類典を進献す。
　仁風一覽を禁裏日光へ進献す。これは去十七年西國畿内所々飢民賑恤せし奇特者の名を錄せし板本也。
一七三五（享保二〇）　養生所を小石川に置く。
　英國始めて石版を用ふ。
一七三六（元文元）　荷田春滿。伊藤東涯歿。
　清高宗乾隆元年。春秋彙纂等諸書成る。
　仁風一覽の書、望みの者は買取るべき旨町觸あり。一部二卷代銀七匁三分づゝ。
　圖書集成繪圖六百六十冊長崎に舶載。

一七三八(元文三)　林子平生る。

青木昆陽幕府の蘭學員となる。

大甞會再興。

一七四〇(元文五)　青木昆陽甲州國中を回り書籍舊記等を捜索す。

一七四一(寛保元)　武德編年集成成る。

朝廷の御儀式新鐫のことを禁ず。舊板は此限にあらず。

青木昆陽武藏國中の古記文書を捜索す。

淸乾隆六年。先賢先儒の廟を立つ。

一七四四(延享元)　青木昆陽をして蘭學を講ぜしむ。

神田に天文臺を立つ。

淸乾隆九年。詔して三敎堂を設くるを禁ず。

一七四五(延享二)　長崎の譯官に洋書を讀むを許す。洋書の禁令後百八年也。

江戶浪人菅野彥兵衞老ふ。その請により子勘平をして、その業をつがしむ。

これより先き享保八年創業のとき、金三十兩を賜ひその費を助け一色町の町屋敷百卅九坪を給し、その收金を以て之を維持せしむ。また深川船藏後の地三百四十坪を得て講堂を築く。三十四坪記錄室六坪、弟子寄宿所十五坪餘、講武所廿七坪半。妻子各處所廿七坪餘、物置四坪。その年八月開業。二七四九の日、八つ時より始め暮前に至りて已む。當初弟子廿八人ありき。

吉宗辭職。家重つぐ。

一七四六(延享三)　青木昆陽、蘭人所説にもとづきて櫻木考、一角考をつくる。

フランクリン電氣試驗を始む。

一七四七(延享四)　庶物類纂一千五百五十四卷全部竣功。

此の書は元祿寶永の間松平加賀守、稻若水をして、編集せしめしものにして、前編三百六十二卷は享保四年献上。また享保元文の間、丹羽正伯に命じて後編六百卅八卷、增補五十

四卷を編纂せしめたる也。
太宰春臺。桂川甫筑歿す。
司馬江漢生る。
〔支〕大清會典勅撰。

一七五一（寶曆元）
吉宗薨ず。昆陽長崎より歸東す、
祇園南海歿。
桂川甫周生る。

一七五三（寶曆三）
平賀源内、長崎に遊學す。
内科外科針醫等世々の家業漸く不精に赴くを以て、幕府寄合醫師をして各其家業を勉めしむ。
水滸傳絕版を命ず（清國）
倫敦博物館建つ。

一七五四（寶曆四）
山脇東洋始めて死屍を解剖し臟志をつくる。
長崎實錄成る。

一七五五（寶暦五）　宇田川玄隨生る。

一七五七（寶暦七）　神田天文臺廢す。

杉田玄白蘭法醫學を唱ふ。

清。明末野史を貯ふるを禁ず。

大槻玄澤生る。

一七五八（寶暦八）　竹内式部を流す。

一七五九（寶暦九）　平賀源内始めて物產會を湯島に開く。

臟志刻成る。

一七六〇（寶暦十）　幕府孔廟を修理し、別に廠殿を置きて神位を安置し、以て竣工を待つ。（十月）

昌平志曰。按廟由寶永以迄於今歲殆六十未加修葺。而有司莫以告。主祀亦不得以請焉。蓋時勢弛緩斯文掃地。雖當路大臣亦或有不詳廟學所由。

一七六二（寶暦十二）　昆陽漫錄成る。

一七六五(明和二)　源内再び物産會を開く。
幕府、地を多紀安元に貸し、躋壽館を神田に建て令を市中に出して、諸醫師をして玆に學ばしむ。

一七六六(明和三)　再び天文臺を牛込に置く。
前野良澤蘭書を讀破するの志を起す。
續昆陽漫錄成る。

一七六九(明和六)、　前野良澤年四十七、始めて昆陽に就きて蘭書を學ぶ。
加茂眞淵歿。　青木昆陽歿。
宇田川玄眞生る。
淸。　字貫四十卷成る。

一七七〇(明和七)　良澤長崎に遊學す。
源内再び長崎にゆく。

一七七一(明和八)　三月四日小塚原にて解屍の擧あり。　良澤、玄白等ゆき見て蘭書飜譯の志を起す。

一七七三（安永二）　良澤再び長崎に遊學す。
吉益東洞歿。
清。四庫全書成る。
一七七四（安永三）　八月解體新書刻成る。
躋壽館講堂新築成る。醫業有志の者は何人にても入學を許す。
この年、列侯續きて祭器經籍を大成殿に置く。これより先き元祿貯ふるところ皆な明和の火災に罹りしを以て也。
一七七五（安永四）　大槻玄澤一關蘭法醫建部清庵に就きて學ぶ。
青地林宗生る。
一七七八（安永七）　玄澤年廿二。江戸に來りて玄白の門に入る。
一七七九（安永八）　平賀源內死す。
宇田川玄隨、桂川甫周の門に入る。
一七八〇（安永九）　玄澤、良澤の門に入る。

一七八一(天明元)　清。十八省通志成る。玄澤の六物新誌成る。藤林泰輔生る。

一七八二(天明二)　天文臺を淺草に移す。小森玄良生る。群書類從成る。

一七八三(天明三)　蘭學階梯成る。

一七八五(天明五)　細川重賢卒す。萬國圖說。紅毛雜話成る。大槻玄幹生る。高橋作左衛門生る。

第四章　寛政より幕末に至る

第一節

天明七年(一七八七)將軍家齊立ちてより在職五十年。寛政より文化文政天保に至る間は江戸時代の盛時にして武家政治の尤も圓熟したるときなりき。

このとき吉宗將軍の孫にして家齊の從祖父たる松平定信老中となり、教育上の施設に心を盡くし、幕府の教育制度玆に始めて整頓せり。幕府の大學も完備し、大成殿は建てられ、柴野栗山、岡田寒泉、古賀精里、尾藤二洲等重用せられて大に學政を振肅し、朱子學を正學とし、その他を異學としてこれを禁じたる失態もありしかど、このときよりして諸藩みな學校を建て、中にも水戸の弘道館、岡山の學校、萩の明倫館、熊本の時習館、米澤の興讓館の如きは、制度尤も整頓せり。これより後ちには一張一弛無きにはあらざれども、大躰の制度このときに成りて大なる變遷無し。幕府は當初より教學に注意したるも、學政の振張せしは、その末年暫時のことにして、燈火滅せんとして暫らく明らかに、夕陽沈まんとして更らに輝くが如くなりき。然かれども、幕末學政の振張は、闔藩教育の急激なる進歩を促がして、由て以て將來國運の進捗に裨益したること實に尠少ならず。これまた徳川氏が社稷に對する功として賞讚すべきものなるべし。却說孝明天皇の嘉永六年(一八五三)米國の彼理渡來してよりは、世態一變し、急に外國語の必要を感じ、洋學者を登庸して外交時務に預らしめ、外國語を講習せんが爲めに、蕃書取調所を設けしが、これぞ後ちに東京

帝國大學の基礎となれるものなり。かくの如くにして智識を世界に求むるの途、俄かに開けたり。而してこれまで吾思想界に一道の暗流となりて潜勢力を蓄積し居たる洋學者の勢力勃然として發動して鎖國の島帝國が世界の舞臺に現はれたる間際に太甚しき失態を演ずることなくして先進國の學政を採用することを得しも、これ等洋學者の功多しとす。

定信が栗山等の意見を採用して異學の禁を發したるは、眞に偏固の如く見ゆるがこの頃は幕府の學政實に振はずして、下には學派の爭激甚にして、各門戶を立てて才學を競ひて異端に陥りしことを以て痛嘆すべきことゝ思ひ、尤も平正穩當なる朱子學をとりて一定するに若かずとの意見に出たるものなるべし。朱子學は林家には道春以來の家學にして實際に於ては官學とも見るべく、また當時學政に預りて尤も有力なりし柴野栗山は熱心なる朱子學者なりしかば、當時官學を定めんには朱子の外無かるべきなり。定信の著に陶化の說一篇ありて、學校教育を論ぜり。時勢に考へ、ときの學風を慨して朱說を信じたるさま見るべし。

栗山の建議書中に社會組織の缺陷を論じて、その改良に及び、旗本の詮考に說き

及ぼし遂に教育に論結せり。その要領は

一、前に申上候通り御旗本風儀悪敷御座候と申すも畢竟御教と申すものは、無御座候故にて御座候。（中略）學文を爲致候とて盡く書物を讀ませ詩文章を作り得させ候事には無御座候。只御旗本の面々に、學文はよきもの、聖人の宣まへることは背かれぬと思込み候樣に仕候事に御座候。扨てその學文の通り道に引入候致方は、古へ邑の學校などを立候て入學を致候樣も御座候得ども、當時俄かに本道の通には參り申間敷候間、先づ御役人を初めて御番衆、小普請やうの者までも講釋を聞かせ候が一番手短かに可有御座と奉存候。講釋を聞かせ候と申候ても、只今御城御月次の講釋、大學頭父子罷出て相勸め候やうにて承候者も畢竟皆勸めのやうに相心得一役一人づゝ罷出て列座爲致候までにて講釋は何を申すやら耳にも入らず、承はりながら浮世のことを考へ居申候やうにては何の用にも達不申候。幸ひ御儒者こそ大勢御座候得ば、是へ講釋を被仰付候やうにと申上度きものに御座候へども、只今申て御儒者の役には御評定所へ罷出で目安を讀候までにて

學文の御用には一口も不被仰付候故、御儒者ども目安だに讀み申候得ば、御用に相達相勤まり候と心得。學文のことは一向無精にて、さらば只今講釋にても仕る人を敎へ可申。箇樣なる器量の者は一人も見當り不申。御評定所へ儒者の罷出候は、そのむかし林道春、春齋など博學にて和漢の故實佛道神道までに通じ申候者故、公事訴訟御裁判の御相談の爲め罷出候ところ、道春、春齋やうの者、常住は無御座候間、後ちには、只目安讀の爲め斗りに儒者ども罷出候やうに成行申候と相見得申候云々。

これにて當時學政の方針を見るべし。實に安永、天明の頃には敎育衰頽して當路者學術に暗らく幕府の學校も殆んど放擲して顧みず隨つてその儒者ども、極めて無能のものゝみなりしかば栗山即ち英斷を以て學政を刷新せんことを建議したるなり。栗山は博學能文當代に傑出したるが、その人となり才能逞くして、學者中の政治家ともいふべし。されはその才と學との爲めに、林家は威壓されて學政の實權は栗山の手にありしなり。異學の禁は、失態たること蔽ふ可らざれども學政を振張し、敎育の面目一新したる功は、また歿す可らざる也。

昌平黌の變遷

寛政に幕府學政を振張せしが、一般に教育の普及せしは文化、文政より天保に至る間にして、就中天保年中を以て德川時代教育の最盛時とす。故に江戸時代の教育を論ずる者、天保を以て標準とす。かの蠶蟲の孵化するが如く、德川氏は當初より教育に心を碎き、二百餘年の星霜を經て漸く完成するや忽然孵化して、その結果たるや唯だその變遷の跡、後人研究の資料たるに過ぎざるなり。

幕末教育史に特色とすべき者は、(一)教育の普及(二)洋學の發達(三)國家教育思想の發達(四)平民教育の發達これなりとす。

第二節　寛政以後に於ける昌平黌の發達は著るしきものあり。これよりは、教授も諸藩臣より碩學の者を拔擢し、また諸藩士の秀才も入學することを得しかば、幕末に至ては、昌平黌は唯だ幕府の學校、官學の本家といふに留まらずして、眞個に日本の大學たるの態度を具するに至れり。

將軍家齊就職の初めには、教育實に振はざりき。昌平黌にても天明七年(一七八七)の九月に孔廟を修理したるが、昌平志にその時の情況を記して、按廟殿之制、變於安永、苟且因循終不復故貌而燬矣。是學亦倣其制而撲略實過之。且怠緩之甚、踰

年而始賦工而僅報成。(正月起工、九月竣成)蓋時運所繫而時議亦不及焉と。以て教學の衰へたるさまを見るべし。これ乍併時運の二字も亦注意せざる可らず。將軍吉宗勤儉を以て一時士風の刷新を期せしが、その後ち再び奢侈の風潮は進みて、ことに田沼父子全盛のときに及びて士風の頽蕩を極め、而して徳川氏の財政は頗る窮乏を感ぜしかば、教育のこと當路者の暗のみにあらずして事情もまたその擴張を許さゞりしなり。家齊立ち、定信入りて老中となるに及び勤儉尚武を以て一時を皷吹し、「世の中に、蚊ほどうるさきものは無し、文武といふて夜もねられず」と蜀山人の詠ぜし如く文武の教育は嚴重に督勵せられたり。寛政五年に林衡(號述齋)大學頭となる。述齋は學を好みて、林家中興の祖と稱せられ學政釐革にあづかりて少からぬ功ありしといへど、栗山の跋扈に快からぬこともありしと見へ、二者內爭の形蹟を傳ふる文書もまた存せり。今ま昌平志によりて、寛政以後學校改新の略況を記さん。

寛政二年(一七九〇)柴野栗山、岡田寒泉を辟して學政を佐けしめ、塾糧學糧を加給し、大に規模を擴張せしが、その年、四月八日、定信以下老中、學校を巡視せり。蓋し天

明年中廟學を修造せしも、規模狭隘にして、就中黌舎尤も甚しく師生皆なその職を曠しくするに至れり。此に至りて列相巡視の結果、學政釐革の議、こゝに定るといふ。四年(一七九二)に至りて、尾藤二洲、古賀精里も增聘せられ、黌舎廳堂の建築成り、儒臣かはる〴〵廳堂に講義す。始めて經義、史學、時務、作文の四科を設けて學生を驗試す。第一回の應試者二百八十人。その次第は、かねて各通ずるところを以て官に申出づ。試驗場は四局となし、紙には科名を票す。試驗官則ち試目を匣に盛りて應試者の前におけば、應試者進みて匣中に就きて、その一題を探り、退きて答案を書す。講は講說に止むれども、三禮書の如きは墨義を用ふ。史は墨義なりすべて嚴に懷挾を禁じ、試驗の監督は嚴重なりき。口授、考試すでに畢りて試驗官、程式に準式して甲乙を批定し、その及第者を官に報告せり。

その年學政を定め、始めて學規を置く。その要は、

一、入學。僧道工商樂伎優雜及び君父を離絕し、または氏名詐稱者は入學を許さず。但し工商の篤志にして、本業を棄つる者は入學を許す。

二、行儀。生徒は篤實退讓なるべし。國政を議するを得ず。

三、修業。 經史作文、須らく四書小學より進むべし。 敗俗非聖及び新奇怪異の書を讀む可らず。 每歲試驗あり。 三年にして成業せざる者は退校せしむ。

四、講會。 義理を討論し、精微を講窮するは、須らく必らず依據あるべし。 切に無稽の臆說を禁ず。

五、放繳。 出入必らず定時あり。 疾病にあらざれば、外泊を許さず。 外人も亦内に留宿するを禁ず。

外に職掌八條を設く。 員長二名ありて教育を掌り每日一次學舍を巡視す。 つぎに司監二名ありて、生徒を監督し、每日二次學舍を巡視す。 司監は恰も舍監なり

無稽臆說を禁ずるの一語は含蓄深し。 この一語則ちすべての新說を禁ずるもの換言すれば自由研究を阻害し、思想發表の自由を拘束するもの也。 これ唯だ著實を主とし、古往を模範とするの精神に出づるものなれども、その結果たるや必らず退守に陷らざるを得ず。 此の如きは雲間に龍鱗の隱現するが如く、德川幕府教育の主義の一端、微見するものと謂ふべし。

このとし始めて童科を試驗せり。 十五歲以下十一歲までは四書五經。 十歲以下

八歳までは四書小學。七歳以下は書を限らず、唯その習へるところに就きてその熟否を試む。その次第は大學頭以下儒臣列席して監試す。試驗場には豫め書案一張を正堂に設けおきて、典考は左に坐して東向し、監試は右に坐して西向す。童子進みて案前に坐すれば、員長は傍より書を執りて、箇所を指示し、數行を素讀せしむ。かくして試驗は訖る。優等者には賞賜あり。これより後ちも屢童科の試驗ありしが寛政九年に至りて、十七歳まで應試することを許す。これは律に官年、本年の稱ありて童科或は年格を犯して律に觸るゝ者あるを以て、遂に童科を句讀科と改稱し、試驗科目は四書五經小學にかぎることゝなれり。

寛政九年(一七九七)將軍昌平黌を巡視せしが、この歳黌制を改革し、昌平黌を以て純然たる幕府旗下の大學とせり。蓋し林氏忍岡私塾を陞して學院となせしより、尙ほ百事舊轍を踏むこと多く、官私並び行はれて事規律無し。また寛文年中史館の費用を以て學糧に充て四方の英才を招きしかば、士庶にかぎらず生徒來集せしを此に至りて生徒を放ち還し、專ら旗下子弟を教育するところとし、昌平阪學問所と改稱し、廟學諸職を置けり。これ幕府大學の一大變革なり。學制すでに釐革せる

を以て寛政十一年を以て大に工役を興し、新廟を建て學校を增築す。その規畫專ら明制に倣ひ、時宜を以てこれを裁す。工造頗る盛にして、從來の面目を一新す。その工造の摸型は德川光圀朱舜水に命して作らしめし孔廟の木樣によれりしなり。その木樣は現に水戸彰考館に藏す。舜水の監造にして、處々彼の手を下せしところもありといふ。一見人をして、その精巧に驚かしむべし。而して光圀學校を建つるの志ありて果さず、却て他年幕府學校の用に供するに至れり。新校の廣袤舊區を合はせて一萬一千六百餘坪にして、大成殿を聖堂と稱し、廳堂を坐敷と稱し講堂を稽古所と稱し、學舍を寮と稱し、儒員の官宅あり、馬場あり、矢場ありて、蔚然として美觀を呈せり。學校の制、一歲の費用は定額千石、百三十人口にして林氏を以て總敎としてこれを總轄す。儒員及び敎授方出役等四五人ありて儒員は講義輪講等の事に任じ、その待遇に二百俵の世祿を賜はり別に手當十五口を給せられその身分は旗本たり。敎授方出役は別に本務ありて敎授を兼ぬる者なれば身分には旗本あり家人あり。文久二年に(一八六二)學問所奉行を置き大名二人を以てこれに充て林氏の上班に居りて學政を司らしめしが、幕末多事の際、また如何とも

施設せしことあらず。

茲に昌平黌の學制を詳にせんに生徒の身分は幕臣なれども、幕臣は必しも此に來るにはあらず。また諸藩士及び處士にも別に法を設けて入學を許せり。學生には通學あり、寄宿あり。一切束脩及び謝儀無し。

○通學生
- 句讀生　毎日稽古所にて敎授方出役等の敎授を受く。
  - 敎科は小學、四書、五經等なり。
- 寄宿並南二階通稽古人（キシクナミミナミニカイカヨイケイコニン）
  - 寄宿寮の南寮に房を得て通學する者。

○寄宿生（期限一年）
- 寄宿寮（三字）
  - 旗本の寓するもの（二字）
  - 家人の寓するもの（一字）
  - 入學、試驗、四書五經素讀
  - 入學試驗四書　素讀
  - 定員四十八人（官給）
- 書生寮（二字）諸藩士及び處士の寓するところ。
  - 寮生監督

舍長——五口俸盆暮
　　　　手當金三兩
助勤二人——三口俸盆暮
　　　　　　手當金二兩
經義掛二人——手當金
詩文掛二人——各若干
舍長以下
定員四十四人
無試驗入學
（自　費）

書生寮の生徒は林氏若くは儒官の門人に限るを以て、入學せんとする者は必らずその門人となるなり。されど本來學校教育の目的にあらざるを以て、これ等生徒に對しては待遇甚だ薄し。されど幕府が茲に特別法を設けて地方の秀才を網羅したるは、地方興起の爲めに少からぬ稗益を與へたる也。松本奎堂、高杉晋作、松林飯山の徒皆なこれより出でたり。

教授の方は左の如し。

日順	一。六。二。七。	毎日	四。九。
場所	稽古所	寄宿寮 南寮	寄宿寮 北樓 座敷
教科	經書講釋 輪講		經書講釋
教師	會頭儒員	會頭 儒員 教授出方	儒員 教授出方
聽講生徒	寄宿寮 南樓 書生寮	通學生 (寄宿寮生徒)	幕臣三千石以上 旗本及家人 (寄宿寮生徒)

毎日	仰高門東舍	四書講釋	教授方出役	士庶一般（名簿ヲ幕府ニ上ル）
毎月三次	儒員官宅	講釋 會讀	儒員	書生寮
二回	稽古所	詩會	儒員	寄宿寮 南樓
一年四回		文會	教授方出役	書生寮

試驗のことを言はんに、三八の日には寄宿寮生徒に講義の小試あり。春秋には大試ありて全校生徒の講義、辨書、和解、問目、作文を試み、甲乙二科の者には官版書籍を賞賜す。この外に素讀吟味、學問吟味ありて、幕臣のみこれに應試す。書生寮生徒は相互切磋するを目的として試驗無し。

素讀吟味は十七歳より十九歳までを限り、小學、四書、五經中一經ごとに一處を試

み小學は多く山崎點、その餘は後藤點也。無點本にて應試するものは身分に拘はらず餘人より前に試みらる。十七歳未滿の者は、十七歳と稱して受驗し、落第するときは再び應試す。

學問吟味は、三年毎に一回これを行ふ。その手續素讀吟味と同じ。

初日　小學辨書、二日　四書辨書　三日五經辨書、

四日　歷史和解問目　五日文章

辨書

辨書とは經義を筆解し、章意、字訓、解義、餘論を具するものにして、章意は大意を解釋し、字訓は字義を、解義は次序を逐ひて全章の旨意を解釋し、餘論は、さらに自己の意見を陳ぶるなり。すべて幕末ごろの試驗答案は、大底この辨書の體裁にてありしなり。

天保四年學問吟味ありしとき、試驗場に張出したる書付。横紙一枚にて坐敷内に二箇所あり。

一、辨書暮時前まで可被差出候。燭臺は差出不申候。

一、面々席々におひて可相認候。休息所におひて認候事不相成候

一、席上隨分物靜かに可被致候。學事たりとも相互に問合無用に候。

正月

（竪紙一枚にて同斷）

一、四書は正解之類。五經は講義の類を用ひ候事。原文を其儘少々引直し辨書認候義無用たるべく候。

一、諺解假字抄之類、持參相成不申候。

試驗問題中、問目の一例をあぐれば、

史記　趙孝成王、趙括をもつて廉頗に代て大將となさずんば上黨の降を受くといへども、白起が爲めに敗らるゝの禍無かるべきや。

辨書の一例を示すべし。

論語　學而篇

子曰巧言令色鮮矣仁。

章意　此章は表をかざり候心有之候へば、本心の仁德はうせ候と申す事を示さ

れ候章にて候。

字訓　巧言とは詞を上手に品よく申なし候事、令色とは顔色をいかにも尤らしく取繕候事のよし。

解義　凡人は内心の見事なるやうにのみ心かけたく候。左なくして、口上を上手に言ひなし、顔色を尤もらしくとりつくろひ、外をかざりて、人の氣に入られとするときは、是則欲心の盛んなるにて、本心はやうせたりと申すべし。仁は人の本心なれば本心を失ひたる人に仁德の有るべきやうなし。聖人の御言葉はゆるやかなれば、鮮との玉ふ上は絶ゑて無きといふことゝ心得べし。

餘論　剛毅木訥近仁と申す言葉に引くらべて見候へば巧言令色なる人の心のおそろしきことと知りつべし。されば人は假りにも外をかざりて、人に喜こばれんと思ひ、大切の本心を失ひ見苦るしき心持つまじきこと肝要の儀と存候。

何役

頭支配姓名

月　日

何之誰　謹譯。

試驗は成蹟によりて銓考せらるゝものなれば、その施行手續は極めて嚴正を要せり。試驗官は宣誓をなし、試驗問題は確定したる後ち封印して大學頭に提出す。答案調も亦隨つて嚴重にして、すべて問題漏洩等試驗に伴ふ弊害の無からんことを求めたり。

寛政の學政改新以前に於ては、旗下の士の登庸試驗といふもの存在したるが、固より有名無實なり。栗山の建議にいふ。只今御吟味と申候は、御老中の宅にて一度も見も逢ひも不仕もの五十人も百人も召集められ只男振立居振舞言語應對の御見分御座候のみにて外に何の御吟味も無御座候。すべて人の器量才覺人柄と申すもの男振り立居振舞にても相知れ不申ものに御座候とて、進みてその救濟の方法を述べて、兼ねてより其組々の頭分へも御尋被成、其平生の人柄並藝術等篤と御吟味被成。また前に申上候頭分の者より書出し申候ものを、尙ほ又御老中御逢被成、御見分の上にて被仰付候やう相成申候はゞ御旗本の面々は立身の種は御反對客より手前〳〵の身持藝術を嗜申候が早きと合點仕候て、上より不被仰付候て

も、我がちに學文等も勤み人柄相嗜み可申と奉存候　かくて栗山は平生の吟味は教育にありとし、教を解釋して、全て教と申すものは、人に目を覺まさせ候やうに、致候が肝要にて御座候、人に目を醒させ候は、賞罰の二つにて無御座候ては參り不申といへり。栗山また教育の衰廢より旗下、武士無學の狀態を記して、儒者さへ有の如く學文無精にて染々御用御達候ものは無御座候へば、その外の者は不及申。學文と申すものは、上には御嫌なり。畢竟學文は長袖の役也、これを致さずとても武士は相立候と心得。學文と申すものすたれ果て、仁義忠孝は地に墜申候。栗山はかく計り旗下に教育の必要なることを痛論せり。彼は大勢を道破すらく近來下の者、御威光を奉恐候事は昔よりは、日増に甚敷罷成申候得共、御威光の正味は乍恐日々に虛に相成申候やうに奉存候、御威光の正味と申候は、外の事にては無御座候。御譜代大名と御旗本の面々とにて御座候云々。栗山は旗下の士の教育を振張するは則ち幕府の命脈を新たにする所以なることを絕叫せり。かれは如上の見地よりして御吟味の改良を必要とし就きては學問の奬勵を第一なりとして、昌平黌の刷新は計畫されたる也。從來の學制を一變し、昌平黌を以て幕府の大

學となせるは、尤も明確なる徵證なり。而して寛政年中旗下の士の教育一時に起りしが、その盛んなるは天保年中にして、彼理渡來後は賞罰の方法も綿密にして、極力教育を督勵せしが、時已におそかりき。

この一節は日本教育史資料及び余が親しく元大學頭林昇翁より聞得し材料とによりて大躰を編述したるなり。試驗法の委曲を知らんと欲せば須らく日本教育史資料七の卷、試驗の部を參照すべし。

第三節 幕府の學校は昌平阪學問所の外に、和學講談所。醫學館。醫學所。陸軍所。海軍所。開成所あり。地方にては、甲府の徽典館。駿府の明新館。長崎の明倫堂あり。その施設の目的各一ならずと雖も、明倫堂を除くの外は、悉く寛政以後の設計に係る。

醫學館は明和二年(一七六五)多紀元孝意、江戸神田佐久間町天文臺の舊地を借り、躋壽館を設立したるに始まる。その後殆んど廢絕したるを寛政三年幕府收めて公庠とし、年金百兩を給ひ幕醫をして悉く此に學び、かつ考試を受けしむ。多紀氏の子孫をして學政を掌らしむ。この學館は漢方醫學を主とするものなり。

これに對して醫學所は神田和泉橋通りにありて西洋方を敎ふる所也。安政五年(一八五八)洋方醫伊東玄朴、竹內玄洞等八十餘人相謀りて種痘館を神田お玉ヶ池に建てしに起原す。後ち幕府その資を助けて規摸を擴張す。東京醫科大學の基礎となれるもの則ちこれ也。開成所。陸軍所。海軍所は皆な彼理渡來後、幕府が外國語と洋式兵術との必要を感じて或は創置し、或は擴張せしもの也。甲府及び駿府の諸學校は、その地方に在住せる旗下及び家人の子弟を敎育する爲めにして、專ら漢學を敎授せり。

和學講談所は江戶麴町六番町にありて寬政五年(一七九三)塙保己一の建つる所なり。その目的は國學を敎授し、及び幕命を受けて國書調査に任ずるにあり。幕府より地を賜ひて、その費に充てしめ、林大學頭の管轄に屬せしめき。

塙保己一の事蹟は著聞せるを以て載せず。その敎育に關してのやゝ詳なることは、三十四年一月雜誌史學界に載せたる拙稿塙保己一傳に就きて參照せらるべし。單行本に塙撿校傳ありて、その事蹟のみは詳悉せり。博文館出版の塙保己一も、その大略を知るには便利なるべし。盲人中の偉人に

して、その學界に貢獻したる事業莫大なれば、その敎育の方法に就きては研究の價値あり。

和學講談所にて蒐集したる書籍目錄は、日本敎育史資料七の卷、和學所の部に揭載せり。

平民敎育の爲めには、幕府は如何なる施設ありやといふに、先是將軍吉宗のとき、享保の初年に、三府に學校を置かんと令したることあり。浪人菅野彥兵衞は江戶深川に地を賜はりて敎授所を建つ。これ平民學校の始なりき。その後ち中井竹山大阪にて地を賜はりて懷德堂を建て。天保十三年(一八四二)幕府は深川敎授所の例を逐ひて、麴町敎授所を建つ、敎師に手當を給して專ら素讀を敎へ、傍ら講義にも及はしめたり。その後ち、幕府は學問所奉行を置きしときに、小學校を江戶及郡邑に設置するの計畫ありしが、幕末多事にして終に行はれず。すべて幕府は人民に自治を責めて、平民敎育は自然の開發にまかせ、民は知らしむ可らずの主義によりて、敢て平民敎育に力を盡すこと無く、その此點に注意し始めたるは吉宗將軍に始まり、寬政天保以後は益その方針に傾きしかど、社稷已に覆かへりてまた施すべ

きの時日あらざりき。

第四節　代々の將軍文武の道を忘れ玉ふなとは、家康が最期に於ける教訓なり。然るに時太洋に徂るゝに隨ひ、將軍は唯だ武士の統領たるを以て滿足し隨つて學術は疎外せられたるが、その武邊の教育といふも甚だ薄弱なるものにして、將軍は遂に婦人の手に生死する紈袴子弟となり了れり。於是乃祖の遺訓全く水泡に屬せり。覇者の政は實力によりて行はる。從五位下相模守たりとも、北條氏は能く天下の執權たりき。德川氏は代々の將軍にして、此の如く柔弱なるものとすれば、吾日本の國體にありては、到底永くその位置を維持すべき所由あらず。歷代の中綱吉、家宣及び吉宗の如きは好學の志厚なりしも、家宣は世を早くし、綱吉は上氣學問のみ。その後に至り、田沼意次の如き權家出るに及びては、專ら將軍を愚にせんことを計りしかば、將軍は愈ゝ柔弱なるものとなり了れり。家康は堅苦して以て天下を得たり。而かれども彼の最期に於ける苦衷は如何計りなりしぞ。西方猶ほ崛强なる外樣大名の存するあり。彼れ垂死病中、寶劍を二たび三たび打ち揮りて、我れこの劍の德を以て我子孫を鎭護せんとは言ひき。彼その子孫をして雄健

敢爲ならしめんとして遺誡備さに至れり。何事ぞ子孫忽ち乃祖の苦衷を忘却して、空しく太平の傀儡子となり了りしや。唯だ德川氏の速かに亡びざるものは、機運の未だ至らざるにも依ると雖も、亦實に乃祖が慘憺の經營に成れる政策の餘澤に浴せしのみ。

寬政以前に於ける將軍の敎育は眞に衰頽を極めたり。將軍は幼時より學校に出ること無し。奥儒者ありて講筵に侍すれども、それも、この頃には唯だ名のみとはなりぬ。將軍は殿中に侍臣や侍女と譯もなき禮式や遊戯に、其日を送るのみなりき。されば柴野栗山の建議書中に

一、人の智惠開申候ものは、學問程結構なるものは無御座候。………佞臣は君の智惠明らかに御座候得ば、手前〳〵の奸佞讒邪を見ぬかれ、君をくらまし候事相成不申候故皆君の學文の邪魔を仕候………

常憲院樣御學文御好み被爲遊候得共、乍憚只上向き御浮氣にて御好み被爲遊候のみにて本道の學文を不被爲遊其上下に本道の學文筋を可申上器量に御當り候人無御座候故左のみ御政道の御爲にも相成不申候。……

(吉宗)御上樣御手習の御手本に相成申候とて、五倫名義と申す假名書の物も被仰付、その外御政道の事を御側衆を以て御尋被爲遊候事段々御座候……御上樣(家齊)にも初め西の丸に被爲入候時分成島道人(司直)御側へ罷出御學文被爲遊候處御幼少に被爲入候節日々唐人の眞似を被爲遊候に付き、御役人衆の御了簡には左樣の無益の事を御好み被爲遊候ては後ちに天下をしろしめされ候節却て御政道の御邪魔にも相成可申歟と奉存候て御留め申上候由。　虚實の說は不奉存候得共、下沙汰には箇樣申觸候。　箇樣の事を申上候得は、只今御法にて誰に承り候や何方にて聞候やと此事に付て御詮議嚴敷、肝心の處は脇に成申候。　總て上一人の被成候事は下の者へは能知れ候ものにて誰申候と申事も無御座候得共、世上よく存居申候ものにて御坐候。　誠左樣も御座候はゞ御役人衆申上候通り唐人の眞似を被爲遊候の、詩文章を御作り被遊候の。御自身講釋を被遊候のと申樣の事は、隱居や樂人の慰に仕候風雅樣の上氣學文と申物にて、一天下をしろしめされし公方大將軍の被遊候御學文にて無御座候。　何の御益にも相達不申、惡く仕損じ申候

へば、却て御政道の御邪魔に相成申候物に御座候。必竟これは申上手の不器量にて候へば、外に本道の學文筋をもよく合點仕候者を吟味仕、御側へも指出し可申筈に御坐候所、これに依て御學文御無用に申上候。乍憚又御役人衆の了簡違の樣に奉存候。……

乍憚道人(成島司直)躰の者は未だ篤くと得合點仕間敷と奉存候。依之申上方惡く御座候と相見得、御上樣にも學文無益のものと被思召候やらん、近來は御學文の御沙汰は透と御止に罷成、惇信院樣(將軍家重)御奥儒者相勤候德力藤八郎をも表へ御出し被遊候て、後は御奥儒者相勤候義不被仰付候故下の者は上には御學文氣と申すものは御嫌なりと相心得、御儒者共も殊の外に學文無精に罷成、今年にも朝鮮人來聘仕候ても大學頭父子は格別其外の者は踏切て相手に罷成、詩文の贈答、筆談も應對をも可仕と相見得申候ものは一人も無御座候。何卒御奥儒の御役をも又々被仰付、德力藤八郎事は隨分律義ものにて學文もよく仕候ものにて御座候得ば、折々御政務の御隙には　貞觀政要、大學衍義、大學衍義補等の書籍を講釋被仰付候て御聞被爲遊

尙又追々本道の學文の筋をも能く合點仕候者を御吟味被仰付候て御側にも能出候樣に被仰付候はゞ御上の御德も益明に罷成…………書中

右上書の所說によりて、將軍少時の敎育及びその變遷も知得せらるべし　いへる成島司直は後ちに叙爵せられしものにて、新井白石以後優遇第一と稱せられし人也。以上說示せる如く將軍の敎育は太甚だ淺薄なるものにして、天下の政務を預り聽くべき素養としては、なかなか以て覺束なきものなりき。家康が文武を忘るゝ莫れとの遺訓も今は夢となりぬ。代々の將軍たゞ婦人の手に成長し、逸樂惰弱に閑日月を消するのみ。田沼意次が將軍などは繪畫を學ばしむることそ好けれ、史書など讀ましむべきにはあらずと謂へりしは一時權數の微言にはあらずして、將軍または諸侯などは、多く繪事を習ひて、長生殿裏の春秋を樂しみし也。これ乍併高貴にして無聊單調なる生活には尤も適したる方法なりし也。「古畫備考」を一覽せば將軍または諸侯の繪事に通曉せるものゝ頗る多きを見るべし。

將軍綱吉は又繪事をも好みたり。右文故事に貞享二年六月廿九日聖像を親寫して林鳳岡に賜ひしことを載す。松蔭日記(旅衣)元祿四年三月廿一日

柳澤の亭へ御成の條には、その嗜好の一班をも知らるべき記事あるを以て左に抄出す。

殿の內、言はん方無く、北のおとゞには御前の御みづから書かせ玉へる櫻に駒ある繪を、いといみじく花やかに、かざらせ玉ひて、その前に白かねの花がめ二に得もいはぬ花どもさしておきたり。

綱吉の女にして紀伊綱教卿の夫人たりし鶴姫もまた繪事に通じたり。

次ぎに繪事に精わしかりしは將軍吉宗なりき。御實記によれば、彼は自ら畫を能くせしのみならず、最も鑑識に長じ、本邦の繪に對しては、畫者の年頃までも指して當てられしといへり。市井骨董の賣品をも、求められ、名家の藏品は固よりの事、社寺の緣起繪卷物まで廣く求めて、特にすぐれしは、自らも寫しなどせしとぞ。

(彥根善意私記)君(吉宗)の御父、光貞卿は狩野探幽守信が畫法を學び世にすぐれ玉ひければ、公にも御幼稚より畫を好み學ばせ玉ひける。…………その頃探幽は、はや世にあらざりければ、彼が從子養朴常信を召て師とし玉ひけ

り…………養朴失せぬる後は、其子如川(周信)を召て、つねに問ひはからせ玉ひしが、如川世を早くしければ、其子榮川(古信)未だいとけ無かりしを名家の末なりとてめしまつはし玉ふ事かぎり無し。特にその畫才をすゝめ玉はんとて御みづから養朴以來傳へさせ玉ひし畫法を懇に御教諭あり。放鷹の時も御供に召し加へられて景勝の地に至れば、必らず眞圖を作らしめらる。既に小金原御狩ありしにも、陪從して、そのさまを圖せしめ、後に屛風に押されけるとぞ。ことさら鷹の圖は御教を加へられしにより詳審に至りしとになん。…………

代々の將軍中、尤も繪事に上達せしは則ち家治なりき。御實紀によれば、その描法遠く宋元の妙域に達し、古畫を摸寫せしものなどは、殆んど眞贋を辨ずる能はざるに至れりといふ。家治に學びて、また畫を能くせしは、家齊なりき。

家治養女種姫は、未だ家治に學びて堪能の聞えあり。紀伊治寶卿の夫人となりて、寛政六年正月逝去せしが、その婿君と居常、畫と管絃の道と相換て習

はれしとなり。成德筆記にいふ。種姫君甚慧才に御座して、御書并に我歌は殊によくなし玉ふ上に御畫に至りては榮川院に御學遊ばされし名畫にてましませり。御入輿の後、紀州侯も、この御畫を御學なされ、また管絃の道をば紀州侯より御師範あり。相互に換て御學ありしとなり。御早世の事、人々今に惜み申せし也。白河侯とも御兄弟の御間殊に御睦しかりしと也。將軍家慶もまたいたく繪事を好みたり。御實記に、その平生をのべていふ。御平生御畫被遊候事…………正月元日には吉方にむかはせ玉ひ、寶珠三つ御筆有之、二日には絹地ゑ何にても目出度被遊。每月十七日には地唐紙ゑ御繪あり。御忌服などこれある中は、日月の繪は不被遊候。多く御繪たまり候へば御畫本差上候者ゑ御見分被仰付候。不出來分は御燒捨に相成候。禁裏へも絹大横物葡萄の御筆進献有之…………

以上叙述するところによりて、將軍家庭修業の狀況の一班も知らるべし。將軍家庭の日課につきては、「千代田城の大奧」といへる書中に詳述せるが、その中讀書學問の事につきては、將軍が眞面目に勉學するに至れるは彼理渡來後、眞に

幕末暫時のことに屬す。その以前は栗山の上書中にもいへりし如く單に上氣學文たるのみに過ぎざりき。余先年元の大學頭林昇氏をその隱栖の地に訪ひて「御前講釋」なるものゝ實況を聞くを得たり。將軍が日課を定めて勉學するに至りしは、幕末に松平春嶽鍋島閑叟等の諸侯當局となられしときに始まるといふ。奧儒者は近習の師範たるものにして、ときには將軍のために復習の師となりしこともありき。而してつねに將軍に進講する者は大學頭なり。始めの中は毎月數回進講するに過ぎざりしが、後ちには殆んど毎日のやうに將軍は學問せらるゝことゝなれり。講義の際は將軍袴をつけて、敷物の上にのぼらず。大學頭は見臺の書に向ひ兩手をつきながら進講す。將軍の背後に侍童一人あるのみにて陪聽者無し。時刻は早朝にして、大學頭は提灯を携へて登城せり。進講の書は、おもに經書のみなりき。

徳川氏の社稷はすでに落日の悲運に沈めり。この際にあたりて、俄に急足に文武を講じて旗下を奬勵せんとす。時すでに晩かりき。

將軍の家庭教育につきては、婦人の手に成長し、病死したり、それまでの間は

唯だ文雅の生活に日を送りたりと言ふに過ぎず。これにつきては、德川政敎考、千代田城大奧、大奧の女中等は好き參考書なり。

第五節　官儒の巨擘は林大學頭なり。幕府が林道春を聘用したる趣意は、これをして政務の顧問たらしむるにあり。法制禮儀の典故を調べ、往復の文書に關かり、年號を考定する等の職を執らしむるにあり。實は當初にありては、敎學のことは第二にありき。要するにこれをして叔孫通たらしむるにありき。聖廟を設け學校を建て、自ら大學頭の地位を作りたるは、固より林氏自家の努力に出でしことなり。然るに世も漸く進みて法制禮儀のことも、やゝ具備するに至りては、林氏の職分は、將軍に進講する事。司法顧問たる事。外交文書に關與する事。年號を考定する事等にして、元祿以後は、幕府の敎育を掌握することも、その公職の一となるに至りし也。

將軍に進講の一事は、既にこれを說けり。司法顧問たりといふは、幕府の最高法廷に出席して、陪席判事たること、その一也。その二は、年の始めに諸大名及び旗下諸士一同に殿中にて、武家法度を讀み聞かすことなり。これは左手に、卷物を捧け、

右手もてひろげながら讀みもて行くことにて、林氏年中行事中の困難なるものゝ一なりきと彼の林昇氏も語られき。外交に關するといふは、幕末に至るまでは、唯だ朝鮮聘使に應接し及び往復の文書を立案するのみなりしが、彼理渡來後は、頗る多忙となりて、神奈川條約に委員たりし大學頭林健は世論の攻擊に堪えずして引退するに至れり。

年號考定の一事は、また以て官儒の面目を窺ふに足るべし。乍併これは林氏のみにあらずして、朝廷の方面にては菅原氏世儒として、この事に與れり。

年號は六十四字と定りありて、後ちに廿四字增補せられたり。則ち

吉　白　神　乾　康　保　永　寛　和　延　應　承　觀　護　雉　鳳

雲　至　萬　德　元　仁　弘　祿　喜　文　明　勝　朱　字　島　正

禎　勝　人　享　亨　壽　養　緣　同　銅　靈　齋　慶　建　長　治

寶　天　曆　安　貞　福　衡　芳　泰　化　祥　武　平　久　祚　景

增補廿四字とは

豐　中　興　光　運　興　國　成　孝　情　遍　聖　熙　隆　顯　紹

淳　曜　靖　開　昭　寧　祐　宜

右の字數の中にて、典故を書經及び聖賢の金言等に考へ、その字の緣喜の吉凶を歷史上に明らかにして、さて善き二字を見立つる也。改元の事に就きては、林春齋の改元物語及び伊達隱士の光臺一覽に、學者の職分を記せること詳か也。改元は通常は朝廷の世儒たる菅氏の原案になれども、また林氏の發意になることもあり。されば通例は朝廷にて原案を定めて幕府に諮問さるゝ也。その際、林氏の意見によりて變更さるゝこともありしと也。光臺一覽に曰く。さて菅家年號を被選出法は、六十四文字、本字は近代增加廿四字を顚倒して字を双ぶる也。書經魯論の熟字に符合させ被書出事なり。改元に付て上卿職事奉行の役選者方の陣答人五六人、難問人五六人被仰付。尤も菅家出入の儒門の被官、其外町宅の庸儒も入込候て骨折事也。たとへば

寬　和　享　和　正　德

難問人の云々、享の上にある事何度。和の字、下にあること何度。和漢兩朝

嘉例凶例中立て難ず。それを唯だ嘉例のみの多きを中立て陳答するなり左右大臣大中納言判して衆議判の後奏聞を經られ候。凡そ三ッ許り書き被成候。其砌は改元難陳の次第とて選者出處、維間陳者批判まで一冊に書き立て堂上堂下にて賞見仕る事也。また大意事極り關東にも被伺候得は替り候事も有之……

林大學頭は昌平阪學問所の長官として、また德川氏の文相ともいふべきものたるが、學問所にては講義せず。仰高門の脇の舍にて講演したりしも、そは幕末には已みき。林氏は自ら家塾を有して、學問所に出入する數多の朱子學者籍を林氏の門下に列す。林氏は實力は措きて、すでに師家たる門閥のみとなれりし也。

茲に林氏家塾の都講の職分を附記すべし。河田廸齋は幕末に於ける林氏都講として著聞せるもの也。その行狀によるに、彼は林述齋の門下にして、その晩年に都講の事を攝せしが、佐藤一齋進んで儒員となりて官邸に遷りしより、廸齋即ちその後を承けて都講となり愛日樓に移り、更らに扁して風白樓といへり。彼れ黽勉して門生を教育し、朝早く一回講義畢れば、則ち招講に應じ二三大名を經歷して歸

來し、夜は又た塾生を會して講習討論せり。而して林大學頭のために劄子應酬文字の事にも當るを以て極めて多忙なりき。神奈川條約のとき、大學頭をたすけて、漢文及び書記の事を掌れり。彼理の日本紀行中にある和約條欵の國家は則ち迪齋の手になれるものといふ。要するに林氏都講は即ち林氏の掌書記にしてさらに又その番頭ともいふべし。而して、林氏家塾の經營は專ら都講の手によりて遂行されしなり。

第六節　白河樂翁公當局たり、學政を刷新せんとして、柴野栗山、尾藤二州、古賀精里の三博士を登庸して大に昌平阪學問所を擴張し、德川氏の學制茲に始めて整頓するに至れり。而して公が異學を禁ずべきことを諭達せしめし一事は計らずも學界の大波瀾を引起し、寛政異學の禁として、近世敎育史上の一大事實とするところなれば、茲にこれを考竅すべし。

寛政二年六月（一七九〇）異學を禁ずべきことを林大學頭に達す。その文に曰、

朱學の儀、慶長以來御代々御供用之事にて、既に其方家、各學風維持之事被仰付、置儀に候得者、無油斷正學相勵み門人共取立て可申儀候。然所近頃世上種々新規

之說を爲し、異學流行、風俗を破候類有之、全く衰微の故に候哉、甚不相濟事にて、其方門人共の內にも右體之學術純正ならざるも折節は有之樣に相聞ゑ如何に候此度聖堂御取締嚴重に被仰付柴野彥助岡田清助儀も右御用被仰付候得ば能々此旨申談急度門人共異學相禁之。不限自門他門、申合正學講究致し人材取立候樣相心得可申候。

右は公儀より越中守御達の趣を以て京極備前守より林大學頭(信敬)に申渡されたるなり。さて大學頭よりは、さらに諸生中に示諭していはく

御當家開國の初め宋學御取立被續而聖堂御建立有之候儀、全く風俗正敷相成、人才致成就候樣にとの御美意に有之候。然る所近來種々新規之學致流行我等門人にも右躰之學致候者有之候樣に相聞此度被御沙汰候段於我等も恐入失面目候仕合に候。此後は門下一統正學致出精人柄相愼候樣急度相心得可申儀被存候。修行方の儀追々令申聞候。

書中の趣意正學を振起し異學を掃蕩するにあり。正學とは何ぞや。程朱の學これなり。正學或問のうちにも林家の諭達を載せたるが、その中に。先代より定

置候五科の目を以て各方長ずるところに從ひ出精可有之候。何の科たりとも、猶ほ經義は程朱の主意を不失樣覺悟有之儀は勿論の事に候と。これ則ち樂翁公の諭達の朱學の儀は慶長以來代々御供用の事といへる精神を發揮したるものなり。三博士その才と勢とによりて、正學振起の名の下に朱學を皷吹し、あらゆる他の學派を排斥して所謂異學禁の勵行は、樂翁公の思ひ設けざりし邊にまで波及したりしなりき。樂翁公の當初の諭達は、主に林家を戒飭し、紛々たる異學の興起を排撃すべしと謂ふに過ぎざりき。然るに三博士は林家を擁して、この主旨を鼓吹し、天下諸大名の藩學をして盡く程朱學を奉ぜしむるに至れり。かゝりしかば當時の學者紛起して、その失當の擧たることを論ぜり。而して萬軍の矢面に立ちたるは三博士ことに柴栗山なりき。

栗山は政治家たるの態度ありて、能く林氏の實權を掌握し異學の禁をして天下に徹底せしむるを得たるが、この禁令の發意者は彼にあらず樂翁公にもあらずして、山陽の一隱士西山拙齋なりき。請ふ後段に至りて詳述せん。

異學の禁の發意者は兎まれ角もあれ、この禁令の依て來れる直接の原因は學派

の紛爭と學風の頽落とにありと謂ふべし。伊物二子起りてより學派の爭紛然として起り、正德より天明の頃に及びては唯新を競ひ奇を、求めて學術地に墜ち學風ことにすさびたり。蜀山人が、逢佛殺佛、逢祖殺祖、逢布子殺布子、逢蚊屋殺蚊屋、過八箇月始得解説と罵倒したるもの實に學風の墮落を刺れる也。彼また當時書生の無學を嘲りて

贈看花書生

尋花雅人共、行讀懷中書。無暮艸爲寧、有鐺石作如。水交三升酒、蠅集片身魚

陳舊詩成後、一盃食又嘘。

狂詩一篇を賦し、故らに誤字を用ひて、皮肉の評を試みたるもの、ともに皆な當時の實況を穿てるものなり。此の如き狀態に立至れるのとき、憂世の士、これが匡濟の方法に思到らざるを得ず。樂翁公や栗山や、拙齋や、則ち程朱の正學を鼓吹して、以て季世の濁浪を排せんと試みたるものなり。彼等は學弊を救はんが爲めに異學の禁を發したるものなり。

(栗山文集卷一)論學弊。

近世立新說、凡有數途焉。其上者資質聰明、厭舊學之固陋纏縛。其次局量卑狹、苦古說之有所窒礙。其次驕傲僭越、尊大自處。最下者怠惰自便。其厭固陋纏縛者不能通觀周覽以救弊誘正、欲幷大中至正之道廢之。別立平俗鄙近之說以爲孔孟之血脉、以自喜。是猶惡周末曲儒瑣節繁文幷廢文武周召之大典以從老莊申韓之放誕名實也。豈可乎。其局量卑狹者不能開濶眼境、放寬胸次、平心易氣以讀書視理。欲以天下古今事理必一律之。儻遇滯礙不通則謂古人皆非矣。不復徐思古人所以立說之旨欲通一二處或窒而遂窒百千之所通。以朱均疑性善以來均斥復性猶以夏雹冬雷疑陰陽焉。其驕傲者見先輩創新意立門戶被小兒輩謂豪傑士、謂循守古說則似曲陋不能成家而出其下者。是以欲亦別開宗派祖師自作、鑿空杜撰務拗古說、叨以豪傑自喜焉。其怠惰自便者本不能勤苦讀六經傳註。其平生所事皆召歌呼酒、其所緣飾皆詞曲小說易讀書。然愧以此自處亦竊倚經學以立門戶、而士子入學于京者於六經傳註固幼習熟復本欲以其所疑滯就質之。而其先生者乃不能當之、一例抹却以白本從事、以縱其妄臆。故謬忽其說、令人不得詰問以掩其短。亦術之巧者

也。近世之弊大抵不出此數端而展轉反覆、日新月異怪妄訛誕。論語解至于有二十餘家。道術無紀之甚、言之傷心。善哉鳩巢室氏曰如與醉人言、不可與辨是矣。

(栗山文集卷二)送長子玉序、

慶長元和之政、屢垂意風教推崇正學。時則老成碩儒相踵而興、往々精博純實。經說皆尊信古義、不敢有所改焉。其教道學者雖一字訓詁皆有所據。故其徒業成而歸者所以表儀一邦而講說黌庠皆隨才雅飾。奉守師說惴々焉惟有所失而詭聖人是懼。是以道德一而風俗美。忠孝仁義之士歲出以成一代雍熙之風。雖固出于聖天子中興偉烈、覇府列公文武威靈之所致。然亦未必不由老成諸儒制行持論所以維持風俗人心於下者得其正也。既而伊藤源助者出。始出意見駁先儒議聖經、自謂孔孟血脈。其言行頗足取信於人。學者於是始惑。繼而文人物茂卿者妬被源助、先鞭欲超而出其右。强拗戾穿鑿附會肆其怪僻夸誕之說以罔一時。而其徒太宰純者又反噬其師自爲說尤謬妄遂至于謂孟子迂濶不如淳于髡之徒。嗚亦甚矣。自此其後學者無復所畏忌師心妄

寛政異學の禁（其二）政略上より見たる異學の禁

作、曰新月變。苟異古說者指者豪傑。才辯一經先輩口舌者爲陳腐爲糟粕、甘爲之奴隸。虛驕相尙競欲出奇相壓、日以穿鑿六經詆訶先儒、頹瀾橫被天下如狂。乃至新進黃口初開卷輙以欲決摘古人瑕類爲心、奴視老成輕蔑聖經。其弊至于以經語爲戲慢之資壞敗風俗充塞仁義。其謂之何。竊爲天下懼焉。

（後略）

まことに陸放翁の「飽見少年輕宿士」といへるは此ごろの學風なりき。これ以て大に刷新せざる可らず。唯だ異學禁は其當を得たる救濟策たるや否やに到りては敎育史家これを辨明せざる可らず。

第七節　吾人は玆に德川氏の政略と異學の禁との關係を說明すべし。

德川氏が異學禁を發したる動機は、先づこれを政略上より觀察せざる可らず。

（一）　程朱學所謂正學とは德川氏開府以來採用したる學派なり。家康は文治を興して以て爭亂を絕ち太平を致さんとて學者を招致し敎育を奬勵したり。而して先づ招致されし林道春は朱學派なりき。

武野燭談。人倫の道明らかならざるよりおのづから世も亂れ國も治まら

ずして騷亂やむとき無し。この道理をさとし知らしめんとならば書籍より外無し。

幸にして朱子の學風は秩序を第一とし、尤も穩當なりしかば幕府が奬勵すべき學風としてはこれに過ぐるは無し。加之道春は、その學術を以て覇者の政略に貢献したること尠からず。たゞ方廣寺鐘銘を曲解したるのみに止まらずして、湯武を論じて。湯武不知天下唯在救民耳と言へる如きは暗に大阪役に於ける家康の態度を庇護せるものなり。德川氏に取りては、程朱學は、かく計り都合好きものなりしかば正學として代々これを採用し來れるなり。然るに今や伊物二子氣燄の餘波を受けて、朱子學は退縮するに至れり。これ即ち正學を保護し異學を禁壓すべきときなり。

旗下の墮落

（二）ときの當局は白河樂翁公なり。公は專ら實學を尊べる人なり。當時旗下の風儀墮落を極む　これ德川氏にとりて由々敷大事なり。これを匡救するは實學を奬勵し、その氣風を一新するの外あらず、

抑も德川氏が旗下を江戸に置きて、速やかに紈袴子弟に化せしめたるは、固より

その失策たるを免れざるものなり。旗下の士が江戸の生活に堪えずして、窮乏の聲を擧げたるは既に遠き昔にあり、彼等は窮困せるのみにあらずして實に墮落せり。而してその墮落は又極れり。柴栗山の上書に、その弊を具陳せり。曰はく。當時俄かに本道の通りには參り申間敷候間、先御役人を初めて御番衆、小普請樣の者までも講釋を聞かせ候が一番手短かに可有御座と奉存候。講釋を聞かせ候と申候ても只今御城御月次の講釋大學頭父子罷出相勤候樣にて承候者も畢竟皆勤めの樣に相心得、一役一人づゝ罷出列座爲致候までにて、講釋は何を申すやら耳にも入らず承りながら浮世の事を考へ居り申候樣にては何の用にも不達申候……

……儒者さへ右の如く學文無精にて染々御用御達候ものは無御座候へば、其外の者は不及申、學文と申すものは上には御嫌ひなり、必竟學文は長袖の役なり、これを致さずとても、武士は相立候と心得、學文と申すものすたれ果て、仁義忠孝は地に落ち申候。栗山さらに進んで旗下の組織を論じ、旗下銓考の疎雜なるを述べたり。曰はく。只今頭分の者組子へ殊の外疏遠にて只權高に顔に苦みをはしらかし候下より物の申出惡きように仕かけ候斗を御役の樣に覺え居申候。また曰く。只

今御吟味と申候は御老中の宅にて一度も見も逢も不仕もの五十人も百人も召集められ只男振立居振舞言語應對の御見分御座候のみにて外に何の御吟味も無御座候。此の如きは當時旗下の狀態なり。これを教育し刷新せんとする栗山の意見は必らずや樂翁公の意見と契合せしこと疑ふ可らず。

樂翁公の修身錄は公が未だ老中たらざる前の著作なり。その中に實學に關する意見を述べていはく。學問と申すは善事を爲し、惡事を爲さぬと云ふのみに御座候。…………さてその文字紙を離れてぬけ出るように働かねば役に立たず候…………また文學の流義何にても宜敷候。馬鹿のせんさくはす可らざる事なり。朱子の流を汲む者は偏屈に陷り理が過ぎ申候。徂徠の學は文過ぎて惰弱に候。また何の流義にてもいろ〳〵あるが宜しき事にて候が平一面に學文のみ致させ候ては却て宜しからず候。……然れども魚の腐れしも人ぶんも五穀の肥しとなるに書物箱のくされ儒者は何用にも立たず。……と云ひて實學を主として、流派のせんさくは愚の極とせるは妥當の見地と謂ふべし。乍併これを以て、直ちに公は栗山等

に強ゐられて異學禁を發したりと認定するは少しく早計なりと謂はざる可らず。蓋し當時の學界は紛爭實に太甚しく、波動遂に德川氏の社稷を傾くるの恐なきにあらず。このときに當り當局政事家として、これに處するの方として、公は正學を標出し而して程朱學を以てこれに擬したる也、花月草紙には公が實學を尊ぶと共に朱學を信奉したることも屢見ゆ。然るに公の晩年になれる說得祕書の中には。小子もと林家に學び侍るとはいへ、たとひ浮屠老莊の說といへども取るべき事は取り侍るの心にて、まして同じ孔子の流を汲む徠翁の學いかで拒ぎ侍らん猶天瀑氏とも語り候こと得益も候はん……とあるを以て、公は晩年には胸襟頗る開豁したりと爲し猶ほ溯りて、かの修身錄の說と幷せ考へて公が異學禁に對する態度を疑ふ者あれども、說得祕書の言は唯だ公が坦懷修養の概を示したるものと見るを妥當とすべし。

余は異學禁に對する公の態度は太く執拗ならざることを信ずるもの也。公の趣意は重きを實學に置き、時勢に鑑みて正異の標準を立てたれども、か

くばかりこれを嚴密に解釋し、朱學にあらざるものは盡く跡を絕たしめんとまでに、これを勵行したのは、則ち三博士の意中に出でしものなるべしと思ふ也、

さて樂翁公は旗下の風敎改新のために實學を奬勵し、それに就きては、穩當なる學風を標持せんとて、さてこそ栗山等の意見を納れて異學禁を發するに至れるなるべし、

舊風保守と浪人鎮壓

(三) 幕府の政略より見れば異學禁を發したる理由はさらに二あり。舊風保守と浪人鎮壓とは則ちこれなり。

舊風保守は德川幕府の方針なり。差支無きかぎりは舊慣を維持し、新奇なる風潮の起るを嫌へり。然るに朱子學は家康以來幕府にとりて、その採るべきを見て、未だその排斥すべき所以をば發見せざりしかば、正異學の標準を定むるに當り、これを以て正學と擬したるなりき。公が施政の跡を考ふるに八代將軍(吉宗)の方針をたどりたるものゝ如し。學政に於ても、また然りしならん。吉宗は幕府の施政上、官儒たる林家を保護し、新井白石を退けて、以て敎育上の中央集權を行へり。公

の所爲またこれに傚へるものゝ如し。而して林氏の學は則ち朱子學なり。

花月草紙に　それが故にみだれたる世の未だ治まらざる内に早や御神のかゝる事をはからせ玉ひければ、道春といふ人を擧げ代々の學のめあてしるしを立てゝ置給ひにけれ、藤樹蕃山伊物の徒出でたれども公の學の道かはること無し。

浪人は德川氏が尤も恐れたるものゝ一なり。思想界の潮流急にして、千波萬波湧起して底止するところを知らず、而して浪人多くは、其徒なりといふに至りては、幕府これに備ふること無くんばあらず。此に於て乎正學の標準を掲げて異學を唱導せる浪人學者をば排除し去らんとせり。これ辨明を要せざるの事實なり。

第八節　異學の禁は又一面には尊王說を鎭壓するの一手段なるべしとの揣摩說を爲す者あり。諸學派の中蘐園の學は、程朱派の尤も忌むところなれども、德川氏に取りて、尤も恐るべきは敬義學派に若く無し。敬義學は山崎闇齋の唱へしところ程朱學と稱すれども、朱說を以て巧みに吾國躰に調和せしめたり。さればこれ等をも異學として排斥し、以て尊王論の興起を鎭壓せんと試みたるにはあらず

やとの説をなす者さへあり。余は異學の禁と尊王論との關係に就きては餘り重きを置く者に非る也。然れども此疑問も亦稍有理に似たるを以て並にこれを辯ぜざる可らず。

朱子學との幕府との關係

寛政異學の禁令出でし後ちの事なり。中井竹山が京都に學校を建てんことを上書せしうちに、總じて學者一分上の大害となり候は、荻生に若くは無く候へども、縉紳尊貴の御身にかぎりては山崎の害はるかに甚しく候故遮りて申上置候。後々末々まで是を學校の大禁と遊ばされ度候といへり。これ流石に要領を得たるの言にして、敬義學排斥の考案は明敏なる執政者の心中にも往來したるべきやを疑ふなり。然れども程朱學を正學として教育上幕府の社稷を維持する根本方法としたりとせば家康の當時は、いざ知らず、既に學術研究の進みたる幕末にありては、太だ未熟なる考慮と謂はざる可らず。

幕府の禁物とするは、帝室の尊嚴王覇の辨これなり。而してこの二者は實に朱子學によりて闡明せらる。されば朱子學は幕府に取りては、地雷火よりも恐るべきものたるなり。唯だ朱子學は秩序を第一とし、君臣の關係を論ずること詳かに

して、かつその研究方法の漸進的、歸納的たるによりて、濫當平實ことに幕府の採用すべきもの、ように見えしなり。朱子學によりて帝室の尊嚴、王覇の辨、明らかになりたる曉には、幕府の覇者たること知れ渡り、而して今まで幕府と武士との間柄のように思惟せしものは、移して皇室と臣民との間柄たること瞭焉たるに至るべし。則ち幕府が武士に向つて、われに忠義を盡くせよと教へしことは、また信ずるに足らざることゝなり、加之幕府と武士と同じく、ともに皇室に忠を盡くすべきものたること明白になりて、幕府は朱子學によりて面皮を引剝がるゝことゝならざるを得ず。此の如きは必然の道理にして、又すでに幕府が目睹し來れる逕路なり。そは敬義學派を代表する淺見安正が靖献遺言を著はして、君臣の大義を述べたるのみにあらず。水戸光圀卿は大日本史を編述して國躰を辨明し、神功皇后を后妃傳に、大友皇子を歷代に列したる如き、明の學者朱之瑜を優遇して嗚呼忠臣楠氏之碑を立てし如き、皆なこれ朱子學の素養より來れるものにして、悉く德川氏社稷の基礎に大打擊を加へたるものに非るは無きにあらずや。朱子學の幕府にとりて危險なること、恰も爆裂彈を抱きて爐に向ふに類せずや。

通鑑綱目。

夫れ朱子は洙泗の正統を以て自ら任ずるもの也。孔子は春秋を作りて、その學術道義を具體的に表明したりき。朱子は則ち通鑑綱目を作りて、ひそかに孔子の春秋に擬せり。朱子の學術道義を知るべきものは則ち通鑑綱目なり。綱目の第一義は正閏、王覇、順逆、華夷を辨ずるにあり。されば綱目にても蜀漢を以て正統と定めたるは朱子の識見なりとするところ。逸早く朱子の眞面目を窺得たる者は淺見安正にして、靖献遺言を著はし、後ち更らに靖献遺言講義を著はして、その趣旨を告白せり。彼れ遺言に於て先づ屈原を掲げて朱子の苦衷を表し、諸葛亮に於て正閏王覇の辨を爲し處士劉因に於て華夷内外の辨を爲し、張巡に於て臣子の大義を説く。徹頭徹尾朱子學に根據せり。

靖献遺言講義

安正謂ふ、此篇特ニ士タル者ヲシテ大義ノ端的ヲ知テ切磨シ、學ニアラザレバ、一歩モ其身ヲ動カス可ラズ。君ニ事ヘ已ヲ處スル皆孝ニアラザレハ妄ナルコヲ知テ疑無カラシメントス。以此、武士ノ小學トスルモ亦可也。竊カニ朱子小學稽古篇明君臣之義ノ遺意ニ附スト云爾。

(靖献遺言講義)巻之二、三國正統辨。

夫レ正統ハ天下ヲ筋目ヲ以テ有ツテ全ク得タルヲ云フ…………何程宜へ

タリトイヘモ其天子ノ子孫續ク間ハ是ヲ正統トス。…………
三漢唯一ノ漢ゾ。是則チ不易ノ正統ニシテ朱子綱目ノ第一義也。……
朱子綱目ヲ修ムル其ノ意樣々アリト云ヘモ、別シテ此三國正統ノマギレ、天下後世甚ダ大義ノ害ヲナス故ニ思立タレタリ。……
此明白的實、朱子於綱目詳說其旨。或曰、若當時、献帝之讓、出於其本意而丕之受之不有劫奪之邪志則以正統與魏乎。曰不然也。若如此則雖献帝亦賊而已矣……………是故綱目、献帝之崩不以天子崩之常例書、而曰山陽公卒。其貶意可見矣。其編遺言亦竊本於此。…………

(卷之七)處士劉因、

何トテ劉因計リハ何トモ書カヌゾ。去レバソレニコソ大議論ガアルゾ。……劉因ガ生國ハ宋以前ヨリ夷狄ノ地トナリテアリ。……サラバ何トテ仕ヘヌゾト言ヘバ因ガ生レタル地ハ伏義以來極マリタル中國ノ地ナルヲ石晋以來三百餘年夷狄に陷リテ、因ハ則祖先以來中國ノ民ニテ名氏ヲツリタル人ナレバ何處迄モ夷狄ノ筋ナル者ニハ仕ヘヌゾ。ソレテ上ニ一

ノ冠名ガ無シ。是非モ言ヘト言ハヾ中國處士ト可言。……サレバ大義ト云フニ劉因ホド大ナル大義ハ無シ。……

我國ハ天地開闢以來餘所ノ國ノ蔭ニテ立タル國ニテ無シ。神代以來正統ニ少シモ紛レ無シ。唐ノ書ヲ讀ミナジメバ何處トナク唐人形氣ニナリテ日本ハ旅屋ノ樣ニ覺ユル、古今第一ノ僻者也。書物故義理ヲ破ルトハ加樣ノ事ナリ。ソレ故日本ノ者ハ此劉因ガ合點ヲスグニ我身ノ上ヘモテキテ是ヲスグニ中國ト踏マヱルガ大義ゾ。……況ンヤ我國天地開ケテ以來正統續キ、萬世君臣ノ大綱不變コト是レ三綱ノ大者ニシテ、他國ノ不及所ニアラズヤ……

孔子モ日本ニ生ルレバ則チ日本ナリ。是則能春秋ヲ學ビタルト云フ者也。スレバ今春秋ヲ讀ンデ日本ヲ夷狄ト云フハ、春秋ノ儒者ヲソコナフニハ非ズシテ能ク春秋ヲ讀マザル者ノ春秋ヲソコナフ也。……山崎先生嘗物語ニ唐ヨリ日本ヲ從ヱントセバ軍ナラバ堯舜文、武ガ大將ニテ來ルトモ、石火矢ニテモ打潰スガ大義也。禮義德化ヲ以テ從ヱントスルモ、臣下ト

ナラザルガヨシ。是則チ春秋ノ道也。吾天下之道也ト言ヘリ。………大凡儒書ヲ學ンデ却テ害ヲ招クコト湯武ノ君ヲ伐ツコト不苦ト云ヒ、柔弱ノ風ヲ溫和ト云フ樣ナルコト幾箇モアリ。皆非儒書之罪、學儒書者ノ讀ゾコナイ義理ノ究メゾコナイ也………

題朱子手帖、

夫レ學ハ朱子ヲ以テ宗トス。朱子ヲ學ブ者ハ大義ヲ知ラント欲シテ學ニ本ヅカザレバ不能明也。學ント欲シテ不本於朱子、則學ノ正ヲ失フ。然ラバ則チ人ノ學ヲスル豈不宗朱子ヤ………

正統說

正統ノ義、纂臣賊后夷狄コレヲ正統トス可ラザルコト方正學一代ノ名論ゾ。扨テ正學ノ言足ラヌ所ガアル。是ナレバ此三ノ外ハ天下ヲ圓メテ穩ニ治メサヘスレバ正統トスル合點ゾ。漢唐宋ノ類是也。是等トテモ根ヲ推セバ皆欠テ居ルゾ……周ノ武王ヲ始トシテ主ノ國ヲ伐取タル者也。ソレデ綱目ノ例、天下ヲ圓メタル者ハ何デ有ロウト夫レヲ面ニ立テ甲子ヲ系

リテ天下ノ事ヲ記錄スルゾ。其末ニ其正統ヱ對シテ謀叛ヲ起ス者アレバ、ソレヲ賊ニ會釋ゾ　何程衰ヱテ纔ナル體ニナルトテモ其正統ノ子孫ノ絕ヱヌ間ハ必ズ正統ニシテ釣置ク。是ガ綱目全體ノ旨ゾ。正學ノミナラズ朱子以後ニ紛々トシテ正統ノ論ガアル。皆自然ノナリヲ不知シテ吾見立ニテ正統ニスルノ、セヌノト吟味スル程ニ皆ソデナイコトゾ。綱目ハ何ノコトモナイ。アリナリニ就テ極メタモノゾ。ソレデ動カヌゾ。總ジテ大義ノ全躰ノ準ハ勿論明ナゾ。故ニ綱目ニ正統トアル程トテ朱子ノ根カラ許シテ置カレタト思フハ僻事也。

安正は朱子正統論の大義を講明し、これを吾國に擬して、その本意を徹底せしむ。吾國に於ては正統は萬古一系世界無比なること從つて君臣の誼も亦他に超絕する所以の道理頗る明白なり。而してこれ朱子綱目の本義より演繹さるべき自然の論結なり。朱子の學術道義、本來此の如し。幕府たるもの何を苦んでか朱子を墨守すべきや。

學術の開け、國史の明かなるに從ひ、國躰の觀念漸く儒者の心上に來らんとす。

されば尊王論の興起は大勢の歸するところ也。況んや海外の警報は、此趨勢をたすけたるをや。幕府の執政者たるもの、その立脚地よりして、尊王論の興起を鎭壓せんと試みたりしにせよ、寛政の三博士は、既に此大勢の渦中に投じたるものなり。異學禁の當局者は、三博士なれば、この禁によりて、尊王論の興起を鎭壓せんとの考は有らざりし也。加之、尊王論の興起を程朱學を以て鎭壓せんとの一事は背理のことにして、寧ろ幕府のためには程朱學を棄つべきものとさる思惟さるゝなり。栗山等が異學禁を思立ちたるは學風を挽回し、林家を推して教育界の中央集權を行はんとしたるにて、幕府の政略これに纒帶するありと雖も、尊王論鎭壓の一事は初めより思付かざりしことなるべし。

栗山は尊王の思想多少これありしと思はる。栗山文集中の賀甘露箋は幕府に上るに恰も天朝に奉るが如くなれども、その外、宸翰御製詩記、紫宸殿賢聖障子畫摸本屏風記、賢聖障子名臣像縮本帖子記等を見れば皇室に對する頗る敬意を表せるを見る。文中家康を神祖とし、將軍を大君とすることあれども、また幕府を指して征夷府となせるは可し。彼は京都に帷を下して

教授し、高山彦九郎と交際したるも、そのときの事にて遂高山仲繩序は集中傑作の一也。

栗山は通鑑綱目を尊び、歴史第一書として、賴春水の麒麟兒にすゝめたり。山陽が發憤して讀みたる最初の史は通鑑綱目なりき。此の如くして事體に通曉し、幕府の社稷も危くしたる日本外史の著者は出現せり

(山陽先生書後題、跋讀通鑑綱目(前略)襄十三歲時、先人祇役江門。家信中時有襄詩。諸老人偶見推賞。薩藩赤崎彥禮先生語之柴野博士。博士曰千秋有子、不教之成實材乃欲爲詞人乎。宜使先讀史知古今事、而史自綱目始。赤崎先生西歸、過藝諗襄。襄乃發憤讀之。後十八歲東遊過謁博士。博士問讀綱目否。曰雖不能盡讀領大意耳。博士曰可矣。……

尾藤二洲に至りては、尊王の思想頗る盛なること靜寄餘筆一冊これを證明して餘あり。擬報元主書は出色の文字なるが、卷中ことに趣味あるは元弘建武の事を論じて尤も痛惜の意を致せること是れ也。二洲は、かねて史癖あり、談論娓々たるが、南北朝のときに至りていはく有時如是有人如是而不

能有成。終至於百世、無復言欲復者、噫。と謂ふに至りては皇室中興の念、中懐にある者と謂はざるを得ず。幕府振興のために學政改新さる。而して、拔擢されたる博士中、此の觀念ある者を見る。尊王論の興起は大勢なり。誰か能くこれを拒がんや。

二洲は山陽の姨の夫なり。山陽少時その塾に寓して、國史學につきては、二洲の涵養を受けたること淺からざるを見るなり。

（山陽先生書後題跋）書織眞記後。

文化丙寅六月吾草外史至織田氏…………偶憶十年前游江戸在尾藤博士塾。先生喜談國事。而諸生厭聽、唯余以投素好獨不然也。先生大喜、每飲罷燭至輙呼吾侍坐、縱論近代英雄勝敗得失。往々至三皷不倦。博士夫人吾姨也、每叱吾使退。記先生每嘆曰、織田公可謂英雄也。吾爾時不究問其所以然。今每閲以意推之、輙曰、先生豈謂此等耶。

第九節　洙泗の流を汲みて、傳註の詳博具備せるものは朱子學に過ぐるは無し。これを以て朱子は生前歿後、異學を以て目され幾多の屈辱をうけたるに係らず、そ

學蔀通辨

の學は遂に天下に瀰漫するに至れり。されど朱子の學說は詳博なるだけに、自然に缺點多く、ときには統一を缺ぐの嫌さへありて、天下後世これに對して異學の起るべきは自然の數なり。されば支那にありては朱子生前陸象山と相合はずして遂に鵝湖の會見となり、後ちに陸子が南康の訪問となり白鹿洞書院の講義となりしも、朱陸相容れざること、氷炭の如くなりき。その後ち朱學は正學となりしも、これに對して陸子の流を汲める王陽明絕倫の天賦を以て、良知の學を皷吹し、朱學に大打擊を與へたりき。徳川時代に於ける本邦の儒學は、支那近代の哲學の反影とも見るべく、彼土に於ける思想史上の變遷は、また吾邦にても繰返されたり。儒者中獨特の造詣ある者は極めて稀にして、彼土に於ける正異學の爭は、本邦にては伊物朱王の爭となりて現はれぬ。故に伊物朱王の爭の內容を知らんには支那に於ける正異學の論爭の歷史を知るを要す。

朱と陸王との論爭の歷史を、述べたるは學蔀通辨なり。この一書は異學禁を研究せん者の必らず閑却す可らざるものなり。朱陸晚合の說は王學者の唱ふるところなるが、學蔀通辨は、朱陸は終始不合となし全然陸王を排斥するものなり。そ

の論辯整齊にして朱學者のために氣を吐くに足るものあり。異學禁に於ける博士の意は、全く學蔀通辨を粉本となせるものなり。

學術は自由研究によりて進歩す。周末戰國の世は則ちこれ也。このとき正異學の辨未だあらざる也。南北朝數百年の紛爭を經て學術もまた二派に分れしより、唐太宗貞觀年中儒臣に命じて五經正義を作らしめ、正異學の目玆に始めて起れり。

舊唐書儒學傳　又以儒學多門章句繁雜、詔國子祭酒孔穎達與諸儒撰定五經義疏凡一百七十卷、名曰五經正義、令天下傳習。

歐陽修　自爾以來、著爲定論。凡不本正義者、謂之異端。

凡そ政府の命令を以て經義に正異端の目を付すること沒分曉も亦甚しと謂ふべし。宋に至り學閥の爭よりして正異學の目となり、朱と陸王と皆その渦中を脫すること能はず。正異の標準は孔子の本旨を得るといふにあり。

吾邦にては幕初よりして正異學の爭ありき。蕃山素行と異端を以て斥けらる。伊物二子崛起して海內の思想界一變するに當り、朱學を奉ずる林家は、その勢焰に

壓せられき。古學先生文集(仁齋)の中に、すでに正學異端の目あるを見る。これより學者爭ひ起りて朱學を疑ひ、愼思明辨にして優に聖賢の域に入れる貝原益軒の如きも晩年大疑錄を著はして朱子を疑へり。この數子は絶群の聰明、千百年にして稀に出づる者なれども、龍鱗に攀ぢて囂々する者紛起して林家は殆んど屏息するに至れり。これに加ふるに新井白石出でゝ幕政に參與し、林家は空しく拱手するのみ。この際に當り、朱學を堅持し、力量も亦能く壘に嬰るに堪ふたるは室鳩巢あるのみ。その後、天下殆んど伊物二子の有となり、八代將軍白石を退けて林家を揚ぐと雖も、道春、春齋の後ちは、林家また人材無く、能く頽波を回すの氣力ある者絶ゑて出でざりき。柴野栗山は室鳩巢の流を汲める者にして、林家の實權を藉りて自家の學燈を顯揚せんと試みたるものにして、背後に堅志力行の碩儒西山拙齋あり、進みては執政樂翁公の知遇を辱ふするありて、兎も角も異學の禁は遂行されたるなりき。

(栗山文集卷二、岑山集序)

余於先輩、最推服鳩巢室師禮。欲詳其源流、少在都、好從師禮之徒而游焉。後

在京又獲師禮所師資錦里先生集、其後人木下覘而讀之。其純正質撲、宜乎其門出師禮。因作序而使梓之。後及來東薩侯儒員赤崎彥禮奉河口子深苧山集前後編二十一卷以需序。余既得錦里集而窮其源、今又聞苧山集喜起而讀之。其璀璨確實果足以發揮室門學也。於是得詳鳩巢之源流、償平生推慕之願矣、因而有所感焉。嗚呼世之所謂師云弟子云者一旦出其門、則傲然自外、一言不相合、則反噬師說以自是、其甚至乎口極醜詆、反目相視如寇讐、道路相遇不通言語焉。夫自音訓淸濁而理義順逆句讀分辨、粗得辨其一二者抑誰之力也。其文古語曰、一字千金。相距七尺、影不可履。而今如彼、所謂在三之義安在。其人才子猶有可言焉。稱爲道術自牧者、其謂之何。是其弟子之罪固不待論雖、師亦羿有罪焉者乎。語曰其父復讐、其子行刧。其爲師者既輕蔑先儒、妄謬自珍。其爲弟子者、自謂如此而後可取譽立名、於是群起自是、幣帚自珍、各自張陋劣無稽之言。是以經無成說道術分裂、風俗日漓。余不知世道人心終將何如也。竊爲天下懼焉。唯鳩巢於錦里子深於鳩巢而後在三之義明而師弟子之道立焉………

(栗山文集卷三　答大江尹)

(前略)仲尼歿而微言絕。揚墨塞道而孟子闢。漢魏六朝隋唐所謂學云者、其至與未至、駁雜外馳、訓詁詞章其變隨世……其稱最醇者董仲舒王仲淹韓退之數子雖能自立不疑然其所見未透、故其所言未徹。及至于宋二程子首出、啓以周濂溪、磨以張橫渠、翼以謝揚數子、述以呂伯恭張欽夫諸公、至于朱晦菴而大成矣。夫此數君子者皆大賢不世之才也。然猶不敢自謂是矣　必上徵漢唐旁羅雜家講磨數十年辯論數百人而後致斷一義。故其成者非一人而獨成也。歷數大賢之手而成也。是以其爲說大中至正天下之美極矣、後雖有作者不可復易也。是以宋末元明諸儒雖以眞文忠、吳草廬、許魯齋、薛文靖、丘文莊諸公精博而不能外此而出一語也。其陳白沙王陽明之明悟頗有不滿于晦菴、而於二程則不能有所間然。夫諸公雖汚豈有所阿乎。蓋其明有以見、外此則皆異端曲學矣。非孔孟之意也。間小儒曲學或有所云々者亦隨起隨熄蛙鳴蟬噪惟擾一隅暫時之耳而已。其正人君子之所據以修身齊家者、學官校庠之所布以教育成就者皆此道也。是中國自宋至于今日學云者然也。……

且夫所謂學云者何也。非將以學中國聖人之道歟。欲學中國聖人之道則莫如學中國聖人之傳者之正且信也。故彥禁人不教讀我邦諸儒之書。蓋國字譯解蒙士之所由而梯者、乃學入筌蹄或有所益焉。其稍涉識見談經論道皆蠱惑後生其害不尠。且中國諸家之說、巨細高下不必外假而備矣。其善學之者唯室鳩巢爲然………

栗山は鳩巢を以て支那聖學の正傳を得たるものにして、その師道の正しきことは、これを推して正學となして以て當時學風の墮落を匡救すべきものなりとなせるなり。栗山は朱子學を標奉す。その師は中村深藏(蘭林)にして鳩巢の門人なり。されば栗山の朱子學は鳩巢より傳はれるもの。而して彼は鳩巢が孤壘に倚りて異學と健鬪したる志を繼承したるものと謂ふべし。

尾藤二洲の素餐錄は經子に關する隨筆にして、幕府に聘せられし後ちも、屢々これを以て生徒に授くといへり。その中に陸王伊物を闢くの言頗る多し。諸博士の意蓋し陸王は高明容易に及ぶ可らずと爲せども、伊物は邦人にして年時も亦相去ること太だ遠からず。されば諸博士の眼中にありしは主もに伊物二子なりき。

素餐錄に陸王者朱子之流而精妙不啻一層。原佐茂卿者荀子之流而狂妄不啻百倍といひ、又た今世學者多不知學成何事、皆被伊物瞞過了といへる如きは、その一班なり。それ朱子固より精詳博大にして無數の好處あるべきも、陸王伊物も亦自ら長處妙處ありて朱學と相俟ちて孔門の眞意を啓發すべきものたり。未だ容易に朱子のみ聖門の本旨を得たりと速斷す可らざるなり。二洲は三博士中にも尤も快豁坦懷の士なり。その靜寄餘筆のうちに春秋三傳を評して　公穀之不ㇾ啻左氏固不待言。然間亦有出入。若陽虎出奔事、左氏所記、畧而不確。公羊乃爲簡明。其他猶有此類。未ㇾ可ㇾ執一定見。と何等の虛心平氣ぞや。洵にこの氣象ありて眞理を探討すべし。然るに何事ぞ鴻溝を正異學に劃して、陸王伊物を以て徹頭徹尾孔門の本旨を得ずして、唯朱子のみ徹頭徹尾これを得たりとなす。異學の禁は、遂に學閥の爭たるの誹を免れざる所以なり。

靜寄餘筆は子史文學に關する隨筆にして、素餐錄と相待ちて二洲の面目を見るべきもの　而して、奇抜或は韻致ありて、誦すべきの文字は靜寄餘筆に多しとす。

第十節　拙齋西山正は備中鴨方の隱士にして、實に異學の禁の主動者なり。拙齋は學德一代に高くして、遂に出で事へず巖穴の一布衣を以て、その事を高尚にせり。彼れ性行太だ嚴正にして、淸濁併せ容るゝこと能はず。學風の頽廢を憤慨し、異學を闢くの志太だ急なり。樂翁公入りて執政となり學政の改革せらるゝを見るや、述感篇を作りて、これを謳歌し、つぎてその親友柴野邦彥等召されて博士となるに及び慫慂して異學の禁を發せしめ、爾後自ら諸學者の攻擊に當りて論戰し、栗山等のために多大の勢援を與へたり。栗山等が卒然として異學の禁を發して、安んじてこれを勵行するを得たるは、この確乎たる後援ありしによるものと謂ふべし。栗山の撰になれる西山處士の碑文によれば、樂翁公は拙齋を登用せんとせしが、その高風淸節とても羅致しがたきことを述べて、栗山がこれを止めしなりといふ。その文にいはく　初邦彥奉檄來此。白川源公方當國、寤寐賢才、猶饑渴。邦彥爲歷擧一時者德首及翁。公欣然意向之、即將入言發命。邦彥因陳其高風淸節難于以塵務者再三。公亦爲之顧慮恐敗其高而止。是其崇信愛惜者視之尋常賓興奉書幣弃顛者萬々如何也。乃邦彥所爲其謂之負翁乎。不則知翁之深而出力爲之地者

自謂莫過邦彥焉。と。若しそれ拙齋をして異學禁の當局者たらしめば、必らずや峻厲に過ぎて却て奏功に難きものありしならんか。先哲叢談にはすでに、異學禁が拙齋の發意によれるの消息を漏らせるが、西山處士の碑文によれば栗山自ら事實を告白せり。契然若無復意于斯世者。然過忠孝信義之事、貫激感嘆言與涕倶下。一聞敗俗非聖之言、輙憤世忘食辯駁不遺餘力。其勸邦彥立學禁與赤松鴻辨學術與尾藤肇正名諸書及久世郡學記、沙美俗詩、述感篇觀感篇反感歌是其最衞聖闢異之功有補于世道人心者。また碑銘に翁之不出、廟堂知之、屈厥旌招、以成其高……高蹤伊何、于磬于邱、疏食水飲、妻孥歡笑、與世相遺、飄然蟬脫、誰知胸中、猶存斯世といへるもの西山處士の眞面目なりと謂ふべし。

述感篇のうち教化に關するものをあげて、拙齋の希圖を示めす。

便殿微儒雅、經筵踵祖風。須開言路塞、啓沃更無窮。
僧房懲不律、市非禁私窩。漸見凶邪少、民風庶不訛。
豪奢看掃迹、淸儉漸成風。聞說都人士、如同田舍翁。
先停織錦坊、服玩絶華粧。娼妓優童輩、含羞上劇場。

化被窮閭閻、弊風漸濯磨。嬰孩相告語、勿爲白公訶。
載路輿人誦、一同贊相公。相公眞活佛、現出極吾窮。
見說昌平學、方今絃誦新。弘文能造士、德器幾何人。
藩臣登侍講、旗下擢儒官。學海濟胥溺、爲君回倒瀾。
講經陳正義、譯史進規箴。知是諸儒老、贊君涵養深。
列相崇儒術、學風未盡淳。秖憂分洛蜀、餘焰逮齊民。
龍鱗不可批、虎鬚或可編。惟恐風雲會、奸邪亦滔天。
九經猶五穀、只合勤精熟。稂莠將荑稗、恐傷黎庶育。
既建君師則、須明治亂機。孰能贊道化、海內學同歸。
當秉多賢者、理治日々隆。更宜興學制、別致雍熈風。
欲革澆訛風、莫如明學統。淳々新庶民、應起昇平頌。
欲汰流風濁、莫如澄本源。本源何處是、元自學中存。
學猶如射鵠、鵠歪射何中。如探治平要、閑邪嚴學統。
三年陳灼艾、不蓄何時得。建學敎斯民、庶能醫萬國。

解經謬古訓、演史競新奇。生心皆害政、宜禁詖邪辭。
非謹庠序教、詎能辨義利。料知飲博徒、狡詐兇無耻。
鄕閭猶有塾、京國獨無學。誰體先王心、壁雍興禮樂。
放言且玩世、迂濶固應多。竊比賈生哭、翻爲梁氏歌。

學制を改革し、教化を盛んにして以て風俗を淳にし以て太平の春を致さんこと、これ拙齋が賢明なる新執政に望むところ、而して要は嚴に學統を正すとあることを知るべし。樂翁を謳歌して斯篇を作る猶自ら言ふ竊かに賈生の哭に比すと。嚴毅篤厚その人想見すべし。拙齋が樂翁公に期するの深きこと此の如し。而して樂翁公入るや間もなく栗山召されて天明八年一月を以て儒官に拜せらる。拙齋これを賀して直ちに教化の振興を以てこれに囑望して曰、

暌離光範六七年于今、正也嬾疎不能時修尺書候起否、爲罪寔多。客冬側聞先生就公朝之徵、蒲輪已束、而未得其實也。今春得松本生書始審本年正月十六日閣老傳旨殿上拜國子博士矣。特恩寵擢近世少比。非惟先生之榮、實是吾道之福也、敢不敬賀。尋有中山生信轉致白玉海銘云是先生臨行親書所賜。

自非博愛之深、烏能發覊忩劇之際、念及鄙人如此邪。感媿交加、不知所謝。士宜二品聊、將芹意統希炳鑒。正也草澤一民至愚至陋、幸生休明之世優游呫嗶將以卒歲焉。但鼠肝虫臂平生有所憤嘆。乃述答客問一篇、献諸函丈。敢請是正。先生幸容狂瀆一賜採覽、至望至希。餘不多及。祁寒日深伏惟爲國爲學、千萬自重。

敬上

栗山老先生絳帳下　　西山　正再拜敬具

戊申蕭月日(天明八年)

栗山亦かねて學政に志ある者、召に應じて入府するや天龍江上に至りて詩を作りて軒昂の志を述ぶ。官を拜するや賀甘露箋を上りていはく、伏願益廣₂言路₁、更闢₂學門₁。政必先寛大、德無失細微と。栗山の自ら期するところも亦知るべし。拙齋は賢執政の下に、碩學の招致されたるを喜び、鼠肝蟲臂平生憤嘆するところを以て直ちにこれが解決を囑望せり。それよりして西山處士は學統嚴正の事を以て連りに栗山博士に勸告したるらしく兩者の間に數々交渉ありしことゝ見ゆ。而し

て栗山が拙齋を樂翁公に紹介したるも亦この間にあるか。栗山が學禁の實行に就きて苦心經營、容易に手を下さゞりし事情は次ぎにあぐる栗山の書束によりて明らかなり。興學一事談何容易。あしく致し候へば事を仕損じ却て天下學文の害をなし申候。無作と浮氣にて出來候事にも不爲存候。今暫らく時節も可有之候といへるは栗山の眞情なるべし。栗山は學禁實行につきて拙齋をして一方の雄鎭たらしめん爲めにか、これを舊君たる德島藩に推擧せり。ときに賴千秋(春水)賴杏坪及び菅茶山もまたこの事に干係して百方苦請して拙齋を起たしめんとせしが、拙齋遂に老病なりとて高臥して出でず。ときに寛政元年の事にして、諸學者の盡力不一方を見れば、その眞意も亦知るに難からざるべし。

横野多門治罷越候に付、一筆致啓上候。暫御疎遠に奉存候。當年は寒氣ゆるく覺申候貴地如何。御平安爲成御暮候や。邦彥依奉舊劣候。只俗事紛々才疎責重何事も當惑のみにて罷過候御憐察可給候。先日賴生への貴書も致一覽候。中々なみのいらへにては無之候得共、實に病羸忙迫に只日日夢のごとくいたり申候。御文章貴牘もとくと拜見耻愈入候事のみにて候。

興學一事談何容易。あしくいたし候へば事を仕損じ却て天下學文の害をなし申候。無作と浮氣にて出來候事にも不爲存候。今暫時節も可有之候。幷人才も無之候而は取掛りがたく候やと存候。隨分草莽之諸賢名數を維持有之候樣にいたし度候。爰等の事は御面談ならでは申がたき事のみ多く候。此事僕等胸中に一日もわすれ候事には無之候。乍去是等の事御他言御無用に御座候

一、此度阿藩より御請待申度旨に付き、多門治罷越候。此儀僕より表向御推擧の事は少し差つかへ有之いたしがたく御座候。是等の事も人傳並に書中にては難申解候。少しも御氣遣之筋にては無之候。何れに致し候ても、御出勤爲成候樣にいたし度奉存候。當時世上にて彼藩之事色々輿論も有之候得共、少しも御氣遣の筋無之候。舊君の事をおもねり候とや思召されんづらんとは存候へ共、當阿侯賢明仁恕尊道好學の所は十分御請合申候。老兄御儀被慕候事にて、まげて御出勤被成候樣にと奉存候。多門治より諸事御取扱の事は可申入候得共、尚又御望も御座候はゞ拙者方へ御內々可仰

開候。尙又如何樣にも御相談いたし方も可有之候。乍去右樣に自拙者得意候事は決而外へは御さた御無用に御座候。皆々內分にて得御意候事に御座候。いづれに致し候而も少しも御ふためは取斗不申候　爲道御出勤くれ〴〵希候事に御座候。此書御一覽の後ち火中希候。寒中御自重專一に奉存候。此元近狀多門治に御聞可被下候。頓首再拜。

(寬政元年)十二月十九日　柴　邦彥拜

西山老兄　坐下

拙齋ときに年漸く五十許、歎老辭二首をつくりて眼目益眇昏、齒牙不復堅。……盤中多殘肉、案頭不終篇と。杏坪は筵仕を防ぐの口實なりと評せり。

寓懷、寄際某生。

卵鶴求時夜、鴞炙未挾彈。噫爾大早計、饒求味一官。朶頤書載森、垂涎金玉鞍。只見官途美、寧知官途難。患得將患失、熱中千苦酸。獲禽喜詭遇、應仕飽素餐。學製徒傷錦、食志多畫墁。誰道玉碎貴、何如瓦全團。爾非急祿養、奔波義豈安。廢學希躁進、譬諸步邯鄲。惟恐失故步、終身永蹣跚。勤愼耕且讀、爰憂饑與寒。

唯宜敬桑梓、孝友承親歡。季子歡菽水、顏生樂瓢箪。百世眞師表、先修不我瞞。
行已且有耻、取友必以端。安宅與正路、操履須研鑽。力學得良貴、心廣體還胖。
顧視浮雲富、聚散皆漫々。青年勿虛喝、白日易泛瀾。廉靜奉模範、書紳又銘肝。

これ拙齋の志なり。彼れつねに陶淵明を慕ひ菊花を愛し、恬澹無事專ら學德を修めて田舍の處士を以て眼一世を空しくす。彼れが低頭平身して大藩の厚聘、諸友の苦請を退くる所以は、則ち彼が高きを爲す所以なり。

玆に彼が諸友に答ふる書及び德島藩の聘使に奉するの書と名主の書上げ等を掲げて、併せて江戸時代碩學禮遇の一斑を示さんとす。

復柴博士書 (草案)

此度横野子與兄與阿波君侯之尊命、弊盧へ御來訪被下兼て正事被爲及聞召候由にて爲御聘物(金子五百疋眞綿參把)拜領被仰付候。皆而不存寄御事甚恐入奉存謹而頂戴仕候。隨而御儒職に被召出、俸祿二百五十石可爲下置之旨委細御演說承之重々忝仕合に奉存候。乍然先生兼々御熟知被下候通り、正、駑材薄力謭劣無狀之者、大藩學政之任に與り候程の材力毛頭も無御座候。

且年來多病の上、客歳六月方臘月迄瘧痢臥蓐到今春漸く平愈仕候得共、老憊疎懶殊に甚敷、窮巷中の講釋さへ久々相止居申候仕合に御座候得ば、篤仕之義は一日も勤まり候筋骨無御座趣早速横野兄へ披肝縷々御斷申上候、此段乍憚御憐察被下宜敷御取成御斷爲仰上可被下候。但草莽之一情民御優待被爲下候御事誠に賤宗の面目寒郷之榮、重々難有感佩仕候。高尙其事など申樣なる傲睨不遜之心底は決而無御座候得共、右多病老衰不堪拜趨候故、不得已強而御斷申上候儘、此段も候乍憚御含置被下、宜敷御斷被仰上可被下、偏に奉願上候。

先生御內々御深懇被仰下候趣幷に賴文學書も縷々勸誘爲申聞逐一謹承深領厚意候得共、右之仕合無據違來命候段甚以恐入奉存候。萬惟御垂察被下失禮之罪幾重も御容赦可爲成下奉希候。　正頓首再拜

孟春上元之日、

復賴文學書（春水

一、此度阿藩徵聘之事縷々勸誘被下、柴博士よりも內々に而爲仰下謹承之候。乍然かねて御熟知被下候通り庸劣無似且つ多病老衰加以去年以後之羸憊候得ば如何樣之御優待にても仕官は決而一日も勤まり不申候。且又先師魯堂同樣之格祿可被下之趣甚以恐入奉存候。自揆自省候處先師之與正才學之高卑寔に岑樓寸木之譬不啻候。旁以不能應聘就徵之趣委細橫野兄に披瀝申斷候。此事は柴博士へ具に申上候まゝ御聞被成下候。禮卿(菅茶山)へ露封書爲遣拜覽後早々神邊へ盲僧撰書共に轉達いたし候。

阿侯賢明恭儉尊道好學之御樣子貴書中及博士書中にも爲仰下、且此度御聘幣兩種拜領爲仰付御使者口演之御趣意等誠に古昔卑禮厚幣紬貴下士之遺風御慕被成候御事恭喜之至奉欣慕候得共、右之仕合故不得已辭退仕候。始自隗之思召に御座候得ば、自今已後定而千里之駿、追々駢集に而學政翕然維新之化行乎其國可申と遙想仕候。服部先生も聳慂爲下候由、禮卿への御書中に爲仰下候。偖々不存寄事に而大藩之徵聘諸賢之推奬を蒙り候御事寔に賤宗之面目、寒鄕之光華甚以大慶仕候。鄙諺所謂遠いが花香、聞ての千兩

見ての一兩と申事存出し不堪愧赧候。またよく出るよりわるく引込めとやらんも申ならはしに候得ば、強而御斷申上候と御使者へ申答候ひき。心緒萬惟御憐察可爲下候。

孟春十六日

聘使の禮容及び拙齋應待の態度は次ぎの鴨方村名主の書上げ等によりて知るべし。その夏拙齋衰病なりとて、其子孝恂をして代りて德島にゆきて答禮せしめき。

覺

松平阿波守様より西山孝淑父拙齋へ爲御使者、横野多門次殿(御上下三人、鑓挾箱)從江戸御越、當月十三晩拙齋宅へ到著。御口上幷御目錄金子五百疋、眞綿三把被下候。則御使者袖扣被相渡、御文言左之通、

　乘而御様子被及承候得共未爲及御尋問候。此節は寒冷無御障候哉。

随而兩種爲相贈候。猶委曲の義、多門次相心得罷越候。

一、此度拙齋儒官に招請被成度、俸祿二百五十石可被下旨多門次殿委細演說有之候處、拙齋兼而病身老衰其上不才薄力にて仕官仕候心底毛頭無御座旨達而御斷申候。猶又藝州儒官賴彌太郎殿より拙齋へ御書面の內公儀御儒官柴野彥助樣よりも御內々にて彌太郎殿御同樣に御勸被成旨申來候。十四日迄多門次殿御滯留にて段々御勸被成候得共强而御辭退申切候に付き多門次殿より江戶御屋敷に右之趣書面被認、拙齋よりも彌太郎殿へ右の返事仕申候。十五日多門殿御出立阿州へ御渡海被成候。

右之通り承候品、荒增奉申上候。以上

戊正月十八日　鴨方村名主　丈右衛門

一筆啓上仕候。綠陰漸向暑威時益御綏綏被成御勤修珍重御儀に奉存候。正無恙罷在候。寔に早春の比者爲御聘使千里御來臨被下、殊に拜領物兩品頂戴仕難有仕合に存奉候。早速航海奉謝可申上處、其節より老病腰痛再發到今平癒不仕及遲緩候。仍之賤兒孝恂此度爲右御禮參上仕候。乍憚宜御執成御披露可成下奉賴候。吾儕草澤中不習禮容、失敬の段幾重も海涵被下

度所希に御座候。餘緒略具別幅候。恐惶謹言

孟夏十八日　　西山拙齋　正拜具

橫野多門次樣　高梧下

西山處士の碑文に阿波加賀二藩皆遣侍儒聘問敦迎、皆峻拒不起と、特に加賀は大藩にてもあり、順菴鳩巢の餘烈を顯揚せしめんとにて禮意極めて優渥なるが、例によりて病と稱して出でざりき。されど加賀よりは拙齋の內意を聞きしまでにて聘使は來らざりしよう也。

(前略)私儀も此度弊邑新に學校を被建候につき、先祖順菴の所謂を以て學中卓職の員に被加候へば加州表へ罷越居申候。(中略)扨先生の御氣に觸れいかゞ被思召候や甚以恐入候得共申上候。此度新に學校を被建候處、程朱の正儀を專に修し、學長に備可申、醇儒無之候故教育の道行屆不申、漸く志を立てゝ學徒も其志を挫き可申やと學校中二三の執事とも辛苦の樣子に御座候。弊邑も北方の一大藩に候得共、鳩巢先生門下の諸儒ども只今は物故し

て一二好學の徒有之候も、或は新奇の異說を唱、或文字詞章のみに流れ正學廢たれ可申躰につき、何とぞ朱子の道學を以て導き申度事に御座候。尤寡君にも學文の道を開き度志にて御座候得共其人を不得候故如何とも可致樣無之事に御座候。先生には依舊仕途を御厭被成候事は能存罷在候得共、兼々高論の內天下の學流の邪正を論定し、伊洛の正脈を振起いたし候事學者の本意たるべきよし每々御敎誨被下候を存出し候得ば强ちに高尙の御志を以て祿仕を御避のみ朱子學の本意とも不被存候。然れば若し寡君より御迎被申候得ば一たび御起于斯道北方に勃興いたし候は御積德を御施しの一端にも可有之哉。若哉決して解褐の思召無御座候得ば兩三年弊邑に御客遊にて暫學校の御指揮も可被成下候ば客禮を以て御迎申候事も可爲容易哉と奉存候。豪寡君之命如此申上候與にては無御座候得共、只今海內にて德業醇厚可瞻仰は獨先生たるべきこと學中の御噂も有之寡君之求賢の志も深く先生を大に被慕候段每々役人共噂も有之候故……御內々先愚衷を申上候。高慮難計候得共、安車の支度も有之候節不被爲辭候はば

誠に吾儕の大幸と無此上御座候………

九月十五日　木下槌五郎

西山拙齋樣　書幌下、

右拙齋返書

(前略)近來老病交至、去夏歸鄕後腰痛不耐起坐氣魄眼力衰憊甚敷候故講讀等も廢業仕、應接人事は謝絕同事にて斗室中擁爐困臥而已居申得ばたとひ蒲輪の御寵迎を蒙り候共固辭仕候外に所致無御座候。學術の邪正を論定し、閩洛の正脈を振起候事は寔如貴諭學者の本意無論の事に御座候得共、其出處去就は先量已之才德候而其力可能堪則就之、不能堪則辭之可申事吾儕草莽中の當然と奉存候。決而高尙養重の流にては無御座候得共、老憊多病不得止事如此申上候まゝ鄙衷御憐察被下宜御執成幾重も御斷被仰上置可被下候………

一、栗山先生御用に付此度御上京被成候由、老拙參謁可仕旨蒙高諭候得共、老

病不能銜寒趨謁、爲御斷孝恂差上中候即明朝發程仕候に付、夜間奉答如此御座候。燈下眼鏡朦朧作字潦草不能縷述……

壬子歳孟冬廿五夜。(寛政四年)

拙齋の德望益高きを以て、かつは朱學振起の木鐸を以て目ざるゝこととて、特に加賀よりは、先生には依舊仕途を御厭被成候事は能存罷在候得共、兼々高論の內、天下の學派の邪正を論定し、伊洛の正豚を振起致し候事學者の本意たるべきよし每々御敎誨被下候を存出し候得は强ちに高尙の御志を以て祿仕を御避のみ朱子の本意とも不被存候と手强く申込まれしには拙齋も流石に困却したるなるべきも終に病を以て達て辭退せり。彼は高風淸節を以て自ら持したるが、その家計は豐かにはあらざりしことは數多の手束によりて知らるべし。その一に

復小野見壽、

前日妻兒之病也、稱藥量水扶持搔摩、動輙煩吾子久矣、得無勞憊乎。乃枉使价承賀歳暮、以銀楮之恵、多儀多情、媿感交至不知所報。擧家五人遙拜俱謝……

小野見壽は小野泉藏の一族なり。泉藏招月亭と號す。拙齋の高足なり。菅茶

山や小野一族等は拙齋を扶持して、その高さを爲さしめたること不尠とす。

拙齋峻嚴にして聖を衛り異を闢くに於て餘力を遺さず。狷介の質かたく仕官を嫌ひしも、また春風和氣深く弟子の心を得たり。德望の厚き、里中の一嫗每晨念咒の次に拙齋の名を念ずるを以て常とするに至れりといふ。西山處士之碑に曰、寛政十年十一月九日葬亡友備中西山翁子雅。隣國近邑來會送者蓋二千人焉。翁爲人嚴正、其督過門人子弟峻厲痛切人皆不能仰視云。苟非有至誠懇惻藹然以感招者何以能致人如此。また曰はく　翁爲人長身美姿神采秀朗善言論、修己矜莊謙冲、雖燕居對兒童厮隷未甞有惰容、送迎必謹。其少頗患性急、親作戒語十條、貼壁自警克治功隨年而密、至老和易粹然可樂也。對家人終日歡笑愉々如也。然事必以正未甞有所姑息焉。訓人以踐履爲先。愛才而痛斥輕脱自衒者。是以遊其門者皆謙謹成風。雖兒童亦不敢荒嬉自肆。襟懷爽快胸中無畛域。終日與客談論雜以笑謔無倦色。是以俗吏癡兒樂與之居。性又多能而多好嗜。書畫寶玩苟意所向輙人爭致凡一時瓌奇偉麗人所不能致者不數日積於前。其爲人悅慕如此。家藏研山數十座、中有寸許石英、內含嶽影、翁最愛之、傳貫公卿間、遂入經御覽亦以翁故耳。當其嘯詠山水

花月嗒然不復知何物可以易之也。これ以て拙齋の平生を窺ふに足るべし。

惟ふに拙齋は家庭田園の眞樂を會得したる人なり。その書柬と、その詩稿を見れば又實に情に厚きの人たるを知るべし。田園に靜養し天眞を磨勵して高邁の性格を成し得たるなり

西山詩鈔を繙けば

田家　打麥聲々響夕陽、田家幾日逐晴忙。鄰翁頻說來粹好、坐使閑人睡味長。

丁酉八月十八日作、　凌晨起坐氣淸凉、蓮褪紅衣菊未黃。唯有幽蘭慰幽獨、讀書窓裏送幽香。

家鴨雄者死　朝來鴨鴨乍孤栖、閑立池頭形慘悽。更想從前雙浴否、沿波呻々盡情啼。

得中山子幹書、子幹新喪耦。蕭條寒雨歲將除、字々傷心一紙書。遙想空房扶稚子、左提右挈泣漣如。

無題　何時湖海寄萍蹤、百尺樓臨萬丈峰。豪氣老來磨未盡、依然高臥舊元龍。

皆な眞摯の至情を見るべきもの、或は象棋を詠じ、或は課餘童兒を集めて鬪碁せしむるなど、藹然掬すべきの趣に乏しからず。嗜好多きが中に玉石の癖ことに深く、水晶中に嶽影を含むものは、玉芙蓉と名づけ、かつて天覽を辱くせしかば詩を賦していはく、

米顚袖裏玉芙蓉、經御覽來光更濃。莫道靑雲雲路杳、曾將石癖達宸聽

拙齋が門人等に遣はしゝ書柬のうちに玉石古錢などをこひ求めたる面白ろきものあれば、玆にその一二を錄せんに、

(其一)　然れば今朝吉田生より承候得は見事なる水晶、源次兵衞樣近來御所持被成候由。拜見渇望致候。若し不苦候はゞ御惠贈可被下候。若又御珍襲被成候はゞ暫時拜借仕度候…………

得まほしとこがれこそすれ紅葉ばの影ながら見る玉の光を。

(其二)　さては古錢其後諸方よりもらひ集め候。和銅開珍、富壽神寶等も所藏に相成候。寬平大寶不苦候はゞ迚もの事に御惠賜可被下候…………

古錢玉石「不苦候はゞ」の筆法にて諸方よりもらひ集む。如何に洒落なる先

生にはあらずや。

家塾に於ける先生としては提撕の意尤も丁寧親切なるを見る。即ち

勸學詩　讀書嚴課竟寬間、進退全分作輟間。堀井無休應得水。功虧一簣不成山。

の如き永く學生必誦の什とすべし。因みに言ふ幕末吉田松陰は門生を率ふるにつねに作輟二字を以て誡めしとなり。

廿一日即事（安永六、拙齋四十三）　閑眠避暑拙齋翁。箇々淸陰陣々風。午枕醒來無一事。漫呼棋局嬲兒童。

家庭因園の快樂まことに此の如きあり。師弟溫然人みな郷に拙齋先生あることを知る。簞食瓢飮と雖この眞樂は決して萬戶侯にも換ふ可らざるなり。拙齋一たび起たば事功期し得べきも、如此眞樂は彼れ鴨方處士たるに於て始めて縱にするを得るものなり。これ敎育家最上の樂にして、拙齋が貧に安んじて、蒲車の厚幣を辭する所以なり。

拙齋が處士を以て自ら居るの志は遺悶一篇の詩、よくこれを盡くせり。

吾性本傲岸、由來泛交稀。時或從方圓、與俗且依違。依違是何心、吾事畏寒饑。只喜郷里子、頗有啓發機。力疾課讀書、忘疲談麈揮。講帷方三載、義利剖精微。庶乎郷里子、不眩眞是非。豈意水投石、反爲彼譏議。吾愧眼如漆、咫尺昧見機。從此永謝客、依舊掩柴扉。梅發鳴禽樂、氷澌遊魚肥。已可同車轍、亦可理翠微。東西又南北、隨意弄春暉。

彼は狷介にして世俗と合はざれども、すでに育英の樂あり、また田園の樂あり悠々造化と伍して、修養倦まざるの結果彼は風教の木鐸となり藹然親しむべく以て愛すべきの人となり了れり。これ博學達識なる拙齋が田園修養の効果なり。西山詩鈔はその修養錄とも謂ふべし。

辛卯歳晩寓懷

送窮々閭裏、家々苦占田。荒歉連租多、唯恐至頻連。中有逍遙子、歳晏殊悠々。家貧無官迫、身病有友憐。牀頭琴一張、枕邊書千編。歩尋梅處雪、臥聽竹外泉。皆可助吟興、何復知絆纏。欝々逐利客、猶苦公税錢。況吾坐食者、而占數畝塵。擧家三五口、幸得高枕眠。今而不知足、豈謂希古賢。窮達各有時、富貴固在天。

毀譽與得喪、於我若浮烟。只宜修己行、絃誦終天年。此中有樂地、難爲昧者傳。

田園の生涯古猶今の如し。眞趣まことに昧者の爲めに言ひ難き也。

拙齋の半面は卓勵風發なり。破邪顯正に於ては老來氣力益振ふ。栗山にすゝめて學禁を與さしむるの趣意にいはく。

余曩上書柴博士懲遜學事座客相視而嗤以爲田舍兒不知時務者其意必謂國家以法律御天下惟奉祖宗遺訓足矣其徵儒士置學館亦備典故顧問而已學之純駁異同何關政理之得喪哉此非異學回護之言則俗吏狃習之說也夫敷教者治民之本而興學者又敷敎之源也學不正則敎不純々々々則民不興行民不興行則雖欲施治行政猶築室無基運斤棄質也是故古之盛帝顯王設爲庠序學校以敎民三代而下世之治忽俗之纖惡未嘗有不由學之興廢也否則禁令雖切威刑雖嚴如去街上塵如澄末流泥隨散隨聚愈攪愈濁雖窮日之力決無觀感遷善之期矣夫子曰道之以政齊之以刑民免而無恥道之以德齊之以禮有恥且格又曰君子學道則愛人小人學道則易使也又說六言六蔽歷戒不學之所蔽從此觀之政之須學之當擇如是其忽居學官者豈亦思所以辨別涇渭件白之乎且夫海

內獄訟之繁也盜賊之橫也欲博諭情之不懲也姦吏贓賄之不熄也究其所以皆是敎之無素學之不振也昔聞治吏民譬之治水橫流汎濫則疏淪決排以注之海由地中行則修之隄防橋郭堰閘埭壩以時鍾洩以備旱潦至其養民漑則又宜澄治淤泥以濟口用飲食焉澄之術與其濾下流之濁寧泝活水源頭以治之功少費約而獲效自甚廿洌可用矣方今國家升平殆二百年法制寖備兆黎安堵所少者獨數學一事耳所謂疏排堤郭之方莫所不足設令一施澄治之功則庶乎文明之澤可以被於四海熙皡之俗可已流於萬世而議者不之察以爲非時務之要顧不爾怪乎田舍翁狂僭所疑如此未審上國縫掖諸賢以爲何如伏乞鑑諦

寛政紀元秋孟念八日　山陽田舍狂夫正識

拙齋の本旨は風敎を匡さんと欲せば庠序の功によらざる可らず　今や昇平二百年制度萬備唯欠くところは敎學一事のみ。學正しからざれば敎純ならず。學者の任唯だ典故顧問に備はるのみならんや。宜しく學を正しくして以て敎を敷くべしと云ふにあり。學不正則敎不純。一句彼の生命なり。拙齋の性質唯だ正學を守りて異學を容るゝ能はず。解客嘲の詩をつくりて、勿嘲拙齋不容物、吾容他

物不容奸……如容彼哉爲黨惡黨惡孰謂胸襟寛……と彼が異學を排斥する意氣込此の如し。されば學禁の出づるを聞くや欣々然として栗山に束していはく

(前畧)昨日備前學校親友より寫傳候而前月廿五日林祭酒へ被仰渡候御書付奉拜見候。學政振興の御樣子寔に天下同慶の御事、草澤の吾儕輩迄乍憚恐悅の至に奉存候。自今而後、異學邪說者竦然屏息皆歸白日之魑魅可申、愉快亦不少奉存候。加賀人所著君道大學要解一本亦從千秋(賴)傳觀仕候。發蒙精義同樣の怪妄、可憎可嘆義に御座候。先年書懷鄙詩結末に東方安藉秦皇手、焚盡後儒非聖書と申候。對這等編候而も亦復唱此句候。か樣の類は何とぞ印板御禁絕被成度ものに御座候。然るに本佐錄、大學或問等有益の書は却而近來絕板とやらん賣買御停止とやらん傳承候。這樣の事田舍漢了簡には一向難解得奉存候。甘露白雉の嘉瑞等追々傳承仕候。誠に泰和文明の徵、海內人民一同奉恐悅候事に御座候。(中畧)本州邊近來別而訟獄繁冗可怪事に御座候。先書妄吻瀆聽候通り郡國一同追々興學の化行はれ候はゞ讓畔の美俗に移り可申と奉存候。先以此度修學政の臺命誠に明良和衷

同心同德の御事、抑亦兩先生御翅贊の功不少と乍憚奉存候　毎々狂讀申上候失禮の段幾重にも御海容可被下候。不宜。　六月廿六日。

異學禁出づ。異端はすべて白日の魑魅と化し去るべし。とて拙齋大に喜べり。彼が他物を容れて異學奸物を容れざるの慨は、彼の手柬中にも見えたり。

一博徒御赦許、片鬢片眉悄々愉快の事に御座候。其御書付亭主及び古川翁(古松軒)へも見せ申候て抵掌稱快候…………

されば拙齋は異學を排し奸物を排し、博徒姦究を排し、遂に佛を排す。國音歌が佛教の本義を唱ふるを遺憾とし自ら神儒調和の國音歌を作くり自ら書して家塾にて習はしめき。拙齋は國史には精通し、尊王の思想ありて、神道を尊び水戸の大日本史に對しては深く同情を寄せたり。拙齋の詩文中、屢々論史に渉るもの此故なり。彼は正人に對して奸人、正學に對して異學、日本に對して外國を排す。かつて紅毛貨幣に題して誰能建議更若幣、勿使缺舌嗤廟謨、といへり。彼が排異の熱情は則ち愛國の熱情となれるなり。

因みに言ふ次ぎに掲ぐる拙齋の國音歌は彼が家塾の藏版なれども今殘存

するもの太だ少なし。この作者は屢誤りて傳へらる。拙齋正重識とあるを松齋正重と讀み誤りたるより起れることなり。

天地生成、人物蕃庶、禾繭布殖矣。我親子兄弟丁壯等不飢群居宴樂

あめつちなせるたみくさしけりいねまゆぬのもをひふへてわかおやこゑと、よほろら、うゑす、むれゐにきはふ

以呂波四十七言、家習戶傳、以爲國字祖。千有餘歲于今。識者或病其浮圖家言非章蒙所宜習也。近世廣澤勝子、依其字體更撰君臣歌刊布于世、將以易天下也。爾後效顰者數家。余亦嘗作此詞、每授家子弟。今摹大師墨本而錄之貽諸同好、以博一粲云。

寬政八季丙辰夏上上院　　山陽逸民正撰幷書

〇刪定阿米都智歌摹藤廣澤以呂波帖。

あめつちなせるたみのくさ、いねゆまけり、をしへそふわかおやこゑと、よほろらも、うゑず、むれゐとにきはひぬ。

丙辰秋九月　　拙齋正重識

寛政異學の禁（其十八）學禁に對する辨難

第十一節　學禁の出づるや青天の霹靂も啻ならざりしかば、學者紛起して其不條理なることを辨難せり。中にも赤松滄洲は栗山に與へ、冢田虎は樂翁公に上書して、禁の撤回を建白せり。諸學者が學禁を非とするの理由は要するに、左の數點に歸す。

（一）學者所見各異なりと雖も、均しく孔孟を祖述す。何んぞ必しも程朱をのみ墨守することを爲さん。

（二）天朝幕府古來必しも程朱のみを執らず。

（三）栗山勢に乘じて林家を傾奪せんとす。栗山が學禁を勵行するは、王安石が新法を行ふが如し。

（四）學禁は學界を擾亂し、敎育の進歩を阻害す。宜しく速かに撤回すべし。

學禁は敎學の進運に伴ふものにあらず。固より不自然なるものと謂はざる可らず。而して栗山明敏の才を以て、局に當りて、それを勵行せるを以て、彼は天下學者嫉視の目標に立てり。內には林氏とも快からざりしやにて林氏彈劾文といへるが傳はれり。林氏は栗山の爲めに蔽はれたるなり。

諸學者の攻撃に對して栗山等は答へざりき。唯だ西山拙齋、栗山等に代はりて盛んにこれを反駁せり。反惑歌の如き未だ氣焰の揚れるを見る。拙齋が赤松滄洲に與へて學を論ずるの書は、普ねく攻撃の諸件に答へたり。

（一）學正しからざれば教純ならず。教は方を擇ばざる可らず。均しく孔孟を祖述するを以て、これを看過するは、均しく金なりとて、その眞贋を問はざるが如し。

（二）天朝は後光明天皇朱學を採用し玉ひしが、はやく崩御し玉ひ、後ちの朝儒未だ決斷の勇なきのみ。學庸は古來朱註を採る。經學の大本則ち朱學に歸せりと謂ふべし。

幕府にては惺窩、道春以來朱學に非らずして登庸されし儒者あらず。

（三）栗山云々は野人の語のみ。

（四）學禁は聖門の本旨を得たるものなり。猖々の爭は不日迹を絶つべし。

拙齋は更らに一件を附加していふ。孔門の學は、漢唐の註疏唯だ文學訓詁を修むるのみ、程朱二公に至りて微旨奥義燦然として洙泗の正統を得て、漢土の學政始

めて一に歸す。宋季より元明を經て今に至るまで五百有餘歳專ら程朱學を奉じて學政畫一復た異論なし。苟くも斯學に從事するもの朝鮮琉球諸蕃に至るまで皆な然らざるは無しと。

拙齋が滄洲に與ふるの書は、寛政六年の冬草したるが、將さに發遣せんとするに及び京師火ありて滄洲の宅に延燒し、滄洲は赤穗に歸り、拙齋も亦病み八年の春に至りて、漸く滄洲の京都にあるに寄せたるものなり　文恭公實錄に寛政七年に學禁の出でしことを明記せるは、甚しき誤謬なり。この書に參取大川鴻與柴野邦彥書家田虎上白川侯書、西山正代邦彥答鴻書、松川進修碑とあれども、これ等の資料を目擊せざるものなるべし。先年重野博士が異學禁は寛政二年及び七年の兩度に出でし如く疑はれしは、文恭公實錄によられしものなるべきか。拙齋手稿によりて、その滄洲に與ふる書を錄す。これ蓋し學禁派の理由書とも見るべきもの。

客歲讀先生與柴博士書、甕然掩卷竊嘆曰、吁先生何論學術之陳、視　公朝之輕、而知柴子之淺也、夫學之有正有邪、猶如物之有眞贋事之有可否、世道升降民俗

美惡將必由之、是故古先聖王建學立師以誨蒙士、詩書禮樂以時、其敎博約培達各循其序、鼓篋之孫其業夏楚之收其威、皆所以使學者進由正路能成才德而不趨邪徑也、學記曰君子如欲化民成俗、其必由學乎、設令敎學失方、正邪不辨何能化民易俗之爲、由是觀之其方不可不擇、其辨不可不審也、何謂正學、致知力行專講脩己治人之道、所謂君子儒是也、何謂邪說、誇名亂實偏衒揚己抑人之術、所謂小人儒是也、孔子謂子夏曰、女爲君子儒無爲小人儒蓋深警之也、易傳曰差若毫釐謬以千里、亦言敎學所由不可不正、研幾工夫不可差跌也、衰周以還學政廢墜異端邪說興焉、楊朱之爲我疑於義墨翟之兼愛疑於仁、此皆說仁義而謬者、孟子闢之以爲無君無父充塞仁義之賊、韓子推尊其功曰不在禹下也、乃至陸九淵之頓悟王守仁之良知亦皆稱聖學、而謬者、宋明諸賢闢之以爲陽儒陰佛絕滅倫理之害、後儒亦謂其功繼孟子矣、譬諸稂莠之害嘉苗鄭衛之亂雅樂、不得不鋤之放之、是孟子諸賢所以痛排峻擊不遺餘力、亦仁人君子之心有不得已也、況如 本邦近世伊藤荻生二氏、或擯學庸繋辭爲非孔氏之舊、或毀思孟程朱謂悖聖人之道、詭辨飾辭簧惑後進、藉口古學佳己邪說、乃仇視先賢罵詈盈卷、仁齋謂宋諸賢爲禪儒朱子爲

不仁之人徂徠不曰宋儒亂道則曰道學毒人至詈朱子爲不學無術其狂悖殊甚噫何物小人無忌憚之甚、自有儒者以來所未曾有、漢儒所謂孔子讀而儀秦行者、其惑世誣民充塞仁義之罪奚止楊墨陸王之比乎、從此已降俗儒教尤驕傲自大、各以異見謬解經傳、詈洛閩呵鄒魯競立門戶者數十百家、家稱古學、人衒新奇、要皆隮二氏之毒而徽換頭尾耳、學術之弊至此、亦古來未之聞也、方今之世任道君子固當辭而闢之禁而絕之不待明者而後知也、而先生之言曰、讀書學道所見各異、而其所尊信、亦皆仲尼之教、而不出乎孝弟忠信仁義禮樂治國安民之外、則何必唯宋儒是據、或用漢儒古義、或從事乎象山陽明若仁齋徂徠諸家、學者各從其所好何害之有、唯在其知愚賢不肖何如而已、果如先生所言乎、學聖人之道者不藉師資而教學之方曾不與世道民俗相干也、竊意先生徒知釋老之爲異端邪說、不知吾儒中自有異端邪說也、夫釋老之徒各道其所道、故其爲異端固自判然、至爾儒之學則必依托經傳以駕其邪說、故其似是之非、塗人耳目惑世尤甚、此先脩之所以深憂遠慮力闢峻拒也、若謂不然則先王庠序之政皆爲虛設、夫子之警子夏亦爲贅言、而孟子何必闢楊墨、宋明諸賢何必闢陸王乎、且夫漢土之人亡論縉紳士子即自武弁俗吏以至農工商估者

婢僕娼優率皆識字、讀書間亦解詩屬文、孝悌仁義之爲美、堯舜孔孟之可崇、亦莫不粗識之者也、則謂彼土男女除緇黃外皆知聖人之敎、而不藉學政可乎、而漢唐以來明王良相動輙議其廢興而不措何也、亦惟知世道民俗將必由學故爾、況又本邦之與彼土風俗殊異、敎學之方尤不可不加愼也、今乃不擇敎之純駁、不論學之正邪、槩謂鈞是聖人之道、各從所好而無害、何其所見之汗漫也、有人於此、口漱濁水手持假金、謂人曰鈞是水也、吾奚擇其淸濁、鈞是金也、吾奚論其眞假、則不嗤其詠狂者幾希、吁先生之論學術、得毋類於是乎、正嘗聞之父師曰、漢唐註疏諸家專治訓詁文字、而解經旨義、槩乎膚淺、嚼蠟無味、至宋程朱二公、徵義與旨粲然復明、始繼洙泗之統、緜是漢土學政歸一、洛閩制藝、科場專用程朱傳註、爲標準、朝廷以是策士、士子以是應擧、父師之所授與、子弟之所傳受、童習白紛、止是斯學而已、自宋季元初、歷明迨淸五百有餘歲、于今雖革命迭興、然學政畫一、無復異論焉、明氏叔世、間有立異者、亦唯私議草野、未有公言於廟堂上也、非惟漢土爲然、即朝鮮琉球諸蕃、苟從事於斯學者、亦皆率由不愆云、　本邦之學崇尚程朱、防自惺窩藤先生、方是時也、闔國鼎沸、群雄尙武、絕無一人禮致先生而問學焉者、獨

東照神君大度卓識首聘先生問道講藝于干戈矢石之間、又擧其門人林道春爲博士、剏學制、此其所以翼戴　王室戡定禍亂而能創業垂統貽厥孫謀之端、蓋亦見乎此也、慶元雖壽已還奕葉相承、堂構益隆、迨至　常憲公立頖宮建聖堂、仍令道春子孫世襲其職統學政教士子焉、更辟木下順庵以備顧問、親說易經于朝、拾是斯文翕然大興、嗣後　文照公擢新井君美召三宅緝明等、有德公延室直清爲直講官、是皆一世醇儒文行兼優、師承正學者也（恭靖先生事松永昌三昌三嘗受業惺窩之門白石觀瀾鳩巢皆恭靖門人）是時京師有伊藤維楨父子、江都有荻生茂卿師弟、各唱異學於民間名噪海內、寔繁有徒、藩邸或有以其徒充儒職、而未聞有一人以其學進仕　公朝者可見　前朝皆能遵奉　祖宗崇信洛閩而不墜也、今選擧三博士輔翼林家、禁過異學以振學政、正是　公朝明良所以深體　祖訓克脩舊制而柴子諸博士奉行之爾、先生以謂柴子投合大臣所好挾其權建言施設擅行黜陟此豈非輕視公朝之甚乎、又先生引天朝博士家說經用古註疏以爲異學解圍、其意蓋謂非是殽函之固則十重鐵步障矣、雖然是亦有說、請試言之、恭惟古昔　王化之隆、屢通信李唐聘使學生虛

徃實歸各以其所傳習奏請　朝廷建之學宮、蓋當時經義止是漢註唐疏無復他說也、此宋學之東　神州播蕩兵燹相尋　輦轂蒙塵公卿星散寧復遑問學術何如乎、逮偃武後

後光明帝始信程朱、特　詔講官擲從朱註、顯講正學、受徵布衣朝山某（號章林菴失其名字）賜冠服說周易、又　御序惺窩文集以賞其首唱正學之功、天朝之學於是幾乎維新矣、惜　聖壽不永、嗣後講官因循故常未能之承行也、

側闕

今上聖明好文尚古典章文物百廢皆興而況斯學反正　公朝業已如是獨無聖斷乎、海內臣庶刮目竢之耳、（正）往歲在京上謁故明經博士特進佩蘭淸君、君語（正）曰某曩祖諱賴業嘗爲

後鳥羽帝侍講時於載記中標出大學中庸、併論孟孝經目爲五書、以進　朝廷、爾後百餘年朱子四書集註本始傳于爾本邦、其所表章全與家祖見相符、由此學庸二書專用朱子章句、進講、其餘三書或依漢註或從宋註、又有家學說唯遵朝旨而說之未有定論云、夫大學先聖敎人之法初學入德之門、中庸孔門傳授心

法學問極功也、經筵之講於焉顯宗朱子則大本既正歸趣不差矣、天朝明經家亦是洛閩之學也、但其末梢微有異同耳、觀夫伊藤諸儒誣妄叛經之說霄壤懸絕豈可同日而論哉、先生之於佩蘭君、金蘭之契不薄、想亦飫聞其說矣、今乃牽而合之以爲異學之黨援、顧不亦誣乎、嗚虖佩蘭君沒而有知其謂之何、語曰君子不黨又曰不阿其所好、惟先生其思之、至若曰柴子所薦達皆是迂僻腐儒、又曰柴子乘勢欲傾奪林家云云之類誠是東野人語、以小人之腹度君子之心者、妬口醜詆亦無忌憚之甚、此豈所以議柴子諸學士乎、先生與柴子嘗結社洛下周旋有年、宜知其爲人、何遽信訛言浮說而責之柴子乎、且曰文學之士非議柴子致海內躁擾、未審何地方誰氏子起此躁擾先生豈確日而審耳之耶、將謂塚田虎等上書也耶、彼徒以佛氏異宗武伎分派視吾儒謂亦當如彼多見其不知聖賢一本之道也、意是蜀犬吠日桀狗噬堯吠其所惟耳、狺狺之爭不日當絕遂奪何躁擾之有、又嚮承高諭先生此書擬司馬文正諫王安石書云爾、夫安石剛愎自用、擯群賢行新法、竟釀宋室之禍、溫公先見之明忠告之言悉中其肯綮矣、今柴子適奉 台旨、釐正學政、以贊升平之化、其功偉矣、先生乃比之安石何、某不知故人之至于斯

也、噫無識小人如正不佞頼有父師遺訓、篤方欽化不惑如此、以先生博洽文雅睨睨一世、尙且迷復自快恣情縱筆敢梗道化悍然不顧何也、得非異學弊風所錮雖高明不能免乎、冀先生平正其心寛廣其意再致書紫子以謝前言之過、且須其稿本遍諭海內知交及門下學徒以解其惑、俾之革面洗心從事乎正學、則先生改過從善作人濟物之美愈光大於前日矣、正也辱過愛二十餘年、茲盡一得之愚、敢布腹心、鄙辭草率不避忌諱唐突瀆覽悚懼尤深、傳曰惟善人能受盡言、先生其受而聽之與笑而置之、或怒詬而絕之與、抑言於上而罪之與、正謹俟命而已、甲寅冬至曰

反惑歌は拙齋が異學排斥の餘勢の國學者流に及びたるものなり。拙齋はすべて新を建て古を貶するものを排擊したるなり。彼が異學排斥の勢焔は太甚だ盛んなりといふべし。

反惑歌一首幷序幷短歌

近世一二賤儒氏籍口古學各捌異見謬解聖經排擠賢傳以惑後進焉尋有倭歌者流襲其故智陽徵

皇朝古言陰術自己邪說或解萬葉集或註古事記妄毀古來明良所建書傳所述以爲乖謬不可據併謗聖賢之道儒雅之學以爲虛文不足信要亦假名亂實欲易天下之術竟使輕俊子弟風靡雷同益驕益恣無所忌憚其罪其害又浮于賤儒氏矣而未聞一言闢之者余每慨焉頃者偶閱萬葉集有山上太夫反惑歌迺敢擬其躰以作夷曲一闋庶乎爲擊蒙之嚆矢云爾

寛政八年丙辰小重陽日

防人助丁某郡坂下菟麻呂

あめつちの　ひらけし時ゆ　あれませる　ひしりの神の
天につきて　たてしきはみの　のりはこの　いつゝのをしへ
みつのつな　たゝしきからに　いへ國も　のとにおさまり
あめのした　いやしつまりて　とこしへに　つたへつたふる
たまほこの　みちの根さしは　ます人の　こゝろにそなふ
ますかゝみ　かけてみかゝむ　をしへはも　くしの傳へし
こゝたくの　ふみにそしるき　こは人の　道にしあれは

ありとある　くにのますらそ　わか國も　ひとのくぬちも
ひとすちに　みそなはしにし　たかひかる　ひつきの君は
かんなから　あきらめ給ひ　くしの道　たとみゐやまひ
ことさへく　くるりの國の　はゝせらを　めしつとへつゝ
すめみこに　をしへたまひぬ　うへしこそ　高津の宮の
まつりこと　あやにかしこき　ためしにも　いひつき今に
あふくなれ　かく明らけき　みこゝろの　まことを世々に
つかの木の　いやつき／＼に　きみも臣も　身を合せつゝ
をさめます　くにたみのため　いくそたひ　もろこし遠き
つかひさね　みもたなしらす　いそしくも　いゆきかへらひ
まくはしき　かの國ふりも　あか國の　かせにうつして
しき島の　やまと言葉の　はなさへに　ひらけそひつゝ
なひきあふ　よつの民草　ところ得て　たかきいやしき
こち／＼に　いつゝのたくひ　まつろひて　したしむゆゑに

うま人の　國の名たかく　とつ國や　あふくとふなる
そのかみの　みたまのふゆ　おほろかに　わすれはてけん
たふれたる　しこつ翁か　ひたふるに　聖をそしり
おほ君の　みことおそれす　あけつらひ　ひかことしつゝ
なめけにも　さかしらすなり　きくさの　ことたふかこと
ほたるの　かゝやくかこと　ぬかつらの　はひゝろこりて
さはへなす　さはくこともゝ　かりこもの　こゝろみたれて
うつそみの　よひとまとはし　かにかくに　ふさはしからし
ねかはくは　とかまもてうち　しなとの風　はや吹はらひ
ことやめて　よろつよかれぬ　いはし水　みなもときよき
あしはらの　水穗の國の　くにふりの　いや遠長に
いたへこし　御代のおきては　すめろきの　神のまに〳〵
あふかさらめやも

反歌

大君の惑わすれておのかしゝさかしらすなる人はひとかは
そのかみのおほ御世護るまか言はおそろしや汝かやまと魂
いさ子ともまことゝなせにたふれたるしこつ翁かそのしひ言を
ねちけ人とほさけてこそ遠津神すへら御國の道は榮えめ
さきもりにわれはあらなくに道の爲あたふせかむとよむ歌そ是

旋頭歌

おのか身にかゝるもしらてひし里の道
のゝしるは天にむかひてつははくかこと

第十二節　正義出でゝ五經亡すと云ひけん、正學の令出でゝ學術の發達を阻害したること少々ならざる也。

學禁の結果

學禁は反對の多かりしにも係らず幕府の威力を以て兎も角もこれを遂行したり。されば諸藩學に異學を採用せしところには改めて朱學とせり。浪人儒者にも學派を書き上げしめたるに、幕威を怖れて朱學に歸したるも多かりしが、豪放山本北山の如きは孔子學と答へて別に「御咎」とては無かりき。毛利氏の藩學には、當

頼春水と山陽

初より護園學を採りしに、物學朱學の人交る〳〵學頭となることゝ定めしは、學禁の結果なり。この外諸方なほ陽に朱學を奉じて忌諱を避けしところも少からざりしなるべし。

不自然なる學禁のとても永續すべき理無く、學禁の內容の滅亡は早くも學禁派の學者の脚下より起れり。三博士の熱心なる助力者頼春水の子に山陽外史出でゝ先づその家學を捨てたり。春水は著述の後世に垂るゝ無きも、その人蓋し當代の有力なる碩儒にして、昌平黌に招致され、異學排斥に力を致したる者、その學統論は天明年中に成る。山陽が書幼時鈔蘇文二首後に。吾受家學、爛熟小學近思錄而已。十四五歲、因囑書見蘇文史論。託曰天地間有如此可喜者。乃竊誦習。手鈔范增論及倡勇敢策貼壁日觀之。自是遂有學文之志と。その後ち山陽十八歲にして江戸に遊ぶとき、春水乃ちその家藏の方正學集及び鎗一條とを以てその兒に贐せり。

方正學は朱晦菴の後勁として洛閩學派の特に尊重するところ也。山陽後年その書後に記して此兩物襄守以終身傳家。願使其鋒鋩兩不缺也と。學禁派の大家

が家庭の敎育以てその一班を推知すべき也。加之二洲と栗山とその外學禁派の學者多く賴家の寧馨兒に囑望したるに、彼は家學を固守せず。春水の學統論に、跋して、世或謂襄背家學、不甚信洛閩。襄曰唯甚信、故有所不甚信。以其有所不甚信、可以知其所甚信之非私也と云ひて嚴正中立の態度に立てり。尙ほ且つ彼は周の學制則るに足らずと唱へ經を解するに五經正義を採用せることゝは明らかに家學を去りて學禁派に大打擊を加へたるものにあらずや。

山陽先生書後題、跋　讀五經正義。

儒者以經爲爭資喧呶沸起。後人欲就究各說、曰亦不給。吾使從遊者治經、唯平心讀正文、循其語勢。又取古書與同時者錯而誦之、習其口氣則可了四五分。過不通處然後看注。注主一家猶不通、更看他注、猶不通則姑闕之。是省力法也。或問注主一家何主。曰公行天下久而不廢如五經正義是也。其次四書集注康熙四經、三禮義疏、蓋與論所定。帝王立之學官、或滙衆說而參之。雖亦不無疎繆要非一家私說。準此可以視諸家異同。爲王侯說經尤須此法。譬如欲知物價先訪於大都。不必走索各處。尤不可從一僻遠港津訪得遂以爲

然公言於人也。

心學

王陽明心學を修めしより、朱學の徒、これに拮抗して、朱學もまた心學なりと稱し、朱子心學錄の著出るに至れり。學禁の出でし後ち、この事實は、却つて王學者の利用するところとなり陸王の學は異端として排斥すべきにあらず、寧ろ程朱の心學に稗益するところありと稱して、公然陸王の學を唱ふるの習をなせる者あり。文化十一年に出版されたる心學拔萃四名公語錄の如きは、その好例なり。王學者朱王同致の點をば百方附會して、程朱陸王合致なりと稱し、陸王を異學とするの愚を嗤ひ、大膽にも朱學の假面を著けて、王學を鼓吹せり。

四名公語錄

心學拔萃序。

夫學者心而已。自虞廷人心惟危道心惟微、至大學格物致知誠意正心中庸喜怒哀樂未發已發、論語仁義恭敬忠恕孝弟孟子性善養氣存心求心、孰不原於心者乎。詩三百、一言以蔽之曰思無邪。經禮三百曲禮三千亦一言蔽之曰、毋不敬。可見聖賢之學一以治心爲本也。宋時周程張朱專唱心性之學、可謂盛矣。而當時有象山陸氏。明時有陽明王氏。其初稍似與朱背馳者。而其卒終歸

於一。嗚呼旨哉。然今之宗朱者概排二氏以爲異學而棄之。予恨其如是於二氏及其徒龍谿王氏近溪羅氏之言去偏捨僻取其純粋正當不負於朱學之旨者若干條集爲一編名以心學拔萃……

四名公語錄の編者は南紀の鎌田鵬なり。彼さらに朱王の同致を證明していふ。

朱子曰、學者常用提省此心使如日之升則群邪自息。他本自光明廣大、自家只著些子力去提省照管他便了。不要苦著力。著力則不是　陽明亦曰良知一提醒時、即如白日一出而魍魅魍魎自消矣。是其所養二公亦一轍無別と。これ心性に於て朱王一致なりとす。さらに心性の體に說き及ぼしていふ。文公註明德曰虛靈不昧。此言形容心性之體無復餘蘊矣。而虛靈二字、陽明龍谿近溪言々誦之不措。又云用力之久、一旦豁然貫通。此言妙悟也。而三子之學、亦以悟入爲要。又與呂子約書中云、且要見一大頭腦分明。而三子動云學問頭腦、學問頭腦。此三者實聖學之樞要也。而此處既同則亦更何論耶。とて大本に於て朱王全く同致なることを證明せり。

而して朱學者が陽明に慊焉たらざる致知格物の解に於ては、自ら其事は陽明の大缺點たることを表白して、敵の突撃を避け、巧みに陸王の長を採るを裝ひたるは、英

雄駭人の手段とも謂ふべし。王學者は靈活に振舞ひて、その學燈を掲げたり。而して學禁派の後ちまた人材無く異學禁の內容は漸く崩壞しつゝゆきしを見るなり。

心學拔萃題言十二則

一陽明格物之解、其意蓋以思念爲物。然自古經傳以思念爲物者、未嘗一經見之也。是其杜撰不足信者也。其他如龍谿近溪唐荊川耿楚洞輩皆好新奇各從其意縱出新說不嘗考諸古言。輕卒肆慢是此徒之弊。亦陽明有唱之矣。
亦不可不察也。

次ぎには佐藤一齋なり。一齋の言志錄ことに晩錄は朱王の合致を說き、かつ暗に異學禁の理由を駁擊したるものなり。程朱と陸王の學說の合異を論じていふ、物我一體即是仁。我執公情以行公事天下無不服。治亂之機在於公不公。周子曰、公於己者公於人。伊川又以公理釋仁字。餘姚亦更博愛爲公愛。可幷攷。また朱陸を論じて朱陸異同在無極大極一條。余謂朱子所論爲精到不可易。然象山尙往復數回不已。亦交遊中錚々者。但疑兩公持論與平昔所言各異。朱子說無、陸子說

有如易地然。何邪といへるは婉曲に朱學者の鋒を挫きたるもの也。第二には、朱王必しも背致せずして本邦に於ても惺窩道春を始めとし林家諸公必しも程朱に執一定見せざることを歴史に依て證明し、而して余の學は遠く惺窩に淵源すと云ひて人をして自ら異學禁の必しも謂はれ無きを首肯せしめんとせり。

言志晩錄、

○朱陸同宗伊洛而見解稍異。二子並稱賢儒、非如蜀朔之與洛爲各黨。朱子嘗曰南渡以來理會著實工夫者、惟某與子靜二人。陸子亦謂、建安無朱元晦青田無陸子靜。蓋其互相許如此。當時門人亦有兩家相通者。不爲各持師說相爭。至明儒如白沙、篁墩、餘姚、增城並兼取兩家。我邦惺窩藤公蓋亦如此。

○惺窩藤公答林羅山書曰、陸文安天資高明、措辭渾浩、自然之妙亦不可掩焉。又曰紫陽篤實而邃密。金溪高明而簡易。人見其異不見其同。一旦貫通同歟異歟、必自知、然後已。余謂我邦首唱濂洛之學者爲藤公。而早已幷取朱陸如此。羅山亦出於其門。余曾祖周軒受學於後藤松軒、而松軒之學亦出自藤公。余欽慕藤公、淵源所自則有乎爾。

○惺窩羅山課其子弟經業大略依朱氏而其所取舍則不特宋儒。鵞峰亦於諸經有私考有別考。乃知其不拘一家者顯然。

寛政七年程朱學を奉ぜざる者の出仕を禁ぜしかば、益々浪人儒者の反抗を招きしが、出仕する者は皆朱學と稱せり。一齋は其學術居然たる王學の大家なり。而して大學頭林述齋に少時より親近して信任され、遂に林氏都講より進んで昌平黌の儒官となれり。彼れ陽に朱學者となり、その實王學を唱ふ。匏菴遺稿によれば、一齋は聖堂にては朱學を講じ家塾にては王學を講ぜりといふ。則ち彼は講義の遣ひ分けを爲せるなりき。林氏都講、昌平黌儒官にして既に此の如し。異學禁の內容は、林家の蕭牆よりして、その患を有せしなり。諸大名の藩學にては、幕府に對し憚るべき筋もありしなれ、浪人儒者に至りては各自說を發揮して、正異學の辨難を爲し異學禁は漸く空文に歸するに至れり。

上述せる如く、異學禁出でし後ち、諸學者紛起して、辨難攻擊を事とし、或は巧みに朱學者を飜弄する者あり。或は激しく朱學派に反抗せるもありて、學界鼎沸するが如く、學者一段の活氣を帶び來り、恰も歐洲文明東漸の大勢に遭逢して、言論の旺

盛活潑なる遂に德川氏の社稷を傾覆するに馴致せり。諸大名の藩學に對しては能く朱學を奉ぜしむるを得し如くなれども、要するに異學禁は舊來の官學を振興し、林家を保護して學政統一を爲さんとして、其實効を占め得ず、浪人儒者を抑へんとして、反つて反撥の機運を附與したるものにして、政略上の意味に於ても學禁は全然失敗に歸せるものと謂ふべし。

寛政異學禁は近世敎育史上の一大事實なるに、從來坊間の敎育史これを說明せざるは遺憾なりと思ひ、玆にこれを詳論せり。而して拙齋が一處士を以て、この大事件の立者たるを得しは、平素の素養、敎育家の敬重すべきものあるを惟ひ、詳述の煩を避けざりしなり。

第十三節 德川史中一箇出色の政事家たる白河樂翁公は、敎育史上に於ても亦その數頁を要求するの價値を有す。啻だ彼が異學禁の當事者たりといふのみを以てにあらざるなり。

樂翁公の事蹟に就きては三上博士の「白河樂翁公と德川時代」あり。公の思想を見るべきものは、樂翁公遺書と花月艸紙とあり。遺書は江間政發氏が

公の遺著を編纂したるにて、中には生前祕書に屬せしもあり、先づ公の全集といふべきものなり。

余は先づ公が教學に關する思想を論じて、次ぎに異學禁に於ける公の態度に論及すべし。

公は少より勤勉にして學を勵み道を求むるの志厚く、つねに深く自ら責めて忠言を人に求めき。安永八年(一七七九)世子たりしとき、求言錄を作りて、雖紅女賤隸其有能諫吾者吾尙有取焉と言へり。

求言錄卷之二

周武帝將親學。以大傅燕國公于謹爲三老。帝幸大學。謹入門升席南面、帝西面。有司進饌、帝跪設醬豆親爲之袒割。謹食畢、帝親跪授爵、以酳有司。撤訖、帝北面立而訪道。謹起立於席。後對曰、木受繩則正、后從諫則聖、明王虛心納諫以知得失、天下乃安。又曰去食去兵、信不可去、願陛下守信勿失。又曰有功必賞、有罪必罰、則爲善者日進、爲惡者日止。又曰、言行者立身之基、願陛下三思而言、九慮而行、勿使有過。天子之過、如日月之食、人莫不知、陛下愼之。帝再拜

受言謹答拜、禮成而出。（通鑑）

定信曰、周武帝懇々、求言于于謹。于謹亦循々然善誘君、實可謂君臣啓沃之切也。然至於于謹言陛下三思九慮勿使有過、天子之過如日月之食人莫不知、則其爲失言也亦已甚矣。夫過者雖聖人所不能無也。惟其聖人之過也必改矣。小人之過也必文矣。帝若唯于謹之言是從、則遂非文過莫所不至焉。豈人臣所望于君乎。今不正其失言而幷錄之者何也。爲人臣者非有蹇々之志其何能諫君矣。其何以一言之失而可不取其志乎。況其所言者、間亦有足以取乎。亦安得不錄于玆。嗚呼二三子勿欲三思九慮無有失言。盖其言之用與不用在吾已。

公か敎學に關する思想を知るべきものは、自敎鑑、難波江。讀書功課錄。大學經文講義。國本論、砌の柳。言志集。修身錄。政語。燈前漫筆。諫皷鳥。老の波。花橘錄。樂亭筆記。樂亭かんな筆記。夜鷗筆叢。立敎館令條。立敎館童蒙訓。責善集。陶化之說。花月亭筆記。婆心錄。花月艸紙。說得秘書等なるが、その中自敎鑑は、明和七年（一七七〇）公年十三のとき、倫理の大要を明示し、人君勉むべきの

大意を述べて自ら戒めたるものにて、公の生涯には關係すること少なし。讀書功課錄は天明の末年公廿一二のころ專ら讀書に從事せられしとき、自ら其開卷卒業等の日月を記載されしものにて、如何ばかり公が勤苦精勵の人たるかを知るべきものなり。著述目錄にいふ。和漢今古何となく涉獵し玉ふこと殊に多し。一年にして凡そ四百六十冊餘に至りぬ。儒生の徒と雖も及ぶまじく、まして朝夕の間安、御登城、御外勤又は、武術奏樂和歌なども廢し給はず、御交り廣ければ御書簡の往復も多きうちに、かく數百卷看書し給ふこといかなる御眼力かと疑惑する許り也。蓋し公の精苦勤勉は三百年間紈袴子弟中他に看ること能はざるべし。

公は政敎一致にして、その淵源は上たるものにありとす。政語は天明八年(一七八八)公が執政となりし翌年の著作なるが、

人之可行謂之道。道人於道謂之政。道也者先王之所以自行也。敎也者先王之所以敎人也。至後王政與敎岐矣。於是先王之敎降爲儒者之任、先王之道汚。夫敎之爲物、自上而下者也。秦漢以後道之不行敎在下也。譬之川欲澄其流必也於源。後儒紛々在下流聚訟。道其行乎哉。余有慨于茲、著政語

十三則。 蓋欲澄之源故不論及下流。

公が教化を正すは上たるものにありとして、自ら任ぜるの志知るべし。第一則に政教の源を論じて、君は師表なり、民を教化す。教化を行はんには學校を建て士を養ふを本とすといへり。これ則ち公が學政を振興するの動機なり。

更らに詳かに、之を説かんに、公は教育の必要を確信せる人也。あらゆる方面より教育の必要を説きたり。責善集は公の中年以後の作なるが勸學の意極めて切なるを見る。學問は人たる道にて今日日用の道なれば、六かしき事にてはなし。忠といひ孝といふも我は學問なく六かしき字は讀めねども、君に事へ父母に事ふる事は能知れり。されば學問するにも及ばず一生是にて終るべしといふ者もあるものなり。君に事ふる道知るとは如何なる生れながらの聖賢にや。忠も樣々あり、孝も品々あり、又忠孝兩全し難きの道理を始めとして、忠に似たる不忠、不忠に似たる忠。孝に似たる不孝、不孝に似たる孝もあり。忠孝といふは大切なることとなるを是にて事足れりと思ふ心の淺き。是れにて左いふ人の不忠不孝なるを知るべし……公は更らに種々の口實の下に學問を退避する者をさとしていふ、

愚かなる身にていかで學び得べき。といふぞ。愚かならば猶えて學ぶべし…………………不氣根故に學び得難しといふは未だ人道の大切なるを知らぬ故なり。不氣根といへど、我好む事には覺えず氣根出る者なり…………書物勤めて讀む者は必らず氣滯りて病を生ずといへど、病生ずるは書物にかぎるにもあらず。學問せざる故、苦にする事も開けず、心氣を勞して病を生じ、攝生養生の道も愚かなれば、學問知らざる故に病を生ずるにて、醫を撰ぶも藥撰ぶも不學なれば知らずして病癒えず。されば學び得るときは、おのづから病も生ずまじき道理なり。…………學問は善き事ながら我は年老たり子供の内に學ばざる口惜きといふは、學問の善き事も知らず口惜きとも實は思はざるなり。…………

公は此の如く敎育の必要を唱へたり。而して公は學問に就きて如何なる思想を有せしぞといふに、讀書世事ともに學にして、讀書は聖人の時よりしてすでに必要たりき。まして今や學風頽落したれば、ことに書を讀みて聖人の道を知るの必

要ありとせり。

大學經文講義、聖人の學の門を尋ねて入らざれば至る事ならず。さすれば大學をすてゝ聖人の道にいるべき門は無し。よく心をひそめて此書を見るべし。扨又學といふものは書を讀むをもて云ふにあらず。世事を經るも皆な學にして、書に向ふのみを言ふにはあらず。されども孔子の時にも詩をよまざればいふ事無し。禮を知らざれば立つこと無し。又詩を學ばざれば面に牆するが如し。事にのぞみてわづらはしともいひ、子夏も仕て優なれば則ち學ぶといふ。是れみな書を讀む事なり。聖人の時すら此の如し。況んや今ま聖人をさること遠くして、邪說といつて聖學にあらざる說ども糸の亂れたる如く木の葉のちるが如くしげければ此時書を讀まずして、いかでか聖人の道を得ん。然るに今時の者、忠といひ孝といひ仁といひ義といふも知りたる事なれど、吾等如き者の爲す事にあらずとす。これ自棄と云つて自ら吾身をすつる也。忠孝皆知れりといへど、いかでか誠の忠孝の道を知らん。

公が大學の書を以て聖門に入る第一書とせる所以は、聖人につき隨ひて學びてさへ得がたきに、今ま聖人を去ること遠き世に學ぶには學をするの次第をとくと知りて學ばねば、なほ〳〵大に道に違ふこと也。……論語孟子といふ書は皆な一時一事によりて發する詞にして、その書勿論有りがたき言ふ計りなけれども、その事を問ふ者一人で無く記しとめる人も一手で無き故淺きも深きも皆な次第をなさず。初學の者のたづね得ること難きこと故、程子此大學を先にして、論孟これに次ぐとのたまひたるなりと。公は則ち大學を以て學問の秩序階級を備へたる聖門第一書なりとせる也。

學問進德の方法としては公は程朱の說を信奉し、本邦にては專ら室鳩巢を敬慕されしと見ゆ。知致格物を唯一の方法とし、これを爲すには敬の工夫を第一としたり。責善集には敬の事の一章有て、公が躰驗の工夫も尋常ならざるを知るべし。大學經文講義に敬の工夫を說きて、さて敬といふは學者の工夫すべき第一にして此大學の道を學ぶにも始より終まではなれぬこと也。敬を程子は主一無適ととかれ謝氏は常惺々の法といひ、尹子は心收斂不㆑容㆓一物㆒と說きし如く、いづれも敬は

一心の主となりて、心の縱にとりはなれぬやうなるを言ふこと也。されはとてかたくなになるに心得て石にて手をつめしやうに取るは窮屈にして死物になること也。卵をとるに強く握ればつぶれ、手をゆるせば、おちてしまふべし。にぎらずゆるさずの間、念々その卵をわすれぬやうにすること也。孟子に云ひたる忘るゝこと勿れ助長することなけれと言ひて忘れもせず、また助長もせぬこと也。……その外、室先生は悍馬を乘るやうに強くもせず弱くもせぬ心を敬にたとへられたり……

扨て學校は教育を施すところにして、人君教化の爲めに必要の具なりと公は思惟したるが、公は學校は人君の役人を造るところなりとの思想なりき。所謂賢才とは役人の事なり。大學經文講義に。みな唐にても天下中の人が人十五已上大學へ入ることとでは無し。天子の太子及び御家老御中老などいふくらゐの人の嫡子方及び天下中の萬人千人にも秀でし人がらを見立て此學問所へ入れて學ばせることなり。……學問所の風を以て人をこしらゑたてゝ善き役人を多くするといふもの故、學問所を古より設け置くことなりといへり。

然らば學校教育の方は如何。立敎館令條にいはく

學校造立につきては學問、武藝其外習書數學容儀舞樂等に至るまで夫々師、範の敎導を爲し聊怠慢ある可らざる事。

立敎館床へ安置する所、中央太神宮御稜、左方御遺訓。右方四書五經。次に勸學家訓との主意を以てまづ我國の事、御當家の御事御宮之御事を奉存、聖人の道を尚奉候て萬づ謹愼に可相勉事。

太神宮御稜を中央に安置し、家康遺訓と四書五經とを左右にすといふもの則ち樂翁公が學校敎育の理想なり。公は皇室を尊び海防に盡くしたる人なり。公の敎育にはすでに國粹主義の伏在せるを認むべし。課書訓陶の方すべて、この主義より打算し來る。讀むべき書は如何に

花月亭筆記、學問の事の條にいはく、讀むべき書は、わきて四書五經及び大學衍義の類ひ、史記通鑑、本朝の書は六國史、神祖の御事記したるもの。藩翰譜駿臺雜話の類をも見るべし。見る可らざる書は無し。唯その大樹をいへるなり。人君の學は殊にかたよらざるを第一とし、器にならざるようにこ

そあらまほしけれ。

兒童の敎育につきては、自修及び操行の方を述べて(立敎館童蒙訓)

幼きときより手習學問弓馬劍槍躾形など何にても武士のなすべき業を心がけ、一日の內も何時までは何々の藝をなすべしと日課をたて置少しの間も怠りなく勉め行ふべし。

今の童子輩人の門札に泥をぬり壁に樂書などするは戲といへどもたくみたることにて甚あしき風儀なり。幼年は戲れ遊びて元氣なるは隨分よろしけれども、人の物をかくし、人をたぶらかす等の事はわろきやくにてたくみたること故惡人と成行ものなり。甚だつゝしむべき事に非ずや。

公は程朱の學を奉じて、致知格物の主義なれば、學校敎育にても自然に知識の吸收に重きを置き、博學尤も役に立つこと也などゝ言ひしが、躰育をも、おさ〳〵輕んずることなくして、花橘錄に人氣のめいりて元氣乏しくならば武藝を以て引立つべしといへるは躰育の妙旨に逢著したるものなり。

公は敎育の可能を過重視せずして、箇性の特長を尊び、その宜しきに隨ひて文弱

武邊に流れざる篤實の才を養成すべしと謂へり。陶化之說にいはく

さてとかく學校は、もとより小學をかね候場所の事故、尤も其心得可然候。とかくに言ふ迄もなけれども、孝悌忠臣より外に教へ方は無し。豪氣も英氣も篤實より出でざれば害をなすと可心得　ちと武士氣を出させんと教へかくればまゝ任俠風になり、かの季良をまなぶ類になり、かへつて風俗の害をなす。才ある者は迂遠に思ひて信ずまじけれども左にはあらず。小學など言ふ所より下地をくみ立て候が永々の爲なり。下地まんろくに出來る上は、その得手に隨ひ、それ〲心得、可然書物を勸めて助くべし。古より既に詩科などたてし事をばそしるぞかし。詩文は好み候者得手のものは學ぶべし。とかくに風流は花にして、あしくなり候と質實の風をかへ候事になるなり。かの政事には冉有季路、文學には子游子夏とかいふ如きが聖人の御流義なり。學校は只篤實より出でたる才を養ふ事第一なり。文に流るれば武道の疵になり、大內今川の流派となる事可恐事也。

公は學校に於て篤實より出でたる才を養成し、以て學風の頹落を救ひ、風教を清

めんとす。公は當時風俗の奢侈惰弱に流れたるを慨き、これを匡救せんとの志洵に深厚なり。燈前漫筆に、治平久しければ至て見事なるやうなれども、次第に誠實は薄くなること也。といへるは見道の語なる哉。さて諸大名の游惰を責めては、近年時計世に流行して諸侯方居間に二三十少くして十ばかりもありといふ。いかなる心にて翫び給ふぞや……かゝる事を聞きては其餘無用無益の費えぞ多からんなれば……その教學に力めざることを慨きてはある大名がわれよく書物を好んですゝむれども、家中その風にならずして、すゝめざる食色の道に風をなすといへるものありき。その大名の食色を好むほど實情より書物を好まば家中その書物の風になるべけれども、第一主人食色をこのみて人に書物を好めといふが風をなさぬ本といふべしと謂ひ、武士の無學不術を憤りては、常に仁義を以て心を養ふにあらざれば誠の武士にあらず武士は殺伐を司るものなればとて、仁に背きて殺を好めば災必ず身に及ばざるは無し。こゝを以て古より智仁勇の三を以て將士の美德とする也。人を愛し物を惠むことといよ〱厚ければ人民の害となるものを惡むことます〱深し。爰を以てその害あるものを退けて萬民を安か

らしむるは、武家の任ずる所なり。徒らに殺を好むものは是亦武士の討つところなりと。實に當時の大名武士の奢侈にして不學不仁なる、まさに大に改新を要するものあり。公は社會の風儀の移りゆく眞相を觀察して、太平の餘弊、奢侈と拜金との積習に歸せり。庶有編に

亂世の憚れを知らざるが故に種々の活計に財寶を費し、つひに貧きに至る、これによりて昔し富貴といはるゝ人も正直にてありし人も思はざる諂諛をもするやうになりて、是より上下の辨別も道義の教訓も頽るゝに至る。これ道を思ふ人の歎嗟する所なり。今のむかしに富有にてありし人の貧しくなりたる人と敎を以て身を立てし二品の人の中に……又た敎を以て身を立るの人は嘗ては弟子も尊師と仰ぎ膝を屈して物學びせしも、今は來り學ぶの人尠くて束修の容るゝも寡き故に師の方より學ぶ弟子を請ふやうになりて、此等の事にては、なきものをと思ふ類あり。此二品の人はたとへ身は溝壑に仆るとも、時に媚び勢ひに諂らふまじとは思へども、父母妻子の給養につけては、是非なく志を奪はれ、……此二品の人は大凡末下よ

りは貴ぶべき義理ある人の衰へたるものなり。此故に是等の人は常々憤る所もあり忍ぶ所もあり、世間の盛衰上下親戚の順逆浮沈あることををも嘆息し同情同愁の人は相互に中も睦まじく他人下々にも憐まるゝものゝ又貧富をなすの論は、是らの衰へたるを見るにつけても、何にもせよ金銀さへ多く持てば貴者も烈士も崇むるにたらず義理も爵位も唯金銀にしかずと、ひたすらに富を欲して前後に廉恥を思はず親戚故舊も富有にとゞまると、たつて世の憐みも人の譏りも厭はず、是を専務とするを以て衣食の用を忍び利を求むるを晝夜に工夫する故に、おのづから利にさとくなりて富むなり。是を羨むの賤夫下に出て風俗自然に推移り外聞順義も無用となり、……義理も法も律義だてするは却て痴なりと。是を本意とするが故になすべしと思ふことに恥なく、なさずと云ふこと無し。其徒皆詐欺を以て工夫の要となすにより漸々に超過して竊盜の類をなすに至る事なり。大抵下民は禁令の外に教といふことを聞かず。農商ともに富家に因て生活をする類の者は、子弟までも其出入する所の富家を懼れて其手まへにてた

したきと思ふ事をも遠慮して悪事をせめがたきものなり。此故に其出入する所の富家の風があしく、貪欲にて不法の事をなせば、それにならひてあしき業をする事多し。……必竟をたづぬれば、其本原の貪富家が金銀さへあれば諸侯の出入も日見えも拜領物も世間の用ゐも是よりなる事にて道義も親族も皆是にとゞまるといふ本意より建立したるものなる故に其家に因めるものは、其風儀を意に挾むによりての事なり。

これ則ち太平の世態久しくつゞけば結構なるやうにて風教の次第に老ゐんとする眞味なり。公が慧眼よく玆に及びたるは其聰明を推賞せざる能はざる也。かく風俗のうつりゆくは唯だ政教の力によりて矯正することを得べきのみ。これ公の理想なり。公は政教の關係を述べて花月亭筆記に、かくあるべきといふは理也。さればかく有べければ敎也。されどもかくあるといふは人情也。されどもかくあればかゝれよといふは政也。理を以て敎を立て、人情を以て政をなすなりけり。而して政教の源泉、情理の根本たるは學校なり。陶化の說に、風儀を維持するの希望を學校に囑していはく、只風俗は質實なるをよしとす。一統の風競

ふときはせん方なけれども此薫陶に心をつくせば少しくは其流風をも維持すべし。されば學校は稽古所とのみはいふ可らず大切の場所なり。今は樂といふものもなし。何もかも此學校の薫陶なりと。

公は秕政を改革し、風儀を改良せんとするに當りて、學校を重大視すること此の如くなれば、隨つて學校の敎を正しくせざる可らざることは自然の論結なり。公はこれに就きて如何なる考案を有せしや。公は當時學風の頽落に眉をひそめたり。燈前漫筆にいふ、世の人是等の學者を見て、學問すれば氣象高ぶり却て人柄あしくなるものと心得る者あり。餘儀なき事なり。然れどもそは學びかたのあしき咎にて學問の咎にあらず、されば最初にいふ如く學問はその始を愼しむこと專要なり。入所一度違へば先入の言主となりて終身の害となるなり。云々。また責善集にいふ。今の世學問するもの經書に新意加へて様々に吾說をてらふぞ歎げかはしき……たとへば程朱をそしるほどの器量ならば、先づ程朱一代の書にても善く見よく味ひ、言行著述の才までも程朱の半にも至るとならば又も許すべし、誠に乳臭黃口の見、燕雀の輩いにしへの賢儒大儒を論ずるぞ心風わづらふ人と

やいふべき。誠にはづべきの甚しき事なり。徂徠仁齋などいふ者いかにも豪雄の氣象ともいふべきが其徒また弊を生じて聖人の學に禍すること少からずと、これを以て見れば、公が學風の頽落を憤り異端邪說を排斥するの志顯然たるにあらずや。これ則ち異學禁の動機なり。

余は既に樂翁公は敎育の必要を確信し、敎化は人君の天職にして、敎化の第一法は人君躬行實踐すると共に、學校を建つて賢才を養ふにあり。ことに當時學風頽落し風俗壞敗せるに當りては風敎維持の賴みとすべきは唯一の學校にありとして學校の敎へに重きを置きたることよりして遂に公が學禁の動機に及べり。これよりして學禁に對する公の態度に就きて論ずべし。

學禁に對する公の態度

世或は公が異學禁を發せるは柴野栗山等の力請によれりとし、公はこの事には熱心ならざりしやうに思へる者あり。これ斷じて誤謬なり。公が熱心なる異學排斥者たりしことは前述記事によりて明瞭なるにあらずや。公は、ことに敎學の事には明らかにして、極めて熱誠を注げり。なほ又たその門地勢望も充分なり。公は決して漫に栗山等に煽動せられて學禁を發するの沐猴冠にはあらず。又た

亜野博士は公は初めの頃は學禁に熱心なりしも後ちには然らざりしやう也とて、說得秘書によりて公の心事を疑はるれども、これ恐らくは未だ悉さゞるの論なるべきか。公が學者としての硏究の態度の頗る虛心坦懷なるは修身錄のみならず。文化二年(一八〇五)釋教を咏じて。わが國のひろき敎の道なれば、佛ののりもあるにまかせつ。とも云ひ、燈前漫筆には。凡そ天下に全く是なる書は稀にして全く非なる書もなし。聖人一等を降る時は必らず一短一長あり。其長する所は必らず淡くして味なきが如きものなり。悅ぶべく好むべきものは必らず其短き所なり。其短き所を捨て長き所を取らば天下の書皆な吾師にあらずと云ふ事なし。是を見分くるものは則ち論孟の二書に熟して聖人の意味血脉を得るにあらずして叶はざること也といひ、また學問は入所を愼むこと專要也といひ、すでに論孟に通じ聖門の正旨を得たる後ちは、宇宙間の書取りて以て我師友となす可らざるもの無しといふは則ち公の趣意なり。猶ほ何んぞ眼中に伊物陸王あらんや。公が異端を痛擊するは學政に於て也。その志は後日に至りて變更されたるを見ず。則ち寛政以後の公の著作に皆な專ら程朱を推尊したるが、就中文化六年に(一八〇

九)に著はせる立教館令條に

　經義に於ては自己の見をなす可らず彌永々程朱の說を可守事。

また文政十二年(一八二九)公の暮年に作られし風月集にも兩程子を讃して、

　代々をへしみたにのみ雪とけにけり、連る枝の春のあらしに

以て公が終始正學を學校に扶植するの志確乎たるを見るべきにあらずや。

樂翁と栗山

樂翁公と栗山と投合したる所以如何

(一)學政を改革し、風敎を維持するの志を同じくする事。

(二)異端邪說を排斥し、正學を扶植するの志を同じくする事。

(三)ともに鳩巢を尊信敬仰して、其流を汲める事。

鳩巢は江戶時代に於ける朱學の大家にして、ことに伊物の盛時に當りて、これに對抗したれば、後ちの程朱學者これを以て孟子の闢異に比せり。樂翁公は、いたく鳩巢を尊信して、その著作に、つねに鳩巢を引用し、その駿臺雜話を愛讀し、大學の講義にも、多くこれを引用せり。栗山も亦鳩巢を敬慕し、先輩にては尤も鳩巢に服すといへり。

(四)襟度瀟洒にして、好尙の相似たることも亦兩者親善の一因となりしならん乎。公出でゝは執政たり、入ては書生たり。頗る學を好み、また蘇東坡の人となりを慕ひて後赤壁の夕毎に置酒すといふ。栗山は快豁にして、東坡を慕ひ筆札も東坡を學び居常頗る彼に擬するものあり。欲書舊草問諸君、舊草風吹飛作雲の一篇の始まり殆んど東坡を以て居るもの。その學者を會して赤壁の遊をなせしとき、公ためにを贈れりといふ而して栗山もまたかつて公を以て東坡に擬して傾倒の情を述べしことありき。

栗山文集卷六　白川侯親寫赤壁二、賦屛風跋。

上可以陪玉皇太帝下可以陪卑田院乞兒是蘇公自處者、其襟懷所以光明于一代也。故其出爲文章如長江大河恍怪悠眇不可端倪。而赤壁二賦又尤其極光明者矣。白川羽林公端委立朝則儼然如神人、琴書燕居則蕭然如書生。漠然不以通塞榮悴爲意。常喜長公爲人每後赤壁之夕必置酒嘯詠以自樂矣頃書二賦於屛風上以付其世子太郎君。其襟度可想。如其筆札則非可以牝牡驪黃而相也。

栗山は學術才識を以て嶄然頭角を儒者中に、抜くもの、公執政のはじめ、聘用して計らす投合し遂に學禁を發するに至れるならん。然れども公は態度穩當、襟懷瀟洒たり。寛政七年に程朱學に非ざる者は出仕を許さゞるの令の如きは、精神頗る窘迫決して公の意中を繼紹したるものにあらず。此の如きは、則ち栗山等鋭意執著の爲すところにして余が學禁の勵行は當初樂翁公が豫期せざりし邊にまで進みたりとなす所以なり。

栗山文集卷六　白川侯親寫四書五經跋。

神哉白川源侯成就人材也。興學未數年而出廣瀨某廣田某等。既而公吏則長尾某近侍則不破某大塚某等相繼而出。近遂上世臣諸太夫又出松平某井上某吉村某等。是其翹然者、其他士子偉才、俊秀彬々文武並肩、細至于書畫歌樂舞皆欝然成器、抑是何以哉。語曰以身教者從、以言誨者訟。公之敎化皆出其躬行心得之餘。是以人皆歡而趨之、是其所以敎不肅而成之速也。公既喜其文藝之速成、又慮實行之或不副。於是親寫四子五經以藏之館中。欲使士子知事皆本于四子五經而後謂之學焉。若夫外此而云々者、博究萬卷曰傳千

甞亦曲學阿世無レ補ニ于忠孝之道一無レ用ニ于家國之事一。恐皆非ニ公所レ取也。後之在レ館者體ニ公之意一以學焉。則庶幾于其不差矣。

第十四節　樂翁公の記事を終るにのぞみ附記すべきものあり。公の侍醫にして儒林に令名ありし南部伯民の技癢錄これ也。伯民儒學は皆川淇園に學ぶ。後年山陽も詩を寄せて伯民の知遇を求めき。伯民は醫學上の著作には金匱正々誤ありて與誦籍甚支那にまで舶載するに至れり。彼は周防の人、醫は家學に受けしも、亦蘭醫學を學びて、頗る參酌するところあり。伯民は、かゝる造詣を以て教育を研究したれば、識見も少からずして、殊に心身相關の理法に於て發明するところあり。されば技癢錄一卷は近世教育の發達に際して一生面を開けるものと謂ふべし。

技癢錄に神論あり。これ伯民が心神相關論の根本なり。

神論。凡天地之間、物有下爲ニ變樞妙用一而人不レ可レ知ニ其方一者上、稱レ之曰レ神。易曰神無レ方、又曰陰陽不測之謂レ神、是也。神之有レ爲レ用也、必憑ニ精於物一。以レ是其形雖レ隱而其跡必從レ物而見。乃亦有下可ニ知而言一者上。易曰知ニ鬼神之情狀一、又曰知ニ神之所レ

爲、是也。夫神精之用而精爲之體、故有精神之名。又常循氣以行、故有神氣之目。交乎陰陽同乎天明、存於凝一而亡於否隔者也。人之始生也、契合其陰陽精氣、則天之神因相孚感、形種焉成。譬猶天火發于金石相鑽之際也。易曰精氣成物、又曰男女搆精而萬物化生。是神與精氣其實合同也。神行人身有逕隧。形類筋脉而細、其本起自腦與脊骨而罔羅軀殼無處不在。凡人視聽言動皆有神經而能致之機關也。神經中有津液、其色淸白而薄、即是腦脊兩髓下灌于此者、神蓋依此以養焉。髓者亦是精液之所造成、是故洩精則髓涸骨弱可以知已。夫人在氣中、如魚在水中。魚吸水而服其精、人之吸氣直亦服其精、氣中有精、猶若酪酢有醍醐。則氣原爲精神之所援據。是故禮祭義曰、氣也者神之盛也。氣既爲神之援據、是以氣不平則精神困厄、疾於是乎生矣。大古之民知道無忤、不令神至困厄。是以人無殤折以保其壽。即使有疾亦惟有移精變氣之法。藉此得治而未必藥石是務也。今世之人毫無省其道、常以亂氣損精。有疾一作、則陰陽暌離、靈根頓阽。方是時徒任草根木皮以要還神於竭遠、豈不已惑乎。是故欲長生者不可不知養其神。素問曰得神者生、失神者死。欲爲

養神者不可不知保其精。故又曰積精全神。又不可不知正其氣。荀子曰、治氣養神、氣治而凝一。即是精。精足而神全。可克與天地同壽无有終時矣。

伯民は身心の相關を論じて、精神の修養は則ち無病長壽の第一法なることを說く。この點に於て彼は益軒と歸趣を等しくすれども、和蘭醫學を以て支那哲學を解釋し以て心身相關の理を說明するに至りては、その精密なる因より益軒の上にありといふべし。されば自然の結論として、彼は曰く、上醫治未病。

伯民は健康と道德との關係を論じ、不健康は不道德を來たし、放肆の生活は則ち不道德と不健康とを來たすことを說けり。容貌動作健康なるが如く見えて疎懶倦厭事に堪へざるものあるは、心氣の修養缺けて、その身軀實は恒病の狀態にありて自ら知らざるものなりといへり。少壯學生中、腕力健脚人に超ゆれども、聊かも事に堪へざるものは、皆なこの恒病者にして、教育家の數々見るところなり。技癢錄にいはく

邪氣。人有恒病而不自覺者。則其軀堅雖無異而知心氣寧能無所不正焉。夫人其處家也偸安、其接世也疎懶、其使人也褊急、其從業也倦厭、其見義也昏眩、

其謀事也多疑、其遷物也怯懼。此皆非厥稟性本志。自是病邪戻氣之所令以然。嚴律在前亦末如之何耳。是故士人在世須當力袪病邪。夫氣一則動志。邪氣充斥以關正氣。其意志應物不能融通自在豈不亦宜乎。淮南子曰神清意平物乃自正。墨子曰、身體强良思慮徇良。志道者其可不以致思焉。

貴者難療。貴者有疾尤爲難療。郭玉對和帝言有四難焉見于後漢書。余謂貴者難療、其由豈止四。衆人僾和而醫令不行。婦人執事而將息失度。藥則先適口而不要利病。方則專補益而忌疏滌並皆其所以爲難療也。且夫君上疊膝於深宮之中。氣血抑遏無從疏進。資身方溫柔之鄕斲喪過寸。罔省節制五鼎八珍餖飣于前、重幌密幃燠欝于後。無一不爲疾病之資矣。其既然矣。以是賢君舉醫知頤生之道者以任之献替。此謂之治未病也。

伯民は神心內守を述べて、精神の修養は無病息災を來たすことを述ぶ。曰はく長藩の平岡氏は兵術の家にして、其祖八左衛門術尤も神捷と稱せらる。かつて人に語りていふ、吾中年以後兵術の進步佗の證すべき無し、唯だまた外感の病を得ることなしと。蓋しこれ心機警守少しの弛縱なき故に然る也。素問曰、恬惛虛無な

れば眞氣之に從ふ神心內守病何くよりか來らんと平岡氏の謂也。或は謂ふ兵士達者自有道機、蓋所謂進於技之類歟と　神心內守は彼れが保生の秘訣なり。こゝに於て保生術を述べて居常腰腹に氣力を充盈するの法は神氣旺盛身躰强壯ならしむる好き法とせり。

保生術　柳公綽嘗語憲宗有謂。氣行無間隙不在大椰而充之、頤養養旨蔑之加矣。嘗遇淇園先生論養生之道。先生曰凡人身大關節在腰腹。腰腹氣充盈則一身氣血得運行不失其生活之機。其術之要在於常自以其腰用力向前以自張其腹。乃可得其氣充盈。腰腹大關節氣用此得有餘則其餘小關節雖偶有小欠並皆可以此補完也矣。余少時多病乃三十。心自悟是保生之要術平生行立座臥每存修此之意。爾來病魔退跡躰絕針灸者二十年。未嘗以病臥。心常怡和而神氣常壯。顧此乃不出於使氣無間隙之術耳。余初亦羸弱、因博摺養生飲食男女動作藥餌之法擇而從之、佐以右件之術。寖至肢體豐下腹如垂腴氣志從自旺盛。眞爲要術、斷非古人養生多傳迂誕之比也。

伯民また保生の術を說きて節色慾一事を重要とし、九十三歲にして善談健步精

神益壯なる西依誠齋を引きてこれを證し、精神の困憊は躰力の衰滅を來たすを以て、ときに無心行動以て躰を養ふの必要あることを說き瀧鶴臺を以てこれを證明せり。而して書畫に托して藏鋒の用筆を說き以て、人須らく葆光蘊蓄して明哲健壯の域に至るべきことを唱へたり。伯民の保生處身の法則ち躰育の精神を得たるもの、而して藏鋒一節の如き洵に吾人の指碇とするに足るもの也。

瀧士義先生形色實衰若無神光。躬自憂之、諮余養生之術。余對曰先生勤學刻苦困憊之所致、不如撥擺文學周歲而無心行動以養之也。若夫人參地節而可延年則世復何有短折之人。鼂從先生讀書、偶有所記。劉子云陵心而用形。荀子云養略而動罕。通鑑云俛仰屈伸以利形、進退步趨以實下。此外小子復奚知爰言。先生曰如是吾乃日夜目之然而匡坐修學恭默思道儒者之事、吾其終不能事斯語乎。後踰年得病竟不復起。

藏鋒。墨叢張長史曰、用筆如印泥畫沙貴藏鋒。意書神韻風味必在是藏鋒之處存焉。譬如讀簡古之讀若望淵點之人視之久而意態愈新。今人學書殊不然也。筆如鐵箒運之如掃。其書以是筋距峭厲而毫無典重溫雅之迹。譬諸

細井平洲。

人則爲圭角犄豪之小人。古人曰書心畫也。於乎伊人何不知自揜之至于是也。

伯民また爲學之道を論じて其始は博通を務むるにあり精究微拆はその次也。たとへば鉋を先にして、或は梳りて後に比するが如し、今の學者始より一字一句に拘泥して凝滯する所以は爲學之道にあらずとなし、或は古の隱士を評して多くは是れ肥遯斷世溫飽自適にして陶犬瓦鷄にも劣れる者、巖棲谷隱無事にして終る如きは人道を盡くす所以にあらずとせる皆な有識の言となすべし。

伯民の技癢録は、近世の敎育學發達して、漸く根據を心理學生理學に有せんとするの傾向として見るべき也。

第十五節 近世の敎育家に於て、益軒に對比すべきものを求めば細井平洲に若くなし。平洲は敎育法に長じたるのみならず敎育行政家として成功せるもの。敎育史上に於ける彼の價値は、その事功にあれども、其理論に於けるも亦簡明直截にして、ことに國家敎育を唱道せるは平洲の特色なりとす。

天明寛政の際に賢諸侯として著聞せるは米澤の上杉治憲(鷹山公)と肥後の細川

重賢(靈感公)となり。この二侯共に輔佐の賢儒ありて學政を振興せり。熊本に於ては秋山玉山米澤に於ては則ち平洲なり。この二人もと文壇の盟友にして、共に切磋して教育の事功を東西に擧げぬ。玉山は五言詩にては江戸時代第一流と稱せらる。その人快豁にして詩酒風流を事とせるを以て、世却てその教育家たるを知らざる者多けれども靈感公の治蹟は則ち玉山が教育上の成功によること多きなり。彼つねに言へり。余に三の願あり、學政の振興、文集の出版及び登嶽はこれなりと。而して後みなこれを成就せり。

栗山文集卷二、采芹采茆集序。

余十八來東都。當時好文諸侯三數公、獨肥靈感公稱最賢。其儒臣秋子羽則爲余同門先輩。一日相見於林正懿先生座。時子羽新自芙蓉還。手巨觥據首席談東海日出、風度飄々猶天外人也。曰、某於世有志願三焉。興學刻集其一則登岳也。今三願既遂、吾事畢矣。余時年少歷事淺矣。意竊謂家國事不有猶大於此乎。未能脫書生體面也。且子羽文酒放浪於法度外、師儒之任、恐非其所長。以靈感公之明付之以贊政亦所未曉也。既十餘年見肥人之詩樂

泮集者於京師市。自諸公子太夫以至於倉庫刀筆吏斐然成章。其音渢々雄偉皆規摸子羽文集。余愕然驚曰、此子羽之所以事其君乎。嗣後藪、伊形、中村數子經學文辭其聲相繼、藉々于三都之間焉。後數年又得其學制教法而讀之。皆子羽之所草定。條理詳密、井然極有次第。不謂子羽之胸中有此謹嚴矣不覺又爲之失驚也、因自咎淺突余觀人矣。夫子羽其外寛偉而其中樂易。其發爲文辭飄逸絶群、錦屐珠轉以悦人。與之坐猶對喬岳而觀雲霞之相依變幻焉。是以見者皆悦爲仙人樂相從游。是蓋靈感公所以取而表之使之鼓舞衆材而後徐納之規制繩墨中之神機也。宜哉能成此斐然多士也。既子羽歿而公亦捐館。藪李諸賢相承奉遵。其學政益振不少衰焉。………

若しそれ平洲が教育に於ける成功に至ては更に大なるものあり。彼の一生は以て教育家の摸範とすべきものなるべし。平洲は享保十三年(一七二八)尾張如來山下平洲村に生る。則ち荻生徂來歿するの年にして、まさに吉宗將軍全盛のときなりき。平洲の家系は王朝の名家より出で一轉して武辨となり遂に耕桑に隱れしも固より尋常農民と、その撰を異にせるを以て必ずや祖先の遺風その家庭の間

に存するものありしならむ。平洲姓は紀、名は德民、字は世馨、通稱は甚三郎、平洲また如來山人と號す。幼より穎邁にして夙に頭角を顯はせしが讀書にのみ耽りて產業にかゝはらざりしかば親族鄕黨交々忠告するところありしも、父母唯だ平洲のなす儘にまかせて疑はざりき。平洲の詩に哀々父與母、唯謂兒女賢、恒安誹言聞、恩愛終不遷と言ひしは賢父母の面目を顯はしたるもの也。平洲年十六にして師を求めて京師に遊學せり。

髫齡知好學、夙夜言黽勉。志尙偉行成、童懷瑚璉。遠期天下士、耻爲閭里選。耿々何思服、曉夜寤輾轉。君子有徽猷、維德修以顯。令聞播無疆、萬年引不殄。先聖豈欺我、昭々六經典。

父これに與ふるに五十金を以てせしに、平洲京都に留まること一年十金を散じ、その餘を以て書籍を購ひて歸鄕せしに、父母その持操と勉學とを喜び田宅を分ちて產をなさしめんとす。平洲請ひて二百金を得また之を以て書籍を購ひ日夕攻究して門を出でざること一年なりき。ときに元淡淵來りて名古屋にて敎授せしか平洲その學德を聞き、往きて共に學を論じて深く之に敬服して、その門に入れり。

十八歳にして、吾以中土音直誦唐虞文と歌ひて長崎に遊學せり。彼は此にては渡來の支那人中に一の師友を得ざりしかども、舶載の書籍も多ければ研究の資料をば得しなるべし。かくて留ること三年にして、母の病を聞きて即日東歸の途に上れり。歸れば母既に歿せり。平洲哀毀病を爲して殆んど起たざらんとし、友人も亦生前に文集を出版せんと計畫する者あるに至れり。かくて平洲は、また淡淵に從遊せしが、寳暦元年廿四にして帷を名古屋に下して教授せり。その後淡淵江戸に移り平洲も亦追ひて東上し、淡淵沒後その門人皆な平洲に歸す。平洲嚶鳴館を開きて後進を誘掖せり。これより彼の名聲始めて當世に著聞せり。平洲時の名家秋山玉山、瀧鶴臺、南宮大湫、木下蓬萊、小河仲栗、飛鳥子靜等と交を締し、文壇に一旗幟を飜へせり。寳暦七年、平洲三十歳にして詩經古傳を出版し、子夏氏の詩傳を唱へたり。詩經の研究は平洲の學術に於て、尤も光彩あるものにして、彼少壯より詩を以て性命となし、長崎にありしとき舶載の古書によりて得るところあり爾來研鑽の結果、古傳を取るに至りしは、太だ佳なれども、子貢傳を取りしは、今日より見ればば異議を免れざるもの。當時資料の欠乏せる或は已むを得ざるものあらんか。

平洲の家兄、事によりて貲産蕩盡し父正長來りて平洲の家に養はる。ときに小河仲栗、飛鳥子静と家をあげて平洲を頼めり。こゝに三家族平洲の父に事へて兄弟の如く近隣の人々もその別家族たることを知らざりしといへるは、豈一美談にあらずや。仲栗子静共に早く歿せしかば、平洲その妻兒を扶助して敢てかわらず平洲は眞に情に篤き人なりき。さればその師淡淵の贈れる一磁盌を用ふること五十年、その妻石村氏奴婢を代ふる毎に、必らずこの盌を示して教戒を加へぬ。明和の災にも門人先づこの盌を懐にして免れたりといへり。彼が仲栗を哭するの詩に同袍敎子無常父、異代論心少比倫」といへるもの、彼が師友に對する至情はたその弟子を率るの至誠なるべし。

仲栗子静沒後、平洲は柳原に移居ひ、火災にあひて更らに濱町山伏井戸に移り貧ます〳〵加はり兩國橋邊に辻講釋までしても、なほ其操守をかゑざりしが、明和元年、年三十七にして、米澤の賢臣藁科松伯の知を得て、遂に推擧されて其主治憲の師となりぬ。治憲ときに年十四、己を虚くして平洲に事へしかば、彼も亦眷遇に感激して心力を惜まず。その後、玉山は歿して、彼の畏友を失ひしが、嚶鳴館詩集及び文

集つぎて出版され、聲名隆然として著はれ、これよりその後半生は漸く順境に入れり。

平洲は、先づ詩を以て著はれしも彼は詩人を以て自ら居る者にあらず。賈長沙は彼の理想なりき。經世濟民は漢學者の皆口にするところなれども、彼は眞箇によくその理想に伴ふべき自家の資格を認めたり。その品性の高潔にして、意思の堅固なる、俊邁の氣を帶びて實用の才に富める況んや風格高華にして温恭人に接し、一たび彼に接する者は、數日の後も尚ほ彼の風丰人を照映するを忘るゝ能はざりきといへる如き、彼は敎育家として、また學者中の政事家として確かに得易からざるの器なりと謂ふべし。柴野栗山かつて彼を評して、平洲が儒林にあるは、鷄群の鶴なりといへり。

米澤に於ける平洲を叙するは即ち平洲が敎育事業の一半を紹介する所以也。

このとき米澤にありては如何なるときなりしか。

關原戰後上杉氏削封の後ち、僅かに米澤三十萬石を給せられ、寛文四年（一六六四）宗嗣なくして、領土は更らに半減せられて、上杉家の財政は困難に困難

を重ねて重定の代に至りては人民流浪し上杉家の信用地に墜ちたり。老臣森利直は重定の信任を得て威福を恣にし、闔藩怨望し、志士恢復を講ず。民間に藁科松伯あり。藩士竹股當綱、莅戸善政等と結托して青莪社を結べり。これ等の諸士は、他日皆な鷹山公の羽翼となりし者也。これ等志士、嘗膽臥薪して藩政の革新を計畫す。このときに當りて鷹山公入りて嗣子となれり。

寶暦十三年奸臣森利直は竹股當綱等の爲めに誅殺せられ翌明和元年、平洲は治憲の賓師となれり。明和四年治憲家督し同六年(一七六九)まさに入國せんとす大名の家督入國は一世の晴を盡くせしことなるが、公の入國は領土荒廢して徒らに心膽を寒からしめしのみなりき。公發するに臨み、平洲に謂へるやう、寡人幼稚にして百姓に君臨す、戰々兢々として薄氷を履む如し、先生將た何を以て寡人に敎へんと。平洲再拜して答へけるは、小人賤陋乏しきを賓師に承け、歷王の典言、群賢の紀述、邦家の興亡、人事の成敗その宜しく戒むべきもの、鑑むべきものは既にこれを陳して隱すなし。唯だ余の往日に言へるところは虛にして公の今日に行ふと

ころのものは實なり。それ虚言を以て實行を履む。愼まざる可んや。凡そ物久しければ臭腐し、事久しければ廢滯す。これを修め、これを振ひ修振倦まざるは後嗣の德なり。而して唯勇これを能くす。勇乎勇乎。勇にあらずんば何を以てこれを行ふを得んや、公それ之を勉めよと。言々極めて適切、快刀を以て空竹を割くが如し。この一片の逕言以て平洲が如何に鷹山公を敎育せしやを知るに足るべきなり。

當時米澤は學事なほ荒蕪の有樣なり。景勝のときより世子の師傅はあり。その後ち儒職を置かれしが儒醫兼帶にして唯だ世子の敎導するのみ。未だ學校とては無かりき。矢尾板三印といへるもの儒醫の職にありしが、聖堂をその細工町の邸地に創建して、私かに春秋の釋菜を行へり。ときに綱吉將軍儒學を尊崇して諸大名隨つて聖堂を造營する者多かりしかば、元祿十年(一六九七)米澤にても藩主綱憲三印が私立聖堂を改造し、その側に新たに學校を建築して三印に付したり。これ米澤學校の創始なれども、未た藩校と名くべきにあらず。三印につぎて儒職に上りしは片山元僑にして、その子孫相つぎて儒職に上りしかば、學校は自ら片山

氏の住宅となれり。

治憲は平洲を米澤に招請して學政を興さんとし、明和八年(一七七一)自ら平洲を茅屋に訪ひて、禮を厚くして、その意を陳せり。米澤にては、馬場御殿を以て平洲の旅館とし、松櫻館と號し、諸生二十人を、拔擢して就て學ばしめき。翌安永元年江戸大火にて平洲の家も災にかゝりしかば平洲辭して歸れり。

安永五年(一七七六)平洲は第二回の米澤行を爲せり。その行頗る精采あり。彼と公との交情は水魚も啻ならず。公の賓師として、政事及び教育の樞機に參與し、踔勵風發言行はれ謀用ゐられ、多年の主張は遺憾無きまでに實行されぬ。その成効の著大なる、「活如來」の尊號の、一藩の士民をして隨喜の念を起さしめしのみならず。「米澤侯の御師匠」の名聲は世人をして平洲を渇仰せしむるに至れり。

この年、公は學校を擴張し、興讓館と云ひ、新たに塾舍を造營し、提學を置く。これ米澤藩學の創始なり。その五月平洲を江戸より招請す。公は弟子の禮をとり、提學及び吏員をして國境に迎へしめ、藩士みな禮服を着して平洲の安着を祝せり。ときの提學は前年平洲の教を受けたる者ども也。

平洲は米澤に滯在中、四、九の日、講堂に於て講義す。聽聞人は皆な麻上下を着せり。治憲また時々講莚を殿中に設け、公族及び支侯もまた平洲をその殿中に招請して講義せしむ。この頃より侍頭、宰配頭の輩爭ひて兩提學をその家に延き、隊下の士をして講義を聽聞せしめたり。家老始め士大夫相習ひて提學の講莚をその家に設くるを以て榮譽となし、講義風をなして、足輕以下工商の輩或は一隊或は一町にて連署して平洲の講義を聽聞せんことを請願するに至れり。かくて藩中曑々として學に嚮ひ、農商の兒童も唐詩選など吟咏しつゝ街頭を行く者ありしといへり。天明五年治憲致仕し、治廣齊定相つぎ、その間學事の變遷ありしも、文政十三年館中一躰の諸事安永五年の規定に復するの令を發せり。この度も平洲留まること僅に一年餘なりしも、その成功は實に精采あるものなりき。先哲叢談によれば、鷹山公、平洲と共に封內を巡行し、民間の愁苦を訪ひ、百廢悉く興り、豐施下に遍ねし。衆民、平洲の過ぐるを見れば感嘆して淚を垂れ、大慈悲生如來樣とて合掌拜跪せしとなり。

米澤興讓館の設備紀律は平洲の意見によりて成れり。平洲の意見書は、鷹山公

の命によりて、諸生入館の始め必らず熟讀せしめられき。されば平洲の意見書は則ち興讓館の要旨たる也。平洲は興讓館創設の旨意を論じて、篤行の國風を維持するにありとなせり。眞の人物とは善惡邪正の判斷明確にして國家の需要に應ずべき有用の材幹を具するものにして、その性格は百人百樣箇性を發展せしむべく、決して一定の模型に入れむことを求むべきにあらず、また入れ得べきものにもあらずといへり。これを要するに平洲は教育上、大主義の確立、學風の養成の必要を主張し、また被教育者箇性の開發の必要を認む。意見書に曰く、

御國にて學問所を御造立被遊候御本意は御先祖樣よりの風俗を失ひ不申、萬人安堵仕候樣に被遊度と申處極意にて人を利口發明に被遊と申處にては無御座候。元來米澤の舊風質實篤行にて、諸家に勝り候事多く御座候。乍併太平二百年の恩化次弟に奢靡逸樂に移り候處を御氣の毒に被思召候故に學問と申す事を第一に御引立被遊候事に御座候。

學問を不仕候ては人々我意我見のみにつのり候て上の御仁德と申所を思ひめぐらし申事無之故にその思ひめぐらし候心持の生じ候樣にと被思召

候。故に御座候。　左候得ば米澤の學風は先第一人情の質實に相成、浮行虛飾の無之樣に被遊度御儀と奉存候。　但し學問を致し候と申日には四書五經を讀み習ひ、夫よりその義理をそろ〳〵辨へ候て少し宛にても身に行ひ慣ひ申事に御座候。　但し書物を讀み習ひ候得ば自然と昔し〳〵の事も相知れ人の知らぬ道理もそろ〳〵合點參り、善惡邪正も辨別仕候樣に相成候得者、凡人には勝れ知慮も開き口もきかれ人にも見こなし不被申樣相成事勿論に御座候。　但し此處より不覺自滿の心も生じ、我を高ぶり候事にも移り申候事是亦自然の病氣に御座候。　仍之善良の師長を御立て、その人の言行を見まね聞まね候樣に被思召候て師役を御立て被遊候事に御座候。　左候得ば先づ師と相成候人、此處を能心得可申事第一に御座候。　扨て人を敎へ候ても百人が百人一樣には不參ものの人心は各々別々なることは不及申上候。　孔子三千の弟子、七十人の親炙弟子達も人々心慮も別段、所行も殊異にて、盡く一統には相見不申候。　乍併聖人の德化にていづれも善良君子に被相成、大は大、小は小、それ〳〵に世界の用に立つ人計と相見申候。　聖人の御

德にても御一樣に敎へ立てられ候事は不相成ものかと被存候。併し人が善良に和成候處は一同に御座候。

興讓館の兩提學は平洲の意を受けて興讓館戒條をつくりて書生日常の課程を規定し、次ぎに興讓館當直勤方を規定したるが、その末節に

出家沙門若くは庶人と雖も受業に來り候面々は登堂平等たるべし。

と謂へるは注意すべきこと也。學問に階級無し。敎育は一般に普及すべしとは、平洲一生の主張にして、その特色も亦こゝに存せり。

平洲の第三回米澤行。

寬政八年(一七九六)平洲の第三回米澤行は綱常を扶植し得て力あり。平洲の一生敎育史上に光榮を有するもの、この一擧によりてます〳〵確實なりとす。このとき正異學の論爭まさに熾んなり。而して天の一角に敎育の成果を收め得て、師道を末世に維持したるものあり。平洲は「所謂正學」を墨守するの人にあらざる也。このとき平洲年六十九。尾州侯に事へ、老を以て隱居せり。その書狀に

此行は偏へに米澤今侯(治廣)老侯(治憲)への孝心より事起り、久々御面談も不申、老侯つねに遙念不已候につき、今侯其所を甚勞念有之候而、急度市谷(尾州

侯邸)へ願達有之候付、市谷にても其孝心を感心被致候故に、乍大儀、下向候樣にと細々被申含。元來生涯に今一度老侯へ對面致度本心、下悃に相協候付、七十老を忘れ百里の旅行も存立候事に候。

この年八月廿五日平洲江戸を發す。途中介抱の爲に附添の士あり、日々の取計は勝手方の一老吏これを司り、轎夫までも謹愼の者を撰び隨身の家來一人鑓持草履取兩人その餘の持人、雜人、何れも謹直の者を撰びて、みな上杉家より附けられぬ。別に門下生兩名介抱として隨從せり。

秋風生じて黄葉漸く好からんとす。利根川以東に至れば、旅宿の主人にも往々篤志者ありて「米澤聖君樣の御師匠樣」と唱へ、謁を求むる者も多く、朝に夜をこめて道路に送迎するの有志も尠からず。當時一行の面目、想ひやるべし。江戸を出でゝ十一日にして米澤の南境板谷關に至れば興讓館の督學神保行簡、君命を以てこゝに迎接せり。

その翌、九月六日、嶺を下る。滿目舊知の山川、また此の嘉賓を迎ふ。白雲黄葉情趣を帶びて人の心魂を動かさしむ。平洲當日の胸中果して如何。この碩學を護

れる一行は、米澤を去る一里餘の南郊羽黑堂に於て、鷹山公の親ら郊迎するに逢へり。平洲老涙滿面。公も亦敢て仰ぎ視ず。涙簌々として下る。平洲後日自ら此行を紀して門人久留米の文學樺島石梁に贈る。その文にいはく。翌六日に嶺を下り府城より三里大澤と申す驛に至り候所、老侯親敷郊迎之沙汰相聞候に付き、急ぎ候て八ッ過ぎに羽黑堂と申す地に至り申候。此行は南郊一里五六町も府城を距り申所に候。最早侯の儀衛遙かに相見え候に付き、五六丁橋を下り歩み申候所、普門院と申寺の門前に、兩傍に雲從俯伏、侯は路の中心に立て被相待候。進而拜し申候所、愚情は地に手して拜し度存候得共、侯の態度左候はゞ地に手して答拜可有之樣子故に、無是非足跗に手して拜し申候。先づ何の言もなく老涙滿顏に御座候。侯も一向無言にて涙滿面。先生御安泰と計りにて、御案內可申とて寺門に被入候。外門より中門まで足指仰ぎ申候。三丁計りの阪に御座候。聯步して進み申候。中々一步も前行は無之候。杖を被進候得共、辭して不杖候間、若しやつまづきも可致やとの心遣ひと相見へ手を引かぬ計りに比肩して被進候。堂に上り候節、御案內被申候而階を上り、堂板に坐し、俯伏して被待候。それより座に上り候時、是は例

御承知之通り、辭讓久敷候而漸く對座に相成りそろ〳〵言も出で候而御互に及言語申候。盃進候而例之通り進じ申候而献酬も相濟候。今日近傍の村民無老少田畔に伏して儀を觀申候者、嗚呼の聲計りにて、皆々落涙、飲泣の聲啾々と聞へ候者、侯の德、民心に感戴の所は是にて相知れ申候。於是愚老なる者、豈可不泣乎、豈可不泣乎と。この日、光景慘淸天地も爲めに感動す。吾人この文を讀む每に冥想して、涙を垂る。余が平洲を推して江戶時代第一流の敎育家となす所以のもの則ち平洲の性格の高きを以てなり。憶ふに封建時代の賢諸侯が師弟の禮を一世の老儒を郊迎して、敬意具さに至り情緒曲さに盡くす。その禮の淸肅にして、その情の高尙なる德川三百年間の一大美談にして近古その匹を見ざるなり。

かくて平洲の旅館は三の丸の內に設けられ、公の隱館より三丁許り。平洲が衰年泉水の趣を愛することを聞かれ、庭中に泉池を築かれ流水潺湲風致掬すべしといふ。翌日公使者を以て平洲を勞ひ、かつ招かれぬ。平洲その隱館に候すれば公は麻上下にて自ら迎へて「例の對座」にて笑泣飮宴。次ぎて左右を退けて密かに國政を談合し、學事に及べり。着の翌々日。平洲學館に登り、學生と飮宴交歡せり。

これより月々二、七の六日間は終日登館し、午前は大學を講し、午後は詩文または學事を談ぜり。新舊弟子、老師を圍繞して悦べり師弟和樂の情想ふべし。この外に町方の頭分四百人願ひ出で、町奉行に從ひ、月に兩日登館して平洲の講話を聞く例によりてみな落涙疊を濕す。平洲もまた泣けり。

鷹山公は日々大老侯に（養父重定）伺候し、風雨迅雷にも決して怠ることなく、大老侯もまた一日公を見ざれば樂まざりき。三公子公の殿中に養はる。起居動靜全く公の德度に循ひ威儀儼然觀るべし。平洲毎日午後殿中に候し、孝經を講ず。公子侍子皆な侍坐す、就中公孫宮松年僅かに八歳なれども毫も倦怠の色無し。鷹山公の家庭清粛感ずるに餘ありといふべし。平洲また莅戸善政以下當局人材多く、國富み、風化行はるゝを見て讃嘆悦喜せり。米澤は公と平洲と盡心經營の地、今や白髮來りて、その結果を見る感喜何ぞ限あらんや。

平洲米澤に滯在すること五十二日、天漸く寒くして蒹葭霜となる。十月廿八日遂に辭して發す。鷹山公また送りて羽黑堂に至る。天地慘憺として碩德の去るを悲しみ、公以下新舊相知みな嗚咽して泣く。平洲自ら記していはく當日老侯又

羽黒堂迄如前郊送之儀衛儼然、新舊相知一統に送り申候而一里餘南郊羽黒堂にて別れ申候。老侯を初、一統の落涙御遠察可被成候。生涯最早再遊は無之地、山川遼落、銷魂言語同斷に御座候。平洲又曰く、僕も生涯の仕舞旅行、供廻りも本格の通りにて馬も爲引申候。それ生別は死別よりも難し。平洲鷹山公と、此に惻々として生別す。山川遼落神喪し魂銷し、天人また爲めに泣く。嗚呼何等の悲景ぞや。

十一月九日平洲江戸に著す。上杉家より使者千住に迎接し、市谷の自邸へは太夫待てり。翌十日藩主治廣來訪、遠國へ招待の禮を述ぶ。侯は麻衣裳、駕籠側は麻上下どろ〳〵として入來り直ちに奥坐敷に請ず。侯辭謝丁寧反復、贈遺坐に滿つ。而して先例鷹山公濱町小屋訪問のときの如く、目錄は侯自ら渡し、平洲の家族に謁を賜ひ、歡談刻を移して去る。强ゐて平洲に請ひて玄關にて辭謝し門を出でゝ始めて駕に乘る。米澤侯また深く禮を知るものといふべし。米澤侯の訪問近隣を赫灼せしことにつき、平洲自ら書していはく。一統珍らしがり申すに付き、世の儒敎の季世に及び申すを嘆じ申候。有るまじき事にも無之候。已に濱町小屋へも又侯は御出に有之候ひき。但し當侯志を繼がれ候事は感服致し候と。これを以

て見れば平洲自ら持すること太だ高くして行事峻峭にわたらず。封建時代にかゝる氣燄を吐けること、平洲の群儒に挾んずる所以なり。むかし熊澤蕃山が一介儒士を以て諸大名に敬重されしときには、松平伊豆守板倉周防守等の權勢家も必らず次郎左衞門どのと云ひて駕を下りて會釋せしとなり。蕃山以後には諸大名より師儒の禮遇を受けたるの深厚なる平洲の如きはあらざるなり。平洲が教育史上に於ける價値の一半は則ち師道を嚴持したるにある也。

第十六節　尾張に於ける平洲は彼が教育事業の後半なり。彼未だ褐を他に解かず。尾張は故郷なれば、こゝに仕へんことは、その素望なりき。尾州侯これを聞き安永九年召見して侍讀となし頻りに優遇を加へて、班親衛騎將に列するに至れり。平洲始めてその經筵に侍せしとき年五十三。感謝の意極りて泣く。侍臣等竊かに、その兒女の態に似たるを笑ふ者ありき。されど情に篤きは平洲の眞面目たるなり。

平洲の尾張に於ける事業は二なり。明倫堂の革新及び講學所の創設これ也。

(一)　明倫堂の革新。平洲は藩學の總裁となりて、教育の衰廢を起せり。後ちに

修史館も置かれ繼述館と稱し、平洲を以て總裁とせり。彼が革新せし敎科規則等は、その詳を得ざれども、惟ふに米澤に於けると大差なかるべし。而して明倫堂に於ては士卒のみならず一般庶民にも講義を聽かしめたり。

（二）講學所

平洲が敎育家として、益軒後に一頭地を抽き得たるは、この事業にあり。これより先き益軒は普通敎育の必要を認め論じていはく

人となりては、幼きときより、其父兄となる人は其子弟に書を讀ませ道を學ばしむべし。

四民ともに、その子の幼きより父兄君長に事ふる禮儀作法を敎へ聖經を讀ましめ仁義の道理を漸くさとさしむべし。是れ根本をつとむるなり。

これ等によりて、益軒が普通敎育を必要とせし精神のあるところを見るべし。當時敎育の制度未だ備はらず、纔かに手習師匠や句讀等の師ありしのみにて、敎育の重要なる部分は主として家庭に於て施されたり。此の如き場合にありては一般に敎育を普及せしむるは困難の業に屬す。されば先づ最も敎育の必要を感じ、

かつこれを受くるの資格ある士人、富者等の上流社會よりして、これを始めざる可らず。益軒の教育法が屢士人の子弟に偏するところありしは已むを得ざるものありと謂ふべし。かつ益軒は古への庠序の制を稱揚し、學校の設置を望みしも、その理由たるや、唯だ子弟をして父母の膝下を離れしめて、その恩愛に狎れず切磋琢磨してその德を爲さしむるにありて、平たく言へば「可愛い子には旅をさせろ」の主意に外ならざりき。彼の主とせしところは、なほ家庭教育にありて、國家が學校の設置を必要とする所以には說き及ぼさゞりき。

「幼學訓　古へもろこしにて、小兒十歲なれば外に出して、晝夜師に隨ひ學問所に居らしめ、常に父母の家に置かず。古人此法深き意あり。如何となれば、小兒常に父母の側に居て、恩愛にならへは愛を頼み恩になれて日々にあまへ氣隨になり、艱苦の務めなくして徒らに時日を過ごし、教行はれず。且つ孝弟の道を父兄の教ふるは、我身によく仕へよとの勸めなれば、同じくは、師より教へて行はしむるが宜し。故に父母の側を離れ、晝夜外に出て教を師に受けしめ、學友に交はらしむれば、おごり怠りなく智惠日々に明かに、行

義日々に正しくなる。これ古人の子を育つるに内に居らしめずして外に出せし意なり。

平洲が普通教育を主張せし趣意はさらに適切なり。彼れ藩學に於て庶人僧侶登堂平等と唱へ出しゝのみならず。國家の命令を以て郷縣に講學所を設けしめ、自ら巡回教授し、以て教育を四民に普及せしめんとせり。その根本の主意を考察するに實に國家の必要てふことに基因せり。これ益軒の修身説に比して、一段の進歩にして、この點より見れば近世教育史に於ける進歩の一階段なりと謂ふべく、平洲の教育史に於ける位置も亦これによりて定まるものなり。

平洲の講義

平洲すでに講學所を設けしめ、屢々巡回講義せしことは、國嚢日記に見へたり。平洲の講義は簡易明瞭にして、何人にも了解され、少しも學者らしき引證をなさずして興味ある説明は人を倦怠せしめず。至誠道理を説きて懇々諄々次ぐに涙を以てして聽者をして遂に感涕せしむるに至れるは、平洲にとりて、また多とすべきところ也。彼が明倫堂に於て毎月定日に町方の爲めに開講するや、早朝より聽者麕至し、雜沓を極めて、爲めに怪我人を生ずるに至れりといふ。彼の講説の如何に

巧妙なりしかは、これによりて推知せらるべく、而して三百年間儒者多しと雖も、この老錬なる講説をなせし者、また他にあること無き也。

されば平洲が郡村講學所に巡回講義するや老幼婦女も爭ひ來りて、これを聽き、隨喜悦服して僧侶の説法よりも難有さを感ずるに至れり。先哲叢談に記していふ、講會に會集する者つねに數千人或は萬餘人に至る。平洲孝經論語等の一二章を講じ、その旨を敷演し因縁義を廣め和漢を錯綜し人倫の本を論じ、活道の要を辨じ、公私を詳かにし、淑慝を別つ。導くに温言を以てし勵ますに危言を以てし教戒懇到にして聽者感嘆喜悦して流涕せざることなし。其事蓋し僧徒の説法講義といへども及ぶこと能はず。愚夫愚婦能くこれが爲めに化誘せらると。惜むらくは、講學所の制完備せずして平洲歿後一時中絶するに至れり。後ち天保六年（一八三五）平島新田庄屋十數名連署して代官に講學所再興を願ひ出てし書中に、風俗の次第に頽れゆくを慨して、

就夫先年細井甚三郎様御勤御廻村被成下候儀に御座候處、何となく當時は御中絶に相成候段乍憚遺憾至極奉存念候。此節右等の御再興被成下　御

支配御役人樣御禁戒の上にも、猶明倫堂御教授樣方時々御廻村或は十村の男女共、寺社の手廣き場所へ御呼集被成下、貧富の無差別唯だ長幼の次序を以て神妙に坐し候樣被仰付、第一、神君の難有御事より御國恩の高大にて御仁政の難有き御事どもを初め、行狀に於ては銘々質素を守り孝悌を勵み、農事を勤め餘業に不流樣俗談平話を以て耳近く御教諭被成下年分不怠拜聞仕候樣相成候はじ云々

これまた講學所の實況を窺ふに足るものなり。

物徂來いたく世の儒者の講義を排擊して、眞の講義とは感發を主とするものにて、浮屠の說法これに近しといへり。平洲の講義は徂來の期するところに近きか。三百年間學者講說に長ずる者、平洲の外、佐藤直方、室鳩巢、岡島冠山、佐藤一齋等ありと雖も、感發を目的として雄辯縱橫愚夫愚婦にまでも至誠徹底するに至ては平洲を推して近世の巨擘となさゞるを得ざる也。

平洲の講義は朱註を主とせしと傳ふれども、元來平洲は大義を了解するを目的とし、學術偏するところ無し。先哲叢談に「主提大義、姑据古註疏爲解。

不レ好ニ參ニ考宋元明淸諸家經解一。務就ニ簡易一と言へるは蓋し當れり。

は頗る明瞭なり。茲にその敎育說を略叙すべし。

第十七節　平洲が敎育に關する論著は、益軒の如く豐富ならざれども、その思想

(一)　敎育の意義。

敎育とは、一には兒童の必要に基づき、その獨立し得る力を養ひ、高尙なる品性を陶冶し、次ぎには社會の必要にもとづき兒童をして將來社會の有要なる一人となりて、その進運に與りて力あらしむるを以て目的とするものなり。平洲「敎學」を論じていはく

玉不レ磨不レ成レ器。人不レ學不レ知レ道。故に古への聖主賢君必らず學宮を建てゝ人を敎ふる所とす。

これ彼れが敎育の第一義なり。

次ぎに平洲は、社會の進步は、その分子たる上下一般の人々敎育によりて有要なる人となるにありとせり。比喩をとりて、法度は、すみかね、役人は大工、下民は材木の如し。三者相待ちて社會の安寧幸福と進步とは期し得らるべし。故に社會の

幸福と進歩との爲めに何人も敎育の必要ありとせり。「敎學」にいはく

されば　すみかね、大工、材木、三つ揃うやうにとて敎學の道は人君の貴きより下民の賤しきに至るまで第一のわざとはするなり。

また曰く

人君の惠むこと陰陽の氣の物に布くが如く、雨露風霜の節違はずして、深山大澤のくま〳〵まで竹木花草おのかさま〳〵榮え茂りて、素直なる良材幾千萬も育ちて、上手大工のすみかねに隨ふときは、のみなんなの齒もかけず、心易く造作も調ふべし。

これ則ち社會の幸福と進步となり。彼れ社會の各分子皆な敎育の必要なることを曲さに述べて、遂に「建學の大意」に於ては

それとても二百年來相濟みたる國風なれば、この行末何思ひかあらんといはゞ敎學の道は沙汰に及ぶ可らず。

と論破せり。如上は平洲の敎育の意義なり。

敎育は被敎育者の全部に及ぼす働きにして、一部に偏するものにあらず。則ち

教育は人格を定立する動作なり。特別の職務に必要なる學藝、才德を傳ふるものには非る也。然れども既に人を社會の一分子として見るときは、必らずや實地の生業に關係して考へざる可らずと雖も、先づ人としての性格を作爲し、然る後ち、その實地の生活に考へ及ぼさゞる可らず。「もりかゞみ」に曰く

無理に曲げたわめねども、自然と成長せしめて、それに此の德を成就せしむること至らぬ所も無きは聖人の教なり。

「延學の大意」にいはく

尊卑貴賤、職掌に差等はあれども上に奉じ、下にのぞむ人にあらざるは無し。この行末を思ひはかりて銘々の心持を覺悟せしめ他日の用に備ふること最初第一の教諭とすべし。

教育は順序ある、繼續する動作なるを要とす。平洲は草木禽獸みな初、中、終の三期あり。人もまたその發達には、初、中、終あれば、その時期に隨ひて教育すべきことを論して。

故に古の聖人、教誨の道をつとめて、人情を遂げしめ給ふ。尊卑貴賤品かは

れども、教といふ道をすてゝ、性命を立つべき道無し。さてその教の法に、初中、終をわけて、天の性に逆ひもとらぬやうに、定め置き給ひしことなり。

彼れはまた、幼者には幼者らしく、壯者には壯者らしきことを責むるを要とすることを言ひて、

聖人の教は、乳をふくみて眠り、飯をくゝめられて、戯るゝ孩兒には、元服して、上下着になしたるものゝわざをさせず。上下着になして、元服したればとて、頭はげて額にしわのよりたるものゝ思慮分別をせめず。

これ吾邦社會一般に屢々見るところの、小兒に大人らしきことを責め、ひとへに端坐靜肅をもとめて、早老の風を知らず〳〵に養成するものに向て、頂門の一針なりといふべし。

平洲は教育の可能及び、その限界を論じて甚だ明瞭なり。『米澤學校相談書』にいはく

桃は桃、梅は梅、栗は栗、柿は柿になり候而、人の食物に備り申程に候はゞ、大小美惡は不及是非候へども、學館ゑ御入被遊候上の思召には叶ひ可申事に御

座候。花は見事に相見へ候ても、苦桃、石桃に候はゞ、終に食物にも、人不申、無詮事御座候。梅は梅干に相成、栗はむし栗に相成候所が極意に可有御座候。

平洲は明かに箇性及び、その定立の必要を認む。それ教育者は、すべての被教育者を如何なる場合に於ても、その意の如くに養成し得るものにあらず　これ則ち教育の勢力の無限ならざるを示すものなり。その原因に二あり。被教育者の箇性、及び外界の勢力これなり。平洲は箇性の動かす可らざるを認めて、教育の勢力の無限ならざるを證せり。

扨人を教へ候ても百人が百人一様に不参もの。人心は各々別々なる事は、不及申上候。孔子三千の弟子。七十人の親炙弟子達も、人々心慮も別段、所行も殊異にて、盡く一統には相見不申候。乍併聖人の德化にて、いづれも善良君子に被相成、大は大、小は小、それ〲に世界の用に立つ人計と相見申候。聖人の御德にても、御一樣に教へ立てられ候事は、不相成ものかと被存候。併し人が善良に相成候處は一同に御座候。

『それ〲世界の用に立つ人計りと相見へ候』の一言これ平洲の主張なり。平洲

が當代に敎育家として頭地を抽きたるは、こゝにあり。孔門の弟子を評して、『善良に相成候處は一同に御座候』といふ。これ聖人の德化の勢力を無限なりと信じ、その理想の爲めに、その被敎育者を一定の摸型に入れむとする儒者流の見識を去ること遠し。

(二) 敎育の目的。

敎育の目的は個人及び社會の一分子として、能く價値ある性格を保持し、その任務を盡くし、社會の進步に與つて力を致すを得べき人物を養成するにありと謂ふべし。

いま便宜上、これを個人及び社會の二點より論ぜむに一般に敎育は被敎育者の爲めに施す事業なれば、被敎育者の箇性を貴重すべきは至當のことにして、その理想のために箇性の多樣なる發育を抑制し、すべて被敎育者を一定の摸型に入れむとするは抑又誤れりと謂はざる可らず。されども人間の幸福及び進步は秩序あり調和ある社會に於て始めて見るを得べきものなれば、社會は、その分子が全躰の利害に頓着せずして任意の振舞を爲すことを許さず。必らずや箇人が、社會全躰

の氣運に適合し、その進歩に對して應分の貢獻を爲さむことを要求す。故に教育は個人的及び社會的性質上よりして善く兩者を調和せざる可らず。更らに歩を進めて個人的性質よりして、これを見るに人たるに必要なる性格には三個の要素あり。第一、德。第二、智。第三に美これなり。この三者は決して孤立す可らず。必らずや相連絡錯綜して、正理を踏み善を行ふ力は、眞理を理解し、醜美を判別する能と相待ちて、その効果を完くするものとす。

教育の目的は概言すれば此の如し。而して平洲の教育説を看るに、この見地に合せるものあるなり。

平洲が個性の貴重すべきを認めたることは既に述べたり。彼は人の人たるに必要なる性格の第一は德なりとせり。その理由は相頼り相扶けて社會の進歩と幸福とに力を致さむが爲めには、德によらざる可らず。德は遜讓を第一とし、驕慢を不祥第一とすといへり。

　日月星辰は萬古の天地を照臨し、春夏秋冬は萬古の氣節を運序すれども、自ら以て勢とせず、自ら以て功とせず。即ち天地の大仁を見て天地の大讓を

しるべし。故に此仁讓にのつとる人を有德君子と稱し、此仁讓にそむける人を、不祥小人といふなり。（中略）治道は承順に起り、悖亂は怨憤に生す。是を以て有德君子を尊崇して、顯位貴職にするゝ、おの〳〵德を尙ぶとはいふなり。德は遜讓より美なるはなし。美德は仁者の所行なり。不德は驕慢より惡なるはなし。惡德は不仁者の所行なり。館を興讓と名づけしこと、美德を修し、惡德を除せんか爲なり。

これ平洲が米澤興讓館設立に際し、起草したる意見書の一節なり。而してまた『米澤學校相談書』にいへる

桃は桃、梅は梅、栗は栗、柿は柿になり候而、人の食物に備り申程に候はゞ、大小美惡は不及是非候へども、學館ゑ御入被遊候上の思召には叶ひ可申事に御座候。

また孔門の諸弟子を評して

乍併聖人の德化にて、いづれも、善良君子に被相成、大は大、小は小、それ〳〵に世界の用に立つ人計と相見申候。

といひ、また

併し人か善良に相成候處は、一同に御座候。

といへる如き、よつて平洲の教育の目的は、個人として、また社會の一分子として、能く價値ある性格を保持し、その任務を盡くし、社會の進步に與て力を致すを得べき人物を養成するにありと、謂はざる可らず。』平洲が德、智、美の關係につきての論說は、その詳なるものを見ずと雖も、常に德行道藝といひ、德を第一とし才藝を第二とせるは固より言ふまでも無し。

美に就きては平洲の詩經研究は注意すべきものなり。詩は感情を和らげ、氣品を進め嗜好を高尙にするにあり。孔子三百篇を擇ぶの意此にあり。元淡淵が平洲に詩經研究を揶揄せし所以も亦此にあり。

其爲人也、溫柔敦厚詩敎也。以吾觀女、女其庶乎。女何莫學夫詩。詩可以興、可以觀、可以群、可以怨。邇之事父、遠之事君。

平洲敬んで敎を奉ぜり。詩經古傳を出版するに及び、氣焰を吐きていはく

間豪傑之士、存志乎詩書、亦唯屑々焉、章句之亟。將何暇以論大道之蘊、大義之

奥治化之所以基哉。嗚呼雖流俗之難復乎抑亦一時執經者之不任也……

平洲は詩經を講じ、音樂を喜び、氣品の美に於て自ら、その儀型を示せり。これを目して鷄群の鶴といふは、その風骨を讃嘆するの言なり。

平洲の教育意見の大體は此の如し。彼の教育意見は　嚶鳴館遺草及び米澤學校相談書に明らか也。西郷南洲は遺草を愛讀し大島配流の際にありても諷誦絶たざりしといふ。

（三）訓育論

平洲の訓育論は頗る精采あり。彼の意見は、その實踐の餘に出るを以て、ことに傾聽すべき價値ありとす。その訓育論にいはく。

習慣は自然の如しと孔子も仰られて、人君の尊貴なるより衆庶の賤卑なるに至るまで、その習慣する處を愼むこと、人を教るの極意なり。

まだ人としての德器を養成せむが爲に、尊卑貴賤みな學校に於て、平等に訓育を受くべきことを論じて、

禮記には天子の太子とはいへども、學宮に至り給へば、年長の下に座し給ふ

ことを志るし。又天子にものを教へ申すときは、臣下といへども、北面せぬといふことを志るせり。是にて古の教をかんがみるべし。幼より習慣する所を慎ましめて、いつの程にか賢明の徳を成就すること、苗木苗草の時より手本をそへ、力縄をはりて屈曲をふせぎ、良草良木の用を成就すると、異なることなし。

これ彼が訓育論の精神なり。

訓育の方法として、彼は先づ第一に師範を必要とせり。『もりかゝみ』にいはく、

教の道は、先づ第一に教る人の善悪邪正を撰にありて、幼弱當身の上をせむるのみにあらず。

『建學の大意』には、師長を論じて詳なり。先づ師長の任を説きて、『師長の任は、人に信ぜらるゝにあり』とせり。至當の見といふべし。

人に信ぜらるゝは、己が守りの堅固なるにあり。己が守りの堅固なるといふは、いつまでも同じことを退屈せず。人の信不信をとはず、勤行ふことなり。久しておこたらず、人の信は其中より生ず。己が天性なれば、せんかた

なしと、自身よりゆるしを出し、企て及び、俯して就るの修行をすてば、古人弦葦の戒は、美行とするに足らず。師長はまづ自弦葦を帶べし。

次ぎに教訓の方を說きて、

つよき馬は手綱をひかへ、弱き馬は鐙を入れて、才、不才もろともにすゝむやうに、心を盡すべきことなり。

といへるは、頗る教育の眞意を得たりといふべし。

能を教へ、不能を矜み、書生の成敗を己が任にして、孝悌忠信、仁義遜讓の行義を習慣せしめ。一館の父母となりて、善を成し、惡を掩ひ、厚に厚をかさねて、教化の道を補助することを、終食の間も油斷なく心得べきこと、師長の極意なるべし。

これ則ち教育家本然の任務なり。彼はまた師長の嚴といふことを說きて、教訓の方を嚴正にして、子弟に怠慢を生ぜしめざるにありて、面を四角にし、臂をはり、鞭をとりて叱咤責讓するにあらずといへり。

次ぎに教諭の方法に就きては、『學記』に詳悉せりといふ。彼の教授の意見は、こ

れにて粗ぼ窺ひ知るべし。彼は訓育の方法に就きて第一に師範、第二に教諭を説きたりしなり。

次ぎに被教育者たる子弟に就きて『建學の大意』にいはく。

在館中、別の奉公ともなし。書典に通じ、德藝にならひ、他日に上の用となるを以て今日の業とす。その勤め方は師長の教に從ふ外は無し。されば別に心得を論ずるに及ばず。

教育の場所に就きては學校を主張せり。學校に於ては定日に開講し、庶民僧侶登堂平等なりと唱へたるは平洲の卓識なり。されど當時の勢、自ら士人は主にして庶民は副たり。よつて藩學なき地にも教育を普及せしめむとて講學所の設置を爲すに至れり。「教學」にいはく

下民の材木を育つる政は、教導の官を備けて、曉喩の法を廣くするに若くはなかるべし。學宮嚴重なれば、よき奉行頭は、その內より生じて、人を愛する道を以て下を取扱ひ、曉喩の官四方に居て世話をやかば、その下より順從の民生じて上を犯す風はやむべし。君子學道愛人、小人學道易使と孔子も教

へ給ひけらし。

平洲は普通教育を以て國家事業とせり。これ彼の見地の益軒よりも進みたるところなり。

余は略ぼ平洲の事業及び論説を傳へ得たりと信ず。今此節を終るにのぞみ、更らに平洲が師道に關する主張を錄して、この光榮ある教育家を追慕せんとす。

平洲儒道の衰へたるを慨し、斯道の師表を以て自ら任じ、强志力行、その自ら持する甚だ高し。實に世の所謂儒者にはあらざるなり。師は道を傳ふるものなるが故に、王公貴人に對するも席を降らずといひ、人君は國の儀範なれば、自ら先づ師長を尊崇して、遜讓の德をなすべしといひ。特に世子は一國隆替の關するところなれば、專ら師傅を嚴にすべしといへり。『もりかゝみ』に

いにしへより、師傅の禮を尊くして、その威を嚴にし、日夜にその教戒を服受して、畏敬尊崇なる道を習慣せしむること、いにしへの三公三孤の設は是が爲なり。禮記には、天子の太子と雖も、學宮に至り給へば、年長の下に座し給ふことをしるし。又天子にものをゝしへ申す時は、臣下といへども、北面せ

ぬといふことをしるせり。是にて右の教をかんがみるべし。

また

師傅の禮を尊からしめ、その威を嚴にあらしめ給ふことは、先君の命爵を尊とくし、愛敬をあつくし給ふより始ることなり。いかばかり忠賢の士といへども、受る所の命いやしく、遇せらるゝ所の恩疎なれば、世子の畏敬をこすべきなし。

而して『建學の大意』に

然れども師長は、先聖の御側取次にて、その言は夫子の御意なり。三奉行まづ一月一次、講堂に參拜し、師長に敬侍して、恭遜の禮を崇し、弟子の行を勵すべし。こひねがはくば、學宮の體面を正すにたらんか。

といへるは頗る吾人の意を得たり。師長を尊崇するは、恭遜の禮を示す所以なり。師長の威信揚らずんば、何ぞ教育を施すを得むや。

平洲の師道に就き、更らに一の例證をあげて彼の補傳とすべし。

松山藩口碑錄。定國公御學問は細井甚三郎毎月定日ありて、講釋申上。甚

三郎差合等の節は門人塚田多門と云者代講申上、候由。此多門公に向ひ奉りて、常に足下足下と申し對話致せし由。公或時御側衆に甚三郎なれば可なれども、門人の多門此方を足下と申すは過當ならずやと御意有しとなり。燒野雉子。如來先生公(定國公)をして循々として善に導くに意あり。或公侍講中に少しく眠り玉へり。時に先生卷を納めて公今に至て御睡眠なり。如斯は實に無益の事なり。侍講今日を限りと辭す。公大に御困り被成、自今以後急度可改と謝罪たまふにより又續きて侍講ありしとぞ。

第十八節 平洲は師道を嚴持して德望一代に薰赫したるのみならず。彼が教育行政に於ける成功は、儒者にありては近古無比と云ふべし。先哲叢談に平洲が諸大名の間に信任せられて、多く國事の樞機に參したるが、歿するにのぞみて、門人神保行簡、泉長達等に命じて、諸侯及び諸太夫と往復したる一切の密書を火中せしめたれば、其詳得て知る可らずと記せり。國政の樞機とは如何。平洲は正風興化、富國强兵の第一事は、行政を整理して、非常の決心を以て萬事節儉を行ひ、而して教學の一事ことに之を振興すべし。これ則ち萬事の基なりとせり。平洲は此意見

を以て、諸大名の事情に應じて行政整理教育振興の方案を立て、これを遵奉せしめて着々成功したるものなり。請ふこれを證明せん。

出石藩の公族仙石內藏介久賢領珠子と號す。この人賢明にして學を好み、平洲に師事せり。當時出石藩も財政困難なりしが、內藏介が原岡部二太夫に與へて學費を論ずる書三通ありて、その中に、外の事は如何程にても節約して、學校の事は決して縮少せず前の通りに支出されたしとの趣意あり。備前岡山。肥後熊本。長門萩。伊豫宇和島。羽州米澤等を引きて例證とせり。この書は領珠子が興學の篤志を概言すべきものなるが、實に平洲の精神を繼承せるものなり。書中に曰、

當節御勝手向き御難澁に付ては御勝手向へ相懸り不申、面々部屋住の輩迄も自然と、その風に化し一統せわ〳〵敷風俗に罷成り、御役掛の面々は、其役筋取當り候所の取計に候得共、部屋住の面々、幼年の輩までも今日の利分を專らとして恥辱ををろそかに仕候樣に自然と罷成り士風も衰へ可申哉と此段は御同意歎かはしき御事に御座候。併し此所は世間一統の義、急には仕方も無御座、右の費を救候は學問武藝兩樣に可有御座哉。細井甚三郎な

ど紀州並に熊本米澤等の物語を仕候も紀州樣細川樣上杉樣抔にも右の處を被相含、御家中學問武藝の御世話猶又厚く有之候由。右躰の義承り候に付ても當節は猶更以て右兩樣の御世話、此上尙又厚く御詮議有之、一統相勵み學問所も此上繁昌仕候樣希御事に御座候。

彼は士風の齷齪拘泥に陷らんことを恐れて、敎育の振張を切望せり。而して敎育費中學賞の如き、本來諸事を節して始めて施行せられたるものにて、今更急に削除すべきものにもあらず。また削除したりとて左まで經費の足しとなるべき多額のものにもあらず。他に幾多も好き方法あるべしと論ぜり。

右被下物(學費)の義は漸く一兩年以前より相始り、尤も其節とても、當時同樣の御時節、諸向の義は萬事成丈け御取チヽメ御少畧の御詮議中に候得共、右被下物の義は、御家中一統學問修行の爲め武藝の儀も勵み所を以御取計有之候儀存候得ば往々格別御爲筋の事故其節御詮議の上、新に御取計も有之候事、左候得ば此節御減少被仰付候筋合にも有之間敷哉。其上學問所世話仕候面々並に武藝師範の輩右兩口の被下高、實に聊の義、右を半減に被仰付

候とも上に於て御足に相成候程の義にも無之。右にて御家中の面々文武修行の怠りに相成候處は格別の御損にも可有御座哉…………

仙石内藏介の論學賞第二書は平洲が諸藩の樞機に參して行政及び財政整理に伴ふに學政振張を以て第一急務となしたるを知るに尤も好き資料なり。書中にいふ。當細川樣上杉樣御兩方樣とも御代始之節は御勝手向甚だの御難澁。夫迄とても御家中御扶持等御借受も有之候處、御代始尙ほ又其上に御借り受等も有之、其外御幕方等の義は御格外に萬事御少略御家中始其外末々町在等御褒美等萬事の被下物類等も格別に御減少被仰付候儀に御座候得共、學校料等の儀は却て其節御增有之、學問武藝等の儀に付ては御物入之御厭も無之、專御家中之面々相勵候樣に御引立御坐候樣、細井甚三郞なども毎度申述候。かくて此意見は政府の採用するところとなれり。

先哲叢談記して、平洲が諸藩の樞機に參したるもの、其眞相傳ふ可らずとせるものは、その實學政の振張にあること、知るべきなり。近年佛人デ、モーラン英國民が蕞爾たる島帝國にして、覇を五洲に稱する所以を研究して、その堅實なる敎育に因

由することを唱へ、吾邦にても慶應義塾にて、その書を飜譯して獨立自營大國民と題し世に行はる。國民の强固なる發達は、堅實なる敎育に根底せずんばあらず。されば學政振張は國家繁榮の第一策なり。これ洵に昭々として、些の疑を容れざるもの也。然れども古來斷じてこれを行ふの政事家少なきは何ぞや。他無し。確信なくして勇氣乏しければ也。

第五章　寛政より幕末に至る。（其二）

第一節

元和偃武の後ち殆んど二百年、武家政治の爛熟と學術研究の發達とは、氣運の推移を默示せり。八代將軍は敎育問題を掲げて幕政刷新の一綱領とせしが、世上の反響は大ならざりき。寛政の世は享保の昔に比して尠からぬ相異を現はせり。文物諸般の發達は敎育の普及を要求し、一面には學風の下落、士道の衰替は直ちに學政の刷新に想到せしめたり。このときに當り八代將軍の孫たる白河樂翁公は節儉令及び學政振興の二主義を掲げて幕政改新の局に立てり。公の政綱は天下の喝采を博せり。今や學政刷新は人氣問題となりぬ。これより幕府の

滅亡に至るまで、時局の發展に伴ひ、教育問題はつねに人氣問題たりき。當局政事家も在野の志士も、其政綱を發表するに當り、必らず教育の振張を以て一綱領とせざるは無かりき。

樂翁公の學政振興は幕府刷新のためなり。固より幕府の命脈を鞏固にせんが爲めなり。公は不幸にして早く幕閣を退きしも、學政の振興は後繼者によりて遂行されぬ。寛政十二年(一八〇〇)三月の令に

學問之儀ハ御代々御世話被遊、就中元祿享保ノ間、厚ク御引立被遊候。今度於學問所御教育有之儀候條人々相勵候樣可致候。尤モ文武ノ道一致ノ事ニ候間、武藝ノ儀モ彌無怠可心掛儀勿論ノ事候。右ノ趣萬石以下ノ面々へ可被相觸候。

またいはく

此度昌平阪學問所御普請出來ニツキ、當夏中ヨリ兼テ被仰出候通リ御家人ノ輩御教育可有之候間學問修行ノ志有之候者ハ勝手次第可有入學候。委細林大學頭幷御目付小長谷和泉守羽太庄左衛門且尾藤良佐、古賀彌助へ承

合可申候。

一、於學問所定日ノ講釋幷ニ仰高門內ニテ日講ノ儀モ前々ノ通有之候間、承度面々ハ勝手次第罷越候樣可致候。右之通萬石以下ノ面々ヘ可被相觸候。

四月また令していはく

學問所稽古ノ儀御目見以上幷以下共通候テ學候儀可爲勝手次第候。部屋住厄介等ノ內修行ノ志厚ク寄宿致シ候テ稽古致度キ願ノ者モ候ハヾ可任其意候。

一、通稽古幷ニ寄宿願候共林大學頭且掛御目付幷御儒者ノ中ヘ申通シ候上自身學問所ノ玄關ヘ罷越姓名短冊差出可申候。……………

一、通稽古寄宿共、頭支配ヘ伺候樣ニテハ手重ニ相成候間、人々ノ了簡次第直ニ申込候テ挨拶有之上一通頭支配ニテ承置候樣可致候。

一稽古所ニテハ夫々定日相立、且每日素讀モ有之候答ニ候。

一、稽古ノ爲メ學問所ヘ相越候者ハ何レモ羽織袴ニテモ不苦候。三千石以上寄合ノ面々タリトモ供人省畧手輕ニ往來可爲勝手候。

一、近來物事手重ニ相成何事モ手數掛リ候風儀不宜候。學問稽古ノ儀ハ一統ノ爲ニ相成候樣トノ厚御趣意ニモ候間頭支配並父兄ノ者共モ得其意、諸事學問所限ノ儀ト相心得、外々ノ無差支樣取計可申候。

その五月また令していはく

昌平阪學問所仰高門内日講ノ儀朝四時ヨリ夜九時マデ前々之通有之候間天明七年も相違候通り聽聞の志有之輩は貴賤に不限罷越候樣可致候。右之趣向々へ寄々可被相達候。

幕府か學政を振張して、旗下の士風を刷新せんとする意氣込み想見すべきなり。かくの如く幕府は大名政治の維持に汲々たりしにも係らず。氣運推移の默示は着々これを否定せり。

氣運推移の默示

第二節　氣運推移の默示とは何ぞや。武家政治の爛熟と學術研究の發達とに加ふるに世界の大勢は吾國民を驅りて不知不識のうちに、武家政治を脱却せんとするの運動を開始せしめたり。武家政治は本と甚だ不自然なるものにして、人文發達の趨勢に伴ひて存立し得べきものにあらず。寛政に兩箇好對の三士ありて、

武家政治を維持せんとするものと、破壞せんとするものとの爭鬪を代表せり一は三博士則ち寛政の三助(柴野彥助、尾藤才助、古賀彌助)にして、一は寛政の三奇士これなり。(高山彥九郎、林子平、蒲生君平)請ふ余をして更らに詳かに氣運推移の默示を語らしめよ。

(一) 自由研究の發達

德川時代は哲學的思索の旺盛なりし時代なり。支那哲學は最も旺盛なりき。ことに伊物二子起りてより自由研究漸く發達して、箇人的聖權の束縛を脫せんとするものあり。仁齋は大學中庸を排斥し懷疑の極殆んど孔子の壘を摩せんとせしが、猶ほ論孟二書は宇宙間第一の書なりと云へり。徂來は孟子をも排斥せしが、孔子をば疑はざりき。儒者が孔子に對する崇拜は恰も宗敎的信念の如くなれりき。

これより伊物と程朱學派との論爭は激甚にして、隨つて折衷學派起り、次ぎて調和學派起りて神儒。儒佛。神佛。神儒佛。孔老佛。等を調和せんと試み、建設するところ無かりしとは言へども、哲學の比較研究は爲めに頗る進步せり。最後に

批評派起り、富永仲基の出定後語は衆教一致に近かけれども批評にとゞまりて建設するところあらず。服部蘇門の蘇門赤倮々は諸教を批評して、之を佛教にあつめ大乘非佛說を說けり。凡そこれ等の學派は世界の哲學宗教を比較研究し、その所說未だ哲學的思索の深遠なる域に達せずとは云へ、數多の學者中自ら多少の機軸を出せるものもありて、自由研究の精神は頗る發揮されたり。それ學問教育の事に從事せしは、主に儒生のみなりしかば、儒生のうちに發達せし自由研究の精神はやがて各方面と各階級とに分布し普及するに至れり。自由研究の發達は自由獨立の精神を涵養せり。

仁齋日札、害正道者二。曰穿鑿、曰附會。不免此兩者則正學不可得而明。穿鑿若漢儒易象五行災異之說是也。附會若宋儒以先天圖爲伏羲之作、以大學爲孔子之言而曾子門人記之、暨大學孝經同分經傳與諸數學之說皆是也。

〇天下之理到語孟二書而盡矣。無可復加焉勿疑。

古今學變序(伊藤東涯)先君子復古之見亦非一旦之頃遽放私言矣。服被性理之說者有年。始而崇信躰驗。中而辨論考證、因其一二可疑而觸類引伸曲暢

旁通。卒以有以今日之學非復唐虞三代之道。

勵志(佐藤直方)道之廢而不行猶擔物之捨置地上也……俗學之徒則路中之游手也。

弘道館記(徳川齊昭)恭惟上古神聖立極垂統……乃若西土唐虞三代之治敎資以賛皇猷。於是斯道愈明而無復加焉。吾祖威公實受封於東土、夙慕日本武尊之爲人、尊神道繕武備。義公繼述、嘗發感於夷齊、更崇儒敎。奉神州之道、資西土之敎。忠孝無二、文武不岐。學問事業不殊其功。敬神崇儒、無有偏黨

蘇門赤倮々、唯佛法ノミ天ヲ尊バズ。故に天上天下唯我獨尊ノ語アリ。且ツ欲天ヲ始メ色無色ノ諸天ニ至ルマデ是ヲ貶抑シテ生死ノ凡夫ナリト稱ス。夫レ諸敎此ノ如ク尊崇ノ至レルニ佛法ニ限リテカク大言ヲ吐クコト何如ト云フニ是其子細アリ。蓋其本意、諸外道ヲ壓スルニアリ　凡天竺ノ外道九十六種、其徒寔ニ繁シト雖皆是生天ヲ果トス……

○王元美謂ラク……予ハ反テ謂ヘラク其人天小乘ノ敎、四阿含等ノ如キハ其間或ハ一二眞ニ佛ノ金口ニ出タルモアルベキカ。凡ソ諸大乘經ハ皆

是レ後人ノ假託ナルベキコト疑フベキモノナシ……コレ皆後ニ漸々ト增加セルナリ。

○嗚呼今之講敎之徒、其能不搖尾於質、大磨牙於權小者幾何　甚至息自不辨、猜吠吠聲也。予拔擢乎旁觀、乃起而出一不手　佛衣亂衣所有衣變僞之奪之赤々倮々、不掛寸絲豈不愉快哉。雖然猶有殼滿子在、亦須剝皮割肉敲骨出髓始得。

神道哲學の興起

支那哲學旺盛の反動として「神道哲學」の興起を來たせり。神道哲學とは吾古傳說に本づける哲學にして吾國固有の國民精神の趨向を見るべきもの、今假りに之を目して神道哲學といふ。學術研究の發達するに從ひ、日本の神話、歷史文學漸明にせらるゝに及び、吾國にも古今に貫通する一種特有の雄大なる國民性ありて決して外國に劣れるものにあらずとの自覺心を喚醒し、國史國語學の發達となり、而して從來吾思想界を占領せし支那哲學の全盛の反動として、國民本來の性質は激勵せられて神道哲學起り、茲に國民思想の獨立を振起せり。この事業は儒者にありては山崎派水戶學派によりて唱導せられ、次ぎて國學者によりて發揮せられた

り。これ則ち國民思想が外國思想の抑壓に反動して起りたるものにて、程朱の學説に本づける教育制度に極力反對せるのみならず併せて日本固有の政躰を讃嘆追慕し随つて大名政治の崩壞を祈禱するに至れり。山崎闇齋は儒者の孔孟を尊崇するは猶耶蘇の天主に事ふるが如し、この山崎嘉右衛門は儒者なりと雖も孔孟の徒相率ゐて我國に來寇しなば討手の先鋒承りてこれを討ち破らんと云ひ、吉川惟足は儒は孝を以て五倫の第一とし侍る吾國は忠を五倫の第一とし侍れば君道を人倫の最上と教へ給ふ、故に忠義を以て五倫の本とし侍るといひ、本居宣長は學問して道を知らんとならば先づ漢意漢習を除きて後ち古意を得べし、抑も道は必しも學問して知るにあらず生れながらの眞心なるぞ道にはありけるといふ。何れも皆な國民思想の獨立を皷吹するにあらざるは無し。殊に篤胤は大膽なる雄辨を以て、日本の神話にて世界の創造を解釋せんと試みたり。その説にいはく

一。日本は萬國の祖なり。

外國どもの初めは二柱の神大八洲を生み玉ひ、國土と海水と漸く分るゝに随ひて彼處此處と潮沫自ら凝りかたまりて合たる土の大さにも小さくも

成れるもの也。是はた産靈神の産靈によりて成れることは齊しけれども外國は二柱の神の産み玉へる國にあらず。これ皇國と初より尊卑美惡の差別の分るゝところなり。……この梵天王と申すは即ち産靈神の御事をかく申傳へたもので御座る。

二。日本天皇は萬國の主なり。

大御神の御言に豐葦原の瑞穗國とのみ詔へるは其都し坐す地を以て宣へるにこそあれ、實は速須佐男命に青海原潮の八百重を知らせと伊邪那岐命の依さし玉へる御言もこもりて畏しなど申すも更らなる御詔にぞありける。これを思ふにも我天皇命はしも産靈神天照皇太神の御孫に坐すが上に斯る御詔れの坐すなれば青海原潮の八百重の留る限り此國に有りとあらゆる百八十國々を悉くに知ろしめすべき大君に坐ますこと灼然たり。

三。神道は萬國の道なり。

さて皇御孫命の御代に其皇産靈神の御依しませるまに〳〵己れ命の御さかしらを交へ給はず政賜ふを惟神の道とは言ふなり。……うべ吾皇大

御國の古傳の正實にして眞の道の傳はり又古語の麗はしく世の聲音も言語も雅みにして、萬國に比類なきことよ。其は專ら皇產靈神の御言を伊邪那岐美神の御代より言繼ぎ來り………

これ外國思想の壓抑に反動して起りし國民思想の勢焰の絕頂に達したるものなり。本居大平は篤胤を評して　地のあらむ限り外國殘らず世話燒きて殘らず此方の手に入れる趣向と思はれ候。扶桑國考の推方にては印度國考も佛どもを殘らず皇國の神なりと說くならんと推量せられ候といへるは當れり。神道哲學の勃興は幕府の學政を顚覆するに足れり。

自由硏究の發達は歐洲學術の輸入を促かして、吾思想界は著るしく開拓されたり。安永三年(一七七四)出版されたる解躰新書の後ち、一般に橫文の硏究公許されたりといふにはあらねど、いつとなく海外の思潮を汲む者多くなりゆきて、蘭學者の泰斗たる大槻磐水等同志を會して太陽曆の正月を祝し稱して「和蘭正月」といへり。これ實は漢法醫が神農祭を爲せるに對抗せるものといふ。この蘭學者會盟の圖今に傳へて大槻文彥氏の家に存す。衆大卓をめぐりて坐す。或は洋服を穿

ちて倚子に倚れるもあり。多くはナイフ或はホークを手にして食事に向へるが、光景宛として西洋的也。これを彼の護園讌集圖と比較せば、則ち思想界の變革を見るべき好資料なり。蘭學者は多くは「醫者坊主」なりしが鎖國の島帝國にありながら、ひとり五洲の形勢を略ぼ窺へるを以て意氣甚だ盛んにして、磐水の如きは亞細亞人の印を用ひたり。彼等未だ思想界を占領すること能はざるも研究の漸次進むに從ひ勇氣愈加はり早晩思想界の大勢力たらんとするの氣勢すでに微見せり。洋學の勢力は地下の水の如く思想界の地盤を浸潤せり。儒者の中にも、ひそかに洋學を攻究して泰西の思想界を窺はんとするものあり。帆足萬里(嘉永五年一八五二歿、七十五)は蘭學を修め、和蘭窮理通を著はして泰西理學を批評せり。また武元登々庵は古詩韻範を著はして名を得たる人なり。しかるに岡山に傳はれる彼の書束によれば、彼れ蘭學を窺ひ、同志と岡山にて蘭學研究會を開かんとの志ありき。

舊冬小早川生に託の書、當正月末廿日市(安藝)相達辱致披見候。彌御清勝御學家無恙の條承知仕、大に慰客想申候。私事無事に而舊冬より廣島の西廿

日市と申所に滯留致居候。舊臘は宮島へ參越年珍敷春を迎申候。私も中井原澤と申醫、蘭學精敷人に而、舊冬より又々蘭學修行蟹行書も餘程覺、眼科療術秘書等相寫候。誠に奇々妙々に而初而眼を開申候。是に依而漸々蘭學の志長し、日東に而飜譯の蘭書八千枚ほど有之、此寫業に相かゝり一兩年は中井氏に隨從の積りに御座候。然處同人東都の志有之、是も元來は長崎へ參候へども、東都の權勢をかり、且ほ黃金の勢力をかるので無ければ通詞など心一ぱいに使がたくなど相聞候。夫に付き私も先づ長崎を延引致し又東へと相戾申可相談に此間決着仕候。愚存には何卒備前に而蘭學社中を募り當年中滯留致候樣の御斗、其內に書寫業成就仕度候。私如き懶惰の男八千枚の寫業に取かゝり候程の事能々の事と御推察可被下候。

二月廿三日　登々菴

與兵衛　殿

この書は岡山の史家山田貞芳氏の所藏なるが、惜むらくは年時を詳かにせず。今暫らく書中の文意によりて按ずるに、登々菴の長崎行以前にありと

すべきか。さすれば彼れ古詩韻法を淸人朱絲池より學得たるより以前の事にして彼の長崎行は蘭學修行の爲めなりしか。果して然らば、彼如き知名の儒士にして、蘭學の志篤き、その造詣を暫らく措きて、近世本邦に於ける洋學發達史に一名士を加へ得たるなり。

この書柬、眞に氣運變遷の默示を知るべき絶好資料なりとす。蘭學眞に開眼といひ、私如き懶惰の男八千枚の寫本すといふ、皆以て泰西學術が漢學生を警醒したるを見るべく、また以て不知不識のうちに漢學生が泰西の學術に開眼しゆくを見るべし。

若しそれ儒者が譯書によりて泰西思想に開眼し、自由研究の精神を昂進せしめたる功果に至りては頗る大なるものあるべし。漢學生の長崎に行く者漸く泰西の思潮を汲みて歸る者多くなりゆけり。山陽の佛朗機王歌、那翁一世を咏ずの如きは、その一斑を見るべきもの。廣瀨淡窓は豐後日田に咸宜園を開きて西陲に雄視せり。拆玄及び義府は其傑作と稱するもの。義府は一名放言と題し、經書に對する懷疑の精神磅礴せるが。その內の無神論の如きは、泰西思想の影響にあらざ

るやを疑はしむるものあり。

形體猶薪、神識猶火。形亡而神散。猶薪盡而火滅。骨肉委土、猶薪爲灰。精神歸天、猶火滅而餘烟在空也。烟氣在空、受風則散。以物籠之、乃可持久。宗廟之設、爲是也。渙之象曰、王假有廟。合渙散之道也。

それすでに開眼せる者は識見自ら公明ならざるを得ず。此に於て平事物然る所以の理を求めて之を徵するに心を以てして安んぜざる所あれば舊說と雖も亦疑ふに至るべし。從來「雲表にありし聖經」も亦これを疑はんとす。何んぞ況んや程朱の傳註をや。かくの如くにして自由研究の進むと共に、國民自由獨立の精神はますます涵養さるゝなり。

（二）藝術の神聖

文物の發達するに隨ひ、藝術に對する社會公衆の觀念も著るしく變遷せり。文學を以てこれを言へば、黑表紙本は一卷五文　黃表紙本は一卷五枚、一冊六文二冊物にして十二文位なりしが寛政の末年洒落本流行を極めしころに當り、書肆よりはじめて作者に草稿料を贈ることゝなりぬ。このころより讀み本も一卷紙數十

五六枚の乃至二十枚、九行若くは十行挿繪は毎卷二葉までにして、全本五卷として價五匁許となりしが、享和年中に至りては袋入の上本出でぬ。この上本は綴入紙に摺り立て紙面も大にして標紙も厚く剞劂精良にして、その製本の美なる古來未だ有らざるところ也。評判記には、以て王侯に呈すべく、また兒輩の玩弄すべきものにあらずといへり。文化年中となりては、小説作者、名を署するに戲作の戲字を省きて單に作とのみ書することゝなり、有名なる作者の双紙は七八千部乃至一萬部を發兌するに至れりといふ。これ文運の進歩といふべきも、士君子は猶ほ小説家を視ること書畫家の下にありて、書畫家は、また品位遙かに儒生の下にをかれき。然るに今や自由研究の精神進むと共に書畫家もまた徒らに「伎能之士」を以て自ら屈せずして藝術の神聖を唱ふる者出で來れり。

中田善七(田善)は司馬江漢と共に樂翁公の命によりて油繪銅版を學び、遂に本邦銅版術の鼻祖となれるが、彼自ら亞歐堂と號して高く標持せり。葛飾北齋は浮世繪の巨擘なるが、彼の畫中には蘭畫の法を傳へたるもの少なからず。これ等の士、心眼を開けること此の如し。彼等豈に地歩を占むること無くして已まんや。田

能村竹田は文人畫家にありて一機軸を出せる者、彼は清麗の文章を以て藝術の神聖を唱出せり。竹田は本と經術の士なり。文化十年(一八一三)年三十七、大に憤慨するところありて、また經術を修めず、去りて畫に隱くれたる者。彼頗る小品文に長ず。山中人饒舌及び自畫題語は、その清秀なる氣韻を傳ふるもの。山中人饒舌にいはく

世或視畫以爲無益。蓋未會其趣耳。夫畫之爲趣、恍兮惚兮如高壑如深谷、初望之覺無路可入。久之熟玩、如仙子從空而下、顧我指示。濛々際溟々裏、妙境闢奇景出。樓閣參差、徑路盤曲、絳節羽幢容與其間。花草薰馥禽鳥和鳴、朝夕披對、愈久愈熟、則心自靜。心靜而意自愜。嗜慾消焉、聰明生焉。不可動之以名利也。從是以往仁者樂壽境亦爲不遠。文衡山先生壽考。人以爲平日寫雲山之所致。但可爲知者道。彼以爲無益。未會其趣耳。

またいはく

論者必曰、畫有補世教。典故事蹟使人能知所勸戒也。夫今人所寫人物則必聖賢貞烈乎。山水則必山海地圖乎。屋木則必張華漢宮乎。器財則必三體

興服乎。我恐不能必然也。然則果無益乎。夫晉唐以來、名卿逸士、明窓淨几寄興寓意。後人傳之爲至寶。或謂之士夫之畫、或謂之文人之筆、豈無以哉宋宗炳畫山水序曰、閒居理氣拂觴拭琴。披圖幽對。坐究四荒、不違天勵之叢獨應無人之野。峰岫嶢嶷、雲林森渺。聖賢映於絕代、萬趣融其神志。余復何爲。我暢神而已。神之所暢孰有先焉。蓋神之暢、不專於山水一途。所南之於蘭、雲林之於竹、亦各從其所好而暢耳。

これ豈藝術の眞趣を解せるものにあらずや。この氣韻清秀なる畫家は幸にして、近世の通儒たる山陽外史と默契せり。山陽は開眼の士なり　自書題語中に繪事を僻愛して苦心從事すること殆んど五十歲。這裡得るところの消息知る者は山陽一人なりとて山陽にあらずんば吾書に題せしめずといへり。

書亦復一樂帳後。

余寓山陽家數日。山陽一日早起掃除書室、插花焚香、掛吳春坡山水幅、自汲鴨水貯之古甕甕、洗古端研磨程氏墨、陳佳筆紙。並平日愛藏所不妄用。其他研屏筆架諸具悉稱焉。一々親辨、不敢煩使童婢使其觸手矣。既畢招余曰今朝

供養結搆如此。請爲吾書。余即作白描蘭竹沒骨牡丹及草筆水仙梅花二頁。今頁中所收是也。昔者危大僕袁凊容諸家之待雲林大痴亦恐不能過於此。殊覺慚愧。姑錄記辱知之渥矣。

「山陽先生書後題跋」は政治歷史及び藝術を評論し、文壇に生面を開けるもの。竹田と相俟ちて藝術の眞趣を發揮せり。

（三）尊王論

尊王論の出て來ること久し。水戶の大日本史及び敬義學派の靖献遺言等ありて、これに次ぐに竹內式部山縣大貳等の實行を以てして、尊王賤覇の說すでに久しく天下志士の心頭に上れり。然れども寛政の幕威中興に際し、尊王の事容易に成就す可らざるの形勢となり、高山彥九郞の如きも亦東西奔走單に遊說するのみにとゞまる。されば尊王論の興起は大勢を動かすに足らざるかといふに決して然らず。最早や竹內の如き破天荒の企圖をたつる者無かりしと雖も、學術の發達は國史の智識國體の觀念を普及せしめ、漸く地盤を浸潤せんとせり。三條橋上に大內裏を伏拜したる草莽臣高山彥九郞のみにあらず。出石藩の公族仙石內藏介も

滯京中は毎晨紫宸殿前に至りて拜せりといへり。關東一布衣蒲生君平が山陵志を修めたるのみにあらず。官儒柴野栗山も畝傍に至りて感慨の涙を灑げり。老中白河樂翁公は政略より割出したりとはいへ大內裏を新造して近古未見の美觀を具へたり。大勢すでに此の如きときに當り奇傑高山彦九郎筆硯をものうしとなし、一劍骯髒として海內を周遊し、絶群の膽略と雄辯とを以て到る處に尊王賤覇を唱導し、備さに世路の艱難を嘗めて一代の苦節を盡くす。彼は躬を以て大勢を撼かし得たるなり。

余先年資料を求めて久留米に至り、高山に關する逸話を聞けり。その一に、彦九郎途中にて藩士に逢ひ、彼處にある神社は何ぞと問ひしに、士人秋葉宮なりと答へしかば、彦九郎大に怒り叱して曰、秋葉宮東照宮是れ何の神ぞ。皇族にあらずして宮と稱す何等の不敬ぞや、士人大に駭き怖れきとぞ。彦九郎京都に學校を建てゝ華族の教育を興さんと企て、大坂の中井竹山とも談合せしことありしが、見事に竹山の爲めに出し拔かれたり。竹山は深く心を幕府を寄せし者にて、樂翁の信任を得たり。この失敗は彦九郎に取

りて遺憾已む能はざるところなりしなり。左に載する一話の如き、彼が南船北馬の間にも教育の企畫を捨てず、意氣千軍を掃ひて而かも優にやさしき志あり、また以て彼の補傳とすべき美談なり。惟ふにこのとき彼薩摩領より北歸せんとして心再來を期せず。櫛風沐雨數百里を超ゑて携へ來れる額面を留與して去る。その志洵に哀れむべからずや。

高山彥九郎薩領に入らんとして去月番所(今の山下)にて遮ぎられ「薩摩人如何にやいかに刈萱の關もとざさぬ御世と知らずや」の一首を殘し、決然袂を拂て引返し、日向路を往復せしことは汎ねく世の知るところなるが、その際に殘されし一條の話柄あり。日向宮崎上野町弓削遂氏の曾祖父に當れる人は當時土地の學者にて、文人墨客などの此處を往來する者は必らず訪問せざるは無く彥九郎も來りて刺を通じ、一見舊識の如く、それより弓削氏方に起臥して暫らく閑日月を貪る程に、同氏の紹介にて當時城ヶ崎の富豪にて新町に甍嚴めしく構へたる南村六兵衛氏の家にも時々往來し、酒を被りて高談放論宵を徹せしこともありとか。同家の言傳ふるところに據れば

彦九郎當時の所持品中目につきしは刀の鍔にて、名工後藤の千匹猿を大小ともに嵌め居りしとぞ。又南村家の懇親の間柄なりし同處の安藤團助と云へる家にも折々往來して嘗て鰹魚の下物にて椽に腰かけたる儘十分に飮食せしこともあり。そのころ弓削家の下は水漫々たる大淀川の渡場なりしが或日彦九郎が城ヶ崎に往來するに際し、船頭不馴にて船足非常に遲かりしかば例の癇癖堪へ難く船頭を大喝せしに、其聲巨鐘の如く船頭は震慄して顏色を失ひしとなん。かの山中にて賊を叱せし話も思ひ合はさるゝぞかし。されば弓削家に於ても珍客として丁寧に取扱ひしも例の飄然自適にして勤王の一事に狂せる彼は留るを欲せず　去るに臨みて一篇の額面を取出し、此後當地に於て兒童を敎育する校舍の出來なば、これを其處に懸け呉れよとて

　繰り返へしかへす〳〵も玉鉾の道を學びの窓開けなん。

の一首を短冊に認め添へて弓削氏に贈りたり。その額面は岩倉具撰の筆にて　文行忠信　とあり。其後弓削氏の親屬の家に傳はりしを此程再び

同家の手に歸りたれば同家にてはこれを何れの學校にか寄附して高山の遺志を果さんとて準備中なりとぞ。

（三十四年十二月　大阪朝日新聞）

その後ち山陽の日本外史飯田忠彥の野史出づ。ことに日本外史は日本政記、通議、新策等の書と共に盛んに海内に行はれて、漢學生の略ぼ國史を知り、國史の興味を感ずるに至りしは此書の力なりと謂はんも可なるべし。當時の漢學生は假名交り文を讀むことを嫌ひしは、この書の廣く行はれし一因なり。外史は國躰を辨明し、大義名分を正すを以て目的とし、これを行るに欝勃の氣、俊爽の文を以てす。古來本邦の歷史の文章此書の如く優秀なるはあらず。山陽また日本樂府を著はして國粹を歌ふ。彼の詩は國民精神の獨立を皷吹す。措辭の巧拙、事實の精疎は非難を免れざるものあれども、古來彼の詩文の如く國民に愛誦されたるものはあらず。野史もまた考證の盡さゞるもありと雖も彼れ國躰を明らかにせんが爲めに樓上勉强凡そ二十餘年　拮据經營、獨力よくこの大事業をなせり。精力過絕なりといふべし。

(四)　海防論

洋學開けて海外の事情略ほ識者の間に知られ、天明寛政のころより邊警先づ北門に生じ海防論起り敵情を詳かにせんが爲めに地理の學勃興するに至れり、このころ我邦はすでに内に思想界の變革を來たせるに當りて、世界の形勢日に變じ、洋流の餘波澎湃として吾海岸を拍ち來れり。その影響するところ國民一致の精神を涵養し、三百諸侯の藩籬を撤して、國を打ちて一丸となさしめぬ。

日本橋下の水は歐洲に連る。航して直ちに龍動城下に至るべし。海防論の先驅林子平は、かく言へり。彼は海國兵談三國通覽を著はして罪を得たるが、樂翁公がこれを罪したる理由は無根の説多しといふにあり。されど公も亦地理には精しからざりき。司馬江漢が言ふ、白川侯は博學敏才にはあれど地理の事に於ては未だ究めざるに近し。蝦夷地に於て魯西亞と交易の場を開くときは彼地自ら拓くべし。長崎は千里の遠路なりとて寛政五年魯船蝦夷地に來りしとき、公は長崎に來るべき信牌を與へたるの迂を論ぜり。邊警は北方の魯西亞より始まる。寛政のころよりオロシャの聲漸く高く文化年中に至りて近海漸く騷然たり。人始

めて子平の先見に服す。蒲生君平の幕府に上書せるうちに、宜しく酒を子平の墓に酹ぎてその靈に謝すべしといへり。これより志士氣を負ひて北游し、北辰直下建銅標の雄圖を試むる者出づ。間宮倫宗、近藤重藏の如き高田屋嘉兵衛の如き皆な倜儻雄傑にして國民精神を作興するに足る。かくて學界に於ても外國の地理歷史は先づ魯西亞の研究より開けたり。國民北進の鋒鋭ならずとせず。然かも幕府これを抑へて伸びざらしめ、久しく北境を未開に委せり。豈惜む可らずや。

環海異聞(大槻磐水)オロシヤと云ふ名は近き安永天明の比よりして、地は何れの方角といふ事を辨へねど、人々口にすることゝなりしが、是は白石翁の五事略にムスコビヤの事也。近世百餘年來其國新たに興りて亞細亞細洲止白里(シベリヤ)の諸大國を併せ、其盡境カミシヤーツカに至る。從て近時吾東北蝦夷諸島にも其人來往す。享保元文(一七一五―一七四〇)の頃よりにや松前地方の人々彼等をさして赤蝦夷赤人など呼べり。是を聞傳へし兒女に赤蝦夷といへる名よりして、これは恐ろしき鬼人にてあるやと思ひ、又蝦夷はもと人類の外なるものゝ樣に心得し故、其奥の地なる赤人とは彼の地獄の

繪に見ゑし赤鬼などいへるものにやと恐れ怪みしもありとなり。然るに此人魯西亞人たるを傳へ横なまりて唱へ、又ヲロシヤ〳〵と何となく呼ばるゝことゝなりしは三十有餘年前明和の頃の事なるべし。もと其國は萬里外の地なりしに今は東北蝦夷の奥なる島々まで併せたれば知らず〳〵遂に近隣の國となり海上十日をも經ずして到るべき近地とはなれり。

魯西亞は「海上十日をも經ずして到るべき近地」とこれ豈研究せざる可んや。本邦にて外國地理の學は新井白石の采覽異言、西洋紀聞に剏じまり、明末になれる職方外記。坤輿外記の二書あるのみなりしが、山村昌永の西洋雜記等出るに及びて荒唐の説も多けれども稍彼の詳を知るに至れり。齋藤拙堂いふ。明人得職方外記始知有五界萬國。其説猶屬草創。其後二百餘年以至今日。清人説五界猶據外記。不知有他書更詳者。何其陋也。我邦人每事承於漢土。唯地理之學、直承於西洋。勝於明清人遠矣。

當時魯西亞研究に關する邦人の著譯書を示さんに

漂民御覽記　一卷

北槎聞略　十一卷附錄一卷、　寛政五(一七九二)　桂川甫周

右は魯船蝦夷地に來り伊勢漂民磯吉幸太夫を返して通信を乞ふ。將軍家齊漂民を吹上苑に召見す。又侍醫にして蘭學者たる桂川甫周をして兩人に就きて魯國の風土を記さしむ。

魯西亞志　二卷　桂川甫周

魯西亞本紀畧　三卷　前野熹

文化元(一八〇四)山村才佐、魯西亞國誌譯述の幕命を受け、業半ばにして歿す。甫周蓋しその業を繼げるもの。後者は齋藤拙堂の輶軒書目に長崎譯司前野熹の譯になるとす。熹は則ち良澤なり。長崎譯司にあらず。余未だこの書が良澤の手になりしやを詳かにせず。

環海異聞十六卷、　文化二(一八〇六)

北邊探事　文化三(一八〇七)　大槻磐水

前者は仙臺侯の命によりて仙臺漂民につきて魯國の風土を記したるもの。

後者は蘭書中より魯國の事情を纂譯したるもの。

魯西亞來朝記　一卷

魯西亞人渡來記一卷　　撰者失名

輶軒書目によるに、魯船かつて伊勢漂民及び仙臺漂民を送りて來り互市を乞ふ。二役國家の事に關係す。二書皆な當時國書文案及び諸雜事を錄す。亂雜章無く事に重複もあれども亦以て參考に供すべきもの

北地日記　一卷　　備中　久保田見達

北槎小錄　一卷　　江戶　設樂間叟

二書共に文化四年(一八〇七)魯人北地に寇せし紀事にして、著者實地目擊の實錄也。齋藤拙堂曰ふ。余ときに廿餘歲江戶にて、その顚末を稔聞せしが、多く二書載するところと合ふと。

魯西亞交易論　二卷　　馬場佐十郎

幕命を以て蘭書中より抄譯したるもの。文政のはじめに成りしものなるべし。

東韃紀行　二卷

銅柱餘錄

北蝦夷圖說

齋藤拙堂言ふ。世に東韃紀行を以て間宮倫宗の自著となす。余は倫宗を識れる故に此を以て問ひしに、こは奉行所書吏吾が話說を筆錄せるものにて吾自著にあらず。吾別に自著十五卷ありて、筐底に秘すと。因て借寫せんことを約して未だ暇あらずと。他二書はカラフトの風土志。

遭厄日本記事　十二卷　ガロウヰン ｝
附　錄　二卷　文政八(一八二五)　リコルタ ｝原著、
諳烏爾陳情書　一卷　モウル ｝

文化八年魯船デアナ號蝦夷に來る。船長ガロウヰン副船長モウル以下八名を捕へて松前に幽す。十年(一八一三)リコルタ國命を以て來り、囚人を換へて歸れり。この書は彼等幽囚中の記事なり。この書歐洲に廣く行はれ、獨逸にて一譯し、和蘭にて再譯して我邦に傳はる。幕府通詞馬場佐十郎に

命じて飜譯せしめしに、中途にて死せしかば、青地林宗つぎて功を了へたり。陳情書一卷は通詞村上貞助の譯すところ。馬場村上共に魯囚に應接したる者、記事中に其名見ゆ。拙堂言ふ。當時の事、吾國にても筆錄せる者あり、かつ從事の吏士猶ほ都下に存するを以て、これと詢るに、この書の記事と吻合す。余此に於て歐羅巴人事に於て精細なる、東洋人の及ぶところに非るを知ると。近年海軍省にて遭厄記事を訂譯して日本幽囚記事と改題せり。

北地危言　寬政九（一七九七）　大原小金吾

この書は書躰幕府の執政に上れるものゝ如し　その議論中頗る觀るべきものあり　赤夷防備の議論中白眉を推すべし。そのうちに

當代第一の急務は赤夷の侵掠海岸御手當にあり……何時たりとも襲ひ來るを待つ姿の御手當に候……外寇は各大名限りの敵にあらず、天下の讎に候間、天下の人の勢力を盡して之が備を練習候はゞ外國にも勝れる妙計奇術も生じ可申候。諸侯各々自國の功を貪り、善き事も秘して他に傳へざるは古來の士風に御座候が、官より篤と命じ、此弊第一に除かれ度候……

五百石以上の舟は悉く蠻制に習ひ作らしむべし。……蝦夷地は松前二百の兵を以て守るも赤夷の强大を以て之を取らんと欲せば、嚢中を探るに齊しかるべし。然るに未だ取らざるは本邦の大幸なり。此間に土を開き備を張り、蝦夷を敎化して我民と爲し置くべき時相逼り申候。後に悔ゆとも甲斐ある可らず。天地の氣運逼ること既に此の如し。先んずると後るゝと存亡の機にかゝわり申候。北方永鎭の堅城は今松前主の居城福山たる可らず。舟を艤する所せまく土地不便也。松前の東の方に箱館村と申し灣曲して海水を抱き其形一つ巴の如く風濤の愁無く、土地平廣にして誠に永鎭となして居を占め化を敷くべき地に相聞へ候間、早く此地へ居城を移し、堅固壯麗蝦夷の目を驚かし遠く赤夷に備あるを知らしむべし。これ松前一主の爲めにあらず、天下の御爲めなれば唯今の内に御加恩有之度候……追々カラフトの邊人民繁庶するほどに相成候はゞ此所一大繁華の大港と相成るべし。

野叟獨語　文化四(一八〇七)　杉田玄白。

この書、洋學者の識見を見るべきものなれども、洋學者の勢力猶ほ世を動かすに足らざりしは惜むべし。書中にいはく

ヲロシヤは常に軍事を操練し、扨て國は若し人にて言はゞ血氣壯の最中にて唐土にても毎々手ごりせし韃靼にも切り勝ち清朝とも戰ひしとなり。……詰るところはシツコキに退屈し、遂に和議を結び韃靼地の邊境、黒龍江といふ所に分界を立て今は互に交易なすとなり……

その神風いつも當てにはなる可らず……

その中、魯國は……前にも申す如く元文初年より志を起し、巡撿の船も其頃廻せしと見ゆれば久しく此地の事を窺ふと見へたり　これによりて延享寳暦の初より彼領へ漂流せし船頭等其地にて撫育し、文字言語も稽古致させ候由　是五十年餘の事なり　今は今日の如く可なりし和議の書翰も送らるゝ程とはなれりと見ゆれば又急度間者といふにはあらざれども安永の頃阿蘭陀人江戸拜禮の節附來りし醫師の「トインベルゲ」と申者は伊勢の幸太夫歸朝の節は彼新都にて醫學校の頭役勤にて有し由……全躰は

物産吟味の爲とて蘭船に便り東方諸國を通歷せし由なり………齋藤拙堂を儒者にして、意を外事に注げる者なり。輶軒書目を作りて、自家所藏の外國地理歷史書の解題をなせり。すべて五十三部百九十七卷。その中魯西亞に關するもの十四部五十七卷。以て當時魯西亞研究の盛なりしを知るべし。

言論の旺盛。

海防問題は洋學者を驅りて學界紛爭の渦流に投じぬ。和漢學者は尊內卑外の見を持して多くは鎖國を主張し、洋學者は海外の大勢を論じて開國を說き、兩者氷炭相容れずして互に正邪を以て相目するに至り、洋學者は一時非常の壓迫を受けしが、世界の大勢日に東漸して、開鎖は一轉して尊攘問題となり、再轉して尊王討幕となり、學者各その識見を以て國民の愛國精神を皷舞し、時局は急轉直下の勢を以て變遷し、遂に武家政治の顚覆を見るに至れり。

（五）言論の旺盛

寬政以後言論の盛んなる寧ろこれを處士橫議といふも可也。何となれば活潑大膽なる思辨をなしたる者は多くは浪人なりしを以てなり。武家政治の末運は

武士の衰弱を來たし、世祿の武士物の用に立たざるやうになれり。杉田玄白の野叟獨語に武家の情弊を曲盡せり。いはく

今日武家の情態を見るに二百年近く結構至極の御代に生長し、武道は衰へ果て御旗本御家人等も十か七八は其形ち婦人の如く其志の卑劣なることは商工人の如く士風廉恥の意は絶えたるやう也　其中にて能き分は武藝を嗜むと申し、弓馬槍劍は心懸れども是を以て立身出世御番入の元手とする了簡にて物の師匠に阿り諂ひ頭前を拵らへ見分の節に至り仕合せ能く尺二の的を射はづさず、又猫の樣に仕入れたる馬に打ち跨り、地道落ちなく仕終すれば其功にて御番入立身し、其專ら志すところは數代の奢りに長じ摺り切たる身代を御役料や御番料の御蔭を以て取直さんと思ふ計り也又左なくば何の分別も無く歌舞伎芝居の大將殿同前に一幕なりとも人に尊敬されたき望みまでなり。

武家柔弱なる證據は御鹿狩の時、數日間繫ぎ置き眼を縫ひ候猪を捕ふるにさへ暇乞して別の盃取かはすやうなる振舞なり。その外小普請の輩は朝

夕に唄淨瑠璃、琴三味線歌舞伎もの眞似に日を暮らし善き分か茶湯生花又鳥飼植木を內々商賣する迄の事也。個樣の者何萬騎ありとも物の御用に立べからず。又大名も同じ事にて世間附合外見を專らにし、知行の米金を江戸へ持出して一年限りに遣ひ捨て、衰弱至極の世と謂ふべし。

武士の元氣は浪人處士に集まれり。北地危言にいはく、流義の偏固なる氣習を離れ漢法蠻法を問はず其道に達し候知士賢者を探り、求め候はゞ都下に糊口する者山中に身を隱す者も殘り無く國恩に報い可申候と。これ異學禁を含みて言へるなり。熊澤蕃山言へり、後の武家は貴を以て賤をつかふと。此の如くして、浪人處士安んぞ出て事へんや。武家政治爛熟して、階級を貴び流義を擇ぶ。人心漸く覇政を離れんとして、天明寬政以後の思想界に於ては浪人の勢力は汎濫橫溢を極むるに至れり。

蒲生君平は山陵志を作りしを以て譴責を受けしに、彼れ抗辨して屈せず。答申書に御歷々樣は天資高明にして大義には御曉き者と奉存候とて幕府を飜弄し、さらに、その書は竊期不朽とて氣を吐けり。林子平の上書には國政は人才を得るこ

と第一にて流義は入り不申候。たゞ博く讀書仕り治亂興廢損益得失を知候得ば自然才智を生じ候故に學校へ書籍あまた入置きて人に擇ませ讀書仕らせ候事學政の主意に御座候……當時日本は武備と申すものなきと同前に罷成候。そのわけは武士大樣上品に罷成みな弱手にて公家などの樣に罷成候……外國より萬一不意の變生じて練切りたる兵馬押掛けられ候はゞ、日本は破竹の如く崩れ可申候えば何分日本天下中の兵馬調練致度候といへり。本多利明の西域物語に至りては奔放制す可からざるの勢あり。國初以來支那の書のみ讀みて國勢の推移をも知らざるを罵倒し、北方の急を說きて寛政九年諳厄利亞船（エトモ東蝦夷）へ來り蝦夷屬島のロシヤに奪取らるゝを見て日本人は煙草計り吞み午睡して月日をくらすならんとて笑へりとぞ……と述べ、遂に日本北移說を立つ。日本の國號をカムサツカの土地に移し、今の日本を古日本と改稱し、カムサツカに假館を造り人材を派遣して北方の經營に任ずべしといふ。佐藤信淵は帝都北移の說を立て、今の京都を江戸に移し、諸藩を撤去し、鎭臺を置きて國防に當らしむべしと云ひ、眼中更らに幕府無きに至る。言議往々荒洋自ら快にするものありと雖も、思想自由

地方教育不振の原因

活潑にして超脱の見を具するもの尠なからず。國民生々の氣は浪人儒者によりてあらはれぬ。

第三節　地方教育不振の理由は凡そ三あり。

（一）大名財政の困難、

參覲交代と、領内に於ける紙幣發行の自由とは大名の財政をして、つねに困難ならしめたり。昇平二百餘年、奢侈の風長じて彼等は愈困難を極めたり。

江戸見分錄。今の諸侯に財足れる者無し。奢侈習となり費用古に十倍せり……窮迫せん方盡きて家中の祿を借上げ紙金の通用鑄錢などにて缺を補ふに至る。其策尤拙く、錢多ければ賤く、紙金を造れば他邦に通ぜず。正金出でゝ再び歸らず、益乏しく愈窮す。……世に民の窮して家屋敷をひさぎて去るを賣すゑといふ。近頃大名の賣すゑも出たりといへり。高七萬石ほどの小侯なるが、公邊は養子と稱し、壯年にて隱居し、家督を傳へ家財封祿家士に至るまで三千金にかへて已は外邸に潛み居るあり。……

かくの如きは困難の尤甚しきものなれども、要するに一般の大名は財政に窮し、大

阪の豪商によりて輸通を達せるが多かりき。かゝる有樣なれば、弓馬槍劍の奬勵は餘り費用もかゝらぬこと故何處にても行はれしが、學政に至りては天保の頃に至りても僅かに躰面を爲すのみに過ぎざるが多かりき。

（二）國替、

譜代大名は動もすれば國替を命ぜらるゝ懸念ありしかば多くは永久の計を要する學校の事などには力を盡さゞりき。柴栗山の上書にいふ　當時國持大名の所替は無之、御譜代大名斗りに國替被仰付候事是又片つりにて不宜事なり。所替の物入凡十年の痛となると昔より申傳なり。依之昔は所替に定りて御加增也。中頃は金を被下、近年は其沙汰無き事は上の御不勝手財政困難なる故なるべし。……御老中になれば關八州の地へ所替とするも詮なき事なり。姬路、淀、郡山など樞要の地なりとて幼少にて替ゆる事も古き方計りを守りたる分にて詮なきことなり……又曰く、國替の御座候跡先は日も當てられぬ次第に御座候……されば國替の屢ありし譜代大名に敎育發達の地無し。肥前唐津は其好き例也。此處にては鄕士百姓間には、却つて敎育に盡力せし形跡ありて、其資料の徵すべきも

の猶存せり。

日本教育史資料は肥前の部に於てひとり唐津藩のみを逸す。他日増補せんことを要す。

(三)　農民の壓迫、

家康が百姓を憐みしはこれを牧畜視するなり。能くこれを撫育して大なる收獲を得んが爲なりき。三百年間農民は武家の資力供給者にして、その報酬としては、重税を課せられたり。四公六民と稱すれども、附加税を合算せば農民は六公乃至七公三民の税法に服するなり。税法は土地を基とせずして、收獲に課するを以て農民は耕作の發達を計るに心無かりき。星を戴きて出入し、饑渇を免るゝに營々として、未だ衣食足りて禮節を講ずるに暇無かりき。栗山の上書よく農民の狀態を盡くせり。依てこれを抄錄せんに、

百姓の身躰と申すものは隨分地ふく宜田地五反も所持仕候て夏は暑に脊をさらし、冬は霜雪に肌を破り候事をもかまい不申、一身の油を絞り出精仕水旱の難に逢不申候得ば一年に米七石斗り麥も七石斗出來申すものに御

座候。扨其米を先づ半分は御年貢に取納め殘りの三石餘賣拂一年中雜用に仕候。只今の直段に仕見申候得ば、凡金子三兩餘りに相成申候。其内にて村入用と申す物を田地の一反につき錢三百文程出し申候。凡三兩斗ならでは殘不申。それにて衣類の農具の世帶道具のと申物を拵へ、法事吊ひよめ取聟入の祝義共相調申候。扨一年中の飯米は麥を喰べ申候。麥と申す物は早く腹のすく物にて、其上百姓は骨折の業を仕候間、一日には一人前一升も喰不申候ては働相成不申につき家内の七人も有之ものは七百斗の麥にては不足仕候間、或は芋頭の大根のと申物を鹽にて焚き候て喰申處も御座候。……右の如く艱難の身上にて又其上に饑饉水旱に逢候か又は病煩は臨時の物入に御座候得ば一年に錢の百錢も餘慶出し申候は誠に骨髓の油をしぼられ候よりは悲しきものにて御座候。………

只今御年貢の取立は見取と申すものにて御座候間百姓殊の外、不精に相成五穀も不出來に御座候。これを定免と申すものに被仰付候はゞ百姓共出精仕り五穀も能出來可申と奉存候。見取と申候は年々の出來色を御役人

衆御見分被成候て年切〳〵に此田地は何石何斗此田地は何程と御極被成候事に御座候。夫故愚痴無智の土民の了簡には出精仕候て能作り申候ても出來色宜御座候得ば御上へも澤山御取被成候事なれば、畢竟汗水を流し出精仕候得ば骨折損に相心得、日增無精に罷成候故、出來色も年々惡敷成行申候……

此の如きは、國民の最多數を占むる農民普通の情態なりき。時に志士仁人無きにあらざりしも農民に敎育を普及するの困難なりしは以て推知すべきなり。

第四節　水野越前守(忠邦)の天保改革は全く樂翁公の寛政改革に傚へるものにて、風儀取締及び學政改新の二綱領を提げて立てり。秋霜の威を以て一時作興するところありしも、武家の衰運に於ける回光返照たるに過ぎざりき。

幕末の氣風は、根本的の革新を要するものあり。繁文縟禮なり。優柔苛細なり。此の如きは、昇平二百餘年、世風の全く老衰せるを示すものなり。朽餘の廢材修繕す可らざるなり。局面を打破して新たに建設せずんば已む可らざる也。繁文縟禮は「お勤」風に於て代表せらる。

帆足萬里曰く、諸侯の江戸留守居程不埒なる者は無し、勤めと稱して其徒相與に青樓に上りて主人の金を使ひ棄る也、其古參といふ者は白衣になりて妓人の間に偃臥し、新參は頗る大國の臣又は年輩人にても、上下をきて、次の間に侍坐し、酒も飮まぬ也。……その間合せの御勤めと稱するものは徂徠の政談に言ひし如く箸一本こけたる位の事也。……近頃聞く白河侯は留守居のつき合す可らず、何も御老中の公用人に尋ぬべしと臣下に言付け玉へりと、是定めて致仕の後心付玉ひしなるべし、左もなくば必らず法を改め玉ふべし。凡そ留守居の病は公儀より改め玉はねば諸侯の力にては其臣下乍ら仕方無き也

寛政の改革に打ち漏らされし留守居は天保に打撃を受けたり。寛政に矯正されし諸弊は禁令の去ると共に、又た社會に横行せり。天保の改革は寛政の改革を繰返せるに過ぎず。天保十二年の達のうちに

諸役所向次第に手數多く手重に相成候、以前より人數增候而も御用向繁多に成候。以來手重に不相成樣何分可被心掛候。書面等たとひ文言不行

屆、書損等有之候共實事に於て不行屆儀無之候得ば可相濟事に候。無益の儀に念を入れ候儀無之樣可被心掛候。

これ以て天保改革の精神を見るべし。水野の改革は頗る齷齪苛細の風あり。繁文縟禮と齷齪苛細とは共に太平の弊風にして生々活潑の氣象と相容れざるものなり。

天保改革の風紀取締に關するものは、奢侈を禁じ、ことに町人の贅澤を抑へ、高價の裝飾品玩具等の賣買を禁じ、男娼隱女等を禁じ、風紀を紊亂すべき出版を差押へ作者及び書肆を罰したる等は、其主なるもの也。種彦の田舍源氏。靜門の江戶繁昌記等このときに絕版を命ぜらる。

天保十二年(一八四一)町奉行遠山左衛門尉の役宅ゑ商人共を呼出し諭達して曰く。(前略)商人はわけて泰平の御國恩を難有相心得追々觸出候趣を相守り正路にして、質素儉約を可致候處、段々御國恩を忘れ、奢侈に移り衣食之分限を不辨……金襴モールの類に至るまで異風を好み其分限を不辨。ゼイタク屋などと家號を唱へ候者有之樣相聞ゑ……神佛を念じても國

恩を知らざれば役には立たぬ。町人は粗食にて能きもの也。士は絹布を用ゐるが順道なり。…………

高價ものゝ賣買も當丑年限り停止觸出し置きたれば、殘りたるものは年内最早三日に相成、形を替るか崩すとも仕舞切に致すとも、來寅年元朝よりは急度停止申渡す。若し是の後ち大名方婚禮等有之、高金のあつらい物有之共伺の上調達可致　大名も百萬石もあり一萬石もあり、差別を心得、是より萬事正路質素に相心得、譬へ木綿たりとも花美高價のものを取扱ひ致すまじく相背く者有之に於ては乍不便政事には難替…………

馬琴の著作堂雜記に　天保十二年の春の頃より女髮結を禁ぜらる。されども十三年に至りて猶已まざれば御嚴禁甚だしく女髮結もゆはする者も或は召捕られ手鎖をかけられ町中路次に女髮結入る可らずといふ張札を出す。此女髮結は文化年間より始まりて次第に甚だしく行はれしかば、賤しき裏屋の女房娘或は人の下女までも女髮結に結はせざる無ければ今は自身に髮を結ひ得ざる者多かり…………

（天保十三年）六月江戸繁昌記の義に付右作者靜軒實名は寺門次右衛門は淺草堀田原武家の長屋に罷在、鳥居甲斐守殿南町奉行所へ被召出。御吟味の處、右繁昌記は靜軒藏板の處、丁子屋雁金屋引受にて賣捌き、但し第五編は丁子屋平兵衛方にて彫立初編より四編迄の板も平兵衛方に賣渡申候由申すに付丁子屋平兵衛を被召出、御吟味の處　右繁昌記の板は何某と申者より借財のかたに請取候て摺出し候　其何某は先年他國致し只今ゆくゑ知れず。五編を彫刻致候事は無之由。陳じ申候。然れども右繁昌記は初編二編出板のころ丁子屋平兵衛引受候て町年寄館役所へ伺に出し候間、館市右衛門より町奉行所ゑ差出し伺候處漢文物に候間、林大學頭殿ゑ被問合候に付き、大學頭殿被見候て此書は御差止に相成出板仕間敷旨、丁子屋平兵衛より館役所ゑ證文被取置候處平兵衛内々にて摺出し、剰へ五編迄賣捌候。重々不埒の由にて平兵衛は五人組ゑ嚴敷御預に相成候由。未だ裁許落着は無之候ども犯罪人情本より重かるべしと聞ゑ候。

天保十三壬寅秋八月廿三日江戸繁昌記一件落着、作者靜軒は武家奉公御構

ひ丁子屋平兵衛は所拂にて家財は妻子に下さる。右繁昌記賣捌候雁金屋何某は過料十貫文右の書を彫刻致候板木師等は過料金五貫文右の彫刻料を不殘被召上是にて一件落着也……

寺門靜軒は經術の士也。彼れ拔群の才學を懷きて林家に排斥せらる。不平の餘、繁昌記を著はして、その才を示せる也。繁昌記は人情世態を穿ちて機微に入る、才藻縱横、寫實の妙を曲盡す。一時世上に喧傳して洛陽の紙價を貴からしめぬ。京都の中島棕隱これに擬して鴨東四時雜詞を著はせしも、相去る數等のみにあらず。僧月性海防僧かつて靜軒と面唔せしに、豫想に反して至つて嚴格の風にて、遂に繁昌記の事も話し出すに及ばずして已みきとぞ。

水野越前が文武の奬勵は先づ旗下よりして始まり、諸大名よりして、遂に京都の學問にまで及べり。當時旗下の士風早や寛政の昔を忘れし如く、擊劍場へは月に四五度も臨むも、殆んどこれを以て集會所とせるに過ぎず。學問は四書五經の素讀を了すれば學問所より賞賜あり。その餘は概ね他の遊伎に耽るのみ。されば

旗下の學事奬勵

天保旗下の遺老に通人多しとぞ。寛政のとき平山行藏は人に語りて、旗下八萬騎俱に武を談ず可らず、寒中足袋を穿たざるものは惟予と近藤重藏のみと。況んや天保の衰時に於てをや。

旗下の學事奬勵は寛政の令を繰返せるのみなるを以て、玆に唯だ一二の重要なる布達をあぐるに止むべし。

天保十二、六月廿九日達　御旗本の面々各宅ゑ登城前逢對繁く不相越樣度々達の趣も有之候處、兎角時候見舞として日々或は朝夕雨度相越候も有之無左候ては怠候樣にも可相成と互に勵合候よりいつとなく其風儀に移り候儀と相聞ゑ、右に付ては何となく諸事容易に心得、自然と心願之儀をも心易く直ちに申聞候樣相成候は如何之事に候。右體の義無之候其平常文武の道を嗜み行狀等宜敷候得ば自然御擧用も可有之候。總而上に對し候諸禮事等は格別其外登城前時候見舞として度々相越候は畢竟無益之事にて其暇を文武之方に用ゐ可然儀に候條心得違無之樣可被致候。

天保十二十、二月八日達　於學問所素讀吟味請御褒美被下候者は引續き尙

又學業相勵み五ヶ年目學問御試みの節罷出候樣可心掛等之處、素讀御褒美に相成候得ば夫にて事すみ候樣に相心得自然と廢學にも至候哉に付向後御褒美被下候者は別段出精致し修業之上學問御試之節は可成丈け罷出候樣可致候。尤左候とて學問のみに相泥み武藝を怠候儀は有之間敷儀勿論之事に候間、右之趣銘々厚く相心得、其父兄之者共も精々致世話教訓之筋行屆候樣可致候。

幕府の建設的事業としては、歴史小說錦繪等の出版を制限して、儒書の出版をは奬勵し、孝子節婦を旌賞し、篤學の士を引見し、教授所を建て、更らに手習師匠を訓誡して社會教育の任に當らしめたり。諸大名十萬石以上が大部の儒書を藏版するに至りしは、このときの訓令によりてなり。

天保十三年十二月廿日達　文學の儀は當時格別に御世話被爲在追々官板も被仰付候處、諸家藏板に至りては僅數十部には不相過哉に候。一躰大身の輩は心掛次第大部の書一二部づゝも藏版致し置候後來にも相傳候樣有之度事に付き此段十萬石以上の面々へ急度可被達置候。

天保の改革は齷齪苛細に過ぐ。淫風を抑へ奢靡を止め極めて痛快となすも、黄粱一夢にいへる市民遽然失業怨讟囂然として起り、改革を全くすること能はず。その紀念としては儒書の出版のみにして、武士繁文縟禮の風は依然として存し、幕府末路の學政は「お勤め」風の流行を見るなり。

「お勤」風は武家政治爛熟して士道が禮法の末に趨れることを示すものなり。本邦は固有の士道ある上に、支那哲學より學び來れる道德法は三百年間に漸々日本に流布浸潤して、相調和して愈精密なるものとはなれり。而して、かの精密なる道德法の負擔は國民中ことに武士の名譽とするところにして、その實行は作法によりて代表せらる。武士の作法は一々精細なる規則あり故實ありて、これによりて少時より陶冶さるゝを以て恰も盆栽の薫陶に外ならざるなりき。就中役儀の交際に於て最も甚しとす。お勤風則ちこれ也。書生及び浪人は禮法の外に逸するの自由あるを以て生々活潑の氣は此に存せり。要するに「お勤」風は士道の爛熟を示すものにして、武家組織の顚覆せざる可らざることを證するもの也。人の天性は到底かゝる繁細なる禮法を以て教育す可らず。餘りに人工を加ふるの教育は

人の活力を滅却すれば也。幕府の寛政天保の頃の政教はすべて干渉拘泥に過ぎて國民精神の發達を抑制したること尠からず。これ支那學の勢力に歸すべきもの實に多しとするなり。

英人アストン幕府の滅亡を論じていはく、一言以て蔽へば、將軍政治の末に於ける大失敗は國民生活のあらゆる方面に於ける過大の干渉にあり。余かつて外務卿寺島宗則伯と日本流の大なる庭園を逍遙せしに、麗はしき泉水の傍に一樫樹の立てるを見たり。そは園丁の丹精によりて美しく手入れされたるが、不愉快といふにあらざれども何となく氣のつまる感じのせらるゝもの也。寺島伯はこれを指していへり。そこに立てるは幕府政治の下に訓練されたる國民の模型なり。そは支那學が吾人に與へたる紀念なりと。

寛政及び天保改革につきての布達を見ば國民生活のあらゆる方面に對し幕府干渉の過大なるを見るべし。更に茲に一例を附加せんに、天保の改革に商人が符帳を用ひて帳簿に記入するを制し、占賣を禁じ、なほ又た紙屑の

時價及びその賣買濟返しの方まで干渉したるは、今人をして呆然たらしむるに足るべし。天保十四年に出版されたる御觸書集覽の卷尾に「摺損爲還魂紙亦可惜也」の印を捺す。皮肉といふべし。この年八月幕府令を出して昌平坂學問所の儀、古來聖堂と通稱し來れるも、そは大聖殿の別稱につき、爾後必らず學問所と稱ふべしと達せしが、世上一般に學問所を聖堂と通稱することは已まざりき。

第五節　水野越前守は寺子屋師匠に筆道指南の外、社會敎育の重任を負はしめ、敎科書を精撰し、御觸書等をも敎へしめ師匠の成蹟優秀なる者には官板六諭衍義等を賜ひてこれを賞旌せり。寺子屋保護の精神は左に見るべし。

天保十四年三月廿六日達。於御府内手習師匠ヲ立、渡世致候モ其町内ノ弟子子供ハ不及申、他所ヨリノ通弟子ニテモ依怙贔負無之樣心ヲ用、敎へ可申候。手跡ハ貴賤男女ニ不限、相應ニ認候ハヽ彌以不相叶モノニ付、疎ニ不可心得。一躰士分ノ者ハ子供仕付方文武ノ藝能夫々整候エ共、町々末々輕キ輩ハ別段學文ト申モ無之、且又兩親ノ育方モ心得違不少候ヘバ幼年ヨリ

ノ不行跡ハ遂ニ習ハシト成候事則風俗ヲモ亂スベキ種ト相成候間、町内ニテ教ヲ專ラトスルハ手習師匠ノモノニ有ベシ。筆道ノミナラズ風俗ヲ正シ、禮儀ヲ守リ忠孝ヲ訓可申事肝要ノ心得ニ候。且又文學認候程ノ者ハ自然ト物讀事モ出來モノナレバ御高札ノ文段或ハ御觸事文ハ庭訓物。其外實語教大學小學。婦女子ハ女今川ヲ始メ女誡女孝經ノ類ヲ筆道ノ傍ニ教可申候。凡人情ハ兩親文盲又ハ不束者ニ候共、自分ノ子ハヨカレカシニ思ハヌ者ハ無之。依テ師匠致モノハ子供ヲ懇切ニ教、仕立方嚴重ニ候ヘバ、其親心必厚ク可存候。左候へば手習師匠致候者ハ計ラズモ御政道ノ一助トナリ、世間風俗ノ益少ナカラズ候間、此趣意篤ト相辨じ神妙ニ教育可致候。右の趣厚相心得、教育宜敷モノ又ハ等閑ニ心得教育方不行屆ノ者ハ取調ノ上及沙汰候品モ有之べク候。此旨町々端々迄不洩樣可申觸也。

茲に所謂社會教育は專ら平民を意味す。天保十四年の御觸書集覽二册は、その精神を代表するもの也。この書一に修身孝義鑑といひ天保政革の主要なる訓令に交ふるに當時篤行を以て旌賞されたる申渡書を載せ、併せてこれを以て筆道の

教科書に充てたるもの。幕府の平民教育の方針を實現し得たる好教訓書なりと謂ふべし。この書は下谷池端仲町通り岡村屋孝助の板元なり。當局の主義に協ひて廣く行はれしこと想ひ見るべし。

寺子屋を以て平民教育を擔當せしむべしとの意見は寛政のとき中井竹山の草茅危言に見えたり。寺子屋に改良を加へ、師匠の然るべき者には苗字帯刀をも許すべしとなり。

御治世以來俗間文字ノ用ハ追々弘クナリ都會ノ地ニハ手跡算術ノ指南又ハ少々ノ素讀或ハ諸禮小諷ナド教ル者多クナリテ諸浪人モ是ヲモテ口ヲ糊スルヤウニナリ在郷ニモ相應ニ算筆ニ通ジタル者ヲ引寄セ置キ、子弟ヲ教ヘ或ハ村方年分公私ノ書キ物、金穀ノ勘定ナドサスルヤウニナリタレバ今ハ上國ニテハ何モ寺院ニカヽルヿハ無キヲ昔ノ積習ニテヤハリ寺屋寺子寺入ト覺ヘ世間一統ナルハ餘リ文盲至極ノコト。コノ御時節ニ甚ダ不相應ナリ。何トゾ其師ヲ手跡師ナド呼バセタキモノ也。或ハ俗ニ從ヒ司ノ字ヲ用ルモ可也。屋ヲツケ子バ合點セヌ習俗ナレバ細民ハ手跡屋ト覺

ユテモヨシ。寺子ヲ手習子、寺入入門又門入ナド云ハセタキコトナルベシ。コノ輩ハ固ヨリ古ノ塾師ノ類ニテ昇平ノ風化ニヨリテ、上ノ令ヲ待タズシテ閭巷ニ滿ルヤウニナリタリ。何レモ一分渡世ノ私計ニハ出レド、自然ト上ノ政教ノ一ニ備リテ無クテ叶ハヌコト共ナリ。然ルヲ民間ニテハ屋號ノツカヌ無商賣ノ住居ハナラヌコトヽ心得テ右ノ輩モ皆ナ〱何トナクトモ屋號ヲツケ賣人ニ托シ、僦居スルコト一統也。依リ不自由ニテ文化ノ體ヲ失ヒタルモノナルベシ。尤モ子弟ヲ率ユル身分故、藝能ハマサリタレドモ、行迹宜シカラザレバ彼ノ人ノ子ヲ賊フコトアルベシ。是ハ又能ク擇ブベキコトナラン。故ニ官命下リ町々ニテ人柄ヲヨク聞合セテ住居サスベシ。イヨ〱粗末ナラヌ人物ナラバ町ヨリ申出デ次第苗字ヲサシ許サレ若後日不法ノコトアラバ苗字ヲ召取ラレ處ヲ逐ノケ別人ヲ差置スベシ。是ニテ賞罰モ明カナラバ風化ノ萬一ヲ助クルヤウニナルベシ。コノ事瑣細ナルコトナレドモ大勢ノ子弟ヲトリ立ルコトナレバ目前ニテサシテノ利害ナキ樣ナレドモ後日ノ風俗ニ於テ大ニ關係スル場合アルコト故等閑ニハ爲ス

可ラザルモノ存ス。

竹山の意見は多く樂翁公に採用されぬ。天保改革は樂翁公の精神を繼承せるは既に述べたり。猶ほ越前守の顧問儒者佐藤一齋、鹽谷宕陰の徒は當時民間の教化を以て任せる「心學者」を擯斥せり。一齋の言志晩錄に世有一種稱心學者。於女子小人非無寸益。然要爲鄕愿之類。士君子學此則汨流俗失義氣。尤非武辨所宜。人主誤用之、使士氣怯懦。殆不可といへり。此に於て民間教化の重任は寺子屋師匠の肩に掛れり。

寺子屋は家庭と關係密接なりしかば、訓育には好適の事情ありき。兒童の父兄も師匠を尊敬して苟且にもお師匠樣と呼べり。されば教場をあげて一大家庭とも見るべく、兒童は退學せる後ちも舊師を訪問することを忘れず。師匠もまた終始弟子の成りゆきに注意し懇切なる忠告を與ふることを怠らざりき。師匠は一人にて幼稚園より中學程度までの生徒の世話することとなれば、その繁忙なること今日の教員の比にあらず。別に生徒の心得規則等の細密なるものとては無かりしも、家庭との干係密接にして師弟の情誼の細やかなるは、その組織の簡易なる

も似ず、能く民間の教育を擔當し、風教を維持するの力ありし所以なり。

兒童の父兄は寺子屋に立入りて世話したるものにて、師匠の報酬は盆節季晦日をりをりの祝儀とても僅少のものなりしが、餅を搗けば餅を贈り、大根出來れば大根を贈るといふ風にて米鹽までも世話したる故に、師匠の生活も立ちゆきしが、それにつけては俗に連れて寺子屋の物見遊山などにも樣々のことありしと見ゆ。

江戶上方等にてはことに談柄に資するもの多し　安永十年（一七八一）出版の世間宗匠氣質に、大坂にて開業せし寺子屋を町內の人々の世話せし實況を載す。三井家の出家落ち望月春永かひがひしく取持ちてあたり近所の遊民衆と談じて寺子屋に取立ふといふと早老松町に家かりてあてがひ、ソレ師匠樣宗匠と仰ぎ立つる道風もどきの御能筆……よつてかゝつて世話する連衆がかけ廻つて爰にては三人かしむからは五人七人かり催ふし拾ひ集るやうに腕白ざかりの子供一兩月のうちに四五十人の弟子つきて賑へば追付百人二百人に足たらそれこそ梅が枝寺やと仰がれんと心頼母しき。すべて世の人世話する日にはなげ打て如在もなふ駈廻り田もやう汗水になつて手傳ひ障子をはるやら襖の繪をかきにやる疊の

表がへ掛物はこちらからおこそ花生はソレ貴様にある二重切〳〵が一文を四五文がの置てをきやヲット心得高ぐゝり先宿老殿の息男をふづくり寺入さすりや丁代が弟もたまられず御指南頼み存ずると顏づくで金一兩髮結に油かけ頼んでお心安いお方故殊の外御發向なされると町内で評判させ太皷打て廻る下役に酒の香嗅せばおり〳〵來て御用は御座りませぬかと見廻りてごもくはかしと呉れると若衆の遊び所まつさら付けても去ぬからして高家賃も苦にならず。今此太郎も四五十人の子供のわげで寺やの竈賑はひにけり。難波の梅いろは書く子をちりぬるよふにならぬやうに穴見つけて心付してやる頼もしさ。さすが繁花の地で氣が廣いかと思やちつとした事で心いきが違ふたと見ふと見限るも早い連中……此太郎を見限てり寄り付かず。餘人の行くのまでとめて廻る。爰に大橋養覺といふ藪醫さじ先きより筆さきがよくまはると連中から取立て隣町で寺やを始めさせ此太郎方の手習ひ子を殘らずあげて養覺かたへ遣らせけるぞ是非なけれど。右は大阪の話にて、田舍にては此の如く取持たざる代りには右の如き浮薄の事も無かりしなり。嘉永元年(一八四八)二月廿一日幕府の布達に曰く。市

中手跡指南の者の內弟子召連れ向々花見に罷越候砌り附添候者の內戯れに道化し身形にて途中往來致し先々群集の場所にては所作樣の儀致し且又對の日傘手拭等目立候樣出立罷越候儀是亦風俗にも拘るべき儀につき向後右樣の儀は致す間敷事。江戶は人氣花やかにて互に見得を張ること强ければ寺子屋も物見遊山のときなどには互に氣勢を張りしものなるべし。東京市中の代用小學校は皆な昔時寺子屋の名殘なり

寺入り則ち兒童入門につきては地方によりて習俗を異にすれども何れも通常は兩親の內にて兒童を伴ひ机硯草紙等取揃へて束修を師匠に奉じて賴み入ることなり。大阪は商業地なれば師匠も鄕に從ひて頗る町人風をなしたりと見ゆ。大阪にて出版の敎訓書中には寺入の圖を畫きたるが生徒を伴れ來れる母も紋付きも着けず。師匠もまだ袴のみは着けたれどドテラ打ち着て左手を懷にせるなど見えたり。さて又寺入りには昔時俗間の迷信にて黃道吉日を擇びたり。女小學敎草は大阪敎賀屋の出板にて享保十年初刻(一七二五)寶曆十三年改刻(一七六三)天保四年再刻(一八三三)嘉永五年三刻(一八五二)して久しく世に行はれし書なるが、

其の中に寺入りに善き日の一項あり。左に錄す。

甲ね。さる。乙い。丁うし。う。

戊ね。たつ。庚むま。とら。壬むま。とら。

寺子屋は今の小學校と異なり、當時の習俗に順應して漸を以て化するの外無かりしなり。

寺入りの始。學習に先だち、まづ廣むべき語あり。定めたるも定めざるも、ありて地方にても必しも同一ならざるが左に其一例を錄す。

明曆四年(萬治元、一六五八)出板の十五色葉とへる手習手本に

唐　以呂波

上大人。丘乙巳。化三千。七十士。爾小生八九字。佳作仁。可知禮也。

童子七歲而初入學。先讀此語。(これは支那にて兒童學書のはじめに習ふよし明の祝枝山猥譚に見へたり)　この書は京都池本平兵衛の開板たり。

寺子屋の教科書につきて一言を加ふべし。教科書の大本となるものは往來類

なり。往來類者王朝の季藤原明衡の雲州往來より起りて、江戸時代にては初期より流行したり。何事も消息躰に綴りて往來と題したり。

寛永二十年(一六四三)　林春齋撰　朝鮮往來七冊

正保四年(一六四七)　林道春撰　日本大唐往來一冊

幕末には往來類の世に出づること汗牛充棟も啻ならず。往來に注解また講釋も出來し、さらに大全消息往來など云へる奇躰なるものも出づ。これ等數多ある中にて出色のものを求むれば

謹身往來は安政ごろに江戸の出板なるがこの書中には武士の外農工商の年中行事日常必要の智識を網羅せんと計れるもの。

難字往來は難字を標し、その下に各躰の書き方を示す。筆蹟頗る見事なり。

十五色葉は伊呂波手本の中にて諸躰の最も多くを網羅したるもの。

農家大學は寺子屋の教科書としては、時運の頗る變遷し農民の漸く興起するを示せるもの。一種出色の教科書といふべし。

文字戲は寶暦五年(一七五五)江戸の隱士古川鶴巢翁が「童生に與ふる文字戲とし

て四種の生物を纂めて讀書書藝の餘力にいたしならはしむ戯符なり。著者この戯を思付きてより多年これを實驗し、兒童これを以て無益の遊戯にかへて「鈍き者は進み、利きものは加へて幾句ならずして多く禽獸甲魚の名を記諳し、つねに文字に遊んで思繹して萬象森然たり」と。實に漢字の數多を習得せざる可らざる時代には、敎育家つねにその習得方法に苦心したり。この書の如き、その苦心の紀念として漢字敎育の古へをしのぶべきものあるを以て、此にその方法を載す。

童子文字戯凡例

一、麟鳳龜龍を王とし、續くに四靈の左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武を將とす。則ち十二將の上に加ふ。何れも輔佐の將たり。三十六守何れもそれ〴〵の德によりて正名の上に一二の文字を加へて童生の便とす。

一、正名の下に異名俗通用の名を加へ記す。又四種生物の王將の中に走字翼字虫字游字は則ち象棊の步兵の意也。戯者の遣ひよう何れにても一物に限る可らず。種々生類を遣ひ覺へるを專要とす也。

一、王將に四變を附けて其働の極らざるを顯す。則ち天に風雨雷電の變あり、

人に禍福吉凶の變あるが如し。四變を定て大將の運を知る。尤も變化の働勢勝札ならば盤面の負札殘らず敵に取らるゝもの也。

一、札の位は時々の定めによるべし。將は重く兵は輕し。王將と雖も、兵札の爲めに取るゝ也。是則ち時の勢によりて自然の理、曰鼠猫をかむの意也。又變札勝ときは盤中の札殘らず變の爲に取るゝもの也。勢ひ變に勝つものなし、

一、盤面路數三十六也。圖式の如く王は中央に位し十二將變札は左右に位す。札は戯者の意によりて何れなりとも取かへ遣ふべし　尤恭將棊の如く先手後手を定むる也。四變利なき時は相手の方ゑ札を取らるゝ也。

一、惣べて札の働勢進退は十二支を以て本札の裏にかくし附て勝負を決す。子は丑に勝ち巳は寅に勝ち寅は卯に勝ち戌は亥に勝ち：：：亥は又子に勝ちめくり〱て勝つ道理也。或は惣方より同十二支出るときは出合とて勝負無し。

一、振札とて子戌亥の三支にて勝負することあり。是は大勢致すとき用ゆる

こと也。三支の中一枚ものを勝札とす。或は先手後手をも是を以て定むる也。

一、圖式には銘々に顯さず。一種づゝ板行するもの也。尤も札の位によりて輕重をつけ金銀五色紙を以て上中下を定め文字を正し記るすべし。隨分丁寧に札を製へて書具にて正字を文飾す。結構文飾に致さねば兒輩疎末にし失ひ易い。唯兒輩の意を察して好くべき樣專一たるべし。

一、取札を兒輩に書き與ふるに先づ初一字より二字三字四字五字ものと次第して授く。是我家の法にて教へ來れり。何れとも先師の意持によりて作意有べし。家法には一月に六度宛一六の日札を與ふ。一人に一枚に限るもの也。多く札をむさほるときは忘れやすし。又書位とて月に六度づゝそらにて書かせ見るなり。是も當日一字の獸とか又は二字の鳥とか又は三字の虫か又は四字の魚とか次第〳〵に書かせ見る也。其文字の正誤多少によりて勝負を付く。又右の札を褒美とす。

一、盤面札の戰ときは先手より始め表正札と裏十二支とを揃へて敵の札に差

向け身方敵方の十二支を發して勝負を爲す。若し左右方の出札同じき方又は子と寅とか飛び〳〵に出るときは不合にして盤の各方に差置く。其次の札に以前の如くかゝるべし。段々守將に責入ること相濟んで四變大將ばかり殘して尤右方の意をとくとさつしてかの振札にて勝負すべし。此上人々の發明、後師の工夫を待つもの也。

盤面字符列位之圖

角鷹飛	朱雀將	鳳凰王	雷　震	玄鶴將	錦鷄飛
胄鳥翼	白鷺翼	青鷹翼	雉子翼	江鷗翼	田鷸翼
鼴鼠走	海獺走	黄牛走	駿馬走	厖犬走	水虎走
猩々守	龍馬將	地　震	麒麟王	白虎將	赤熊守

右盤面札々ならばやう此の如し。一物に限る可らず。覺え得るときには種々取かへ遣ふべし。手始めは前通りの走字翼字の中右なりと左なりと意持次第に發すべし。次に守、次に將、次に王と責め入るなり。

祥瑞鳳凰王

札のなり。如此長き二寸二分横一寸二分に定む。王札は金紙紺泥。將は銀紙。守は朱紙

青鷹翼

翼は青紙 文字見え易きやうに彩る。

十二支之圖

子	午
丑	未
寅	申
卯	酉
辰	戌
巳	亥

右圖の如く札を小さくすべし。此十二支を以て活動するものなれば先づ始に十二支を能々熟得あるべし。凡天地の生物人主鳥獸といへども此十二支に預らざるもの無し。之を以て生じ之を以て死す。萬古不易の生數也。畢竟十二支何れも働くといへども先は子亥戌の三支に生活す。重ね

て考ふべし。

數多の漢字を記得するは本邦の兒童には過重の負擔也。近世三百年の間吾國民の活力が漢字教育のために如何計り消耗されしやは、此文字戲一巻教育家の苦衷をあらはし得て餘あり。かの支那國民も國字改良の運動起らざる限りは彼等また容易に振起せざるべし。

文字戲は近ごろ坊間に流行する陸軍演習象棊とその方法相似たるものと謂ふべし。

第六節

寛政より天保の代となりても、幕府が浪人儒者を遇するの態度は重きを加へざる也。學界の元氣は浪人儒者に存したりとはいへ、彼等はつねに生活の困難と鬪へり。浪人儒者の境遇は草茅危言に詳か也。

草茅危言　元來儒トハ學ンデ未ダ仕ヘザル人ノ名目ナレバ民間ニアル學者ヲ主トスル也。然ルヲソノ本稱立タズ。民間戶籍ニ登ラザル故儒者ノ名分往々醫名ニ托シ又市中ニテ屋號ナケレバ得心セヌ者モ多キ故工商ノ名ニ托シ戯居スルナド餘リ淺マシキ丁也。但シ儒生ハ貧窮ナルモノニテ中

々其業ニテ一身糊口ノ便リモ出來ガタク、況シテ上ニ老アリ下ニ幼アレバ凍餒ヲモ免レ難キホドノヿナレバ或ハ實ニ醫術ヲ兼テ又ハ合藥ナドヲ便リトシ、商賈ニ混ズルモアレバ此分ハ是迄ノ姿ニテ、儒名ヲ立テズシテ可ナリ。多キ中ニハ儒業ヲ專ラトシテ貧ヲ甘ンジ窮ヲ安ンジ、他事ヲ願ミザルモアリテ其才德ハ長短大小モアル可レ𪜈其志ノ確ナルハ同ジ。コノ分ハ町在マデ彼ノ行迹ヲモ糺シタル上、戸籍ニ儒者ト記シ、其所ヨリ申出次第官ヨリ苗字帶刀ヲ免許アラセラレタシ。後日ニ行迹正シカラヌ聞エアラバ、其時苗字帶刀ヲ召上ラルベシ。三都ヲ始メ諸國公領皆此ノ如クナリタラバ儒風ヲ振起スル端トモナルベシ。元來京大阪ニテハ市中ニ苗字帶刀ノ者ノ住居ハ禁制ナレ𪜈、是ハ武門浪人ヲ禁ゼラルヽニテ、儒者ヲ禁ゼラルヽニハアラズ。紛ラハシキ故一處ニ禁ゼラルヽトノ事ナレ𪜈、其レハ教授ヲスルトセヌトニテ其分チハ明白ナルベシ。京師ニハ宿坊居ト云モノニテ儒者帶刀ノ住居ヲ官許アレバ大阪ヨリハ事緩ヤカナルヤウナレ𪜈、儒名ノ人トシテ浮居ノ受負ヲ以テ住居スルトハ甚本意ナラヌコト也。其上武伎

ヲスル浪士カ教授ヲスル儒者カト云フコトハ其所ノ者ノ改ルホド明白ナルハ無シ。他處ニアル宿坊ノ詳ニスルトコロニハアラジ。故ニ京都モ宿坊ノ屆ヲ已メニシテ町ヨリ屆ケサセタキモノナリ。

幕末浪人儒者の態度は上は放蕩不羈にして氣識を負ふ者、次は營々名利にのみ奔走する者。その下は卑劣幇間に類する者也。謹愼重厚にして地歩を占むる者は甚だ少なし。山本北山、太田錦城、龜井南溟父子の如きは、其才氣と學識とを負ひて白眼世上を見たる者也。錦城の如き推して當時の第一流と稱す。而して夏日裸體にして見臺に向ひて經書を講じ、その子は父の姿を奪ひて奔れり。龜井の如きは蘐園學を以て西睡に雄視する者。而して裸體に袴して講義せしことありといふ。大窪詩佛、菊池五山の徒に至りては詩酒似而非風流を事とする者にして、固より第二流を下る者也。彼等の相會するや酒を被り氣を遣ひ、疎暴鄙野徒らに官儒の「お勤め風」に流るゝを罵りて、自ら又古賀精里の謂へる「餓鬼」の群に投ぜるものなり。書生の風亦隨つて推知すべきのみ。

名家即ち第二流の儒士に至りては、百方唯名を賣らんことを講ず。その次ぎは

書畫會を開き、顧客を集め廣告して以て自ら賣る。所謂書畫會先生これ也。書畫會は京都の皆川淇園に始まる。淇園は一代の大家なり。而して拘々泥々專ら字句を修む。このころより字句を專修するの徒亦靡然として出で、幕末儒者の學風大に陋なり。梁川星巖は活儒也。彼その錦心繡腸を以て儒生の態度を咏じて曰、

六經四子不離口、宛曲巧成時世風。剛道是儒誰肯信、毀譽聲裏應聲蟲。
爛却先生頭上巾、朝訓暮教一諄々。妻拏尙且不吾信、何況悠々天下人。
水滸琵琶事絕奇、勸懲言句入心脾。不須勃々談名理、只讀無稽小說來。
讀徹六經先建基、山書野史亦皆師。拘々泥々死章句、大丈夫兒所不爲。
赤舌森然何壯哉、也無學術也無才。若爲蓄得三年艾、持灼書生尻骨來。
堯口舜傳其奈何、執中而已更無他。後來朱陸薛王出、便見紛々言句多。
曾有蘇秦二頃田、文耕墨稼過年々。一家幸免塡溝壑、潤筆錢眞活命錢。

星巖の詩一概に浪人儒者のみを責むるにあらず。浪人儒者中、藤森弘菴大橋訥菴の如き氣力あるの士出でしも、一般漢學生は桃源の夢未だ醒めざるなりき。されば米國の捕鯨船が盛んに日本の東海を航行せしときに當り

儒者番附、書畫會一覽は羽翼を生じて田舍をまわれり。江戸繁昌記に妙文あり。請ふかり來らん。未聞今儒中一人有金剛力者。但至其賣名射利之手不止四十八十。假虎威張空力舞狸術收虛名鷹隼攫物狻猊哮世。唯出死力以求世間喝采之聲。周旋米之纏頭紛々於是乎拋焉。至其下者別出書畫會之手段奔走使脚左搏右槍屈腰攫沙叩頭流血。依四方君子之多力纔救土豚緣之窘。是謂之荷褌儒(フンドシカツギ)云乎。嗚呼誰能卓然秀出有古豪傑風而外不挫於物內不愧乎天。出維持世教金剛力者。蓋有之矣、我未之見也。

江戸の儒者には「山の手」と「下町」との二流あり。「山の手」には官儒多く、また官儒ならざるも謹嚴なる浪人儒者多かり。下町は多くは浪人儒者にして、併せて町人の子弟をも多く弟子取りしは、江戸兒の勢援を有する者なり。されば下町儒者中には任俠を以て人氣を博せるも多く、大概は豪快磊落を以て風を爲せり。首尾兩端營々逐々權門に出入し、或は田舍にのみ書畫の評判高き者どもは下町にては勢力無かりき。江戸兒は「きかぬ氣」の儒者を喜び、山の手に押出しても引けは取らせぬとて押立てたるなりき。山本北山は任俠を以て滿都の人氣を負ひて柴野栗山の

權勢にも對抗したり。彼は「江戸の親玉」と呼ばれぬ。

嘉永三年(一八五〇)當世名家評判記あり。その序文に儒者の境遇を述べたり。龜田鵬齋のいへるには者にも種々あり、役者第一、藝者第二、醫者第三、學者第四神道者第五。にして第六第七は拙者遠國勤番者也と。又曰く儒者はまじめにて盆暮百匹の報酬出役(官儒手傳)銀錠五兩なりと。評判記中にて大家をあぐれば、

大極上々吉　朝川鼎　名鼎　號善庵　字五鼎

頭取　當時での經義は折衷家の大家でござります。文章は自分も出來ぬといはれますが、經義は錦城歿せられてより此先生に及ぶ者はござりません

ワルロ　イヤ〱孝經私紀のお手際では壯年のときなれ共、殆んどお力が見へますが、近頃の大學釋義で却てぼろが見へまして昌平橋(學問所の事也)の諸先生が之故に彼是と噂がござります。其上僞君子と申す事が世上に申なします故是が白璧の微瑕でござります。

ヒイキ　イヤ〳〵僞君子だ。一齋(佐藤)さへもさるお屋敷でやりました故況して先生は勿論なり。

大上々吉　松崎退藏　名復　字明復　號慊堂

頭取　當時の立者、誠の儒者と申すべき先生でござります。世の中に諂ふことを厭ひ羽澤山莊に引込まれましても御名は下町に住居の人より高うございます。其上博覽旁通右に出る人はござりますまい。

ワルロ　イヤ〳〵説文ずきで唯々古物癖で偏倚の先生で一向宗の癖が、今にとれません。

經營文章よりして書畫俳諧醫者に至るまで評騭せるが中々におもしろし。ときには評し得て肯綮に中るものあり。學者傳によき資料なり。

龜田鵬齋の事蹟につきては、浪人儒者の狂態を知るべきものあり。山本北山死去のとき、諸名家會葬したるに鵬齋平常赤貧にして吊の服に上下無し隣家に上下の上の古きものあるを借り立附股引をはき藁束を手に持ち酒を呑み顏朱の如くなりて、喪式に趣く。蜀山人側にあり。龜田に向ていふ

貴兄所持の藁は青草一束其人如玉の意歟。答云如何にも御尤の御尋也。但藁一束は余り寒ければ焚きて溫めん爲め又酒を呑みて其人如猿而已といへり。

蜀山人長崎にゆきしとき豪家子弟どもの懇請にあひ、不得已して教授せり。諸生金銀華美の服餝をなして每日伺候す。蜀山人則ち、人間は父は親しく主家來は義を忘れず夫婦は別を以て正しく交はり兄弟の序友愛深く友には信あるべし。町家は町家の風に逆はず驕らず高利を貪らざるやう心掛くべし。我人を導くに外に云べきこと無しとて、每日〳〵同じ言を繰返せり。幾日たちても更に他の說無かりしとなり。

(右二則、天保九年肥前東松浦郡嚴木の鄕士秀島皷溪の劄記に據る)

第七節

賴山陽は浪人儒者の巨擘也。教育史上に於ては人往々山陽を閑却する者あれども、是大なる誤謬なり。山陽の教育に於けるや確かに一隻の識見を具するのみならず。その教育の方法に於ても超凡のものあり。儒者が學派の爭に拘泥せる間に彼れは史學ことに國史を修め、諸方に周遊し、長崎にては西洋事情の

一斑をさへ窺ひ、天然と人事とを研究して眼界洞然たり。是を以て懐疑を以て古聖賢の立言を批評し、往々教學上にも超脫の見を出だせり。一言以て蔽へば、彼は通儒なりき。

山陽の性行は故森田思軒の「頼山陽及其時代」尤も面白く書かれたり。山陽之家庭一書薄井龍之氏の談話に依る。些少の誤謬はあるやうなれども、又併せ參考すべきものなるべし。

山陽を研究せんには山陽遺稿、山陽詩鈔、通議新策、等も必要なれども、彼の著述中尤も精采あるものは山陽先生書後及び題跋の二書なり。この二書は山陽の性命ともいふべし。

實用之學。
通大義

一。山陽曰く我學一字の宗旨あり曰く實。又折りて兩字と爲す曰く適用。讀書法を教へて曰く先づ大義に通せよと。山陽の教育說以て知るべし。彼れ經世有用を以て爲學の大本と爲す。眼中學派無し。その學風は功利主義なり。彼はこの大原則を證するには皆な歷史上の事實を以てせり。これ彼の力を得る史學に依ること多きゆゑなり。彼自らその像に讃していふ。此口は殘羹冷抔にも飽

かされども、この手則ち黔黎の寒餓を救はんと欲する也と。

二。山陽の學は經世有用を主とするを以て識見を貴ぶ。時を知らずんば以て爲すこと無し。故に彼は勢と數とを喜んで談ず。勢と數と興廢變遷の由て行はるゝところなり。彼がこの見地は史學より得來れるもの。漫に堯舜を尊んで漢唐君臣の瑕疵を指摘するは人をして善を爲すに怠らしむといひ、周の興る德を以てすと云ふも猶ほ力に依る。故にその制、亂を防ぎ變に備ふるに齷齪たるもの取て以て矜式するに足らずといふ。皆彼の學を見るに足るなり。

讀五帝三代本紀。堯擧舜於畎畝以授天下、自是駭擧。然堯有二女、無可降嫁之臣。故寧尙名族華胄之無官爵者。不肖子不可嗣、故授愛婿之有望者。乃愜當時朝野物情也。百官備任浚井修屋。豈無人可使、而必使舜。雖後世駙馬家有頑父嚚母傲弟必無此事。孟子特用爲話柄、論道理如此耳。後世遂以爲實然者、癡人不可說夢也。如瞽瞍殺人論亦然。豈有天子竊負其父而逃、九門不省百官不知者哉。大抵儒者以三代漢唐截然爲兩段。故爲不近人情說。覩如吾說、必謂陋邪以私意揣聖人。然彼視聖人如在天上而吾視在其左右。

實才

敎爲實學古乎。論漢唐君臣、輙指其疵爲非純粹。亦使人意於爲善也。或曰三代以上人無機權。然則堯舜禹湯文武伊尹周召一輩木偶土偶耶。或曰後世英雄總以詐術取天下。天下人皆童兒耶。二者皆無眞識也。

又

儒者想先王如佛菩薩。視後世英雄如天魔波旬斷不相猶。夫自七十里百里起而有天下。雖曰以德也、非其人英雄何能致此。但其心術明白、作事正大、非若後君之詭祕狙詐耳。周自山西、漸有蜀荊。而河北屬段者用兵取之、滅國五十。如隋文取陳、宋祖取漢、元祖取金。又如我邦織田滅室町。其際必有不厭人心者。故下半部尙書、大抵紫々諭段頑者。禮樂制度拘綴繫碎皆防亂之具。其實不及漢之疎濶便民也。況其立國不及夏段可知。不然三世之後有人殺天子而不能問賊何哉。後儒動輙擧周制爲準則。矮人觀場類耳。

（三）山陽壯にして磊落屢父母の憂を爲す。後ち自ら克制して產を治め母を安んず。刻苦勤儉常人のまだ及ぶ能はざるところなり。山陽遺稿大倉翁墓銘に曰、

余嘗て謂ふ　古豪傑皆善く產を治む。馬文淵の如きは光武に遇はざれども亦能

く自ら樹殖す。士の經濟を口にして自活する能はざる者は實才に非る也と。これ山陽の眞意なり。箇と雖も亦加ふること莫し。彼の學風は實才を養成するにあり。

(四) 山陽つねに言ふ。大義に通ずと。或は曰ふ大意を領するのみ。彼れ章句に拘々泥々するを排斥し、眼界を洞開して直ちに聖賢の眞意を看取するにあり。故に彼に學派無し。彼は家學を棄てたりとの非難に對して辨解したれども、彼は寧程朱學を好まざるに似たり。後儒性理を高談す……金莖承露、なほ人の渇を救はざるが如しといへり。蓋し程朱は高尚理に驅せて實用に迂なりとす。これ山陽の見解なり。

(五) 山陽は實才を養成するを目的とす。故に其敎育法は總べて實事實物につき眞是非眞利害を門人に看得せしめ、自由思想を以て聖賢にも對せしむるにあり。故に敎育法としては、門人の判斷力を涵養するにあり。則ち識見なり。經傳を講ずるに五經正義及び四書集註を採用するは、廣く公正の解釋を求むるにあり。彼の敎授は懷疑の精神を鼓吹す。究竟機軸の力を培養す。これが爲めには、彼事理

を講ずるに當り、その勢を審かにし、情を穿ち揣摩推轂盡さゞる無く、其眞を得ずんば已まざらんとす。山陽先生書後題跋中出色の文字は皆これなり。これ以て彼の教育法を想見するに足るなり。

山陽は實物教授法を用ひたり。儀禮を講ずるに紙型を用ふる如き是れ也。

儀禮講餘後。唐立五經於學官。禮獨取戴記、必出文皇意。自是英雄眼孔魯昭知儀不知禮。禮非謂玉帛。周已有此論。漢唐以後所謂禮皆朝廷喪祭儀。又非行於天下。但君臣父子大分不可紊者。所謂天叙天秩百世依然。故所貴於禮者其意而已非其儀也。儀禮之不可不講者獨喪服見親疎之等。可以決疑獄耳。其他煩文縟節不必究也。況其中多不近人情者。如覲禮諸侯、肉袒聘禮帶賈人鑒玉價之類最可疑。余二十年前爲生徒說。說此大幅紙作堂室圖。以寸許木人數十就焉。演儀驗之群說。錄最明暢者。間附私說爲冊。今明知其無益亦雞肋類也。

懷疑の精神太だ強きを見るべし。儒者中ときに紙型木型を用ひて講義をたすけし者無きにあらざれとも、當時山陽の如く思想の生々活潑なりし者あらず。こ

れ彼を推して生面を開かしむる所以なり。

(六) 山陽は處士を以て終始し、以て其言議の束縛を避けたり。彼は窮途に立ちて猶ほ祿仕せず。よく其操守を變ぜず。卓として書生の儀表となれり。

鴨水に臨み東山に對す。これ山陽が三樹坊の家塾也。山陽こゝに於て經を講し、史を修む。野史亭前無數山、某岡某阜事相關。倦來抛筆時呼酒、歷々興亡指點間。かくの如くにして日本外史は成れり。山陽は書齋の日課嚴重にして讀書修辭、尤も力む。書齋の前に水にのぞみ高柳を樹ゑ、鳧鴨の流に隨ふを見る。案前ときに一架花あり。短檠燈の下、小肴に酒を呼びて妻兒と團欒す。示塾生の詩にいふ。憐我二三子、負笈向吾依。純窓與土壁、燈火聚唔咿。歲除宴妻孥、呼致共酒巵。唱和聊同樂、講誦且緩期。君輩皆人子、豈不憂睽離。爺孃當此際、當咨說吾兒。己忍愛日意、勿失惜陰時。提撕の意溫然たり。山陽の詩は家庭の什に於て絕調を見る。京都震災後に歸家の篇の如き杜甫北征の遺意あり。忠厚の志、人をして愛誦倦まざらしむるに足れり。

讀書八首抄三首。

今朝風日佳、北窓過新雨。謝客開吾帙、山妻未有叙。無緣須衆眷、八口豈獨處。輪鞅不到門、饑寒恐自取。願少退其鋭、應接雜媚嫵。吾病誰從箴、吾骨天賦予。不然父母國、何必解珪組。今而勉龍鼴、無乃欺君父。去矣勿聒我、方與古人語。

築室鴨水上、揷柳纔數尺。來住方六年、其高巳過屋。上枝栖鳴蟬、下枝拂浮鷺。中枝映吾几、翠陰書可讀。仰看樹如此、歳月如流速。

山陽嘗て言ふ、著述は梅花水仙の候になる。このとき人忙に書閣に、南窓君子花に對して筆を執る。最も清適を覺ふと。

第八節　幕末には私塾にも盛んなるもの多かりき。その學課及び程度は全く一様ならず。低きは手習所に類し、高尚なるは藩學を凌駕するもあり。唯だ先生その人によりて存す。されば設備に至ても、小なるは唯だ民屋に僦居するのみなれども、其大なるものに至りては豐後日田の咸宜園の如き講堂並に寄宿舍を建て塾生の宅は門側に在り。全躰の結構宏壯にして、毎年新入生百名內外を收容するに足りし也。幕府の末世に榮ゑたる私熟は菅茶山の廉塾と廣瀨淡窓の咸宜園との二を最も盛なりとす。

廉塾　備中神邊にあり。則ち黄葉夕陽村舍なり。茶山は程朱學を奉じ、拙齋春水と殊に親善せり。人となり清澹閑雅。その敎育法も亦極めて淸素易簡なりき。山陽壯時廉塾にあり。茶山は世に聞ゑし詩人なれば藏書も充棟なるべしと豫想せしに、事實は之に反對して、茶山は書齋の中、簡淨にして机邊花を生け、小鳥を籠養す。講餘擔端に坐して靜かに鳴禽を聞けりと。村舍詩を閱讀すれば、靜夜夫妻一燈を剪りて閑に微雨の古芭蕉に滴るを聞くの詩あり。茶山は田園詩人の泰斗にして、溫藉含蓄また得易からざる好先生たり。藩主福山侯廉塾を保護して費用を給しかつ鄕學と爲したり。

過廉塾(賴山陽)　驛門右折路橫斜、亂柳疎篁舊隱家。鳧鴨不知人已逝、猶隨流水唼梅花。

訪廣瀨廉卿(賴山陽)　咿唔聲處認柴關、村塾新開松竹間。斗折蛇行臨筑水、竹批雙耳見豐山…………

咸宜園は塾規の整頓せること漢學塾未曾有なり。學級は初級より九級に分ち點數を以て黜陟す。敎育法には講義及び輪講あり。先生は經書を講ず。そのう

ちに全校の生徒に講ずるものと上級にのみ講ずるものとあり。六級以上の生徒は少數なりき。輪講討論は專ら四書を用ふ。この外に詩文歴史を課す。子類は生徒の自修に任ぜり。すべて宜園の教育法は先生唯だ思索の端を啓發するにあり。故に其講義は大旨のあるところを指示するのみにして、こと更に其解說を豐富にせず、專ら生徒をして聽講して玩味自得せしむるにあり。これ宜園の學風なりとす。淡窓か啓發の見解は老子哲學の造詣より來れり。析玄に曰く、易曰、我童蒙に求むるに非ずして童蒙我に求む、敢て天下の先を爲さずと。亦人をして我に求めしむるの謂也。堯は既に舜の聖を知りしも、群臣交薦を待ちて後ちに擧ぐ。君道は宜しく先を爲す可らざる也。伊尹は天下を以て自ら任ぜり。然れども三聘して始めて起つ。臣道宜しく先を爲す可らざる也。孔子はいへり。憤せずんば啓せず、悱せずんば發せずと。師道亦宜しく先を爲す可らざる也。王翦が楚を伐ち李牧が匈奴を征するが如し。則ち士卒の戰を好まざるを知れるを以て、これに飲食せしめ、これを附循し、必らず其一戰を願ふを見て後ちに之を用ひたり。用兵の道も亦宜しく先を爲す可らざる也。人に先んずる者は人に求め、人に後るゝ

者は人に求めらる。人に求むる者は人に制せられ、人に求めらるゝ者は人を制す。故に曰、敢て天下の先を爲さず故に能く器の長ずるを成すと。これ豈敎育提撕の天機を語るものにあらずや。

淡窓は茶山と對峙して田園詩人の巨擘たり。遠思樓詩鈔は其淸麗の調、宜園の詩風を開く。彼れ天資病弱にして足迹に馬關海峽の東に及ばず。しかも其攻學のあとを見るに眼界洞然として、經傳に對しても懷疑の態度を以て立てり。拆玄は儒老の調和を唱ふる者、義府（一名放言）はその識見を發揮す。この二書は淡窓の傑作にして、宜園の盛況を呈したるは、二書の名聲によること尠からず。玆に宜園の學風を識らん爲めに數條を抄錄す。

拆玄。富貴顯榮我所欲也。當其去追而留之。貧賤汚辱我所惡也、當其來拒而逃之。是以區々之力與造化爭捷也。何異夸父與日競走哉。善制數者不然。我所欲也、及其未去而逃之。我所惡也、及其未來而就之。我逃則彼逐、猶影逐人也。我就則彼避、猶人逐影也。蓋彼之來去、有定數而我常之。先則制物矣。故虛所以爲實也。靜所以爲動也。一所以爲多也。玄所以爲明也。

其用不測。尼父有猶龍之嘆者以此。

○天道福善而禍惡理也。缺盈而益損數也。抑世有善賢而禍者。其人必剛而自矜也。否則在高位也。否則名譽太顯也。此其數盈矣。雖欲無缺得乎。又有姦惡而福者。其人必柔而能屈也。否則儉節也。否則有施於人也。此其數損矣。雖欲無益得乎。由是觀之則理不勝數也。夫人之好賢不能勝其惡盈之心。惡不肖不能勝其愛損之心。有賢者於此、爭毀以希有敗。非不知其賢惡其盈也。有不肖於此、爭助以希無敗。非不知其不肖愛其損也。人情如此。把損之義其可忽乎。

○後之學玄者、其派多矣。莊列之虛無、申韓之刑名、留侯曲逆之機謀、文帝曹參之清靜。下之晉人清談、仙家修煉皆此物也。而未知其教爲正宗嫡嗣焉。要之五千言用世術也。後人不善讀之、專爲枯寂之談。其妙用隱矣。凡世之言言老皆以莊生爲階梯。莊誠亞老者、而要其所歸不必同。觀其自敘之言可見。蓋老子沈深精鍊人也。意在保全性命。莊周爽快洒落人也。意在超脫塵垢。說者混之。所以失也。

○漢籍傳於我邦、有年於此矣。儒說如黍稷稻粱、人既稼而穡之、食而飽之。玄說如萍實、徒玩其大如斗赤如日耳。未嘗剖而食之、則誰知其甜如蜜乎。予惜異味無賞於世、故析剖之、將以貽一二同好焉。顧古今異情水土殊宜。儒說不可行於此亦多矣。至玄門之言無常形無定勢。苟得其要領則無施不可也。易傳曰、乾以易知、坤以簡能。易莫易於無爲、簡莫簡於不言。孰謂孔老之旨不同歸耶。

○義府。陰陽並行、萬物榮昌。陰陽偏勝、萬物消亡。治國亦然。周人執德廢刑、君卑臣驕。躭彼飛隼載飛載揚。周業所以不振也。秦人尙刑卑德、上奢下困。蒹葭蒼々、白露爲霜。秦祚所以不永也。

「深沈精錬」これ淡窓が理想の人たり。彼の一生は蘊藏含蓄を主として動もすれば思索に偏するは、老子に得ること深き所以なり。されば宜園の教育法は老子の處世觀に基づけるものと謂ふべし。近世公私の學校其盛大なるものにして老子を以て標持せるは淡窓の宜園のみなりき。

宜園の寄宿舍には一人につき疊一枚をあてがはれき。この内にて小机と

本箱とを排置し、さて臥床をのぶることとなれば、書生の態度誠に簡素なりといへ又甚だ窮屈なりしといへり。

書生中にて會計委員を撰擧し、賄その外萬般の出納を司らしむ。遠方游學の書生は皆これに學資金を預け置くこと也。上級にして身元富裕なる者委員に當るをつねとす。石井南橋は少年にして高科に上りしが、富家の子にて、委員をつとめしとかいへり。

日田は天領に屬し、繁華なる一邑也。宜園の書生といへば貧者多くして、夜に入れば笛を吹きて按摩をなし、依て自ら給する者あり。町にても、それと知れどそが爲に敢て宜園の書生を輕侮するなどの風は無かりき。雨の夜にて按摩を休みけるをりには、衆生輪坐して互に按摩を稽古することありこれを輪按摩と呼べりとぞ。

時には塾生の中に僧侶もありしかば、書生僧衣をかり笠を被りて托鉢せるもありき。これにつき一奇談あり。塾主は淡窓の孫林外のときなりき。一書生托鉢に出でしに、然るべき町家にて恰も忌辰に當れりとて讀經を請

へり。辭むべきやうもなければ何やらん流暢に朗誦したるに、主人恭しく讀經料を呈しけり。他日林外塾生にいへるは、町人某話しの序に宜園の書生頗る能く蒙求を暗誦すといへり。何人の事なるべきかと。衆揣摩して一生を得たり。生談ずらく、彼の時ばかりは流汗背に淋漓たりき。不得已蒙求の標題を盡く朗誦して、歸りて布施を開き見たるに中に御讀書料と認めありしとて、相傳へて宜園の一佳話となれり。

淡窓が諸生箴とて傳ふるものあり。故郷に歸るとも時々學習して舊業を失墜することなく、愈晩成を期すべしの意なり。長鋏歸來故國春、時々務拂簡編塵。看君白首無名者、多是談經奪席人。（秀島鼓溪劄記）

第九節　寛政天保の頃よりは民間教育著るしく發達せり。名ある儒者の中にも市井畎畝の中より出でし者少なからず。狩谷掖齋。市野迷菴。龜田鵬齋。藤田幽谷。北靜盧。蒲生君平の如きは著聞せり。民間教育の發達は商人の發達、農民勢力の興起の機運漸く熟せると心學者の布教、ことに處在浪人及び郷士庄屋等の盡力によれり。就中前代に比すれば頓に發達せるは農民の教育なり。熊澤蕃

山が、今時の武士の人々は百姓をば薪木ほどにも思はず、唯草や藿の如く思ひぬ。民も亦上を見ること讎敵の如し。時かはらば武士の勢衰へ、百姓の鍬カマチに妻子まで捕はれんを知らずと豫言せし時は今や來れり。農民の活力は春初の野草の如く皚々たる霜雪に蔽はれたるも、生々の氣その下に萌え立つを見る。

龜田鵬齋。六二菴釋慈用といふ僧、龜田鵬齋に言ていふ。貴生始末ナキ人ナレバ生涯身ヲ立ツルコト叶フ可ラ、ザラント。其故ハ貴生ハ元來鼈甲屋ヨリ出デ鼈ノ頭ヲ去リ甲ノ尾ヲ斷チ龜田姓ヲ唱フ。是レ始末ナキ也。

（秀島鼓溪劄記）

農民は尤も教育に後れたるもの也。諸大名或は儒者郷士皆謂へらく、農民を教化するに先づ風教に資すべき歌謠を與へて正響の感化を受けしむべしと。於此乎幕末には教育歌謠の多く世に出でたるを見る。

弘化二年（一八四五）　唐日本流行歌　ふし今様

あめの兩親産み生せば　和　天神七代の　漢
末諾册の尊

性と名のつく人となり　　地祇の始五　天命之謂性
　　　　　　　　　　　　代の末、人代

道は道祖の首途から　　智仁勇三徳を　率性之謂道
　　　　　　　　　　　　以て五品の道

教は孝の文(アヤ)ぞかし　　神道　　修道之謂教

神の心をすふての　　神祇

斯も正しく直なる　　正直

聖の文にしたがひて　　神聖

まことの兒に學ばせん。　　學問

○安政五年(一八五八)水戸封内に流行せし數へ歌(景山公作と傳ふ)

一ッとや人の國より我が國を〳〵　治むる事ぞ始なり〳〵

二ッとや文讀むとても武士の〳〵、心しなくて何をせん〳〵

三ッとや湊を始め備へして〳〵、御城の内まで守るらん、〳〵

四ッとや世にすむ民は日の本の〳〵　深き恵みを思知れ〳〵

五ッとやいつもかはらぬ我國は〱　外より起る害ぞ無し〱
六ッとや旅の宿にすむとても〱　心にかはる事ぞなし〱
七ッとや何を置ても我君と〱　父と母とに事へなん〱
八ッとや八つに我身をさかるとも〱　赤き心を世に殘せ〱
九ッとや心一つになるならい〱　これより堅き備無し〱
十ヲトやあ豐葦原の中ッ國〱　浪は立たせじ春の風〱

肥前の儒者草場珮川は田舍ぶり及び田植歌を作りて農民敎化の一端に供せんとせり。

政事家が農民敎育の必要を唱へ出したる動機は、社會問題にあるもの丶如し。蓋し土地の兼併行はれて小民は益窮し、遂に浪々するに至る。細姦竊盜紛亂一揆その間に生ず農民を敎育するは則ち小農の獨立心を皷舞して、その生産力を發達せしめ、極端なる貧富懸隔の趨向を避け以て社會の永遠なる平和を得せしめんとするにあり。吉武法命(一七五九、寶暦九年歿七十七)の事業の如きは、大勢の一斑を示すものにあらずや。

吉武法命は三宅尙齋の門下にして、敬義學を遵奉す。唐津の土井侯に事へて東松浦郡の郡宰となりしが農民の敎育を思立ち享保十七年(一七三二)致仕して、郡内處々に閭塾を十ヶ所許りも設立し、郷士、庄屋畔頭等の子弟中稍敎育ある者を撰拔して塾頭となし、始めは上流の農民よりして次第に小農にまで敎育せんと企て、自ら諸塾を歷遊監督し、到る處に學談會を開き農民一般を集めて爲學の主意を說けり。法命歿後も、これ等閭塾は、遺風を顯彰して、その中の最大なるもの相知(アウチ)の進藤塾、嚴木(キウラギ)の秀島塾の如きは春秋の釋菜をなすまでに發達せり。郡中の首都唐津は譜代大名の國替地にて維新前敎學は爲めに進步を阻害されしが、郡中村落敎學の歷史は他の模範となすに足るものあるを見るなり。

法命の著に同志會談。聖學要辨。諸塾學談あり。同志會にて學談せし大要を錄せるもの也。秀島皷溪その精神を發揮して曰く、

聖學人道の敎法、天に本づき固有の性に悖らず。聖學心法に隨ひ、朝夕學習して書籍上日用上相離れず全く虛學に流れざるやうにすること肝要也。

尙ほ道統の旨を詳かにし大道を踏み迷はざるやう我松浦郡に於ては行末

天に背かざるべき爲め、猶其分限位を越ゑざるやうとの教法也。それ下民は之を富ましこれを教ふるは聖法と雖も、其教方容易ならざること也。一躰土地の豐なる所は一旦能富むといへども、教道行はれざれば、下賤の常として、衣食住に奢りて自然と其分限を辨へず奢侈に流れて作德多き沃土は豪農に質して終に流地と爲し、富民は益富みて……大富有の農民出來て貧民は次第に續き難く、後には富民を恨み心得違の事御法度をも犯すやうの事生ずるなり。

我松浦郡の如きは土地の辛きこと世に例も無き程なれども、正月より大晦日に至り手に農具を離さず幼年より老農に至る迄業を怠ること無し。……松浦郡にては一家に三十俵の所得ある農民は甚稀にして年により水旱風蟲の憂や又貧困艱難の者を救ひ度き志の者ありと雖も、有金乏しければ力に及ばず。然れ共自分の迫切を忘失せざる者は隣保相助くるの志は忘れざる也。依て問塾の教は小民迄悉く行渡らざるは勿論なれども、一村一戸にも其教置絶ゑざれば自然と其風化流行するは天性を稟たる人間なれ

ば蚩々たる下民も誣ゆ可らざるものあるは天理也。故に農長なる者の子弟を教へ導けば自然と風化の行はるゝの本也。……人數殖えざるは瘠土の民の罪にあらず。故に風化を爲して奢侈に陷らぬやう粗食菜根を咬み、其本業を怠らず、御國政に背かず遊興等に流れず、身を修むるは孝悌忠信也。これ塾の教、聖學の天に配す所也。右吉武先生の教示の全體は則ち天に本づく所の心法書物上より人間の日用上に通ふ教なり。尤も無ければ無用の空言なれば茲に虚實を辨へ必らず虚學に流れざるやう時に應じ又位を超ゑざるやう塾師たる者心得べき大意なり。」

東松浦郡に於ける農民教學の發達は、これに近接せる多久氏領の影響によることも尠からずとす。

第十節　秀島皷溪の會輔塾は農民教育の發達を記するに當りて、閭塾を代表せしむべき適當のものなるべし。皷溪質目を作りて多久の儒者草場珮川に示す。建學の精神を述べていふ。今澆季のとき、凡て人情薄く勉めずして安樂なることを好み、公儀を輕慢し、功利に志し、士農工商儒家も僧家も同じ世の中。是までは民

間の教なき方なりしが是よりは無くては治り難きやうに覺ゆ。然れども新政の事は容易ならず：：：：近世人の狡猾なる昔に倍すべし。故に塾の教、先務にてはあるまじきや。とても其人無くはて其政ならざる事なれども、密かに其理を窮めんと思ふのみ。……

松浦郡は松浦黨の舊地なり。秀島氏は松浦黨の存して郷士となれる者。相傳へて大庄屋を勤めたる家柄也。皷溪は篤學の士にして、松浦記を著はして松浦黨の歷史を纂述せり。皷溪に多とすべきは中年より力めたる剳記積んで二百餘冊に上れること也。そのうち教育の歷史に資すべきものも少なからず。嚴木村は九州鐵道唐津線の一驛にして、秀島氏は山間幽靜の地にあり。當主與一郎氏乃祖の遺風を傳ふ。三十五年夏余秀島氏に宿して溪皷の剳記を讀む。五更夢破疑山雨、起排西窓憶皷溪。蓋し實況なり。皷溪は草場珮川と親交して、其指教を得たること多し。

會輔塾は嘉永二年（一八四九）八月六日の開塾にして、皷溪中年以後年番勤務（大庄屋）の傍ら思立ちたる事業也。後ち隱居するに及び、塾を嚴木驛に移して專ら此に

從事せり。生徒は村内の者多けれども、又他方よりも來りて寄宿自炊せり。塾は自ら之を維持して、生徒よりは、五節句に僅少の報酬を呈し資産ある者は正月に金百疋に酒樽を持ち來る位なりき。

塾規は頗る整頓し、規定(校則)あり、課程あり、罰則も亦備はれり。授業法は手習算術より四書小學迄の講義を主とし、時々試驗を爲す。試驗は點數によりて黜陟す。或は點數に代ふるに花鳥等種々の記號を以てせしもあり。年中行事としては、正月に孔子を拜し春秋に釋菜を爲す。聖像無ければ唯靈位を設くるのみなれども野菜魚肉等を供し、塾主以下各祭典の職を分ち上下をつけて祭文を讀む。珮川の書束によれば鴨兎等釋菜に供せし「お下り」なりとて多久までも分ち贈りしことありと見ゆ。されば手習所より漢學塾までの程度を併せたるものにて、農民敎育の早や興隆の途に向へるを見る。塾の組織は塾主を輔佐するに目付あり、幹事なるべし外に助敎數名あり。生徒のうちに塾頭ありて取締を爲せり。抑も幕末に農民敎育漸く發達したりといふも、專ら行はれしは軍談軍書にして、手習所の敎科は往來類及び珠算の初歩に止まりき。農民のうちには己が姓名よりも書き得ざる

者猶多かりき。明治維新後西國の一地方に大石内藏介山本勘助など古豪傑の名を集めたる一村ありき。その緣由を尋ぬるに維新後農民も姓を附すること、改まりし時、彼等自ら辨ずる能はずして擧げて庄屋に委任せしに、庄屋好奇の男にてかゝる名を集めて戸籍を編成したりといふ。されば東松浦郡の如き、一郡にして四書を講じ釋菜を爲せる農民學校二箇までも有せしは全國に殆んど類例なかるべし。嚴木の秀島塾、相知の進藤塾の外郡内數多の開塾は程度やゝ卑かりき。これ等の塾主は槪ね松浦黨の鄕士なりとす。

○規定

一、孝悌忠信の志無きは義絕たるべし。
一、塾中目付、長者を尊敬し指揮に隨ひ敎を可受事
一、汚穢席上損壞諸物幷に薪菜を荒し中間敷事。
一、朝夕洒掃昏定晨省怠間敷事。幷に就席遊戲無用たるべし。
一、出れば必ず告げ反れば必面し、互に敬禮を可勤事。幷に他所へ出て禮貌を怠り、遊興に志し酒食を企て或は夜行等一切無用たるべし。

以上。

○課　程

昧爽　読書或は授読

旭辰　習毫

巳景　読書或は通読

亭午　習毫

昳未　読書或は看書

薄暮　（黄昏也）習毫

桑楡　（反景也）読書

夜亥刻迄　読書

以上

○定

一、履他人屨　采薪

一、口論打擲　同

一、猥拔刀劍　煮茗
一、汚穢坐席　同
一、角觝戲語　同
一、無用離席　灑掃
一、無斷借物　同
一、好爲市賣　同
一、猥藉他席　汲水
一、裸程亂時　掃庭
一、出入失禮　同
一、手索酒食　同

以上　塾頭

第十一節　幕末儒者猶ほ教學の權を執れるも、時運の致すところ眼界漸く開くるを見る。異學禁は廢物に歸し、蘭學禁も暫時にして已み、儒者の名流は學派を措きて專ら實才を養成することに着眼するに至れり。

一齋。

佐藤一齋は林氏都講より進みて學問所の儒官となり、八十歳に及びて猶ほ經筵に臨み學德文章一代の耆宿たり。人物俊敏にして風采堂々たり。ことに講説に長じ事務の才あり。王學にして陽に朱學を講ず。其人蓋し政事家の風あり。僞君子の世評は免かれ難かりしならん。評判記にいわく

大極上々吉　佐藤　捨藏　名坦　字大道　號一齋

[頭取] 東西々々當時第一の立者株で一聲で人の恐れます愛日樓の親玉てござります。ナント卷軸で申分はござりますまい。

[ワルロ] 成程々々鵬齋錦城など歿せられてより下町に大豪傑が無し。齡といひ學問といひ、卷軸は當り前だ。昔は水虎もいやがる人と葛西因是が評判せし一言の通り今でも兎角我慢の事が多くて同門の松崎慊堂などさへ異議ある噂もござります。又愛日樓文抄、肥後の澤村某が上木存し、三都の學士の評判まち／＼でござります。小石川邊にては僞君子といふ噂にて味噌をつけました

[ヒイキ] 何でもまける事は無い。幕の内に大勢加勢は有るぞ。

見物　よしにしろ〱　悪酒を呑やうであと腹が悪かろう〱

一齋の學說は愛日樓文詩及び言志四錄に於て見るべし。教育說に於て創見の稱すべき無しと雖も、用世の術に於ては往々警醒の言あり。今の學者は陋に失せずして博に失し、陋に失せずして通に失すといへるは緊切なり。彼の說に讀書と靜坐とは打して一片となすべし。そは讀經の時、寧靜端坐、卷を披きて渉目す。一事一理必ず之を心に求む。乃ち能く之を默契し、恍として自得することあり。此際眞に是れ無欲。眞に是れ主靜。必しも一日各半工夫となさずと。

一齋は講說に於て幕末儒者の巨擘と稱す。言志晩錄に講說を論じて

講說之時、只要我口之所言、入我耳、耳之所聞、再返於心。以爲自警。吾講已有益於我。不必問聽者如何。

講說在其人不在口舌。如君子喩於義小人喩於利、常人說此嚼蠟無味。象山說此則使聽者愧汗。勿視爲易事。

讀書と作文との教授の聯絡を說きていはく

講書與作文不同。作文只要譯習語做漢語。講書則譯漢語以做習語。於教

授第一緊要事。不可視爲容易。

若しそれ一齋が近世教育史に一旗幟を建つるを得る所以は、女學校說なりとせざる可らず。彼は女官の爲めに女學所を設け、女子に必要なる讀書禮法を授けて、女官の風儀を一新せしむべしと云へり。三百年間幕政の腐敗は常に大奧よりす。幕政の禍源は大奧にして改革の見込は立たざりしが如し。白河樂翁公も水野越前もつねに大奧の女中の爲めに顚覆されき。一齋は越前守に眷遇を受し者也。彼は大奧の改良は敎育による外無しと思定めしならん。

言志晚錄。方今諸藩置講堂及演武場以課子弟。但至宮閫則未聞有敎法。吾意欲於閫內區爲女學所使衆女官學女事。宜延女師謹飭者使之講釋女誡女訓國雅諸書。幷女禮筆札鬪香茶儀各有師以課之。旁許箏曲絃歌不淫靡者。則閫內必肅然。

鹽谷宕陰は水野越前守に眷遇せられて顧問たり。學術文章幕末の一雄物にして、又一箇識見の士を以て目せらる。彼の生れしとき華甲を贈れる者あり。因て甲藏と稱す。儒者の文弱を嫌ひ、自ら儒者を以て目せらるゝを屑しとせず。不顧

死入儒林傳輕甲一聯藏在家といへり。

宕陰が教育上の著述としては大統歌は廣く行はれたり　彼れ時務に志あり、尤も海外の形勢に注意す。歐州學政の盛を推稱し、本邦教育の大に振興せざる可らざることを論ず。その要に云ふ。蘭人シイボルト我學徒に語りていはく。貴邦之俗は官必ずしも學を勸めず、而して在下の人獨り自ら奮つて教學に任ず。これ吾黨の敬服するところ也と。この言や在位者として聞かしめば豈大に慙ぢざる可んや。これより西洋學制を縷述し大學に醫、治、教、道(宗教)の四科ありとて、更に進んでいはく。我は君子國に非ず乎。而して六十州三百藩明君賢宰慨然奮起して以て大に學政を興せる者は吾未だ之を多く聞かざる也。つぎて昌平阪學問所の不振を慨して、曰吾聞く海內僧寺四十五萬九千四十有奇なりと。大者は乘田數萬石、兇徒數百千人。名山大澤王制不封の地を占めて以て塲境を爲せり。而して庠校は則ち其千分の一に及ぶ能はず。天下の大學を以てして生徒六七十人に過ぐる無し。經綸の悖かくの如し。然るに世の樞機を握れる者公暇日に窮し人才日に降るを以て奈何ともすべき無きに付す　豈務を知らざるの甚しきにあら

ずやと。(宕陰存稿。送井孟篤序)

宕陰は本邦の學徒持久大成の氣力に乏しきを慨き、庠校にありしときは勤苦する者有るも庠を退けば則ち倦む。退庠の後ち不倦者も妻子を蓄れば則ち衰ふ。衰へざる者も祿位を得れば廢し、廢せざる者と雖も一患一災に逢へば則ち挫折すとて、安井息軒をあげて耐久堅忍實に學徒の模範なりと推賞せり。息軒は眇然たる小丈夫誠に天下の醜男子なり。矻々刻苦眼光紙背に透る。幕末の一大家なり。

宕陰存稿(送安井仲平東游序)歲之甲申來入昌平黌。居三年矻々不懈。……間從其君祇役江戶。所居舍湫隘樸陋塵埃滿席。而讀書之燈常烱々。時從師友出其新得、輙即驚人。戊戌歲遂辭官挈家來就學于江戶。居無幾而逢火資財蕩盡。未踰年季女又病殀。仲平自降祿爵離桑梓了然僑居乎三千里外。竈突未黔、累逢不虞之難人倫之變、皆人所不能堪。而志氣不少撓讀書日必盈手、作文可以囊計。齡垂五十俛焉刻厲不知頭之將荒。此豈今世之士哉……古人云性敏者多不好學。仲平以最敏之質嗜學甚於食色故格致日

新識度日讀……

大鹽中齋は陽明學派中一箇出色の人物なり。其人となり摯悍にして機鋒頗る鋭し。其著述に洗心洞箚記及び洗心洞學名及學則あり。學名學則は教育說を述べたるもの也。彼は我學只仁を求むるにあるのみ。學に名無し、強て名けんか、孔孟學ともいふべし。我學只六經四書を治むるにあり。仁の功用多端なれども、其德の至、其道の要唯だ孝にあるのみ。孝經は四書六經の精髓にして、聖門の要こゝに盡くとなせり。彼は孝經を推尊して孔氏遺書第一となし、太宰春臺の孝經說を贊成せり。

春臺の孝經說大要、(洗心洞學名及學則)先王之道、莫大於孝、仲尼之教莫先於孝。自六經而下無非孔氏遺書。其有出孝經之右者乎。何以言之。天下無有無父母之人故也。又曰、自二程至朱熹氏皆疑孝經以爲後人所擬作。朱子又妄改易本經篇章著爲經一章傳十四章且刪去其本文二百餘字。孔子曰信而好古。若朱子者可謂拂矣。自是以來學朱子者舉不信孝經。塾師不以爲教至今童子罕目弗見孝經悲夫。先王之道莫大於孝。仲尼之教、莫先於孝。夫子

不ㇾ曰乎、吾志在₂春秋₁行在₂孝經₁。是以後世人主不讀書則已。苟讀書者必自₂孝經₁始。況下焉者乎。今朱子之徒、不ㇾ讀₂孝經₁而學₂心法₁。其不ㇾ爲₂浮屠之歸₁者殆稀……

春臺は古文孝經を刊行して、朱子批定の孝經を排斥せり。山陽は則ち曰、孝經は西漢の好事者歷代の謚號孝を冠するを見、聖言に附會して時好に投ぜし僞作のみ。久しくして廢せざるは書名の美なるを以てのみと。

中齋は曰く先王唯孝を以て國を治む。孔子もいふ孝は德の本なりと。道の孝より出でざるは則ち釋老異端のみ。聖門の學まさに孝經を治むべし。然らずんば六經四書支離迷裂して一貫する能はざるべし。孝經一卷首より尾に至るまで遂に一箇の仁字無し。古來人の思ひ至らざるところ也。某更らに其一箇仁字無き所以を繹ねて謂へらく。人能く德行實踐、孝經云ふ所の如くなるに至らば、則ち仁の體用餘蘊無しと謂ふべし。是を以て孔子此一字を隱却す。その旨深哉。孟子は却て洩らして曰く堯舜之道孝悌而已矣と。

齋藤拙堂は津藩に事へ、文章を以て名あり。津藩文武教育を總裁し、成蹟あり。

拙堂の敎育說は、文武に達し、時務に通ずる實材を養成するにあり。時務に通ぜんには經書を講ずるのみにては不可也。必ずや古今時局變遷の理に通じ、現在の地理法制に明ならざる可らず。而して社會の事物に接し旅行以て人物山川を見、知見を開くも亦活學問の一端なりとせり。津藩の資治通鑑の出版(所謂津版拙堂の輶軒書目の著。皆この見解より來る。彼の敎育說に於ては、地理歷史は敎育上重要なる位置を占むるものなり。拙堂亦禮樂の敎を肝要とし、禮樂分つ可らず禮ありて樂無きは偏固なる氣風を造出すべしとせり。

拙堂文鈔(送野田子明序)益人意智莫如讀書。……然而今世讀書之人或任一職非迂腐不中用則乖戾生事。世遂以爲讀書無益而有害。是非讀書之罪。蓋不善讀書之故也。夫書死物也。事活物也。固有不相合者焉。故學非獨稽古亦不當不知今也。四代之禮不必修三王之制不必倣。唯學其道不學其迹察人情審事體擇其宜於今者斟酌行之。是之謂善學耳。……聖王之造士、既敎以古訓又示以時制使學者通曉時事。故學士中莫不可用者。今也學仕異途。青衿之士不得窺朝廷。其於時事懵乎不知。學之不若古正

在於此耳。……　政事之在上者雖不可得而窺、如其布在於下者可得而觀。學者宜博聞多見參考當世事以蓄之胸中、庶幾所讀之書皆可以適用也。　苟有志於此、則莫若周流天下、身歷目擊、自民之好惡、人之情僞、謠俗尙習之微、以至田野產物之宜、渠防灌漑之利、市聚通塞之方、莫不通曉。　交偉人豪士以長識見、嘗險阻艱難以忍其心性。　知其所不知、益其所不足。　是爲善讀書者也……

當時敎育の風は學校は自ら學校、社會は自ら社會といふ風にて世務に疎きは讀書生の本色とせられたり。　西國の某藩にては在學十三年經義に通ずと稱す、しかも家に歸りて始めて澤庵漬に重石を要することを知れる學者ありき。　拙堂は昌平校に在ること廿年、讀書作文すでに精にして、漸く種々ならんとして鄕に歸るの儒生を送りて、實用に遠き學風を嘆慨せり。

拙堂文鈔(送樋口士輿歸會津序)幼不供灑掃之職、長不執禮樂之業。問其所業則曰讀書而已矣、作文而已矣。　囚首垢面偃仰蠹冊蟬帙之間、不屑他事、曰我書生也。　世亦遂視書生如僧侶、視學宮如寺觀、舉置之於度外、漠然不相接也。　如此而一旦入官、宜其多窒礙也。　是以學者入官勢不得不捨古而講今也。　異哉古

人學古而入官、今則入官而捨古。此無他、庠序之教使然已。且學記云九年知類通達、强立而不反謂之大成。由是觀之雖古人好學之篤其居庠序者以九年爲大成。況今之居庠序又可甚久哉……

學校生活の年限は今に至りて尙ほ未定の問題に屬するが拙堂の謂へる如く餘り長きは不可なるが如し。

拙堂時務に志あり、殊に海外地理を研究す。彼れ洋學に通せざるを以て譯書は廣く求めて讀まざる無し。輶軒書目は彼は他の儒流に拔くを示すもの也。拙堂は箕作阮甫始め間宮倫宗等の志士及び洋學者と交際して力めて聞見を博くせんとせり。されば拙堂は海外の學術を崇び學制を讃嘆し、泰西の地理歷史より醫藥兵制曆算理化の學に至るまで彼の學制に倣ひて、これを吾學校に採用するの利あることを唱へしかども、泰西の教法に至りては妖邪怪誕とても儒教の光明正大なるに比す可らずとせり。天保十年(一八三九)蘭學者新宮凉庭が順正書院を京都に建て、專ら泰西の形而下學を教へ倫理のみは孔孟を信奉せるを推賞して吾意を得たりとせり。拙堂をして現今吾國の學制を見せしめば必らず首肯するならん。

順正書院記。平安新宮凉庭翁以喎蘭醫法雷鳴海內。而篤信聖人耽讀墳典。嘗歎曰京師首善之地而學校久廢、豈非大缺典歟。乃出私財營書院於洛東瑞龍山下建祠祀宣聖及醫祖。講堂生舍以下悉具。多貯漢蘭書籍於其中以待生徒之乏資者。京尹間部侯嘉之親書扁曰順正書院。林祭酒又書名教樂地四大字贈之。并揭其楣並翁之志也。翁本山陰人、學醫徒於京師其業大行。稍入山積而惡衣菲食自奉甚儉。積而能散、賙急救困者不可勝計。今又有此擧。殆費萬金拮据未已。謀廣置學田傳之久遠。：：：：

蓋聞泰西諸國設學教士皆以適用爲主。自天文地理曆算醫藥至銃砲之術航海之技皆講於學中。蓋有支那上古之風而其業歲修其用日精。是豈非所謂道失而求於夷者耶。今翁所營一書院耳、軍國諸伎非可悉備焉。唯技之關人命切國用者莫若醫藥。故先首講之於院中。以存一端。抑亦泰西設學之意已。夫泰西諸國之於天文地理以下之技並非支那所及。獨其所爲道妖邪怪誕不可方物。比之我聖人繼天立極、光明正大爲萬世標準者猶如爝火之於太陽鬼魅之於麟鳳。學者豈可捨此而取彼哉。今翁修喎蘭之學至於其道則擯

棄之以爲異端、獨篤信孔孟而尊奉之無他岐之惑。所謂由順正以行其義者蓋在於此。是其所以名書院歟。

西洋は理學の發達東洋の遠く及ばざることは知られたるも、形而上學に至りては太だ卑野なるものとせられたり。紅毛碧眼は巧智にして禽獸に近き者と思はれぬ。蓋し當時西洋形而上學未だ本邦に傳はらず。彼の敎法禮儀に到りては邦人唯だ傳聞臆想せしのみ。

秀島鼓溪嘉永二年長崎行の劄記中に曰く、蘭說その窮理の細密にして用を爲すところは取用ひて家國にも益あるべし。左れども……蘭人は親死すれば其骸骨を藏するに首を切て燒酎に漬け置よし。左れば數世經ても腐ること無く子々孫々に至り其顏を拜すること祖先を慕ふの情深く聞ゆれども、是偏倚の爲すところ也。斯く致せば肉も數世腐れぬといふところは窮理の功なるべし。……人間の禮を踏み行ふは聖人の道より尊きは世界に無し。人の勉むべき克已復禮の道は彼に無し。禮無ければ禽獸に近し……

此の如きは長崎に近き地にありて、外國人の事を見聞せる士人中にも行はれし當時の想像説なりけり。

順正書院は泰西の學制に倣ひ、東洋倫理を根本思想にをきて設立したる最初の學校にして、廣く智識を世界に求めて邦基を振起するだけの考はありし也。此の如きは幕末に於ける改進主義の教育家の思想なりき。拙堂は順正書院を讃嘆せしかども、彼は本來儒生にして且つ其境遇上よりするも、更に一の順正書院を起すまでの決心は無かりき。百方經營して、其書庫に廣く輯軒書藉を集藏する位にとどまりき。

出版は拙堂の事業の一也。資治通鑑は木版なるが彼は武英殿聚珍版に倣ひて經世文編及び三禮肆考を出版せしめたり。聚珍版は則ち活版なり。

第十二節　諸藩學校は寛政より漸く興り天保に至りて始めて普ねく全國に設立されぬ。岡山の如き萩の如き佐賀の如き頗る先鞭を着けたるものもありしが概して言へば諸藩學校は幕末の教育史を充たすに過ぎざる也。

諸大名の學校は、之を概論すること太た雜事に屬す。學風、學課、程度より設備諸

般の事千差萬別にして、其消積兩極を取りて論すれば、學校の規模、敎育說の程度に至るまで殆んど世紀を隔つるに似たり。或者は大に學政を興し、泰西の長所を執りて日進の智識を求めんとの精神を示せるに、或者は程朱を株守して學科は經書考馬槍劍の外に出でざるものあり。三百諸侯思ひ〳〵に樣々の學風學制を列陳して、一時島帝國をして學政の一大展觀場と化し去りたり。恰も高大なる休火山の舊火坑に薰風花時を催ふして、千種萬種の花一齊に咲き出でたるが如く、燦然たり爛然たり。而して何處とも知れず、其下底に隱々一道爆發の氣を蓄ふるを見るなり。先づ時局の大勢を大觀して然る後ち徐ろに各地方の歷史と其敎育とを比較研究するときは諸大名の學校は吾人に多大の興味を感ぜしむるものあり。これを評論せんには更に浩瀚を來たすの恐あるを以て、玆に其中を執りて大名の學校の一斑を示せん。

○學制　諸大名の學校は藩士を敎育するを目的とす。

就學年齡は八歲より十五六歲までを通常義務就學の年限とす。それ以上は身分と志望とに依る。卒以下は寺子屋又は家塾に通學するものとす。八九歲以前

學課

は一般に家庭又は寺子屋教育によるものとす。

學校は教化の源泉なれば藩主在國の年は時々臨校奬勵を爲し、また月次定日に講義ありて、藩士一般をして聽講せしむ。通常は三十歳若くは四十歳迄の藩士は聽講の義務あるものとす。

藩士の在學は二十餘歳迄なれども、往々篤志者ありて、在學十數年を過ぐる者あり。

藩學にては社會教育の爲めに時々講演をなして平民僧侶にも聽講を許すことあり。

學校は時に感化院の目的に使用さるゝことあり。少壯藩士放蕩無賴にして非常手段(遠島又は坐敷牢)を以て懲戒するの外致方無きときは、親族會議し更に藩黌に入學せしむ。この方法は長州藩にてはつねに行はれたり。

學校に聯帶して屢々設置されしものは修史館なり。多くは藩史を修め、政教の資料に供するものなり。

學課は儒學を主とし、國學歷史習字作文あり。禮儀(大概小笠原流)を課すること

あり。下級の武士には算術を課す。幕末に至りては時勢の必要に應じ洋學及び醫學館を附設せしところ多し。

武道にては兵學及び弓馬槍劍を課す。幕末には洋式銃陣を課せし所も多し

教官

文武各課すべて世襲の教師あり。文武に秀でゝ新に召抱へられし者もあり賓師(客分)として扶持のみを受けて教授する者もあり。教師には教授助教授訓導ありて、祭酒を以て學長とし高級武士中より學校奉行を置きて學政を總裁せしむるをつねとす。

寄宿舍

藩黌には大藩にては寄宿舍あり。これを寮と稱す。城下に住する者と雖も志望によりて入舍を許す。藩より食費を補助するを以て貧生は寄宿せる者多かり。學具寢具等は大概自辨とす。

寮にては一室に舍長あり。寮生中の高級生を以て充つ。通常一室を二分して、舍長一人別室に居る。一人にて通常疊二枚位に占居せり。

都講

寄宿舍に都講あり。別ち舍監なり。寄宿舍を監督し兼ねて講義をも爲す。生徒兩刀を帶し武士道を以て相磨勵せし世の中なれば、擧動往々荒々しくして、都講

たる者尤も困難なる大役なりし也。善く都講を爲し得ば天下爲す可らざるの職無しと言ひし名士あり。また高杉晋作は都講を力むるは奇兵隊を御するよりも難しとせり。奇兵隊は多く慓悍無頼の士民を集めたるもの也。以て寄宿舍の情況を察すべし。

寄宿舍には門限あり。毎日外出歸宅等自由なれども、文武の日課繁多なるを以て中等の勉强生は稀に歸宅せしなり。

寄宿舍の食事といひては何處にても極めて粗末也。大概所謂「燧箱」と稱する辨當箱にて供す。冬の朝は稀薄なる味噌汁を出す。東都の私塾にても食事は粗惡にして、安井息軒の如きは、ことに節儉家なりしかば、塾生に冬分能く南瓜を供したりとの話傳はれり。また寄宿舍中の貧生に至りては、僅かに蒲團一枚を以て冬は之を身體に捲きて臥し、(所謂かしは蒲團也)歸宅するも別に蒲團無きを以て休暇にも夜は必らず歸舍せし者もありき。すべて當時の書生は粗衣粗食を以て本分とせしかば往々不養生に渉る事もありしかど、氣力壯健にして自ら奉ずること薄く、能く身心を鍛錬せし一事に

至りては今日の學生の及ばざるところなり。されば大名の學校にて規模の稍大なるものは諸般の設備もまた整頓せり。講堂事務所、寄宿舍。書庫。武術道場馬場藥園。聖堂等を具備せるものあり。建築は疊に机にての坐敷稽古れば採光の設備不完全なるも多かりしが、仙臺の養賢堂は大槻東陽の設計に成り一機軸を出せり。

大槻東陽は儒者にして行政の才あり。養賢堂を建つるに當り、設計頗る大なりしかば時議異論多かりしに、彼は學校の敷地を劃定し、屏障を築き高大なる黌門を建てゝ徐々に校舍の建築に及ぼせり。敷地と本門と既に巍然として定まれるを以て老臣等も新建の中止を議するを得ずして遂に養賢堂の完成を見るに至れり。東陽の行動往々にして覇氣を帶ぶ。策士の評空しからざるが如し。養賢堂學制の刊本あり。

養賢堂の講堂は非田の圖の如し。其各堂を以て教場或は座敷にあて、中央の一室を講堂とす。採光の方法にはことに注意せるを見る。

講堂の現存せるものは少なし。水戶の弘道館の講堂は今は幼稚園となれ

り。岡山學校の講堂は師範學校の講堂たり。これ等に就きて見ば古制を知るを得べし。岡山師範學校は今尚ほ昔の太鼓を用ひて時を報ぜり。それに反して佐賀師範學校女子部の敎場は舊藩主の座敷にて、二階に閑叟公の書齋あり。洲本女學校の講堂は舊城預り家老稻田氏の大廣間にして裝飾頗る宏壯美麗なり。

職俸

敎師の職俸としては常祿の外に盆暮に手當あり。藩主に進講し、或は歷史制度取調等の用向を命ぜられしとき抔は臨時賞賜ありき。

學費

學校の經費は藩主より米或は銀を附與す。或は學田を附與せしもありき。學費は小藩にて百石位なりも。大藩にては數千石に上るものあり。岡山にては光政蕃山の君臣學政振興のときは岡山學校の經費二千石なりし。

献備

或藩にては學費の爲めに藩士に献備銀を課することあり。舊膳所藩學制によれば祿高百石につき銀百二十目の割合なり。即ち米一俵に付き銀一分七毛に當るといふ。

敎育費は焦眉の急に非るを以て、諸大名財政困難に及べば敎育費忽ち削減さる

ゝは三百年間の常態なり。かつ學校を擴張し文武を奬勵すること盛んなるときは、屢幕閣の嫌疑を招くことあり。備前三十餘萬石にして、二千石の學校費今日より見れば敢て過大と云ふ可らざれども、幕閣の干渉によりて光政退隱の後ち、五百石に減少せられぬ。三百諸侯の學校費は時に增減ありしも、維新政府の計算に依れば略ぼ三百萬兩なりき。是れ幕末の敎育費と見て可なり。

舊德島藩集堂安左衛門建議書。學校の師範は過分の祿格を被下、其人一代切にて職を世々にせぬ御定にて御招被遊候て永々此例變し申さぬ樣に仕度候……何れとも師範は時の賢才を新に御招き可被遊儀と奉存候。

大藩の學校にては、小學大學を分ち或は之を培根達支などゝ名稱せし所もありき。かゝる學校にては敎則も整頓し、生徒にも大學生の中に講堂生居寮生の分ちありて成蹟優等なる者は居寮生に命じ官費を給する也。さてその中又秀才を拔擢して江戸の學問所に留學せしむ。中藩以下にては各樣の制度は無く、學校は單一なり。小學は藩士の義務敎育にして、大學は志望者を取りたるが普通の例なりき。

教則及び管理法

習字　毎日朝五ッ時より九ッ時に至る。酷暑の節は朝習と稱し、未明より五ッ半時まで爲さしむることとあり。流儀は一躰に御家流にして、いろは數字、名頭國盡京町盡し、商賣往來、庭訓往來等なり。漢様の書は讀書生の志望により儒者に就き或は自修せるも多かりき。

素讀　手習の時間内にて順次に學ばしめたり。主に四書五經の素讀にして、此以上は一定せざれども、蒙求十八史畧左傳八大家文の類なりとす。

講釋　講釋には定日あり。當日は學頭(祭酒)以下出席して主に經書を講ず。藩主臨校のときは老臣以下隨從聽講す。また時に庶民にも聽講せしむることあり。

講義　教授以下毎日時間を定めて擔當の學科を講ず。

會讀　教師會主となり、かねて生徒に豫修せしめたる書籍に就き討論研究す。書生の實力を錬磨するは、この方法による。

算術　下級武士には必修學科なれども、平士には隨意科たり。一般に數を講ずるを耻かしきことゝ思ひしは維新前の武士風なりき。されば算術は六藝の一な

れぱとて特にこれを奬勵せし所もありき。斯波多流の教育を以て目せらるゝ薩摩にて算術を奬勵せしは注意すべきこと也。

文化十三年膳所藩武術改心得書

一、算筆の儀は六藝に候へば心掛不申候半では不相叶儀に候。勿論武術を重立候義に候へども、算筆の義も御用に相立候やうに心掛候はゞ、武術目録濟等に准じ、且武術少々未熟に候とも御取用に候間可致出精候事。

鹿兒島造士館掟

一、筆算の儀は日用の急務に候間兼々可致修業事。

試驗

試驗　習字には一月に一度の席書。素讀には時々吟味或は春秋に大吟味あり。獨看(自修)以上の勞力に達すれば會讀によりて平生の成蹟を考へ、時々試驗あり。試驗の方法は大要昌平黌の法に傚ふ。別に操行及び出勤の精否を銓考して、黜陟するものとす。

學事不振の際には出席をば奬勵して、精勤者に種々の報賞を爲したれば、弊

害も隨つて生じたり。　肥後中山昌禮の學政考にいはく。　學校に於て席を重ぬるときは庸才にても賞を給はり秀逸なるものにても學校に出でざればたとひ、德行道藝ありとも賞せらるゝこと無し。……………

試業の節生徒にも茶菓を供することあり。

文化年中加賀藩士大島清太の學事意見書にいはく　試業の節茶菓被下候儀元來昌平阪御學問所にて試業の節茶菓被下候は師官の人々當日詰切居候を慰勞の御趣意にて書生ゑも被及候譯に御座候。　夫故試業に罷出候者は各宿題等に骨折、席上も精誠力を用ひ相調候故何も難有頂戴仕候。　當時學校の模樣格別辨書に力を用ひ候樣の儀一切無御座候故。　頂戴物も但御作法と而巳相心得候樣に相見申候。

休暇　學校の休暇は年頭五節句其外臨時祝日又は鳴物停止等の間等にて夏冬休暇の制無きを常例とす。

文政の初年、彥根藩士中村加介の學館私議にいはく　大暑の節五十日許休講にして學校內外の大修繕を爲すべしと。　然れども是れ三五年間の事に

て慣例となすに非る也。

出席　休暇の外は生徒は出席すべきものにて、精勤すれば相當の賞あり。　生徒欠席の正當なる理由と認められしものは大要左の如き歟。

一、父母祖父母妻看病
一、従兄弟姉妹以上及び舅姑病氣大節の節
一、兄弟子姉妹おぢおばおいめいいとこ可致看病者無之候はゞ欠席可承屆候條其様子紙面に可被調出候事
一、自分冠婚
一、先祖歴代并に於家忌掛之分、年回
一、祖父并父等其家之吉事
一、祖父并父江戸等發足歸著送迎。
一、武藝稽古別業。
一、武藝濱稽古年中一度之分は欠席可承屆候事。
一、家内死去人葬送之節

一、祖父幷父自分指控及び御用の外相愼罷在候節無構出席可被致候事。　日本敎育史資料載するところ加賀藩士學事意見書に據る。

學校には出席簿の設あり。又各自の名札ありて出席を調査す。　欠席屆はかねて本人又は父より差出さしむ。　遲參又は無屆欠席に就きては制裁あり

膳所藩遵義堂御世話人の前に有候御定目の中。

一、毎朝子供手習所へ罷出候へば先づ世話人へ相屆、且御堂懸りへ禮式致し其後夫々の場へ致著座可申事。

一、不參又は延引致候はゞ世話役へ相屆可申事。

一、無子細四ツ時出席致候はゞ半日の出席に相成候事。

一、武術に罷出遲參に相成儀は其親又は親族より兼て書付を以て何の日遲參に相成候との儀世話役へ斷置可申事。

但遲參四ツ時限の事。

一、無子細不參拾度に滿候はゞ其親又は親族罷出斷可申事。

生徒心得

朝日山藩學校經誼館揭示（鹽谷世弘撰）

一、學生宜先領讀書旨趣如何（本文略）

一、文武一致不得視爲兩岐（本文略）

一、臨課試尤要省欺誣之念。自欺欺人乃萬事之病根不可不痛芟深伐者。學者終身工夫專在此。今臨講章對問之時、竊倩他人代撰。或多方探索課題預作以備試。是勿論欺上乃自欺之尤甚者。各人當誓天地神明上自省察。

一、讀書之益、專在會讀輪講。（本文略）

一、會讀輪講須極力問難論究。執經會講有疑必問。有問必究。弗究弗措也。大抵學者之憂在於愧己之不知抱疑而不問。蓋解乎心者也。故講學之益專在論究。論究則無一知半解之弊。或能獲未發之旨。或能見言外之意。凡口欲言而不能言者、必至於能言而後止。當仁不讓於師。師弟問難討論至聲色俱厲亦所不責。但務去好勝之心悟非則服。方是君子之爭。

一、修儀節愼言談（本文略）

一、長幼卑尊須相敬愛（本文略）

一、朋友交誼　　　　(同　前)

一、受業須戒臘等貪多　授書之法自有次第。不容越等。授讀者將前日所受溫復數遍一字不失。然後新受不得貪多妄請。幷舊所得而遺失之。

一、珍護典籍　古人有故紙有五經詞義及聖賢姓名不敢他用者。而況經傳典籍宜何如珍重。今約勿狼藉几席勿分散卷冊勿出篋而不收。臨講會置席、必用杷樸藉之。至館書借觀觀了即納勿遺忘。

膳所藩遵義堂御定目に左の條項あり。

一、惣べて役懸りより一統へ申渡有之節は疊に手をつき承り可申事。

一、子供同志途中にて別れ掛け禮式可嚀に可有之事。

また曰く、

一、筆墨紙大切に致し可申候。無駄に遣捨て入らざる筆墨紙宿より持參致間敷事。

一、なぐさみ物取扱幷に文庫等に入置候儀急度無用之事。

一、相互に借りかし致間敷候。若無據入用之儀有之候はゞ世話役へ申出づ

べき事。
一、無益なる世間話致間敷候事。
附り人の取沙汰そしりばなし人まね告口一切無用之事。
一、門並戸口出入の節我先きにと不致互に讓合可申事。
附り途中にてじぎ合叮嚀に可致事、

○教場整理。
授業の終始は拍子木を以て報するを常例とす。生徒列席し、再び拍子木にて教師出場、教場の出入及び着席は整肅にして禮儀を守り、聽講中は手をつき、又は手を膝におき、脇見雜話を禁じ、手習のときは早書等を禁ぜり。聽講のときは通常、生徒用の几無し。

小學生に向ては授業中無言を命ずることあり。手水等に立つにも認可されたる度數に定限ありて、その上は特に許可を請ふものとす。

教場整理につきて、尤も混雜に流れ易きは會讀輪講なり。而して書生の實力を養成するも此にある故に、維新前の教授は、この方法を殊に重んじたり。

加賀明倫堂助教大島淸太の學事意見書中に會讀輪講の病癖を列擧せり。爭氣を發する事。○勝を好み負け惜みする事。○己を是として人の說を聞入れざる事。○己に定說あるを匿し置き姑く人を詰り試むる事。○己に定說無くして、徒に人の誤を非論する事。○己の非を飾り他說に雷同する事。○鹵莽に會得し、他說をうはべに聞なす事。○大抵に己を是として疑を不發事。○疑敷義有之とも己に任せて安んずる事。○未熟なるを耻ぢて言を不出事。○人の煩を憚り不致質問事。

これ等の類一もありては學業進益なし。書生專ら此處に於て練心工夫致すべしと論せず。

同人の意見書中に會讀の整理を論じて、

一、着席の時兎兩手に書物を捧け身躰正しく席列を以て進み可申候。席に附候上、又拍子木打候て敎官等罷出申候。其上にて致脫刀鬮筒を廻し、鬮當り候上、敎官等江一禮致し、書物を戴き相始可申候。辨解終り候處にて一禮には不及候。會讀終り候て敎官江致一禮、書物を戴き袱に包み、帶刀

致し、教官等退坐の上各席列を以て身躰よく溜りに退可申候、會讀始り候後出座の人々は教官坐付所左りの方に罷越致一禮、終て座中に一禮致し、列居につき致一禮、書物を戴き可申事。

一、會讀中討論之上、戯謔之語及侮慢譏笑等無之樣相謹み可申候。且大聲に笑を發候など不可然候事。

一、會讀中無益に立さわぎ溜りに入り煙草用候義無用に候。其外手を弄し肩を搖候抔致間敷事。

一、會讀執讀帳及び名札等調べ方字躰正しく草略に無之樣可調事。

會讀の方法及び管理は右にて要を得たりといふべし。

膳所藩遵義堂御定目中。小學生に對する教場整理の項目あり。

一。手水等に場を立候義晝夜三度晝後二度に相限候事。但無據義有之候節は世話役へ斷の上立可申事。

一。無言中渡又無言濟節等　拍子木五ッ打申候事。

一。無言中聊か法を破り候はゞ其罰有之候事。

手習の分量、

一。草紙定の通り濟候はゞ行司役の改を受可申候事。

手習の分量は左の如し。

	午前	午後	合計
一二字書き	五冊	三冊	八冊
六字書き	八冊	四冊	十二冊
四字書き	十冊	五冊	十五冊

一冊十五枚

一、草紙冊數定めの通り毎日急度習可申候。若し無據義にて習はれぬ事も候はゞ世話役の者より其時々に差圖可致事。

一、草紙の紙數定の通りより減し候はゞ一冊には成り不申事。

一、早書並脇見いたし習候儀急度無用之事。

一、一枚に一字二字計り書候て草紙數を習はゞ定めの草紙數より餘計相習はし可申事。

一、習候草紙は行司の改を受け其上にて早速ほし可申事。

一、行司(生徒中の當番也)机を積み候節急ぎ不申叮嚀にかたつけ物の損じ不申樣に隨分靜かに致し可申事。

校内取締

校内取締　生徒控所あり。校内にては疾走喧擾を禁じ専ら靜粛をすゝめ、禮儀を勵まし、履物傘等の整頓に至るまで注意して作法を習はしむ。大名の學校にては書籍は多く學校より生徒に貸與したれば、其取扱方より校内の樂書及び器具の損傷等を太く戒しめたり。校規少しく緩めば、生徒の亂暴は今日の比にあらざりし也。文政の初年彦根稽古館に於ける生徒の樂書損傷等は其一例也。

彦根藩中村加介學館私儀。……莫大ノ業ヲ命ゼラレ成就シタル學館ヲ官ヨリ造立セラレタルト申事ヲ一統忘却シ、甚ヤクザニ心得、果テハ諸道具損スルコトハ勿論、建前敷居鴨居戸障子ニ至ル迄法外ノ樂書ナド出來障子ナド張替スルト直チニ破リ、ソレヲ誰某ノ致シタルト申ス事知レズ。人ノ住ハヌ空屋ノ如ク成行キ諸役人モ致方モナク適々疊替修覆障子張替道具新出來ナドアリテモ、速ニ損シ諸用方ニテモ呆レ居ルヨリ外ハ無之、其起リハ從來所々ニ有之武藝稽古所ヲ一緒ニ寄セラレタルニテ學校ナド申ス、筋ニハ無之ト申ス趣ノ御觸出シ故一統苟且ニ心得今日ノ弊風生ゼシニヤト思ハルゝ也。稽古館ノ始ラヌ以前ヨリ學校ト申ス事公儀ニ御指障リノ事

アルト承ハル。公儀へ障ルコト有リテノ事ナラバ論ナキ事ナガラ、稽古館ハ古ノ學校ト同シ事ナレバ諸事文雅ナル事ヲ主トシ教ヲ設クベキ事ニアラズヤ。

釋奠

諸大名學校にては釋奠す。聖廟は必しも設けず。中藩以下にては學校にて聖像(畫像)を掛けて、これを祭るを常例とす。釋奠の式は純然支那風に倣ふものあり。或は全く日本式なるもあり。則ち神道の祭典の如くにするものあり。釋奠廣く行はれざりし前には正月に聖像を拜する位の事なりき。

肥前多久の聖廟にては支那服を著けて釋奠す。膳所藩にては神酒洗米を供し、上下を著けて祭文を讀む。到る處樣々なり。

釋典にあたりて、孔子に配亭するに本邦文敎に功ありし名賢を以てするの思想は幕末に至りてあらはる。文政四年(一八二一)津藩國校興造記に曰く。春秋行釋奠之禮。孝綽(津阪東陽)建議。以黃備公菅公配享左右。以我邦文學之所原也と。肥後中山昌禮の學政考にも亦いはく。聖廟成るの曉には秋山玉山などは宜しく

配祀すべきものなりと。

諸大名學校の制叙述詳細なるを得ず。暫らくこれを他日の刊行に期す。日本教育史資料は諸大名學校に關する資料豐富なれども、實行の如何、變遷の眞相等に至りては知るを得ず。讀者これを以て槩として古老の實話學者の文集等を併せ硏究すべき也。資料に逸せる諸藩は唐津及び膳所にして、膳所藩學制は杉浦重剛氏の刊本あり。

京都學問所

第十二節　水野越前の天保の學政改新は、京都の敎育にまで及びたり。天保十三年九月京都開明門院の遺跡に學問所を建てゝ縉紳子弟を入學せしむ。（一八四二）京都學問所の計畫は寬政改革のとき既にこれありき。この事もと光格天皇の叡旨に出づ。高山彥九郎は之を以て王室中興の機運を進めんとし中井竹山又この事に關係せしか、竹山は幕府に心を寄せしかば其建議は高山の素志と全く反對せりき。叡旨を奉じて。仁孝天皇の御世となりて、京都より叡旨を傳んていはく

近來別而堂上之風儀不宜身柄不相應の游興卑俗之服を着し遊里ゑ忍行人

々も有之歟の風聞相聞候に付き被加制止候得共兎角不相止不法の進退等增長致し、關白殿(藤原政通)にも誠以被恐入旦暮に深く御心配被成候。……年來何卒致學問候樣相成度御存念に候得共堂上困窮之人には授敎師招請も難出來、束修調兼候に付き不學文盲之輩多く相成候次第誠以御心配被成候に付而は學校杯と申候而は禮式作法之古禮も候義御大造にも相成可申……せめては習學所被仰付若輩之人々月番三度計敎授有之性行端正篤信に相成……全く習學の爲に淸菅兩氏又は聊心掛の人を兩人計り被撰專塲所以下御預け又外に六員計り有職學生商量被仰付、京住篤實之儒業師を被召素讀及び講釋指南被仰付、御會〇物幷諸雜用且建物修復書籍之料何程關東より被寄進候樣被遊度。大抵堂上四十歲以下十五歲以上非藏人二百人計幷に御內勤之者にも諸司官人子弟之外等追々相願候は人數可被加候。右之次第故年々御用途金として米五六百石餘程被宛行候はゞ精々質素に被仰付候得共。堂上地下諸生往々の見込にては三百人四百人にも相成可申哉。其中にて隔年位に昇殿之人計なり共、御殘しの用途にて上中下

出精之御褒美聊なりとも被下候得ば自然と風儀も相改り、弊學有之往々御役に相立候人柄に相成可申、餘り年頃に御叱りの人計りては上之思召も深く被恐入候。右場所は開明門の御舊地歟又は外に御築地内にて差支不相成場所え被取建候樣に相成度………

幕府則ち命を奉じて開明門院跡に造立することゝなれる也、造立の際、叡慮を以て同所の聯を被掛、其文に

履聖人之至道、崇皇國之懿風、不讀聖經何以修身。不通國典何以養正。明辨之務行之。

右は三條大納言實義撰文にして關白政通の書也。

弘化二年（一八四五）習學所造成して、仁孝天皇より賚名を學習院と賜ふ。則ち華族教育の復興にして、明治八年に華族學校創立の際、今上陛下、この賚名によりてまた學習院と名を賜ひしなり。

第十四節　天明寛政より文化文政を經て文運の盛昌前古比なく普通教育に關する書籍續々出版され隨つて女子教育に裨益したること尠からずとす。普通教

育書の著者は何如なる人々ぞといふに、直接に普通教育に當りし人々にして心學者、閭塾教師及び神儒佛何れにもあらざる一種憂世の志士を多しとす。儒者にして教訓書を著はしたる者は甚だ少なし。

寛政以後に現はれし教訓書の主なるものは、二十四孝評。同繪詞。民間さとし草。喩草。三教童喩。梧坡教諭。民家育草。國鑑。近世畸人傳。妙好人傳。心法極樂住居。教訓古今道しるべ。女四書藝文圖繪。女藻鹽草。眞月集。松影恩錄等及び心學道話類にして官板として、孝義錄。六諭行義あり。

女子教育の思想は益軒以後すこしも進歩を認めず。學政革新の局に當りし松平樂翁公は女子教育につきては全く儒教主義なりき。難波江及び樂亭かんな筆記は公の女訓にして、前者は壯年のとき新夫人の請に應じて述べたるもの。後者との間に思想の變遷あるを認むる也。前者は公が理想の婦人を述べたるもの、稍穩當の見解を認むるも後者は依然たる儒教主義の女訓なり。公の女子教育說を茲に紹介するは、公が學政改革者として、かゝる意見を抱きて政令を布きしより教

青上に及ぼせし影響の尠からざるを以てなり。公の女子教育說は天明二年公年廿五歲(一七八二)の著、修身錄に見へたるものを以て茲に掲ぐるを以て妥當なりとす。これ蓋し公執政前なればなり。夫婦之事の章にいはく。夫婦ほど世にしたしきものは無し。然るに其別の字を以て不易の法と定むるは如何にぞや………黃門公に別の義を伺ひ候とき仰せに、婚禮の後ち朝をき出でしとき、何となくつゝましく耻ぢかはしき心底有之候。この心根を始終失ひ不申候が別なりと仰せられ候由。古今の名敎なりと知るべし。凡そなれ過るにより自然と心安さにふしふし起りて夫婦の間讎敵の如きに至るなり。家禮にもいへる如く婦は必ず我より目下の方より迎ふべしといへり。……夫の附の女、婦の附の女、たがひに遠き思なく主人を大切と思ひてせりあふほどに自然と上の夫婦の心も化して中あしきに至る也。愼むべし。女はすべて文盲なるをよしとす。女の才あるは大に害を爲す。決して學問などはいらぬものにて、假名本讀むほどならば、それにて事たるべし。武藝は猶更さす可らず。女は唯内にくど〱して日を暮らすもの故馬鹿なるが女の智なる也。古より英雄豪傑の士、女にたぶらかされ又は制せらるゝ者

多し。……女は至柔のもの故却て至剛のものを制する也。男もつねに女をば大に侮どりて如何で彼に制せられんと思ひて油斷するに女は外に勤無く專一に夫の心をみすかして氣に入るやうとのみ思ふ故に工拙是ほどの差になる也。その上、愛する心より其專制のきざしも見えず。よし見えてもまた甚だ微か也。……女はいかにも柔弱にして和順なるを善しとす。且又政事向又は諸願等奥より出候樣に成ては甚あしく候……本妻妾媵のしなをばよく立おき必ずしも亂る可らず候事。これ以て公の意見を見るべし。公は學政擴張に力を盡くしたるも、女子は假名本を讀み得ば則ち足れり、女は馬鹿なるを善しとす唱へて女子をば敎育の恩澤外に排し去りたり。天保の改革は寛政の精神の復活のみ。佐藤一齋は女官敎育のために女學所創立の意見を出せるも遂に實行の緖を得ず。幕府は終始女子敎育のために盡さゞりしなり。

修身祿に貴族の育兒の事を述ぶ。その中に曰く、又女の中に育ち上ぐれば第一恐痴になり果斷ならず。機嫌を取ることをのみ日々の心がけとして佛の事心にそみ神くじうらかたに魂を奪はれ臆病の馬鹿物となる。男子

は少しも早く表へ出して所々の部屋等をつれあるきて何事も見せ聞かすべし。下情を知るは子供のうちよりにて無ければ成人しては人が氣をおきて何事もいはずかくすものなり…………

女小學といふもの女大學に伴ひて行はれたり　この書は享保十年に成りたれば、女大學の創作と相前後するものなるべし。書中所說は女大學と大同小異にして、唯だ實例及び古歌を引きて領解をたすけたるのみ。女を地に夫を天にたとへて、夫婦の誼は則ち君臣なりといへるが、婦德の根本思想なり。女小學は其理由を專に說きて、能く夫と舅姑に事ふるは吾父母に對する第一の孝養なりとせり。

嫁いりするを歸るといふ事古き文に見へたり。いかにしてかく言ふとなれば、必夫の家に行く。されば女は親の内にのみ住果つべきものにあらず。夫の家こそ天よりそなはれる我家なれば嫁入は吾家に歸りたる理也。さるによりて國を隔て行くこと昔より必ずある習也。遙々の海山をしのぎ行く事うたてしとおもふ可らず。高き御身ほど遠き境を越入らせ玉ふ。又は近きにましませども、親子の御對面はまれなる事也。いかに況んや其

下つかた誰か親の内にのみ有て人の家にゆかざるものは有る可らず。親の内に居るは是れ假りの宿りと思ふべし。時に臨みては夫の爲に命をも捨るは世の習也。夫は吾家の君なれば吾身より重きを知ればなり。是を知りて我親より夫の親を厚く親しみ結ぶ理なり。

舅姑は夫より我に備はれる家の親なれば疎にしはべらんや。至りていつくしみうやまふべし。仰を蒙りぬる事なにはのよしあしをいはず暫くも怠る可らず。其腹にしも宿らねど皆これ深き縁しあることゝ心得べし。

夫は天にたとへ女は地にたとふ。されば夫の尊きこと天の高きが如く、妻たるものゝ心得あり。夫婦とおもふ故に馴るゝに隨ひて敬におこたり志にもたがふぞかし。始より終まで主君と思ひつゝしみつかふまつらば誤ち少からむ。

此教をよく〳〵守りなば常に傍に居て枕をあふぎふすまを暖めむよりまされる孝行なるべし。

婦人は通常出て嫁するもの也。夫妻の和合、舅姑の機嫌如何は父母が寤寐にも

忘るゝ能はざるところ也。されば女子は琴瑟調和し一家春の如くならんこと孝養第一なるべし。然るに夫妻の情愛は親しみ馴れやすく舅姑は爲さぬ中なれば敬ありて愛乏し。教育無き女子をして夫を敬し舅姑を愛せしめ、一家波立たずして父母を安堵せしめむには夫を所天とするの信條を守らしめむに若くことなかるべし。これぞ儒教の所天の說が本邦に採用せられし所以なるべし。尙況んや吾が國民道德は君臣の關係(忠義)を以て第一とするを以て所天の說は道德思想を統一するに於て好適なるをや。

然りと雖も此の如き不自然なる道德思想は決して永續し得べきものにあらず。女子を敎育し、その思想を開發して天理自然の精神的生活を樂ましめむこそ文運進化の恩澤なりと謂ふべし。

教訓書及び心學道話の類は皆な女子教育に裨益せんことを力めたり。然れども教育思想に至りては何等の進歩をも認めず。女子教育は寺子屋と家庭とにて行はれたり。されど大勢の推移は女子教育も漸く發達せんとするの兆候を見る。嘉永ごろよりは江戶にても女子

長く寺子屋に通學すれば人も稍羨み思ふやうになりたりといひ、かつは多く「女博士」の輩出といひ、皆これを證明するもの也。所謂女博士は世上より生意氣の意味を以て遇せらると雖も、これ女子教育發達の逕路に當りて免る可らざるもの也。

日本婦人の徳操

日本婦人の徳操に關する歐洲人の觀察は亦一顧に値すべし。英人アストン論じて曰く、吾人が日本の書籍中に貞操(Chastity)なる語を發見するは、多くは婦人が再婚を拒める如き種類の道德にありて存す。歐洲の旅客又は小說家には、日本の處女の貞操は重きものにあらざることを說く者あれども、其はツマラ無き誤謬也。されども或る場合に限りては日本婦人の貞操は基督教國の婦人に於けるよりも道德の限界に於て低位を占むるが如し。小說や戲曲に現はれたる道德の原則によれば、困窮せる兩親を救はんが爲めに身を賣りて娼妓となることは處女の貞操に於ては不得已場合として寛恕せらるゝこと是也。

洋學の發達

第十五節

洋學は蘭化玄白に嗣ぐに大槻磐水を以てして漸く發達の緒に就き

しが、ことに露人北邊の警ありてよりは急に洋學の必要を感じ、幕府も蘭學の外、更に英露の語學を開くに至れり。然るに新たに急に思想界に領土を開拓せる洋學者は、勢ひ舊領主たる和漢學者と衝突を起さゞるを得ずして、天保の改革に一たび蘭學の禁となり、醫學に限りて許されしが、世界の大勢は日に月に進みて、本邦對外の時局の急激なる變遷は洋學の急速なる需要を來たし「洋學々々と申候得共遂に日本學」と阪谷朗廬學議なるに至れり。

洋學發達の事實は頗る錯雜せるを以て先づ年表を掲げて其大綱を示さん。

一七八七（天明七）紅毛雜話成る。馬場佐十郎生る。

一七八八（天明八）蘭學楷梯出版

一七九四（寛政六）大槻磐水蘭學者を會して新元會を爲す。當時和蘭陀正月といふ。○渡邊登生る

一七九五（寛政七）坪井信道生る。

一七九六（寛政八）稻村三伯の蘭和對譯辭書「江戸ハルマ」成る。

一七九八（寛政十）重訂解躰新書成る。宇田川玄隨歿す。玄眞嗣ぐ。高島四郎太

夫、宇田川榕菴生る。

一七九九(寛政十一)箕作阮甫、戸塚靜海生る。

一八〇三(享和三)蘭化先生歿。伊東圭介生る。

一八〇四(文化元)伊能忠敬の沿海實測圖成る。高野長英。佐藤泰然生生る。

一八〇五(文化二)玄眞の醫範提綱出版

一八〇六(文化三)司馬江漢の銅版天球地球兩圖成る。〇山村才助歿。

一八〇八(文化五)譯官中の學才ある者を擇びて魯英兩國の語を學ばしむ。

一八〇九(文化六)譯官吉雄馬場等に魯英語を專修せしめ、衆通詞をして兩國語を兼修せしむ。

一八一〇(文化七)藤林泰介、蘭和對譯辭書譯鍵出版。川本幸民、緒方洪菴生。稻村三伯歿。

一八一一(文化八)天文臺中に飜譯局を置き蠻書和解方といふ。大槻磐水出仕。〇佐久間修理生る。

一八一三(文化十)馬場佐十郎村上貞助、松前にゆき魯囚に就き魯語を學ぶ。

一八一四(文化十一)伊能忠敬沿海實測完成。

一八一五(文化十二)和蘭甲比丹ドウフの子丈吉を長崎支配とす○杉田玄白の蘭學事始成る。

一八一六(文化十三)蘭學凡成る。和蘭文法書也。

一八一七(文化十四)玄白歿。杉田成卿生。

一八二一(文政四)伊能忠敬歿。箕作省吾生。翌年馬場佐十郎歿。

一八二三(文政六)和蘭醫官シイボルト長崎に來る。

一八二四(文政七)天文方足立左內魯西亞學筌譯文を上る。

一八二五(文政八)外國船打攘の令を下す。遭厄日本紀事譯成る。高野長英長崎に遊學○伊東玄朴長崎より江戸に來りて始めて和蘭文法を唱ふ。

一八二七(文政十)青地林宗の氣海觀瀾出版○大槻磐水歿。

一八二九(文政十二)シイボルトを放還す。坪井信道江戸に開業。始めてガランマチカ及センタキスを講ず。

一八三二(天保三) 青地林宗水戸に聘せられて西學都講となる。

一八三三(天保四) 宇田川榕菴植學啓原出版○青地林宗歿

一八三八(天保九) 蘭人密かにモリソンの來るを告ぐ。高野長英の夢物語出づ。
○坪井信道長藩に聘せらる。

一八三九(天保十) 高野渡邊の獄起るや關三英自殺す○新宮涼亭順正書院を京都に建つ○宇田川榕菴舍密開宗を著はして始めて化學を唱ふ。

一八四〇(天保十一)飜譯局に令して和蘭風説書を原譯兩文進覽せしめ、且局外の他見を禁ず

一八四一(天保十二)高島秋帆西洋式銃隊を武藏德丸原に練習す。

一八四二(天保十三)飜譯書出版は町奉行の許可を得しむ。○渡邊登自殺

一八四三(天保十四)緒方洪菴扶氏經驗遺訓を譯述す○佐藤泰然佐倉に聘せらる。

一八四四(弘化元) 箕作省吾坤輿圖識を著す。

一八四五(弘化二) 飜譯書の出版は天文臺の許可を得しむ。杉田成卿譯局に入る。

一八四八(嘉永元) 英學者藤井三郎歿○坪井信道歿○箕作阮甫校訂和蘭文典刻成

一八四九(嘉永二)　蘭醫術を禁ず、特に外科のみを許す。譯書は醫學館の許可を受しむ。
一八五一(嘉永四)　漂民中濱萬次郎歸朝
一八五三(嘉永六)　彼理來る○萬次郎召されて幕臣となる。
一八五四(安政元)　米艦再來。吉田松陰米艦に投ず○成卿譯員を辭す
一八五五(安政二)　譯局を天文台より九段阪下に移す
一八五六(安政三)　譯局を蕃書調所と改稱し、箕作阮甫杉田成卿を教授とす。
一八五八(安政五)　和蘭字彙出版○神田種痘館を官に納め和蘭内科を許す。
一八六〇(萬延元)　蕃書調所を小川町に移し、英佛獨魯學を開く。松本良順和蘭法に傚ひて病院を長崎に建つ養生所これ也。福澤諭吉外國方譯員となる。
一八六一(文久元)　横濱英學校開設○蕃書調所の内に物産局を置く。伊東圭介教員となる。○長崎養生所を精得館と改む。蘭醫ボードインを聘して教師とす。外國教師の始也。

一八六二(文久二) 蕃書調所を洋書調所と改め一橋門外に新校を建つ○西洋醫學所に舍密局を置く。○緒方洪菴幕府に召されて侍醫主醫學所頭取となる。

一八六三(文久三) 洋書調所を開成所と改稱す。數學局を置く神田孝平敎員となる ○長崎に語學所を建て淸蘭英佛魯五國語を講習す。後ち濟美館と改む。○市川文吉等魯國留學○洪菴歿。

一八六五(慶應元) 開成所に理化兩學科を置く。蘭人カラタマを聘して敎師とす。

一八六六(慶應二) 開成所を外國奉行所管とす。○中村正直箕作奎吾等十四人英國留學

一八六七(慶應三) 開成所學制を改めて全く外國敎授法に傚ふ。

一八六八(明治元) 國事多端の際暫らく開成所を閉校す。

蘭學に於ては、前野蘭化の後繼たる大槻磐水、蘭學階梯を著はして、斯學の普及を計りしが、語學の研究法としては尙太だ不完全なりき。直接の必要よりして最初に辭書の編纂起り、和蘭貢使ヘンドリック、ドーフ(Hendrik Doef)のドゥフ波留麻完成

するに及びては文法の研究もまた起りしが、未だ一定の文法書の講習とては無かりき。この頃の人は解釋を專途と心掛けしなれば、讀書力は數多の書を讀破するに當り自得せしものにて文法に於ける系統的智識は至て少かりき。長崎通詞中野柳圃は刻苦して文理を味ひ、始めて文法を說きしも、未だ辭學と文章學との區別は起らざりき。

磐水の門下、宇田川玄眞は、其學統を傳へて門下坪井信道、箕作阮甫、戶塚靜海等を始として秀才多し。坪井は江戶に開業して門下頗る盛んに大阪の大家緒方洪菴も其門に出でたり。坪井信道は蘭學の進歩に一期を劃せる者也。彼の教育法は、蘭學生に先づガランマチカ及びセンタキスを教へたり。素讀の傍ら講釋をも爲す。一句讀みては講じ一章讀みては講ず。ダットのヘットで二三年といへるは蘭學生を冷評したる語也。かくて文法終れば會讀を爲さしむ。會讀以上の書となれば、舶來本のみにて學生は必らず之を膽寫せざる可らず。這般の必要よりして、當時の蘭學生は綴字及び寫本は頗る上達したるものなり。一回の會讀といへば大概半紙三枚か四五枚迄なり。會讀は自己の學力にのみより、更に互に豫習す

るを許さゞりしかば、專ら文典の力と辭書とに依賴するの外は無かりき。されば會讀が月に五六回あれば、學生は每月五六回の試驗を受くるわけにて、各切磋琢磨の功を盡くせしかば、當時の蘭學生は修學方法の不完全なりしに似ず、割合に讀書力に富みて飜譯に長ぜしことは疑ふ可らざる事實なり。

ハルマ辭書

和蘭麻知加の譯書は安政三年佐賀の蘭學者大庭雪齋の手に成り、譯和蘭文語と題して江戶須原屋伊八より出版せり。

字書はドーフ波留麻を最上とす。この辭書の成れるは那翁一世の戰亂の影響なり。千八百年の始めより同十五年那翁大敗に至るまでの間は、蘭船長崎に來らず。その本國は那翁の覇政に伏したり。この間和蘭國旗が獨立の表章を失はざりしは長崎にてのみなりき。このときドウフは久しく本邦に滯留して邦語に熟せしが、本國との交通は皆無にて退屈の餘り、通詞吉雄權之助等と謀りて對譯辭書を思立ちたり。これ本邦に於ける對譯辭書の嚆矢にして、爾後外國語の字書を作る者、皆この書の恩惠に浴せざるは無し。本邦文運の進步に與りて大功ある辭書の成功は實に那翁の戰亂の影響なることを知るべし。この辭書の序文に吉雄は

蘭語及び佛語をも好みて學びたるよし見ゑたり。彼は通詞中には珍らしき學問好きにて狂人を以て目せらるゝに至れり。この書成功の曉ドゥフこれを幕府に献ぜしに、幕府これを官用に供して公行せず。學者緣を求めて私に傳寫し、斯學の寶典と尊みしが、日本紙三千枚もあることなれば、幕末に佐久間象山は、この書を上木せんと請ひしに、却て其如何にして官用辭書を知れるかを詰責せられたり。その後、幕府の醫員桂川甫策より屡乞ひて出版を許され訂正を加へて和蘭字彙と名けたり。(一八五八)この版本に慊らざることは、ドゥフが飜譯の由來を記せし凡例をは桂川が削除せることと是なり。

天文醫學地理に續きては物理、化學、博物の諸科開け、其次ぎに歷史も來り、幕末には時勢の必要よりして、兵學大に流行せり。蘭學を講ずる者多くは醫兵の二科を出でず。而して兵學てふことは、武士をして甘んじて蠻學を修めしむるの動機となれり。文政六年(一八二三)蘭醫シイボルト長崎に來れり。この人博物學に通ぜしかば、語學の外に本邦に博物學を傳へたり。高野長英、戸塚靜海、伊東玄朴、伊東圭介、岡研介、高良齋等は受業生の主なるものにて、讀書力にては高野尤も勝れ、會話文

章には岡研介特に長じ、而して伊東圭介は植物學の木鐸となれり。一八四九（嘉永二年）和蘭醫術を禁じて、特に外科をのみ許されしかば、伊東玄朴等爭ひて桂川氏の門下に籍を列し、外科を唱導せり。このころより漢蘭兩醫の歷轢ことに盛んなり。

或有名なる蘭學者は漢醫の子にして、壯時調合所にありしとき、鼷鼠を捕へて解剖し、漸く心、肺、胃、肝の位置を知りしも、漢書にては到底その委しきを知る能はざりしが、偶解躰新書醫範提綱の兩書を得て、其精密なるに感じ、遂に蘭學修業の志を起せりといふ。如此經驗は醫學が蘭法に歸する步程也。蘭醫學が生理解剖の深奧なることは一般に信用を得しかば、隨つて基礎確實ならざる漢法內科も亦蘭法內外に敗北せざる可らず。

江戶時代には兎角專賣秘密等のこと多く行はれ、外國に關する事件は、尤甚しかりき。和蘭風說書の如きも原譯兩文ともに進覽せしめ、かつ譯員の外、他見を禁ぜり。尋で譯書の出版は町奉行の支配よりして天文台の方に移り蘭書飜譯の臆說杜撰を禁ずるを名として、出版の自由を束縛せり。尙又た昇平黌の學生は蘭書を

洋學讀むは遠慮すべきことなりし。然れども時勢は駸々として進みて已まず。洋學講習の方法は愈進歩せり。天文台の譯局を獨立せしめて九段阪下に置き、有名なる蘭學者を網羅して譯員として、學者も是を以て最終の目的とせり。安政三年(一八五六)譯局を蕃書取調所と改稱し、箕作阮甫、杉田成卿を教授とし衆員を置き、飜譯出版の事を掌れり。翌年正月開所式を行ひ、幕臣及び諸藩士の入學を許す。於此蘭學始めて本邦に公行するに至れり。而して蘭書の俄に厚遇せらるゝに至りしは、彼理渡來後外交及び邊防の必要上、已むを得ざるによれる也。

杉田成卿は玄白の後也。人物峻嚴にして、學術亦精深、當時讀書力の優れるは、蘭學者中推して第一と稱す。その教育法は嚴重にして、他の質問に對し、一たび講明せしものは他日再び問ふが如き假令久敷を經たるも、又これが答諭を爲さず以て遺忘を懲らせるが如しといふ。彼蘭書に耽ること食色よりも甚だしく、病にある毎に塾生をして原書を朗讀せしめて、苦を排するの一助とせり。門下に神田孝平加藤弘之、細川潤次郎等あり。

示塾生。唯知達意讀洋文、過抑揚時意便紛、豈識箇中無限味、盤行々裏見龍紋。

讀書推理の緻密なるさま概見すべし。

大阪には東京の成卿に對して緒方洪菴あり。緒方塾の實況は福翁自傳及び松香私志(專齋自傳)に詳か也。

緒方塾の教育は以て當時蘭學教育の一般を窺ふに足るべし。松香私志に曰く。

此塾は適塾と稱へ四方より來學する者つねに百人を超ゑ四時の輪講絕ゆると無く當時全國第一の蘭學塾なりき。輪講は學生を八級に分ち、毎級月に六回の定日あり。籤を探りて當るの席順を定め其首席者先づ數行の原書を講じ、次席より問をかけ、順次末席に至る。一問毎に會頭勝敗を分ち、勝者には白點敗者には黑點を付す。(會頭は塾頭塾監及一級生の人、學級の高卑によりて之を分擔す)首席講議の役を卒りて、其日の會を了す。さて一ヶ月間の點數を調らべ、白點の最多き者を其級の上席として毎月席順を改め三ヶ月續きて上席を占めたる者は進んで上級に移る。

塾中疊一枚を一席とし、其內に机夜具、其他の諸道具を置き、此に起臥することにて頗窮屈也。就中或は往來筋となり又は壁に面したる席に居れば、夜

間人に踏み起され書間燭を點して讀書するなどの困難あり。然るに毎月末席換とて輪講の席順に從ひ上位の者より好み〳〵に席を取ること故、點にても勝を占めたる者は次の人を追退けて其席を占むるを得るなり

されば輪講の勝敗は一身の面目、非常の競爭なれども、銘々字書類みにて說を付け、一語一句たりとも私かに人の教を乞ふが如き卑劣のことをなす者無く、皆自分一己の工夫を凝らして、學力を鬪はすこと也。

但前後文典の會は初學なれば隨意に他人の講義を受けて輪講を爲すことを得れども、多くは同級の人揃ひて先輩の講義を聽くを常とせり。

又た輪講の書は師家の所藏にて原本は一部なれば、同級の人々順番を以て寫し取り、夫れより下讀にかゝる也。初學の内は冠詞前詞等の外は一語も見識りたるもの無く、片端より皆字引にて引出すこととなるが、肝腎の字書といへるは塾中只ドーフの寫本一部あるのみ。(和蘭字彙)三疊敷許りの室をドーフ部屋と唱へて其處に備置き、一冊たりとも、他に持出すを許さず。百餘人の生徒皆此一部のドーフを杖とも柱とも賴むものなれば、立替り入替り其部屋に詰込みて前後左右に引張り

合ひ、容易に手に取ることも叶はざる程なり。斯くて晝間は字義の詮索も屆かざれば、深夜に人無きを伺ひ、字を引きに出かける者多くドーフ部屋には徹宵の燈火を見ざる夜ぞ無かりし。其頃塾中の雜談に、字書を坐右に控ゑ原本にて書を讀むことを得ば天下の愉快ならんと云合へり。戲言ながらも不自由の情況想見るべし。云々。

長崎傳習所は學生の態度頗る進みたるもの也。松香私志に記して曰く。

傳習所は大村町(長崎)にありて二階建の長屋なりき。其頃(萬延元年)は諸藩の傳習生增加して、三十人餘の寄宿舍あり。松本先生(良順)も其中央の一室に住まはれたり。傳習生は諸藩の命を受けたる御用書生多く八疊六疊位の一間に二人三人宛机を構へ、其上に幾冊となく原書を積み坐蒲團を敷き、袂時計を帶びたる有樣は、適塾自費の寒書生たりし者の目には只驚く計りにて、曩時塾中の戲言をさへ思出しぬ。……

福澤諭吉氏の記するところに據れば、幕末までは洋紙とては無ければ、皆日本紙を能く磨き眞書筆にて寫す。それにては埒明かざる故に日本紙の散

墨を防ぐ爲に、其紙に礬水をして、鵞筆を以て寫すこと普通に行はれたり。鵞筆といふは、藥舗に大鳥(鶴か雁)の三寸許に切りし羽の軸を賣るものあり。これは鰹の釣道具にするものにて至て、安價なれば、それを買て鋭利なる小刀にて、その軸をペンの如くに削て使用するもの也。墨液も固よりインク無く、和墨を磨つたまゝ、墨壺の中に入れて恰もインクの如くにして使用せりと。

露語。

蘭學につぎて開けしは英露の語學なり。その創始に當りて秀才たりしは、長崎通詞馬場佐十郎なりき。彼は蘭學にては、中野柳圃の高弟たりしが、英露の語學にも先鞭を付けて、天文方の屬吏となり譯局の譯員となれり。文化十年(一八一三)松前にゆき、魯囚に就きて露語を學ぶ。魯囚とは露艦デアナ艦長ガローニン也。佐十郎と共に村上貞助、足立佐内等もゆけり。彼等の到著は三月十八日にして、最初は互に敬禮せしのみ。足立と佐十郎とは、毎日幽窓に就きて魯語を學び、此間に佐十郎は曾て自ら編輯せし露和字彙を訂正せり。佐十郎は、佛蘭對譯字書に據りて其所要の露語をガローニンに問ひ、彼はこれに相當せる佛語を示せば佐十郎則ち

之を蘭語に照し、然る後ち露語に和譯を付して集録せり。ガローニン後ちに遭厄日本記事を著はし、當時の事を記していはく。佐十郎は廿七歳許にして、甚だ記臆力に富み、かつ稍歐洲文法の大意を知るが故に露語を學ぶにも速かに進歩せり。余彼に作文を教授せんと思ひ、余の記臆せる儘を記して彼に示せり。余は爰に文法書をも所持せざれば、唯余の記臆せるまゝを記することなれば四月許を費せり。……偖其書に引用するところの譬語は日露兩國に係れることを多く引用し、二國の交際益親密ならんことを希望するの意味に基づき、集録したるもの也。偖其書を與へければ日本人甚悦び之を譯して尤も珍重せり。特に貞助佐十郎兩人は之を以て能く露西亞の文法を理會せり。彼等其書を交々諳誦せり。……夫の足立佐内は算術書を譯せり。此書は露都にて小學校教科書用に出版したる算術初歩とも云可き書にして、幸太夫の持歸りたるもの也。余彼を見るに頗る算術に熟達せり。彼は其算術書に據り露人の解釋を得んとするが如し。余彼が數學の深淺を知らんと欲し、屢其談に及べども、通詞等此事に疎くして、通辯すること能はず。只僅々余が問を通ずるのみ也。然れども左に二三の問答あれば、之に依て日本人

の數學の深淺を窺知るを得たり。彼余に問ひしは露西亞の暦法は和蘭と同法に算するやと。余答へて、露國には舊新二種の暦を用ふと。彼又舊新暦の差及び起原を問へり。余其答を爲しければ、彼又云其暦法は尙不完全と云べし。何となれば幾百年の後必らず廿四時の差を生ずべしと。因て余思ふに彼は徒らに奇を好んで余に問を爲すにはあらず。彼が知るところの事を余も知れるや否を試むる爲ならん。又彼はコペルニカス氏式の天體說を至當の理とし、又天王星及び其衛星の發見も既に知りたれども近時見出せし惑星は未だ知らざりき。……露語學開始の狀況は此の如し。

佛語。

幕末には歐洲列强との外交頻繁となり、語學開發の必要を感じ、安政六年(一八五九)に外國方に譯員を置き蘭學者を登庸せしが、その翌年蕃書調所に英、佛、露獨の語學を置く。玆に至りて、歐洲列强の語學本邦に公行するに至れり。當時佛學の敎授となりしは村上英俊也。佛學は幕末より維新の當初は盛んに本邦に行はれ、兵學法律の如きは全くこれに據るの勢なりき。村上はもと蘭學者を以て松代藩に事へ佐久間象山とは親交せしが、つねに化學の必要を知り、象山と計りて化學書を

和蘭に注文せしに、翌年將來せしは蘭書にあらずして佛書なりしかば、頗る落膽せしを、象山激勵して謂へらく、再び蘭書を購はんか一年若くは一年半の歲月を費さゞるを得ず、幸に藩邸庫中に佛蘭西字典一部あり、之を好機として佛書を講ずること如何と。時に嘉永元年(一八四八)にして村上三十八歲也。これより專心一意纔かに一部の字書に據り、夜以て日に繼ぎ勵精一歲餘にして、其業漸成るや齒牙半は頓に脫落せりとぞ、其刻苦思ふ可き也。象山が能く佛國の形勢を知り、其兵制を稱贊して、これを本邦に採用するの基を開きしこは、村上亦與つて力ありといふ。其後江戶に出て敎職に就き、飜譯を爲し辭書を編し、こゝに佛蘭西詞林の如きは斯學の指鍼たりき。

村上氏の佛字書中に、クー、デ、ターを譯して「政治の事」とせり。幕末に於ける氏の學力の一斑を窺ふべし。

このとき獨逸語の敎授となりし市川兼恭も亦蘭學より移りしにて、來朝の獨逸人に就き學習したるなり。

英學

英學の端は馬場佐十郎等長崎通詞に根源すれども、文法に通じ、語學として系統

開成所。

的智識を有せしは藤井三郎に始まる。惜哉彼は早く歿せしも、英吉利文範は、其後英學生必修の課程となれり。發音の正しきを得たるは嘉永五年に歸朝せる漂民中濱萬次郎に始まる。彼は土佐の漁民より抜擢せられて幕府の譯官となれり。

當時の英學者の談に、彼理をば、皆なコモドール、ペルリと發音せしも、中濱のは、カマダ、ペリーと響くやうに覺ゑ、彼こそ正則なりとて持囃やしたりと言へり。この時長崎通詞より出でゝ幕府の譯官となりて外交事務に參與せし森山多吉郎あり。小石川に塾を開きて門下亦秀才を出せしも、彼の學術は至て淺薄なりき。蕃書調所に英學を開きしは、通詞堀達之助の力也。その人となり活達にして覇氣を帶び、外人に應接して功蹟あり。最初の英和字書は彼の盡力によりて成れり。蕃書調所は後ちに一橋門外に移りて洋書調所となり、更らに開成所と改稱せり。物產局及び數學局を置き更らに理化學科を置きて蘭人カラタマを雇聘せしより漸く大學の基礎たる性質を有するに至りしが、政府の要求する語學及び學科の都合によりて、或は陸軍奉行、外國奉行等の支配にも屬せしが、慶應三年(一八六七)に學制を改正して全く外國の教授法を採用せしころより蘭學漸衰へて英佛獨の三學追々隆

理科諸學の發達。

盛に赴けり。王政維新の政變の際、一旦閉校せしが、一統の政令出ると共に追々再興の途に就き、遂に東京帝國大學となりしものにて、其遠源を尋ぬれば、天文臺の飜譯局より起りしなり。

第十六節　幕末には理科諸學相續きて本邦に傳來せしが、このごろは、前代未聞の學は異端邪說として、擯斥せられしときなれば、植物學の如き最初には經文の形ちにて出版されぬ。文政五年(一八二二)宇田川榕菴の菩多尼訶經は、泰西學術輸入に於ける前人の苦心を見るべきものなり。この書は伊東圭介氏の植物學開發の先驅を爲せるものなり。文辭巧妙にして、優秀なる蘭學者の文藻を窺ふに足るべし。

菩多尼訶經。江戶宇田川榕菴譯

如是我聞、西方世界、有孔刺需斯。健斯涅律私。木里索肉私。刺瘉斯。多兒涅福爾篤。歇兒滿。葛蘇法兒拔烏非奴私。馬兒呸及斯。花列斯。律兒弗。大學師蒲爾花歇。大學師林娜私。等諸大聖。累代出世。各於其國。發大願力。建大道場。設大法會。出大音聲。出眞實言。說無有上。微妙甚深。

最勝眞理。敎化諸大弟子。
爾時大聖。告諸大弟子言。四大洲中。百千萬億。一切衆生。差別二種。人馬獅狗。鷄鳳燕雀。鯨蛇蠵龍。蠅蜂龜蟹。性情智能。圓能具足。靡不步行自在。名曰動物。性情智能圓能具足。有雄有雌。有一體兼男女。有六親眷屬。有壽量。有色相。不能步行。名曰植物。然此二種。本來一理。我說如是。最勝眞理。若汝等不信受。我略說之。亞墨利加州。有草號密(ミ)莫(モ)沙(サ)。若有物觸。葉縮而萎。汝等若爲異域遠物。猶作疑惑之念。使汝等現得是眞理。開窓試見。庭前答(タ)末(マ)林(リン)度(ド)樹。其葉晝則伸。夜則眠。有情如是。拙幹高聳。敷地作蔓。樹上寄生。陸上產者。水中生者。其性種々如是。春則匂萠。夏則成長。秋則凋萎。冬則零落。乃至開花結實。有智如是。爲人畜食餌。爲濟生醫藥。爲救荒貯蓄。有能如是。有開心蘂花者。有開鬚蘂花者。有開心鬚兩全花者。有雄有雌。有一體兼男女如是。有類芹者。有像葱者。有似葵者。有六親眷屬如是。有今冬發生。明夏枯者。有春月發生。冬月枯者。有三年而枯者。有十二十乃至五六百年而枯者。

有壽量如是。有全苗赤色者。有脈絡紅色者。有綠色黃色者。花實亦復種々色。有色相如是。一托生處。歷兆億年。不能遷居。不能步行如是。汝等信心隨喜。若不違我。我諦宜說。

一切植物。食氣食水食火食土。而化成凝流二體。與動物無差異。根幹援葉花實六部。是爲起體。根幹液。葉液。花液。實種子液。皮液。膜液六種是爲流體。

凝體六部。各箇不一。根有五品。幹有七品。枝有八名。援有七種。葉有三大別。細分別之。則有二百餘形。花有二十四經。細分別之。則有一百一十餘緯。實有三等。細分別之。則有一十餘品。流體六種。色質香味。各箇不一。亦復如是。

我先演說流體。根幹液乳糜也。葉液血也。花液陰器之液也。實種子液造化成功之液也。皮液養液也。膜液脂肪也。葉液有三種。花液有三種。皮液有八種。如是諸液。循環輸轉。終則老廢。自蒸發孔。漏洩而去。以何所爲。如是循環。皆賴太陽溫暖和煦之氣。一紀一歲。一月一日一時。一

密扭多一世細度之溫氣悉皆關係。

諦聽々々。我爲汝等。再說一切凝體。無量無數一切植物。本來一條纖維。錯綜織成一片薄膜。二品脈管。是膜是管造作全身。膜即表被。包絡圍繞全身衆器。具足恒河沙數。玄孔皺紋。二品脈管。一名液管。綜攝動靜二脈水脈及乳糜脈而言。二名氣管。通大空氣。扶持諸液循環。是此氣管。諸他衆生。本來不具足。根皮有噏收管孔　有蒸發孔。葉有神經。有至微腺。有蒸發孔輭細毛耳。皆無量無數。至微至細。管孔口也。根胃也。幹莖腸也。葉肺也。花陰處也。粉男精也。絲輸精管也。葯精囊也。花柱膣也。柱頭陰門也。礎卵巢也。子宮也。胚胎也。花心胞衣也。種子卵也。一切種子。圓者扁者。長者短者。像腎形者。類虻頭者。俱有細眼。即是臍也。若破未成子室。室中種子。皆有細絲。固牢維繫。絲即臍帶。種子落地、則復甲拆。甲拆下根。根又抽莖。莖又生葉。發露花實。實復藏種子。色香性味。分毫不易。猶如動物生産蕃息。生理循環。無有毫髮止息間斷。汝等信受奉行我所說。於四大洲中。百千萬億一切植物得於智眼。

大聖說是菩多尼訶微妙經典已。大弟子等頂戴聖足。歡喜踊躍。合掌環繞。作禮而去。

この年六月、又この書に倣ひて吉雄俊藏の西說觀象經出づ。天象の概要を說きて、更らに精妙也。吉雄は長崎の通詞にして、後ちに尾張藩に召抱へられしものなり。

此二書は泰西理科學の輸入の絕好紀念とすべきものなるが、板本の絕ゑたるを遺憾とし、故伊東圭介先生が再刊されしもの也。

第十七節 水戸の敎育は幕末に於て注意すべきもの也。德川齊昭の弘道館記は水戸の學風の信條ともいふべし。則ち外國の長を取りて我短を補ひ、以て皇國の正道を發揮するにありて、奉神州之道、資西土之敎。忠孝無二、文武不岐。學問事業不殊其効。敬神崇儒無有偏黨といへるは、其精神也。水戸の學風は賴房光圀二公に本づき、これを顯彰したるは景山公なるが、其學風の理想に達せるは藤田東湖也。水戸の學者彼を讃嘆して曰く、彼大體に明かに古今に通ず、文武の全才也と。

神州の道を奉じ、西土之敎を資る、是水戸學風の第一要件也。唯だ水戸は外國の

長を取るといへども、佛教及び耶蘇教を排斥す。これ我が天皇神聖の教に資すること少しとせるが故也。水戸は盛んに攘夷を唱へしも、蘭學者を採用せしことは他よりも早く、理學の大家青地林宗は、又地理學に精通し、外國事情に關する智識は專ら斯人より供給せり。會澤安の新論は幕末に廣く讀まれて攘夷の精神を鼓吹せしが、書中外國形勢を說くの詳かなるは、水戸蘭學の素養によれり。世人は水戸が尊攘の木鐸たりといふを以て、其頑固を誤想する者あれども、水戸にゆきて遺物を展觀するときは、即ち水戸學風の眞相を知るを得べし。彰考館は大日本史編纂の史局なり　中に大なる地球儀を藏す。本と二箇ありて、其一は王政維新の際、五條御誓文を發し玉ひしとき、式場に列するの榮を得たりといふ。景山公手澤本と稱して、桐箱に重襲せるものあり。大本數十冊。淸洒たる標裝を爲す。即ち英和字書なり。會澤氏英人と那珂郡大津村に應接せしとき、此辭書に據り、彼我互に言はんと欲するところを指して譯を通じたるもの也。景山公は洋牛を畜ひ、日に牛乳を飲用せり。水戸が攘夷を唱へしは、委靡せる國民を振起せんが爲也。その本領にはあらざる也。

忠孝無二は吾國體の精華なり。學問事業其效を異にせず文武岐れずといへるは儒教の本領にして、吾國民の實際的性向に合するもの也。されば敬神崇儒偏黨あること無しとの結論は此邊より來るなり。東湖の弘道館記述義に曰く。蓋文武之道、各有小大。經緯天地克完禍亂是其大者也。讀書挾册、擊劍舞矛、是其小者也。然書册所以講道義。劍矛所以練心膽。心膽實然後可以臨難制變。道義明而後可以修己活人。且文之弊也弱。武可以矯弱。武之弊也愚。文可以醫愚。然則學者語其大而急其小固不可也。務其小而忘其大亦不可也。分而者二、又廢其一、尤不可也。周代六藝之科、射御居其中。孔子曰、有文事者必有武備。冉求奮矛入齊軍。仲由以行三軍自許。則古之教人所以使其文武兼資成德達材可知也。及至後世大道煙晦。學校之設亦屬文具。凡周旋揖讓者率皆白面書生。古所謂勇敢彊有力者不甘屈首於其間。至李唐尊昌尚匹似孔子。別建武學與文學相對。其用心於文武則似矣。殊不知文武益岐不可復收合而聖人之意大荒矣。備前國主池田氏蓋有見於此。用其臣熊澤伯繼之議新設學校合文武而爲一。我公每深嗟賞其通達國體。及建斯館亦做其美意。東湖は學問事業其効を一にするは則ち實學にして孔子の旨

にも合するもの也と說きて、敬神崇儒の旨を註して、我公恒有言曰、讀西土之書者宜以其所以尊崇堯舜尊我神皇、以其所以事上帝事我天祖、及建斯館孔廟之制、議論紛紜。或謂宜設塑像、或謂宜配十哲及諸儒、公斷然唯祀先聖而不及配享之議。又不用後世所奉之尊號、當齋戒盛服、親書牌子曰孔子神位、愼之至也。所謂無有偏黨者意其在斯歟。弘道館記結ぶに治敎統一を以てす。東湖の述義に曰く。後世之於民、不謹其敎、不申其義、及陷於罪、從而刑之。所謂罔民者皆是……政府自政府、黌舍自黌舍。治敎不一、學問政事岐而爲二。大道之不明職是之由。我公有見於此、既設至善堂以爲燕息之所、又擢一時宿學、補小姓頭兼敎授提擧、以爲貴游子弟及左右近臣之師、而猶恐政敎之或岐、乃設執政及參政者之府於其傍、凡學校之職、自敎授助敎訓導以至一藝一技之師、各得陳意見於有司……水戶學風の一斑は、是によりて察すべし。

景山公は文武に達せる士を擇びて所謂床几廻組となす。則ちお話相手となる者也。當時水戶にて學術文章を以て名ある士は武術に於ても必らず一藝に免許を得たる者也。床几廻組は水戶學の精華にして、これ等の諸士

によりて、幕末に水戸は大に振起し、諸士亡して水戸も亦衰へぬ。
舊藩の教育にては和漢學者各其撰を異にすれども、水戸にては、兩者必らず相兼ねて、水戸學の一派を開く。平生の修練は、太だ嚴重にして、景山公は屢遠乘を試み、藩士の遠足必らず米を携ふ。質撲剛健にして、實學を奬勵せしさま想見すべし。

水戸にゆかば弘道彰考二館猶ほ面影を留め、聖廟は朽廢したれども、常磐神社及び好文亭は水戸學の盛時を追想せしむるに足る。

水戸學風を知るべき資料は、弘道館記及び述義。常陸帶。回天詩史。新論。告志篇。及門遺範等を佳とす。東湖の評傳は數多あれども菊池謙二郎氏の藤田東湖傳を最好とす。青山延光の東湖墓碑銘は瑰麗の筆を以て一代の人物を寫して光彩陸離たり。東湖を傳するの文章これに過ぐるはあらず。

水戸學を論ずるに當り、なほ閑却す可らざる者あり。東湖の父、藤田幽谷これ也。
幽谷は義公以後の水戸學を中興して景山公の爲めに素地を作りし者也。彼れ市

井より出ても、人物嚴毅にして氣力逞しく、皇室を尊奉し、邊疆を拓くの志ことに熾ん也。蒲生君平と莫逆の交を結び、御稜威の振はざるを慷慨す。東湖は純ら父の遺鉢を受けて、才華の絢爛たるは遠くこれに過ぎ、能く家學を顯彰したり。景山公の北邊開拓の意見は東湖の參畫するところ、而して幽谷の遺志なりき。景山公の開拓策の要は、蝦夷地を開拓するには多數の人を要す。多數の人を招かんには、彼地に天下一の大遊里を設くべく、大酒屋をも置くべし。將た劇場をも設くべし。男女の育子館を設けて父母の養育する能はざる子女をば此にて養育すべく又本土の強健なる男子をば蝦夷の婦人と結婚せしむべしなど偉略人意の表に出づるものあり。東湖が景山公に上りし封事中に、教學を論じて、最初尊慮の神儒一致の學校御建立に能成、和學の漢學のと申すこと無之、たゞ學問と唱候やうなる風俗に相成。其學問と申すは、誰にても神州の道を本に仕り、周孔の道を以て之をたすけ候やうに相成と云へるは彼の家學を發揮せるなり。幽谷の教育法は門人會澤安の及門遺範に詳述せり。

第十八節　家康薨ずるに臨み遺命して神劍を久能山の正殿に奉ぜしめ、其刀を

西向にせしめぬ。曰く吾此神劍を以て吾子孫を擁護せんと。實に彼の虞りし如く關西の興起は幕府の顚覆を致せり。家康が目して西方の强となせしは薩長なり。而して薩長の教育は他日興隆の根柢を培養して、牢乎として復た拔く可らざるに至らしめたるなり。

關西に於て教學興隆の魁は岡山なり。新太郎少將英雄の姿を以てして、貧くるに蕃山王佐の才を以てす。教學界混沌たるときに、早くも天荒を破りて、光明を捧げしとはいへ、其施設の跡幕府の嫌疑を招き、革新の事業は一旦にして亡しぬ。栗山宕陰拙堂の諸儒、少將蕃山君臣の流風遺韻盛んに備前に存することを說くと雖も、蓋し當らざるなり。彼の君臣の事業は後嗣綱政の代に殆んど改革し縮少し盡されたり。津田永忠を以て奸惡王安石にも過ぎたりとなす者あるは、彼が極力幕府の嫌疑を避けて先君の事業を改めたるによるのみ。光政蕃山の流風餘韻何んぞ盛んに存すと云ふ可んや。

岡山に次ぎて教學を興せしは毛利氏なり。島津氏なり。鍋島氏なり。四强藩の中、土佐は尤も後れて起りたり。而して此四藩は皆關西なり。

土佐の事に就きては一言以て辯ぜざる可らず。土佐には南學起りて、學術の開くる頗る早かりしも野中兼山の失敗と共に、發達の萌芽挫け、而して、其國山を負ひ海に面し、南方に偏安して風氣の開發すること遲かりき。拙堂文鈔に好例あり。試みに考據に供せん。

土佐森田寛夫梅磵集序（前略）土佐之學出於山崎氏。人々以道學自居。未嘗有以文聞者。至近世藝苑大闢……

土佐山本澹齋詩集序。（前略）土佐之爲州、偏於南隅其人朴實可喜而疎於文。加之以埼門之學。其士或不免寡陋頑固之失焉。蓋孔門之學、有禮有樂。均適調和人々彬々而出。今埼門之學忌記覽惡文詞有質而無文。是有禮而無樂也。宜哉枉了人材無益於家國天下也。近世土佐有賢君而出。洞察其失救之以文。於是其士始振於文……

毛利島津二氏は關原戰役の雄者にして、其敗北によりて招ける困苦窮厄は名狀す可らざるものあり。彼等は報復の勇氣を以て經濟を整理し、教育を振興せり。二藩共に幕府に遠くして、其耳目を避けやすきと、且つ極めて自ら韜晦せしを以て

二百年間霸者猜疑の眼をのがれて、强大なる實力を養成せり。幕末に至りては、二藩の人才及び財力の豐富なる、幕府にとりて敵國の觀を爲すに至れり。今ま二者成功の事情を審かにするに、共に其學風の勁健にして實際的なるによれり。これによりて、人才は育成され財本は培養せられたり。

舊幕臣中野梧一氏、山口縣に權介となりて、長藩成功の事情を研究し、其財政の鞏固なる幕府の遠く及ぶところにあらざるを嘆賞せり。これ蓋し質實なる學風によりて贏得たるもの也。

毛利氏の敎育は萬治三年(一六六〇)九月十四日發布の萬治制法により、其學風の勁健にして實際的なるは、藩祖元就を祖述す。山縣周南は藩學を整頓し、學風を發揮す。敎育上に於ける成功は蘐園諸子よく彼に及ぶ者無し。周南の門下に瀧鶴臺、和智東郊等俊才多くして、鶴臺は學生に東郊は吏人間に先師の學風を傳ふ。學風流傳して永富獨嘯菴となり、村田清風となり、而して吉田松陰に至りて、洋流汎濫の致を極む。學問の事業必しも揆を一にせざれども周南より學風一貫繼述間歇あること無し。

獨嘯菴は豪傑の士なり。山脇東洋と共に、醫學革新に於て名ありと雖も、其人實に經世の才あり。獨嘯囊語及び漫遊雜記は、其學風を見るべし。囊語の道術第二に。山林江海之士、萬物を外にし思慮を滅して獨往するは大人の道にあらず。英雄將相の器、功名を主として動き智勇を奮て休まざるも亦大人の道にあらず。古之所謂有道之士とは、澤四海に被れども仁とせず、富天下を有てども與せず、溟涬として物と一と爲る。舜は之を允に其中を執ると云ひ、孔子は一以て之を貫くといひ老子は無爲にして爲さゞる無しといふ。太公管子皆面てに反して背に合するものゝ古今を亘りて二無き也。されど斯道は至深也。天下は至て嘖し嘖きときは則ち偏く教ふ可らず深きときは則ち切に喩す可らず。是故に聖王化するに事業を以てす。精一の道に至りては自ら當さに知者をして自得せしむべきのみと云ひ、時弊を論じて、士風の汚隆は時學の汚隆よりす豪傑の士須らく其依るところを擇ぶべしとて、窘は道の梯也、窮は智の階也、而かるに世の學者先生之言頗る異むべし。其言に文辭を學べは則ち古道に通ずべしと。それ六經諸子は古の聖賢窘窮勞動之發するところ也。翺翔周流之得るところ也。今世の學者先生、經事積思の

久しきにもあらず、たゞ一旦文辭を假りてこれを視る、之を視ること多くとも、恐らくは道の形を視ること能はざるべし。若しそれ道の形を視ること能はずば、安んぞ文辭と道と未だ始めより二あらざるの域に至ることを得んやと。囊語一篇頗る氣魄あり精采あり。萬治以來蘊蓄せる長州學風を發揮して遺憾なきものといふべし。

漫遊雜記に曰く。英雄隱于醫卜固有故矣。夫醫卜者無素封者之素封也。身非王侯而適如可以自行意焉矣。家苟無産業有父母且老。則雖剛明俊傑之士亦不得高臥養志也。故曰、不擇祿而仕。而較之夫出處進退必以其時者判然有間矣。余多觀當世聰辨之士或老于講官或困于舌耕、爵々不樂者、無它不慮諸其初也。

長州の學風は簡明直截にして實際に的切なるを貴ぶ。周南は徠門より出で、其敎育法は易簡寛容にして、拘束するところ無く、箇性を發育し、實用の材を養成するを期す。其兒頗る乘馬を好み、つねに馳驅して樂む。人或は之を制裁して學事に專らにせしむべきを勸む。周南答ふるに人各嗜好あり特長あり彼の好むところ

世に害なきは妨ぐるを要せずとて必しも拘束せざりき。以て彼が教育法の一斑を見るべし。寛政異學の禁出でし後ち、藩學の學頭も亦朱學派を交へしかども、性理學は遂に勢力を得ること能はざりき。村田清風は朱學者に向ひて石佛を麻繩にて縛りたる如き學問を爲して何等の効ありやと言へり。清風は壁間掛くるに武內宿禰應神天皇を奉ずるの幅を以てし、「武內時宗林子平」を以て自ら期せり其志專ら尊攘にあり。人物豪宕にして、ことに實用を主とし、尤も空理空文を排斥せり。其家に彼が自著の清風年譜を傳ふ。書中記するところ、多くは財政金穀に關す。長藩は他に率先して、學政を興し、力を教育に盡くせしこと多大なるは世の知るところ也。而して知名の學者割合に少きは、其學風が實用を主としたるによればなり。

長藩に於ける庶民教育の發達は頗る注目を値するものなり。蓋し藩に於ても、特に儒生に命じて講談を爲さしめ、以て教育の普及を計れり。毛利氏は、古より備人の土地所有高を制限するなど社會的に貧富の懸隔を避くることに注意したれば、農民は比較的に好良なる境遇にありしかば隨ひて、其間に教育の普及も容易な

る事情ありし也。心學道話の如きは庶民教育の一方として行はれたり。

西方强藩の成功の事情を論ぜしものは、小林雄七郎氏の「薩長土肥」を好書の一とすべし。外山博士の「藩閥之將來」一冊は、主として、山口縣の教育が、其勢力の主因たることを論ぜるものなり。照國公感舊錄は島津齋彬の事蹟を詳論せるもの。野間藤太郎氏の「健兒之教育」一冊は、薩州の社會教育を論じて趣味多き書なり。德富蘇峯氏の「吉田松陰」は長州の教育をも論じたれども、其學風の系統に就きては村田清風以前に既に素養の深く存することを記せざるなり。

島津氏の教育の特色は藩士教育にあり。教育の方法としての價値は其特別なる社會的組織にあり。薩州の教育は意志の鍛錬を目的とせしを以て、藩士をして互に競爭切磋せしめんことを期す。城下の士族を分ちて、上下二區となし、更らに分割して十八の方限とし各方限の青年を郷中と云ふ。各方限の青年二十二歳に至るまでを二才と稱す。各方限の青年として、互に競爭せしめしのみならず城下と地方の士族とをして互に競爭せしめたり。郷中の教育は斯波多の寄宿舍教育

に類し、殆んど生活を共にして身心を鍛練したるもの也。今最も古く定められし二才の格式を舉げて、其教育の一班を示さん。

二才咄格式定目、

一、第一武道を可嗜事。

一、兼て士の格式無油斷可致穿儀事。

一、萬一用事に付而咄外之人に致參會候はゞ用事相濟次第早速罷歸長座致間敷事

一、咄相中何色によらず入魂に申合候儀可爲肝要事

一、ハツパイ中無作法之過言互に不申懸等可守古風事。

一、咄相中誰人にても、他所に差越候得ば、於其場難相分儀到來致候はゞ幾度も相中得と致穿儀越度無之樣可働事。

一、第一は虛言抔不申儀士道の本意に候條專其旨を可相守事

一、忠孝之道大形無之樣可相心懸候。乍併不逃儀到來候得ば其場をくれを不取樣可相働事武士の可爲本意事。

一、山阪之達者可心懸事

一、二才と申者は落髪をそり「大りは」をとり候事にては無之候。諸事武邊を心掛、心底忠孝之道にそむかざる事第一の二才と申者に候。此儀は咄外之人たえて不知事にて候事。

右條々堅固可相守。もし此旨相背候はゞ二才と云可らず。軍神摩利支天南無八幡大菩薩武運之冥加可盡果儀無疑者也。

慶長元年正月　日　　二才頭

右格式定目百九十年相傳へ其儘にて傳來候處文字等痛に付き各申談寛政元年致表具者也。

平相中

山陽の兵兒謠は薩州の健兒の教育を詠ずるもの也。衣至骭、袖至腕、腰間晃々たる秋水を横たへて山野を馳驅すること飛ぶが如し。これ鄕中の實況なり。試みに山陽の薩摩詞を誦せよ。

鄕兵團結百餘區、帶箭人交荷鋤夫。茅舍槿籬差整肅、家々多種淡婆姑。

櫻山突立海灣間、一碧瑠璃擎髻鬟。鹿子城中家幾萬、無窓不納紫厓顏。

薩南の好風光、百二都城の光景、眼前に髣髴たるにあらずや。鄉中にては曾我兄弟復仇の夜を紀念として、傘燒をなし、孝道を思ひ、陰曆十二月十四夜には義士傳を讀みて忠義の志を磨き、また妙圓寺詣とて、陰曆九月十四日(關原戰の前夜)の夕刻より各方限毎に武裝して、法螺貝を吹き堂々と推出して島津義弘の祠に參拜するなり。

義弘は即ち惟新公にして、實に薩州教育の木鐸なり。勇決邁往は日本武士の美德なり。而して戰國の間、將士名ある者少からざれとも、颯爽たる英姿百世の下、人をして神往ゝ堪えざらしむる者、則ち惟新公に過ぐる無し。關原の戰に彼年六十五。西軍漸く崩るゝや薩兵餘すところ既に少し。義弘諸將に告げて曰く、後には伊吹の嶮あり、前には敵兵充滿せり、士卒既に減じて勝算無く、余も亦老て險阻を踰ゆ可らず。彼處に見ゆる一隊は必らず內府の中軍ならん突擊一快戰して潔く討死せんこと如何と。諸將固諫めて、勸むるに再擧を以てす。於是義弘郤走を不可とし、敵中を突過し、伊勢路に出るに決し、敗餘の將卒を一團となし、東軍に向て突進せり。かくて行々萬難を排して、島津兵庫通るなりと名乘て敵地を通過し、伊賀

より堺に出で、遂に大阪城中の妻子を引纒めて無事に薩摩に歸れり。義弘一生の行動大膽不敵にして危地に陷りて、つねに綽々餘裕あり。關原一戰は、掉尾の壯擧にして、間然するところ無し。日本武士の摸範と謂ふべし。薩州の健兒これを渇仰して、關原戰の日に公の傳を讀み、公の神來に接せんことを思ふ亦宜なりと謂ふべし。

却說薩州の敎育は氣質鍛練に偏するの嫌あるを以て幕末に明君齋彬出づるに及び、時宜に適し、智能を啓發することにも頗る心を用ひて、薩州敎育は改善せられたり。かくて公の提撕の下に西鄕大久保等の人傑は生じたり。東湖が水戶敎育の理想に適合せる如く、南州甲東は薩州敎育の理想に達せるものと謂ふべし。

江戶時代に於ける薩長の敎育を概論せば、薩は意志の鍛練を過重し、智の開發には稍欠くるところあるも、强固なる團結心を養成し、社會の制裁をして極めて有力ならしめ、天眞爛熳にして、篤實勁健なる學風を樹立したるは頗る多とせざる可らず。其敎育法は體育に偏向し、斯波多の敎育に似たるところあり。長州の敎育は智性の開發に重を置けるも、身心の調和的發達に注意せるものゝ如し。薩を以て斯波

多に似たりとせば長は則ち阿善に比せらるべし。抑も幕府旗下漸く衰靡して、劍の精は煙管よりも細からんとする世に薩長の崛起此の如し。幕府は遂に両方強藩の學風に敗られたるなり。

佐賀の武士道

佐賀藩の武士道は此に特記するの價値を有す。君恩を感戴するの志意極めて深酷にして他國人に對して勝つことを好み、負惜み痩我慢の風ことに強し。されば卒然として之に遇ひて機鋒頗る鋭きも、交遊の間眞摯の情を失はず。之を要するに中庸の道に欠くるところありと雖も決して柔情緩慢の風を帶びず、又以て採るべきの美なくんばあらざる也。葉隱集は、佐賀武士道の經典とも稱すべきもの。左に其數條を摘錄して、佐賀武士道の信條を示さん。

○主從の契深き御家に不思議にも生れ出で御被官は中に不及、百姓町人迄御譜代相傳御深恩不被申悉事に候　ケ様の儀は存當り何とぞ御恩報に御用可罷出との覺悟に胸を極め御懇に被召仕時は彌私無く奉公仕り牢人(浪人)切腹被仰付候而も一の御奉公と存じ山の奥よりも土の下よりも生々世々御家を奉歎心入、是れ鍋島侍の覺悟の面目我等の骨髓にて候。

〇四誓願の極上は武士道に於て後れを取る可らず。是を武勇を天下に顯す事と覺悟すべし。主君の御用に立つべし。是を家老の坐に直りて諫言し、國を可治事と思ふべし。孝は忠に付く也。同物なり。人の爲めに成るべきこと。是をあらゆる人を御用に立つ者に仕なすべしと心得べし。

〇覺の士、不覺の士といふこと軍學に沙汰あり。(中略)萬事まゑかたに極め置くが覺の士なり。不覺の士と云ふは其時に至ては、たとへ間に合せても是は時の仕合也。まゑかた詮索せぬを不覺の士と申すなり。

〇今時の奉公人を見るに、いかい低い眼の付けどころ也。すりの目遣の樣なり。大形身の爲めの慾德か利發立りだてか、又は小魂の落付きたるやうなれば身かまゑをする計り也。我身を主君に奉り死切て幽靈と成て二六時中主君の御事を歎き、事を調て進上申、御國家を固むると云ふところに眼を付けねば奉公人とは云はれぬ事なり。上下の差別可有樣無し。此あたりにきつと居すはりて佛神の勸にても少も不迷樣に覺悟せねばならず。

〇何某喧嘩打返しをせぬ故、耻に成たり。打返しの仕樣は踏懸けて切殺さ

るゝまで也。是に而恥に不成也。仕課すべきと思ふ故に間に合はず。向きは大勢などゝ言て時を移すによりぬり止めになる相談に極る也。相手何千人もあれ片端より撫て切りと思定めて向ふまでにて候成就也。多分仕濟すもの也。又た淺野殿浪人夜討も泉岳寺に而腹切らぬが落度也。又主を討たせて、敵を討つこと延々也。若者其中に吉良殿病死の時は殘念千萬也。上方衆は智惠かしこき故褒めらるゝ仕樣は上手なれども長崎喧嘩のやうに無分別にする事はなられぬ也。

○武士道は死狂なり。壹人の殺害を數十人にて仕かぬるものと、直茂公も被仰候。本氣にては大業はならず。氣違になりて死狂するまで也。又た於武士道、分別出來すれば早おくるゝもの也。忠も孝も不入。武士道に於ては死狂也。此うちに忠孝は自らこもるべし。

○首打落されてより一働は確とするもの也と覺えたり。義貞大野將監などにて知られたり。

葉隱集は厖然たる大冊、その精神に至ては、藩祖鍋島直茂の言行を祖述するもの。

教育家の一讀に値すべし。

第十九節　余が近世教育史を終るにのぞみ、松下村塾をあげて、其結尾と爲すの尤も妥當なるを信ず。村塾及び松陰の事蹟は世に顯著なるを以て、復た此に詳說するの必要無かるべし。

一。松下村塾は幕末時勢の產物にして、松陰の志業村塾の効蹟一に時運と密接の關係を有す。松陰は革新の明星にして、村塾の教育は革新の健兒を養成せんが爲めに設けられたるなり。

安政五年（一八五八）松陰が十歲の門人岡田耕作に與へし書に曰く、正月二日岡田耕作至。余爲授孟子、讀公孫丑下篇訖。村塾第一義、在一洗閭里禮俗爲枕戈横槊之風。是以講習徹除夕、未嘗放學也。何如年一改、士氣頓弛。三元之日、有來修禮者。未見來請業者。今墨使入府、義士下獄天下之事迫矣、何有於除新。然而松下之士猶如此、何以唱天下。耕作之至、適爲群童魁。魁群童乃魁天下之始也。耕作年甫十齡厚自激勵、其前途寧可測哉。書以勵之。

松陰また曰く、松下雖陋村誓爲神國幹と。村塾の教育以て槪見すべきなり。

二。松下村塾の教育法は江戸時代にて新生面を開けるものにして、儒教主義の教育に於て掉尾と稱すべし。

松陰には學派無けれども、先賢にては王陽明の教育が山水泉石の間に人物を陶治すといふを喜び、其學風を景慕せるが如し。これ乍併彼の境遇も亦これをして然らしめたるなり。

儒者の教育生氣無きや久し。門人正座威儀を正しくす。上段に席を設けて見臺を置く。先生袴を著け鹿爪らしく咳聲して壇に登る。江戸繁昌記に、其端莊迂僻の清況を悉くせり。これに反して一種開活を以て任ずる者は放漫任誕すべて禮容を滅却して道場を以て寄席と爲すに至る。されば郷愿にあらざれば蕩子、吏氣俗氣充滿せるは世上普通の儒者の常態なりき。

松陰の學風は簡明直截、敬意を主として慢に禮容を修むるをば排斥せり。彼れ自ら門人稠坐の中に居り、便宜己の適するところを以て師席とし、門人と同じく鍬をとりて輪講を試み、門人と共に起居飲食し、長州密柑の樹下に歴史を説き米を舂きながら左傳を講じ坐臥行動悉く躬を以て門人環視の

中に教化を逞しくせり。老父余に語りていはく、一夜講話深更を過ぎたればば數生と共に村塾に泊りしに、此夜先生反側輾轉して眠成らざるが如し。よりて臥しながら先生に話しかけ、高松城水攻の事を聞きしに、先生大に喜び、一問一答諄々說き來りて、時々興に乘じて衾を排して坐し、仕形を以て山川の形勢を談じ愈佳境に進みて、戰國の形勢を論じて娓々として倦まず遂に天明に達せり。己は先生一夜の睡を妨げたりと思ひて、却て氣の毒に感ぜしに、先生他生に向ひ、昨徹宵史談を爲して頗る愉快なりしと語られしと聞きていたく隨喜の情を催せりと。松陰の敎育は至誠の二字にあり。至誠よく機軸を出して生々活潑にして趣味ある敎育法と爲さしむ。松下村塾の敎育を知る者は、何人もペスタロッチを聯想せざるを得ざるべし。實に松陰は吾近世のペスタロッチなり。

敎授法は、實物敎授の方針を執り、歷史に於ては、歷史地圖を備へ先生實踐の智識により、時に問答躰を交へて門人をして當年の利害得失の情勢を考究せしめたり。つねに曰く、地を離れて人事無し、地理を審かにせずしては歷

史を知る可らずと　先生また數の學の人生に必要なることを說き自ら初等數學を敎授せり。當時松陰は九々の表を用ひたりといふ、これは蘭學修業中に得たるものなるべし。

讀書法としては先づ書籍の解題を授け然る後ち鈔錄の必要なることを敎へたり。體育及び武藝に注意し、所謂「遠足」の方案をつくりて門人にすゝめたり。又た女子敎育を論じて識見を具せり、そは其諸妹に與へし書狀に明らか也。

三

松陰は兵學のみならず武士道に於て山鹿素行の繼述者にして、造詣ことに深し。彼は武士の儀型として武家時代に殿たるべき者。

安政元年(一八五四)松陰その從弟玉木彥助加冠のとき贈りし士規七則は彼が士道の理想を知るべきもの、約して三端とす。曰く、立志、擇交、讀書これ也。士規七則にいはく、

一、士道莫大於義。義因勇行、勇因義長。

一、士行以質實不欺爲要。以巧詐文過爲恥。光明正大皆由是出。

一、人不レ通二古今一不レ師二聖賢一則鄙夫耳。讀書尙友君子之事也。
一、成德達材、師恩友益居レ多焉。故君子愼交遊。
一、死而後已四字、言簡而義廣。堅忍果決、確乎不可拔者、舍レ是無レ術也。

松陰つねに士道を論ず。かつて門人に告げて曰く、武士道はヨクレども義理尙盡さゞるところあり。少しくこれを修正せば規準とするに足るべしと。士規七則の成りしは、斯意に基づくに似たり。

松陰は太平の惰習に憤激するところあり。村塾禮法簡易を主とし、眞率朴實の風を養はんとす。今世禮法末造、流爲二虛僞刻薄一。欲二誠朴忠實以矯二揉之一而已といへり。

四。松陰の敎育說は、儒學に立脚して、後ち蘭學を修め時事を攻究せし結果、着眼歐洲の學風に及ぶものあり。江戶時代の終期を代表するに村塾を以てするを恰當なりとす。

安政五年(一八五八)松陰の論學校書の大要にいはく。方今敎育振興の方二策あり。學校及び作場を盛んにすること是なり。學校にては大に國中に

募りて、學問行義、人の師たるに足るべき者及び天文地理、兵農暦算諸種學藝に長ずる者を求めて教授とし、貴賤に拘はらず悉く學生たることを得しめ、學生各科を分ち各其學ぶところを學ばしめ、縛するに繩墨を以てせずして、唯その成德達材と否とを視てこれを黜陟すべきなりと。松陰は當時の藩學校が士族のみの入學を許可し、かの門地によりて待遇を異にするを以て、學校は廣く天下人士を待たんとす、何んぞ必しも長防二國のみならんや、況んや二國の陪臣足輕入學するを得ずといふの理あるべきと論ぜり。

第二の作場とは何んぞや。松陰いはく。讀書の士率ね空疎多し、作場を起して、これを學校と連接せしむるの利益あるに若かずと。作場は則ち工作場なり。この考案は胡瑗の經義齋及び治事齋の設備より思付たるなり。經義齋は成德、治事齋は達材の義なり。胡瑗は宋代の大教育家にして、湖學にありて教育法最も備はりしを以て、宋朝始めて大學を建つるに當り、瑗の湖學法を斟酌して學令を編せり。されば松陰も、これを程明道の專賢堂(置有德者)觀國法(置有材者)と併稱して師道學制に於て宜しきを得たりとなせ

り。其理由は、學校にして二者を兼有せざれば、徒らに少年講誦の場とのみなりゆきて、人材を養成するに足らざれば也。作場に屬すべきものは、船匠、銅工、製薬、冶革の工、寸技尺能あるもの等にして、衆知を合し、巧思を廣め船艦器械を講究せんことを期す。學生は貴賤淺深を問はず入學せしむべし、徒らに呆然誦讀のみを專らとするは時務に寸益無し。時を以て、これを驅りて工作に就かしむるも亦一益なりと。松陰更らに謂ふ、今世の學生多くは空疎にして事務を解せず、工匠は愚にして需要を解せず。二者分れて鴻溝を其間に劃するを以て余が學校作場の說を聞かば必ず愕かんも事理決して然らず。工作、學あり單に伎術にあらず。學校作場を連接するは事理の當然方今の急務なりと。これ松陰の學校說なり。これより先き松陰の師佐久間象山自ら其礮術を稱して礮學と云ひ、空理空文を抑へて、これを實事に熟せしむるの意を寓す。松陰は謂ふ、工作の學といふは又この礮學といふの類なりと。

五。松下村塾の成功は教育上箇人の勢力の如何に廣大なるかを知らしむる好

例なり。

松陰が村塾を創めしとき、年僅かに廿六。その死は三十歳の十月廿七日にして、村塾にあること四年に滿たず。村塾は六疊と八疊の二室にして、先生弟子と其中に起臥し、教授し、議論せり。かゝる青年にして、かゝる短日月に其身邊に集れる數百人の弟子を養成し感化して、以て中興の洪運に貢獻せしこと實に古今の壯觀と謂はざる可らず。昔し唐の興りしとき賢臣多く文中子の門に出でしこと松下村塾と古今東西の雙美なり。然れども矮屋陋舍の中、松陰が及ぼしたる感化の勢力の大なるに比すれば文中子猶ほ及ばざるなり。後代教育家彼の志業に感憤するところ無かる可んや。

松陰つねに師道の頽敗を嘆じ、大抵師を取ること易く師を擇ぶこと審かならず故に師道輕し。されば師道を興さんとならば妄りに人の師となる可らず又妄りに人を師とす可らず。必眞に敎ふべきことありて師となり眞に學ぶべきことありて師とすべしと說けり。彼更に師たる者の資格を論じて曰く、己の爲めにするの學は人の師となるに好むにあらずして自ら人

の師となるべし、人の爲めにするの學は人の師とならんことを欲すれども遂に師となるに足らずと。松陰は何等の自信ありて自ら人の師となり、松下村塾を創立したるぞや。

松蔭は孟子盡心上篇第廿章、君子有三樂、而王天下不與存焉云々を講明していはく　英才を敎育するの樂に至ては悠々の天に附せんのみ。君子何を以て英才を敎育することを樂むや……君子の任とするところは天下後世にあり。已に英才を育せば身天下に王たらずといへども天下後世必ず來て法を取るものあらん。治亂盛衰は天下の免れざるところ、而して其間豪傑の士必ず力を致すべきときにして、吾苟も英才を得て是を敎育せば是即ち其人ならん。是余が志なり。君子の樂なりと。然らば豪傑の士とは如何。松陰は孟子盡心上篇第十章に所謂、待文王而後興者凡民也。若夫豪傑之士雖無文王猶興といふを引き、豪傑とは萬事自ら草創して敢て人の轍跡を踐まぬことなりと謂へり。換言すれば豪傑とは機軸を出すの士なり、新生面を開く者の謂なり。松陰また曰く、孔子の七十二弟子、漢高の蕭曹陳

周の如き豪傑を待ちて興る者、凡民と謂ふべし。凡民の爲すところ消極能くかくの如しと。

松陰國家の大難に遭遇し、卓然として自ら振ひ、實に世の先覺者を以て自ら任ぜり。孟子萬章第六章にいはく、

天之生此民也、使先知覺後知、使先覺覺後覺也。予天民之先覺者也。予將斯道覺斯民。非予覺之而誰也。

松陰は此一節を反覆誦讀して以て其志を勵ます。謂へらく、余の愚劣にして天民の先覺者を以て自ら居らんは狂妄自ら揣らざる者なれども、茲に說あり。知といふも亦志のみ。苟くも伊尹の志を以て志とせば、知覺に於て亦自ら得るところあらん。然らずして無知無覺を以て徒らに自ら退避するは自棄の甚しきなりといひ、後ちまた余は平生伊尹の任を以て志とすといへり。松陰は斯民の先覺者を以て自ら任じて人の師となれりしなり。

近世教育史を回想するに、元和偃武の後ち昇平二百餘年、鎖國の夢まさに濃かなるときに外國の事忽ち起りて內に法家拂士無く國家の大難このときに過ぐるは無

し。幸ひに堅忍不拔なる先覺者ありて世運を維持せしこと、吾教育史に於て不滅の榮光とすべきにあらずや。

松陰は斯民の先覺者を以て自ら任ぜり。彼如何して世運を維持せんとせしぞ。古來英雄多くは手を以て天下を援へり。手とは術なり。松陰は曰ふ。我は道を以て天下を援はん。王霸の分るゝところは、道と手との相違のみ。術を以て人を弄し、智を以て世を馭し、自己の誠意に基づかず、一身の實行に本づかざるは皆な道を以てするにあらず、手を以てするなり。道とは心に原づき理に從ふものなりと。

今や振古未曾有の盛運に際會し、世局の發展測る可らざるものあり。帝國永遠に繁榮の策は他にあらず。教育を擴張し、學風を振粛するにあるのみ。これ古今東西の歷史が、ひとしく吾人に教ふるところなり。これ豈教育家が奮勵して以て、「大に皇基を振起せんことを力むべき」ときにあらずや。

試みに吉田松陰を思へ。箇人教化の勢力、世運の消長に關すること此の如しと。

日本近世教育史終

附錄 幕末教育略年表

一七八六（天明　六）　將軍家齊立つ。田沼意次免ぜらる。○市川寛齋の全唐詩逸成る。○此ころより戯作本の趣向、專ら教訓を旨とせるもの多し。

一七八七（天明　七）　六月松平定信老中に任ず。○奥貫貫山歿年八十七○戯作者喜三二の著、文武二道萬石通梓行古今未曾有の流行なり。○紅毛雜話出版○馬場佐十郎生。

一七八八（天明　八）　蘭學階梯出板○柴野栗山徵されて儒官となる。年五十三○授業編著者江村北海歿年七十六○澁井太室歿年六十九。
幕府令を出して藝術あるの士を査覈せしむ。

一七八九（寛政　元）　幕府令を出して、武術師範の者の名簿を上らしむ。九月廿三日令を出して旗下の文武稽古を奬勵す。
九月十一日那波魯堂歿年六十三○市川寛齋江湖詩社を結ぶ○寛政重修諸家系譜成る。○萬國新話出板
正月廿五日奢侈の禁令
佛國革命始まる。

一七九〇（寛政　二）　異學の禁出づ。
堀田正敦若年寄となる。
皇宮造營成る。賢聖障子を作る。
このごろ洒落本益流行す。馬琴の廿日餘二十兩用盡而二分狂言出版

一七九一（寛政　三）　幕府的場馬場を櫻田御用屋敷の中に設けて旗下の武藝を奬勵す・十月更に旗下の文武を奬勵す。
十月廿一日幕府醫學館を建つ。多紀安長を館長とし、その制を擴張せしむ。
四月定信以下老中若年寄大小目付等盡く學問所に臨觀す。以後定例とす。
海國兵談出づ、板を官毀す。

山東京傳仕懸文庫を著し、手鎖五十日の刑に處せられ、書肆も亦罰せらる。從是京傳專ら勸懲小說を作る。心學早染草ことに行はる。この歲佐賀藩士古賀精里、經を學問所に講ず。藩臣の聖堂に講經すること是を始とす。

清國十三經を石刊す。

一七九二(寬政　四)　聖堂學問所の制を定む○九月三日幕府始めて諸士を聖堂に試驗す。幕府金を浪人儒者服部善藏に賜ひて學校を興さしむ。○幕府武藏德丸原を以て大砲講習所とす。柴野栗山等に命じて畿內の古書謠を撿討せしむ。栗山　神武天皇陵を拜し、荒廢を嘆じ詩を賦して上る。陪臣と署す。○此年の出板は怪談本最も多く、この後四五年間流行す。一代記軍記の類も亦行はる。風俗に關する著述の梓行を憚りしによりて也。

一七九三(寬政　五)　尊號事件。中山愛親卿等東下○幕府地を塙保己一に貸して和學講談所を建てしむ。裏六番町○登船、漂民磯吉幸太夫を送還して通商を乞ふ。將軍漂民を吹上苑中に召見す○宇田川玄隨の內科撰要出板○林子平歿。○林衡大學頭となる。○集古十種八十卷刻成る。

一七九四(寬政　六)　大槻磐水始めて新元會を開く。○山本北山の日本外史成る異稱日本傳の漏を補ふ也。

一七九五(寬政　七)　天下の學者程朱を奉ぜざる者の進仕を禁ず。異學者の群議頗る盛ん也。

十返舍一九の初作心學時計草出板。

一七九六(寬政　八)　儒臣尾藤二洲上書して學校を府下各地に興し、旗下子弟を教授せんと請ふ。○古賀精里を徵して儒臣とす。栗山二洲精里寒泉(岡田)等將軍に侍講す。○稻村三伯の波留麻和解成る。○澤田東江歿年六十五(この年草紙

問屋改極印あり。株式の始也。此頃洒落本四十二種盡く絶板を命ぜられ、貸本屋は過料各三貫文に處せらる。
○本居宣長の馭戎慨言出板○歐洲石版術發明

一七九九(寛政十一) 近藤重蔵等蝦夷を巡撿す。昌平阪大成殿落成。朱舜水所作の小樣によれる也。

一八〇〇(寛政十二) 伊能忠敬に命じて沿海各地を測量せしむ。○幕府孝義錄を刊行す。賴春水、赤崎海門召されて經を聖堂に講ず。士庶をしてこれを聽かしむ。

一八〇一(享和 元) 六月廿九日細井平洲歿年七十四。九月廿九日本居宣長歿年七十二。赤松滄洲歿。年八十一。
このごろ大に編修の擧あり。武家名目抄德川實記等相踵ぎて修纂せらる。

一八〇二(享和 二) 始て箱館奉行を置く。
東海道膝栗毛梓行。群書一覽出板
汽車發明

一八〇三(享和 三) 十月十七日前野蘭化歿。年八十一。伊藤圭介生。群書類從刊行

一八〇四(文化 元) 魯船長崎に來る。杉田玄白野叟獨語を著はして貿易の利を論ず。○荒木田久老歿。年五十九。高野長英生る。中井竹山歿○幕府令して、町道場を開きて町人に武藝を教ふることを禁ず。○今年の新作、敵討本三分の二を占む。種々の時代物語も亦流行す。京傳忠臣水滸傳を著す。讀本の始也といふ。此頃著名なる作者の草紙は七八千部乃至一万部を發賣するに至る。

一八〇五(文化 二) 和學講談所を表六番町に移す。地域八百四十餘坪。塙保己一將軍に謁見す。
幕府令して在方にて浪人などを招きて農民の武藝を習ふを禁ず。
橘南谿歿。醫範提綱出板

一八〇六(文化 三) 此年の開板は總て敵討本となる。
世上の草紙悉く合卷となる。

醫學館火災

一八〇七(文化　四)　若年寄堀田正敦蝦夷地を巡見す。大槻玄幹隨行す。皆川淇園歿。十二月朔柴野栗山歿、年七十二。嚶鳴館遺稿出版。

一八一〇(文化　七)　德川治保(水戸侯)大日本史刊本廿六卷を朝廷に獻ず。認鏡一百部刊行。大阪蘭方醫中天遊の作字及び銅版なり。稻村三伯歿。緒方洪菴川本幸民生る。小野蘭山歿。

伯林大學開始

一八一一(文化　八)　十二月節儉令出づ。由て、翌九年より十三年までの聖堂諸士試科を已め、又例年の旗下の武藝上覽も弓場始の外は、隔年と改めらる。天文台中に蘇譯局を置く。

佐久間象山生る。

一八一二(文化　九)　藤林泰介等、京都にて刑屍を解剖す。山本北山歿年六十一。

一八一四(文化十一)　伊能忠敬西海道實測を終る。(龜井道載歿年七十二。寶曆中より護園學を關西に唱ふること殆んど五十年也。〇七月五日蒲生君平歿年四十七。

八犬傳第一輯梓行。この年より讀本大に流行す。

一八一七(文化十四)　旗下の士、十七歲より十九歲までの者、素讀吟味復薦す。古賀精里、伊藤東里、岡田寒泉歿(杉田玄白歿

近藤重藏御本日記附錄等の數書を上る。

一八一八(文政　元)　水野出羽守忠成老中となり、かつ勝手掛を掌り、與向を綜理す。諧謔公行し、寬政の治大に衰ふ。

司馬江漢歿年七十二。

一八一九(文政　二)　平田篤胤古史徵刻成る。赤穗義士碑を泉岳寺内に建つ。〇いろは文庫梓行。

一八二一(文政　四)　伊能忠敬歿。年七十六。(那翁一世歿。)

九月十二日塙保己一歿。年七十六。

一八二二(文政　五)　正月替多尼訶經出板。六月西說觀

象經出板。

一八二四（文政　七）　津侯藤堂高兒、其封內結城宗廣の遺蹟に碑を建てゝ、之を表す。湊川碑伯耆名和公碑と世に三大忠碑と稱す。湊川建碑以來列藩之に倣ふ者多き也。
十一月幕府令して諸稽古場の風儀取締を嚴にせしむ。

一八二五（文政　八）　伊東玄扑長崎より江戸に來りて開業し、始めて和蘭文法を唱ふ。

一八二七（文政　十）　青地林宗の氣海觀瀾出板。歐洲物理學始めて本邦に弘まる。伊東圭介名古屋に歸りて、物產學を唱ふ。○大槻磐水歿、年七十一。物徂徠百年忌を盛んに蘐園に營む。

一八二八（文政十一）　水野忠邦老中となる。

一八二九（文政十二）　去年來シイホルトの獄起る。今年シイボルトを其國に放還す。○坪井信道江戸に開業す。○松平定信薨ず。

一八三二（天保　三）　賴山陽歿。

一八三三（天保　四）　宇田川榕菴の植學啓原出板。本居大平歿。

一八三六（天保　七）　將軍家慶立つ。十一月幕府旗下に奬學の令を下す。

一八三八（天保　九）　緒方洪菴大阪に開業す。
新宮凉亭順正書院を京都に建つ。

一八三九（天保　十）　渡邊華山高野長英獄に下る。
宇田川榕菴舍密開宗を出板して始めて化學を說く。

一八四一（天保十二）　家齊薨ず。水野越前守、節儉令を下す。水戸齊昭弘道館を建つ。
幕府屢々奬學の令を下す。聖堂の日講は寛政十二年の舊に復す。
佐藤一齋を聘して儒官とす。
高島秋帆、洋式銃隊を德丸原に練習す。

一八四二（天保十三）　飜譯書の出版は町奉行の許可を得しむ。
五月十八日屋代弘賢歿。
二月幕府旗下の文武稽古を奬勵す。三月令して時の風俗、人の批評春畫等の版行を禁じ、又俳優或は

妓女の圖あるものゝ出板を禁ず。
人情本の作者多く所罰せらる。
〇七月柳亭種彦、爲永春水等歿。
四月大老少老學問所にゆき講を聽く。
六月幕府學問教授所を麹町に建てゝ漢學を教授せしむ。
同廿二日十萬石以上の諸大名に命し、儒書出板をなすゝむ。
八月儒者松崎慊堂、朝川善菴將軍に謁見を許さる。
十月幕府江戸繁昌記著者寺門靜軒を處罰し、爾後戯作することを禁ず。
十二月幕府測量地理所を九段阪上に置く。

一八四三（天保十四）

閏九月十日、平田篤胤歿。年六十八〇香川景樹歿。
三月廿六日幕府令を下して、手習師匠に筆道指南のみならず社會教育の事を擔任すべきことを命す。
六月町人に武術師範することを禁ず。
十月幕府手習師匠の教育上成績良好なる者に各六諭衍義大意を賞賜す。
緒方洪庵其適塾に於て學科の等級を建てゝ門人を教育す。

一八四四（弘化　元）

水野越前罷む。再び老中となる。
三月八日竹田筱丸模造人體を醫學館に獻し、賞賜せらる。
十二月幕府町儒者服部眞藏が數代續きて教育上の効績著るしきを以て之に賞賜す。

一八四五（弘化　二）

水野越前再び罷む。
學習院を京都に建つ。
七月幕府令して天文曆算蘭書翻譯世界繪圖蘭方醫書等の類出板は天文方に屆け、且つ一部づゝ板本を獻納せしむ。
七月及び八月に幕府屢々學問獎勵の令を下す。
孝明天皇即位。

一八四七（弘化　四）

緒方洪庵病學通論を著す。病理學

の嚆矢なり。
飯田忠彦野史を著す。

一八四八（嘉永　元）　和蘭文典出版完成。藤井三郎歿。坪井信道歿。高島流砲術を西洋流と改稱せしむ。かつ演習に實彈を發射することを許す。二月幕府江戸手習師匠の花見に於ける兒童風儀の取締を命ず。十一月曲亭馬琴歿す。

一八四九（嘉永　二）　三月和蘭醫術を禁ず。特に外科眼科のみを許す。○蘭醫モウニツキ始めて牛痘を傳ふ。杉田成卿の済生三方出板
九月蘭書飜譯出板の取締を嚴にす。
葛飾北斎歿す。音博士岩垣松苗歿。

一八五〇（嘉永　三）　安積艮齋召されて儒官となる。○高野長英自殺。

一八五一（嘉永　四）　川本幸民氣海觀瀾廣義を著す。○漂民中濱萬次郎米國より歸朝。和氣清麿に護王明神の號を贈らる。

一八五二（嘉永　五）　十一月幕府旗下の士に、來年よりは、學問吟味の節、俗文と時務策とは別日に試むることを達す。
水戸慶篤大日本史紀傳を朝廷に獻ず。
六月徳川齊昭地球儀を朝廷に獻ず。

一八五三（嘉永　六）　彼理來。家慶薨。家定立。

一八五四（安政　元）　彼理再來。吉田松陰米艦に投ず。正月九日新宮涼亭歿。年六十三。十二月幕府會して文武共に盛んに講習すべきことを命ず。

一八五五（安政　二）　正月幕府講武所、海軍操練所を所々に設置し和洋武術を講習せしむ。二月學問所規則を定む。十月江戸地震。藤田東湖壓死す。飜譯局を天文台より移して九段坂下に置く。
吉田松陰の松下村塾創始。
蘭學者箕作阮甫將軍に謁見す。

一八五六（安政　三）　二月飜譯局を蕃書調所と改稱す。

廣瀬元恭京都に居り理學器械製造を研究せしが、理學提要及び人身窮理書を出版す。

一八五七（安政　四）　正月蕃書調所開所式。幕臣及諸藩士の入學を許す。五月伊東玄朴、戸塚靜海等種痘館を內神田に建つ。閏五月蘭醫ぽんぺを聘して長崎にて醫術を傳習せしむ。緒方洪庵の扶氏經驗遺訓出版。蘭方內科書の嚆矢なり。

一八五八（安政　五）　五國條約締結。將軍家定薨。家茂立。戊午の大獄。種痘館を收めて官立とす。明年種痘所と改稱す。八月和蘭字彙出板。

一八六〇（萬延　元）　正月使節を米國に遣す。大元丸太平洋を横斷す。勝安房、福澤諭吉等ゆく。六月蕃書調所を小川町に移す、英佛獨魯の語學を授く。九月松本良順病院を長崎に建て養生所といふ。併せて和蘭醫學を講習す。齊昭薨。

一八六一（文久　元）　蕃書調所に物產局を置き、伊東圭介を教員とす。長崎養生所を精得館と改め蘭醫ボードインを聘して教師とす。幕府醫學傳習生を置く。十二月使節を歐洲に派遣す。松木福澤等の譯員隨行す。大鳥圭介鉛版活字を製し、築城典型を印行す。

一八六二（文久　二）　洋書調所を建つ。西洋醫學所內に舍密局を置く。緒方洪庵大阪より召されて醫學所頭取となる。

一八六三（文久　三）　洋書調所を開成所と改む。所內に數學局を置く。七月長崎に語學所を建て、清蘭英佛魯の語學を講習す。後ち濟美館と改稱す。緒方洪庵歿。箕作阮甫歿。魯國に留學生を派遣す。

一八六四（元治　元）　佐久間象山幕府に召さる。同七月

京都にて暗殺さる。

箕作秋坪、福澤諭吉幕臣となる。

一八六五（慶應　元）　開成所及び精得館に理化學を置く。蘭人カラタマを聘して開成所教師とす。

一八六六（慶應　二）　幕府留學生中村正直箕作奎吾等十四人英國にゆく。

一八六七（慶應　三）　正月幕府旗下に令して、學術を奬勵し、子弟八歳以上の者は悉く學問所に入學せしむ。

開成所の學制全く外國教育法に傚ひて、これを改正す。

幕末教育畧年表終

日本近世教育史附圖並に說明

第一圖　備前閑谷の聖廟

閑谷黌の側に立つ。

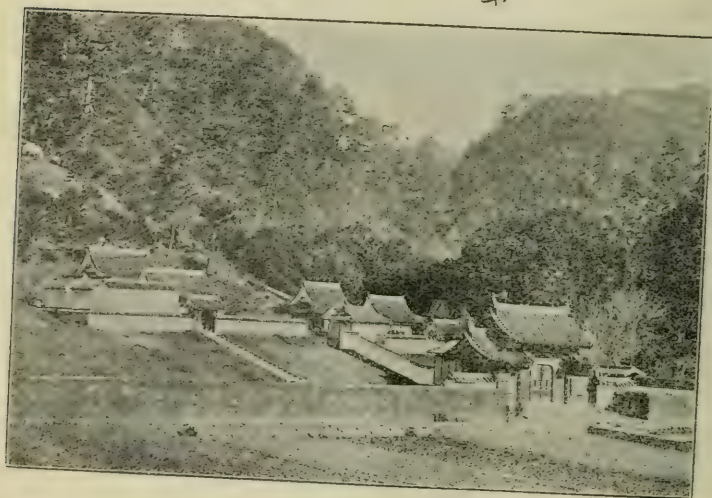
第二圖　肥前多久の聖廟

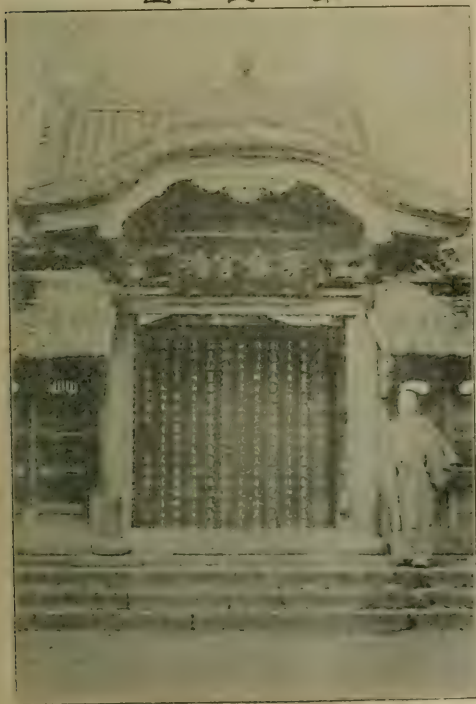
第三圖　肥前長崎の聖廟

この三聖廟は、本邦に現存せる聖廟のうちにて最も舊きものなり。

輪奐の美なるは閑谷にして、その側に光政公の廟あり。

多久の聖廟は九州鐵道唐津線の莇原驛を去る廿餘町のところにあり。この聖廟は全く神社風にして、長崎聖廟の純然たる支那風のとは好き對照なり。その聖像祭器の圖は余かつ

第一圖

第二圖

第三圖

て拙稿多久聖廟に附して教育學術界に掲載せり。

樂器祭器等は多久高等小學校にて保管せり。

長崎聖廟は則ち明倫堂のうちにありて、猶ほ舊觀を存す。本圖に示せるは中門にして扉

第四圖

に大學第一章を書せるを以て大學門と通稱す。傍に立てるは、明倫堂の祭酒向井氏の裔孫にして、當主向井兼孝氏なり。氏の宅は明倫堂の門側にありて、明倫堂及び聖廟を所有せり。

中門のうちに聖廟及び崇聖祠あり。崇聖祠は今頗る頽廢して雨漏を防ぎ難し。明倫堂は講堂及び寄宿舍ともに存せるが、講堂は私立行餘學舍の教場に充て居れり。

明倫堂には舊記、書籍等幾何も存するもの無し。多久聖廟は、今や保存の方法を講じつゝあれども長崎聖廟にては、未だその方法立たずといふ。

第四圖　足利學校

第五圖　同所所藏の孔子木像

玆に掲げたる聖像は、古くより足利學校に傳ふれども、決して孔子像にはあらず、何かの間違なるべし。

第五圖

第六圖　元大學頭林昇翁

林昇翁は七十餘歳の高齢にして今は埼玉縣熊谷町の在にて舊臣某の家に隱居せり。翁は則ち林家最後の大學頭なり。余は一昨春往訪したるが、態度猶ほ頗る健在なりき。舊臣某夫婦、翁に事ふること誠に篤し。又以て美談とすべし。所藏の什物中に、大學頭代々の壽像あり。そのうちにて述齋(衡)の像は、先年史學會雜誌に掲載されたり。

この圖は友人渡邊世祐君余が爲めに撮影して寄送されたるものなり。また以て

老祭酒の態度を窺ふに足るべし。聞く翁は將軍の講筵に侍し講義に練達し、音吐頗る明瞭なりと。

第七圖　水戸彰考館
及び其書庫
水戸常磐祠畔にあり

第八圖　藤田東湖

第九圖　水戸弘道館記碑

水戸彰考館は仙波湖上常磐祠畔にあり。本圖のうちにて鳥居の左側に接する大厦の左にある小家こそ彰考館の名殘なり。これは近時、大日本史編纂の殘務を取扱ふところにして、彰考館の建築の一部の殘れるにはあらず。

彰考館より左少しく高きところに見ゆる白塗の庫は則ち書庫にして、その更に左

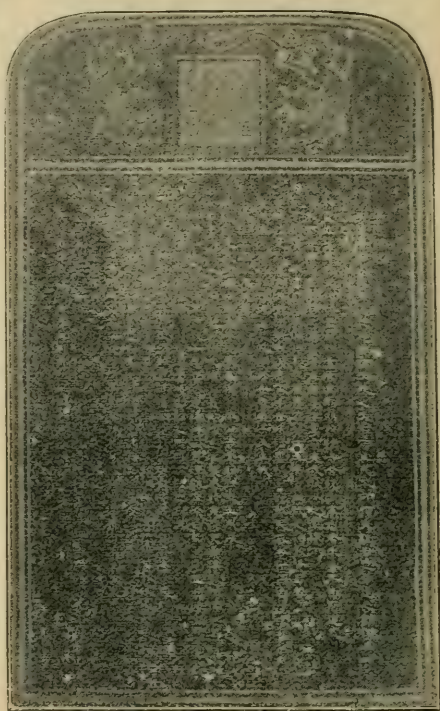
第六圖

第七圖

第八圖

にも一棟あり。書庫のうちには貴重すべきもの多きが、中にも西山、景山二公手澤の遺書と朱舜水將來せる書籍及び釋奠の祭器、及び舜水監造の大成殿模型、また景山公遺愛の地球儀の如き、ことに人目を惹くもの也。先年

故栗里博士の世に在りしとき余一たび往訪し、その後、博士の令息勤氏及び手塚任氏の斡旋によりて、再び庫内を見ることを得たり。館に弘道館彰考館の古圖及び朱舜水の像等をも藏す。

第九圖

館の後ろに高きは水戸の公園にして、有名なる梅林及び常磐神社あり。神社は義烈二公を祀る。社に景山公のときの戰大鼓あり。頗る巨大なるものにして、震天動地呼雲起風、三軍踴躍、進思盡忠と金字大書す。書は景山公の筆になる。氣勢雄渾にして弘道館の盛時を追想せしむ。

梅林は景山公の設計になりし游苑にして、うちに好文館あり。多く梅を植ゑたるは囑目の勝と果實の利とを兼ね收めんとてなり。館の中には名家の筆墨も多く

してすべて追往の念に堪へざらしむ。館中韻字及び假名遣ひの圖あり。園中には石にて造りつけたる碁盤あり。これ等は當時の諸士娯樂の一斑を知るべきもの。開花時節館の高樓に登れば身は恰も白雪の仙界にありて眼を放ちて、磯の亂松を望む。爽快なる矚望なり。先年余が往訪せしころ、茶筅結ひたる一老士ありて、館を守れるが景山公に侍せしとかにて、諄々として、往事を語り聞かせぬ。東湖像は、もと景山公が人物の寫生に妙を得たる畫家某をして諸名臣を畫かしめたるをば、後ちに油繪にうつしたるもの也。

弘道館記碑は弘道館址の八卦堂のうちに藏す。常陸の大理石にて造れる、丈高き白色の碑にして、筆力の雄拔なるは人をして恍惚たらしむ。景山公は能書なるが、ことに古體に長ぜり。この碑は水戸學風の信條を銘記せるものにて、吾近世教育史に於ける水戸學風の位置を考ふるときは、この碑の貴きことも亦知らるべし。水戸の黨爭に彈丸八卦堂を貫きしが、碑に中らざりしは天幸哉。

弘道館址には聖廟あり。規模は宏壯ならず。今は頗る荒れ果てたり。館の講堂は儼乎として存し今ま幼稚園にあてたり。

第十圖　新島襄先生

これは新島先生海外に出奔せし當時の出で立ちなり。手拭を被り、尻引からげ、幅物を手にして行商に扮せり。島敬幹とは當時の假稱なり。上に不渉五洲都不跡と書す。先生の意氣想ふべし。鳩野宗巴は密航したれども、自ら表白する能はずして死し、吉田松陰は雄志空しく蹉跌せしが、先生獨りその志を成せり。

第十圖

第十一圖　明和三年畫羅馬の圖

第十一圖

第十二圖

第十二圖　司馬江漢の富士山の油繪

この兩圖は、ともに嚴島神殿に掲げたる扁額を撮影せるものなり。羅馬の圖は蘭書中の圖を摸寫したるものらし。今は頗る煤を帶びて明らかならず。この兩圖は世界の新智識の輸入せし當初の紀念也。

文公先生真像

第十三圖　朱文公の像長崎明倫堂藏板

第十四圖　緒方洪庵の像

第十五圖　和蘭字彙著者ヘンドリック、ドーフ　*Hendrik Doef*

この原圖は當時邦人の手になれる油畫也、小山健三氏の所藏にて先年同氏長崎奉職中得られしものといふ。

明治三十七年五月廿五日印刷
明治三十七年五月廿八日發行

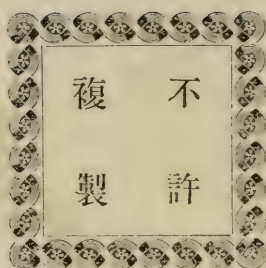
日本近世教育史
定價金貳圓五十錢

著者　横山達三

發行者　森山章之丞
東京市神田區表表神保町二番地

印刷者　佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所　同文館
東京市神田區表神保町二番地

關西大賣捌所　寶文館
大阪市東區備後町四丁目七十八番屋敷

東京高等師範學校教授文學士　大瀬甚太郎先生著

歐洲近世教育史

（近刊）

上製全一冊　紙數約七百頁　目下印刷中

中世暗黒時代の思想束縛に反動して、文藝復興となり、宗教改革となり、觀界の擴張となり、新科學の勃興となり研究の新方法は明かにせられて、學術の進歩駸々乎、以て二十世紀の文化を誘致したるにあらずや。歐洲近世の思想發展の跡は吾人が多大の興味を喚起して、眞摯なる注意を拂ふべきにあらずや。この間に於ける教育の分野は如何に開拓せられたるか。人文主義の聲さながら新時代の曉鐘の如く響きてより、敬虔主義、實科主義、功利主義、幸福主義、自然主義、人道主義、個人主義等或は高く或は低く、かたみに起り、かたみに衰へて、今日の所謂社會的教育學を構成し、獨立せる一個の科學として研究せらるゝに至りし發展の進路は如何に複雜なるものなりしか。フランケ、コメニウス、ロック、ルーソー、バゼドー、ペスタロッチー。ヘルバルト。ベネケ、シユライエルマツヘル、ナトルプ、ベルグマン等の教育學者は如何なる學說を抱懷して如何なる功績を遺し如何なる影響を與へたるか。本書は實にこれ等の諸問題を明かならしむべき關鍵にして、近世教育思想の變遷發達と諸家の學說とを、最も系統的に詳述し現今の教育學が如何なるものなるかを明かにしたると共に將來の教育學が如何にあるべきかの理想に光明を點じたるものなり。科學の進步が史的研究によりてなされ、實地事業の適否がその歷史を明かにすることによりて指導せらるべきものならば、本書の如きは教育者の熟讀玩味を價するや疑を容れず。

發兌元　東京神田區表神保町二（電話特本局一五三九番）　同文館